



論津部  
第八卷

BL            Tripitaka. Japanese. 1929  
1411           Showa shinshu kokuyaku  
T8J3         Daizokyo  
1929  
v.20

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

---





昭和  
新纂

國  
譯大藏經



BL  
1411  
T8J3  
1929  
V. 20

昭和  
新纂 國譯大藏經 論律部 第八卷

大智度論第六 目次

卷第九十一	一
照明品第八十一	一
卷第九十二	二
淨佛國土品第八十二	二
卷第九十三	三
淨佛國土品第八十二之餘	三
畢定品第八十三	三
卷第九十四	四
畢定品第八十三之餘	四
四諦品第八十四	七
卷第九十五	七

七喻品第八十五..... 七〇

平等品第八十六..... 九

卷第九十六

涅槃如化品第八十七..... 二八

薩陀波崙品第八十八..... 二六

卷第九十七

薩陀波崙品第八十八之餘..... 二四

卷第九十八

薩陀波崙菩薩品第八十八之餘..... 二五

卷第九十九

曇無竭品第八十九..... 二四

卷第一百

曇無竭品第八十九..... 二八

喝累品第九十..... 三三



中論目次

序 ..... 二三五

卷第一 ..... 二三五

卷第二 ..... 二六八

卷第三 ..... 三一九

卷第四 ..... 三六五

百論目次

序 ..... 四二三

卷上 ..... 四一五

卷下 ..... 四六〇

十二門論目次

品目 ..... 五二七

序	.....	五九
本文	.....	五二

目次

目次

大智度論 第六

論律部
第八卷



大智度論釋照明品第八十一

卷第九十一

龍樹菩薩造  
後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

須菩提、佛に白して言さく、「世尊、若し菩薩摩訶薩、六波羅蜜、十八空、三十七助道法、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法を行するも、菩薩道を具足せざれば、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。世尊、菩薩摩訶薩は、當に云何が菩薩道を具足して、能く阿耨多羅三藐三菩提を得べきや。」佛、須菩提に告げて言はく、「若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行する時、方便力を以ての故に、檀波羅蜜を行するに施を得ず、施者を得ず、受者を得ず、亦是法を遠離せずして、檀波羅蜜を行す、是れ則ち菩薩道を照らするなり。是の如く、須菩提、菩薩は方便力を以ての故に菩薩道を具足し、具足し已つて能く阿耨多羅三藐三菩提を得。持戒、忍辱、精進、禪定、智慧、乃至十八不共法も亦是の如し。」舍利弗、佛に白して言さく、「世尊、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行するや、方便力を以ての故に色を壞せず告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行するや、方便力を以ての故に色を壞せず色に隨はず。何を以ての故に、是色の性は、無なるが故に壞せず隨はず、乃至戒も亦思の如し。舍利弗、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行するや、方便力を以ての故に檀波羅蜜を壞せず

ず隨はず、何を以ての故に、檀波羅蜜の性は無なるが故に、乃至十八不共法も亦是の如し。舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、若し諸法は自性の壞すべく隨ふべきもの無くんば、云何が菩薩摩訶薩は能く般若波羅蜜、諸の菩薩摩訶薩の所學の處を習ふや。何を以ての故に、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を學せざれば、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はざればなり。』佛、舍利弗に告げたまはく、『汝が言ふ所の如く、菩薩は般若波羅蜜を學せざれば、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず、方便力を離れざるが故に得べし。舍利弗、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ、若し一法の得べき有らば、應當に取るべし。若し得べからざれば、何の取る所ありて、謂ゆる、此は是れ般若波羅蜜なり、是れ禪波羅蜜なり、是れ毘梨耶波羅蜜なり、是れ屬提波羅蜜なり、是れ尸羅波羅蜜なり、是れ檀波羅蜜なり、是れ色受想行識、乃至是れ阿耨多羅三藐三菩提なりとせんや。舍利弗、是れ般若波羅蜜は相を取るべからず、乃至一切諸佛の法は相を取るべからず。舍利弗、是れ般若波羅蜜は相を取る取らずと名く、是れ菩薩摩訶薩の學すべき所にして、菩薩摩訶薩は是中に於て學する時、學する相も亦得べからず。何に況んや般若波羅蜜、佛法、菩薩法、辟支佛法、聲聞法、凡夫人法をや。何を以ての故に、舍利弗、諸法は一法として性有ることなければなり。是の如きの無性の諸法、何等をか是れ凡夫人、須陀洹、斯陀舍、阿那舍、阿羅漢、辟支佛、菩薩、佛とせんや。若し是諸の賢聖無くんば、云何が法有らん、是法を以ての故に、分別して是れ凡夫人、須陀洹、斯陀舍、阿那舍、阿羅漢、辟支佛、菩薩、佛なりと説く。舍利

佛に白して言さく、『世尊、若し諸法は性無く、實無く、根本無ければ、云何が是れ凡夫  
 人なり、乃至是れ佛なりと知らん。』佛、舍利弗に告げたまはく、『凡夫人所著の處、色性  
 有り、實有りや不や。』不、世尊、但願倒心を以ての故に、受想行識、乃至十八不共法も  
 亦是の如し。』舍利弗、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行する時、方便力を以ての故に、諸法  
 の性無く、根本無きことを見るが故に、能く阿耨多羅三藐三菩提心を發す。』舍利弗、佛に  
 白して言さく、『云何が菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行する時、方便力を以ての故に諸法の性無  
 く、根本無きことを見るが故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發すや。』佛、舍利弗に告げたま  
 はく、『菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行する時、諸法の根本を見、中に住して退没し、懈怠の  
 心を生ぜず。舍利弗、諸法の根本は實に無我なり、無所有なり、性常に空なり、但願倒愚  
 癡の故に衆生陰入界に著す。是菩薩摩訶薩は諸法の所有無く、性常に空にして、自性空な  
 ることを見る時、般若波羅蜜を行じ、自ら立つて幻師の如く、衆生の爲に法を説く。慳者  
 には爲に布施の法を説き、破戒の者の爲には持戒の法を説き、瞋る者には爲に忍辱の法を  
 説き、懈怠の者に、爲に精進の法を説き、亂想の者には爲に禪定の法を説き、愚癡の者に  
 は爲に智慧の法を説き、衆生をして布施乃至智慧に住せしめ、然して後、爲に聖法を説き、  
 能く苦を出す。是法を用ての故に、須陀洹果を得、乃至、阿羅漢果、辟支佛道を得、乃至  
 阿耨多羅三藐三菩提を得。』舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩は是衆生、無  
 所有を得て、教へて布施、持戒、乃至智慧あらしめ、然して後、爲に聖法を説き、能く苦

を出す。是法を以ての故に、須陀洹果乃至阿耨多羅三藐三菩提を得。佛、舍利弗に告げたまはく、『菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行する時、有所得の過罪無し。何を以ての故に、舍利弗、是菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行する時に、衆生を得ず、但空法相續の故に、名けて衆生となせばなり。舍利弗、菩薩摩訶薩は二諦の中に住して、衆生の爲に世諦と第一義諦とを説法す。舍利弗、二諦の中には衆生は不可得なりと雖も、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行するに、方便力を以ての故に、衆生の爲に法を説く。衆生は法を聞くも、今世の吾我尙不可得なり、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提及び所用の法を得べけんや。是の如く、舍利弗、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行する時、方便力を以ての故に衆生の爲に法を説く。』舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、是菩薩摩訶薩の心曠大にして、法の若は一相若は異相、若は別相として得べきもの有ること無し。而も能く是の如く大誓莊嚴す。是莊嚴を用ての故に、欲界に生ぜず、色界に生ぜず、無色界に生ぜず、有爲性を見ず、無爲性を見ず、而も三界の中に於て衆生を度脱するも、亦衆生を得ず。何を以ての故に、衆生は不縛不解なればなり。衆生は不縛不解なるが故に、無垢無淨なり。無垢無淨の故に、五道を分別すること無し。五道を分別すること無きが故に、業無く煩惱無し。業無く煩惱無きが故に、亦果報も有るべからず。是果報を以ての故に、三界の中に生ず。』佛、舍利弗に告げたまはく、『是の如く是の如し。汝の言ふ所の如く、若し衆生先有後無ならば諸佛菩薩は則ち過罪有り。諸法五道生死も亦是の如し。若し先有後無なれば諸佛菩薩は則ち過罪有り。舍利弗、



今、有佛にも無佛にも、諸法の相は常住にして異ならず。是法相の中、尙我無く、衆生無く、壽命無く、乃至知者無く、賢者無し。何に況んや、當に色受想行識有るべけんや。若し是法無くんば、云何が當に五道を往來して、衆生を拔出する處有るべけんや。舍利弗、是諸法の性は常に空なり。是を以ての故に、諸の菩薩摩訶薩は過去の佛より是法相を聞き、阿耨多羅三藐三菩提の意を發す。是中に法の我として當に得べきもの有ること無く、亦衆生の定んで著する處の法有ること無く、出すべからず、但衆生の顛倒を以ての故に著するのみ。是を以ての故に、菩薩摩訶薩は大誓莊嚴を發し、常に阿耨多羅三藐三菩提を退せざるなり。是菩薩は我當に阿耨多羅三藐三菩提を得ざるべきや、我必ず當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきやを疑はず。阿耨多羅三藐三菩提を得已つて、實法を用て、衆生を利やく顛倒を出でしむ。舍利弗、譬へば幻師の百億萬人を幻作して、種種の飲食を興へ、飽滿し、歡喜し、唱へて我大福を得たり、我大福を得たりと言はしむるが如し。汝の意に於て云何。是中に人有り、食飲飽滿するや不や。』『不、世尊。』佛の言はく、『是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩は初發意より已來、六波羅蜜、四禪、四無量心、四無色定、四念處、乃至八聖道分、十四空、三解脱門、八背捨、九次第定、佛の十力、乃至十八不共法を行じ、菩薩道を具足し、衆生を成就して、佛國土を淨むるも、衆生の法として度すべきなし。』須菩提、佛に白して言さく、『世尊、何等をか是れ菩薩摩訶薩の道とし、菩薩は是道を行じて、能く衆生を成就し、佛國土を淨むるや。』佛、須菩提に告げたまはく、『菩薩摩訶薩は初發意より已來、

檀波羅蜜を行じ、尸羅、羼提、毘梨耶、禪那、般若波羅蜜を行じ、乃至十八不共法を行じて、衆生を成就し、佛國土を淨む。須菩提、佛に白して言さく、「世尊、云何が菩薩摩訶薩は檀波羅蜜を行じ、衆生を成就するや。」佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩行りて、檀波羅蜜を行ずる時、自ら布施し、亦衆生をして布施せしめて此言を作す。諸の善男子、汝等布施に著すること莫れ。汝布施に著するが故に、當に更に身を受くべし。更に身を受くるが故に多く衆の苦を受くるなり。諸の善男子、諸法の相の中には施す所無く、施者無く、受者無し。是三法は性皆空なり。是性空の法は取るべからず、取るべからざるの相は是れ性空なり。是の如く、須菩提、菩薩摩訶薩は、檀波羅蜜を行ずる時、衆生に布施するも、是中に布施を得ず、施者を得ず、受者を得ず。何を以ての故に、無所得の檀波羅蜜、是を名けて、檀波羅蜜と爲せばなり。是菩薩は、是三法を得ざるが故に、能く衆生をして、須陀洹果を得しめ、乃至、阿羅漢果、辟支佛道、阿耨多羅三藐三菩提を得しむ。是の如く、須菩提、菩薩摩訶薩は檀波羅蜜を行ずる時、衆生を成就す。是菩薩自ら布施を行じ、亦他人をして布施を行せしめ、布施の法を讚歎し、布施を行ふ者を歡喜し、讚歎す。是菩薩は是の如く布施し已りて、刹利大姓、婆羅門大姓、居士大家に生じ、若は小王、若は轉輪聖王となる。是時、四事を以て衆生を攝取す。何等をか四となす。布施、愛語、利行、同事なり。是四事も衆生を攝し已りて、衆生漸漸に戒、四禪、四無量心、四無色定、四念處、乃至八聖道分、空、無相、無作三昧に住し、正位の中に入ることを得、須陀

沮果を得、乃至阿羅漢果を得、若くは辟支佛道を得、若は教へて阿耨多羅三藐三菩提を得  
 しめて、是言を作さく、「諸の善男子、汝等、當に阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし。阿耨  
 多羅三藐三菩提は得易きのみ。何を以ての故に、定法として衆生所著の處有る」と無く、  
 但顛倒の故に衆生著するのみなればなり。是故に、汝等當に自ら生死を離るべく、亦當  
 に他をして生死を離れしむべし。汝等當に發心して、能く自ら利益し、亦當に他人をも利  
 益することを得べし」と。須菩提、菩薩摩訶薩は應に是の如く、檀波羅蜜を行すべし。是  
 檀波羅蜜を行する因縁の故に、初發意より已來、終に惡道に墮せず、常に轉輪聖王となる。  
 何を以ての故に、其種うる所に隨つて、大果報を得ればなり。是菩薩は、轉輪聖王となる  
 時、乞者有るを見て、是念を作さく、「我れ餘事の爲の故に、轉輪聖王の果を受けず、但一  
 切衆生を利益せんが爲の故のみ」と。是時に、是言を作さく、「此は是れ汝の物なり。汝自  
 ら之を取れ、難する所有ること莫れ。我惜む所無し、我衆生の爲の故に生死を受く。汝等  
 を憐愍するが故に大悲を具足す。是大悲を行じて衆生を饒益するも、亦實に定んで衆生相  
 を得ず。但假名有るが故に是衆生を説くべきのみ」と。是名字も亦空にして、響聲の如  
 く、實に相を説くべからず。須菩提、菩薩摩訶薩は應に是の如く、檀波羅蜜を行じ、衆生  
 の中に於て惜む所無く、乃至自身の肌肉をも惜まず、何に泥んや外物をや。是法を以ての  
 故に、衆生をして生死を出す。何等をか是法となすや。所謂檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提  
 波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜、乃至十八不共法もて、衆生をして生死の

中より得脱せしむ。復次に、須菩提、菩薩摩訶薩は檀波羅蜜の中に住し、布施し已つて是言を作さく、「諸の善男子、汝等來りて戒を持つべし。我當に汝等に供給して、乏短するところ無からしむべし。衣服、臥具、乃至資生、須ふるところは盡く當に汝に給すべし。汝等乏少の故に戒を破る。我當に汝に所須を給し、若は飲食乃至七寶乏する所無からしむべし。汝等是戒律儀の中に住し、漸漸に當に苦を盡すことを得、三乘を成じて、而して度脱することを得べし。若は聲聞乘、若は辟支佛乘、若は佛乘なり」と。復次に、須菩提、菩薩摩訶薩は檀波羅蜜の中に住し、若し衆生の瞋惱するを見れば、是言を作さく、「諸の善男子、汝等何の因縁を以ての故に瞋惱するや、我當に汝が須ふる所を與ふべし。汝等の欲する所、我より之を取れ、悉く當に汝に給して、汝をして若は飲食、衣服、乃至資生の所須を乏する所無からしむべし」と。是菩薩は檀波羅蜜の中に住し、衆生を教へて忍辱せしめ、是言を作さく、「一切法の中に堅實なるもの有ること無し、汝等の瞋る所、是因縁は空にして、堅實なる無く、皆虚妄憶想より生ず、汝等根本有ること無ければ、汝は瞋恚し、壞心し、惡口し、罵詈し、刀杖もて、相加へて以て命を害ふるに至る。汝等虚妄の法を以て、瞋を起すが故に、地獄、畜生、餓鬼の中、及び餘の惡道に墮し、無量の苦を受くること莫れ。汝等虚妄無實の諸法を以ての故に、而も罪業を作すこと莫れ。是罪業を以ての故に尙人身すら得ず、何に況んや佛世に生ずることを得んや。諸人、佛世には値ひ難く、人身は得難し。汝等好時を失ふこと莫れ。若し好時を失はば、則ち救ふべからず」と。是

菩薩摩訶薩は、是の如く衆生を教化して、自ら忍辱を行じ、亦他人をして教へて忍辱を行はしめ、忍辱の法を讚歎し、忍辱を行する者を觀喜し讚歎す。是菩薩は衆生をして、忍辱の中に住せしめ、漸く三乘を以て、衆苦を盡すことを得しむ。是の如く、須菩提、菩薩摩訶薩は檀波羅蜜に住し、衆生をして忍辱に住せしむ。須菩提、云何が菩薩摩訶薩は檀波羅蜜に住し衆生をして精進せしむるや。須菩提、菩薩は衆生の懈怠なるを見て、是の如く言ふ、「汝等何を以てか懈怠する」衆生の言はく、「因縁少きが故なり」と。是菩薩は檀波羅蜜を行する時、諸人に語つて言はく、「我れ當に汝の因縁をして具足せしむべし、若は希施、若は持戒、若は忍辱、是の如き等の因縁の故に、汝をして具足せしむべし。是衆生、菩薩の利益因縁を得るが故に、身精進し、口精進し、心精進す。身精進、口精進、心精進なるが故に、一切の善法を具足し、聖無漏の法を修す。聖無漏の法を修するが故に、當に須陀洹果、乃至阿羅漢果、辟支佛道を得、若は阿耨多羅三藐三菩提を得べし。是の如く、須菩提、菩薩摩訶薩は檀波羅蜜を行する時、精進波羅蜜に住して、衆生を攝取す。須菩提、云何が菩薩摩訶薩は檀波羅蜜を行する時、衆生を教化し、禪波羅蜜を修せしむるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩衆生の亂心を見るや是言を作さく、「汝等禪定を修すべし」と。衆生の言はく、「我等の因縁具足せざるが故に」と。菩薩の言はく、「我當に汝等のために因縁と作るべし。是因縁を以ての故に、汝が心をして覺觀に隨はざらしめ、亦馳散せざらしめん」と。衆生は是因縁を以ての故に、覺觀を斷じ、初禪、二禪、三禪、四禪に入り、

慈悲喜捨の心を行す。衆生は是禪無量心の因縁を以ての故に、能く四念處、乃至八聖道分  
 を修し、十七助道法を修する時、漸く三乘に入り、而して涅槃を得、終に道を失はず。是  
 の如く、須菩提、菩薩摩訶薩は檀波羅蜜を行す時、禪波羅蜜を以て、衆生を攝取し、禪  
 波羅蜜を行せしむ。須菩提、云何が菩薩摩訶薩は檀波羅蜜を行じ、般若波羅蜜を以て、衆  
 生を攝取するや。須菩提、菩薩は衆生の愚癡にして智慧有ること無きを見て、是言を作さ  
 く、「汝等何を以ての故に、智慧を修せざるや」と。衆生の言はく、「因縁未だ具足せざるの  
 故に」と。菩薩は檀波羅蜜の中に住して是言を作さく、「汝等の所須の智慧を具足すること  
 を得んとせば、我より之を取れ、謂ゆる布施、持戒、忍辱、精進、禪定、此因縁具足し已  
 りて、汝等是の如く思惟すべし。般若波羅蜜を思惟する時、法の得べきもの有りや不や。  
 若し我、若し衆生、若し壽命乃至知者、見者得べきや不や、若し色受想行識、若し欲界色  
 界無色界、若し六波羅蜜、若し三十七助道法、若し須陀洹果、若し斯陀含、阿那含、阿羅  
 漢果、辟支佛道、若し阿耨多羅三藐三菩提を得べき不や」と。是衆生は、是の如く思惟す  
 る時、般若波羅蜜の中に於て、法の得べく、著すべき處有ること無し。若し諸法に著せざ  
 れば、是時、法の生有り、滅有り、垢有り、淨有るを見ず。是れ地獄なり、是れ畜生なり、  
 是れ餓鬼なり、是れ阿修羅衆なり、是れ天人なり、是れ人なり、是れ持戒なり、是れ破戒な  
 り、是れ須陀洹なり、是れ斯陀含なり、是れ阿那含なり、是れ阿羅漢なり、是れ辟佛支なり、  
 是れ佛なりと分別せず。是の如く、須菩提、菩薩摩訶薩は檀波羅蜜を行す時、般若波羅

蜜を以て衆生を攝取す。須菩提、云何が菩薩摩訶薩は檀波羅蜜の中に住し、尸波羅蜜、  
 屬提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜、乃至三十七助道法を以て衆生を攝取  
 するや。須菩提、菩薩摩訶薩は檀波羅蜜の中に住し、供養の具を以て衆生を利益す。是利  
 益の因縁を以ての故に、衆生は能く四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八  
 聖道を修し、衆生は是三十七助道法を行じ、生老死の中に於て解脱することを得。是の如く、  
 須菩提、菩薩摩訶薩は無漏の聖法を以て衆生を攝取す。復次に、須菩提、菩薩摩訶薩は衆  
 生を教化する時、是の如く言ふ、諸の善男子、汝等我より所須の物を取れ。若は欲食、  
 衣服、臥具、香華、乃至七寶等の種種の資生の須ふる所のもの、汝等是を以て衆生を攝取  
 し、汝等長夜に利益し、安樂にして、是念を作すこと莫れ、是物は我所有に非ず、我長夜  
 に衆生の爲の故に、此諸物を集む。汝等當に是物を己の物と異なること無きが如く取り、  
 衆生を教化して、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧を行ぜしめ、乃至三十七助道法、  
 佛の十力、乃至十八不共法を得しめ、亦諸の無漏法の果、謂ゆる、須陀洹、乃至、阿羅  
 漢果、辟支佛道、阿耨多羅三藐三菩提を得せしむべし。是の如く、須菩提、菩薩摩訶薩は  
 檀波羅蜜を行ずる時、應に是の如く衆生を教化して、三惡道及び一切生死の往來の苦を離  
 るることを得しむべし。復次に、須菩提、菩薩摩訶薩は、尸波羅蜜に住して衆生を教化  
 し、是言を作さく、「衆生、汝等何の因縁少きが故に戒を破るや、我當に汝の與に因縁、若  
 は布施、乃至智慧及び種種の資生の所須を具足することを作すべし」と。是菩薩は尸波羅

【一】本品は菩薩道を具足する義を明す、今之を釋論するに、先づ菩薩道を具足して、何に無上菩提を得るかに就いて。

羅蜜に住して衆生を利益し、十善を行し、十不善道を遠離せしむ。是諸の衆生は、暗の戒を持して破戒せず、缺戒せず、濁戒せず、雜戒せず、取戒せず、漸く三乘を以て而して苦を盡すことを得。尸羅波羅蜜を首と爲し、檀波羅蜜に説くが如く、餘の四波羅蜜も亦是の如し。

問うて曰はく、先に菩薩は六波羅蜜等の諸の助道法を行するも、菩薩道を具せざれば則ち阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はずと説けり。今須菩提は應に自ら六波羅蜜等を行じて菩薩道を具足し阿耨多羅三藐三菩提を得べきことを知るべし、何を以てか更に問へるや。答へて曰はく、須菩提は云何がして、阿耨多羅三藐三菩提を得るやを疑はず。今は但云何が菩薩道を具足して、阿耨多羅三藐三菩提を得るかを問ふなり。佛答へたまはく、

「若し菩薩は六波羅蜜等の諸法を用ふれば、方便力の和合を以ての故に能く行ず、是時菩薩道を具足す、方便力とは、決定して是布施等の三事を得ず、亦是三事を離れずして、檀波羅蜜を行す。是時、菩薩道を照明す、照明と具足とは、是れ一義なり。若し菩薩、決定して、布施等の三事を得ば、直に常顛倒、取相、著法等の過罪に墮す。若し菩薩、決定せば、則ち離滅の邊、著空に墮し、還邪見等の諸の煩惱を起して、便ち菩薩道を離る。若し菩薩は二邊を離るれば、空に因りて是施等の假名等の虚誑の法を捨て、諸法實相に因りて菩薩空を離るれば、施者無く、受者も無く、阿耨多羅三藐三菩提相の如し。是布施を觀するも、亦闕くして異ること無し、是の如き布施を名けて具足と爲す。乃至十八不共法も



【世性の中等】世諦のみに執して以て世界の根本なりと解する一派、所謂世性外道の所説なり。  
 【微塵の中等】世界の根本を極微とする微塵性外道の所説なり。  
 【大自在天の等】萬象は大自在天の所生なりとする自在天外道の所説。  
 【時より等】世界の根本を時より成ると説く一派、所

亦是の如し。舍利弗は會中に在りて、佛須菩提の與に般若は甚深なれば、果報大に利益有りりと雖も決定性無し、云何が習ふべきやと説くに、佛「菩薩は般若波羅蜜を行する時、色を壊せず、色に隨はず、是の如きを般若波羅蜜を習ふと名くと答へたまふを聞く。菩薩は初發心より實法を知ると爲すが故に、常に般若波羅蜜を行じ、次第に其宜しき所に隨つて布施等の諸法を行す。是故に常に菩薩は般若波羅蜜を行する時、布施等の諸法を行す。色を壊せずとは、色は無常なりと言はず、色は空なりとも言はず、所有無き、是を不壞色を名く。色に隨はずとは、眼に色を見、相を取り、著を生ずるが如きにあらざるなり。復次に、是色に、若は常、若は無常、若は苦、若は樂等と説かず、是を色に隨はずと名く。常、無常等は皆色の實相に非ざるなり。復次に、是色の根本は世性の中より來り、若は微塵の中より來り、大自在天の中より來ると説かず、亦時より來ると説かず、亦自然に生ずと説かず、亦無因縁にして而も強て生ずと説かず、是の如き等を名けて隨はず壊せずとなす。是中に佛自ら因縁を説きたまはく、「是色は性無なるが故に隨はず壊せず」と。性無なりとは、是色は、一切の四大和合の假名より名けて色となす。是中に、定んで一法の名けて色と爲すもの無し。先の色を破する中に説くが如し。是色は、因縁和合より生ずるが故に、即ち是れ無性なり。若し無性なれば即ち是れ性空なり。若し是色相の性空を得ば、即ち是れ般若波羅蜜を習ふなり、乃至十八不共法も亦是の如し。復問ふ、「世尊、若し諸法に自性の壞すべく隨ふべきもの無くんば、云何が菩薩は般若波羅蜜を習はん。般若波羅蜜

謂時外道の所説なり。  
【自然に等】世界の根本を自然に求むる自然外道の所説。

【無因無縁にして等】世界は因も縁もなくして生ぜしものと説くもの無因外道の所説なり。

【二】次に諸法無性なるに凡聖の別あるは、畢竟無性と相應せるや否やにあれば、これを喩もて機に應じて法を説くことを釋す。

を學ばずんば、阿耨多羅三藐三菩提を得ざらん」と。佛、舍利弗の意を可し、自ら因縁を説きたまはく、「若し菩薩方便力を用て六波羅蜜を行ぜば、是人は諸法の空なることを知ると雖も、而も能く般若波羅蜜を起す」と。舍利弗、若し菩薩一切の法を求めて、若し少許の定性を得ば、則ち取るべく著すべし。今菩薩は眞に一切の法を求覓して定實を得ず。謂ゆる是れ般若波羅蜜、是れ禪波羅蜜、乃至是れ十八不共法なり、是諸法は皆不可得なり、不可得の故に何の取る所あらん。舍利弗、是を菩薩の無取般若波羅蜜と名く。菩薩應に無取般若波羅蜜を學すべし。無取すら尙不可得なり、何に況んや般若等の諸法をや。一切法は無性なるが故なり。

舍利弗復問ふ、「若し一切法無性ならば、云何が是れ凡人乃至佛たることを知るや」と。佛答へたまはく、「一切の法は根本定相無しと雖も、但凡人顛倒の故に著す。菩薩は般若波羅蜜を行する時、方便力を以ての故に、一切の法は根本無きを見て、而も阿耨多羅三藐三菩提心を發す。是菩薩は深く諸法の性空を行するが故に、一切の法に根本有るを見ず、見ざるが故に解せず退せず、了了に一切法の無我、無所有性、性常に空なることを知る。但衆生は愚癡顛倒の故に、是は陰界入に著するのみ。是時に、菩薩は諸法の甚深寂滅の相を思惟し籌量するも、而も衆生は深く虚誑顛倒に著す。菩薩は自ら立つて、幻師の如く、種種に變化して法を説き、人を度す。幻の所作の如く、憎無く、愛無くして、等心に法を説く、謂ゆる、憍者には施等の六法を教へ、復爲に轉た勝れる法を説いて生死を出で、須陀洹果、

乃至、阿耨多羅三藐三菩提を得しむ」と。問うて曰はく、「六波羅蜜の外に、更に何の法有つてか勝れたりとなすや。何を以てか更に爲に勝法を説くと云ふや。」答へて曰はく、「此中には波羅蜜を説かず、但慳者には爲に施を説き、乃至癡者には爲に智慧を説く、諸佛菩薩の法は初有り後有り、初法は謂ゆる布施、持戒なり。受戒施の果報は天上の福樂を得、爲に五欲の味を説く、利は少く失は多し。世間の身を受くれば衰苦のみ有り、世間を遠離し、愛法を斷ずるを讚歎し、然る後、爲に四諦を説いて須陀洹果を得しむ。此中に菩薩は但説いて衆生をして佛道を得しめんと欲するが故に、先づ教へて六法を行ぜしむ。此中の善智慧をば名けて、三解脱門の所攝となさず。是善智慧は能く布施等の善法を生じ、能く慳貪瞋恚等の惡法を滅し、能く衆生をして、天上に生ずることを得しむ。何を以てか是を知るや、更に勝法有るが故なり。勝法とは、謂ゆる、四諦の聖法なり、出法一切の聖人所行の法を名けて聖法となし、三界の生死を出づるを名けて出法となす。是四諦を以て法を説く、故に、衆生の根因縁に隨つて須陀洹果を得、乃至一切種智を得しむ。此中に初の六法を説かずと雖も布施等を説く。當に知るべし、已に攝す。」復次に、菩薩は、佛道の爲の故に六法を説く。但衆生の意劣るが故に自ら小乗を取る。是故に布施、持戒、生天、受報等の初の六法を説かず。舍利弗佛に白して言さく、「世尊、先に菩薩は是畢竟不可得の法を説き、今無所有の衆生の爲に法を説いて無所有の法を得しむ。謂ゆる、須陀洹果、乃至一切種智なり。世尊、菩薩は今無所有の法を得るが故に、能く衆生をして無所有の法を得

しむ。無所得は是れ有所得なりや一佛答へたまはく、菩薩は般若波羅蜜を行ずる時、有所得の過有ること無し。何を以ての故に、菩薩は般若波羅蜜を行ずる時、衆生及び法を見ず、但諸の因縁和合せる假名の衆生のみなり。菩薩は二諦の中に住して衆生の爲に法を説くも、但空のみを説かず、但有のみを説かず。愛著の衆生の爲の故に空と説き、取相著空の衆生の爲の故に有と説いて、有無の中の二處に染せず。是の如きの方能力もて、衆生の爲に説法す。衆生は現在の我身及び我すら尙不可得なり、何に況んや、當に河沙多羅三藐三菩提を得べけんや」と。舍利弗歡喜して、佛に白して言さく、「世尊、曠大の心は是れ菩薩なり、曠大の心とは、此中に自ら因縁を説く、謂ゆる、法として若は一相、若は異相得べきもの有ること無し。人の市に買ふる必ず交易を須ふるが如し。大心の人は則ち然らず、依止する所無くして、而も能く大莊嚴を發す。大莊嚴の故に三界に生せず、亦衆生を抜いて三界を出でしむ。而も衆生は不可得なり、不縛不解の故に一切の法は空なり、久遠より以來、煩惱顛倒するは皆是れ虚誑不實なり、是故に無縛と名く。縛無きが故に亦解も無し。縛は即ち是れ垢、解は即ち是れ淨、無淨無垢の故に六道の分別無し。六道を分別せざるが故に罪福の業無し、罪福の業無きが故に煩惱無し。能く罪福の業を起す者は罪福の業を起さず、亦果報有るべからず。是の如く諸法畢竟空の中に、而も大莊嚴を作す、是を希有と爲す。譬へば、人の虚空の中に樹を種えて、樹葉華果利益する所多きが如し。佛、舍利弗の意を可し、舍利弗の是空を證するが故に佛亦答へて亦可す。具空を説くを以ての故

に可し、其空を難するを以ての故に答ふ。謂ゆる「舍利弗、若し衆生及び諸法先に有にして今無ならば、諸佛賢聖に過罪有り。過罪とは謂ゆる衆生をして無餘涅槃に入らしめ、永く色等の一切の法を滅して空中に入らしめ、皆無所有ならしめ、衆生及び一切法を斷滅するを以ての故に過罪有り」と。舍利弗、衆生及び一切の法は先に來ること無し。若し有佛にも無佛にも常住にして異らざれば、是れ諸法實相なり。是故に六道の生死無く亦衆生の拔出すべき無し。舍利弗、一切の法は先より空なり、是故に、菩薩は、諸佛の所に於て諸法の是の如きの相を聞く。故に阿耨多羅三藐三菩提心を發して、是念を作さく、「菩提の中には、亦法として得べきもの有ること無く、亦實定の法の衆生をして著して而も度すべからざるしめ、但衆生癡誑顛倒の故に、是虚誑の法に著するのみ」と。是故に菩薩は大莊嚴を發し、阿耨多羅三藐三菩提を轉ぜずして、是念を作さく、我必亦當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。得ざるに非ず、得已つて實法を用て衆生を利益す。衆生を利益するが故に、衆生顛倒より出づるを得」と、是事を聞了ならしめんと欲するが故に、經の中に幻師の譬を説く。幻師は即ち是れ菩薩なり、幻師の所作の園林廬觀は即ち是れ六波羅蜜等の衆生を變するの法なり。幻師の所作の象馬の男女は即ち是れ菩薩所度の衆生なり。幻師の一身は幻力を以ての故に、衆生、園林、廬觀等を自作して、衆生を娛樂するが如し。若し幻師、所幻の作事を以て實と爲し、所幻の人に於て其恩惠を求むれば、即ち是れ狂人なり。菩薩も亦是の如く、諸佛に代つて、一切の法性は、空なること幻の如しと聞いて、而も布施

等を以て衆生を利益するや、恩惠福報を求めんと欲す、即ち是れ顛倒なり。問うて曰はく、「幻法咒術は實有なれども、幻の所作の物は虚なるべし。衆生の空なるが如く、菩薩も亦空なり。菩薩は衆生を化作せず、何ぞ喩となすことを得んや。答へて曰はく、「諸法實相の中には法すら尙無し、何に況んや衆生をや。衆生の異名を名けて幻師と爲す。幻師は實に無し、何を以てか幻師は有にして、所幻のものは無しと言ふや。如し汝は幻師を以て實に有り、所幻のものは無しといはば、聖人は幻師及び所幻の物を觀るに異らず、事を明了にするを以ての故に譬喩を説き、其少許の相似の處を取つて喩と爲すなり。何を以てか盡く取つて難をなさん。師子を王に喩ふるが如きは、師子は獸中に於て畏るること無く、王は群下に於て自在無難なるが故に、以て喩と爲すなり。復何ぞ四脚にして毛を負ふを異と爲すを責むべけんや。佛、性空の法を説いて諸法皆空なりとなすに猶衆生有り、是故に幻を説いて喩と爲す。我今喩を説いて以て衆生を破す、汝云何が復衆生を以て難と爲すや。」

【三】次に須菩提が像に疑に備へて淨佛國土成就衆生の道を問へるに對して、行菩薩道の相を示せるを釋す

爾時、須菩提、佛に白して言さく、「世尊、何等か是れ衆生を成就し、佛國土を淨むる道なるや」と。須菩提は菩薩道を知ると雖も、中に甚深性空の理を説くを以ての故に聽者疑を生ず、是故に問を發するなり。佛答へたまはく、「菩薩は初發心より、六波羅蜜、乃至十八不共法を行す。是菩薩は是道を行じて、衆生を成就し、佛國土を淨む。」須菩提復問ふ、「云何が是法を行じて、衆生を成就するや」と。須菩提意へらく、「若し是法、性空にして、衆生も亦性空ならば、云何が成就すべきことを得べきや」と。佛答へたまはく、「方便力を

【四種に布施を行す】筆と墨と經と說法とを欲するに隨て施すこと。

以ての故に、布施の法を以て衆生を教化し、教へて布施に皆せしめざるを以て眞實と爲す」と方便とは、菩薩、衆生に語るらく、「汝曹善男子、來つて布施するも、是布施に著すること莫れ。經の中に説くが如し」と。衆生は布施を以て貴樂の處に生じ、貴樂の因縁の故に我と憍慢とを生ず。我と憍慢と增長するが故に善法を破す。善法を破るが故に三惡道に墮す。是故に菩薩は、先に教へて言へり、「布施に著すること莫れ」と。但是布施に因つて、持戒等の善法を修し、皆是法を廻らして涅槃に向ふ。所以は何ん、是性空なる諸法實相は、不可得の相なればなり。是の如く、菩薩は方便力の故に、衆生を教化して、須陀洹果、乃至、佛道を得しむ。是菩薩は自ら布施を行じ、亦衆生をして布施せしむ。若し自ら施さざれば、或は人有つて言はん、「若し施にして、是れ好法ならば、何ぞ自ら行ぜざるや」と、是故に菩薩は先自ら布施す。復次に、菩薩は深く善法を愛す。布施は是れ初門なり、是故に是布施を行す。又菩薩は深く衆生を慈悲するに、慈悲心大なりと雖も、而も能く衆生を充滿すること能はざるを以て、是故に先布施を行じ、其心をして軟ならしめ、以て引導すべからしむ。布施の因縁をもて、四姓に生じ、及び轉輪王と作る。四攝法を以て衆生を攝取し、漸漸に三乘の法を以て涅槃を得しめ、他に布施を教へて、布施の法を讚歎せしめ、布施を行する者を歡喜し讚歎せしむ。是れ深く布施を愛し、同行を見るが故に歡喜し讚歎するなり。復次に、心に衆生を憐愍して、若し修福を見れば、則ち之が爲に歡喜すること、慈父の子の善を行ふを見て、心則ち歡喜するが如し。是人は四種に布施を行じ、刹利等の

【四】次に無所得の布施中に他の五法を行ずることを明すに就いて。

貴姓の中に生ず。

布施を以て攝し已つて、漸漸に教へて持戒、禪定等、乃至辟支佛道を得しむ。或は衆生の大心有る者、少許の慈悲心有り、是人生死の長遠を怖畏するが故に、其の心懈怠するを見れば、菩薩は方便力の故に是衆生に語るらく、「咄、衆生、阿耨多羅三藐三菩提は得易し、汝等何を以てか難しとなすや。衆生、所著の處は、此中に定實の法の能く遮する者、解の難き者有ること無し。汝等當に阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし。既に自ら度脱し、復能く衆生を度脱せしむべし」と。衆生を度脱すとは、菩薩は自ら大乘に乗じて度を得、三乘を以て、衆生の度すべき所に隨つて之を度し、既に自ら利益し、復他人を利益す。他人を利益すとは、既に自ら佛と作り、而も三乘を以て衆生を度脱するなり。若し菩薩、能く是の如く般若波羅蜜を行ぜば、初發心より終に三意道に墮せず、常に轉輪聖王と作りては菩薩は多く欲界に生ず。何を以ての故に、無色界の中には、形無きを以ての故に教化すべからず。色界の中には多く禪定の樂に味著し、厭惡の心無きが故に化し難ければなり。亦欲天に生ぜず。所以は何、妙なる五欲に著すること多きが故に化し難く、人中に在つては、世に四事を以て、衆生を攝するが故に、轉輪聖王と作るなり。此中に佛、白な因縁を説きたまはく、「其種うる所に隨つて大果報等を得」と。經の中に布施の相を説くが如し、復菩薩有りて檀波羅蜜を行ずる時、衆生の破戒を見て、是言を作さく、「汝曹、因縁具足せざるを以ての故に戒を破る。我當に汝の所須を給して乏少ならしむべし」と。破戒の人に二種



有り。一には持戒の因縁具足せざるが故に、貧窮人の如く飢寒急なるが故に賊と作る。二には持戒の因縁を具足すと雖も、悪心を習ふを以ての故に、好んで悪事を行ふ。貧窮にして戒を破る者には菩薩之に語つて言はく、「汝但戒を持つて、我當に汝に所須を給すべし。汝等持戒の中に住し、漸漸に三業を以て而も度脱することを得よ、是を布地に因りて戒を生ずと名く。」衆生は不如意の事を以ての故に瞋り、若し物を求めて意の如くならざるを以ての故に瞋り、人の意に稱はざるが故に瞋る。菩薩は權の中に住し、其意に隨つて之を給足す。問うて曰はく、「若し貧乏の者に給施して、瞋らしめざることは爾るべし、人の意に稱ふを得ず、之を惱まして瞋らしめば復云何。」答へて曰はく、「如意珠を以て之に施せば、即ち人をして皆意に稱はしむ。珠の威徳の故に、人の瞋る者無し。行者の慈三珠に入るが故に、人の瞋る者無きが如し。是故に少しく、何の因縁の故に瞋るやを説き、我當に汝が少く所を具足せしむべし。復次に、一切の法性は皆空にして無所有なり。汝の瞋るところの因縁も、亦虚誑にして定まること無し。汝云何が虚誑の事を以ての故に瞋罵し、害を加へ、乃至命を奪ふや。此重罪業を起すが故に、三惡道に墮し、無量の苦を受く。汝虚誑無實の事を以ての故に、而も大罪を受くること莫れ。山中に一の佛圖有るが如し。彼中に一の窟有り、中に鬼有り、來つて道人を恐惱せしむるが故に、諸の道人皆窟を捨てて去る一の客僧の來る有り、維那處分して此窟房に住せしめ、而も之に語つて言はく、「此房の中に鬼有り、喜んで人を惱す、能く中に住せる者は住せよ」と。客僧自ら持戒の力多

聞なるを以ての故に、小鬼何ぞ能くする所ぞ、我能く之を伏すべしと言ひ、即ち房に入つて住す。暮に更に一僧有り來つて住處を求む。維那亦此房に在つて住せしめ、亦鬼有りて、人を惱ますと語る。其人も亦小鬼何ぞ、能くする所ぞ、我當に之を伏すべしと言ふ。先に入りし者は戸を閉ぢ、端坐して鬼を待つ。後に來る者夜闇に戸を打つて入ることを求むるに、先に入る者は謂つて是を鬼となし、爲に戸を開けず。後に來る者力を極めて戸を打ち、内に有る道人は力を以て之を拒む。外なる者勝つことを得て、戸を排して入ることを得。内の者之を打ち、外なる者亦力を極めて熟打つ。明旦に至つて相見るに、乃ち是れ故舊の同學なり、各相に愧謝す。衆人雲の如く集り笑て之を怪しむ。衆生も亦是の如し。五衆俱は我無く、人無く、空なるに、相を取つて鬪諍を致す。若し支解して地に在くに、但骨肉のみ有り、人無く、我無し。是故に菩薩は衆生に語つて言はく、「汝根本空の中に於て鬪諍して罪を作すこと莫れ。鬪諍の故に人身すら尙得べからず、何に況んや佛に値ふことをや。當に知るべし、人身は得難く、佛世には値ひ難く、好時過ぎ易きことを。一たび諸難に墮せば永く治すべからず。若し地獄に墮して燒炙屠割せらるれば、何ぞ教化すべき。若し畜生に墮せば共相に殘害して亦化すべからず。若し餓鬼に墮せば飢渴熱惱して亦化すべからず。若し長壽天に生ぜば、千萬の佛過ぐるとも、禪定の味に著するが故に皆覺知せず。安息國の如き、諸の邊地に生ずる者は、皆是れ人身の愚にして教化すべからず。中國に生ずると雖も或は六情を具せず、或は四支完からず、或は盲聾瘡癩、或は義理を識らず、

【五】次に更に布  
施度に住して諸苦  
摩訶により、衆生  
を攝取するに就い  
て。

【法杖】禪杖のこ  
と。

【禪毳】坐禪の際  
睡眠する者あれば  
擲つて覺せしむ  
るために用ひたる  
毛毳のこと。

【禪鏡】木版にて  
造れる形笏状のも  
の、中に孔を作り  
紐を施して耳下に  
申き頭に戴く、額  
を去ること四指、  
坐禪人若し昏睡  
して頭傾く時は墮ち  
りて自ら警むるな  
り。

或時は六情具足し、諸根通利し而も深く邪見に著し、罪福無しと言ふ、教化すべからず。  
是故に爲に説かく、「好時は過ぎ易し、諸難の中に墮すれば、度を得べからず」と。餘の波  
羅蜜は、經の中に廣く説くが如し。故に復之を解せざるなり。

問うて曰はく、「檀波羅蜜に住して、五波羅蜜を行じざる。何を以てか復更に六波羅蜜  
を説くや。」答へて曰はく、「上に一度の中に、次第に五を具足すれば、今は即ち一時に總  
説するなり。復次に、先には但六波羅蜜を説き、今は通じて三十七品及び諸の道果を説  
く。」問うて曰はく、「三十七品は、自心より出づ、云何が是因縁を興ふべけんや。」答へて  
曰はく、「菩薩は、坐禪の者には、衣服、飲食、醫藥、法杖、禪毳、禪鏡を供給し、好師の  
教誨を得しめ、好き弟子を得て化を受けしめ、骨人に與へて觀ぜしめ、禪經を與へて人を  
して爲に禪法を説かしむ。是の如き等は、三十七助道法の因縁なり。又人をして爲に摩訶  
衍の法を説かしむ。汝等所須の衣服、飲食を盡し來つて是を取れ、便ち是れ汝の物にして、  
自ら疑難すること莫れ、汝等是物を得已つて、自ら六波羅蜜を行じ、亦教へて他人を化し  
て、六波羅蜜を行ぜしむ。是布施の性は皆空なり、汝等布施及以果報を以て著すること莫  
れ。衆生は是性を得ば、漸漸に阿耨多羅三藐三菩提を得て、無餘涅槃に入る。布施を首と  
なして、五波羅蜜を生ずるが如く、餘の波羅蜜も亦是の如し。

大智度論卷第九十一

# 大智度論釋淨佛國土品第八十二

卷第九十二

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

爾時、須菩提是念を作さく、『何等をか是れ菩薩摩訶薩の道とし、菩薩は是道に住して、能く是の如きの大莊嚴を作すや。』佛、須菩提の心の所念を知つて、須菩提に告げたまはく、『六波羅蜜は是れ菩薩摩訶薩の道なり、三十七の助道法は是れ菩薩摩訶薩の道なり、十八空は是れ菩薩摩訶薩の道なり、八背捨、九次第定は是れ菩薩摩訶薩の道なり、佛の十力、乃至十八不共法は是れ菩薩摩訶薩の道なり、一切法も亦是れ菩薩摩訶薩の道なり。須菩提、汝が意に於て云何、頗し法として、菩薩の學せざる所有らば、能く阿耨多羅三藐三菩提を得るや不や。須菩提、法として菩薩の學すべからざるところのもの有ること無し。何を以ての故に、若し菩薩、一切の法を學せざれば、一切種智を得ること能はざればなり。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し一切の法は空なりとせば、云何が菩薩は一切の法を學すと言ひ、將、世尊、無戲論の中に戲論を作す無きや。謂ゆる是れ此、是れ彼、是れ世間法、是れ出世間法、是れ有漏法、是れ無漏法、是れ有爲法、是れ無爲法、是れ凡夫人法、是れ阿羅漢法、是れ辟支佛法、是れ佛法なり。』佛、須菩提に告げたまはく、『是の如く是の如

一切の法は實に空なり。須菩提、若し、一切の法空ならずんば、菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。須菩提、今一切の法は實に空なるが故に、菩薩摩訶薩は能く阿耨多羅三藐三菩提を得。須菩提、汝の言ふところの如し。若し一切の法空ならば、將佛は無戲論の中に於て戲論を作す無きや。彼此を分別せば、是れ世間の法、是れ出世間の法、乃至是れ佛法なり。須菩提、若し世間の衆生、一切法の空なるを知らば、菩薩摩訶薩は、一切の法を學ばずして一切種を得ん。須菩提、今衆生は、實に一切法の空なることを知らず、是を以ての故に、菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を得已つて、諸法を分別して、衆生の爲に説かく、「須菩提、是菩薩道に於て、初より已來、應に是の如く思惟すべし、一初諸法の中に定性得べからず、但和合の因縁に従つて法を起すが故に、名字の諸法有るのみ」と。我當に思惟すべし、「諸法の實性として著する所、若し六波羅蜜智、若し三十七助道法、若し須陀洹果、乃至阿羅漢、若し辟支佛道、若し阿耨多羅三藐三菩提無し」と。何を以ての故に、一切の法、一切法性空なり、空は空に著せず、空亦不得なり、何に況や、空の中に著すること有らんや。須菩提、菩薩摩訶薩は是の如く思惟し、一切法に著せずして、而も一切法を學し、是學の中に住して、衆生の心行を起す。是衆生心は何れの處に有つてか行する。衆生の虚妄不實の中に居るを知る。是時菩薩は是念を作さく、「是衆生は不實虚妄の法に著す、度し易きのみと。是時菩薩摩訶薩は般若波羅蜜の中に住し、方便力を以ての故に是の如く衆生を教化して言ふ。汝 諸の衆生、當に布施を行じ、饒財を

得べくも、亦布施の果報を恃みて、自ら高ぶること莫るべし。何を以ての故に、是中に堅實の法無きが故なり。持戒、忍辱、精進、禪定、智慧も亦是の如し。諸の衆生、是法を行じて、須陀洹果、乃至阿羅漢果、辟支佛道、佛道を得べくも、是法有りとな念すること莫るべし」と。是の如く教化し、菩薩道を行じて而も所著なし、是中に堅實有ること無きが故なり。若し是の如く教化すれば、是を菩薩道を行すと名く。諸法に於て著するところ無きが故なり。何を以ての故に、一切の法に所著相無ければなり。性無きを以ての故、性空なるが故なり。須菩提、是菩薩摩訶薩は、是の如く菩薩道を行する時、住する所無し、是菩薩は不住の法を用ての故に、檀波羅蜜を行するも亦是中に住せず、尸羅波羅蜜を行するも亦是中に住せず、毘梨耶波羅蜜を行するも亦是中に住せず、般若波羅蜜を行するも亦是中に住せず、初禪を行するも亦是中に住せず。何を以ての故に、是初禪は初禪の相空、禪を行する者も亦空、所用の法も亦空なればなり。第二、第三、第四禪も亦是の多し。慈悲喜捨、四無色定、八背捨、九次第定も亦是の如し。須陀洹果を得るも亦是中に住せず、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果を得るも亦是中に住せず、辟支佛道を得るも亦是中に住せず。須菩提、佛に白して言さく、『世尊、何の因縁の故に、是中に住せざるや。』佛の言はく、『二の因縁の故に、是中に住せず。何等をか二となす。一には、諸の道果は、性空にして住處無く亦所用の法も無く、亦住者無きなり。二には少事を以て足れりと爲さずして是念を作さく、

「我須陀洹果を得ざるべからず、我應當に須陀洹果を得べきも、我但是中に住すべからず、乃至辟支佛道を我得ざるべからず、我必ず應當に辟支佛道を得べきも、我但是中に住すべからず、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得るも住すべからず。何を以ての故に、我初發意より已來、更に餘心無く、一心に阿耨多羅三藐三菩提に向へばなり」と。須菩提、菩薩は一心に阿耨多羅三藐三菩提の中に向ひて、餘心を遠離し、作す所の身口意の業は、皆阿耨多羅三藐三菩提に應ず。須菩提、是菩薩摩訶薩は是一心に住して能く菩提の道を生ず。「須菩提、佛に白して言さく、「世尊、若し一切諸法不生ならば、云何が菩薩摩訶薩は能く菩提道を生ずるや。」佛、須菩提に告げたまはく、「是の如く是の如し。」一切の法は無生なり。云何が無生なるや。所作無く、所起無き者には、一切の法は不生なるが故なり。須菩提、佛に白して言さく、「世尊、有佛にも無佛にも、諸法の法相は常住ならずや。」佛の言はく、「是の如く、是の如し。有佛にも無佛にも、是諸法の法相は常住なり。衆生は是法の法相に住することを知らざるを以て、是爲の故に、菩薩摩訶薩は衆生の爲の故に菩提道を生じて、是道を用て、衆生の生死を拔出す。」須菩提、佛に白して言さく、「世尊、生道を用て菩提を得るや。」佛の言はく、「不。」世尊、不生道を用て菩提を得るや。佛の言はく、「不。」世尊、不生非不生道を用て菩提を得べきや。」佛の言はく、「不。」須菩提言さく、「世尊、云何が當に菩提を得べきや。」佛の言はく、「道を用て菩提を得るに非ず、亦非道を用て菩提を得るにも非ず。須菩提、菩提は即ち是れ道、道は即ち是れ菩提なり。須菩提、佛に白

して言さく、『世尊、若し菩提は即ち是れ道、道は即ち是れ菩提なりといはば、今菩薩は未だ作佛せざる時、應當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。云何が諸佛を多陀阿伽度、阿羅呵、三藐三佛陀と説き、三十二相、八十隨形好、十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、大慈大悲有りや。』佛、須菩提に告げたまはく、『汝が意に於て云何。佛は菩提を得るや不や。』

『不、世尊、佛は菩提を得ず。何を以ての故に。佛は即ち是れ菩提、菩提は即ち是れ佛なればなり。』須菩提の問ふ所の如くんば、菩薩の時も亦應に菩提を得べし。須菩提、是菩薩摩訶薩、六波羅蜜、三十七助道法を具足し、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法を具足し、金剛三昧を具足して住し、一念相應の慧を用て、阿耨多羅三藐三菩提を得。是時を名けて佛と爲す。一切法の中に自在を得。』須菩提、佛に白して言さく、『世尊、云何が菩薩摩訶薩は佛國土を淨むるや。』佛の言はく、『菩薩有り、初發意より已來、自ら身の羸業を除き、口の羸業を除き、意の羸業を除き、亦他人の身口意の羸業を淨む。世尊、何等をか、是れ菩薩摩訶薩の身羸業、口羸業、意羸業とをすや。』佛、須菩提に告げたまはく、『不善業、若し殺生、乃至邪見、是を菩薩摩訶薩の身口意の羸業と名く。』復次に、須菩提、慳貪心、破戒心、瞋心、懈怠心、亂心、愚癡心、是を菩薩の意の羸業と名く。復次に、戒不淨、是を菩薩の身口の羸業と名く。復次に、須菩提、若し菩薩、四念處の行を遠離せば、是を菩薩の羸業と名く。四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分、空三昧、無相無作三昧を遠離するも亦菩薩の羸業と名く。復次に、須菩提、菩薩摩訶薩は、須陀洹果



【二】本品は先に續いて菩薩道を行じ、衆生を成就し佛國土を淨むることを明す。今之を釋するに、先づ菩薩道を辨じ、菩薩がこの道に住してよく大誓莊嚴を作すといふを釋明す

の證を貪り、乃至阿羅漢果、辟支佛道を貪る、是を菩薩摩訶薩の墮業と名く。

釋して曰はく、「上來須菩提は常に種種に空法を問ひ、時を以て會疑ふ。其れ已に寂滅無戲論の法を體し、猶復多く問へり。是を以て問はずして而も心に念ず。復次に、菩薩及び諸天有り、深く禪定に入りて語言を好まず、而も法利を得んと欲す。是故に須菩提は言を發せずして而も心に念ぜり。」問うて曰はく、「須菩提言無しと雖も而も世尊は言を以て答へたまへり。」答へて曰はく、「佛の身色は視て厭足無し、色に厭無きが如く、聲も亦是の如し。語ると雖も而も細なる禪定の行を妨げず、是故に佛は言を以て答へたまへり。」復次に、佛は寂滅の相に安立し、阿耨多羅三藐三菩提の中に於て住し、一切の法は善、若は不善等を分別したまはず、而も衆生の疑有つて問ふ有れば、佛は所問所念に隨つて答へたまへり。是故に須菩提と同じからず。須菩提は是六波羅蜜等の諸法甚深の義を聞くも、其邊を得ること能はず。是故に問ふ「何等か是れ菩薩道なりや。是道を行じ、清淨にして著する所無く、六波羅蜜等の諸の善法莊嚴の如くなるや」と。佛其意を知り、須菩提に於ては益する所少しと雖も、諸の菩薩を増益せんが爲の故に答へたまはく、「六波羅蜜等は是れ菩薩の道なり、六波羅蜜は是れ菩薩初發心の道なり」と。次に四禪、八背捨、九次第定及び三十七の道品を行じて、但涅槃、十八空、佛の十力等を求め、微細に但佛道を求む。六波羅蜜の道は多く衆生の爲の故に、三十七品等は、但涅槃を求め、十八空等は涅槃の中に於て、聲聞、辟支佛地を出過して、菩薩位の道に入る。是三種は皆是れ

法性生身の菩薩の所行なり。所以は何ん、諸法を分別するが故なり。今又一切の法は皆  
 是れ菩薩道なり。是法性生身の菩薩の所行は、諸法に好悪有るを見ず、諸法平等の相に  
 安立するが故なり、此中に佛自ら因縁を説きたまへり。菩薩は應に一切の法を學すべし、  
 若し一法をも學せざれば則ち一切種智を得ること能はず、一切の法を學する者は、一切種  
 門を用て思惟し、籌量し、修觀し、通達す。須菩提、佛に白さく、「若し一切の法は一相、  
 謂ゆる空ならば、云何が菩薩は一切法を學して、將、無戲論相の法中に於て戲論を爲すこ  
 と無きや」。謂ゆる此彼の諸法は、略して是れ戲論の相、此は東、彼は西、是れ上、是れ下、  
 是れ常、是れ無常、是れ實、是れ虚、是れ世間、是れ出世間、乃至是れ二乘法、是れ佛法  
 と説く。佛其説を可し、一切の法は空相なり、若し法實に定んで空ならざるもの有らば、  
 即ち是れ無生無滅なり。無生無滅の故に四諦無く、四諦無きが故に佛法僧寶無し。是の如  
 く三寶等の諸法は皆壞す。今諸法は實に空なり、乃至空相も亦空なり、衆生は愚癡顛倒の  
 故に著す。是故に、衆生の中に於て、悲心起し、拔出せんと欲するが故に、佛の身力を  
 求め、衆生をして其語を信受せしめ、顛倒を捨てて、諸法の實相に入らしめんと欲す。是  
 故に、菩薩は諸法は空なりと知ると雖も、而も衆生を利益せんが爲に分別して説く。若し  
 衆生自ら諸法の空なることを知らば、菩薩は但自ら空相の中に住し、一切法を學し分別  
 することを須ひず。菩薩は菩薩道を行する時、初發意より已來、是の如く思惟らく、「一切  
 の法は、定實の性無く、但因縁和合より起り、是是因縁も亦各和合より起り、乃至畢竟

空に到る。畢竟空唯是一法のみ實にして、餘は無性の故に皆虚誑なり。我無始世より來、  
 是虚誑の法に著し、六道の中に於て、苦惱を受くるを厭うて、我今三世十方の佛とたなる。  
 般若は是れ我母なり、今復虚誑の法を隨逐すべからず一と。是故に菩薩は、乃至畢竟空の  
 中にも亦著せず、何に況んや餘法、謂ゆる檀波羅蜜等をや。爾時、菩薩は菩薩の道を照明  
 し、其心安穩にして、自ら念すらく、「我但著心を斷ずるに、道は自然にして至る」と。是  
 事を知り已つて念すらく、「衆生は深く世間に著するも、而も畢竟空なり、亦空も無性にし  
 て住處有ること無し、衆生信受すべきこと難し。衆生をして是法を信受せしめんが爲の故  
 に、一切の法を學す。修行の生起は、是れ衆生を度する方便の法なり。衆生の心行の趣く  
 所を觀、何の法を好み、何の事を念するかを知りて、志す所の願を觀る時、悉く衆生  
 所著の處を知る。皆是れ虚誑、顛倒、憶想、分別の故に著して、根本の實事有ること無  
 し。爾時、菩薩は大に歡喜して是念を作さく、「衆生は度し易きのみ」と。所以は何ん、衆  
 生の著する所は、皆是れ虚誑無實なればなり、譬へば、人に一子有り、喜んで不淨の中に  
 在りて、戯れて土を聚めて殻と爲し、草木を以て鳥獸と無し、而も愛著を生じ、人の奪ふ  
 者有れば、嗔悲し、啼哭す。其父知り已つて此子今愛著すと雖も、此二と離れ易きのみと  
 し、以て大に自ら休するが如し。何を以ての故に、此物は眞に非ざるが故なり。菩薩も亦  
 是の如し。衆生の不淨の臭身、及び五欲に愛著するは、是れ無常にして種種の苦の囚なり  
 と觀じ、是衆生は信等の五善根成就する時、即ち能く捨離するを得ることを知る。若し小

兒の著する所、實に是れ眞物ならば、復年百歳に至ると雖も、之に著すること轉深うして、捨つることを得べからず。若し衆生の著する所の物定んで實有ならば、信等の五根を得と雖も、之に著すること轉深うして、亦離るること能はず。諸法は皆空にして虚誑不實なるを以ての故に、無漏清淨智慧の眼を得る時、即ち能く所著を遠離し、大に自ら慚愧す。譬へば、狂病の所作は法に非ず、醒語の後羞慚して顔無きが如し。菩薩は衆生の度し易きを知り已つて、般若の中に安住し、方便力を以て衆生を教化す。汝等當に布施を行じて、饒財を得べし。是布施の果報を恃んで、自ら橋り高ぶること莫れ。此中に堅實有ること無く、皆當に破壊すべし。未だ布施せざる時と異ること無し。持戒等乃至十八不共法も亦是の如し。是諸法は清淨にして大に益する所有りと雖も、皆是れ有爲法にして、因縁より生じ、自性有ること無し。汝等若し是法に著せば、能く苦惱を生ず。譬へば熱したる金丸は是れ寶物なりと雖も、捉ふれば則ち手を焼くか如し。是の如く、菩薩は衆生を教化し、菩薩の道を行じて、自ら所著無く、亦衆生のために無所著を説く。

【二】次に斯く菩薩道を行ずる時に所住處なしといふを釋す。  
 【三種の相】布施に際しての施物、施者、受者をいふ  
 【三種の業】貪、瞋、癡をいふ。

無著の心を以て、檀波羅蜜を行ずるが故に、檀の中に住せざるなり。住せずとは、謂ゆる布施の時三種の相を取らず、亦果報に著せず、而も自ら高うして、罪業を生ず、布施の果報滅壞の時も亦惱を生ぜず。尸羅波羅蜜、乃至阿耨多羅三藐三菩提も亦是の如し。此中に、佛自ら不住の因縁を説くに二種有り。一には菩薩は深く空に入り、諸法の性を見ざるが故に住せず。二には小事を以て足れりと爲ざるが故に住せず。是菩薩は異心有ること無

く、但一向に能く菩提の道を生ず。須菩提、佛に白さく、「若し一切の法無生ならば、何が菩薩は能く菩提の道を生ぜんや」と。佛、須菩提の意を可とし、「一切の法は無生なり、我實に處處に諸法の無生を説くも、凡夫の爲に説くに非ず、但無作の解脱を得て三種の業を起さざる者の爲に説く。」復問ふ、「世尊、佛、自ら有佛にも無佛にも、諸法の法相は常住と説く。聖人の法相空なるが如く、凡人も亦是の如きや。」佛其所説を可とし、「諸法の實相は常住なり、衆生は知らず、解せざるを以ての故に菩提の道を起す。但凡夫の顛倒の法を除かんが爲の故に名けて道と爲す。若し決定して道として著すべきもの有れば、即ち復是れ顛倒なり。道、非道の平等なる、即ち是れ道なり。是故に難すべからず。」須菩提復問ふ、「云何が菩提を得べきや。生道を用ふるが故に得るや。」佛の言はく、「不。何を以ての故に、生道とは、菩薩、是有爲法を生滅の相なりと觀じて是を實と謂ふ、是故に言はく不なりと。先に熱せる金丸の喩を説けるが如し。不生の法は即ち是れ無爲無作の法なるが故に、亦以て菩提を得べからず。生、不生の二俱に化あるが故なり。非生非不生は菩提を得るや。答へて言はく、「不。一問うて曰はく、「若し生、不生二つ俱に過有り、非生非不生復應ぜずして過有らば、何を以てか得ずと言ふや。」答へて曰はく、「若し非生、非不生は是れ好なり、是れ醜なりと分別すれば、相を取つて著を生ずるが故なり。故に過有りと言ふ。若し能く著せざれば、則ち是れ菩提の道なり。」須菩提問ふ、「若し四句を以て得ざれば云何が道を得るや。」佛答へたまはく、「道を以てせず、非道を以てせざれば、則ち菩提を得。」

【菩提は等】下菩提を得るの義に於て論ず。即ち菩提即道、道即菩提を説くなり。

何を以ての故に、菩提は即ち是れ道、道は即ち是れ菩提なればなり。菩提を諸法の實相と名くるは、是れ諸佛所得の究竟實相にして變異有ること無く、一切の法菩提の中に入つて、皆寂滅の相なること、一切の水の大海の中に入れば、同じく一味と爲るが如し。是故に佛は、菩提の性は即ち是れ道の性と説きたまへり。若し菩提の性と道の性と異らば、名けて菩提を、無戲論寂滅の相と爲さず。是故に菩提即ち是れ道、道即ち是れ菩提と説くなり。復次に、是二法異らば、道を行するも菩提に到るべからず。諸法の因果は不一不異なるが故なり。須菩提復問ふ、『若し爾らば、菩薩、道を行すれば、便ち是れ佛なるべし。所以は何ん。道は即ち是れ菩提なればなり。又佛は是れ菩薩なるべし、何を以ての故に、菩提は即ち是れ道なればなり。今何を以てか差別有り、佛に十力等、三十二相、八十隨形好有りと説くや。』須菩提、新學の菩薩の爲の故に、分別して佛を難じて、菩薩は即ち是れ佛なるべしと。佛、反問を以て答へたまはく、『佛は菩提を得るや不や。』答へて言さく、『不。』何を以ての故に、菩提は佛を離れず、佛は菩提を離れず、二法和合するが故に、是れ佛なり、是れ菩提なり。是故に難じて、菩薩は即ち是れ佛なりと言ふべからず。』此は總相の答なり。問うて曰はく、『佛は是れ衆生、菩提は是れ法なり、云何が佛は即ち是れ菩提なりと言ふや。』答へて曰はく、『先づ三十二相有りて身を莊嚴し、六波羅蜜等の功德ありて心を莊嚴するに、而も名けて佛と爲さず。菩提を得るが故に、之を名けて佛と爲す。是故に、佛と菩提と異らずと言ふ。微妙清淨なる五衆和合を假に名けて、佛法と爲す、即ち是れ

五衆なり。五衆は假名を離れず、菩提は即ち是れ五衆の實相なり。一切の法は皆菩提に入るが故に、是故に佛は即ち是れ菩提、菩提は即ち是れ佛なり。但凡夫の心中に異り有りと言ふ分別するのみ。問うて曰はく、「汝先に論議の中に説いて、菩提と道とは不一不異なりと言へり。經の中に何を以てか、道は即ち是れ菩提、菩提は即ち是れ道、佛は即ち是れ菩提、菩提は即ち是れ佛なりと説くや。」答へて曰はく、「一異は俱に不實なりと雖も、而も多く一を用ふるが故に、此中に菩提即ち是れ道、道即ち是れ菩提と説くに咎無し。常、無常は是二邊の如く、常は多く煩惱を生ずるが故に用ひず、無常は能く顛倒を破するが故に多く用ひ、菩提に成辦すれば亦無常をも捨つ。此中亦是の如く、若し種種の別異の法を觀するを以ての故に、多く苦心を生ず。若し諸法は一相、若は無常、苦、空等と觀すれば、是時は煩惱生ぜず、苦心少なきが故なり。是故に多く是一を用ふ。實義の中に於ては一も亦用ひず。若し一に著すれば、即ち復是れ患なり。復次に、別異は無なるが故に、一も亦不可得なり。相待の法なるが故に俱不著の心を以て一相を取らず、故に説くに咎無し。一は實ならざるが故に、菩提即ち是れ佛とすることを得ず。復次に、今佛更に答へたまふに、須菩提自ら因縁を説く。菩提は寂滅の相なりと雖も、而も菩薩は能く六波羅蜜等の諸の功德を具足し、金剛三昧に住し、一念相應の慧を以て、阿耨多羅三藐三菩提を得。爾時、一切法の中に於て自在なるを名けて佛となすを得。菩薩は道及び菩提の異らざることを知るに雖も、未だ諸の功德を具足せざるが故に名けて佛と爲さず。又佛は諸事畢竟し、願行

【三】上來成就衆生の義を説き、竟り下淨佛國土の義を明すについていふ先づ淨佛國土の意

【佛答へたまはく】淨佛國土を行ぜんために菩薩は先づ如發意已來塵の三業を淨むといふを釋す。

満足するが故に名けて菩薩と爲さず。得るものは是れ佛法なり、是れ菩提なり。菩提を求むるものは是れ菩薩なり。須菩提は佛より菩提の相、道の相を聞き衆生を成就し已れり。今は淨佛國土の事を問ふは、諸の阿羅漢、辟支佛は力有つて佛國を淨むる事を知ると無し、是故に問ふなり。問うて曰はく、『何等か是れ佛土を淨むるや。』答へて曰はく、『佛土とは、百億の日月、百億の須彌山、百億の四天王等の諸天、是を三千大千世界と云く。是の如き等の無量無邊の三千大千世界を名けて一佛土となし、佛此中に於て佛事を施作す。佛常に晝三時、夜三時に、佛眼を以て、遍く衆生を觀じたまはく、『誰か善根を種うべき、誰か善根を成就し應に增長すべき、誰か善根を成就して應に度を得べき』と。是を見已つて、神通力を以て、所見に隨つて衆生を教化す。心は外縁に隨逐するも、隨意の事を得れば、則ち煩惱を生ぜず。不淨無常等の因縁を得れば、則ち貪欲等の煩惱を生ぜず。若し無所有、空の因縁を得れば、則ち癡等の諸の煩惱を生ぜず。是故に諸の菩薩は、佛土を莊嚴し、衆生をして、度し易からしめんが爲の故に、國土の中に乏少する所無し。心無我の故に則ち憍貪、瞋恚等の煩惱を生ぜず。佛國土は一切の樹木有りて、常に諸法實相の音聲を出す。謂ゆる、無生、無滅、無起、無作等なり。衆生は但是妙音を聞いて異聲を聞かず、衆生利根なる故に便ち諸法實相を得。是の如き等の佛土を莊嚴するを名けて、佛土を淨むとなす。阿彌陀等の諸經の中に説くが如し。佛答へたまはく、『菩薩は初發意より來自ら盡の身口意業を淨め、亦他人をして盡の身口意業を淨めしむ。』問うて曰はく、『若し



菩薩、佛土を淨むるに、是菩薩は無生法忍を得、神通波羅蜜に住し、然る後能く佛土を淨めば、今何を以てか初發意より來、曩の身口意業を淨むと言ふや。」答へて曰はく、「三業の清淨なるは、但佛土を淨めんが爲のみに非ず、一切の菩薩道は皆此三業を淨む。初に身口意業を淨め、後佛土を淨めんが爲に、自身を淨め亦他人を淨む。何を以ての故に、但一人のみ國土の中に生ずる者に非ず、皆共に因縁と作り、内法と外法と因縁と作り、若は善、若は不善なり。惡口の業多きが故に、地に荆棘を生じ、詭証して心を曲ぐるが故に、地は則ち高下不平なり。慳貪多きが故に則ち水旱れ調はずして、地に飢饉を生ず。上の諸惡を作さざるが故に、地は則ち平坦にして、多珍寶を出し、觸動の出づる時の如く、人皆十善を行すが故に地に珍寶多し。問うて曰はく、「若し布施等の諸の善法、佛土を淨むるの果報を得ば、何を以てか但三業を淨むるを説くぞ。」答へて曰はく、「善惡の諸法は、是れ苦業の因縁なりと知ると雖も、一切の心心數法の中の如くんば、得道の時は智慧を大となし、攝心の中には定を大と爲し、作業の時は思を大と爲す。是思業を得じつて身口意の業、布施、禪定等を起すに思を以て首と爲す。譬へば衣を縫ふに、針を以て導と爲すが如し。後世の果報を受くる時は業力を大と爲す。是故に三業を説くに、則ち一切の善法を攝す。意業の中には、盡く一切の心心數法を攝し、身口は則ち一切の色法を攝入す、身行三種の福德具足すれば則ち國土清淨なり。内法淨きが故に、外法も亦淨し。譬へば、面淨きが故に、鏡中の像も亦淨きが如し。毗摩羅詰經の中に、不殺生の故に、人皆長壽な

【佛次第に等】次に次第に麤業の相を明すを説く。

ること、是の如し等と説くが如し。問うて曰はく、「身口意の麤業は是事知り易し。須菩提は何を以ての故に問へるや。」答へて曰はく、「麤細不定の故に問ふなり。求道の人の中には、布施に是れ麤善なるも、白衣に於ては細と爲すが如し。小乘の中には不善業を麤と爲し、善業を細と爲すも、摩訶衍の中には、取善の法相、乃至涅槃、皆名けて麤と爲すが如く、麤細不定なるを以ての故に問ふなり。佛次第の爲に麤業の相を説きたまはく、「謂ゆる壽命乃至邪見、是三種の身業、四種の口業、三種の意業を、皆名けて麤となす」と。復次に、菩薩は六波羅蜜の法を破する慳貪等を、皆名けて麤となす。問うて曰はく、「先に十不善道を説き已つて慳貪等を攝す、何を以てか復別説するや。」答へて曰はく、「是六法は十不善道に入らず、十不善道は皆是れ衆生を憐す法なり。是六法は、但衆生を憐すと爲さず、憐心の如きは、但自ら財を惜んで衆生を憐さざるなり。貪心に二種有り、一には但他の財を貪つて、未だ衆生を憐さず。二には貪心轉じて盛にして求めて得ざれば則ち毀害せんと欲す、是を業道と名く、能く業を起すを以ての故なり。瞋心も亦是の如し。小なるものは業道と名けず、其能く惡處に趣くを以ての故に道と爲す。是故に別して六法を説くに咎無し。問うて曰はく、「六波羅蜜の中に已に戒を説けり。今何を以てか復戒不淨を説くや。」答へて曰はく、「破戒の法は是れ殺生等の麤業、戒不淨は是れ微細の罪にして衆生を憐さず、飲酒等を十不善道に入れざるが如し。復次に、五業戒を破するを名けて破戒と爲す。所受の戒を破せず、常に三毒の爲に覆はれて、心に戒を憶念せず、天福邪見に廻向して戒

## 大智度論卷第九十二

を持す、是の如き等を名けて戒不淨となす。復次に、若し菩薩、心に四念處等の三十七品  
 三解脱門を遠離すれば、是を麤業と名く。所以は何ん。此中、心は皆實法を觀じ、涅槃に  
 隨ひ、世間に隨はず。若し四念處等の法を出づれば、心則ち散亂す、譬へば蛇の行くに、  
 本性は曲を好むも、若し竹筍に入るれば則ち直けれども、筍を出づれば還曲るが如し。復  
 次に、若し菩薩、須陀洹果の證を食れば、是を麤となす。人、佛の須陀洹果は、三惡道に  
 墮せず、無量の苦を盡すこと、五十由旬の池水の如く、餘に在る者は、一滴二滴の如しと  
 説くを聞けば、則ち貪心を生ずるが如し。其心牢固ならざるを以て、本より作佛を求むる  
 に衆生の爲にす。今自身の爲に證を取らんと欲す、是を佛を欺くと爲し、亦衆生に負くと  
 なす、是故に麤と名く。譬へば、人の客を請じて、飲食を設けん、欲して、竟に與へざれ  
 ば、是れ則ち妄語して、客に負くが如し。菩薩も亦是の如く、初發心の時、我當に作佛し  
 て、一切衆生を度すべしとの願を作して、須陀洹を食れば、是れ則ち一切衆生に負くな  
 り。須陀洹果を食るが如く、乃至辟支佛道を食るも亦是の如し。

# 大智度論釋淨佛國土品第八十一之餘

卷第九十三

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

〔釋〕復次に、須菩提、菩薩の色相、受想行識相、眼相、耳鼻舌身意相、色聲香味觸法相、男相、女相、欲界相、色界相、無色界相、善法相、不善法相、有爲法相、無爲法相を取る、是を菩薩の纏業と名く。菩薩摩訶薩は、皆是の如き纏業の相を遠離し、自ら布施し、亦他人をして布施せしめ、食を須するには食を與へ、衣を須するには衣を與へ、乃至種種の資生の須ゆる所は盡く之を給與し、亦他人をして種種に布施せしむ。是福德を持つて、一切衆生と之を共にす、淨佛國土に廻向するが故なり。持戒、忍辱、精進、禪定、智慧も亦是の如し。是菩薩摩訶薩は、或は三千大千界の國土の中に滿つる珍寶を以て、三尊に施與し、是願を作して言はく、「我善根の因縁を以ての故に、我國土をして皆七寶を以て成ぜしめん」と。復次に、須菩提、菩薩摩訶薩を天の伎樂を以て、佛及び佛塔を願ひ、是願を作して言はく、「是善根の因縁を以ての故に、我國土の中に常に天樂を聞かん」と。復次に、須菩提、菩薩摩訶薩は、三千大千の國土の中に滿つる天香を以て、諸佛及び塔を供養し、是願を作して言はく、「是善根の因縁を以ての故に、我國土の中に常に天香有らしめん」

と。復次に、須菩提、菩薩摩訶薩は百味の食を以て、佛及び僧に施し、是願を作して言はく、「是善根の因縁を以ての故に、我國土の中、衆生をして、佛及び僧に施し、是願を作して言はく、「復次に、須菩提、菩薩摩訶薩は、天香の細滑を以て、佛及び僧に施し、是願を作して言はく、「是善根の因縁を以ての故に、我國土の中の一切の衆生をして、天香の細滑を受けしめん」と。復次に、須菩提、菩薩摩訶薩は、意に隨ふところの五欲を以て、佛及び僧、並びに一切衆生に施し、是願を作して言はく、「是善根の因縁を以ての故に、我國土の中の弟子及び一切衆生をして、皆、意に隨ふところの五欲を得しめん」と。是菩薩は、意に隨ふところの五欲を以て、一切衆生と共に、淨佛國土に廻向し、是願を作して言はく、「我佛を得るの時、是國土の中に天の五欲の心に應じて至るが如くせん」と。復次に、須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、是願を作して言はく、「我當に自ら初禪に入り、亦一切衆生をして初禪に入らしめん。第二、第三、第四禪、慈悲喜捨心、乃至三十七助道法も、亦是の如し。我阿耨多羅三藐三菩提を得る時、一切衆生をして、四禪を遠離せず、乃至三十七品助道法を遠離せざらしめん」と。是の如く、須菩提、菩薩摩訶薩は能く佛國土を淨む。是菩薩は爾所の時に隨つて菩薩道を行じ、是諸願を満足す。是菩薩は自ら一切の善法を成就し、亦一切衆生の善法をも成就せしむ。是菩薩は身を受くること端正にして、化するところの衆生も亦端正なることを得、所以は何ん、福德の因縁厚きが故なり。須菩提、菩薩摩訶薩は應に是の如く佛國土を淨め、是國土の中に、乃至三惡道の名無く、亦邪見、

三毒、二乘、聲聞、辟支佛の名無く、耳に無常、苦、空の聲有るを聞かず、亦我の所有無  
 く、乃至諸の結使煩惱の名も無く、亦諸果を分別するの名も無く、風は七寶の樹を吹き、  
 度すべき所に隨つて音聲を出す。謂ゆる、空、無相、無作、諸法實相の音の如し。有佛無  
 佛、一切法一切法相空、空の中に相有ること無く、無相の中には則ち作出無し。是の如き  
 の法音あり、若は晝、若は夜、若は坐、若は臥、若は立、若は行、常に此法を聞く。是菩薩  
 の阿耨多羅三藐三菩提を得る時、十方國土の中の諸佛は讚歎したまふ。衆生は是佛名を  
 聞いて、必ず阿耨多羅三藐三菩提に至る。是菩薩は阿耨多羅三藐三菩提を得る時に設法す。  
 衆生の聞くもの信ぜずして疑を生じ、法を是れ非法なりと言ふもの有ること無し。何を  
 以ての故に、諸法實相の中には、皆是れ法にして非法有ること無ければなり。諸有の薄徳  
 の人は、諸佛及び弟子の中に於て、善根を種えず、善知識に隨はず、我見の中に没在し、  
 乃至一切の種種の見の中に没在し、淺見の若は斷、若は常に墮在す。是の如きの人は、邪  
 見を以ての故に、非佛を佛と言ひ、佛を非佛と言ふ。非法を法と言ひ、法を非法と言ふ。  
 是の如きの人は、法を破るが故に、身壞し、命終つて惡道地獄の中に墮す。諸佛の阿耨多  
 羅三藐三菩提を得る時、此衆生の五道を往來するを見て、邪聚を離れ、正定聚の中に立  
 たしめて、更に惡道に墮せざらしむ。是の如く、須菩提、菩薩薩訶薩の淨佛國土の中の衆  
 生は、雜穢の心、若は世間法、若は出世間法、若は有漏、若は無漏、若は有爲、若は無爲  
 なり、乃至是國土の中の衆生は、畢竟じて阿耨多羅三藐三菩提に至る。須菩提、是を菩薩

【一】前に續いて佛國土品を釋する中、次に復種種の鹿業を釋す。

【二】次に上述の如き各種の鹿業を遠離して大誓莊嚴をなして佛國土を淨むることを明す先づ鹿業を遠離して六度を以て、いふを釋す。

摩訶薩の佛國土を淨むとなす」と。

釋して曰はく、『復業有り、諸法畢竟空の中に於て、相を取り、著心を生ず、謂ゆる色相、受想行識相、眼相、乃至意相、色相、乃至法相、男相、女相、三界の善不善、有爲無爲の相等を取るなり。』問うて曰はく、『男女相は是れ虚妄不實なるべし、餘の色等の善不善の法は、若し相を取らずんば、云何が能く色等を厭ひ、善法を成、就せんや。』答へて曰はく、『佛法の中に二種の空有り、一には衆生空、二には法空なり。衆生空を以て衆生相を破す。謂ゆる男女等の相なり。法空を以て色等の法の中の虚妄の相を破す、一切の法空を破する中に説くが如し。能く色等の善法を觀るに、幻の如く、化の如くにして、定實の相を取らず。厭心を得れば、則ち戲論常無常等を捨つ、是を名けて取相と爲さず。又色等及び善法は、皆和合の性なり、空を行するが故に、諸の煩惱を生ぜず。問うて曰はく、『一切の有爲法は假名和合の故に取るべからず。無爲法は是れ眞實の法なり。謂ゆる如、法性、實際なり、何を以てか取らざるや。』答へて曰はく、『不取の相は是れ無爲法にして、無相なるを以て、名けて無爲法門と爲す。』

若し取相便ち是れ有爲ならば、是の如き等の一切の虚誑の取相は不實にして、麤の身口意業を遠離す。菩薩は淨佛土を行せんと欲し、是の如き等の麤の身口意業を遠離して、自ら六波羅蜜を行じ、亦他人をして行ぜしむ。清淨の因縁を共にするが故に、則ち佛土清淨なり。上は總相の說、下は別相の說なり。是菩薩は三千大千世界に滿つる七寶を以て、佛

及び僧に施し、是願を作さん、「我是布施の因縁を以て、我國土をして皆七寶莊嚴たらしめん」と。問うて曰はく、「若し三千大千世界に滿つる珍寶は、何れの處より得るや、又諸佛賢聖は少欲知足なり、誰か是を受くる者ぞ。若し凡人は厭足無ければ、何ぞ能く三千世界の物を受けんや。」答へて曰はく、「是菩薩は是れ法性生身なり。具足神通波羅蜜の中に住して、十方の佛に供養せんが爲の故に、三千世界の珍寶を以て供養するなり。又其寶物は神通力の所作なれば、輕細にして妨げ無きこと、第三禪の遍淨天の六十人、一針頭に坐して法を聽くに相妨礙せざるが如し。何に況んや大菩薩の、深く神通に入りて作る所の寶物をや。或は菩薩有り、身を變ずること須彌山の如く、十方の佛前に遍じて以て燈炷と爲り、佛若は佛の塔廟を供養し、而も願を作して言はく、「我國土をして常に光明有らしめ、日月の燈燭を須ひず」と。或は菩薩有り、諸の華香、幡蓋、瓔珞を雨らして以て供養を爲し、復是願を作さく、「我國土の衆生をして端正にして、華の如く身相嚴淨にして、醜陋有ること無からしめん」と。是の如き等の種種の好色の因縁あり。復菩薩有り、天の伎樂を以て、佛若は佛の塔廟を娛樂す。是菩薩は或時は、神通力を以ての故に、天の伎樂を作し、或は天王轉輪聖王の伎樂を作し、或は阿修羅神龍王等と作りて、天の伎樂もて供養し、我國土の中に常に好音を聞かんことを願ふ。問うて曰はく、「諸佛賢聖は是れ離欲の人なり、則ち音樂歌舞を須ひず、何を以てか伎樂を供養するや。答へて曰はく、「諸佛は一切法の中に於て、心に著するところ無く、世間法に於て盡く須ふる所無しと雖も、



諸佛は衆生を憐愍するが故に世に出で、應に、供養する者に隨ひ、願に隨つて福を得しむべきが故に受く。華香を以て供養するが如きは、亦佛の須ふる所に非ず、佛身は常に妙香有りて、諸天の及ばざる所なるも、衆生を利益せんが爲の故に受く。是菩薩は、佛土を淨めんと欲するが故に、好き音聲を求め、國土の中の衆生をして、好き音聲を聞いて、其心を柔軟ならしめんと欲す。心柔軟なるが故に、化を受くべきこと易し。是故に、音聲の因縁を以て而も佛を供養す。或は菩薩有り、三千大千世界に滿つる香もて諸佛若は塔に供養す。根香、葉香、葉香、末香、若は天香、若は變化香、若は菩薩果報生の香なり。是願を作さく、「我國土の中は常に好香有つて、作者有ること無からしめん」と。或は菩薩有り、百味を以て諸佛及び僧を供養す。有人の言はく、「能く百種を以て供養するを、是を百味と名く」と。有人の言はく、「餅種の數五百にして其味百有り、是を百味と名く」と。有人の言はく、「百種の藥草菓果を以て、歡喜丸を作る、是を百味と名く」と。有人の言はく、「飲食菓餅に總て百味有り」と。有人の言はく、「飲食に種種備足するが故に、稱して百味となす」と。人の飲食の故に百味なり。天の飲食は則ち百千種味なり。菩薩の福德生の果報の食、及び神通力の變化の食には則ち無量味有りて、能く人心を轉じて離欲清淨ならしむ。是四種の食もて、菩薩は因縁に隨つて、佛及び僧を供養す。是故に國土の中に、自然に百味の飲食有り。或は菩薩有り、天の塗香を以てす。天竺は國熱く、又身臭きを以ての故に、香を以て身に塗り、諸佛及び僧を供養す。此因縁を以ての故に、我國土の衆生

をして、天の細滑を受けしむるなり。問うて曰はく、『沙彌戒乃至一日戒を受くるに尚香を以て身に塗らず、云何が香を以て、佛及び僧を供養するや。』答へて曰はく、『是菩薩は、身の貴ぶ所の物を以て、所須に隨つて、時に用ひて以て供養す。或は以て地を塗り、壁及び行坐の處に塗るなり。又隨意の五欲を以て、諸佛、及び僧、及び餘の衆生に供養す。是菩薩は好き車馬、妻妾、伎樂、旛蓋、金銀、衣服、珍寶を以て、出家の人の受けざる所は、則ち諸の衆生に施し、願を作して言はく、『我國士の衆生をして、常に隨意に五欲を得しめん』と。問うて曰はく、『此五欲を佛は、火の如く、坑の如く、瘡の如く、獄の如く、怨の如く、賊の如くにして、能く人の善根を奪ふと説きたまへり、菩薩は何を以てか衆生をして五欲を得しめんと願するや。又佛は、「弟子、應に納衣にして乞食し、林樹の下に坐すべし」と説きたまへり。菩薩は、何を以てか衆生の爲に五欲を得んことを求むるや。』答へて曰はく、『天上人中の五欲は是れ福德の果報なり。若は今世、若は後世、貧窮薄福の者は、自ら活すること能はされば、則ち劫盜を行ひ、或は物の主と爲りて害せられ、或は賊と爲りて他を殺し、或は詰問せらるるも妄言して作さずといふ。是の如く、次第に十不善を爲すは、皆貧窮に由るが故に作すなり。若し人、五欲を具足すれば、則ち欲するところ意に隨ひ、則ち十不善を行せず、菩薩の國土は、衆生豐樂なれば、自ら恣にして、乏少する所無く。則ち衆惡無し。但愛慢等の輒結使有るも、若し佛の所説を聞き、或は弟子の所説を聞けば、心柔軟なるを以ての故に、法を聞いて道を得べきこと易し。葉心多し

と雖も、利根の故に、無常、苦、空等を聞けば即便ち道を得。譬へば垢膩の衣は則ち灰泥を以て之を淹ふも、宿を経て水を以て之を洗へば、一時に都て去るが如し。菩薩は衆生をして、著せしめんと欲せざるが故に五欲を以て施す。但一時に捨てしめんと欲するが故に、之を與ふるのみ。汝が先に説けるが如く、佛は弟子は納衣乞食を教へたまへり。宿罪の因縁によりて、生れて惡世に在り、染著の心多し。若し好衣美食を得れば著心則ち深し。又好衣食を求めんとするが故に行動を防廢するなり。是菩薩は佛國土を淨むるに、衆生無量なれば福德成就し、五欲一等の故に復貴著せず、亦更に求めざるが故に防ぐ所無し。又復若し行者五欲を離れ、苦行を修すれば、則ち瞋恚を増長し、又復五欲を憶念すれば、則ち煩惱を生ず。爾時、則ち向ふ所無し。是故に佛の言はく、「苦樂を捨て、智慧を用ひ、中道に處せよ」と。是故に佛國土を淨め、五欲の施に妨無し。問うて曰はく、「若し爾らば、毘尼の中に、何を以てか、一比丘の「我佛法の義を知れば、五欲を受くるに道を妨げず」と言へるに、是比丘は呵すること乃ち三たびに至り、止めずして推出せしや。」答へて曰はく、「佛法に二種有り、小乗と大乘となり。小乗の中には薄福の人は三毒偏に多し。婆差經の中に佛の説きたまふが如し、「我白衣の弟子は一に非ず、二に非ず、乃至五百人を出づ。赤梅樹を受けて身に著り、及び好香華を受けて妻子と共に臥し、奴婢をして三結を斷じて須陀洹を得、三結を盡し、三毒を薄くして斯陀含を得しむ。是阿梨陀比丘は、是事を聞いて即ち言はく、「五欲を受くと雖も而も道を妨げず。是事を知らず、佛は誰が爲にか

説くや」と。佛は白衣の爲に説き、此比丘は、出家法の中に持著して説くなり。是須陀洹、  
 斯陀含等は是言を作さず、「我形壽を盡すまで欲を犯さず、有餘の三毒を以ての故に時時  
 に道を忘れて而も姪心を發す。出家の人は、僧の中に於て、口に自ら誓つて言はく、「我壽  
 形を盡すまで姪欲を犯さず」と。佛の言はく、「若し出家の人、欲を犯せば則ち棄つ」と。  
 是比丘は自ら誓て而も犯す、是れ一罪なり。佛の所制を知つて、而も故に違犯す、是れ  
 二罪なり。是比丘は白衣の得道を見るが故に、而も自身を以て彼と同じうす、是故に罪に  
 墮す」と。佛國土を淨むるに二種の衆生有り、若し出家、若し在家なり。在家は五欲を受  
 くと雖も罪無く、亦妨ぐる所無し。兜率陀の諸天、及び鬱單曰の人の如く、五欲を受くと  
 雖も重罪を起さず。出家の衆生は佛に聴くところに隨へば、出家の五欲は亦過咎無し。小  
 乘法の中に、阿梨訶比丘の爲に説く、薄福重罪の人は心多く悔ゆるが故なり。佛土を淨む  
 とは、世世に六波羅蜜、三解脱門を習行し、五欲を得と雖も亦染著せず。經の中に説くが  
 如し、「謂ゆる菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行して是念を作さく、「我當に自ら初禪に入るべ  
 く、亦當に衆生を教化して初禪に入らしむべし。四禪、四無量心、乃至三十七品亦是の如  
 し。是菩薩は是願を作さく、「我佛と作る時、盡く四禪乃至三十七品を行す」と。是の  
 如きの福德有るが故に、衆生五欲を受くと雖も妨を爲すこと能はず。是菩薩は無量阿僧  
 祇の願を作し、爾所の時に隨つて道を行じ、盡く是願を具足す。是菩薩は一切の善法皆  
 成就し、及び成就せる所の衆生は、一切の善法成就するが故に、身端正なることを得て、

【三】次に淨佛國土の相を釋す。

見る者もの厭いとふこと無く、亦衆生またしゆじやうを成就じやうじゆして、端正たんしやうなることを得えしむ。須菩提すぼだい、菩薩ぼさつは應まさに是かくの如ごとくにして佛土ぶつどを淨きよむべし。

復次に、佛土ぶつどを淨きよむれば、乃至三惡の名なすら無し、何なにに況いはんや三惡道さんあくだうの有あらんや。問うて曰はく、『諸佛しよぶつは大慈悲だいじひ心しんを以て、苦惱くたうの衆生しゆじやうの爲ための故ゆゑに出世しゆつせす。若し三惡道さんあくだう無くんば何ぞ憐愍れんみんする所ところ有あらんや。』答へて曰はく、『佛ぶつの出いでたまへるは、衆生しゆじやうを度あせんが爲ための故ゆゑなり。三惡道さんあくだうの衆生しゆじやうは度あすべからず、但善根ぜんこんを種うゑしむべきのみ。是故ゆゑに佛ぶつを天人てんにん師しと名なくるなり。若し天人てんにん無くして、但三惡道さんあくだうのみあらば、應まさに難有なんるべく、應まさに是問こつとひを作なすべきなり。』問うて曰はく、『佛ぶつは衆生しゆじやうを憐愍れんみんして佛國土ぶつこくどの中なかを淨きよむ、何を以てか三惡道さんあくだうの衆生しゆじやう無なきや。』答へて曰はく、『一切衆生いっさいしゆじやうを憐愍れんみんすること平等びやうどうにして異ことり有あること無く、此中このなかに清淨しやうじやうの業因緣ごふいんごんを説とけば、是國土このこくどの中に三惡道さんあくだう無なきなり。又佛またぶつには但一國土ただいっこくどのみに非あらず、乃すなはち十方恆河沙じつぱうげんがさの國土こくど有あり、佛ぶつに清淨しやうじやう國土こくど有あり、雜國土ざつこくど有あり、難國土なんこくどの中に則すなはち具ぐに五道ごだう有あり。佛國土ぶつこくどを淨きよむるに或あるは人天にんてんの別異べつい有あり、或あるは人天にんてんの別異べつい有あること無し。過去天王こくわてん佛ぶつの國土こくど中の如ごときも、唯佛世尊たひぶつせそんのみを以て法王ほふわうと爲なす。是故ゆゑに名なけて天王佛てんわうぶつと爲なし、復また國土こくど有あるも三毒邪見さんどくじやけん無し。問うて曰はく、『諸佛しよぶつは但衆生ただしゆじやうの煩惱ぼんノウを除のぞかんが爲ための故ゆゑに出世しゆつせす。邪見三毒じやけんさんどくは即すなはち是れ煩惱ぼんノウなり。若し煩惱ぼんノウ無なくんば、出いでて何なにの爲ためす所ところかあらん。』答へて曰はく、『有人あるひとの言いはく、「是中このなかには、大福徳だふくとくの因緣いんげんの故ゆゑに、邪見三毒じやけんさんどく發はらず、故ゆゑに無しと言いふ」と。復次に、有人あるひとの言いはく、「是中このなかの諸しよの菩薩ぼさつは、皆無生法忍みなむしやうにんを得え、常つねに六波羅蜜ろくはらみつ

等の諸の功德を修し、常に十方に遊んで衆生を度脱し、諸佛の修習する所の諸佛の三昧に於て、無數の聲聞、辟支佛を教化するに勝り、亦阿耨跋致の菩薩、衆生を成就する菩薩、淨佛土の菩薩を教化するに勝り、佛道に近づくが爲の故に利益轉大なり。是國土には二乘の名なしとは、問うて曰はく、『餘佛に三乘の教化有り、豈獨り劣らんや。』答へて曰はく、『佛は五濁惡世に出で、一道に於て分つて三乘と爲すなり。問うて曰はく、『若し爾らば阿彌陀佛、阿閼佛等の五濁の世に生ぜず、何を以てか三乗有るや。』答へて曰はく、『諸佛は初發心の時、諸佛の三乘を以て衆生を度するを見て、自ら願を發して言はく、『我亦當に三乘を以て衆生を度すべし』と。亦無常、苦、空、無我の名無しとは、衆生の深く常樂等の顛倒に著するを以ての故に、爲に無常等の苦の法を説くも、是中には、常樂等の倒無きが故に無常苦を須ひず、病無ければ則ち藥を須ひざるが如し。亦我の所有無く、乃至諸の煩惱結使無きも亦是の如し。二乘無きが故に、亦須陀洹等の諸果無く、但一向に諸法實相に著す。先に、無生法忍を得る者は、諸の三昧陀羅尼門を得、轉復、諸地等の功德を増益す。風七寶の樹を吹き、度すべき所に隨つて聲を出すとは、是菩薩は衆生をして、法を聞き易からしめんと欲するが故に、七寶の樹、法の音聲を出すなり。寶樹は遍く國土に滿つるが故に、衆生は生れながらにして便ち法を聞きて餘心を生ぜず、但法心を生ずるのみなり。問うて曰はく、『諸佛は無量不思議の神通力有り、何を以てか變じて無量の身を化作し、説法して衆生を度せざるや。何ぞ樹木の音聲を須ふるや。』答へて曰はく、『衆生

は甚だ多し。若し佛處處に身を現する時は衆生信ぜず、謂つて幻化と爲して心に敬重せず。有衆生は、人より法を聞いて心に開悟せず、若し、畜生より法を聞けば則ち信受す。本生經に説くが如し、「菩薩は畜生の身を受けて人の爲に法を説くに、人希有なるを以ての故に信受せざる無し」と。又謂はく、「畜生は心直くして誑はさざるが故に一と。有人の謂はく、「畜生は是れ有情の物にして皆欺誑有り、樹木は無心にして而も音聲有れば則ち皆信受す」と。謂ゆる空、無相、無作、有佛、無佛、一切法常空なり。空なるが故に無相、無相なるが故に無作無起なり。是の如き等の法は晝夜に常に出づ。餘の國土には神通力、口力を以て種種に變化するも、此中には、常に自然の音聲あつて佛國土を淨め、佛は常に諸佛の爲に讚せられて、大に功德を作すが故に、能く是の如きの淨國を得。若し淨國の佛名を聞けば則ち畢定して作佛するなり。問うて曰はく、「餘佛は種種に勤苦して説法するも衆生尙道を得ず、何を以てか俱佛の名を聞くのみにして便に道を得るや。」答へて曰はく、「衆生の佛、種種に法を説くに、衆生、或は道を得、或は善根を得て、説を空しうせず。若し是佛の名を聞けば畢に阿耨致致に至る。今得とは言はず。問うて曰はく、「一切の佛は若し人好心もて名を聞けば、皆當に佛に至るべし。法華經の中に説くが如くんば、福德の若は大なるも、若は小なるも、皆當に作佛すべし。何を以てか獨り淨國の佛のみを説くや。」答へて曰はく、「人は餘佛の名字を聞くも、受生して人と異なること無く、但一切智有つて道を得るを異れりと爲すと謂ひ、心に敬重せざるが故に、善根を種うと雖

も、亦深きこと能はず。是中には、是れ法性身の佛、身に無量無邊の光明ありて、説法の音聲、遍く十方國土に滿ち、國中の衆生は皆是れ佛道に近づく者、無量阿僧祇由旬なり。衆中の説法は、無量阿僧祇の月日の光明に勝る。常に身より佛を出し、衆生をして是を見しむれば、則ち見ることを得、若し、聽かざる時は則ち見す。是佛は一一の毛孔の邊より、常に無量無邊阿僧祇の佛を出し、一一の諸佛は、等うして異なること無く、化佛の邊に於て展轉して復出す。度すべき衆生に隨つて、佛を見るに優劣あり、根本の眞佛には、大小の異りを分別すること有ること無し。是の如き等をば若は見、若は名を聞き、若は是の如き功德を聞いて深信敬重するが故に、種うる所の善根、云何が畢竟して作佛せざることあらんや。復次に、是佛の法を説く時、疑有る者有ること無く、乃至一人の是法を非となすと云ふこと無し。佛の口づから説きたまふところは悉く皆是れ法なり。問うて曰はく、『人は釋迦文尼佛より法を聞いて、疑を生ずる者多し。』答へて曰はく、『佛は此中に自ら因縁を説きたまはく、人有り、薄福にして善根を種えず、善知識を得ざるが故に、疑を生じ、我見、邊見、邪見等に著す。諸の煩惱覆ふが故に、佛に非ざるを是れ佛なりと言ひ、佛を是れ佛に非すと云ひ、深く善根を種えず、善師に順はず、三毒邪見一時に發起して依る所無し。意に任せて自ら恣にするに隨ひ、若は邪見を見て、其意に順ふが故に、是を一切智と言ふ。諸佛の畢竟空と説きたまふを見て、其意に順はざれば便ち非佛なりと言ひ、法に非ざるを法なりと言ひ、法を非法と言ふ。是の如きの人は、諸佛の所に於て多



く疑を生ず。多く疑を生ずるが故に心に悔あり。是淨佛國の中には、是の如きの罪人  
 無きが故に疑を生ぜずと。佛の言はく、「是の如きの罪人は、諸法實相を破するが故に、  
 死して地獄惡道の中に墮つ。諸の菩薩は、阿耨多羅三藐三菩提を得て、諸の罪人の生  
 死の中に往來するを見、佛の神通力を以て衆生を拔出し、正定聚の中に住せしめ、三惡  
 道に墮せしめず、是を淨佛土と名く」と。是佛土の中には是の如き諸の過無く、具足せ  
 ざること無く、世間、出世間、有漏、無漏、有爲、無爲等の中に於て障礙有ること無し。  
 謂ゆる國土は七寶、衆生の身は端正にして、相好を莊嚴し、無量の光明あり、常に法音  
 を聞き、常に六波羅蜜乃至十八不共法を遠離せず。是中の衆生は皆畢竟して阿耨多羅三藐  
 三菩提に至る。問うて曰はく、「上に佛の名を聞けば畢竟して佛に至る、此には諸法に於  
 て疑無ければ必ず作佛を得ると何の差別有りや。」答へて曰はく、「此中の衆生は、常に佛  
 を見、常に法を聞いて深く善根を種ゑ、多く佛法を集むるが故に、疾かに作佛を得。名を  
 聞くものは、俱に畢竟して、而も小なりと雖も、是の如き等を名けて淨國土の相となすに  
 如かず。十地の中に、菩提樹を莊嚴すと説くが如し。

大智度論釋畢 定品第八十三

須菩提、佛に白して言さく、「世尊、是菩薩摩訶薩は、畢竟定と爲すや、不畢竟せずと

爲すや。』佛、須菩提に告げて言はく、『菩薩摩訶薩は、畢定にして不畢定に非ず。』何處にか畢定する。聲聞道の中とや爲ん、辟支佛道の中とや爲ん、佛道の中とや爲ん。』佛の言はく、『菩薩摩訶薩は、聲聞、辟支佛道の中に畢定するに非ず、是れ佛道の中に畢定す。』須菩提、佛に白して言さく、『世尊、初發意の菩薩の畢定とや爲ん、最後身の菩薩の畢定とや爲ん。』佛の言はく、『初發意の菩薩も亦畢定し、阿鞞跋致の菩薩も亦畢定し、最後身の菩薩も亦畢定す。』『世尊、畢定の菩薩は墮して惡道の中に生ずるや不や。』『不、須菩提、汝が意に於て云何。若は八人、若は須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛は惡道の中に生ずるや不や。』『不、世尊。』『是の如く、須菩提、菩薩摩訶薩は、初發意より已布施、持戒、忍辱、精進して禪定を行じ、智慧を修し、一切の不善業を斷するに、若は惡道に墮し、若は長壽夭、若は善法を修することを得ざる處に生じ、若は邊國に生じ、若は惡邪見家、無作見家に生ず。是中には佛の名無く、法の名無く、僧の名無く、是處有ること無し。須菩提、初發意の菩薩は、阿耨多羅三藐三菩提に於て、深心を以て十不善道を行せば、是處有ること無し。』『世尊、若し菩薩摩訶薩、是の如きの善根の功德の成就する有りて、佛の如く自ら木生を説き、不善の果報を受けば、是時、善根何の所にか在りと爲すや。』佛、須菩提に告げて言はく、『菩薩摩訶薩は、衆生を利益せんが爲の故に、隨つて身を受け、是身を以て衆生を利益す。須菩提、菩薩摩訶薩は、畜生と作る時、是方便力有り、若し怨賊の來つて殺害せんと欲せば、是無上の忍辱、無上の慈悲心を以て、身を捨

てて怨賊を惱さず。汝諸の聲聞、辟支佛は是力有ること無し。是を以ての故に、須菩提、當に知るべし、菩薩摩訶薩は、大慈悲心を具足せんと欲し、衆生を憐愍し、利益せんが爲の故に、畜生の身を受く。』須菩提、佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩は、何等の善根の中に住してか、是の如きの諸の身を受くるや。』佛、須菩提に告げて言はく、『菩薩摩訶薩は、初發意より乃ち道場に至るまで、其中間に於て、善根の具足せざる者有ること無く、具足し已つて、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。是を以ての故に、菩薩摩訶薩は、初發意より、應當に學して、一切の善根を具足すべし。善根を學び已つて、當に一切種智を得、當に一切煩惱の習を斷すべし。』須菩提、佛に白して言さく、『世尊、云何が菩薩摩訶薩は、是の如きの白淨無漏法を成就して、而も惡道畜生の中に生ずるや。』佛、須菩提に告げて言はく、『汝が意に於て云何。佛は白淨無漏法を成就するや不や。』須菩提言さく、『佛は一切の白淨無漏法を成就す。』須菩提、若し佛自ら畜生の身を化作して佛事を作し、衆生を度する時は、實に是れ畜生なりや不や。』須菩提言さく、『不。』佛の言はく、『菩薩摩訶薩も亦是の如く、白淨無漏法を成就し、衆生を度せんが爲の故に、畜生の身を受け、是身を用て衆生を教化す。』佛、須菩提に告げて言はく、『阿羅漢の如きは、變化身を作して、能く衆生をして歡喜せしむるや不や。』須菩提言さく、『能くす。』佛の言はく、『是の如く、是の如し。須菩提、菩薩摩訶薩は、是白淨無漏法を用て、度すべき衆生に隨つて身を受け、是身を以て衆生を利益するも、亦苦痛を受けず。須菩提、汝

【四】本品は菩薩の畢定究竟すべきことを明せるもの、先づ佛道の畢竟なるを釋す。

が意に於て云何、玄師の種種の形、若は象馬、牛羊、男女等を幻作し、以て衆人に示す。須菩提、是象馬、牛羊、男女等は實有りや不や。』須菩提言さく、『實ならざるなり。世尊。』佛の言はく、『是の如く、須菩提、菩薩摩訶薩は、白淨無漏法を成就して、種種の身を現作し、以て衆生に示すが故に、是身を以て一切を饒益するも、亦衆苦を受けざるなり。』須菩提、佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩の大力便力は聖無漏の智慧を得て、度すべき所の衆生の身に隨つて、種種の形を作し、以て衆生を度す。』

經 問うて曰はく、『上の阿鞞跋致品の中に、是の如きの相は、是れ阿鞞跋致、是の如きの相は阿鞞跋致に非ず、阿鞞跋致は即ち是れ畢定なりと説けり。須菩提は今何を以てか更に問へるや。』答へて曰はく、『是般若波羅密には種種の門有り、種種の道有り。阿鞞跋致は是れ一門の中に説く。今畢定を問ふは、異門を問へるなり。』復次に、佛心の中には、一切の衆生、一切の法皆畢定なり。人は智及ばざるを以ての故に、名けて不畢定となし、佛は無量阿僧祇劫の大功德を積むと雖も、必ず退いて小乘者と作ることを知り、亦微細の蠚蟲には未だ善心有らずと雖も、爾所の劫を過ぎて發心し、後當に作佛すべきを定んで知る。一切の法は皆是の如く、是因に従つて、是果を得ることを。是故に佛は、一切法の中に無礙なりと名く。畢定して知るを以ての故なり。復次に、須菩提は、法華經に『佛の作す所の少功德に於て、乃至戲笑にも、一たび南無佛と稱する時は、漸漸に必ず當に作佛すべし』と説くを聞き、又阿鞞跋致品の中には、退不退ありと聞き、又復聲聞の人は、皆當に作佛

すべしと聞き、若し爾れば、應に退行るべし。法華經の中に説くが如きは畢定なり、餘經の説は退有り、不退有り。是故に今畢定とや爲ん、不畢定とや爲んと問へり。是の如き等の種種の因縁の故に定不決定を問へり。佛答へたまはく、『菩薩は是れ畢定なり。』須菩提は、心に入涅槃を以て畢定となす、是故に、何の道の中に畢定と爲すやと問へり。佛答へたまはく、『不畢定は一乘なり、但大乘の中に於ては畢定なり。』佛道を求むる者には上中下有り、是故に、初發意と爲んや、阿鞞跋致と爲んや、最後身の畢定と爲んやと問へり。須菩提意に謂へらく、『阿鞞跋致至已上は畢定爲り、佛道の中に住するが故に。』佛は、『三種の菩薩は皆畢定なり。』と答へたまへり。畢定とは、必ず當に作佛すべきなり。問うて曰はく、『上の品の中に説くが如くんば、佛は佛眼を以て十方の菩薩を見るに、佛を求むること恆河沙の如くにして、阿鞞跋致を得る者は、若し一、若し二なり。今何を何てか三種の菩薩は、盡く皆畢定すと云ふや。』答へて曰はく、『我先に已に般若は甚深にして無量の門有りと説けり。説くもの有り、『諸の菩薩は退いて不畢定なり』有る處には説けり、『菩薩は畢定して不退なり、阿鞞跋致品の中の如し。』須菩提佛に問ふ、『菩薩の退する者は何れの處に於て退するや。色に従ふとや爲ん、受想行識乃至十八不共法に従ふとや爲ん。畢竟空の故に諸法皆不退なり、此中に佛は何を以てか更に不退を説くや。』問うて曰はく、『是二義何か是れ實なるや。』答へて曰はく、『二事皆實なり、佛の口づから説きたまふ所は實ならざる者無し。佛、或は諸法は空にして所有無しと説き、或は布施持戒等は是れ有

爲なり説く。初發心の者には、諸法は有爲なりと説き、久嘔の人の善法に著する者には、諸法は空にして所有無しと、説きたまへるが如し。阿耨多羅三藐三菩提を懈怠して牢固ならざる者、是の如き人は、聲聞道に従つて得度し、而も聲聞を求めず、久しく生死の中に於て苦を受くべし。是故に、發心は恆河沙の如きも、阿耨跋致を得る者は、若は一、若は二なり」と説く。衆生是を聞き已つて、能く衆苦を受くるに堪ふる者は、阿耨多羅三藐三菩提を畢定し、若し能はざる者は、聲聞辟支佛道を取るなり。人有つて、佛を得るの任に堪へ而も大悲心薄く、自ら身を愛すること重ければ、此人は佛の得難く、多く退く者有りと聞いて、是念を作さく、我或は佛を得ること能はずんば、早く涅槃を取らんには如かず、何を以てか、世世に勤苦を受くることを爲さん」と。是人の爲の故に、一切の菩薩は乃至初發心に皆畢定すと説くこと、法華經の中に説くが如し。問うて曰はく、『若し菩薩皆畢定して佛ならば、何を以ての故に種種に二乗を呵し、菩薩は二乗の證を取るを聽かざるや。』答へて曰はく、『佛道を求むる者は、應に遍、法性を知るべし。是人は老病死を畏るるが故に、法性に於て少分に證を取る。便ち自ら止息して佛道を捨てて衆生を度せず、諸佛菩薩の呵責する所たり。汝は捨て去らんと欲するも會して離るることを得ず、阿羅漢の證を得る時は、諸の菩薩は深三昧を求めず、又廣く衆生を化せず、是れ則ち佛道を迂廻して稽留するなり。』問うて曰はく、『阿羅漢の先世の因縁により受くる所の身は、必ず應當に滅すべし、何の處に住在してか佛道を具足するや。』答へて曰はく、『阿羅漢を

【五不可思議】衆生の多少、業果報坐禪人の力、諸龍の力、諸佛の力をいふ。

得る時は、三界の諸漏の因縁盡きて、更に復三界に生ぜず。淨き佛土有り、三界を出でて乃ち煩惱の名無し。是國土の佛の所に於て法華經を聞き、佛道を具足す、法華經に説くが如し、「羅漢有り、若し法華經を聞かずして、自ら波度を得と謂はば、我餘國に於て爲に是事を説かん、汝皆當に作佛すべし」と。問うて曰はく、「若し阿羅漢、淨佛國土に往いて法性身を受け、是の如く疾かに作佛し得べしとせば、何を以てか迂廻し稽留すと言ふや。」答へて曰はく、「是人、小乘に著するの因縁もて、衆生を捨て、佛道を捨て、又復道を得と忠言す。是因縁を以ての故に生死の苦惱を受けずと雖も、菩薩に於て鈍根にして、疾かに佛道を成ずること能はず、直往の菩薩に如かざるなり。」復次に、佛法は五不可思議の中に於て最も第一なり。今漏盡の阿羅漢還つて作佛し、唯佛のみ能く知りたまふ。論議は正しく論ずべく、其事測り知ること能はずと言ふ。是故に應に戲論すべからず。若し求めて佛を得る時は乃ち能く了知す、餘人は信すべきも、而も未だ知るべからず。畢定の菩薩三惡道の中に墮するや不やとは、須菩提、佛の無量の本生の因縁、或は象、鹿、龜、鶴、孔雀、鸚鵡等の種種の苦を受くと説くを聞く。是故に佛に問ふ、「世尊、若し菩薩、是の如き等の畜生の身を受けば、云何が、一切菩薩に畢定と言ふや。畢定とは、即ち是れ阿耨跋致なり、阿耨跋致とは、三惡道に墮せざるなり。」佛、反問して答へたまはく、「汝が意に於て云何。八人等の聖人は三惡道に墮すとなすや不や。」須菩提思惟すらく、「是諸の聖人は聖道に入るが故に、三惡道に墮するの因縁無し。」斯く思惟しじつて答へて曰はく、

『不。』佛の言はく、『菩薩も亦是の如し。三惡道に墮するの因縁盡るが故に、云何が三惡道に墮せん。』三惡道に墮する因縁とは、謂ゆる諸の不善法なり。是菩薩は、初發心より已來、布施、持戒等の諸の善法を修習して、諸の殺生等の十不善道を斷ず。若し是人にして三惡道に墮せんは、是處有ること無し。何を以ての故に、諸の惡法を滅して善法を増益するが故なり。不善道に上中下有り、上は地獄に墮ち、中は畜生に墮ち、下は餓鬼に墮つ。是菩薩は三種已に盡き、深心に衆生を悲念す、是故に墮せざるなり。問うて曰はく、『若し爾らば三惡道は中に於て生ぜざるべし、是菩薩は福德多し、何を以てか長壽天の中に生ぜざるや。』答へて曰はく、『是菩薩は衆生を憐愍し、六波羅蜜を行じて、能く禪波羅蜜に入ると雖も、慈悲行に和合して禪味に著せず、命終り盡んと欲し、欲界の法を念ふが故に禪道を退く。彼中に苦惱無きを以て深く禪味に著して、得度すべきこと難きが故に、長壽天に生ぜず。邊國には障礙ありて、善法を修することを得ざるが故に生ぜず。所以は何ん。是菩薩は悋法の根本を拔出し、悋法の因縁の故に邊國に生じて法處を知らざればなり。』復次に、是菩薩常に中道を好み、二邊を捨つるが故に邊國に生ぜず。邊國には三寶の名無く、七衆を識らず、但今世の現事を貴んで、福德道法を貴ばざるが故に邊國と名け、但邊國に生ぜざるが故に名けて邊地と爲す、若し三寶を識れば、罪福相續の因縁を知り、諸法の實相を解す。是人は閻浮提の外に生ずと雖も、名けて邊と爲さず、何に況んや閻浮提の中に生ずるをや。是菩薩は常に樂しんで、他の爲に説法し、亦深く善法を愛す



【八難處】地獄、餓鬼、畜生、鬱單

卷第九十三

るが故に、意に随つて衆生を善くし、共生することを得。謂ゆる是れ中國の人と爲す。中國に於ても邪見の家に生ぜず。何を以ての故に、是菩薩は世世に常に自ら正見を行ひ、亦他をして正見ならしめ、正見の法を讀し、正見を行する者を歡喜し讚歎す。是故に悪邪見の家に生ぜず。問うて曰はく、『是菩薩は大福德智慧の力もて、應に遙地邪見の家に生じ、而して之を教化すべし。何を以てか畏れて生ぜざるや。』答へて曰はく、『菩薩に二種有り、一には大力を成就する菩薩、二には因縁に觸する新發意の菩薩なり。大力の菩薩は、衆生の爲に、度すべき所に随つて身を受け、遙地邪見を避けず。新發意の菩薩は、若し是處に生ずれば、既に人を度すこと能はず、又自ら敗壞す。是故に生ぜず。譬へば、眞金は泥に在るも終に壞壞せず、鐵は則ち壞するが如し。邪見とは謂ゆる無作の見なり。六十二種も、皆是れ邪見なりと雖も、無作最も重し。所以は何ん。無作の言は功德を作して涅槃を求むべからざるが故なり。若は天作と言ひ、若は世界始來と言ふは、是れ邪見なりと雖も、而も福德を作すを遮せず、大惡を作すことなきを以ての故に生ぜず。又初發心の菩薩は、深く惡心もて、十不善道を行すといふは、是處有ること無し。何を以ての故に、是菩薩は一心に廻向し、阿耨多羅三藐三菩提を貴重して、世間の法を貴ばず。是人は未だ欲の因縁を離れざるが故に、諸の煩惱を起すと雖も、終に深心に惡を作さず。梵楚を加ふと雖も終に命を奪はず、他の財を取らぬ、其して命を失はしめず。是菩薩は一切の不善法を斷じ、一切の善法を修集するが故に八難處に生ぜず、常に八好處を得。須菩提問ふ、

越、長壽天、瞿曇、暗症、世智辯、佛、生佛前佛後の入難、聞法について、これ見佛處なり。

【八好處】 八勝處

「若し菩薩有り、是の如く善根を成就せば、云何が本生の因縁もて鹿馬等と作るや。佛答へたまはく、『菩薩は實に福德の善根を成就し、衆生を利益せんが爲の故に畜生の形を受くるも、亦畜生の罪無し。此中に佛自ら因縁を説きたまはく、謂ゆる菩薩は畜生の中に在りて賊を慈愍するも、阿羅漢辟支佛は有ること無き所なり。阿羅漢辟支佛は怨賊來つて害すれば、報を加へずと雖も、愛念し供養し供給すること能はず。菩薩の本身の如きは、六牙の白象と作り、獵師の毒箭を以て胸を射るや、爾時、菩薩たりし象は、鼻を以て獵者を擁抱して、餘象をして害することを得しめず。驢象に語つて曰はく、『汝は菩薩の姉たり、何に縁つてか悪心を生ずるや』と。獵師は、是れ煩惱の罪にして人の過には非ざるなり。我阿耨多羅三藐三菩提を得ば、當に其煩惱の罪を滅除すべし。譬へば鬼の人に著くや、呪師來つて但鬼を治して人を瞋らざるが如し。是故に其罪を求むること莫く、徐ろに獵者に問ふ、『汝何を以てか我を射るや。』答へて曰はく、『我、汝が牙を須めんがためなり。』象即ち石に就きて牙を罅抜して之を與ふ。血肉俱に出づれども以て痛しと爲さず、糧食を供給して道徳を示す。是の如き等の慈悲は、阿羅漢辟支佛には有ること無き處なり。是の如き好心、云何が畜生の身を受くるや、當に知るべし、是れ變化して衆生を度すべきことを。問うて曰はく、『何を以てか、人身と作りて爲に説法せずして、而も此獸身と作るや。』答へて曰はく、『有時は、衆生人身を見れば則ち信受せず、畜生身の説法するを見れば、則ち信樂を生じ、其教化を受く。又、菩薩の大慈悲を具足せんと欲

り。  
し、心に其實事を行ぜんと欲するや、衆生是を見て驚喜し、皆道に入ることを得ればな

大智度論卷第九十三

# 大智度論釋畢定品第八十三之餘

卷第九十四

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

【釋】世尊、菩薩摩訶薩は何等の白淨法に住してか、能く是の如きの方便力を作して、而も染汗を受けざる。』佛言はく、『菩薩は般若波羅蜜を用て、是の如きの方便力を作し、十方の恆河沙等の如き國土の中に於て、衆生を饒益するも亦是身を貪著せず。何を以ての故に、著者、著法、著處、是三法は皆不可得にして自性空なるが故に。空は空に著せず、空中には著者無く、亦著處も無し。何を以ての故に、空中には空相不可得なるが故に。須菩提、是を不可得空と名く。菩薩は是空中に住して、能く阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。』

『世尊、菩薩は但般若波羅蜜の中に住して、阿耨多羅三藐三菩提を得、餘法の中に住せざるや。』須菩提、頗し法として般若波羅蜜に入らざるもの有りや不や。』世尊、若し般若波羅蜜の自性空なれば、云何が一切の法は、皆般若波羅蜜の中に入る。世尊、空の中に、法として若は入り、若は入らざるもの有る無し。』須菩提、一切法の一切法相は空なりや不や。』世尊、空なり。』須菩提、若し一切法の一切法相空ならば、云何が一切法は空中に入らずと言ふ。』須菩提、佛に白して言さく、『世尊、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行

する時、一切法空の中に住して能く神通波羅蜜を起し、是神通波羅蜜の中に住して、十方の恆河沙等の如き國土に到り、現在の諸佛を供養し、諸佛の說法を聞き、諸佛の處に於て善根を種うるや。佛、須菩提に告げて言はく、『菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行する時、是十方の恆河沙等の如き國土を觀するに皆空なり。是國土の中の諸佛も亦性空なり、但名字を假るが故に諸佛身を現するのみ。假る所の名字も亦空なり。若し十方の國土及び諸佛の性空ならずんば、空に偏有りとなすなり。空は不偏なるを以ての故に、一切法の一切法相は空なり。是を以ての故に。菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行する時、方便力を用て神通波羅蜜を生じ、是神通波羅蜜の中に住し、天眼、天耳、如意足、知他心智、宿命智を起して衆生の生死を知る。若し菩薩、神通波羅蜜を遠離せば、轉じて衆生を饒益する能はず、亦阿耨多羅三藐三菩提を得る能はず。是菩薩摩訶薩の神通波羅蜜は、是れ、阿耨多羅三藐三菩提の利益道なり。何を以ての故に。是天眼を用て、自ら諸の善法を見、亦他人を教へて諸の善法を得しめ、善法に於て亦著せず。諸の善法は自性空なるが故に、空は著する處無ければなり。若し著すれば即ち味を受くるも、是空の中には味有ること無し。是菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行する時、能く是の如きの天眼を生じ、是天眼を用て一切法空を觀じ、是法空を見て、相を取らず、業を作らず、亦人の爲に是法を説くも、亦衆生の相を得ず。衆生の名を得ず。是の如く菩薩摩訶薩は、無所得の法を用ての故に、神通波羅蜜を起す。是神通波羅蜜を用て、神通の應に作すべき所の者を能く作す。是菩薩は天眼通

を用て人眼に過ぎ、十方國土を見る。見已りて飛んで十方に到り、衆生を饒益するに、或  
 は布施を以てし、或は持戒を以てし、或は忍辱を以てし、或は精進を以てし、或は禪定を  
 以てし、或は智慧を以てして衆生を饒益す。或は三十七助道法を以てし、或は諸禪解脫三  
 昧を以てし、或は聲聞法を以てし、或は辟支佛法を以てし、或は菩薩法を以てし、或は佛  
 法を以てして衆生を饒益す。憍者の爲には是の如く法を説かく、諸の衆生、當に布施を行  
 ずべし、貧窮は是れ苦惱の法なり。貧窮の人は自ら益すること能はず、何んが能く他を益  
 せん。是を以ての故に、汝等當に勤めて布施し、自身にも樂を得、亦能く他をして樂を得  
 しめ、貧窮を以ての故に共に相食噉すること莫からしむべし。三惡道を離るるを得ざれば  
 なり一と、破戒の者の爲には説法すらく、諸の衆生破戒の法は大苦惱なり。破戒の人は自  
 ら益する能はず、何んが能く他を益せん。破戒の法は苦果の報を受け、若は地獄に在り、  
 若は餓鬼に在り、若は畜生に在り。汝等三惡道の中に墮せば、自ら救ふ能はず、何んが能  
 く他人を救はん。是を以ての故に、汝等應に破戒の心に隨ひ、死する時悔有るべからず。  
 若し共に相瞋淨する者有らば、是の如きの法を説け、諸の衆生、共に相瞋り、人心を亂し  
 て、善心に順ぜざらしむる莫れ。汝等今共に相瞋りて心を亂せば、或は地獄、若は餓鬼、  
 畜生の中に墮せん。是を以ての故に、汝等應に一念の瞋恚心をも生ずべからず、何に況ん  
 や多をや。懈怠の衆生の爲には、説法して精進を得しめ、散亂の衆生には禪定を得しめ、  
 愚癡の衆生には智慧を得しむるも、亦是の如し。姪欲を行ずる者には不淨を觀せしめ、瞋

悲の者には慈心を觀ぜしめ、愚癡の衆生には十二因縁を觀ぜしめ、非道を行する衆生には正道、謂ゆる聲聞道、辟支佛道に入らしめ、是衆生の爲に是の如く説法す、汝等の著する所の是法は性空なり、性空の法の中には、著すること得べからず。不著の相は是れ空相なりと。是の如く、須菩提、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行する時、神通波羅蜜の中に住して、衆生の爲に利益を作す。須菩提、菩薩若し神通を遠離せば、衆生の意に隨つて善く法を説く能はず。是を以ての故に、須菩提、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行する時、應に神通を起すべし。須菩提、譬へば、鳥の翅無ければ、高く翔ける能はざるが如く、菩薩は神通無ければ、意に隨つて衆生を教化する能はず。是を以ての故に、須菩提、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行する時、應に諸の神通を起すべし。諸の神通を起し已りて、若し衆生を饒益せんと欲せば、意に隨つて能く益す。是菩薩は天眼を用て、恆河沙等の如き諸の國土を見、及び是國土の中の衆生を見、見已りて神通力を用て其所に到り、衆生の心を知り、其所應に隨つて、爲に法を説く。或は布施を説き、或は持戒を説き、或は禪定を説き、乃至涅槃法を説くなり。是菩薩は、天耳を用て二種の音聲、若は人、若は非人、若は衆生の爲に説く、或は布施を説き、乃至或は涅槃法を説くなり。是菩薩は、他心智を淨め、他心智を用て衆生の心を知り、其所應に隨つて爲に説法す。或は布施を説き、乃至或は涅槃法を説くなり。是菩薩の宿命智は、種種の本生の處を憶念し、亦自ら憶し、亦他人を憶し、

是宿命を用て、過去在在處處の諸佛の名字及び弟子衆を憶念し、衆生有つて、宿命を  
 信樂せば、爲に宿命の事を現じて、説法を爲し、或は布施を説き、乃至或は涅槃を説く。  
 如意神通力を用て、種種無量の諸佛の國土に到り、諸佛を供養し、諸佛に従つて善根を種  
 る、還本國に來り、是菩薩は漏盡神通智を證す。是漏盡神通智の證を用ての故に、衆生の  
 爲に應に隨つて法を説く。或は布施を説き、乃至或は涅槃を説く。是の如く、須菩提、菩  
 薩摩訶薩は般若波羅蜜を行する時、應に是の如きの諸の神通を起すべし。菩薩は是神通  
 を修するを用ての故に、意に隨つて身を受くるも苦樂に染まざるなり。譬へば、佛の所化  
 の人の、一切の事を作すも、而も苦樂に染まざるが如し。菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行  
 する時、是の如く、神通に遊戯し、能く佛國土を淨め、衆生を成就すべし。復次に、須菩  
 提、菩薩摩訶薩は、佛國土を淨めず、衆生を成就せざれば、阿耨多羅三藐三菩提を得る能  
 はず。何を以ての故に、因縁を具足せざるが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得る能はざるな  
 り。『須菩提、佛に白して言さく、『世尊、何等をか是れ菩薩摩訶薩の、因縁を具足し已り  
 て、阿耨多羅三藐三菩提を得ると爲す。』佛、須菩提に告げて言はく、『一切の善法は、是  
 れ菩薩の阿耨多羅三藐三菩提の因縁なり。』須菩提、佛に白して言さく、『何等をか是を善  
 法として、是善法を以ての故に阿耨多羅三藐三菩提を得ると爲す。』佛、須菩提に告げて言  
 はく、『菩薩は初發意より已來、檀波羅蜜是れ善法の因縁なり。是中に是れ施者なり、是れ  
 受者なりと分別する無し、性空なるが故に。是檀波羅蜜を用て、能く自ら利益し、亦能く



【一】前卷に續いて畢定品を解釋する中、次に菩薩が大方便成就の力を具するために住する白淨法の相を釋す。

衆生を利益して、生死より拔出し、涅槃を得しむ。是諸の善法は皆是れ菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提の因縁なり。是道を行じ得る過去、未來、現在の諸の菩薩摩訶薩は生死を得度す。已に度し、今度し、當に度すべし。尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜、四禪、四無量心、四無色定、四念處、乃至八聖道分、十八空、八背捨、九次第定、陀羅尼門、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、是の如き等の功德は、皆是れ阿耨多羅三藐三菩提の道なり。須菩提、是を善法と名く。菩薩摩訶薩は、是善法を具足し已つて、當に一切種智を得べし。一切種智を得已つて、當に法輪を轉すべし。法輪を轉じ已つて、當に衆生を度すべし。

釋して曰はく、『爾時、須菩提問はく、『何等の善根に住するが故に能く此身を受くる』と。佛答へたまはく、『菩薩摩訶薩は、一切の善根を具足す』と。乃至、須菩提大に歡喜して佛に白して言さく、『菩薩摩訶薩の大方便成就の力は、何等の聖無漏法に住してか、能く此身を受け、而も畜身の爲に染せられざる。譬へば幻師の如く、亦變化の如く、何等の白淨法に住してか、能く是の如きの方便を作す』と。佛答へたまはく、『菩薩は般若波羅蜜の力を以ての故に、能く是の如きの方便を成就し、種種の身を作して、能く十方國土の中の衆生を利益し、亦是身を食らす』と。佛、此中に因縁を説きたまはく、『是菩薩の三法は不可得なり、一には是れ菩薩の身、二には作す所の鹿馬、三には用ふる所の法なり』と。何を以ての故に、是法は、皆性空なるが故に、空も亦空に著せず、空の中亦食者無し、法無

なるが故に衆生無く、衆生無きが故に法も亦無し。此中に佛因縁を説きたまはく、「空の中  
 には空は不可得なり。不可得なるが故に、菩薩は云何が是智慧を貪らん。是を無所得空般  
 若波羅蜜と名く。菩薩は是中に住して、能く阿耨多羅三藐三菩提を得。障礙無きを以ての  
 故に得易し。須菩提問はく、「菩薩は六波羅蜜、乃至十八不共法に住す、今何を以てか、但  
 無所得の般若波羅蜜の中に住して得と説く」と。佛答へたまはく、「須菩提、何の法か般若  
 の中に入らざらん。一切の法は皆般若波羅蜜の中に入る。若し般若波羅蜜に住すれば、則  
 ち一切の法に住するなり」と。復問はく、「若し般若波羅蜜の性空ならば、云何が一切の法  
 は皆中に入るや」と。此中に須菩提自ら因縁を説いて言はく、「一切法の性空の中に、法有  
 りて出づこと無く、法有りて入ること無し」と。佛、須菩提に告げて言はく、「一切法、一  
 切法相は空なりや」と。「世尊、空なり」と。「須菩提、若し一切法、一切法相空ならば、一  
 切法は應に空の中に入るべし。汝云何が、空の中には法の出入するもの有る無しと言ふ」  
 と。爾時、須菩提心に伏して解を受け、是菩薩の身を化して、衆生を度するを聞き、今世  
 尊に問はく、「菩薩、云何が一切法空の中に住して、能く神通波羅蜜を起し、十方の恆河沙  
 の如き國土に到りて、佛を供養し、法を聴き、甚深の善根を種うる」と。善根とは、諸  
 の陀羅尼三昧門無礙解脫の根本なり。須菩提意へらく、「般若波羅蜜は性空なり、云何が菩  
 薩は性空の波羅蜜の中に安住して、能く是神通有法を行するや」と。佛の言はく、「空の故  
 に能く行す。所以は何ん。須菩提、菩薩は般若を行する時、十方の恆河沙の如き國土は、

皆空なり、是國土の諸佛も亦空なりと觀ず」と。問うて曰はく、「若し國土空ならば、佛も亦應に空なるべし、何を以てか別説する。」答へて曰はく、「佛は無量阿僧祇劫の實功德を以て是身を得、能く一足の指を以て十方の恆河沙の如き國土を動かす。又菩薩は、世世より來、深く佛を愛重し、疾に觀じて空ならしむる能はず。是故に、國土と共に合して説かず。此中に、佛、自ら因縁を説きたまはく、「若し十方の國土及び諸佛空ならずんば、空に偏有り」と爲す。偏有るを有空、不空の處と名く。今實に偏せざるが故に、一切の法、一切の法相は空なり。菩薩は般若波羅蜜を行するに、一切の法は無礙なり。肉眼を以て色を見るに通ぜず、上を見れば下を見ず、前を見れば後を見ず。通ずれば見え、障れば見えず。晝は見え、夜は見え。肉眼力の少なるを知るが故に、方便を以て更に天眼を求む。方便力とは、他界の四大をして、來つて身中に在らしむるなり。天眼を用ふるの義は先に説けるが如し。天耳、如意足、他心智、宿命智を生じて、衆生の生死の趣く所等を知る。菩薩若し神通なければ、衆生を饒益することを得る能はず。何を以ての故に、若し神通無くんば、云何が能く多くの衆生をして發心せしめん。菩薩神通有るも、猶尙盡く衆生をして發心せしむる能はず、何に況んや無きをや。是故に、神通波羅蜜は是れ菩薩所行の道なり。菩薩は自ら善法を見、亦他人をして善法を見るを得しめ、亦是善法に著せず、何を以ての故に、是法性は皆空なるが故に。問うて曰はく、「天眼は色を見るべし、云何が善法を見、又一切法の性空なる見るをと言ふ。」答へて曰はく、「因中に果を説き、天眼を以て見

る。自ら己身を見、及び十方の衆生を見、然る後、他心智、宿命智を用て、其今世後世の善根を求む。是善根及び果報は久しうして皆磨滅す、磨滅するが故に空を見る。是善根は、皆是れ有爲法にして自性無し、自性無きが故に空なり、空なるが故に著すべからず。又味を受くべからず、味を受くべからざるが故に著せず。譬へば、蠅の處として著せざる無きも、唯火焰には著せざるが如し。衆生の愛著も亦是の如く、善不善の法の中には皆著す、乃至非有想、非無想にも著するが故に涅槃に入る能はず。唯般若波羅蜜の性空の火のみに著する能はず。所以は何ん。般若波羅蜜、般若波羅蜜の相は空なればなり。若し般若波羅蜜空ならざれば、即ち是れ味にして、是れ著すべき處なり。菩薩は是智慧の中に住して有漏の業を起さず、衆生の爲に法を説き、亦衆生の假名不可得を知り、是無所得般若波羅蜜の中に安住して、而も能く神通の事を具足す。若し菩薩、は無障礙の般若を得ざれば、則ち無礙神通を得ること能はざらん。菩薩はは無障礙空神通を得て、飛んで十方の國土に到り、衆生を利益す。經の中に廣く説くが如し。或は布施を以てし、或は持戒等を以てす。慳者には爲に布施等を説く。六波羅蜜の義は、此中に佛自ら廣く説きたまへるが如し。此中に譬喩を説くが如く、鳥の翅無くんば能く飛翔する能はざるが如し。菩薩も亦是の如く、神通波羅蜜無くんば、衆生を教化する能はず。菩薩は天眼を以て、十方國土の諸師、及び一切衆生を見、天耳力を以て、諸佛に従つて法を聞き、如意神通力を以て、大光明を放ち、或は水火を現じて、種種の變化を作し、奇特の事を現じて、衆生をして希

有尊重の心を發さしむ。他心智力を以ての故に、他の心心數法の著する處、厭ふ處、度す  
 べく、度すべからざる、是れ利、是れ鈍、是れ善根成就、是れ未成就なりと知る。是の如  
 き等は、他の衆生の心を知つて、善根成就の者の度すべき者有るを攝取するなり。宿命  
 智、生死智を以て、其本末、何所より從來する、何の善根を種ゑし、好む所は何の行な  
 る、此より終に當に何の所に生ずべき、何の時に當に解脫を得べきかを觀ず。是の如く  
 籌量し思惟して度すべき者を知り、過去の業因縁、未來世の果報は、復神通力を以てす。  
 是人は、應に恐怖を以て度すべきには地獄を以て之に示さば、汝當に此中に生ずべし。應  
 に歡喜を以て度すべきには、示すに天堂を以てせば、眼に是事を見、心に驚怖歡喜を懷い  
 て世間を厭患す。爾時に、漏盡神通を以て、漏盡の法を説く。衆生は是法を聞いて、其著  
 心を破し、三乘を以て而も涅槃を得。譬へば、白鶩の魚を取らんと欲する時、籌量し進止  
 して期會を失せず、其得べきを知れば、即便ち之を取つて終に空しからざるが如し、菩薩  
 も亦是の如く、神通力を以ての故に、衆生の本末、度すべきの因縁、國土時節を觀じ、其  
 信等の諸根の増利、諸の因縁具足を知つて、爲に說法すれば則ち空しからず。是故に菩  
 薩は一神通を離れては、衆生を饒益する能はざること、鳥の翅無きが如し」と説く。餘の  
 神力は佛の自ら説きたまふが如し。天眼を以ては十方の衆生の生死を見、亦衆生の心を知  
 つて意に隨つて說法し、乃至善く神通力を修して衆生の爲に身を受け、苦業の爲に業せら  
 れず。是菩薩は衆生の中に於て、或は父と爲り、或は子と爲り、或は師と爲り、或は弟子

と爲る。或は主と爲り、或は奴と爲り、或は象馬と爲り、或は象馬に乗る者と爲り、或時は富貴にして力勢あり、或時は貧賤となるも、此諸の事に於て亦染汗せられず。譬へば、佛の、所化の人に一切の事を作すも、苦樂に染汗せられざるが如し。一切の事とは、先に種種阿僧祇の身と作し、衆生を度するが如し。苦樂に染せられずとは、樂の中に愛を生ぜず、苦の中に瞋を生ぜざるなり。生死の衆生の、處に隨つて煩惱を起すが如きには非ず。菩薩は、應に是の如く遊戯神通し、衆生を成就し、佛國土を淨むべし。』問うて曰はく、『菩薩の神通力には所作有り、何を以てか遊戯と名くる。』答へて曰はく、『戲とは、幻師の種種に現變するが如きに名く。菩薩は神通もて種種に現化す、之を名けて戲と爲す。』復次に、佛法の中の三昧には空を名けて上行と爲す。何を以ての故に、涅槃の著する所無く、得る所無きに似如たるが故に。餘の諸の行法は、皆名けて下と爲す、下は小兒の如し。是故に神通力を説いて、名けて遊戯と爲すなり。衆生を成就し、佛土を淨むる中に於て最も要爲り、用て衆生を成就す。是中に、佛土を淨め、共に善根を修すと説くが如し。

【二】次に行淨佛國土成就衆生これ眞の菩薩道なるを明す。

(三) 問うて曰はく、『何の必要ありてか、用て衆生を成就し、佛國土を淨むる。』答へて曰はく、『佛自ら因縁を説きたまはく、『衆生を成就し、佛國土を淨めざれば無上道を得る能はず。何を以ての故に。』因縁具足せざれば、即ち阿耨多羅三藐三菩提を得る事はされば故に』と、因縁とは、謂ゆる一切の善法なり、初發意、檀波羅蜜、乃至十八不共法を行じ、是行

法の中に於ては、是は施者、是は財物、是は受者等との憶想分別無く、乃至十八不共法も亦是の如し。若し菩薩、心に著せずして分別する所無く、六波羅蜜乃至十八不共法を行ずれば、是を阿耨多羅三藐三菩提の因縁と爲す。是道を以て、阿耨多羅三藐三菩提を得、亦能く衆生を度す。一問うて曰はく、『菩薩若し著心もて布施せば、何等の過有つてか、具足と名けざる。著心の布施は受者の恩重からん。』答へて曰はく、『小利有りとも雖も、而も大過有り、美食に毒を雜ふるに、美の利有りと雖も、而も自ら命を喪ふが如し。』問うて曰はく、『何者か是れ過なる。』答へて曰はく、『若し著心の布施は、意に稱はざる事有れば、則ち悲怒を生じ、若し受者其恩を感じざれば、則ち怨嫌を成す。若し著心もて善人に供養するも、少しく凶衰有れば則ち嫌ひ、布施に應ずる無く、施す所を悔惜す。若し布施して心に悔あれば、受くる所の果報則ち清淨ならず。』復次に、著心の布施は、深心に財物に貪著す。若し侵奪せらるること有れば、則ち害を加へて自ら念へらく、『我福徳好事の爲に財を集む、汝何が故に侵奪する』と。先づ財物を貪つて、今世の事の爲にし、而も布施を作して後世の事の爲にし、愛惜轉た深し。染著するを以ての故に、若し侵奪せらるる有れば、能く罪を重くす。重罪の因縁の故に、三惡道の苦を受く。復次に、貪著の因縁の故に瞋恚を生じ、瞋恚の因縁の故に刀杖を加ふ。刀杖し殺害すれば、諸の苦惱を受く。復次に、人愚癡の業を起せば大に安穩ならず。此處誑不實の事を行するが故に、後に必ず大患を致す。十方の諸佛は皆無相解脫門を説き、諸無無相の相、是を實と爲す。若し人、是

財物を取らば虚誑不實の相なり。然して後、心著す。心著するが故に、大果報を期するも、而も能く施與す。譬へば、人の多收を求めんと欲するが故に、大に穀子を用ふるが如し。是の如く、著心の布施は、果報少にして不淨なり。終に盡に歸して、諸の憂惱を受くること稱説すべからず。皆相を取るに由るが故に是の如きの過有り。若し如實の相を以て布施を行ぜば、是の如きの過有る無く、無量阿僧祇の生死の中に、諸の福樂を受け而も亦盡きず、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得。復次に、若し人著心を以て善法を行ぜば、是人若し諸法の畢竟空を聞くや、即時に所行の法を捨てて是空法に著して相を取り、此を以て實と爲し、先の者を虚誑と爲す。是人は即ち二種の法を失ひ、先の善法を失して、邪見に墮す。心に著する者は是の如きの過有り。譬へば重病の人の、衆くの藥有りて、之を療するに損無しと雖も、藥は復病を作すが如し。著心もて諸の功德を行すれば、是の如き等の過罪有り。菩薩は著心を捨てて空相を取らず、如、法性、實際の如し。布施等の法に於ても亦是の如く、一切衆生の爲に阿耨多羅三藐三菩提に廻向するを見る。復次に、菩薩は布施する時、是念を作さく、「十方三世の諸佛の、畢竟清淨の智慧もて、諸法の實相を知り、亦是布施の相を知るが如く、我も亦是性を以て廻向せん」と。復次に、是菩薩は、一切の五情を心心數法の中に用ひず行ぜず、諸法の相を知る能はざるが故に。是法は皆是れ因縁の邊より生じ、虚誑にして自性有る無きが故に、我今諸法の實相を知らんと欲し、是諸の虚誑を廻向して、實相の中に入るるに皆異有る無し。我今、未だ諸法清淨の



實智慧を得る能はざるが故に、是は處、是は實なりと分別する所有り。清淨の智慧を以て之を知れば、則ち皆第一義諦と作す。第一義諦の中に入れば、皆清淨にして別異有る無しと爲す。是の如く布施等を施向して直に佛道に至る。是故に、分別する所無きの心もて能く布施等を行ずる、是を眞の菩薩道と名くと説く。』

大智度論釋四諦品第八十四

【經】須菩提、佛に白して言さく、『世尊、若し是諸法、是れ菩薩法ならば、何等か是れ佛法なる。』佛、須菩提に告げて言はく、『汝の問ふ所の如く、是諸法は是れ菩薩法ならば、何等か是れ佛法なるとは、須菩提、菩薩法も亦是れ佛法なり、若し一切種智を知れば是れ一切種智を得、一切煩惱の習を斷ず、菩薩は常に是法を得べく、佛は一念相應の慧を以て、一切の法を知り已りて、阿耨多羅三藐三菩提を得たり。須菩提、是を菩薩と佛との差別と爲す。譬へば向道と得果と異るが如し。其二人は共に善人爲り、是の如く、須菩提、菩薩摩訶薩の無礙道中に行ずる、是を菩薩摩訶薩と名く。無礙道の中に一切の關斷無き、是を佛と爲す。』須菩提、佛に白して言さく、『若し一切法自相空ならば、自相空の法の中に云何が差別の異有らん。』是れ地持、是れ阿鬼、是れ畜生、是れ天、是れ人、是れ性知人、是れ八人地人、是れ須陀洹人、是れ斯陀含、阿羅漢、阿羅漢人、辟支佛、是れ菩薩、是れ

多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀なり。」「世尊、諸人の不可得なるが如く、業因縁も亦不可得なり、果報も亦不可得なり。」「佛の言はく、『是の如し、是の如し、汝の言ふ所の如く、自相空法の中には、業生無く、業因縁無く、果報無し。須菩提、衆生は是諸法の自相空なるを知らざれば是衆生は業因縁、若は善、若は惡、若は無動を作り、罪業の因縁の故に三惡道の中に墮し、福德の因縁の故に人天の中に有りて生じ、無動業の因縁の故に色無色界の中に生ず。是菩薩摩訶薩は、檀波羅蜜乃至十八不共法を行ずる時、盡く受けて是助道法を行じ、如金剛三昧に入り、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、衆生を饒益す。是利常に失はざるが故に、五道生死の中に墮せず。』須菩提、佛に白して言さく、『世尊、佛は阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、五道の生死を得るや否や。』佛言はく、『得ざるなり。』須菩提、言さく、『世尊、業の若は黒、若は白、若は不黒、若は不白を得るや否や。』佛言はく、『不。』世尊、若し得ざれば、云何が是れ地獄、餓鬼、畜生、人天、須陀洹、乃至阿羅漢、辟支佛、菩薩、諸佛なりと説かん。』須菩提、若し衆生、諸法の自相空なるを知れば、菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を求めず、亦衆生を三惡趣、乃至五道に往來する生死の中より救かず。須菩提、衆生は實に諸法の自性空なるを知らざるを以ての故に、五道生死を脱するを得ず。是菩薩は、諸佛の所に從つて、諸法の自性空を聞き、發意して阿耨多羅三藐三菩提を求む。須菩提、諸法は爾く凡夫人の著する所の如くならず。是衆生は無所有の法の中に於て、顛倒妄想分別して法を得、無衆生に衆生相有り、無色に色相有り、無受忍行議

に受相行識相有り、乃至一切有爲法無所有なるに、顛倒妄想の心を用て、身口意業の因縁を  
作し、五道生死の中に往來して脱するを得ず、是菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行する時、一切  
の善法は般若波羅蜜の中に内り、菩薩道を行して阿耨多羅三藐三菩提を得。阿耨多羅三藐三  
菩提を得已りて、衆生の爲に四聖諦、苦、苦果、苦滅、苦滅道を説き開示し分別す。一切の助  
道善法は皆四聖諦の中に入る。是助道善法を用ての故に分別するに三寶有り。何等か三  
なる。佛寶と法寶と僧寶となり。是三寶を拒道して信ぜざるが故に、五道の生死を轉るるを  
得ず。一須菩提、佛に白して言さく、「世尊、苦樂諦を用て得度するや、苦智を用て得度す  
るや。集聖諦を用て得度し、集智を用て得度し、滅聖諦を用て得度し、滅智を用て得度し、  
道聖諦を用て得度し、道智を用て得度するや。」佛、須菩提に告げたまはく、「苦樂諦もて  
得度するに非ず、亦苦智もて得度するに非ず、乃至道聖諦もて得度するに非ず、亦道智もて  
得度するに非ず。須菩提、是四聖諦は平等なるが故に、我説く即ち是れ涅槃なり」と。苦樂諦  
を以てせず、集、滅、道聖諦を以てせず、又苦智を以てせず、集、滅、道智を以てせずして涅槃  
を得。一須菩提、佛に白して言さく、「世尊、何等が是れ四聖諦平等なる。」一須菩提、若し苦  
無く、苦智無く、集無く、集智無く、滅無く、滅智無く、道無く、道智無ければ、是を四聖諦の平  
等と名く。二復次に、須菩提、是四聖諦は如にして異ならず、法相、法性、法住、法位、實性、  
有徳にも、無徳にも、法相常住なり。不説不失なるが故に。是菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜  
を行する時、宣説に過違せんが爲の故に般若波羅蜜を行す。一須菩提、佛に白して言さく、

『世尊、云何が菩薩摩訶薩は、實諦に通達せんが爲の故に般若波羅蜜を行じ、實諦に通達するが故に、聲聞辟支佛地に墮せずして直に菩薩位の中に入る。』佛、須菩提に告げたまはく、『若し菩薩摩訶薩、實の如く諸法を見、見じりて無所有の法を得、無所有の法を得じりて一切法空、四聖諦の所攝、四聖諦の所不攝法皆空なりと見る。若し是の如く觀すれば是時便ち菩薩位の中に入る。是を菩薩の性地中に住して頂墮に從はずと爲す。是頂墮を用ての故に、聲聞、辟支佛地に墮す。是菩薩は性地の中に住して、能く四禪、四無量心、四無色定を生ず。是菩薩は是初定地の中に住して、一切諸法を分別し、四聖諦に通達し、苦不生、緣苦心を知り、乃至道不生、緣道心を知り、但阿耨多羅三藐三菩提に順じて、心に諸法の如實の相を觀ず。』世尊、云何が諸法の如實の相を觀する。』佛の言はく、『諸法の空なるを觀するなり。』世尊、何等か空なる。』佛の言はく、『自性空なり。是菩薩は是の如きの智慧を用て、一切法空を觀じ、法性として見るべき無く、是法性中に住して阿耨多羅三藐三菩提を得。何を以ての故に。性相無ければなり。是阿耨多羅三藐三菩提は、諸佛の所作に非ず、辟支佛の所作に非ず、亦阿羅漢の所作に非ず、亦向道の人々の所作に非ず、亦得果の人々の所作に非ず、亦菩薩の所作にも非ず、但衆生の諸法の如實の相を知らず見ず。是事を以ての故に、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ、方便力を以ての故に、是衆生の爲に法を説くなり。』

【二】本品は前半に差別を明し、後半に四諦を辯ず。今之を釋するに先づ佛菩薩の差別について辨釋す。

圖りて曰はく、『佛法と菩薩法とは大に差別有り。佛は是れ一切智、菩薩は未だ是れ一切

智ならず。須菩提は何が故に疑を生じて、佛に、「何等か是れ諸の菩薩法なる、何等か是れ佛法なる」と問へる。』答へて曰はく、此中に佛は菩薩に、佛の所行の如くせしめ、應に是の如く六波羅蜜等乃至一切種智を行すべしと教へたまへり。是故に須菩提問はく、「若し佛の如く行せば、佛と何の異ありや」と。佛其意を可とし、應に是の如く問ふべしとのたまふ。色等の諸法の行處は是れ同じ、但智慧の利鈍に異有り。此中に佛自ら因縁を説きたまはく、菩薩は實の如く六波羅蜜を行すと雖も、而も未だ能く周遍する能はず、未だ一切の門に入る能はず、是故に名けて佛と爲さざるなり。若し菩薩已に一切種智の門に入り、諸法實相の中に入り、一念相應の智慧を以て、阿耨多羅三藐三菩提を得、一切煩惱の習を斷じ、諸法の中に自在力を得ば、爾時名けて佛と爲す」と。月の十四日、十五日は同じく月爲りと雖も、十四日は大海の水をして潮たらしむる能はざるが如し。菩薩亦是の如く、清淨なる實行智慧有りと雖も、未だ諸佛の法を具足する能はざるが故に、一切十方の衆生を動かす能はず。月の十五日は、光明盛にして、滿つる時能く大海の水をして潮たらしむ。菩薩の成就も亦是の如く、大光明を放ちて能く十方國土の衆生を動かす。此中に佛自な譬喩を説きたまはく、「向道得果は同じく聖人爲るも、而も差別有るが如く、菩薩も亦是の如く、行者を名けて菩薩と爲す。初發心より乃ち金剛三昧に至つて、佛は已に果を得、一切の法の中の疑を斷じて、了ぜざる所無きが故に佛と爲す。須菩提復問はく、自相察法の中には差別は不可得なり、謂ゆる是れ地獄乃至天、是れ性人、八人、是れ須陀洹、

乃至佛なり。世尊、地獄等の如く、衆生不可得なれば業因縁も亦不可得なるべし。何を以ての故に、作業者不可得なればなり。業不可得の故に、果報も亦不可得なるべし。佛は云何が佛と菩薩と業別有りと言きたまふや」と。佛、須菩提の意を可とし、遷つて所問を以て答へたまはく、「須菩提、衆生は自性空の法を知らざるが故に、能く善悪の業を起すこと、經中に廣く説くが如し。衆生とは凡夫の未だ正位に入らざる人なり。是人、我心顛倒し、煩惱の因縁の故に、諸の業を起す。業とは三種有り、身と、口と、意となり、是三種の業に二種有り、若し善、若し悪、若し有漏、若し無漏なり。惡業の故に三惡趣に墮し、善業の故に天人の中に生ず。善業に復二種有り、一には欲界繫、二には色無色界繫なり。色無色界繫に生ずる業を不動と名け、不動業の故に色無色界に生ず。若し衆生、自ら諸法の性空を知らば、即ち時に著心を生ぜず。著心を生ぜざるが故に業を起さず、乃至色無色界に生ぜず。實に知らざるを以ての故に生ず。是事を以ての故に、菩薩摩訶薩は、盡く布施等の法、乃至十八不共法を受け、行じて失ふ所無く少くする所無し。乃至如金剛三昧を用て阿耨多羅三藐三菩提を得、大に衆生を饒益す。衆生は是利益を得るが故に、復五道の生死に往來せず」須菩提復問はく、「佛は阿耨多羅三藐三菩提を得る時、實に是五道を得るや不や」と。佛言はく、「得すと。問うて曰はく、『佛は先に「大利益の故に五道に墮せず」と説き、今云何が「得ず」と説きたまへる。』答へて曰はく、『決定して相を取るは邪見なり、邪見は五道の生死に墮して得ず、但凡夫人は顛倒の因縁を以て業を起し、假に五道の生死

有りと名く。其は實に幻の如く夢の如し。復問はく、「黑白等の四種の業を得るや不や」と。佛の言はく、「不」と。黒業とは是れ不善業の果報にして、地獄等の苦惱を受くる處なり。是中の衆生は大に苦惱し、悶極するを以ての故に名けて黒となす。善業の果報を受くる處は謂ゆる諸天にして、其樂を受くること、意に隨つて自在明了なるを以ての故に、名けて白業と爲す。是業は是れ三界の天なり。善、不善業の果報を受くる處は謂ゆる人なり。阿修羅等の八部、此處は、亦是樂を受け、亦是苦を受くるが故に名づけて白黒業と爲す。無漏業は能く不善を破し、有漏業に能く衆生を抜いて、善惡の果報の中を離れしむ。問うて曰はく、「無漏業は是れ白なるべし、何を以てを非白非黒と言ふ。」答へて曰はく、「無漏の法は清淨無垢なりと雖も、空は無相無作なるを以ての故に分別する所無し、故に白と云ふを得ず。黒白は是れ相待の法なり、此中に相待無きが故に白と言ふを得ず。復次に、無漏業は能く一切の諸觀を滅し、中に分別するが故に、黒白有り。此中には觀無きが故に白無し。須菩提復問はく、「若し是四種の業を得ずば、云何が是れ地獄、乃至阿羅漢を分別せん。若し黒業無くんば、云何が是れ地獄、餓鬼、畜生を説くや。若し白業無くんば、云何が是れ天人を説くや。若し黒白業無くんば、云何が是れ阿修羅道を説くや。若し不自不黒業無くんば、云何が是れ須陀洹乃至阿羅漢を説くや」と。佛答へたまはく、「若し一切衆生自ら諸法の自性を知らば、菩薩は阿耨多羅三藐三菩提の意を發さず。亦六道の中に於て衆生を拔出せず、何を以ての故に。衆生自ら諸法の性空なるを知らば、則ち度すべき所無きが

故に。譬へば、病無ければ則ち藥を須ひず、闇無ければ則ち燈明を須ひざるが如し。須菩提、今衆生は實に自相空性を知らざるが故に、心に随つて相を取り著を生ず。著するを以ての故に染み、染むが故に五欲に隨ひ、五欲に隨ふが故に貪の爲に覆はる。貪の因縁の故に慳み、虚誑し、嫉妬し、瞋恚し、鬪諍す。瞋恚を以ての故に諸の罪業を起して識知する所無し。是故に壽終るまで、業因縁に隨つて、彼處に生じ、續いて生死の業を作し、常に六道の中に往來して、復甦まり已むこと無し。是故に菩薩は、諸佛及び弟子の所に於て、諸法の空なるを説くを聞いて衆生を慈愍す。衆生は狂愚顛倒なるを以ての故に著を生ず、我當に作佛して衆生の顛倒を破し、諸法の空相を解せしむべし。所以は何ん。諸法は尚く凡人所著の如くならざればなり。衆生の法は定んで實有る無く、但自ら無所有の中に於て、憶想分別して、望んで所得有りとし、無衆生の中に衆生想を起し、無色の中に色想を起し、無受想行識の中に識想を起す。狂顛倒を以ての故に、是人は能く身口意の業を起し、六道生死の中に於て得脱する能はざるなり。若し但衆生法想を生ずるは、結縛猶輕易にして度するを得べし。食欲瞋恚を生ずるは、是中に於て諸の重業を起す、是を重縛と爲す。此業、果報を受くれば即ち度するを得べきこと難し。譬へば、微塵を積んで山を成すを、是を稼動し得べきこと難きが如し。菩薩は是衆生の爲の故に、其生死の因縁、果報を截せんと欲するが故に、般若の中に於て、一切の善法を攝し、菩薩道を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を得、衆生の爲に四聖諦を説く。謂ゆる苦、苦集、苦滅、滅苦道、種種の因縁を開示



【四】次に四諦を開示する所以を重説す。これ四諦に一切善法を攝すればなり。

し敷演するなり。

問うて曰はく、「佛は無量阿僧祇劫より已來、微妙の法を習ふ。謂ゆる十八不共法、乃至無礙解脱諸の甚深の業なり。何を以てか、但苦集滅道を説きたまへる。」答へて曰はく、「衆生の畏ること急なる所の者は、苦に過ぐる無し。爲に苦を除き已つて、然る後、示すに佛道を以てす、人重病ならば、先病を除くを以て急と爲し、然る後寶物衣服を以て、其身を莊嚴するが如し。苦とは五受衆の身を受くるなり。是れ一切苦の本にして、性即ち是れ苦なり。是苦は略して是を言へば、是れ生老病等なり。經の中に處處に廣く苦を説くが如し。苦集とは愛等の諸の煩惱なり。愛は是れ心中の舊法なり。是を以ての故に佛は、「愛は能く後身を生ず」と説きたまへり。故に是れ苦の因なり。苦の因は即ち是れ集なり。若し人、苦を捨てんと欲せば、先當に愛を斷ずべし。愛を斷ずれば苦則ち滅す、斷愛は即ち是れ苦滅なり。苦滅は即ち是れ道なり。是五衆の種種の因縁、苦及び苦集の過罪を觀ずるは、是れ謂ゆる無常、苦、空、無我にして、病の如く、瘡の如く、怨の如く、賊の如し。八聖道分の中に於ては正見と爲し、餘の七事を見て、助成し發起して、能く一切法の中を斷ず。酒を以て業を發するが如し。此人は一切世間に於て、復食る所無く、苦火を離るるを得て、然る後示すに妙法を以てするなり。復次に、此中に佛自ら因縁を説きたまはく、「謂ゆる四聖諦の中に於て一切の善法を攝す」と。有人言はく、「佛は何を以てか但苦等の四法を説く」と。是を以ての故に、佛は一切助道の善法を説き、皆四諦の中に攝在す。助道

の善法の因縁の故に分別するに三寶有り。衆生は三寶を信ぜざるが故に、六道の生死を離るるを得ず。問うて曰はく、『須菩提は何を以てか是塵間を作して、苦滅を以て苦智滅し、集滅を今て集智滅すと爲す』と言ふ。』答へて曰はく、『此れ塵間に非ず。今の問は苦等の四諦の體を見るが故に滅し、智を用ふるが爲の故に滅す。愛等の諸の煩惱滅するが故に有餘涅槃と名く。若し苦諦を以て道を得ば、一切衆生牛羊等も亦道を得べし。若し苦智を用て道を得ば、則ち苦を離れて智無し。苦智を離るるを名けて苦諦と爲さず、但名けて苦と爲すのみ。苦諦苦智和合するが故に生ず。但苦滅を以てし、但苦智を以てすと云ふを得ず、乃至道諦も亦是の如し。佛答へたまはく、『苦諦を以ても滅せず、亦苦智を以ても滅せず、乃至道諦道智も亦是の如し。我是に四諦の平等を説く、即ち是滅は苦諦滅を用ひず、乃至道諦滅を用ひず。何を以ての故に。是苦等の四法は皆因縁より生ず、虚妄不實にして自性有る無きが故に。名けて實と爲さず、不實の故に、云何が能く滅せん。』問うて曰はく、二諦は有漏、凡夫の行ずる所の法なるが故に、是れ虚誑不實なるべし。道諦は是れ無漏法にして、著する所無し。因縁和合に従つて生ずと雖も、而も虚誑ならず。又滅諦は是れ無爲法にして、因縁に従つて有るにあらず。云何が四法は皆是れ虚誑なりと言ふ。』答へて曰はく、『何に道を得るや、二諦は是れ虚誑なるを知り、將に無餘涅槃に入らんとするや、亦道諦の虚誑なるを知り、空空三昧等を以て道諦を捨離す、椽の喩を説くが如し。滅諦も亦無なれば、無爲も滅す、經の中に説くが如し、有爲を離れて無爲無く、有爲に因るが故に無

爲と説く」と。苦の滅は燈の滅するが如し、應に戲論して其處る所を求むべからず。是故に佛説いて、以て苦を用ひ、乃至道を用ひて滅を得ずとなす。須菩提、佛に問はく、「何者か是れ四諦平等なる」と。佛答へたまはく、「若し八法處、謂ゆる四諦は四諦智無くんば、是れ則ち平等なり」と。「復次に、須菩提、四諦は如實、不誑不異、如、法性、法相、法位、實際、若は有佛、無佛、法相常住にして、心數法及び諸觀を用ひず。但衆生を誑はさざらんが爲の故に一切餘法に住す。皆顛倒して妄に著し、顛倒の果報生ずるが故に、能く人天の喜樂を與ふと雖も、久しうして皆虛誑異し、但一法のみ有り、謂ゆる諸法實相なり。誑はさざるを以ての故に、常住にして滅せず」と。是の如く菩薩は般若波羅蜜を行じ、諸法の實諦に通達す。須菩提復問はく、「云何が菩薩は、通達して實諦を得、聲聞辟支佛を過ぎて菩薩の位に入るや」と。佛答へて言はく、「若し菩薩思惟し籌量して諸法を求むるに、一法として定相を得べきもの有る無く、一切法を見るに皆空なり、若は四諦に在り、若は四諦に在らず、四諦に非ざる虚空は非數緣盡なり、餘は四諦に在り」と。若し是の如く法空を觀すれば、爾時に菩薩の位に入るなり。「問うて曰はく、「何を以てか空亦是空觀を説かずして菩薩の位に入る。」答へて曰はく、「是説を須ひず。何を以ての故に、若し諸法の空を説かば、即ち是れ空にして、空も亦空なり。若し是空、空ならずんば、名けて一切空と爲さず。是故に、是空を行すれば菩薩の位に入るを得るなり。菩薩は是性地の中に住す。性地に墮頂せずとは、謂ゆる菩薩の法位なり。聲聞法の中の煖法、頂法、忍法、世第一法

の如きを名けて性地と爲す。是法は無漏道に隨順するが故に名けて性と爲す。是中に住すれば、必ず望んで道を得。菩薩も亦是の如く、是性地の中に安住して必ず望んで作佛し、能く四禪、四無量心、四無色定を生ず。是菩薩は、禪地の中に在住して心を攝め、諸法を分別し、思惟し、籌量して四諦に通達す。謂ゆる、苦を知見し、亦苦を緣するに非ず、心を生じて苦を知る、是れ凡夫の身を愛くるなり。苦の因縁に著するが故に諸の憂惱を受く。是人身は皆賊の如く怨の如し。無常、空等を得、是を得已つて即時に捨てて苦相を取らず、亦苦諦を緣せず、菩薩法位の力の故に。乃至道諦も亦是の如し。但一心に、阿耨多羅三藐三菩提に廻向して、是四諦を知り、藥病相待して亦是四諦に著せず、但諸法の如實相を觀じて四種の分別觀を作さず。須菩提問ふ、「云何が實の如く、諸法を觀する」と。佛の言はく、「空を觀ぜよ。須菩提、若し菩薩、能く一切の法の若は大、若は小を皆空なりと觀すれば、是を如實觀と名く」と。復問はく、「何等の空を用ふるや」と。佛答へて、「はく、「自相空を用ふべし」と。問うて曰はく、「十八空の中に、佛は何を以てか、但自相空を説くや。」答へて曰はく、「是れ中道空、内外空等なり、是れ小空、畢竟空、無所得空等なり、是れ甚深空、自相空なり、是れ中空なり。自相は理有るものを破するが故に。而も心没せずして、能く甚深空の中に入る。是菩薩は是の如きの法を得て、一切の法は皆空なりと觀じ、乃至、一法の性として住すべきもの有るを見ず。阿耨多羅三藐三菩提を得て諸法を觀するに、阿耨多羅三藐三菩提の如し。阿耨多羅三藐三菩提も、亦自性空にして、佛の所作

大智度論卷第九十四

に非ず、大菩薩の所作に非ず、阿羅漢辟支佛の所作に非ず、常に寂滅の相にして戲論の語言無し。衆生は實相の如く知見する能はず。是故に菩薩は般若波羅蜜を行じ、方便力を以て衆生の爲に法を説く。方便力とは、菩薩無性忍法を得て、菩薩の位に入り、菩薩の第一善諦觀を道達するなり。是道相は、甚深微妙にして得無く捨無く、妙智力を用ふるすら不可得なり、何に況んや口説し得べけんや。大悲心もて深く衆生を念するも、空事を以ての故に三惡通に墮して大劇苦を受く。若し我是法を直説するに、則ち信せず受けざれば、則ち法を破壊して地獄に墮す。我今當に一切の善法を成就し、身の三十二相を莊嚴して衆生を引導し、無量無邊の諸佛の神通力を起して佛道を成ずるを得、一切衆の中の主にして、諸法に於て自在を得しむべし。若し惡法を讀する衆生すら、猶尙愛くべし、何に況や實法をや。是菩薩は所願の如く思惟し、行じ、衆生の爲に説いて皆度脱せしむ。

# 大智度論釋七喻品第八十五

卷第九十五

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

須菩提佛に白して言さく、「世尊、若し諸法の性は無所有にして佛の所作に非ず、辟支  
 佛の所作に非ず、阿羅漢の所作に非ず、阿那含の所作に非ず、斯陀含、須陀洹の所作に非  
 ず、向道人に非ず、得果人に非ず、諸の菩薩の所作に非ずんば、云何が分別して、證法  
 の異有つて、是れ地獄、是れ畜生、是れ餓鬼、是れ人、是れ天、乃至非有想非無想人とせ  
 ん。是業因縁を用ての故に、地獄に生ずる者有りと知り、是業因縁の故に畜生餓鬼に生  
 る者有りと知り、是業因縁の故に人中に生じ、四天王天に生じ、乃至非有想非無想人に生  
 ずる者有りと知り、是業因縁の故に須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛を得る者有  
 りと知り、是業因縁の故に、是れ諸の菩薩摩訶薩なりと知り、是業因縁の故に、是れ多  
 陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀なりと知らんや。世尊、無性法の中には、業用有る無ければ、  
 作業の因縁の故に、若は地獄餓鬼畜生に墮し、若は人天に生じ、乃至非有想非無想人に生  
 ず。是業因縁を以ての故に、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、菩薩摩訶薩を得ず、  
 菩薩道を行じて、當に一切種智を得べく、一切種智を得るが故に、能く衆生を生死の中よ

り拔出すとせんや。』佛、須菩提に告げて言はく、『是の如し、是の如し。無性法中には業  
 無く果報無し。須菩提、凡夫人は聖法に入らず。諸法の無性相を知らずして、顛倒愚痴の  
 故に種種の業因縁を起す。是諸の衆生は、業に随つて身を得。若は地獄身、若は畜生  
 身、若は餓鬼身、若は人身、若は天身、若は四天王身、乃至非有想非無想天身なり。是無  
 性法は業無く果報無く、無性は常に是れ無性なり。須菩提、言ふ所の如く、『若し一切法  
 無性ならば、云何が是れ須陀洹乃至諸佛は一切種智を得んや』とは、須菩提、汝が意に於  
 て云何。道は是れ無性なりや不や。須陀洹果乃至諸佛の一切種智は無性なりや不や。須菩  
 提言さく、『世尊、道は無性なり、須陀洹果も亦無性なり、乃至諸佛の一切種智も亦無性  
 なり。』『須菩提、無性の法は能く無性の法を得るや不や。』『不、世尊。』『佛、須菩提に告げ  
 て言はく、『有性の法能く有性の法を得るや不や。』『不、世尊。』『須菩提、無性の法及び  
 道等、是一切法は皆合せず散ぜず、色無く形無く、對する無く、一相謂ゆる無相なり。須  
 菩提、是菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行する時、方便力を以て衆生を見るに、顛倒を以ての  
 故に、五衆に著す。無常の中に常相ありとし、苦の中に樂相ありとし、不淨の中に淨相あ  
 りとし、無我の中に我相ありとし、無所有處に著す。是菩薩は方便力を以ての故に、無所  
 有の中に於て衆生を拔出す。』須菩提、佛に白して言さく、『世尊、凡夫人の著する所、  
 顛倒實に不異不著の故に業を起し、業因縁の故に、五道生死の中より脱するを得ざる有り  
 や。』佛、須菩提に告げて言はく、『凡夫人の著する所、及び業を起す所は、毛髮計の如き

も實の事無し。但顛倒の故に。須菩提、今汝の爲に譬喩を説かん、智者は譬喩を以て解するを得。須菩提、汝が意に於て云何、夢中に見る所の人の五欲の樂を受くるが如きは、實に住處有りや不や。』須菩提、佛に白して言さく、『世尊、夢すら尙虚妄不可得なり、何に況んや夢中に住して五欲の樂を受くるをや。』汝が意に於て云何、諸法の若は有漏、若は無漏、若は有爲、若は無爲、頗し夢の如くならざるもの有りや不や。』世尊、諸法の若は有漏、若は無漏、若は有爲、若は無爲にして、夢の如くならざる者無し。』佛、須菩提に告げて言はく、『汝が意に於て云何、夢中に五道生死の往來有りや不や。』世尊、無なり。』汝が意に於て云何、夢中に道を修すること有つて、是修道を用て、若は垢に著く、若は淨を得るや不や。』不、世尊。何を以ての故に。是夢法は實事有る無く、垢淨を説くべからざればなり。』汝が意に於て云何、鏡中の像は實事有りや不や。能く業因縁を起し、是業因縁を用て、地獄餓鬼畜生の中に墮し、若は人、若は天、四天王天處、乃至非有想非無想天處に生ずるや不や。』須菩提の言さく、『不、世尊。是像に實事有る無く、但小兒を誑はすのみ。是事云何が當に業因縁有るべき、是業因縁を用て當に地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずべけんや。』汝が意に於て云何、是鏡中の像に修道有りて、是修道を用て、若は垢に著し、若は淨を得るや不や。』須菩提言さく、『不、世尊。何を以ての故に、是像は空にして實事無く垢淨を説くべからざればなり。』汝が意に於て云何、深淵の中に響有るが如きは、是響に業因縁有り。是業因縁を用て若は地獄に墮し、乃至若は非有想非無想



處に生ずるや不や。』須菩提言さく、『不、世尊。是事は空にして實の音聲有る無し。云何が當に業因縁有り、是業因縁を用て地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずべけんや。』  
 『汝が意に於て云何、是響は頗し修道有りて、是修道を用て、若は苦に著し、若は淨を得るや不や。』  
 『不、世尊。是事實無く、是れ垢、是れ淨なりと説くべからず。』  
 『汝が意に於て云何、焔の如し、水は水相に非ず、河は河相に非ず、是焔、頗し業因縁有り、是業因縁を用て、地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずるや不や。』  
 『不、世尊。焔の中に、水は畢竟得べからず、但無智の人の眼を誑はすのみ。云何が當に業因縁あり、是業を用て地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずべけんや。』  
 『汝が意に於て云何、是焔に修道有つて、是修道を用て若は垢に著し、若は淨を得るや不や。』  
 『不、世尊。是焔に實事有る無く、垢淨を説く可からず。』  
 『汝が意に於て云何、提闍婆城の、日出づる時、提闍婆城を見るが如く、無智の人は城無きに城有りと想ひ、魔観無きに魔観有りと想ひ、國無きに國有りと想ふ。是提闍婆城、頗し業因縁有り。是業因縁を用て地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずるや不や。』  
 『不、世尊。是提闍婆城は畢竟得べからず、但愚夫の眼を誑はすのみ。云何が當に業因縁有り、是業因縁を用て地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずべけんや。』  
 『汝が意に於て云何、是提闍婆城に修道有り、是修道を用て若は垢に著し、若は淨を得るや不や。』  
 『不、世尊。是提闍婆城に實事有る無く、垢淨を説くべからず。』  
 『須菩提、汝が意に於て云何、幻師の幻作する種種の物、若は象、若は馬、若は牛、若は羊、若は男、若は女

【一】本品は甚深般若の難解難入なるを譬喩もて説示するものに、今之を釋するに、先づ前

等は、汝が意に於て云何、是幻は業因縁有り、是業因縁を用て、地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生するや不や。」「不、世尊。是幻法は空にして實事無し。云何が當に業因縁有り、是業因縁を用て地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生すべけんや。」「汝が意に於て云何、是幻、修道有りて、是修道を用て、若は垢に著し、若は淨を得るや不や。」「不、世尊。是法は實事有る無く、垢淨を説くべからず。」「須菩提、汝が意に於て云何、佛の所化の人の如き、是化人業因縁有り、是業因縁を用て、地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生するや不や。」「不、世尊。是化人は實事有る無し、云何が當に業因縁有るべく、是業因縁を用て地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生すべけんや。」「汝が意に於て云何、是化人、修道有りて、是修道を用て若は垢に著し、若は淨を得るや不や。」「不、世尊。是事實有る無く、垢淨を説くべからず。佛、須菩提に告げて言はく、汝の意に於て云何、是空相の中に於て、垢者有り、淨者有りや不や。」「不、世尊。是中に所有無く、垢に著する者有る無く、淨有る者無し。須菩提、垢に著する者有る無く、淨有る者無きが如く、是因縁を以ての故に、亦垢淨無し。何を以ての故に。我我所に住する衆生は垢有り淨有り、實を見る者は垢ならず淨ならず、實に見る者の垢ならず淨ならざるが如く、是の如く亦垢淨有る無きが故に。」「

問うて曰はく、「佛已に處處に是事を答ふ。今須菩提は何を以てか得聞ふや。」「答へて曰はく、「義は一なりと雖も所因の事の異なるが故なり。」「明ゆる一切の法は、若は佛有るも、若は佛無きも、諸法の性は常住にして空に所有無く、賢聖の所作に非ず。般若波羅蜜は甚

品に説く差別は、  
本來性空なるがた  
めには無差別なる  
も衆生妄見の故に  
顛倒心を生じて差  
別を執するを破せ  
釋す。ための故なるを

深微妙にして解し難く、量り難し。有量を以て能く知るべからず。諸佛賢聖は衆生を降惑す  
るが故に、種種の語言、名字、譬喩を以て爲に説きたまへり。利根の者は聖人の意を解し、  
鈍根の者は處處に著を生ず。語言名字に著して、若し空と説くを聞かば則ち空に著し、空  
も亦空と説くを聞かば亦復著を生ず。若し一切法は寂滅の相にして、語言の道斷めと聞  
も、而も亦復自心に著して清淨ならざるが故に、聖人の法を聞いて清淨ならずと爲す。  
人の目翳にして清淨の珠を觀るに、其目の影を見て、便ち珠を不淨なりと謂ふが如し。  
佛種種の内縁を説きたまふに、過罪有るを見て、疑を生じ、是言を作さく、「若し一切の  
法は空、空も亦空ならば、云何が六道有りて常に生ずと分別せんや」と。是の如き等の疑  
難の故に、須菩提は經の將に説らんとするを以て、衆生の爲に所所に是事を問ふ。是故に  
重ねて問ひ、佛は須菩提の意を可したまふなり。問うて曰はく、「須菩提は有を以て空を  
難す、佛は云何が其意を可したまふや」と答へて曰はく、「佛は其説を可したまはく、「諸法  
は空にして常住なり、佛有るも佛無きも異らず」と。其難を可さずんば、云何が六道等有  
りと分別せん、何を以ての故に。其難を以て空を破せんと欲するが故に。是中に佛其所難  
を解したまふ。謂ゆる凡夫の人は教法に入らず、未だ聖道を得ず、無所有の性を知らず、  
善く空三昧を修習せざるが故に。顛倒とは四顛倒なり。愚癡とは三賢聖の無明なり。餘の  
顛倒を説かずと雖も、而も此二法は虚誑不實にして顛倒せり。即ち是れ妄語虚誑なり。若  
し顛倒所生の業及び果報に從へば、根本不實なるを以ての故に、衆生深著すと雖も、亦

定實無し。是を以ての故に、五道は皆空にして但假名のみ有り。又汝諸の賢聖を難するも、是諸の賢聖は、顛倒差別を斷ずるが故に異名有り、顛倒不實なるを以ての故に斷ずる所無し。又復無所有を滅失するが故に、名けて斷と爲す。若し實に法として斷すべき有るも、尚法を斷する無し、何に況んや顛倒をや。是故に、一切賢聖の果は、皆是れ無所有なり。顛倒を斷すれば、即ち是れ聖人の果なり。果は即ち是斷を果とす。修する所の道も亦同じく無所有なり。是故に道を修する時は、必ず當に空無相無作を用ふべし。道と果とは分別あるが故に賢聖に差別有り、今實に無所有の法は無所有を得る能はず、云何が差別有らんや。是故に難に應ぜず。須菩提意へらく、「若し顛倒するが故に世間有り。若し顛倒有らば亦應に實有るべし、虛實相待するが故に」と。是故に問はく、「世尊、凡夫の著する所、顛し實に有りて生じ、業を起すに著すれば業因縁の故に六道の生死解脫するを得ず」と。佛答へて言はく、「不」と。何を以ての故に。此中に佛自ら因縁を説きたまはく、「即ち但顛倒の故に著を生ず、若し顛倒無くんば、云何が相待の實法有らん、乃至毫釐許の實事もなく、畢竟無なるが故に」と。問うて曰はく、「此は是れ諸佛所行の實義なり、謂ゆる畢竟空なり。此は實に非ざるや。」答へて曰はく、「是第一義空も亦分別に因り、凡夫の顛倒の故に説く。若し顛倒無くんば、亦第一義無し。若し凡夫の顛倒に多少の實有らば、第一義も亦應に實有るべし。問うて曰はく、「若し二俱に實ならざれば云何が解脫を得ん。人の手の垢を洗ふに還つて垢を以てするが如きは云何が淨なるを得ん。」答へて曰はく、「諸法の實相は畢

【二】右の義を七  
先づ一に夢中に五  
欲を受くるの譬に  
ついて。

究竟、第一義にして、實に清淨なり。凡夫は顛倒して不清淨の法有るを以ての故に、此  
 清淨の法有り。破壊すべからず、變異せざるが故に、人の諸法實相に於て著欲を起し、  
 煩惱を生ずるを以て、是故に、是法性を空にして所有無しと説く。所有無きが故に實無し。  
 二法皆不實なりと雖も、而も不實の中に差別有り、十善十不善の二事の如く、皆有爲法の  
 故に、虚誑不實にして、善不善の差別有り。殺生法の故に惡道に墮し、不殺の故に天上に  
 生ず。布施、偷盜の二事の如し。相を取り心に著すと雖も、是れ虚誑不實にして、亦差別  
 有り。衆生、乃至知者、見者も所有無きも、而も衆生を憐せば、大罪有り。衆生を慈念せ  
 ば大福有るが如し。慈の能く瞋を破し、施の能く慳を破するが如し。二事俱に是れ不實な  
 りと雖も、而も能く相破す。是故に佛説きたまはく、「諸法は根本定實にして、毫釐許の如  
 きも所有有る無し」と。  
 (三)是事を證明せんと欲するが故に、夢中に五欲を受くるの譬喩を説く。須菩提意へ、わく、  
 「若し一切法は畢竟空にして無所有の性ならば、今何を以ての故に、現に眼に見、耳に法  
 を聞くこと有るや」と。是を以ての故に佛は夢の譬喩を説きたまへり。人の夢力の故に、  
 實事無しと雖も而も種種の聞見、瞋處、喜處有り、覺めたる人の傍に在るに、則ち見る  
 所無きが如く、是の如し。凡夫人は、無明顛倒の力の故に、妄に見る所有り。聖人は覺悟  
 すれば則ち見る所無し。一切法は、若是有漏、若は無漏、若是有爲、若は無爲にして、皆  
 不實虚誑の故に見聞有り。又夢中に六道の生死往來を見るが如く、須陀洹乃至阿羅漢を見

【鏡中の等】次の六喻を合釋して結す。

る。夢中むちゆうには是法こつぽう無なきも而も夢ゆめ見るなり。夢中むちゆうには實じつに淨じやうも無なく、垢くも無なし、業ごふ、果報くわふ、六道ろくどうも亦是またの如ごとし。顛倒てんたうの因緣いんげんの故ゆゑに業ごふを起おこす。業ごふ、果報くわふも亦また應おほに空くうなるべし。顛倒てんたうを除却じやくするが故ゆゑに名なけて道どうと爲なす。顛倒てんたうは實じつ無なきが故ゆゑに、道どうも亦また應おほに實じつなるべからず。鏡中きやうぢゆうの像ざう、響きやう、焰えん乃至たいてい化けの如ごときも亦是またの如ごとし。佛ぶつ、須菩提しよぼだいに反問はんもんしたまはく、「是法こつぽうの中なかにに於おて、垢くなる者もの有り、淨じやうなる者もの有りや不なや」と。須菩提しよぼだい意いへらく、「一切いつせつ法ぽうの中なかにには我わが無なし、云何いんなんが當あたる者ものあり、淨じやうあると説とくべけんや」と。是故こゝに無なと言いふ。佛ぶつ、言いはく、「若しし垢くを受け、淨じやうを受うくる者もの無なくんば、垢く淨じやうも亦また無なけん」と。問とうて曰いはく、「若しし諸法しよぽうを分別せつべつすれば、阿毘曇あびだん等の經きやうの中なかにには、垢く有り、淨じやう有り、但ただ垢淨くじやうを受うくる者もの無なし。三毒さんどく等の諸しよの煩惱ぼんノウは是れ垢く、三解脱門さんげつだつもん、諸しよの助道法じよどうぽう等は是れ淨じやうなり。」答こたへて曰いはく、「是説こゝ有り」と雖も是事こゝは然しからず、若し衆生しゆじやうの法ぽう、所屬しよじやく無なくんば、亦また作者しやう無なし。若し作者しやう無なくんば、亦また作法しやくぽう無なく、縛ばく無なく、解げ無なし。人ひとの火ひの爲ために燒やかるるや、畏おそれて之これを捨離しりす、火ひの火ひを離はなるるに非あらず。衆生しゆじやうも亦是またの如ごとく、五衆ごしゆじやうの苦くを畏おそるるが故ゆゑに捨離しりす、苦くの苦くを離はなるるに非あらず。若し垢淨くじやう無なくんば解脫げだつ有あること無なし。復次またに、佛ぶつ此中こゝに自ら因緣いんげんを説ときたまはく、「所謂しよゐ我我わがの中なかにに住するが故ゆゑに、衆生しゆじやうは垢くを受け、淨じやうを受うく。我わがは畢竟びやくじやう無ななるが故ゆゑに、垢淨くじやうに住す處ところ無なく、住處じゆじよ無なきが故ゆゑに、垢く無なく淨じやう無なし」と。問とうて曰いはく、「我わがに我見わがけん無なしと雖も、實じつに凡人ぼんなん有あつて此中こゝに住すして、諸しよの煩惱ぼんノウを起おこす。」答こたへて曰いはく、「若し我わがに我見わがけん無なくんば所緣しよげん無なし。所緣しよげん無なくんば、云何いんなんが生しやうずるを得えん。」問とうて曰いはく、「我わが無なしと雖も、五衆ごしゆじやうの中なかにに於おて邪行じやくぎやうす。

謂く我有りて我見を生じ、五衆は是れ我我所なり。」答へて曰はく、「若し五衆の中に定んで我見を生ずる因縁を以てせば、他の五衆の中に於て何を以ての故に生ぜざらん。若し他の五衆に於て生ぜば、則ち人に錯亂を爲す。是故に我見に定縁行る無く、但顛倒の故に生ず。」問うて曰はく、「若し顛倒して生ぜば、何を以ての故に但自ら己身に於て見を生ずる。」答へて曰はく、「是れ顛倒狂錯して其實事を求むべからず。又復無始の生死の中より來、自ら相續する五衆の中に於て著を生ず。是故に佛説きたまはく、「我心に住する衆生は、垢を受け、淨を受く。又實に見る者は、垢ならず淨ならず」と。是因縁を以ての故に、垢無く淨無し。垢無く淨無しとは、諸法の實相を見たる人なり。諸法の實相に於て亦著せず、是故に無垢なり。諸法の實相は、相として取るべき無し、是故に無淨なり。復次に、八聖道の中に著せざる、是を無淨と名く。諸の煩惱を除き、顛倒に著せざる、是を無垢と名く。」

大智度論釋平等品第八十六

須菩提、佛に白して言さく、「世尊、實を見る者は不垢不淨なり、不實を見る者も亦不垢不淨なり。何を以ての故に、一切の法性は所有無きが故に。世尊、無所有の中に垢無く淨無くば、所有の中にも亦垢無く淨無し。世尊、無所有の中にも、有所有の中にも亦垢

無く淨無し。世尊、云何が如實語の者の不垢不淨なるに、不實語の者も亦不垢不淨なりや。佛、須菩提に告げて言はく、『是諸法平等の相は、我を淨なりと説く。』須菩提、何等か是れ淨、是れ諸法平等なる。謂ゆる不異、不誑、法相、法性、法住、法位實際の如き有佛無佛にも法性常住なり。是を淨と名く。世諦の故に説く、最第一義に非ず、最第一義は、一切の語言、論議、音聲を超ゆ。須菩提、佛に白して言さく、『世尊、若し一切法は空にして説くべからずんば、夢の如く、響の如く、煙の如く、影の如く、幻の如く、化の如くならん。菩薩摩訶薩は云何が是夢の如く、響の如く、煙の如く、影の如く、幻の如く、如く、化の如き法を用て、根本定實有る無きや、云何が能く阿耨多羅三藐三菩提心を發し、是願を作す。我當に檀波羅蜜を具足し、乃至般若波羅蜜を具足すべし。我當に神通波羅蜜を具足し、智波羅蜜を具足し、四禪、四無量心、四無色定、四念處を具足し、乃至八聖道分を具足すべし。我當に三解脱門、八背捨、九次第定を具足すべし。我當に佛の十力を具足し、乃至十八不共法を具足すべし。我當に三十二相、八十隨形好を具足すべく、我當に諸の陀羅尼門、諸の三昧門を具足すべく、我當に大光明を放ちて遍く十方を照し、諸の衆生の心を知り、如應に法を説くべしとせんや。』佛、須菩提に言はく、『汝が意に於て云何。汝が説く所の諸法は、夢の如く、響の如く、煙の如く、影の如く、幻の如く、化の如くなりや不や。』須菩提言さく、『爾り、世尊、若し一切の法は、夢の如く乃至化の如くならば、菩薩摩訶薩は、云何が般若波羅蜜を行ぜん。世尊、是夢乃至化は虚妄不實な



り。世尊、是不實虛妄の法を用て、能く檀波羅蜜乃至十八不共法を具足すべからず。「佛、須菩提に告げて言はく、『是の如く、是の如し。不實虚妄の法は、檀波羅蜜乃至十八不共法を具足する能はず。是不實虚妄の法を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を得る能はず、須菩提。是一切の法は、皆是れ憶想思惟の作法なり。是思惟憶想の作法を用ては、一切種智を得る能はず。須菩提、是一切の法は、助道法を能くして其果を益する能はず。謂ゆる是諸法は、無生、無出、無相なり。菩薩の初發意より已來、作す所の善業、若し檀波羅蜜乃至一切種智は、何を以ての故に、諸法皆夢の如く、乃至化の如しと知る。是の如き等の法は、檀波羅蜜乃至一切種智を具足せず、衆生を成就し、佛國土を淨むるを得、阿耨多羅三藐三菩提を得る能はず。是菩薩摩訶薩の作る所の善業、檀波羅蜜乃至一切種智は、夢の如く、乃至化の如しと知り、亦一切衆生も、夢の中に行ずるが如しと知り、乃至化の中に行ずるが如しと知る。是菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を是れ不合法なりとして取す。是不取を用ての故に、一切種智を得、是諸法は、夢の如くにして取る所無く、乃至諸の法は化の如くにして取る所無しと知る、何を以ての故に、般若波羅蜜は、是れ取るべからざるの相、禪波羅蜜乃至十八不共法は、是れ取るべからざるの相なればなり。是菩薩摩訶薩は一切法は、是れ取るべからざるの相なりと知り已りて、發心して阿耨多羅三藐三菩提を求む。何を以ての故に。一切法の取るべからざるの相にして、根本定實無く、夢の如く、乃至化の如く、取るべからざるの相法を用て、

取るべからざるの相法を得る能はざるが故に。但衆生は是の如き諸法の相を知らず、又見  
 ざるを以て、是菩薩摩訶薩は、是衆生の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提を求む。是菩薩は、  
 初發意より已來、有ゆる布施は、一切衆生の爲の故に、乃至修習する所の所有の智慧は、  
 皆一切衆生の爲にして己身の爲にせず、菩薩摩訶薩は、餘事の爲にせざるが故に阿耨多羅  
 三藐三菩提を求む。但一切衆生の爲の故に。是菩薩般若波羅蜜を行する時、衆生を見るも  
 衆生無く、但衆生相の中に住し、乃至知者無く見者無く、知見の中に住して、衆生をして  
 顛倒を遠離せしむ。遠離し已つて、甘露性の中に置いて住す。是中に住するも、妄相、謂  
 ゆる衆生相、乃至知者見者相有る無し。是時に、菩薩は動心、念心、戲論心を皆捨てて、  
 常に不動心、不念心、不戲論心を行す。須菩提、是方便力を以ての故に、菩薩摩訶薩は、  
 般若波羅蜜を行する時、自ら著する所無く、亦一切衆生をして著する所無からしむ。世諦  
 の故に第一義に非ず。』須菩提、佛に白して言さく、『世尊、世尊の阿耨多羅三藐三菩提を  
 得る時、諸の佛を得。世諦なるを以ての故に得るや、第一義の中なるを以て得るや。』佛  
 の言はく、『世諦なるを以ての故に、佛、是法を得たりと説く。是法の中に法を得て、是人  
 法を得たりとすべきもの有る無し。何を以ての故に。是人の是法を得るは、是を大有所得  
 と爲し、二法を用ふるは道無く果無ければなり。』須菩提、佛に白して言さく、『世尊、若し  
 二法を行じて、道無く果無くんば、不二法を行するは道有り果有りや不や。』佛の言はく、  
 『二法を行じて、道無く果無くんば、不二法を行するも亦道無く果無し。若し二法無くん

ば、不二法も無し。即ち是れ道、即ち是れ果ならんや。何を以ての故に。是の如きの法を用て道を得、果を得、是法を用て道を得ず果を得ずとは、是を戲論と爲せばなり。諸の平等法の中には戲論有る無し。無戲論の相は是れ諸法平等なり。須菩提、佛に白して言さく、『世尊、諸法は無所有の性なれば、是中、何等か是れ平等なる。』佛言はく、『若し有法無くんば、無法有る無し。亦諸法平等相をも説かず、平等を除いて更に餘法無く、一切の法を離るるは、平等相なり。平等相とは、若し凡夫、若し聖人も行する能はず、到る能はざるなり。』須菩提、佛に白して言さく、『世尊、乃至佛も亦行する能はず、到る能はざるや。』佛の言はく、『是諸法の平等は、一切の聖人も皆行する能はず、到る能はず。謂ゆる諸の須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、諸の菩薩摩訶薩及び諸佛なり。』須菩提、佛に白して言さく、『世尊、佛は一切諸法の中に行力自在なり。云何が佛も亦行する能はず、到る能はずと説く。』佛、須菩提に告げて言はく、『若し諸法平等と佛し、異有らば、應當に是の如く問ふべし、須菩提、今諸の凡夫人は平等なり、諸の須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、諸の菩薩摩訶薩、諸佛及び聖法皆平等なり。是れ一平等にして無二なりや』と。謂ゆる是れ凡夫人、是れ須陀洹乃至佛なり。是一切法平等の中に皆不可得なり。』須菩提、佛に白して言さく、『世尊、若し諸法平等の中には皆是れ凡夫人乃至是れ佛ならば、世尊、凡夫人と、須陀洹、乃至佛と、分別有る無しと爲すや。』佛、須菩提に告げて言はく、『是の如し、是の如し。諸法平等の中には、是れ凡夫人、是

須陀洹、乃至、是れ佛世尊なりと分別すること有る無し。『世尊、若し諸の凡夫人、  
 須陀洹、乃至、佛の分別無くんば、云何が三寶ありと分別せん。現に世間に於て佛寶、法  
 寶、僧寶あり。』佛の言はく、『意に於て云何、佛寶、法寶、僧寶と諸法等と異なるや不や。』  
 須菩提、佛に白して言さく、『我佛より聞く所の義の如くんば、佛寶、法寶、僧寶と、諸  
 法と等しくして異り有る無し。世尊、是佛寶、法寶、僧寶は、即ち是れ平等なり。是法は、  
 皆合せず散ぜず、色無く形無く、對無く、一相、謂ゆる無相なり。佛は是力有つて、能く  
 無相諸法處の所を分別す。是れ凡夫人、是れ須陀洹、是れ斯陀含、是れ阿那含、是れ阿羅  
 漢、是れ辟支佛、是れ菩薩摩訶薩、是れ諸佛なり。佛、須菩提に告げて言はく、『是の如  
 し是の如し。諸佛、阿耨多羅三藐三菩提を得て、諸法を分別せざれば、當に是れ地獄、是  
 れ餓鬼、是れ畜生、是れ人、是れ天、是れ四天王天、乃至是れ他化自在天、是れ梵天、乃  
 至是れ非有想非無想處天、是れ四念處乃至八聖道分、是れ內空乃至是れ無法有法空、是れ  
 佛の十力乃至是れ十八不共法なりと知るべきや不や。』須菩提言さく、『知らず、世尊。』是  
 を以ての故に、須菩提、當に知るべし、佛に大恩力有つて、諸法平等の中に於て、動ぜず  
 して而も諸法を分別す。』須菩提、佛に白して言さく、『世尊、佛の諸法平等の中に於て動  
 ぜざるが如く、凡夫人も亦諸法平等の中に於て動ぜず、須陀洹乃至辟支佛も亦諸法平等の  
 中に於て動ぜず。世尊、若し諸法等相ならば、即ち之れ凡夫人の相、即ち是れ須陀洹の相、  
 乃至諸佛、即ち是れ平等の相なり。世尊、今諸法は各各の相、謂ゆる色相の異、受想行識

相の異、眼相の異、耳鼻舌身意相の異、地相の異、水火風空識相の異、欲相の異、瞋癡相の異、邪見相の異、禪相の異、無量心相の異、無色定相の異、四念處の相異、乃至八聖道分相の異、檀波羅蜜相の異、乃至般若波羅蜜相の異、三解脱門相の異、十八空相の異、佛の十力相の異、四無所畏相の異、四無礙智相の異、十八不共法相の異、有爲法性の異、無爲法性の異、是凡夫人相の異乃至佛相の異有りて、諸法各各の相異なる。云何が菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行する時、諸法の異相の中に分別を作さざらん。若し分別を作さずんば、般若波羅蜜を行する能はず。若し般若波羅蜜を行せざれば、一地より一地に至る能はず。若し一地より一地に至らざれば、菩薩の位に入る能はず。菩薩の位に入る能はざるが故に、聲聞辟支佛地を過ぐる能はず。聲聞辟支佛地を過ぐる能はざるが故に、神通波羅蜜を具足する能はず。神通波羅蜜を具足せざれば、檀波羅蜜を具足する能はず。乃至般若波羅蜜を具足する能はず。一佛國より一佛國に至つて諸佛を供養し、諸佛の所に於て善根を種ゑ、是善根を用て、能く衆生を成就し、佛國土を淨むる能はず。佛、須菩提に告げて言はく、汝が問ふ所の如く、是諸法相も亦是れ凡夫人なり、亦是れ須陀洹乃至佛なり。世尊、是諸法は各各の相、謂ゆる色相の異、乃至有爲無爲相の異なるに、云何が菩薩摩訶薩は、一相を觀じて分別を作さざるや。須菩提、汝が意に於て云何。是色相は空なりや不や、乃至諸佛の相は空なりや不や。世尊、實に空なり。須菩提、空の中に各各の相法は得べきや不や。謂ゆる色相乃至諸佛相なり。須菩提言さく、『得べからず。』佛言はく、

「是因縁を以ての故に、當に知るべし、諸法平等の中には、凡夫人に非ず、亦凡夫人をも離れず、乃至佛に非ず、亦佛をも離れず。」須菩提、佛に白して言さく、「世尊、是平等は、是れ有爲法と爲んや、是れ無爲法と爲んや。」佛言はく、「有爲法に非ず、無爲法に非ず。何を以ての故に。有爲法を離れて無爲法を得べからず、無爲法を離れて有爲法を得べからざればなり。須菩提、是有爲性無爲性、是二法は、合せず散せず色無く、形無く、對無く、一相、謂ゆる無相なり。佛も亦世諦なるを以ての故に説く、第一義を以てするに非ず。何を以ての故に。第一義の中には身行無く、口行無く、意行無く、亦身口意の行を離れずして第一義を得ればなり。是諸の有爲法、無爲法の平等相、即ち是れ第一義なり。菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、第一義の中に動ぜずして、而も菩薩の事を行じ、衆生を饒益す。」

【三】本品は、前品に續いて諸法平等にして成佛すべき義を明す。今之を釋するに、先づ諸法平等の義を細釋す。

釋して曰はく、「須菩提は、佛の「實見の者と妄見の者と異なる無し。垢淨の見無きが故に」と答へたまへるを思惟し、思惟し已つて佛に問はく、實を見る者は無垢無淨にして、不實を見る者も亦不垢不淨なりや」と。一切の法性は無所有なるが故に、無所有の中には無垢無淨にして、所有の中にも亦無垢無淨なり。斷滅の見有る所無きが故に應に垢淨有るべからず。所有の中には常見の故に、應に垢淨有るべからず。所有若し決定して是れ有らば、則ち因縁より生ぜず、因縁より生ぜざるが故に常なり、常の故に無垢無淨なり。須菩提、佛に白して、「實に見ると、實に見ざるとは、是義云何」と。佛答へたまはく、「垢淨に

別相無しと雖も、諸法の平等を説くべきが故に、是を名けて淨と爲す」と。若し分別して垢淨の相を説かば、是事は然らず。一切の法は平等なるが故に、我説いて淨と名く。佛、須菩提に告げたまはく、「諸法實相、如、法性、法住、法位、實際は是れ平等なり。菩薩は是等の中に入りて、心に憎愛無く、是法は佛有るも佛無きも常住にして、作法皆是れ虚誑なり。是故に無作法と説き、佛有るも、佛無きも常住なりと説く。聽く者、心に即ち相を取つて是諸法は平等なりと著す。人の指を以て月を指すに、知らざる者は、但其指を視て月を視ざるが如し。是故に佛説きたまはく、「諸法平等の相も亦是の如く皆世諦なり」と。世諦は實に非ず、但事を成辨するが爲の故に説くなり。譬へば、金を以て草と質ふるが如し。知らざる者は言はく、「何を以てか貴きを以て賤きに易ふるや」と。答へて曰はく、「我事に用ふべきが故に」と。是平等は不可成にして、一切の名、語言、音聲、悉く斷ず。何を以ての故に。諸法平等は是れ無戲論寂滅の相にして、但覺觀せる散心の中に語言有るのみなるが故に時説有るなり。須菩提は佛に従つて、諸法平等の相を聞き、其旨趣を解し、諸の新發意の菩薩の爲の故に問はく、「世尊、若し一切法は空にして説くべからざることを夢の如く、乃至化の如くならば、云何が菩薩は無根本法の中に於て、而も心を生じて、是頌を生ず。我當に檀波羅蜜を具足すべし、乃至衆生の爲に應ずる如く法を説くべし」と。佛、反問を以て答へたまはく、「須菩提、布施等、乃至陀羅尼門の說法等、此諸の法は、幻の如く、夢の如き等に非ずや」と。須菩提言さく、「實に爾り。是諸の法は、

利益有りりやくちと雖いへども、而しかも夢ゆめの如ごときの法ほつを出いでず」と。須しよ菩提ぼだい復たふ問もんはく、「世せ尊そん、夢ゆめ等とうの法ほつは、皆みな虛こ妄まう不ふ實じつなり。菩ぼ薩ざつは實じつ法ほつを求もとめんが爲ための故ゆゑに、般はん若にや波は羅ら蜜みつを行まうじて佛ぶつ道だうを得える。云いん何なんが不ふ實じつ法ほつを行まうする。不ふ實じつ法ほつは檀だん波は羅ら蜜みつ等とうを行まうする能あたはず」と。佛ぶつ、須しよ菩提ぼだい提だいの言ごんを可ゆるして言たまはく、是なの如ごとし、是なの如ごとし。布ふ施せ等とうの法ほつは、皆みな是なれ思し惟あし、悟ご想さうし、分ぶん別べつして生じやう法ほつを作さ起きす。是なの如ごとき法ほつの中ちゆうに住すませば、一いつ切せつ種しゆ智ちを成じやうずるを得えず、即そく時じに衆しゆう中ちゆうの聽きく者もの、心こころに懈け怠たいを生じやうず」と。是なの故ゆゑに佛ぶつ說せつきたまはく、「一いつ切せつの法ほつは皆みな是なれ助じゆ道だうの因いん縁えんなり。若ごとし是なの法ほつの中ちゆうに於おて邪じや行ぎやう謬めう錯さくせば、是なを不ふ實じつと名なく。若ごとし直ちゆう行ぎやうして謬めうらざれば、即すなはち是なれ助じゆ道だう法ほつなり。是なの故ゆゑに道だう果くわを相さう益やくする者ものなり。謂いゆる諸しよ法ほつは實じつに無む生じやうを出いづる無なく、一いつ相さう無む相さうにして寂じやく滅めつ涅槃ねはんなり。是なの故ゆゑに、涅ね槃はんに於おて益やく有ある能あたはず。譬たとへば、時じ雨うの能あたく草そう木ぼくを益やくして虛こ空くうを益やくせざるが故ゆゑし。是なの故ゆゑに菩ぼ薩ざつは、是なの助じゆ道だう法ほつ及及び道だう果くわを知しつて、初しよ發はつ心しんより已この來かた、所しよ作さくの善ぜん法ほつ布ふ施せ等とうは、皆みな是なれ畢へつ竟じやう空くうにして、夢ゆめの如ごとく乃至乃至化けの如ごとしと知しる。」問もんうて曰いはく、「若ごとし菩ぼ薩ざつ、諸しよ法ほつ實じつ相さうを知らば、何なにを用もちてか布ふ施せ等とうを行まうすることを爲なす。」答こたへて曰いはく、「佛ほつは此こ中ちゆうに布ふ施せ等とうを具ぐ足そくせざれば、衆しゆう生じやうを成じやう就じゆする能あたはず、菩ぼ薩ざつは、身み及及び音おん聲じやう、語ご言ごんを莊じやう嚴げんして佛ほつの通つう力りきを得える、種しゆ種しゆの方ほう便べん力りきを以もつて能あたく衆しゆう生じやうを引いん導だうすと説とく。是なの故ゆゑに菩ぼ薩ざつは、衆しゆう生じやうを成じやう就じゆせんが爲ための故ゆゑに檀だん波は羅ら蜜みつを行まうするも、亦また檀だん波は羅ら蜜みつを取とらず。若ごとし有ある、若ごとし無な相さうも亦また戲ぎ論ろんせず、夢ゆめの如ごとき等とうの諸しよ法ほつを直ちゆうに行まうじ、乃至乃至阿あ耨に多た羅ら三さん藐みやく三さん菩ぼ提だいを得える。何なにを以もつての故ゆゑに。」



般若波羅蜜は相を取るべからず、乃至十八不共法も亦相を取るべからざるが故に。一切の相の取るべからざるを知り已つて發心し、阿耨多羅三藐三菩提を求めて是念を作さく、「一切は無根本にして相を取るべからず。夢の如く乃至化の如く、取るべからざるの法を以て、取るべからざるの相法を得る能はず。但衆生は、是法を知らざるを以ての故に、我は衆生の爲に、阿耨多羅三藐三菩提を求む」と。是菩薩は、初發心より來、所ゆる布施は、一切衆生の爲にす。謂ゆる布施等の諸の善法は、一切衆生の爲の故に修す。自ら身の爲にせず。此中に佛自ら因縁を説きたまはく、「餘事の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提を求むるにあらず。但一切衆生の爲の故に求むるなり。所以は何ん。是菩薩は、衆生を憐愍する心を遠離し、但般若波羅蜜を行じて、諸法實相を求め、或は邪見の中に墮す。是人は未だ一切智を得ず、求むる所の一切智の事、心未だ調柔ならざるが故に諸邊に墮し、諸法實相の得難きが故に。是故に佛説きたまはく、「菩薩は初發心より、衆生を憐愍するが故に、苦心漸く薄く、畢竟空、若し空ならば此過有り、若し不空ならば彼過有り等と戲論せず。」問うて曰はく、「餘處の菩薩の如きは、自ら利益し、亦衆生を利益す。此中、何を以てか、但衆生を利益するを説いて、自利を説かざる。自ら利し人を利せば何の咎か有る。答へて曰はく、「菩薩の善道を行ずるは一切衆生の爲にす。此は是れ實義なり。餘處に、自ら利し亦衆生を利益すと説くは、是れ凡夫人の爲に是説を作し、然る後能く菩薩道を行ず。入道の人に下中上有り、下は但自度の爲の故に善法を行じ、中は自らの爲にし、亦他の爲

にし、上は但他人の爲の故に善法を行するなり。一問うて曰はく、『是事は然らず。下は但自ら身の爲にし、中は但衆生の爲にし、上は自ら利し亦他人を利す。若し但利他のみならば、自ら利する能はず、云何が上と言はん。』答へて曰はく、『然らず。世間の法は爾り。自ら供養する者は其福を得ず、自ら其身を害するも而も罪を得ず。是を以ての故に、自身の爲に道を行するを名けて下人と爲す。一切の世人は、但自ら身を利して、他の爲にする能はず。若し自ら身の爲に道を行すれば、是れ則ち圖滅にして、自ら愛著するが爲の故なり。若し能く自ら己が樂を捨て、但一切衆生の爲の故に善法を行せば、是を上人と名く。一切衆生と異なるが故に。若し但衆生の爲の故に善法を行せば、衆生は未だ成就せざるも、自利は則ち具足を爲す。若し自ら利益し、又衆生の爲にせば是を雜行と爲す。佛道を求むる者に三種有り。一には但佛を愛念するが故に自ら己身成佛を爲し、二には己身の爲にし、亦衆生の爲にし、三には但衆生の爲にす。是人清淨に道を行じ、我顛倒を破するが故に、是菩薩は般若波羅蜜を行する時、衆生無く、乃至知者見者無し。是中に安住して衆生を拔出するに、甘露性の中に於てす。甘露性とは、謂ゆる一切助道法なり。何を以ての故に。是法を行じて、涅槃に至るを得るが故に。涅槃を甘露と名く、是甘露性の中に住すれば、我等の妄想復生せず。是菩薩自ら無所著を得、亦衆生をして無所著を得せしむ。是を第一利益衆生と名く。一問うて曰はく、『上には但衆生を利益するが爲の故に道を行すと説けり。今何を以ての故に、自ら無所著を得、衆生をして無所著を得しむる。』答へて

【四】次に佛が得し所の法は世俗に於てせしを明し、諸法平等無性なることを更に釋す。

曰はく、『しむを得ざるが故なり。若し自ら智慧無くんば、何んが能く人を利せん。是を以ての故に、先づ自ら無所著を得て、然る後に、人をして得しめ、若は、是功德を他に與ふるを得べし。如し財物なれば、諸佛大菩薩は、有ゆる功德、皆他に與へ、乃至調達、怨賊にも皆之を與ふべく、然る後、更に自ら功德を修集すべし。但是事のみ然らず、我作にして而も他は得べからず。是れ亦世俗の說にして、第一義に非ず。何を以ての故に、第一義の中には衆生無く、一も無く異も無く、等く諸法の相を分別するが故に。此中に亦所著の處無しと説く。』

復次に、先に説くが如く、相の説く可からざるは是れ第一義なり。此中に説くべきが故に世俗なり。爾時、須菩提、佛に問はく、「道場に於て得る所の法は、世諦を用ての故に得と爲すや、第一義論を用ふると爲すや」と。須菩提、意へらく、「若し世諦を以ての故に得ば、即ち是れ虚妄不實なり。若し第一義を以ての故に得ば、第一義の中には得ること無く、得る者無く、説くべからず、受くべからず」と。佛答へたまはく、「世俗の語言を以ての故に、佛は阿耨多羅三藐三菩提を得と説く」と。是中に得る者無く、得法有ること無し。何を以ての故に。若し是人、是法を得ば即ち是れ二法なり。二法の中には道も無く、果も無し。二法とは是れ菩薩、是れ得阿耨多羅三藐三菩提なり。是の如きの二法は皆是れ世諦なるが故に有り。若し二ならば、佛法何んが虚妄ならざるを得ん。若し人有りて第一義を得ず、但二法を以て諸法を分別せば、是れ則ち虚妄なり。諸佛大菩薩は、第一義を得るが故

に、衆生を度せんが爲に、第一義を得しむ。諸法を分別すと雖も、是れ虚妄には非ず。須菩提復問はく、「世尊、若し二法を用て道無く、果無くんば、今不二の法を以ての故に、道有り果有りや」と。佛答へたまはく、「二法もて道無く果無く、不二の法もて亦道無く果無し」と。問うて曰はく、「餘處には、一法は是れ凡夫の法、不二の法は是れ賢聖の法なりと説く。毘摩羅詰經の不二入法門の中に説くが如し。」答へて曰はく、「不二入は是れ眞實の聖法なり。或は漸發意の菩薩有りて、未だ諸法實相を得ざる者は、是不二の法を聞いて相を取り著を生ず。是故に、或は不二の法を稱讚し、或時は毀訾す。又佛は是二邊を遮して中道を説く。謂ゆる、非二、非不二なり。二法各各別の相なる不二を一空相と名く。是一空相を以て、各各別異の相を破す、破し已つて事訖れば、還不二の相を捨つ。是れ即ち是れ道なり、是れ果なり。何を以ての故に。諸の賢聖は、無二の法を讚歎すと雖も著せざるが故に、是法を用て道を得果を得、是法を用ては道無く果無し。即ち是れ戲論無戲論、是れ平等法なり。須菩提佛に白して言さく、「若し諸法は無所有性ならば、何等か是れ平等なる」と。佛答へたまはく、「若し有性無性を離るれば、假に名けて平等と爲す。若し菩薩、一切法有を説かざれば、一切法性を説かず、一切法相等を説かず、顯示して亦、無法、無法性、無法相等を説かず、顯示して亦是二邊を離れて、更に平等の相有りと説かず、一切處に平等の相を取らず、亦是平等無しと言はず、諸の善法を行ずるを妨げざれば、是を諸法平等と名く。復次に、諸法平等とは、謂ゆる一切法を出過するなり。」問う

て曰はく、「先には處處に、諸法は即ち是れ平等の相なり、平等は即ち諸法の實なり。名異にして義同じ、色如は色に非ず、色を離るるに非ずと説き、今何を以てか平等を出過すと説く。」答へて曰はく、「一切法に二種有り、一には色等の諸法の體、二には色等の法の中の行是なり。凡夫は邪行、賢聖は正行なり。此中には、平等を説いて、凡夫行の中を出でて色等の中を出づと言はず。」「復次に平等は、能く行する無く、能く到る無し。是に於て須菩提は驚いて佛に問ふも、亦行する能はず、到る能はず。須菩提の謂へらく、「是法は甚深微妙にして、行じ難しと雖も、是事は佛應に得べし」と。佛答へたまはく、「須陀洹より乃ち佛に至るまで、皆能く行する無く、能く到る無し」と。佛意へらく、「三世十方の佛も、能く行する能はず、能く到る能はず、何に況や一佛平等の性自ら驚るをや」と。故に須菩提復問はく、「佛は一切法の中に於て、行力自在なり。佛の無礙の智慧は、處として到らざる無し、云何が能く行する能はず、能く到る能はずと言ふ」と。佛答へたまはく、「若し佛と平等と異らば、實に是難有るべし、何を以てか、行する能はず到る能はざらん」と。今凡夫の平等、須陀洹の平等、佛の平等は皆一平等にして二無く分別無し。是凡夫より乃ち佛に至るまで、自性は自性の中に行する能はず、自性の中に到る能はず、自性は他性の中に行すべし。是故に佛説きたまはく、「若し佛と平等と異らば、佛は應に平等を行すべし。但佛は即ち是れ平等なるが故に、行ぜず到らず。智慧の少きを以てに非ざるが故に」と。須菩提、佛に白して言さく、若し平等にして、凡夫より佛に至るまで、異なるを得

べからずんば、今凡夫と聖人とは應に差別有るべからず」と。佛、須菩提の問を可したまはく、「平等の中には差別無し。世諦の故に、凡夫法の中に差別有り」と。復問はく、「若し凡夫より乃ち佛に至るまで、差別有る無くんば、云何が三寶世間に現れ、大に衆生を利益する」と。佛答へたまはく、「平等は即ち是れ法寶なり、法寶は即ち是れ佛寶なり、僧寶なり。何を以ての故に。未だ法を得ざる時は、名けて佛と爲さず。平等法を得るが故に名けて佛と爲せばなり。是平等法を得るが故に、分別して須陀洹等の差別有り」と。須菩提、佛の教を受け、「是法は皆合無く散無く、色無く形無く、對無く、一相謂ゆる無相なり。唯佛の是力有り、而も空無相の中に於て、是れ凡夫、是れ聖人と分別するや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。若し諸佛、是法を分別せずんば、云何が當に地獄、乃至十八不共法有り」と知るべけんや」と。問うて曰はく、「諸佛は日出の如く、高きものを下くし、下き者を高からしむる能はず。但能く萬物を照明して、眼有る者をして識別せしむ。諸佛も亦是の如く、諸法の相を轉ぜず、但一切智を以て照し、人の爲に演説して知らしむ。汝何を以ての故に、若し佛諸法を分別せずんば、云何が地獄乃至十八不共法有るを知らんと言ふ。今畜生等は、現に目の見る所、人皆識知するが如し。何んが佛説を須たん。」答へて曰はく、「佛は好醜を作らずと雖も、而も諸事を演説して人に示す。知に二種有り、一には凡夫の虚妄知、二には如實知なり。畜生等の相を知るは、是れ凡夫の虚妄知なり。佛は實相を知ると爲すが故に、佛諸法を分別せずんば、云何が地獄等有ること

【五】次に諸法平等にして無差別ならば、此中に如何が差別あるやについて釋す。

を知ると言はん。』復次に、諸佛の法は寂滅の相にして無戲論なり。此中に、若し地獄等の相有りとは分別せば、名けて寂滅不二無戲論の法と爲さず。佛は寂滅不二の相を知ると雖も、亦能く寂滅の相の中に於て、諸法を分別して而も戲論に墮せず。諸法實相を離るる者は、眼に畜生等を見ると雖も、亦能く實の如く、其相を知る能はず。牛の角、足の尾等の諸分邊和合して、更に牛法の生ずる有るが如し。是を一と爲さば、諸の分は多なり。牛法は一なり、一は多を作さず、多は一を作さず。有人言はく、「此説は非なり、此諸の分を除いて應に更に牛法有るべく、力用見るべし」と。牛法は、衆分和合して生じ、而も牛法は衆分に異らず。何を以ての故に。此衆分合するを見るが故に、名けて牛を見るとき爲す。更に餘物の牛と爲るを見ず。異は一を破し、一は異を破し、不二不異は一異を破す。若し一異無くんば、云何が不二不異有らん。若し是諸法平等の中に入らば、爾時、始めて實の如く牛相を得。是故に言はく、「若し佛諸法の相を分別せず、二諦を説かずんば、云何が善く畜生等を説かん」と。謂ゆる平等に於て動ぜずして、而も諸法を分別す。動ぜずとは、諸法を分別する時、一異の相に著せざるなり。

(五)須菩提、佛に白して言さく、「佛の諸法等の中に於て、動ぜざるが如く、辟支佛乃至凡夫も、諸法等の中に於て亦動ぜず。何を以ての故に。諸佛は平等相にして、乃至凡夫も亦平等相なればなり。世尊、若し闡らば、佛は云何が諸法是れ色異、色性異、受性異、乃至有爲無爲性異と分別する。若し諸法を分別せざれば、菩薩は般若波羅蜜を行ずる時、一地よ

り一地に至り、乃至、佛國土を淨むるを得ざらん」と。佛答へたまはく、「汝が意に於て云何。色等の相を堆尋するに、是れ空と爲すや不や」と。「世尊、實に空なり」と。「空の中に異相の法有りや不や」と。答へて言はく、「不。何を以ての故に、是畢竟空は、無相の智慧を以て解すべきが故に。是中に云何が異相有らん」と。佛、須菩提に語りたまはく、「若し空の中に異相無くんば、空便ち是れ實なり。是故に汝云何が、空の中に於て諸法を分別して是難を作す。畢竟空の中には、空も亦不可得なり、各々の相も亦不可得なり。汝云何が空と各々の相を以て難を爲す。是因縁を以ての故に當に知るべし、諸法平等の中に分別無きが故に凡夫人無し、但凡夫人は實相に非ず、實相を離れず、凡夫の實相即ち是れ聖人の相なり。是故に不と言ふ」と。但凡夫は凡夫を離れず、乃至佛も亦是の如し。須菩提は、平等の相を以て大に利益し、平等の實相を知らんと欲す。是故に問ふ、「是れ無爲とや爲ん、是れ無爲とや爲ん」と。佛答へたまはく、「有爲に非ず、無爲に非ず。何を以ての故に。若し有爲ならば、皆是れ虚誑の作法なり。若し無爲ならば、無爲法は生住滅無きが故に無法なり、無法なるが故に無爲の名を得ず、有爲に因るが故に無爲有りと爲せばなり。經の中に説くが如し。有爲無爲を離るれば不可得なり、長を離れて短無きが如し。是れ相待の義なり。問うて曰はく、『有爲法は是れ無常、無爲法は是れ常なり。云何が、有爲は無爲を離るるを得べからずと言ふ。』答へて曰はく、『無爲法は無分別の故に無相なり。若し常相を説かば、無相と言ふを得ず。有爲法を破するが故に無爲と名く。更に異法無きなり。人の



牢獄に閉在し、柵を穿つて出づるを得。壁を破するは是れ空なり、更に異なる空無きが如し。空も亦因縁より生ぜず、無爲法も亦是の如し。有爲法の中に、先無爲の性有つて有爲を破す、即ち是れ無爲なり。是故に有爲は無爲を離れては得べからずと説く。是有爲無爲性は、皆合せず散ぜず、一相謂ゆる無相なり。佛は世諦を以ての故に是事を説く。第一義には非ず。何を以ての故に、佛自ら因縁を説きたまふ。第一義の中には身口意行無きが故なり。有爲無爲法は平等なり、即ち是れ第一義なり。是有爲無爲法の平等を觀すれば亦一相に著せず。菩薩は第一義の中に於て、動ぜずして衆生を利益す。方便力の故に、種種の因縁もて衆生の爲に説法するなり。

大智度論卷第九十五

# 大智度論釋涅槃如化品第八十七

卷第九十六

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

須菩提、佛に白して言さく、『世尊、若し諸法平等にして、爲作する所無くんば、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、平等の中に於て、動ぜずして而も菩薩事を行じ、布施、愛語、利益、同事を以てせん。』佛、須菩提に告げて言はく、『是の如し、是の如し。汝が説く所の如し。是諸法は平等にして所作無し。若し是衆生、自ら諸法の平等なるを知らば、佛は神力を用ひずして、諸法平等の中に於て、動ぜずして而も衆生の吾我の想を拔出す。空を以て、五道の生死、乃至知者見者の相を度し、色相、乃至識相、眼相、乃至意相、地種相、乃至識種相を度し、有爲性相を遠離して、無爲性相を得しむ。無爲性相は、即ち是れ空なり。』須菩提言さく、『世尊、何等の空を用ての故に、一切の法は空なる。佛の言はく、『菩薩は、一切の法相を遠離す。是空を用ての故に、一切法は空なり。須菩提、汝が意に於て如何、若し化人あつて化人を作らば、是化け頗し實事にして空ならざる者有りや不や。』須菩提言さく、『不、世尊、是化人は、實事有つて空ならざる無し。是空及び化人の二事は合せず散せず、空も空なるを以ての故に空なり。是れ空、是れ化なりと分別す』

べからず。何を以ての故に。是二事は等しく空の中に得べからず。謂ゆる是れ空なり、是れ化なればなり。所以は何ん。須菩提、色は即ち是れ化なり、受想行識は即ち是れ化なり、乃至一切種智も、即ち是れ化なればなり。』須菩提、佛に白して言さく、『世尊、若し世間法は是れ化ならば、出世間法、謂ゆる四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分、三解脱門、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、並に諸法の果、及び賢聖人、謂ゆる須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、菩薩摩訶薩、諸佛も、世尊、是法も亦化なりや不や。』佛、須菩提に告げて言はく、『一切の法は皆是れ化なり。是法の中に於て、聲聞法の變化有り、辟支佛法の變化有り、菩薩摩訶薩法の變化有り、諸佛法の變化有り、煩惱法の變化有り。業因緣法の變化有り、是因緣を以ての故に、須菩提、一切法、は皆是れ化なり。須菩提、佛に白して言さく、『世尊、是諸の煩惱斷ずる、謂ゆる須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道の、諸の煩惱の習を斷ずる、皆是れ變化なりや不や。』佛、須菩提に告げたまはく、『若し法に生滅の相有らば、皆是れ變化なり。』須菩提言さく、『世尊、何等の法をか變化に非すと爲す。』佛言はく、『若し法にして生無く滅無くんば、是れ變化に非ず。』須菩提言さく、『何等をか是れ不生不滅にして變化に非すと爲す。』佛の言はく、『無誑相の涅槃、是法は變化に非ず。』世尊、佛自ら説きたまふが如き諸法平等は、聲聞の作に非ず、辟支佛の作に非ず、諸の菩薩摩訶薩の作に非ず、諸佛の作に非ず。有佛にも無佛にも諸法の性は、常に空にして性空、即ち是れ涅槃なり。

【一】本品は前品の諸法平等の如しとて説けるもの、今之を釋するに、先づ佛所説の甚深般若界なれば、更に如何が諸法平等性空の中に衆生を利益するの事あるやを釋す。

云何が涅槃の如く非ずと言ふ。佛、須菩提に告げて言はく、「是の如く、是の如し。諸法の平等は、聲聞の所作に非ず、乃至性空は即ち是れ涅槃なり。若し新發意の菩薩、是一切法皆畢竟して性空なり、乃至涅槃も亦皆化の如しと聞かば、心則ち驚怖せん。是新發意の菩薩の爲の故に、分別して、生滅は化の如く、不生不滅は化の如くならず。」須菩提、佛に白して言さく、「世尊、云何が新發意の菩薩を教へて、是れ性空なるを知らしめん。佛、須菩提に告げて言はく、「諸法は本有りて、今無きや。」

問うて曰はく、「是事は、佛、先に已に答へたまへり。須菩提は今何を以てか更に問へる。謂ゆる、世尊、若し諸法平等にして作爲する所無くんば、云何が菩薩は諸法平等の中に於て、動ぜずして大に衆生を利益する」と。答へて曰はく、「是事は解し難きを以ての故に、先に説くと雖も而も更に問ふなり。又經に將に訖らんとして、佛深空を説きたまふも、凡夫聖人の行する能はざる所、到る能はざる所なり。是故に須菩提は、「一切法の平等相、定空を知つて、云何が菩薩は、是中に住して、而も能く衆生を利益する。平等法は無作相にして、是有作相を利益するや」と。佛、須菩提の意を可し、還須菩提の問うて而も答ふるを以て、其平等の答を可す。其れ衆生を利益するは、謂ゆる若し衆生、自ら諸法の平等、畢竟空を知らば、佛に思力無し、衆人自ら將に適するを知れば、則ち藥師に功無きが著し。須菩提復問はく、「若し諸法の實相畢竟空にして、能く作す所無くんば、菩薩は何を以てか是中に住して而も衆生を利益するや。若し菩薩、是平等を用て衆生を利益せば、

則ち實相を壞せん」と。佛答へたまはく、「菩薩は諸法實相を以て衆生を利益せず。但衆生は畢竟空を知らざるが故に、菩薩は教誨して知らしむるなり」と。菩薩の衆生を教化する、是を對治悉檀と爲す。須菩提は第一義悉檀の利益無きを以て難と爲す。佛答へたまはく、「衆生は顛倒して知らず、佛は但其顛倒を破して、是を實と言はず。是故に菩薩は、是平等相の中に住して、我相、乃至知者見者相を遠離す、是を衆生空と名く。是を以て一切吾我の法の、衆生を教化する無し。衆生に種種有り、一には愛多、二には見多なり。愛多の者は、は無我の法を得れば、則ち厥心を生じ、欲を離れて是念を作さく、「若し無我ならば、何んが餘物を用ひん」と。見多の者は、無我法を知ると雖も、色等の法の中に於て、若し常、若し無常等を戲論す。是故に次に色相、五衆、十二入、十八界を説き、乃至有爲の性相を遠離して、無爲の性相を得しむ。無爲の性相は即ち是れ空なり、是を法空と名く。問うて曰はく、「須菩提は何を以てか是問を作す、又何等の空を用ての故に一切法は空なる。」答へて曰はく、「空に種種有り、火中に水無く、水中に火無きが如きも亦是れ空なり、五衆の中に我無きも亦是の如し、或は衆生空有り、或は法空有り。法空の中に、或は有人の言はく、「諸法は空なりと雖も亦盡く空ならず。色空の中に微塵の根本在ること有るが如し」と。是故に須菩提問はく、「何等の空を以ての故に一切法は空なる」と。佛答へたまはく、「無所得にして畢竟空なるを以ての故に、一切の相を遠離す」と。是故に、是中には衆生空と、法空とを説けり。是二空なるが故に、一切法は空ならざる無し。」問うて曰はく、「若し爾ら

ば、此中に何を以てか、一切の法は相を離ると説く。』答へて曰はく、『一切法は盡く壞すべからず、但其邪憶想を離るれば、一切法は自ら離るゝなり。神通人の如きは、色相を壞するが故に、則ち石壁も礙ふる無し。佛の説きたまへるが如し、『汝等當に五樂の中に於て、正憶念を修して貪欲を斷じ、正解脱を得べし。是故に離相を説く』と。須菩提は是を聞き已つて心に驚き、云何が一切の法、若は大、若は小、都て本實無く、凡夫人は虚妄にして、實事無かるべく、聖人は應に少許の實有るべし』と。須菩提は是れ阿羅漢にして、深く佛法を貴ぶと雖も、亦新發意の菩薩の爲の故に問へり。

【二】次に諸法平等の義を化の如しとして明すに就いて釋す。

佛、須菩提の意を知り、是事を明すならしめんと欲するが故に、譬喩を説いて、反つて須菩提に問ひたまふ、『汝が意に於て云何、化人の復化を作すが如く、是化は本實有つて空ならざるや不や』と。答へて言さく、『不。是化は實事有る無きも、而も空ならざれば、空及び化人の二事合せず散ぜず、皆空の故に空なり、空空を用ての故に空なり』と。問うて曰はく、『何を以てか空空の故に、名けて空となす。』答へて曰はく、『十八事實を破せんが爲の故に十八空有り。衆生の心中に變化する空法を破するが故に空空を用ふ。世間の人は皆幻化の法は久く住せずして能く作す所無きを知るが故に空と名く。是故に空空の故に空なりと言ふ。是れ空にして、是れ化なりと分別すべからず。凡夫の人は、變化は是れ空にして實ならずと知るも、餘法を實と爲すと謂へり。是故に化を以て喩と爲す。常に知るべし、餘法と化と異なる無きことを。聖人の解する所の如くんば、化を以て喩と爲すを得ず。』

分別する所無きを以ての故に。一切法を名けて五衆と爲す。佛言はく、「色受想行識は、是れ化ならざる無し。空なるを以ての故に」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊、凡夫の法は虚妄にして應に化の如くなるべし。出世間法も亦變化の如くなるや。謂ゆる四念處乃至十八不共法、若は四念處法等は、因縁邊より生ずるが故に化の如し。法果は謂ゆる涅槃なり。亦復化の如くなるや。若し能く是行を起す者、謂ゆる須陀洹、乃至佛も亦復化の如くなるや」と。佛答へたまはく、「若は有爲、若は無爲、及び諸の賢聖は皆是れ化なり。畢竟空なるが故に。是義は、初品より已來、處處に廣く説く、是故に一切法は空にして皆化の如しと言ふ。」問うて曰はく、「若し一切法皆空にして化の如くならば、何を以ての故に種種諸法の別異有りや。」答へて曰はく、「佛の所化、及び餘人の所化は實ならずと雖も、而も種種形像の別異有るが如し。夢中所見の種種も亦是の如し。人の夢中に好惡の事を見て、善を生ずる者有り、怖を生ずる者有り。鏡中の像の如く、實事無しと雖も、而も本の形像に随つて好醜有り。諸法も亦是の如く、空なりと雖も、而も各各に因縁有ること、佛の此中に説きたまへるが如し。是化法の中には、聲聞の變化有り、辟支佛の變化有り、菩薩の變化有り、佛の變化有り、煩惱の變化有り、業の變化有り。是故に一切法は皆是れ變化なり。聲聞の變化とは、三十七品、四聖諦、乃至三解脱門なり。何を以ての故に。聲聞の人は、持戒の中に住し、禪定攝心して涅槃を求め、内外身の不淨を觀ず、是を身念處と名く。是の如き等の法を涅槃と爲すが故に。勤めて精進して、是法を起さば、本

無くして而も今有り、已に有つて還無し。是を障間變化と爲す。辟支佛の變化とは、謂ゆる十二因縁等の諸法を觀するなり。所以は何ん。辟支佛の智慧は聲聞の人より深きが故に。菩薩の變化とは、謂ゆる六波羅蜜及び二種の神通、眼得及び修得なり。佛の變化とは、三十二相、八十隨形好、十力、一切種智等の無量の佛法なり。煩惱の變化とは、煩惱は種種の業を起す、善不善無記業、畢足業、不畢足業、善不善無動業等の無量の諸業なり。一問うて曰はく、「諸の煩惱は是れ惡法なり、云何が能く善業無動業を生ずる。」答へて曰はく、二種の因有り、一には近因、二には遠因なり。人に我心有りて、後身の常常の爲の故に布施を修するは、是れ近因なり。欲界の衰憊不淨身を離れんが爲の故に禪定を修するは、是を遠因と爲す。復有人言はく、「一切の凡夫は皆我心の和合を以ての故に業を起す」と。有人言はく、「我心を離るれば、第六識を起すこと有る無し、我心に住するが故に、第六識を起すなり、我心は即ち是れ諸の煩惱の根本なり」と。一問うて曰はく、「煩惱は是れ垢心、善心は是れ淨心なり。垢淨は和合するを得ず、何を以てか我心の中に住して能く善業を起すと云ふ。」答へて曰はく、「爾らず。一切の心は皆慧と俱に生ずるが故に、無明心の中にも亦慧に慧有るべし。慧と無明とは相違の法なり、而も一心の中に淨を起す。垢も亦是の如し。凡夫は未だ理道を得ず、云何が能く我心を離るるを得て、而も善を行ぜん。瞋等の煩惱の中には則ち善を行するを得ず。我心は無起柔軟なるが故に。是故に煩惱心の中に善業、無動業、無覺業を生ずるなり。變化とは、一切果報を生ずるの法、謂ゆる六道なり。



惡業の果報は是れ三惡道、善業の果報は是れ三善道なり。惡業に上中下有り、上とは地獄、中とは畜生、下とは餓鬼なり。善業にも亦上中下有り、上とは天、中とは人、下とは阿修羅等なり。上善業に種種輕重等の分別有り、上惡業にも亦輕重の差別有り。次第輕重は、地獄の中に説くが如し。餘道は亦分別業品の中に説くが如し。問うて曰はく、「若し業に従つて有らば、何を以てか變化と言ふ。」答へて曰はく、「凡夫の人は諸法を見ること化の如くならず、聖人は畢竟空の相を知るが故に、天眼を以て衆生を觀るに、皆始、終、中間有つて、化主の遠處に作るが如し。變化業も亦是の如く、過去世の中に在つて作すなり。今身の變化は、變化の事の如く、能く種種に人をして憂喜怖畏を生ぜしむ。智者は之を觀るに皆實有る無し。而も人の横に憂喜を生ず、是人笑ふべし。業も亦是の如し、是故に業變化を説く。問うて曰はく、「是諸の變化は、皆業の所作なれば、何を以てか俱業變化のみを説かざる。」答へて曰はく、「業に二種有り、淨業と垢業となり。淨業とは、聲聞の變化、乃至佛の變化なり。垢業とは、是れ凡夫の變化なり。復次に、二種の業有り、凡夫の業となり。凡夫の業は是れ煩惱の變化にして、聖人の業は須陀洹乃至佛なり。是の如く、皆是れ業變化なりと雖も、而も廣く分別するに咎無し。是故に須菩提、當に知るべし、一切の法は空にして、皆化の如くなるを。須菩提復問うて言はく、「世尊、是諸の聖人は煩惱を斷ず、謂ゆる須陀洹果、乃至阿羅漢果、辟支佛道は一切煩惱の習を斷ず。是諸聖哲化の如くなるや不や。」と。須菩提意へらく、「有爲法は虚誑なるが故に變化の如く、無爲法は

【三】次に性空といふを釋す。

眞實無作の故に、是れ化なるべからず」と。是故に問へり。佛答へたまはく、「一切法は若しは生じ、若しは滅して、皆化の如し。何を以ての故に。本無今有、今有後無にして、人心を誑惑するが故に」と。佛意ひたまはく、「一切は因縁より生ずる法にして皆自性無く、自性無きが故に畢竟空なり、畢竟空なるが故に皆化の如し」と。

須菩提は諸法實相を求むるの意猶息まざるが故に佛に問はく、「何等の法か化の如くならざる」と。須菩提意に謂へらく、「一決定の實法有りて他の如くならず、是法に依つて而も精進して求むべし」と。佛答へたまはく、「若し法有つて、無生無滅ならば即ち是れ化に非ず。何を以ての故に。是れ謂ゆる無誑相涅槃なればなり。是法は無生の故に無滅なり、無滅の故に人をして憂を生ぜしむる能はず。佛は、一切の有爲法は畢竟空にして皆化の如し、唯涅槃の一法のみ有つて化の如くに非ずと分別したまへり。爾時、須菩提佛に白して言さく、「佛の説きたまふが如くんば、平等法は佛の所作に非ず、聲聞・辟支佛の所作に非ず。有佛にも無佛にも諸法は常住して性空の相なり。性空の相は即ち是れ涅槃なり」と。須菩提提意に謂へらく、「深く般若波羅蜜の中に入れば、涅槃も亦空なること、上品の中に處處に説けり。今佛は何を以てか、唯一の涅槃のみ、化の如くに非ずと説く」と。是故に佛の語を引いて難を爲さく、「諸法の實相は性空、法は常住なれども、諸佛は但人の爲に演説す。性空とは即ち是れ涅槃なり。今何を以てか生滅の法の中に於て、別して無誑相涅槃は化の如くならずと説く」と。佛答へたまはく、「諸法は平等常住にして賢聖の所作に非ず」と。

若し無量の菩薩、是を聞かば則ち恐怖す。是故に分別して、生滅は化の如く、不生滅は化の如くに非ずと説く。一問うて曰はく、一確論一人のみ是れ無誑の人なり。一切の人は皆佛の所に於て實事を求めんと欲す。今佛は何を以てか、一切法は都て空なりと説き、或は都て空ならずと説く。一答へて曰はく、一佛は此中に自ら因縁を説き、新發意の菩薩の爲の故に、涅槃は化の如くならずと説きたまふ。一問うて曰はく、一人の爲の故に諸法の相を轉すべきや。一答へて曰はく、一此中に佛説きたまはく、諸法の相は性空なり、性空ならば云何が轉すべきと。佛初めて是諸法實相を得る時、心但涅槃空滅に趣向す。是時、十方の諸佛諸天は、佛の涅槃に入りたまふこと莫く、一切衆生の苦惱、當に度脱すべしと請ふ。佛即ち請を受く。佛は但衆生を度せんが爲の故に住す。是故に知んぬ、利空すべき衆生有れば有に隨つて爲に説くと。諸の有爲法の虚誑なるを觀するが故に、涅槃は實に不變不異と爲す。新發意の菩薩有り、是涅槃に著するや、是著に因つて諸の煩惱を起す、是著を斷せんが爲の故に、涅槃は化の如しと説き、若し著心無くんば是時は即ち涅槃は化の如くに非ずと説かん。一復次に、二道有り、一には小乘道、二には大乘道なり。小乗の論議は涅槃を以て實と爲し、大乘の論議は利智慧を以て深く入るが故に、色等の諸法を觀て皆涅槃の如しとす。是故に二説は皆なし。須菩提復問はく、云何が新發意の菩薩を教化して平等性空を知らしむる一と。須菩提意に謂へらく、性空の法は是れ凡夫人の心に怖畏する處にして、性空無所有を即ち深地に墮むが如し。何を以ての故に。一切の未だ道を得ざる

者は、我心に深く著するが故に。空法を怖畏して是念を作さく、「佛は人を教へて善行を勤修せしめ、終に歸して無所有の中に入らしむ」と。是を以ての故に須菩提は、「何の方便を以てか是暫發意の者を教誨せん」と問ふ。佛答へたまはく、「諸法は先有にして今無なりや」と。佛は意に、新發意の者の、後に當に無なるべきを怖畏するを以ての故に「諸法は先に有りて今無きや」と説きたまふ。須菩提は自ら了了に、諸法の先にも自ら無く今も亦無きを知るも、但新發智の者の、我見もて心を覆ふが故に驚怖を生じ、顛倒を除いて實見を得しめんが爲の故に、竟に失ふ所無く、諸の煩惱顛倒の實相謂ゆる性空を知る。是時は則ち恐怖無し。是の如き等の法は、應に新發意の者を教ふべし。若し諸法先に有りしも、道を行するが故に無かりせば、應當に恐怖すべし。初より無きが故に應に恐怖すべからず、但顛倒を除かんが爲のみ。

大智度論釋薩陀波崙品第八十八

佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を求め、當に薩陀波崙菩薩摩訶薩、是菩薩の今大雷音佛の所に在りて菩薩道を行するが如くすべし。」「須菩提、佛に白して言さく、「世尊、薩陀波崙菩薩摩訶薩は云何が般若波羅蜜を求むる。」「佛言はく、「薩陀波崙菩薩摩訶薩は本般若波羅蜜を求むるに、身命を惜まず、名利を求めず、空閑林の中に

於て、空中の聲を聞き。言はく、「汝善男子、是從り東に行き、疲極を念ずる莫れ、睡眠を念ずる莫れ、飲食を念ずる莫れ、晝夜を念ずる莫れ、寒熱を念ずる莫れ、内外を念ずる莫れ。善男子、行く時左右を觀る莫れ、汝行く時、身相を壞する莫れ、色相を壞する莫れ、受想行識を壞する莫れ。何を以ての故に。若し是諸相を壞すれば則ち佛法に於て處有りと爲す。若し佛法に於て處有れば、便ち五道生死の中に往來し、亦般若波羅蜜を得る能はずればなり」と。爾時、薩陀波崙菩薩、空中の聲に報へて言はく、「我當に教に従ふべし。何を以ての故に。我一切衆生の爲に大明作らんと欲し、一切諸佛の法を集めんと欲し、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲するが故に」と。薩陀波崙菩薩は復空中の聲を聞く。言はく、「善哉、善哉、善男子、汝、空無相無作の法に於て、應に信心を生ずべし。相を離るるの心を以て般若波羅蜜を求め、我相を離れ、乃至知者、見者相を離るべし。當に惡知識を遠離すべし。當に善知識に親近し供養すべし。何等か是れ善知識なる。能く空、無相無作、無生無滅の法、及び一切種智を説いて、人の心をして歡喜し信樂に入らしむ、是を善知識と爲す、善男子、汝若し是の如く行ぜば、久からずして當に般若波羅蜜を聞くべし。若し經卷の中より聞き、若し菩薩の所説に従つて聞く。善男子、汝が従つて聞く所の是般若波羅蜜の處に、應に心は知佛の想を生ずべし。善男子、汝當に恩を知つて應に是念を作すべし、從つて聞く所の是般若波羅蜜は、即ち是れ我善知識なり、我是法を聞くを用ての故に、狀に不退轉を得、阿耨多羅三藐三菩提に於て、諸佛に親近し、常に有佛の國土に生じて、衆

難を遠離し、無難處を具足するを得と。善男子、當に是功德を思惟し、籌量し、從つて聞  
く所の法處に於て、心に如佛の想を生ずべし。汝善男子、世利の心を以ての故に、法師に  
隨逐する莫れ。但法を愛し、法を恭敬するが爲の故に、説法の菩薩に隨逐せよ。爾時、當  
に魔事を覺知すべし。若し惡魔、説法の菩薩の與に五欲の因縁を作し、假爲法の故に受け  
しむるも、若し説法の菩薩、實法門に入らば、徳力を以ての故に、受けて而も染する所無  
し。又三事を以ての故に。是五欲を受け。方便力を以ての故に。衆生をして善根を種えし  
めんと欲するが故に。衆生と共事を同じうせんと欲するが故に。汝是中に於て汙心を生ず  
る莫く、當に淨想を起し、自ら念すべし、我未だ源和拘舍羅を得ず。大師方便法を以て衆  
生を度し、福德を得しめんが爲の故に、是諸の欲を受け、菩薩智慧に於て著する無く、  
礙ふる無く、欲染を爲さずと。善男子、即ち當に諸法實相を觀すべし。諸法實相とは、謂  
ゆる一切法の不垢不淨なり。何を以ての故に。一切法は自性空にして衆生無く、人無く、  
我無く、一切法は幻の如く、夢の如く、響の如く、影の如く、焰の如く、化の如くなる  
が故に。善男子、是諸法實相を觀じ已りて、當に法師に隨ふべし。汝久からずして當に  
般若波羅蜜を成就すべし。復次に、善男子、汝當に復魔事を覺知すべし。若し説法の菩薩、  
般若波羅蜜を受けんと欲する人を見て、意に存念せざるも、汝應に心に怨恨を起すべから  
ず。汝但當に法を以ての故に恭敬心を生じ、厭悔の意を起す莫く、常に應に法師に隨逐す  
べし。」

【四】本品は、前品末に「先無今有性空」とあるの解し難ければ常啼菩薩の本縁を述べて證とし、般若求の義を明すなり、今之を釋するに、先づ性空の法は甚深難解なるも一心に精進せば得べきことを常啼の本生もて説く理由。

釋して曰はく、「上品の中に説かく、「新發意の菩薩には、云何が性空の法を教ふる。性空の法は畢竟無所有空にして解し難く、得難きが故に」と。佛答へたまはく、「法は先有今無なりや」と。佛の意は性空の法は、得難く知り難きに非ず。何を以ての故に。本來常に無にして更に新に異る無きが故に。汝何を以てか、心に驚いて、謂て得難しと爲す。是性空の法は甚深なりと雖も、菩薩は但能く一心に勤めて精進して身命を惜まず。是の如く、一心に求むることを作さば便ち得べしと。此中に、薩陀波崙の本生を説いて證と爲す。佛法に十二部經有り。或は修妬路偈經、本生經に因つて得度す。今佛は本生經を以て證と爲す。若し聞く者有りて是念を作さば、彼人能く得、我も亦應に得べし。是故に薩陀波崙菩薩の本生の因縁を説く。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩は般若波羅蜜を求むること、應に薩陀波崙の如くすべし」と。問うて曰はく、「若し般若波羅蜜は無相畢竟空ならば、禪定を行するも猶尙得難し。何に況んや憂愁啼哭し、散心に求覓して而も當に得べけんや。」答へて曰はく、「新發意の菩薩の爲に薩陀波崙を説くなり。」問うて曰はく、「若し薩陀波崙、是れ新發意ならば、十方の諸佛は、其前に現在して、諸の三昧を得、身を惜まざるや。又曩無竭を見るに及んで、復無量阿僧祇の三昧を得。云何が新發意と名くるや。」答へて曰はく、「新學の菩薩に二種有り。一には深心に世間の樂に著し、軟心に發意するなり、二には深心に發意して、世間の樂に著せざるなり。軟心發意の者は佛は以て發心と爲さず、深心に發意する者を乃ち名けて發心と爲す。聲聞法の中に、佛二人の比丘に語りたまへる

が如し、我法の中に於ては、乃至毛釐の如きも煖法無し」と。佛是煖法を觀するを以て最も微小なりと爲し、凡人は之を觀するを以て大なりと爲す。譬へば、國王は張の麩を見て以て多しと爲さず、貧者は之を見て以て多しと爲すが如し。一心に身に惜まざるを以ての故に、薩陀波崙を説いて證と爲すなり。問うて曰はく、「若し薩陀波崙菩薩、能く是の如きの苦行を作さば、曇無竭に従つて諸の三昧を得て應當に作佛すべし。今何を以ての故に、大雷音佛の所に在つて菩薩の行を修する。」答へて曰はく、「佛法は無量無邊なり。若し千萬阿僧祇劫、勤めて苦行を修するも猶得べからず、何に況んや薩陀波崙一世の苦行をや。復菩薩有つて、菩薩道、十力、四無所畏等を具足するも、衆生の爲の故に世間に住して未だ實際を取らず、文殊師利等の如し。薩陀波崙も或は能く是の如きが故に未だ作佛せず、菩薩の三昧は十方國土の中の摩訶の如く、薩陀波崙の所得は六萬の三昧なり、何んが多しと爲すに足らん。大雷音佛とは、應に大龍王の將に雨を降さんと欲して、大雷音を震ふに、鳥雀小蟲悉く皆、怖畏するが如くなるべし。是佛、初めて法輪を轉する時、十法の衆生皆發心し、外道邪見皆恐怖懼伏す。是故に天人、衆生は佛を稱して大雷音と爲す。是のほとけ、まげんせり。

須菩提問はく、「薩陀波崙菩薩摩訶薩は、云何が般若波羅蜜を求むる」と。問うて曰はく、「薩陀波崙は未だ阿耨多羅三三昧を得ず、何を以ての故に菩薩摩訶薩と名くる。」答へて曰はく、「大菩薩有るを以ての故に小者も亦大と名く。又其未だ實智慧を得ずと雖も、而も能く

【五】常啼菩薩云  
 何にして般若波羅蜜を求むるを以て  
 いて釋し、併せて  
 其求法の因縁を釋す。



深く般若波羅蜜を念ずるを以ての故に。又身命を惜まず、大功徳有るが故に亦菩薩摩訶薩と名く。『問うて曰はく、『何を以て薩陀波崙と名くる。』薩陀は秦に帝と言ひ、波崙は啼と名く是れ父母の與へて名字と作すが爲なりや、是れ因縁によりて名字を得しや。』答へて曰はく、『有人言はく、『其小時に喜んで啼きしを以ての故に常啼と名く』と。有人言はく、『此菩薩は、大悲心柔軟を行するが故に、衆生の惡世に在つて貧窮し、老病し、憂苦するを見て、之が爲に悲泣す、其故に衆人號して薩陀波崙となす』と。有人言はく、『是菩薩は佛道を求むるが故に人衆を遠離し、空閑の處に有つて心の遠離を求め、一心に思惟籌量して佛道を勤求する時、世に佛無し。是菩薩世世に慈悲心を行じ、小因縁を以ての故に無佛の世に在り。是人、先世の福徳の因縁、及び今世の一心を以て大欲し大精進す。是二の因縁を以ての故に空中に菩薩を聞き、久からずして便に渡す。即ち復心に念ずらく、『我云何が問はざると。是因縁を以ての故に、憂愁を哭すること七日七夜なり。是に因るが故に、天龍鬼神を號して常啼と曰ふ』と。佛、須菩提に答へたまはく、『過去世に薩陀波崙菩薩有り、身命を惜まず、財利を食らず、般若波羅蜜を求むる時、空閑林の中に在つて空中の聲を聞く』と。空林の中に到ることは上に説くが如し。』問うて曰はく、『空中の聲とは是れ何の聲と爲す。』答へて曰はく、『若し諸佛菩薩、諸天龍王、衆生を憐愍するが故に、是人は世間法に著せず、一心に佛道を求むるを見るも、時に佛法無きを以て、其般若を得るの因縁

と名く。』問うて曰はく、『何を以て薩陀波崙と名くる。』薩陀は秦に帝と言ひ、波崙は啼と名く是れ父母の與へて名字と作すが爲なりや、是れ因縁によりて名字を得しや。』答へて曰はく、『有人言はく、『其小時に喜んで啼きしを以ての故に常啼と名く』と。有人言はく、『此菩薩は、大悲心柔軟を行するが故に、衆生の惡世に在つて貧窮し、老病し、憂苦するを見て、之が爲に悲泣す、其故に衆人號して薩陀波崙となす』と。有人言はく、『是菩薩は佛道を求むるが故に人衆を遠離し、空閑の處に有つて心の遠離を求め、一心に思惟籌量して佛道を勤求する時、世に佛無し。是菩薩世世に慈悲心を行じ、小因縁を以ての故に無佛の世に在り。是人、先世の福徳の因縁、及び今世の一心を以て大欲し大精進す。是二の因縁を以ての故に空中に菩薩を聞き、久からずして便に渡す。即ち復心に念ずらく、『我云何が問はざると。是因縁を以ての故に、憂愁を哭すること七日七夜なり。是に因るが故に、天龍鬼神を號して常啼と曰ふ』と。佛、須菩提に答へたまはく、『過去世に薩陀波崙菩薩有り、身命を惜まず、財利を食らず、般若波羅蜜を求むる時、空閑林の中に在つて空中の聲を聞く』と。空林の中に到ることは上に説くが如し。』問うて曰はく、『空中の聲とは是れ何の聲と爲す。』答へて曰はく、『若し諸佛菩薩、諸天龍王、衆生を憐愍するが故に、是人は世間法に著せず、一心に佛道を求むるを見るも、時に佛法無きを以て、其般若を得るの因縁

を示さんと欲するが故に、空中に聲を發するなり。有人の言はく、「是薩陀波崙は、先世の善因縁に因りて、此林中に在つて鬼神と作り、其愁苦を見る。其れ是先世の因縁を以ての故に、又是神も、亦佛道を求む。是二の因縁を以ての故に聲を發すること蜜膊婆羅門の如く、須達多の爲に王舍城に至り、大長者の家に詣で兒婦を求むる時、蜜膊は王舍城大婆羅門衆の中に於て、飲食度を過ぎ、腹脹りて死して鬼神と作り、王舍城門の上に住す。須達多是婆羅門の已に死するを聞き、自ら長者の家に往いて宿す。長者後夜に於て、起つて飲食を辨具するや、須達多問うて言はく、「汝何の事有つてか婦を娶り、女を嫁せんと欲すること爲し、大國王に請はんと欲すること爲し、是邑會の爲に何んが其れ忽忽として事を營むこと乃ち爾る」と。長者答へて言はく、「我佛及び僧に請はんと欲す」と。須達多佛の名を聞いて、驚喜し毛を墜つ。長者先道跡を得、其が爲に廣く佛徳を説く。須達多聞き已つて、愛樂の情至り、甚だ佛乘を見んことを欲し、佛心を念じて小睡す。念佛の情至るを以ての故に、須臾に便ち覺む。夜月光を見るや、謂つて日出と爲し、即ち起つて門に趣き、城門を見るに已に王舍城の門を開く。初夜に未だ閉さざるに客來るが爲の故に後夜早く開く。客去るが爲の故に既に門の閉くを見る。即ち直に佛に向ふ。佛時に寒林の中に有りて住す。其中路に於て、月没して還闇し。須達多心悔い躊躇して、還つて城に入らんと欲する時、蜜膊神は身に光明を放ち、諸の林野を照して、居士に告げて言はく、「居士、怖るる莫れ、畏るる莫れ。直去つて還り去ること莫ければ大利を得ん。乃ち彼經中

の偈に廣く説くが如し」と。須達多、佛を見、須陀洹道を得て、佛及び僧に請ひ、舍衛城に於て形壽くるまで佛を供養す。舍利弗をして須達多の師たらしめ、舍衛に於て精舍を作り、須達は知識神の示導の如くす。薩陀波崙の知識の示導も亦是の如し。是故に、其愁苦を見て、而して之を示導し是言を作す。「善男子、汝是より東に行け、行く時は疲極等を念ふ莫れ」と。問うて曰はく、「疲極、飢渴、交來つて身を切るに、云何が念はざる。」答へて曰はく、「是れ欲及び精進力の故に、一心に佛道を愛樂し、身命を惜まず、飲食等を休息するは、皆是れ助身の法なり。是事來ると雖も心を亂さず、皆虚誑にして無常無實なること、賊の如く怨の如しと知る。但身樂の爲の故に何んが念を存するに足らん。飢渴疲極等の爲の故に、而も佛道を捨つる莫れ。晝夜を念ふ莫れとは、晝は是れ法を行し、夜は止息すべしと念ふ莫くんば、實に晝夜無きなり。所以は何ん。日は須彌に依るも、影の譬すが故に夜と名くるのみ。内外を念ふ莫れとは、衆生は多く内法に著す。内法を身と名け、外法を五欲と名く。内外法は不定性空の故に著すべからず。左右を觀する莫れとは、人は心を散じて道を行するが故に左右を顧看す。行者著無くして後を觀し、前に當れば則ち得ず。得ざるが故に但左右を顧看する莫しと言ふ。復次に、惡は常に行者を惑亂して、或は種種の形を作し、或は好色を無し、或は畏獸を作して道の左右に有るが故に觀る莫れと言ふ。是れ皆其蠱念を止めんとなり。身相色等の相を壞する莫れとは、五衆和合の故に假に名けて身と爲す。若し別に説かば更に決定して身法有り、是れ則ち身相を壞するなり。若し無身

法に著すれば、是れ亦身相を壞す。是一異有無等の邊を離れ中道を行すれば、即ち疾に阿耨多羅三藐三菩提を得。是故に身相を壞する莫れ等と説く。此中に佛自ら因縁を説く。若し是諸相を壞すれば、則ち佛法に於て疑有り。佛法に疑有れば、則ち五道生死の中に往來して、般若波羅蜜を得る能はず。薩陀波崙、空中の聲に報へて言はく、而も自ら因縁を説く、謂ゆる薩陀波崙は、一切衆生の、無明黑闇の中に墮在するを見れば、我爲に智慧の光明を然さんと欲し、一切衆生に一切煩惱有れば、我一切佛法の樂を設けんと欲し、一切衆生皆邪道に墮せば、我衆生の爲の故に無上道を求む。是三種の願は、般若波羅蜜を得れば則ち能く具足す。是故に教を受くと言ふ。問うて曰はく、薩陀波崙は其形を見ず、但其聲を聞くのみ。何を以てか便ち教を受くと言ふ。一答へて曰はく、一人の求むる所の事の急なるが故に、聲を聞けば則ち應ず。薩陀波崙も亦是の如し。復次に、其説く所の理の好きを聞けば、其人亦好きを知るが故に、眼を以て見ることを須ひず。黑闇の中に種種の衆生有つて、眼を見ずと雖も、其聲を聞けば則ち其種類を知るが如し。爾時、空中の聲復然して善哉と言ふ。其を以て形を見ずと雖も、而も能く善語を信受するが故に、又復其一切衆生を度せんと言ふ。其を以ての故に、阿耨多羅三藐三菩提を求めて憚息せざるなり。是の如き等の因縁の故に、説いて善哉と言ふ。三徳薩門の中に於て信心を生ずべしとは、是門は善法實相所入の門なり。是三門を離るれば、皆是れ虛誑にして實有る者無し。汝未だ得ずと雖も、應に大信根力を生ずべし。信根力有るが故に漸く諸根を具す。相心を離るるを

以て、般若波羅蜜を求むとは、謂ゆる諸法の畢竟空を觀し、衆生相を離れ、法相を離るる  
 なり。一問うて曰はく、「三解脱門は般若の中に攝在するや不や。若し攝せば何を以てか別  
 に説く。若し攝せずんば云何が經の中に、一切の助道法は皆般若の中に攝在すと説く。」答  
 へて曰はく、「一切法は皆般若の中に入るなり。人皆苦を畏るるが故に解脱を求む。是故に  
 般若分の中に於て前に三解脱門を説くなり。何の因縁を以てか此解脱を得、諸の二邊、  
 謂ゆる衆生相、法相を離るるや。般若波羅蜜を行するが故なり。」問うて曰はく、「初には  
 精進を教へ、後には三解脱門を教ふ。般若は今復何事を爲さんと欲するが故に、善知識に  
 親近することを教ふるや。」答へて曰はく、「好法有り」と雖も、若し教ふる者無くんば、行す  
 る時多く錯る。譬へば、好き業有り」と雖も、亦良書を讀つが如し。又薩陀波闍は是れ新發  
 意の菩薩にして、般若波羅蜜は甚深なり。云何が空中の略教を聞いて、而も能く自ら具足  
 せん。是故に語つて善知識に親近することを教ふ。善知識の説は先に説くが如し。今略し  
 て二相を説く、是れ善知識なり。一には一心に薩婆若に向ふを教へ、二には空無相無作、  
 無生無滅等の般若波羅蜜の法を教ふ。若し能く是の如く行すれば、久からずして般若波羅  
 蜜を得。象師の病者乃爲に服藥の法を説くが如し。汝能く法の如く服すれば、病則ち差ゆ  
 ることを得。若し經卷より聞き、菩薩の説くに從つて聞くとは、薩陀波闍を遣して曇無  
 竭菩薩の處に至るに、彼中に二處に般若有り。一には寶臺上の金剛書、二には曇無竭の所  
 説なり。若し人、福德多き者は、曇無竭の所説に從つて聞き、福德少き者は經卷に從つ

て聞く。師に於て佛の想を生じ、能く佛道を教ふる因縁を以ての故に、世間の小人は因縁の事訖れば、則ち其恩義を忘れ是念を作す、人の船に乗つて水を渡るが如し。既に彼岸に到れば、何んが船を用ふることを爲さん」と。是故に説く、汝當に恩を知り、是念を作すべし」と。従つて聞く所の般若とは、即ち是れ我善知識なり。一切諸利の中、般若の利は最勝なり。是般若を行せば、疾に阿耨多羅三藐三菩提を得て退轉せず。又復般若を行ずる因縁の故に、諸佛に親近し、常に有佛の國の中に生じ、八難を離れ、佛の在世に値ふ。菩薩應に是念を作すべし、我是の如き等の諸の功徳を得るは、皆般若に従へばなり。般若波羅蜜を得るは、師に従つて得るなり。是故に師を視ること佛の如く想へ」と。人有つて、能く般若波羅蜜を説く者は、大福德有つて知識多く、多く供養を得。弟子は初に般若の爲の故に隨逐し、後漸漸に供養の爲に利を得、是故に世の利を以ての故に、法師を隨逐する莫れと説くなり。問うて曰はく、「何を以てか但善知識に親近すと説かずして、而も是種種の因縁を説く。」答へて曰はく、「人有り、既に善知識を得るも、其意を得ずして反つて罅隙を成じて地獄に墮し、更に相誘毀するが故に、唯佛一人のみ過失有る無し。餘人は誰か能く無き者有らん。若し弟子にして師の過を見ば、若し實なるも、若し虚なるも、自ら壞して復能く法利を得ず。是故に、空中の響の教は、若し師の過を見るも嫌恨を起す莫し。汝應に是念を作すべし。我先世の福德を具足せざるが故に、佛に値ふを得ずして今は難行の師に値ふ。我應に其過失を念うて、而も自ら般若を妨失せざるべし。師の過失は我に著

かず、我は但師に從つて般若波羅蜜の法を受くるのみ。狗皮の囊に好き寶物を盛るに、囊を以ての故に而も其寶棄つべからざるが如し。又罪人の縛を執つて道を照すに、人の罪有るを以ての故に其罰を受けずして自ら溝壑に墜つべからざるが如し。又行くに、小人を遣して道を導くに、人の小なるを以ての故に、其語に聽はざるべからざるが如し。是の如き等の因縁を以て師を遠離すべからず。師若し實に罪有るも尙離るべからず、何に況んや、此中に魔の因縁を作し、説法する者をして、深妙の五欲有らしめ、弟子をして、善法に染めざらしむるをや。説法する者は方便を以ての故に現に受く。方便とは謂ゆる衆生をして福德の因縁を種えしめんと欲するなり。亦同事の爲に衆生を攝するが故に、復諸の菩薩有り、諸法實相に通達するが故に、障礙する所無く、過罪有る無し。過罪を作すと雖も亦妨ぐる所無し。人壯年なれば力盛にして、腹中の大熱なれば食進せずと雖も、飲食し病を生ずる能はざるが如し。又好業有れば、惡毒を被ると雖も害を爲す能はざるが如し。是の如き等の因縁の故に、汝師の所に於て嫌恨を起し、而も自ら疑心を失ふ莫れ。經の中に説くが如し。復説法する者有り、戒を持つこと清淨にして五欲を離れ、多知多識にして好名聞有り、威德尊重ならんには、弟子法を受けて顧録せず。汝是中に於て、怨恨を生ずること莫く、當に是念を作すべし、「我宿世の罪の故に今小人と爲るも前は我を顧んせず、我自ら顧無くして道を得る能はず。又我師の所に於て嫌恨を破るべし」と。法利を求むるを以て、是の如き等の種種の諸師有り、菩薩は般若波羅蜜を求むるが爲の故に、但一心に恭敬

して其長短を念ふべからず。若し能く是の如く師を忍辱し、一心に増減を起さずんば、汝師の所に於て盡く好法を得ること、完牢の器の受くる所を漏さざるが如し。薩陀波菴の空中の聲を聞き已つて、是より東に行くことは、經の中に廣く説くが如し。』



大智度論釋薩陀波崙品第八十八之餘

卷第九十七

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

爾時、薩陀波崙菩薩、是空中の教を受け已り、是より東に行くこと久しからずして、是念を作さく、「我云何が空中の聲に問はざりし、我當に何處に去るべき、去ること當に遠近なるべき、當に誰に従つてか般若波羅蜜を聞くべき」と。是時、即ち啼哭憂愁に作して、是念を作さく、「我是中に住し、一日一夜、若は二、三、四、五、六、七、七日夜を過ぐるも峻極を念はず、乃至龍鬚髮を念はず、般若波羅蜜を聽受する因縁を聞かずんば、終に起たず」と。須菩提、譬へば、人の一子有つて卒に死するや、憂愁し苦毒して、唯懊惱を懷き、餘念を生ぜざるが如し、是の如く、須菩提、薩陀波崙菩薩は、爾時異心有る無く、但念ずらく、「我何の時か、當に般若波羅蜜を聞くを得べき、我云何が空中の聲に問はざりし、我應に何處に去るべき、去ること當に遠近なるべき、當に誰に従つてか般若波羅蜜を聞くべき」と。須菩提、薩陀波崙菩薩の是の如く愁念する時、空中に佛有つて薩陀波崙菩薩に語つて言はく、「善哉、善哉、善男子、過去の諸佛の菩薩道を行する時、般若波羅蜜を求めしも亦汝が今日の如し。善男子、汝是を勤めて精進し、法を愛樂するが故に、是より東に行き、此を

去ること五百山旬にして城有り、衆香と名く。其城七重にして、七寶もて莊嚴せり。臺觀  
 欄楯皆七寶を以て校飾し、七寶の塹、七寶の行樹の周匝すること七重なり。其城は、縱廣  
 十二山旬、豐樂安靜にして、人民熾盛なり。五百の市里、街巷相當し、端嚴にして畫の如  
 く、橋津は地の如く寬博にして、清淨なり。七重の城の上には皆七寶の樓櫓有り。寶樹行列  
 し、黃金、白銀、車渠、馬瑙、珊瑚、琉璃、頗璃、紅色の眞珠、以て枝葉と爲る。寶繩連  
 綿し、金は鈴網と爲り、以て城の上を覆ふ。風鈴を吹くや、聲其音と和雅して、衆生を娛  
 樂せしむ。譬へば、巧に五樂を作さば、甚だ悦喜すべきが如し。其城の四邊に流地、清淨  
 にして冷暖調適なり。中に諸船有りて七寶もて嚴飾す。是れ諸の衆生、宿業の致す所に  
 して、此寶船に乗じて娛樂遊戯す。諸の池水の中に種種の蓮華有つて青黃赤白なり。  
 衆の雜好華、遍く水上を覆ひ、是三千大千世界所有の衆華皆其中に在り。其城の四邊に  
 五百の園觀有りて、七寶もて莊嚴して甚だ愛樂すべし。一一の園中に各五百の池有り、池  
 の各縱廣十里、皆七寶を以て校成し、雜色もて莊嚴せり。諸の池水の中にも亦青黃赤  
 白の蓮華有りて、水上に彌覆し、其諸の蓮華の大さ車輪の如く、青色には、青光、黃色に  
 は、黃光、赤色には、赤光、白色には、白光あり。諸の池水の中に鳧雁、鶩鴛、異類の衆  
 鳥あつて音聲相和す。是諸の園觀は適くとして所屬無きは、是諸の衆生、宿業の致す  
 所に因つて、長夜に深法を信樂し、般若波羅蜜を行ずる因縁の故に、是果報を受く。善男子、  
 是衆香城の中に大高臺有つて、臺無竭菩薩摩訶薩の宮舍上に在り。其宮の縱廣一由旬にし

て、七寶を以て校成し、雜色もて莊嚴して甚だ喜樂すべし。垣牆七重にして皆亦七寶なり。七寶の欄柵、七寶の樓閣、寶塹七重にして皆亦七寶なり。周圍に深塹七重に壘成し、七重の杖葉にて七重に圍遮せり。其宮舍の中に四種の舞樂園有り。一には常喜と名け、二には離憂と名け、三には華飾と名け、四には香飾と名く。一一の園中に各八地有り。一には賢と名け、二には賢上と名け、三には歡喜と名け、四には喜上と名け、五には安穩と名け、六には多安穩と名け、七には遠離と名け、八には阿轉跋致と名く。諸池の四邊の面は各一寶なり。黄金、白銀、琉璃、玻璃、政珎を以て池底と爲し、其上に金沙を布く。一一の池の側に八の梯陸有りて、種種の妙寶を以て嚴飾を爲し、諸の梯陸の間には、闍浮檀金の芭蕉の行樹有り。一切の池の中には、種種の蓮華の青黄赤白なるあつて、水上に彌覆し、諸池の四邊には好華樹を生じ、風諸華を吹いて池水の中に墜つるや、其池、八種の功德香を成就し、若し梅檀色味を具足す。曇無竭菩薩は六萬八千の姪女と共に五欲を具足し、共に相娛樂す。善男子、曇無竭菩薩は、諸の姪女と共に遊戯娛樂し已つて、日に三時般若波羅蜜を説く。衆香城内の男女、大小、其城中に於て多く人の譽る處に大法座を敷く。其座四足あつて、或は黄金を以てし、或は白銀を以てし、或は琉璃を以てし、頗梨を以てす。敷くに純羅難色の茵褥を以てし、諸の幃帶を垂る。妙白氈を以て而も其上を覆ひ、散するに雜妙の華香を以てす。座の高さ五里にして白珠の張を張り、其池の四邊に五色の華を散じ、衆の名香を燒き、澤香を地に塗る。般若波羅蜜を供養し恭敬するが故に、曇無竭菩薩此

座上に於て般若波羅蜜を説く。彼諸の人衆、是の如く曇無竭を恭敬し供養し、般若波羅蜜を聞かんが爲の故に、是大會に於て、百千萬衆の諸天世人一處に和集す。中に聽く者有り、中に受くる者有り、中に持つ者有り。中に誦する者有り、中に書する者有り、中に正しく觀する者有り、中に説の如く行ふ者有り。是時に當つて、中の衆生皆因縁を以ての故に、皆惡道に墮せず、阿耨多羅三藐三菩提を退轉せず。汝善男子、曇無竭菩薩に往詣して、當に般若波羅蜜を聞くべし。善男子、曇無竭菩薩は、世世に是れ汝が善知識にして、能く汝に阿耨多羅三藐三菩提を教へて、示教利喜す。是曇無竭菩薩、本般若波羅蜜を求むる時、亦汝の如し。今汝去つて晝夜を計る莫く、障礙心を生ずる莫くんば、汝久からずして當に般若波羅蜜を聞くを得べし」と。爾時薩陀波密菩薩摩訶薩、歡喜し心に悦んで是念を作さく、「我當に何の時にか善男子を見るを得て、般若波羅蜜を聞くを得べきや」と。須菩提、譬へば人有つて、毒箭に中てらるるが如く、更に餘念無く唯念へらく、何の時にか當に良醫を得て毒箭を拔出し、我此毒を除くを得べき」と。是の如く須菩提、薩陀波密菩薩摩訶薩は更に餘念無く、但是の願をなさく、「我何の時にか曇無竭菩薩を見るを得て、我をして般若波羅蜜を聞くを得しむべきや、我は般若波羅蜜を聞いて諸有の心を斷ぜん」と。是時薩陀波密菩薩是處に住し、曇無竭菩薩を念じ、一切法の中に於て、無礙の知見を得已つて、即ち無量の三昧門の現在前するを得。謂ゆる諸法性觀三昧、諸法性不可得三昧、破諸法無明三昧、諸法不異三昧、諸法不壞自在三昧、諸法能照明三昧、諸法離闇三昧、諸法無異

【一】前卷に續き常啼菩薩の求法の縁を釋する中、啼の思惟を擧げてその求法の強きことを釋す。

相續三昧、諸法不可得三昧、散華三昧、諸法無我三昧、如幻威勢三昧、得如鏡像三昧、得一切衆生語言三昧、一切衆生歡喜三昧、入分別音聲三昧、得種種語言字句莊嚴三昧、無畏三昧、性三常嘿然三昧、得無礙解脫三昧、離塵垢三昧、名字語言莊嚴三昧、見諸法三昧、諸法無礙頂三昧、如虛空三昧、如金剛三昧、不畏著色三昧、得勝三昧、轉眼三昧、畢法性三昧、能與安穩三昧、劍子吼三昧、勝一切衆生三昧、華莊嚴三昧、斷疑三昧、隨一切堅固三昧、出諸法得神通力無畏三昧、能達諸法、諸法財印三昧、諸法無分別見三昧、離諸見三昧、離一切闇三昧、離一切相三昧、能觀一切著三昧、除一切懈怠三昧、得深慧明三昧、不可奪三昧、破魔三昧、不著三昧、起光明三昧、見諸佛三昧なり。薩陀波闍菩薩は、是諸の三昧の中に住して、即ち十方無量阿僧祇の諸佛を見、諸の菩薩摩訶薩の爲に報若波羅蜜を説く。

問うて曰はく、「薩陀波闍は、何を以てか、忘れて空中の聲に問はざる。」答へて曰はく、「薩陀波闍は大に歡喜して心を覆ふが故に忘れたり。人の大に憂愁し大に歡喜せば、此の事を以ての故に忘るるが如し。」問うて曰はく、「空中の聲に滅す、何を以てか此に住すること七日にして、更に問處を求めざる。」答へて曰はく、「一本、空界の處に於て、一心に般若を求むるが故に空中に響有るが如く、今も亦一心に本の如くならんと欲し、更に聲を聞いて其疑ふ處を斷せんと欲ふ。復次に、薩陀波闍は、世の樂に於て已に捨てて無邊に入るも、愛樂の情至るや、空中の聲響けて少く開示するも、竟に未だ疑を斷せざるが故

に、其聲便ち減す。小兒の少く美味を得ば、是味に著するが故に、更に復啼泣して而も之を得んと欲するが如し。薩陀波崙も亦是の如く、般若波羅蜜の因縁の味を得るも通達する能はず、那に去るやを知らず、是故に住して而も啼泣するなり。問うて曰はく、「何を以てか乃ち七日に至りて佛身乃ち現する。」答へて曰はく、「譬へば、人の大に渴するが故に、乃ち水之美を知るが如し。若は二日、三日の精進は欲未だ深からず、若し七日を過ぐれば其憂愁心を妨げて、道を求めることを任せざるを恐る、是故に七日憂愁す。譬喩經の中に説くが如し。」問うて曰はく、「薩陀波崙は何を以てか憂愁すること、乃ち爾く愛子を喪ふが如くなる。」答へて曰はく、「般若波羅蜜は諸法の中に於て第一なり、實に是れ十方の諸佛の眞實の法寶なり。薩陀波崙は少く氣味を得るも、未だ具足せざるが故に、憂愁すること愛子を喪ふが如し。長大して、威攝する處多きを念じ、其力を得んことを冀ふ。菩薩も亦是の如く、般若波羅蜜を増益し、阿耨跋致を得已つて、佛事を成就せんと念ず。子の父に於て孝行し、身を終るまで異心有る無きが如し。般若波羅蜜の菩薩に於けるも亦是の如し。若し能く入るを得ば、乃至成佛まで、終に遠離せざること、父の子を見て心即ち歡喜するが如し。菩薩は種種の諸法を得ると雖も、般若波羅蜜を見るの歡喜に如かず。子の假に其名を爲すが如く、般若波羅蜜も亦是の如し。空にして実實無く、但假名のみ有り。是の如き等は是れ總相の因縁なり。父は子を愛すと雖も、尙頭目を以て之に興ふる能はず。菩薩に般若波羅蜜の爲の故に、無量世の中に、頭目髓腦を以て衆生に施與す。子の父に於けるや、或は恩を

報する能はず、若し能く恩を報せば、正に現世に少しく衣食歡樂等を利すべきのみ。菩薩の般若波羅蜜の中に於けるや、乃至一切の智慧として得ざる所無し、何に況や菩薩の力勞をや。世間の富樂なるも、子の父の恩を報するは一世に極まり、般若の益は無量世にして乃至成佛に至る。子の父に於けるや、或は好、或は悪あるも、般若波羅蜜は諸の不可ある無し。子は但是れ假名にして虚誑不實の法なるに、般若波羅蜜は眞實の聖法にして、虚誑有る無し。子の報恩は現世の小業を得ると雖も、而も憂愁苦惱の無量の苦有り、般若波羅蜜は但歡喜實樂、乃至佛樂を得るのみ。子は但能く供養を以て父を利益するも、其生老病死を免るること能はず、般若波羅蜜は、菩薩をして畢竟清淨にして、復老病死の患無からしむ。子は但能く父をして世樂自在を得しめ、般若波羅蜜は、能く菩薩をして一切世間に於て天下の主爲らしむ。是の如き等の種種の因縁、譬喻、差別の相あり。世の人の皆子を喪ふの憂愁を知るが故に、此を以て喻と爲す。問うて曰はく、「空中に佛の現するは是れ何等の佛なる。先に何を以てか、但菩薩のみ有つて而も今身を現する。佛既に身を現せば、何を以てか即ち度せずして方に遣はして曇無竭の所に至る。答へて曰はく、「有人言はく、「眞佛に非ず、但し其像を現するのみ。或は菩薩の化を遣はし、或は大菩薩の現作し、先には善根徳未だ成就せざるを以ての故に、但聲を聞くも、今は七日七夜、一心に佛を念じて功德成就するが故に、佛身を見ることを得るなり。佛即ち度せざる所以は、其曇無竭に與へ、世世の因縁もて應當に彼に従つて度すべきを以ての故なり。人有り舍利弗

に従つて度すべき者には、假使諸佛身を現ずるとも悟らしむる能はず、佛讚して善哉と言ふは、薩陀波耨に至り、意に去る處を求知し、般若を聞くの因縁なるを以ての故に、佛、身を現じて善哉と讚す。過去の諸佛は菩薩の道を行する時、此般若を求むること亦是の如く種種に勤苦す。初發心には、先づ罪厚重にして、福德未だ集まらざるが故に、佛、其心を安慰し、汝、般若波羅蜜を求めて勤苦すと雖も、懈怠する莫れ、退没の心を生ずる莫れ、一切衆生の行果は、因の時に皆苦を受け、果の時に樂む。當に諸佛無量の功德の果報を思惟して、以て自ら勸勉すべし。是の如く安慰し已つて是言を作さく、汝是より東に行き、此を去ること五百由旬にして城有り、衆香城と名く、乃至久しからずして般若波羅蜜を聞くべし」と。問うて曰はく、『衆香城は何の處に有りや。』答へて曰はく、『過去の佛、滅度の後、但遣法有るも、是法闍浮提に周迴せず、衆生聞法の因縁の處有れば即ち到る。爾時に衆香國土豐樂にして、多く七寶を出すがに故、七寶を以て城と作す。時に、薩陀波耨同じく闍浮提に在りと雖も、而も佛法無く、七寶無き處に在りて生じ、但佛名及び般若波羅蜜是れ佛道なりと傳聞す。是人は先世に廣く福德を集めて、煩惱雜穢なるが故に、聞いて即ち信樂し、惡世の樂を厭ひ、其親屬を捨てて、空林の中に住し、佛法有る國土に到らむと欲す。音聲示語すとは、恐らくは其れ異に去らば、空無獨菩薩の所に到るを得ざらん。是故に之を語り、次に後佛爲に身を現して其去る處を示すなり』。

問うて曰はく、『薩陀波耨の因縁は已に其上に於て聞く。今空無獨の因縁云何と爲



す。』答へて曰はく、『鬱伽陀は秦に盛と言ひ、達磨は秦に法と言ふ。此菩薩は衆香城の中に在りて、衆生の爲に意に随つて法を説き、衆生をして廣く善根を種えしむるが故に、法盛と號す。其國に王無く、此中の人民皆吾我無きこと鬱單越の人の如く、唯曇無竭菩薩を以て王と爲す。其國は到ること難きも、薩陀波闍は身命を惜みず、又諸佛菩薩の援助を得て能く到れり。大菩薩は衆生を度せんが爲の故に是の如き國の中に生ず。衆生は乏短する所無し。其心調柔にして得度すべきこと易きが故に。』問うて曰はく、『曇無竭菩薩は是れ生身と爲すや、是れ法身と爲すや、衆生を度せんが爲の故に、神通力を以て此身を化作せしものと爲すや。若し化身ならば、何んが六萬の婦女、閻羅浴池等種種の莊嚴を用て而も自ら娛樂するや。若し是れ生身ならば、云何が能く薩陀波闍の供養をして、具に青空中に在つて化して大臺を成せしめ、諸の三昧に入つて乃至七歳に至るや。』答へて曰はく、『有人言はく、『是れ生身の菩薩なり。諸法實相、及び禪定神通力を得るが故に、是域中の衆生を度せんと欲し、餘の菩薩の如く利根なるが故に、能く禪定に入り、亦能く欲界の法に入る。衆生を攝せんが爲の故に、五欲を受けて而も一定を失はず。人の熱を避くるが故に、泥中に在つて臥すも、起きて還つて洗はば、則ち故の如くなるが如し。凡夫は鈍根の故に能く是の如くなる能はず。是故に、神通力を以て、華臺を化作して、七歳定に入り、又方便力を以ての故に能く五欲を受くること、先の義に説くが如し。菩薩は但一道のみを行ぜず、衆生の爲の故に種種の道を行じて、之を引導すること、龍の雲を起して、能く大

雨を降らし、雷電、霹靂をなすが如し。菩薩も亦是の如く、是生身未だ煩惱を離れずと雖も、而も能く善法を修行し、衆生の爲の故に結使を盡さずと。有人言はく、「是菩薩は是れ沙性生身なり、衆香城の人を度せんが爲の故に變化して度す。若し是れ生身ならば、云何が能く十方の佛稱讃して、薩陀波崙を遣はし、従つて法を受けて六萬の三昧を得しめんや」と。是故に知んぬ、是大菩薩は是れ變化身なることを。譬へば大海の中の龍の死相出づる時の如く、果の熟して塵に墮するや、金翅鳥則ち來つて之を食するが如し。衆生も亦是の如く、行業因緣熟するが故に、大菩薩來つて之を度す。

【三】次に常啼が求法の善知識を知りて更に精進するを述べ、其が所入の無量の三昧について釋す。

爾時、薩陀波崙、空中の佛の教を聞いて大に歡喜し、大に欲心を生ずるが故に、「我何の時にか當に曇無竭菩薩の般若波羅蜜を説くを聞くを得べき」と。能く我心中の愛見等の煩惱の箭を出さしめ、是事を明かさんと欲するが故に、此中に佛は毒箭の譬喩を説く。人毒箭の身に在るや、更に餘念無きが如く、一には苦痛急に、二には毒疾出でざれば、即ち身中に遍滿して命を失ふ。薩陀波崙も亦是の如く、諸の邪疑等の箭心に入り、貪欲等の毒を箭に塗り、曇無竭菩薩、能く此箭を拔出するを聞くや、是人邪見の箭の毒を以て心を傷け、又貪欲等の毒、遍く身中に入つて智慧の命を奪ひ、凡人と同く死することを畏る。是故に、急に曇無竭菩薩を見んと欲して、復餘念無し。此中に、諸の所有の心を斷するを説く、所有の心とは相を取つて著するなり。乃至善法の中にも亦是病有り、薩陀波崙は目に佛身を觀、先に未だ見ざる所、佛に従つて教を聞き、法喜を得るが故に、五欲の喜を離

れ、即ち一切法の中に無礙の知見を得。無礙の知見とは、薩陀波崙の力の所得の如く無礙  
 なり、佛の無礙に非ず。是時に諸の三昧門に入るを得。諸法性觀三昧とは、能く一切  
 諸法の實性を觀するなり。實性とは、先に種種の因縁を説けるが如し。諸法性不可得三昧  
 とは、初めて三昧を得るものにして、謂ゆる空無生無滅なり。今是三昧を得れば、則ち  
 是性に著せざるなり。其決定相を得ざるなり。破諸法無明三昧とは、諸法は凡夫の人の  
 心の中に於て、無明の因縁を以ての故に、邪曲にして正しからず、謂ゆる常樂我淨なり。  
 是三昧を得るが故に、常等の顛倒相應の無明を破し、但一切法は無常空無我なりと觀す  
 るなり。問うて曰はく、若し是菩薩、一切法の中の無明を破さば、此人は尙憚すら見  
 るを須ひず。何を用てか曇無竭菩薩の所に至らん。一答へて曰はく、一無明を破するは唯  
 一種にあらず、遮して起らざらしむる有るも、亦名けて破と爲す。諸法空相を得ること  
 有るが故に無明を破す。又無明の種數甚だ多く、菩薩の破する所の分有り、佛の破する所  
 の分有り、小菩薩の破する所の分有り、大菩薩の破する所の分有ること、先に燈の譬喩  
 を説けるが如し。又須陀洹をも亦無明を破すと名け、乃至阿羅漢は方に是れ實證なり。大  
 乗法の中も亦是の如し。新發意の菩薩は諸法の實相を得るが故に、亦無明を破すと名け、  
 乃至佛は無明盡く破して餘す無し。是故に薩陀波崙は、佛法の中に於て邪見、無明及び  
 我見等皆盡すが故に、破無明三昧と名くることを得るに咎無し。一諸法不異三昧とは、是三  
 昧を得れば、一切法一相なりと觀す。謂ゆる無相の諸法なり。不壞自在三昧とは、是三昧

を得て、一切法は如法性、實際、無爲の相なりと觀するが故に不壞と名く。是法を得已つて自在を得、了了に諸法を知るも佛道の爲の故に是法を證せざるなり。諸法能照明三昧とは、總相別相を以て一切法を知るなり。諸法離闇三昧とは、無明に二種有り、一には厚、二には薄なり。薄とは無明に名け、厚とは黑闇に名く、厚き無明を破するが故に離闇と名く。先づ薄き無明を破するが故に、破諸法無明と名く。諸法無異相續三昧とは、五衆念に滅し、相似に相續して生ず、死する時相續し、生じて而も相似せず。是三昧を得て、諸法の念念相續して、法の異らざるを知る。諸法不可得三昧とは、即ち是れ一切法空にして三昧と相應するなり。散華三昧とは、是三昧を得る者は、十方の佛前に於て能く七寶の華を以て佛に散ずるを得るなり。諸法無我三昧とは、一切法の無我を觀するなり。如幻威勢三昧とは、是三昧を得る者は、能く種種に身を變化すること大幻師の如く、能く衆生を引導して希有の心を發さしむること大幻師の如し。幻力を以ての故に、能く一國の人の心を轉ず。得如鏡三昧とは、是三昧を得る者は、三界の所有を觀じて、鏡中の像の虚誑にして實無きが如し。得一切衆生語言三昧とは、是三昧を得るが故に、能く一切衆生の語言を解するなり。一切衆生歡喜三昧とは、是三昧に入れば能く衆生の瞋心を轉じて歡喜せしむるなり。入分別音聲三昧とは、是三昧の中に入れば、皆能く天人の音聲の大小響細等を分別して、種種の語言字句を得。莊嚴三昧とは、是三昧を得る者は、義理淺しと雖も、能く字句語言を莊嚴して、人をして歡喜せしむ、何に況んや深義をや。無畏三昧とは、是三昧

を得る者は一切の魔民、外道の論師、及び諸の煩惱の性を畏れず。常默然三昧とは是三昧に入る者は、常に默然攝心し衆生を度せんが爲の故に、所應の聞に随つて音聲を出すこと、天の伎樂の音に應じて出づるが如し。得無礙脱三昧とは、是三昧を得る者は、一切法の中に於て無礙の智慧を得るなり。離塵垢三昧とは、是三昧を得る者は、諸の煩惱の結使塵垢皆滅す。即ち是れ無生法忍三昧なり。名字語句莊嚴三昧とは、是三昧を得る者は、能く種種に偈句語言を莊嚴して說法す。見諸法三昧とは是三昧に入る者は、世諦及び第一義を見るを以て諸法を知るなり。諸法無礙頂三昧とは、人の山頂に在つて遍く四方を觀するが如く、菩薩は是三昧の中に住して、普く一切諸法の無礙を見るなり。如虛空三昧とは、是三昧に入る者は、身及び外法皆虛空の如く自在を得るなり。如金剛三昧とは、金剛の能く諸山を破するが如く、是三昧も亦是の如く、能く障礙を破し、六波羅蜜の法もて直に佛道に至るなり。不畏著色三昧とは、是三昧を得れば、乃至天色すら尙著せず、何に況んや餘色をや。得勝三昧とは、所作有らんと欲するに、皆能く勝つて負けざるを得るなり。轉眼三昧とは、是三昧を得る者は、魔及び魔民、菩薩の短を見んと欲する者をして、之を轉じて好く見ることを作さしむるなり。畢法性三昧とは、是三昧を得る者は、一切の法を見て畢く法性の中に入るなり。能與安穩三昧とは、是三昧を得ば、六道に往來して廻轉すと雖も、自ら必ず當に作佛すべしと知るなり。安樂無憂師子吼三昧とは、是三昧に入る者は、皆能く一切の魔民を降伏し、外道も敢て之に當る者無し。勝一切衆生三昧とは、

是三昧を得ば、一因空十に於て最勝なり。一切に二因行り、一には名乎一切、二には實一切是なり。三界に於て善心の凡夫、及び聲聞、辟支佛、及び初發心の未だ是三昧を得ざる者の中に於て、勝るが故に一切と言ふ。在昔三昧とは、是三昧を得る者は、十方の佛の七寶華座の上に坐し、虚空の中に於て、寶蓮華を請佛の上に雨らすを見るなり。聲聞三昧とは、是三昧を得る者は、未だ佛を得ずと雖も能く一切衆生の所疑を斷するなり。隨一切堅固三昧とは、諸法實相の堅固なるに名く。是三昧を得る者は、諸法の實相に隨つて諸法を斷せず。出諸法得中實力無量三昧とは、是三昧を得る者は、一切凡夫の法を總出し、菩薩の六神通、十力、四無所畏を得たり。能達諸法三昧とは、是三昧を得る者は、乃至諸法の如、法性、實際の中に通達し、乃至諸法平等に住せず。諸法財印三昧とは、財をば善法と名け、印をば相と名く。人の印綬を得るや、敢て陵易無きが如く、菩薩善法財の印を得るも、亦能く致に留難を作すもの無きなり。諸法無分別見三昧とは、若し諸法を分別せば、即ち憍愛の心を生ずるも、是三昧を得る者は、一切法を見て分別を作さざるなり。離諸見三昧とは、見とは六十の邪見、及び色等の法の中に相を取り、乃至佛見、法見、信見、淨樂見、皆名けて見と稱す。所以は何ん。相を取れば能く善心を生ずるが故に。離一切相三昧とは、即ち是れ無相無門相應の三昧なり。離一切善三昧とは、一切の相を離るるが故に、一切法に於て亦著せざるなり。除一切懈怠三昧とは、是三昧を得る者は、此中に説くが如く、乃至七處も生せず臥せず、菩薩是三昧を得ば、常に憍意の心なく、乃至佛を得て歸めて止

應せざるなり。得法は明三昧とは、深法を名けて禪佛法一切智智等と謂ふ。菩薩は是三昧を得るが故に、能く進ずる所法を見、思惟し籌量して、深妙無比なるを知りたまふ。不可尋三昧とは、是三昧を得る者は、智慧の法を行するに、能く其心を善く善無し、故に三昧とは、是三昧力を得ば、體は是れ法界の主なりと稱し、菩薩は人身を以て能く體事を修するなり。行者三界三昧とは、是三昧を得る者は、身は三界の中に在りと稱し、心は常に涅槃に在るが故なり。行者四念三昧とは、是三昧を得る者は能く無量の業障を断ちて十方を照す。見淨土三昧とは、是三昧を得ば、五願其身を得ずと稱し、前も能く十方の諸佛を見、十方の諸佛の法を聞いて、候ふ所を善用するなり。薩陀皮倫は、是の如き等の三昧の中に住して、即ち十方無量阿僧祇の諸佛を見、大業の中に在りて、一切の菩薩の爲に教を流布家を説くをいふ。

大智度論卷第九十七

大度智論釋薩陀波崙菩薩品第八十八之餘 卷第九十八

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

是時十方の諸佛、薩陀波崙菩薩を安慰して言はく、「善哉、善哉、善男子、我等、本菩薩道を行ずる時、般若波羅蜜を求め、是諸の三昧を得ること亦汝が今得る所の如し。我等是等諸の三昧を得て善く般若波羅蜜に入り、方便力を成就して阿耨跋地に住す。我等是諸の三昧を觀するに、法として三昧を出で三昧に入る者有るを見ず。亦佛道を行ずる者を見ず、亦阿耨多羅三藐三菩提を得る者を見ず。善男子、是を般若波羅蜜と名く。謂ゆる是諸の法有るを念はざるなり。善男子、我等は無所念の法の中に住して是金色身、丈六の光明、三十二相八十隨形好、不可思議の智慧、無上戒、無上三昧、無上智慧を得て、一切の功德を悉皆具足す。一切の功德を具足するが故に、佛すら尙相を取りて説き盡す能はず、何に況んや、聲聞辟支佛及び諸の餘人をや。是を以ての故に、善男子、是佛法の中に於て、倍恭敬し愛念して、清淨の心を生ずべく、善知識の中に於て應に佛の如き想を生ずべし。何を以ての故に、善知識を守護せんが爲の故に、菩薩は疾く阿耨多羅三藐三菩提を得ればなり」と、是時薩陀波崙菩薩十方の諸佛に白して言さく、「何等か是れ我善知



識として應に親近し供養すべき所の者なる一十方の諸佛薩陀波闍菩薩に告げて言はく、  
 一汝善男子、曇無竭菩薩は世世に教化し、汝をして阿耨多羅三藐三菩提を成就せしめ、曇  
 無竭菩薩は汝を守護し、汝は般若波羅蜜方便力を教ふ。是れ汝が善知識なり、汝曇無竭菩  
 薩を供養して、若は一劫、若は二劫、若は三劫、乃至百千劫を過ぐるまで頂戴し恭敬せ  
 よ。一切の樂具、及び三千世界の中の所有の妙なる色聲香味觸を以て、盡く以て供養す  
 とも、未だ須臾の思をも報ゆる能はず。何を以ての故に。曇無竭菩薩摩訶薩は、因縁の故  
 に、汝をして是の如き等の諸の三昧を得て、般若波羅蜜の方便力を得しむればなり」と。  
 諸佛は是の如く教化し安慰し、薩陀波闍菩薩をして歡喜せしめ已つて、忽然として現せず。  
 是時薩陀波闍菩薩、三昧より起ち已つて、復佛を見ずして是念を作す、「是諸の佛は何の  
 所より來り、去つて何の所に至るや。復諸佛を見ざるが故に惆悵して樂まず、誰か我疑を  
 斷せん」と。復是念を作す、「曇無竭菩薩は久遠より已來、常に般若波羅蜜を行じて方便力  
 及び諸の陀羅尼を得、菩薩法の中に於て自在を得て、多くの過去の諸佛を供養し、世世  
 に我佛と爲り、常に我を利益す」と。我當に曇無竭菩薩に問ふべし、「諸佛は何の所より來  
 り、去つて何の所に至るや」と。爾時、薩陀波闍菩薩、曇無竭菩薩に恭敬樂尊重の心を  
 生じて是念を作す、「我當に何を以てか曇無竭菩薩を供養すべき、今我貧乏にして華香、瓔  
 珞、燒香、淨香、衣服、幡蓋、金銀、眞珠、珊瑚、琥珀、琉璃、瓊瑤、琥珀、虎珀、無く、是の如き等を  
 以て般若波羅蜜及び諸法の師たる曇無竭菩薩を供養すべきこと有る無し。我法は空しく曇

無竭菩薩の所に往くべからず、我若し空しく往かば、喜悅の心生ぜず。我當に身を賣り財を得て、般若波羅蜜の爲の故に、法師曇無竭菩薩を供養すべし。何を以ての故に。我世世に身を喪ふこと無數にして、無始生死の中に或は死し、或は賣り、或は欲の因縁の爲の故に、世世に地獄の中に在つて無量の苦惱を受け、未だ曾て清淨の法と爲らざるが故に、是故に説法の師を供養せんが爲に身を喪ふ」と。是時薩陀波崙菩薩は中道に一大城に入り、市肆の上に至りて高聲に唱へて言はく、「誰か人を須めんと欲する、誰か人を須めんと欲する、誰か人を買んと欲する」と。爾時惡魔は念を作す、「是薩陀波崙は法を愛するが故に自ら身を賣り、般若波羅蜜の爲の故に、曇無竭菩薩を供養せんと欲す。當に般若波羅蜜及び方便力を正問するを得べし。云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて、疾に阿耨多羅三藐三菩提を得、當に多聞具足を得可きこと大海水の如し。是時に沮壞すべからず、一切の功德を具足することを得、諸の菩薩摩訶薩を饒益し、阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に我境界を過ぎ、亦餘人を教へて我境界を出でて阿耨多羅三藐三菩提を得しめん。我今當に其事を壞すべし」と。爾時惡魔隱蔽して、諸の婆羅門居士をして其自ら賣る聲を聞かざらしむるも、一長者の女は魔も蔽ふ能はず。爾時、薩陀波崙は身を賣るも售れず、憂愁啼哭して一面に在つて立つて啼泣して言はく、「我大罪の爲に身を賣るに售れず。我自ら身を賣り、般若波羅蜜の爲の故に曇無竭菩薩を供養せん」と。爾時釋提桓因、是念を作さく、「是薩陀波崙菩薩は法を愛して自ら其身を賣り、般若波羅蜜の故に、曇無竭菩薩を供養せ

んと欲す。我當に之を試むべし。是善男子は實に深心を以て法を愛するが故に是身を捨つるや否やを知らん」と。是時釋提桓因、婆羅門の身を化作し、薩陀波崙菩薩の邊に在つて、行いて問うて言はく、「汝善男子、何を以て憂愁啼哭し、顔色憔悴して一面に在つて立つ」と。答へて言はく、「婆羅門、我法を愛敬するが故に自ら身を賣らんと欲し、般若波羅蜜の爲に曇無竭菩薩を供養せんと欲し、今我身を賣るに買ふ者有る無し。自ら念へらく、薄福にして財寶物無し、自ら身を賣り般若波羅蜜及び曇無竭菩薩に供養せんと欲するに、而も買ふ者無し」と。爾時婆羅門、薩陀波崙菩薩に語つて言はく、「善男子、我人を須めず。我は今天に刺せんと欲して、當に人の心、人の血、人の髓を須むべし。汝能く賣つて我に興ふるや否や」と。爾時薩陀波崙菩薩、是念を作さく、「我大利を得、第一利を得、我今便ち般若波羅蜜の方便力を具足せんが爲に、是心、血、髓を買ふ者を得ん」と。是時心大に歡喜し悦樂して憂無く、柔和の心を以て婆羅門に語つて言はく、「汝の須むる所の者、我盡く汝に與へん」と。婆羅門言はく、「善男子、汝何の價を須むるや」と。答へて言はく、「汝の意に隨つて我に與へよ」と。即時に薩陀波崙は右の手に利刀を執り左の臂を刺して血を出し、右の臂肉を割いて、復骨を破り髓を出さんと欲する時、一長者の女有り、階上に在つて遙に薩陀波崙菩薩の、自ら身を賣るを割いて壽命を惜まざるを見て是念を作さく、「是善男子、何の因縁の故に其身を困苦するや、我當に往いて問ふべし」と。長者の女即ち階より下り、薩陀波崙の所に到つて問うて言はく、「善男子、何の因縁有つてか其身を

困苦し、是心、血、髓を用て何等をか作す」と。薩陀波崙答へて言はく、「般若波羅蜜の爲の故に、婆羅門に賣與して曇無竭菩薩を供養せんが爲なり」と。長者の女言はく、「善男子、是身を賣らんとして、自ら心、血、髓を出して曇無竭菩薩を供養せんと欲するに、何等の功德利を得るや」と。薩陀波崙答へて言はく、「善女人、是人は善く般若波羅蜜及び方便力を學す。是人は當に我爲二菩薩の作すべき所、菩薩の行すべき所の道を説くべし。我は法を學び、是道を學んで阿耨多羅三藐三菩提を得る時、衆生の爲に依止と作つて、當に金色身、三十二相八十隨形好、大光、無量明、大慈大悲、大喜大捨、四無所畏、佛の十力、四無所智、十八不共法、六神通、不可思議深清淨の戒、禪定智慧を得べし。阿耨多羅三藐三菩提を得て諸法の中に於て無礙一切の知見を得、無上の法寶を以て、分布して一切即ち衆生に與ふ。是の如き等の諸の功德の利は我當に彼に従つて之を得べし」と。是時長者の女、是上妙なる佛法を聞いて、即ち大に歡喜し心驚いて毛豎ち、薩陀波崙菩薩に語つて言はく、「善男子、甚だ希有なり、汝説く所の者は、微妙にして値ひ難し、是一一の功德法の爲の故に、應に恆河沙等の如き身を捨つべし。何を以ての故に。汝が説く所の者は、甚だ微妙なるが故に。汝善男子、汝が今須むる所は盡く當に相與すべし。金、銀、眞珠、珊瑚、頗梨、琥珀、珊瑚等の諸の珍寶物、及び香華、瓔珞、塗香、燒香、幡蓋、衣服、伎樂等の供養の具もて、般若波羅蜜及び曇無竭菩薩を供養せよ。汝善男子、自ら其身を困苦する莫れ。我も亦曇無竭菩薩の所に往き、汝と共に諸の善根を植ゑて、是の如き微妙の法を

汝が説く所の如く得んと欲するが故に一と。爾時釋提桓因、即ち本身に復し、薩陀波崙  
 菩薩を讀じて言はく、「善哉、善哉、善男子、汝堅く是事をうけて其心を動ぜず、善男子の過  
 去の佛の菩薩道を行ずる時も、亦是の如く般若波羅蜜及び方便力を求め、阿耨多羅三藐三  
 菩提を得べし。善男子、我實には人の心、血、髓を用ひず、但來つて汝が願を相試むるの  
 み、何等をか我當に相與ふべき一と。薩陀波崙言はく、「我に阿耨多羅三藐三菩提を與へ  
 よ一釋提桓因の言はく、「此れ我力の所する所に非ず、是れ諸佛の境界なり、必ず相供  
 養せん。更に餘願を求めよ一薩陀波崙言はく、「汝若し此に於て力無く、汝必ず供養を  
 見んとせば、我是身をして、平復して故の如くならしめよ」と。是時に薩陀波崙、即ち平  
 復して病癒育ること無く、木の如くにして異ならず。釋提桓因、其願を與へ已つて忽然と  
 して現せず。爾時長者の女、薩陀波崙菩薩に請つて言はく、「善男子、我舍に來到し、須む  
 る所行らば、我父母に送つて之を索めよ、盡く當に相與ふべし。我も亦當に我父母を辭  
 し、爾の侍女と共に住いて、無男無女を供養すべし。法を求めんが爲の故に」と。即  
 時に薩陀波崙菩薩、長者の女と共に其舍に到り、門外に在つて住す。長者の女、入つて父  
 母に白さく、「我に衆くの財を乞ふべし、及び諸の璽路、塗香、輕絨、衣服、金、銀、珠玑、  
 寶鬘、眞珠、珊瑚、琥珀及び諸の伎術供養の具を與へよ。亦我身と、及び五百の侍女の  
 先に給仕する所ん言をして、薩陀波崙菩薩と共に、無男無女の所に到ることを望したま  
 へ。我若し財寶を供養せんが爲の故に。無男無女は當に我等が爲に法を説くべし、我當

に佛の如く行ずべし、當に諸佛の法を得べし」と。女の父母、女に語つて言はく、「薩陀波  
 崙菩薩とは是れ何等の人なる」と。女言はく、「是人今門外に在り、是善男子は深心を以て  
 阿耨多羅三藐三菩提を求め、一切衆生の無量の生死の苦を度せんと欲す。是善男子は、法の  
 爲の故に自ら其身を賣りて般若波羅蜜を供養す。般若波羅蜜を菩薩所學の道と名く。般若  
 波羅蜜を供養し、及び曇無竭菩薩を供養せんが爲の故に市肆の上に在つて高聲に唱へて、  
 誰か人を須むる、誰か人を須むる。誰か人を買はんと欲すると言ふも、身を賣るに告れず、  
 一面に在つて立つて憂愁啼哭す。是時に釋提桓因、化して婆羅門と作り、來つて之を試  
 んと欲して問うて言はく、善男子、何を以て憂愁啼哭して一面に立つと。答へて言はく、婆  
 羅門、我身を賣らんと欲するは、般若波羅蜜及び曇無竭菩薩摩訶薩を供養せんが爲の故な  
 り。爾も我薄福にして、身を賣るに告れずと。時に婆羅門は善男子に語つて言はく、我は  
 人を求めざるも、我天に祠せんと欲す、當に人の心、人の血、人の髓を用ふべし、汝能く  
 當る者やと。是時に是善男子、復憂愁せず、其心和悦して、是婆羅門に語つて言はく、  
 法が爲むる所は我盡く相與へんと。婆羅門言はく、汝何の價を求むると。答へて言はく、  
 汝が身に隨つて我に與へよと。即時に是善男子、右の手を以て利刀を執り左の臂を刺して血  
 を出し、右の臂肉を割いて復骨を破り髓を出さんと欲す。我闍上に在りて遙に是事を見、  
 手屈伸是念を爲す、是人は何が故に其身を困苦する、我當に往いて問ふべしと。我即ち闍  
 より下り往いて問ふ、善男子、汝何の因縁を以ての故に自ら其身を困苦すると。是善男子

我に答へて言はく、姉、我は是れ法の爲の故に般若波羅蜜及び曇無竭菩薩なる説法者を供養せんと欲するも、我貧窮にして所有無く、金、銀、瑠璃、車磔、馬礪、珊瑚、琥珀、虎珀、玻璃、眞珠、華香、伎樂無し。姉、我法を供養せんが爲の故に、自ら其身を賣るに、今買ふ者を得たるに人の心、人の血、人の髓を須む。我是價を用て、般若波羅蜜及び曇無竭菩薩なる説法者を供養せんと。我是善男子に問はく、汝今自ら身より心、血、髓を出して曇無竭菩薩を供養せんと欲するに何の功徳を得ると。是善男子言はく、曇無竭菩薩は當に我爲に般若波羅蜜及び方便力を説くべし。此は是れ菩薩の應に學ぶべき所、菩薩の應に作すべき所、菩薩の應に住すべき所、菩薩の應に行すべき道なり。我當に是道を學び、阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切衆生の依止と作るべし。我當に金色身、三十二相八十隨形好、大光、無量阿僧祇劫、大慈大悲、大喜大捨、四無所畏、四無礙智、佛の十力、十八不共法、六神通、不可思議清淨の戒、及び阿耨多羅三藐三菩提を得、阿耨多羅三藐三菩提を得べし。諸法の中に於て無量一切の知見を得、無上の法寶を以て分布して一切衆生に與ふ。是の如き等の微妙の大法を我當に彼に従つて得べしと。我是微妙不可思議の諸佛の功徳を聞き、其大願を聞いて我心歡喜して、是念を作す、是清淨微妙は甚大希有なること乃至是の如し、一の法の爲の故に恆河沙等の如き等の身命を捨つべしと。今善男子、法の爲に能く苦行難事を受けて、謂ゆる身命を惜まず。我に多の妙寶有り、云何が願を生じて是の如きの法を勤求し、般若波羅蜜及び曇無竭菩薩を供養せざらんやと。我是の如く思惟し已つて薩陀波菴菩薩

薩に語つて言はく、汝善男子、其身を困苦する莫れ、我當に我父母に白して多く汝に金、銀、琉璃、車磑、馬礪、珊瑚、琥珀、頗璃、眞珠、華香、瓔珞、塗香、末香、衣服、幡蓋及び諸の伎樂等を與ふべし、般若波羅蜜及び曇無竭菩薩なる說法者を供養せよ。我も亦父母に求めて、諸の侍女と共に汝と俱に去つて曇無竭菩薩なる說法者を供養し、汝と共に善根を植ゑ、是の如き等の微妙清淨の法を汝が所説の如く得ることを爲んと。父母、今我並に五百の侍女の先に給する所の者を聽したまへ。亦我に衆の妙なる華香、瓔珞、塗香、末香、衣服、幡蓋、伎樂、金銀、琉璃等の供養の具を持つことを聽したまへ。薩陀波闍菩薩と共に去つて、般若波羅蜜及び曇無竭菩薩なる說法者を供養せん、是の如き等の清淨微妙の諸の佛法を得んが爲の故に」と。爾時父母、女に報へて言はく、「汝の讀する所の者は希有にして説くことも及び難し。是善男子は法の爲に精進し大に法相を樂しむ。及び是諸の佛法は不可思議にして一切世間に於て最第一と爲し、一切衆生歡喜の因縁なり。是善男子は是法の爲の故に大に莊嚴す。我等、汝が往いて曇無竭菩薩に見えて、暫近し供養することを聽すべし。汝大心を發し、諸の佛法を得んが爲の故に是の如く精進す、我等云何が當に隨喜せざるべき」と。是女は曇無竭菩薩を供養せんが爲の故に、聽許を蒙むることを得て、父母に報へて言はく、「我等も亦是に隨つて心歡喜す、我終に人の善法の因縁を斷ぜざるべし」と。是時長者の女、七寶の車五百乘に、身及び侍女と共に種種の寶物供養の具を莊嚴し、種種の水陸の生華及び金銀の寶華、衆色の寶衣、



好香の檀香、澤香、瓔珞及び衆味の飲食を持し、薩陀波耨菩薩を五百の侍女と共に各一  
 車に載せ恭敬圍繞し、漸漸に東に去つて衆香城を見るに、七寶もて莊嚴し、七重に圍繞  
 し、七寶の塹、七寶の行樹皆亦七重なり、其城の縱廣は十二由旬、豐樂安靜にして甚だ喜  
 樂すべし。人民熾盛にして百千の市里街巷相當り、端嚴にして畫の如く、橋津は地の如く  
 にして寛博、清淨なり。遂に衆香城を見るに、既に城中に入り曇無竭菩薩の高臺法座の上  
 に坐するを見、無量百千萬億の衆恭敬圍繞して說法す。薩陀波耨菩薩、曇無竭菩薩を見る  
 時、心即ち歡喜す、譬は比丘の第三禪に入るや心を攝して安穩なるが如し。見已つて是  
 念を作す、「我等儂は、車に載つて曇無竭菩薩に趣くべからず」と、是念を作し已つて、車  
 より下り歩み進む。長者の女並に五百の侍女皆亦車より下る。薩陀波耨菩薩は、長者の  
 女及び五百の侍女と共に、衆寶を莊嚴し、圍繞恭敬して俱に曇無竭菩薩の所に到る。爾時  
 曇無竭菩薩摩訶薩、七寶の臺有つて赤牛頭の梅檀を以て莊嚴を爲し、眞珠の羅網を以て臺  
 上を覆ひ、四角には皆摩尼寶珠を懸けて以て燈明と爲し、及び四寶の香罇には常に四香を  
 燒いて般若波羅蜜を供養するが故に、其臺の中に七寶の大床有り。四寶の小床を重ねて其  
 上に敷き、黃金羅書の般若波羅蜜を以て小床の上に置き、種種の幡蓋を莊嚴して其上を垂  
 覆す。薩陀波耨菩薩及び諸の女人は、是妙臺の衆寶もて嚴飾せるを見、及び釋提桓因  
 の無量百千萬の請天と天の曼陀羅華、碎末の梅檀、兜葉の寶屑を以て臺上に散じ、天の妙  
 樂を鼓つて虚空の中に於て此臺に娛樂するを見る。爾時、薩陀波耨菩薩、釋提桓因に問

うて言はく、「橋戸迦、何の因縁の故に、無量百千萬の諸天と共に、天の曼陀羅華、碎末の  
 梅檀、麝香の寶屑を以て臺上に散じ、天の妓樂を鼓ち、虚空の中に於て此臺に娛樂する」と。  
 釋提桓因答へて言はく、「汝善男子、知らずや、此は是れ摩訶般若波羅蜜なり、是れ  
 諸の菩薩摩訶薩の母にして、能く諸佛を生じ菩薩を攝持す。菩薩是般若波羅蜜を以て、  
 一切の功德を成就して、諸佛の法一切種智を得」と。是時に薩陀波崙菩薩、即ち歡喜し悅  
 樂して釋提桓因に問はく、「橋戸迦、般若波羅蜜は、諸の菩薩摩訶薩の母にして、能く  
 諸佛を生じ菩薩を攝持す。菩薩是般若波羅蜜を學び、一切の功德を成就して、諸佛の法及  
 び一切種智を得と、今何の處に在る」と。釋提桓因言はく、「善男子、是臺の中に七寶の  
 大床有り、四方の小床を其上に重敷し、黃金牒書の般若波羅蜜を以て小床の上に置き、曇  
 無竭菩薩、七寶の印を以て之に印す。我等開き得て以て汝に示す能はず」と。是時に薩陀  
 波崙は長者の女及び五百の侍女と共に、供養の具なる華香、瓔珞、幡蓋を取つて分つて二  
 分と作し、一分を般若波羅蜜に供養し、一分を法座の上の曇無竭菩薩に供養す。爾時薩陀  
 波崙菩薩、五百の女人と共に華香、瓔珞、幡蓋、伎樂及び諸の珍寶を持して般若波羅蜜  
 を供養し已つて、然る後曇無竭菩薩の所に到り、到り已つて曇無竭菩薩を見るに、法座の  
 上に在つて座し、諸の華香、瓔珞、攝香、澤香、金銀、寶華、幡蓋、寶衣を以て、其曇  
 無竭菩薩の上に散じ、法の爲の故に供養す。是時に諸の華香寶衣は、曇無竭菩薩の上な  
 る虚空の中に於て、化して華臺と成り、碎末の梅檀、寶屑及び金銀の寶華は化して寶帳と

成り、寶帳の上に散ずる所の種種の寶衣は化して寶蓋と爲り、寶の四邊に諸の寶幡を垂る。薩陀波崙及び諸の女人は、曇無竭菩薩所作の變化を見て皆大に歡喜して是念を作さく、「是れ未だ曾て有らざるなり、曇無竭大師の神德乃ち爾なり。菩薩道を行ずる時の神通力すら尙能く是の如し、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提を得る時をや」と。是時、長者の女及び五百の女人、清淨に信心し、曇無竭菩薩を敬重して皆阿耨多羅三藐三菩提心を發し、足願を作して言はく、「曇無竭菩薩の如く菩薩の深法を得、曇無竭菩薩の如く般若波羅蜜を供養し、曇無竭菩薩の如く人衆の中に於て般若波羅蜜の義を演說し顯示、曇無竭菩薩の如く般若波羅蜜の方便力を得、神通を成就し、菩薩事の中に於て自在を得、我等も亦應に是の如くすべし」と。是時薩陀波崙菩薩及び五百の女人、華香寶物を以て般若波羅蜜及び曇無竭菩薩に供養し、已つて頭面に曇無竭菩薩を禮し、合掌恭敬して一面に立ち、一面に立ち已つて曇無竭菩薩に向して言さく、「我本般若波羅蜜を求むる時、空閑林の中に於て空中の聲を聞く、言はく、善男子、汝是より東に行け、當に般若波羅蜜を聞くを得べしと。我是語を受けて東に行き、東に行くこと久しからずして是念を作す、我何んが空中の聲に問はざる、我當に何の處に去る可き、是より去ること遠きや近きや、當に誰に従つて聞くべきと。我是時大に憂愁し啼哭し、是處に於て住し、七日七夜憂愁するが故に、乃至飲食を念はず、但念すらく、我何の時にか般若波羅蜜を聞くを得べきと。我是の如く憂愁し、一心に般若波羅蜜多を念じ、佛身を見るに虚空の中に在りて、我に語つて言

はく、善男子、汝大欲大精進の心をして放捨する莫れ。是を以て大欲大精進の心を以て、  
 是より東に行き、是を去ること五百由旬にして城あり、衆香と名け、是中に菩薩摩訶薩有  
 りて曇無竭と名く。是人の所に從つて、當に般若波羅蜜を聞くを得べし。是菩薩は、世世  
 に是れ汝が善知識なり、常に汝を守護せんと。我佛に從つて教誨を受け已つて、便ち東に  
 行きて更に餘念無し、但念すらく、我何の時にか當に曇無竭菩薩の我爲に般若波羅蜜を説  
 くを見るべきと。我爾時中道に住し、一切法の中に於て無礙の知見を得、諸の法相等の  
 諸の三昧を觀するを得、現在前には三昧に住し已つて、十方無量阿僧祇の諸佛の是般若  
 波羅蜜を説くを見る。諸佛我を讀じて言はく、善哉、善哉、善男子、我本般若波羅蜜を求  
 むる時、諸の三昧を得ること亦汝が今日の如しと。是諸の三昧を得已つて、遍く諸  
 の佛法を得るに、諸佛我爲に廣く法要を説き、我を安慰し已つて忽然として現ぜず。我三  
 昧より起つて是念を作す、諸佛は何の處より來り、去つて何の處に至ると。我諸佛を見ざ  
 るが故に大に憂愁し復是念を作す、曇無竭菩薩は先づ佛を供養し、衆の善根を植ゑ、久  
 く般若波羅蜜を行じ、善く方便力を知つて菩薩道の中に於て自在を得、是れ我善知識にし  
 て我を安護せんと。我當に曇無竭菩薩に是事を問ふべし、諸佛は何の所より來り、去つて  
 何の所に至ると。我今大師に問ふ、是諸の佛は何の所より來り、去つて何の處に至る、  
 大師、當に我爲に諸佛の所從の來所、至處を説いて、我をして知るを得しめ、知り已つて  
 亦當に諸佛を見ることを離れざらしめよ」と。

【一】前品に續いて常啼菩薩求法の因縁を明す中、諸佛の常啼を安慰して開法信受せしむるを釋す。

【二】次に常啼が法盛菩薩に往詣し以て求法するに就いて釋す。

釋して曰はく、「薩陀波崙は渴仰して、般若を聞かんと欲するが故に、十方諸佛の大衆の爲に法を説くを見て、其心歡喜し、其意滿つるを得たり。諸佛、其信力の堅固にして精進し、動じ難きを以ての故に、其心を安慰し讚じて言はく、「善哉、我本初めて菩薩道を修行して般若を求むる時も亦汝が今の如し。汝憂愁して自ら徳の薄きを謂ふ莫れ」と。爾時薩陀波崙、大に諸の三昧力を得て其心深く著す。是故に、諸佛爲に諸の三昧性を求めて實證を見ず、亦三昧に入り三昧を出づる者を見ずと説く。衆生は空にして法も亦空なるが故に、諸佛爲に、略して般若波羅蜜の相を説いて是法有るを念ぜず。謂ゆる、一切法は無相の故と念著すべからず、我等は無所念の法の中に住して、能く六波羅蜜を具足す。六波羅蜜を具足するが故に、佛の金色身を得ること、經の中に説くが如し。諸佛は教化し、利喜して其心を安慰す。」問うて曰はく、「上に化佛已に爲に、曇無竭は是れ汝が世世の善知識なりと説けり。今何を以てか、復何等は是れ我善知識なりやと問ふ。」答へて曰はく、「佛勅を以て善知識の中に於て倍恭敬愛念すべきが故に。又十方の佛の所に於て、曇無竭の功徳を聞かんと欲して、自ら信心堅固にして疑はざらしめんと欲するを以ての故に問ひ、十方の佛答へて「經の中に説くが如し」と説く。薩陀波崙は、是れ曇無竭の度する所の因縁の人なるが故に、諸佛佐助し示導す。或は諸の菩薩有つて、佛の度すべき所の者を佐助して佛の所に至らしむ。」

(二)と問うて曰はく、「上に虚空の聲を聞いて問はざるが故に七日啼哭す、今十方の佛を見ず、

何を以てか、大に憂愁して、更に佛を見ることを求めずして、但曇無竭の所に於て諸佛去來の事を問はんと欲する。』答へて曰はく、『薩陀波崙は先時に肉眼有り、未だ三昧を得ず、深心を以て信じ、善法に著するが故に大に啼哭す。今諸の三昧力を得て、又十方の佛を見、諸の煩惱微薄し、著心に離るるが故に、但一心に念ずらく、『我當に何の時に曇無竭を見るべき』と。』問うて曰はく、『若し薩陀波崙は此三昧力を得ば、何を以てか、還つて三昧に入らずして、十方の諸佛は何の所より來り、去つて何の所に至るかを問ひ、而も見んと欲することを曇無竭に問へる。』答へて曰はく、『十方の佛は上に種種の因縁を以て、曇無竭を讀ずらく、『世世に是れ汝が師なり』と。是故に問はんと欲するなり。是時に薩陀波崙、曇無竭菩薩を念ずらく、『是れ我先世の因縁なり、是故に恭敬尊重の心を生じ、大功徳有るを以ての故に尊重す、是れ先世の因縁の故に恭敬愛樂す』と。』問うて曰はく、『先には薩陀波崙大に世間の事に著せず、深く般若波羅蜜を愛するが故に慇懃啼哭すと説けり。今何を以てか自ら貧窮にして以て供養する無きを懼む。但好心を以て師の意に隨はば、則ち是れ法供養なり、華香を用て何か爲ん。』答へて曰はく、『法供養は上なりと雖も而も世間の業生の遠くより來つて法を求むるを見るに、空にして所有無ければ、則ち喜心を發さず、世法を以ての故に、供養の具を求むるなり。』復次に、五波羅蜜は般若波羅蜜の法を助と爲し、助法の中には、檀波羅蜜を首と爲す。薩陀波崙思惟すらく、『我福田を尊重することを得ば、曇無竭菩薩は當に助邊法の根本を以て供養すべく、亦爲に起つて衆人に

發さんと欲す」と。薩陀波崙は是れ智人なり、善人なり、貧窮にして而も能く供養す。何に況んや我等に於てをや。復次に、諸の善法を行する時、思惟する時、其味各異なり。薩陀波崙は布施味を行せんと欲す。是故に供養の具を求むるなり。問うて曰はく、「薩陀波崙は是れ大菩薩にして能く十方の佛を見、又諸の深三昧を得。何を以てか貧窮なる。」答へて曰はく、「有人言はく、「此人は家を捨てて佛道を求め、富家に生ずと雖も、道里懸遠にして一身獨去し、財物を齎さず」と。或人言はく、「是れ大人なりと雖も、宿世の小罪の因縁の故に貧窮の家に生ず」と。有が、「是れ小人なりと雖も、先世に少しく布施を行ぜし因縁の故に、大富家に生ず、蘇陀夷尼陀等の如し。是れ諸天の供養する所の人にして、而も小家に生ずるなり」と。貧に二種有り、一には財貧、二には功德法貧なり。功德法貧は、最も大に恥づべし。財貧は好人にも亦有り、法貧は好人には無き所なり。華香有る無しとは、上妙の寶華有る無きなり、又少きを以ての故に無しと言ふ。我若し空しく往かば、師我心を須めずと雖も大喜を得ず。是故に、身を賣らんと欲するなり。問うて曰はく、「若し身を賣りて他に與へば、誰か此物を買うて、往いて師を供養せん。」答へて曰はく、「捨身即ち是れ大供養なり、去住在る無し。有人言はく、「是人は身を賣り、財を取つて、人に因つて供養す。我は供養せんが爲の故に、身を賣つて奴と爲る」と。又人言はく、「爾時、世の好人皆法の如く自ら身を賣ると雖も、主は必ず能く之を聽し供養して而も還らん」と。復次に、是人深心を發し、檀波羅蜜を行せんと欲して、法及び法師を供養せん

と爲るも、而も外物無く唯己身のみ有り。是故に賣る、是れ内物なり、外内物の中に於て  
 は内施を重しと爲し、之を惜むこと深きが故に、是故に布施の願を破らざらんと欲するが  
 故に、身を賣りて供養す。此中に自ら不悔の因縁を説く。我世世に身を喪ふこと無數なり  
 とも、未だ曾て清淨法と爲さざるが故に、今說法者を供養せんが爲の故に、是身を喪ふ  
 も、而も大に法利を得るなり。薩陀波耆は心を定めて身意を貪惜することを斷ち、道中に  
 於て一大城に入り、賣買を得んと欲するに意の如くなるが故に、此大城に入りて、一心に  
 身を賣んと欲す。羞愧を除き、憍慢を破するが故に唱へて言はく、「誰か人を須む」と。  
 問うて曰はく、「魔は何を以て其意を破せんと欲する。」答へて曰はく、「魔は常に諸佛菩  
 薩の怨家と爲るが故に、來つて破せんと欲するなり。復次に、諸の小菩薩は未だ諸法實  
 相を得ざれば、魔及び惡人能く之を壞す。若し無生法忍を得ば、諸の菩薩神通力に住す  
 るも能く破する者無し。喻へば小樹を裁うれば小兒も能く破するも、大は之を破すべから  
 ざるが如し。復次に、此中に自ら魔の破する因縁を説く、謂ゆる、是薩陀波耆は法を愛す  
 るが故に、自ら身を賣つて般若波羅蜜、及び法盛菩薩を供養す。當に正く般若波羅蜜を聞  
 くを得べきこと、經の中に説く説くが如し。』問うて曰はく、「若し魔にして薩陀波耆を壞  
 せんと欲せば、先に來りて空中の聲を聞き、及び十方の佛を見る時、何を以てか壞せざらん。  
 又今方に諸の婆羅門居士を隱蔽して、其聲を聞かざらしむるや。」答へて曰はく、「薩陀  
 波耆は先に心未だ定まらずして身を惜み、未だ盡く十方の佛を見ず。已に諸の三昧を



【三】次に帝釋が常啼が心を試むると並に長者女が常啼に隨喜するの因縁を釋明す。

得て、其心乃ち定り、今定心の相現す、是故に魔驚く。若し菩薩の心未だ定らざれば、未だ能く魔を動かす能はず。若し大菩薩其心已に定まれば、魔亦來らず。薩陀波崙は今心を定めて魔の境界を出でんと欲す、是故に魔來る。響へば、負債人の未だ遠く去るを欲せざれば、債主之を遮らざるも、他界に出でんと欲すれば、則ち去るを遮らざるが如し。問うて曰はく、一魔は大力有り、何を以てか、此菩薩を殺さずして但破壞する。答へて曰はく、一魔は本より具壽命を歎まず、但其作佛心を懼む、是故に壞せんと欲するなり。又復諸の天神の法は、人に重罪無くんば妄に殺すを得ず、但壞亂し恐怖するを得るのみ。若し神に此法無くんば、則ち人にして活くる者無からん、是故に殺さず。婆羅門性の中に生じて戒を受くるが故に婆羅門と名く。此を除けば通じて居士と名く、眞に是れ居舎の主なり、四姓の中に居士に非ず、一の長者の女を除くとは、其は佛道の爲に、世世に功德を集むるを以ての故に、魔は能はざるなり。復有人言はく、「是薩陀波崙は死すべからざるが故に、一の女人をして聞かしむ」と。有人言はく、「是曇無竭菩薩の神通力の故に、長者の女をして聞くを得しむるなり」と。是の如く三び唱ふるに、人の買ふ者無し、便ち大に愁憂せり。問うて曰はく、「薩陀波崙は既に身を惜まず、人の買ふ無しと雖も、亦愁ふべからずや。」答へて曰はく、「既に大心を發すも、其願を滿ぜず、是故に、大に愁ふるなり。」釋提桓因是念を作さく、「薩陀波崙其身を賣らんと欲すれども、買ふ者有る無し」と。經の中に廣く説くが如し。問うて曰はく、「釋提桓因は報得の知他心を得、應に薩陀波

崙の心已に決定せしを知るべし、今何を以てか來つて試むる。』答へて曰はく、『諸天は但  
 世間の人心を知るのみ、作佛不作佛の心は其知る所に非ず、佛を除いては能く其佛道の爲  
 の故に、授記を與ふるを知ること有る無し。復次に、釋提桓因は、多く引導する所有る  
 を欲するが故に來つて之を試む。聞見する者をして皆發心し佛を求めしむ。又金銀等の諸  
 寶は、以て輕賤せざるが故に、燒鍛磨打するが如く、菩薩も亦是の如し。若し能く肉を割  
 いて血を出し、骨を破つて髓を出すに、其心動ぜざれば是れ正定の菩薩なり。是故に、  
 天帝來つて之を試むるなり。』問うて曰はく、『帝釋は是れ大天王なり、何を以てか妄語し  
 て是言を作す、我天を祠らんと欲して、人の心血髓を須む』と。』答へて曰はく、『若し慳  
 貪瞋恚の煩惱を以てすれば、自利を求めんと欲するが故に妄語す。是故に罪と爲す。帝釋  
 にして若し實身に實語を作さば、菩薩則ち信せず。是故に、其國法の如く、天祠の須むる  
 所は、其が爲に信受するが故に。是時に、薩陀波崙は、其語を信じ、大に歡喜すらく、『我  
 大利を得』と。大利とは、阿鞞跋致地なり、第一利とは、是れ佛道なり。大利とは、五波羅  
 蜜なり、第一利とは、般若波羅蜜なり。大利とは、般若波羅蜜なり、第一利とは、般若波羅蜜の  
 方便力なり。大利とは、菩薩の初地なり、第一利とは、十地なり。大利とは初地乃至十地なり、  
 第一利とは、第十地なり。大利とは、菩薩地なり、第一利とは佛地なり。是の如き等を分別し、  
 未だ具足せずと雖も、已に具足の因縁に住するが故に、便ち具足を爲すと云ふ。問うて曰  
 はく、『若し釋提桓因身を化して來らば、何を以てか、汝、何等の價をか須む』と云ふ。』

答へて曰はく、「其は曇無竭菩薩を供養して、其願を滿ぜんことを欲するを知るが故なり。  
 又復釋提桓因は、薩陀波崙を苦困するが故に、其索むる所の者大なるを畏る。是故に、  
 「何等の價をか須むる」と言ふ。「汝が意に隨つて我に與へよ」とは、汝に於て大に貪惜  
 せず、悔恨を致さざる者を以て我に與へよと言ふなり。薩陀波崙は力勢無く、悔陀羅を使  
 ふことを得る能はざるが故に自ら刀を提り、波羅門も亦罪を畏るるが故に破する能はず。  
 是を以て自ら刀を執つて身を破するなり。「問うて曰はく、「若し長者の女聲を聞かば、何  
 を以てか來つて問はざる。」汝何を以てか自ら身を賣る」と。答へて曰はく、「但空しく身  
 を賣る事は軽く、身を破つて心髓を出だす事は重きを言ふ。故に長者の女は發心せり。長  
 者の女は關上に住在して、是人の自ら割刺するを見て、是念を作さく、「一切衆生は皆樂を  
 求め苦を畏れて、其身を貪愛す、薩陀波崙は而も自ら割刺す、是れ希有なりと爲す」と。  
 又先世の福德因縁の牽く所を以ての故に、即ち其所に往到して問ふ。薩陀波崙は「曇無竭  
 菩薩に供養せんと欲す」と答ふ。「復問ふ、「何等の利を得るや。」答へて言はく、「般若波  
 羅蜜を菩薩の所學と名く。當に彼に從つて聞くべし、我是道を學んで、當に作佛を得、一  
 切衆生の與に依止と作るべし。譬へば、厚葉樹は蔭覆する所多きが如く、又熱き時に、曠  
 野の險道の清涼の大池の如し。佛は功德現るる事を説いて、以て發心すべき者の爲にす。  
 謂ゆる、金色身、三十二相大光、無量光大、光なり。閻浮提を惡世の衆生と爲す。諸佛の  
 眞實の光明に限量有る無し、大慈、乃至六神通の義は、先に説くが如し。不可思議清淨

の戒、禪定、智慧は、佛戒等の五衆の中に説くが如し。「諸法の中に於て、一切無礙の知見を得」とは、諸佛は無礙の解脫有り、是れ解脫相應の知見なり。一切法の中に礙ふる所無き知見の分別は先に説くが如し。薩陀波闍言はく、「我是の如く無量の佛の功徳を得、無上の法寶を以て分佈して一切衆生に與ふ」と。無上の寶とは、有人言はく、「三寶の中の法寶なり」と。有人言はく、「一切八萬四千の法衆、是を法寶と爲し、是を得るが故に、諸の煩惱を除き、諸の戲論を滅して、一切の苦を脱するを得」と。有人言はく、「無上の法寶は、即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なり、更に過上の者無きが故に」と。有人言はく、「涅槃は是れ無上の法寶なり、何を以ての故に。一切有爲法には皆上有り、阿毘曇に言ふが如く、一切有爲法及び虚空の非數縁の盡るを名けて有上の法と爲し、數縁盡くる、是を無上の法なり、數縁盡るは即ち是れ涅槃の別名なるが故に」と。有人言はく、「涅槃の道は是れ有爲なりと雖も、其を以て涅槃と爲すが故に、有爲法の中に於ては無上なりと爲す」と。是の如き等の法寶を分佈して、三衆と爲し衆生に與ふ。是の如き等の無量の佛法は、當に師に従つて之を得べし。是故に、我は是老病、生死所住の處なる不淨臭穢の身を捨つるなり。般若波羅蜜を供養せんが爲の故に、佛身金色等を得べきことは、先に説くが如し。長者の女は、世世に諸佛を供養し、善根を種て智慧、明利なり。是法を聞くや、其心深く入り、大に法喜を得、乃至心驚き毛豎ち、薩陀波闍に語つて言はく、「甚だ希有なりと爲す、汝の讚する所の法は大に微妙なり、是一一の法の爲の故に、恆河沙等の如き身を捨つべし。何

に況や一身をや」と。長者の女は、何の因縁の故に其身を困苦するやを知らざるも、而も之を怜愍し心に不可なりと請ふ。今は無量無邊無比清淨の佛法を聞き、是因縁を以て得べきが故に大に歡喜す。是故に是法の爲の故に、恆河沙の如き身を捨つべしと説く。女言はく、「汝は貧なるを以ての故に、自ら其身を苦悶す、今に於て止むべし、汝が須むる所を悉にせよ、當に以て相與ふべし、我も又汝に隨つて而も此道を求めん」と。問うて曰はく、「是菩薩は既に自ら身體を割截す。云何が能く長者の女の與に多く佛法を説く。」答へて曰はく、「是菩薩は、心力大にして、身に苦有り」と雖も、心を覆ふ能はず。是菩薩は始に刀を以て肉を割き血を流し、方に骨を破り髓を出さんと欲するも、而も長者の女來つて、未だ女に聞えざるが故に、能く法を説くことを得。釋提桓因は其心の定まるを知つて、而も之を試むるのみ。故に言ふ所無く、即ち本身に復つて善哉と言ふ。汝が心堅く是事を受くとは、希釋意へらく、「如し汝今の生死の肉身は、未だ佛道を得ざるも、能く是の如く身を惜まざれば、汝は久しからずして當に一切法の中に於て、所著無きを得べく、無生法忍の中に住して、當に阿耨多羅三藐三菩提を得ること、過去の佛を以て證と爲さん」と。是の如き等の種種の因縁もて其心を安慰す。我は是れ天王なり、佛道を愛樂するが故に來つて相試み、汝が心の堅軟云何を知らんと欲し、汝をして信せしめんと欲するが故に、人の心髓を刺めて天を刺らんと言ふも、實には須めざるなり。何等か汝の願なる、當に以て相與ふべしとは、汝は是れ好人、是佛種の爲に、當に相擁護すべしとなり。薩陀

波崙は心直信善軟にして、深く佛道に著するが故に衆生を分別せず、帝釋の語を聞いて便ち言はく、「我に阿耨多羅三藐三菩提を與へよ」と。帝釋言はく、「此れ我力の能く辦する所に非ず、是れ佛の境界なり」と。復次に、有人言はく、「帝釋は大に薩陀波崙を苦困す、今此語を以て之を謝するなり」と。帝釋意へらく、「金銀寶物を求むと謂うて、乃ち阿耨多羅三藐三菩提を索むることを知らず、既に與ふること能はずと愧負するのみ」と。復更に語つて言はく、「更に餘願を索めよ、必ず相供養せん」と。帝釋の語る意は、「我既に大に相苦困するが故に、直に爾るを得ず、而も去つて相供養することを要す」と。薩陀波崙は身を惜むに非ずと雖も、此身を以て曇無竭菩薩を供養し、般若波羅蜜を聞かんと欲するを以て、是故に語つて言はく、「若し汝に此力無くんば、我身體をして平復なること故の如くせしめよ」と。帝釋言はく、「汝の言ふ所の如く、瘡は即ち平満して、本と異なる無し」と。問うて曰はく、「先に已に肉を割く、云何が平満なるを得しむる。」答へて曰はく、「佛説に五の不可思議有り。龍事の所作すら尙不可思議なり、何に況んや天をや。又虚空の中には微塵亦満し、帝釋の福德より生ずる心は便ち能く和合平満す。諸天及び地獄の身の如きは是れ三生の身に非ず、罪福因縁の故に和合して便ち有るなり。是時に帝釋は其心の堅きを知り、願を與へ已つて即時に滅し去る。爾時、薩陀波崙は宿世の微罪已に畢つて福德明に盛なり、是故に長者の女は將に歸らんとし、「須むる所の者有らば、我父母に従つて是を索めよ」といふ。經の中に廣く説くが如し。」問うて曰はく、「是女は先に、汝が須むる所の

者は盡く我に従つて之を索めよ」と言ひ、今何を以てか「我父母に従つて索めよ」と言ふ。」答へて曰はく、「今既に將に歸りて舍に到らんとす、薩陀波崙に目り見えて舍に入り、父母に従つて之を得るを以て、愧ぢて前の言を稱へず。是故に先づ自ら父母に従つて之を索めよと説くなり。又女の力は能く寶を得と雖も、子女の法なるを以ての故に、父母に従つて之を索め、女既に舍に入るや、先に許す所の如く、父母に従つて索め與ふ。其國に佛法有る無し。是故に女に問ふ、「阿誰か是れ薩陀波崙菩薩なる」と。女は見し所の如く、已に聞きし所の如く、盡く父母に向つて薩陀波崙の事を説き、今父母は當に我と薩陀波崙菩薩と俱に、五百の侍女、併に供養の具を以て、曇無竭菩薩を供養するを聽すべし。父母其言を聞いて、即ち聽して女の意の如くせり。」問うて曰はく、「長者は貴くして而も力有り、云何が先に薩陀波崙を識らず、其功德を聞くが故に、便ち能く女及び其眷屬寶物を之に與へて俱に去らしむる。」答へて曰はく、「長者亦徳本を植うるも、少因縁を以ての故に無佛國に生じ、暫らく佛徳を聞くや其宿識を發して、心即ち聞悟するが故に能く發遣す。譬へば、蓮華の生長し具足するや、日を見て開敷するが如し。父母は女の心の淳熟して不淨の行無く、操を持して妄ならず、世の樂を樂しますずして、但法利を求むるを知り、其心至つて制止すべからざるを知る。若し其意に違はば、恐らくは其れ自害せんとし惟し籌量し已つて、既に其意を全うし、自ら功德を得、歡喜して去らしむ。世間の因縁は深く著して解き難きも、愛の至るが故に尙違ふ能はず、何に況んや佛道の爲の故に、其心

【四】次に常啼長者の女と共に法盛菩薩並に般若を供養するの義を釋す

清淨にして染著する所無くして、而も之を聽さざらんや。女は父母より、法の爲にするを聽さるるを以て、寶物を惜まず、亦隨喜の心を以て、之が爲に歡喜す。

爾時、衆の心既に定まり、七寶の車を莊嚴し、大衆と共に圍遶して稍東に行く。是時、五百の女の親屬及び城中の衆人、其希有にして及び難きの事を見て、皆亦隨ひ去る。人衆既に集り、歡悅して共に行き、衆香城を渴仰すること、渴する者の飲を思ふが如し。漸漸に路を進み、遂に衆香城を見るや、乃至長者の女及び五百人と共に、恭敬圍遶して、曇無竭の所に往かんと欲す。』問うて曰はく、『曇無竭は是れ大菩薩にして、聞持等の諸の陀羅尼を得、般若波羅蜜の義は、已に自ら通利し憶持す、何んが七寶の臺に書する般若の經卷を用て中に著いて供養する。』答へて曰はく、『種種の因緣有りと雖も、略して説くに二義有り。一には衆生の心行不同なり、或は經卷を見んと樂ひ、或は演説を聞かんと樂ふ。二には曇無竭の身、白衣と爲つて現れて家屬に有り、鈍根の衆生は或は是念を作す、此れ居家に有れば必ず染著有り。何んが能く畢竟清淨無著の般若波羅蜜を以て、衆生を利益せん。自ら未だ無著ならず、何んが能く無著の法を以て教化せん』と。是故に、其經文を書して七寶の臺上に著け、衆寶を供養するに、諸の天龍鬼神も皆亦共に來つて恭敬し、華香幡蓋を供養し、七寶を雨らし、衆生の見る者は信根を増益す。則ち此法を以て佛語を示傳し、文を案じ教を演じて、一切寶臺莊嚴の具、及び薩陀波崙を勸發す。問ふ、釋提桓因は經の中に七寶の印を説くが如し、印とは是れ曇無竭眞實の印なり。常に自ら



手に執つて以て經を印す。有人言はく、「七寶の印とは、佛道を求むるに七大神有り、是れ執金剛の杵にして、常に曇無竭菩薩に給して、經文を守護せしめ、魔及び魔民をして、改めて更に錯亂せしめず。般若を貴敬するが爲の故に、人但演説を聞いて發心する所の者有り、人其莊嚴の文字を見て歡喜發心する者有り。是故に、寶臺を莊嚴し、金牒書七寶印を用て印す」と。問うて曰はく、「臺上に書寫する所の般若と、曇無竭菩薩の口に演説する所の般若と二處俱に有り」と雖も、而も書寫する處のものは、人を益する能はず、何を以て先づ臺の所に至る。一答へて曰はく、「書する所の般若は法寶の中に入る。佛寶の次第は法寶に有るが故に、一人應に先づ供養すべし。曇無竭は一人なるが故に、僧寶には攝せざる所なり。是故に、先づ法寶を供養す。又曇無竭菩薩の所説は是れ法なりと雖も、而も衆生は人相を取るが故に多く著心を生ず。若し書する所の般若を見て人相を生ぜざれば、餘相を取つて著心を生ずと雖も、人に著して患を生ずること少し。是故に先づ經を供養す。經法は諸佛すら尚供養す。何に況んや曇無竭及び薩陀波崙をや、曇無竭は、般若波羅室に因るが故に、所因の本を供養することを得。何んが先づ供養せざるを得ん。是故に供養する所を分つて、具に二分と爲すなり。問うて曰はく、「曇無竭には六萬の婦女と五欲の宮殿と有り、云何が能く散ずる所の花物を以て、化して梵臺と爲す。一答へて曰はく、「有人言はく、「諸佛の神力は、薩陀波崙の供養する所の者に因つて此變化を爲す」と。有人言はく、「曇無竭は是れ大菩薩にして法性生身なり、衆生を度せんが爲の故に五欲を受く」と。

曇無竭菩薩の名字義の中に説くが如し。』問うて曰はく、『菩薩の法は先づ衆生の中に於て悲心を起し、衆生の苦を度せんと欲するが故に、阿耨多羅三藐三菩提を求む、今は但曇無竭の神力威徳を見て云何が發心する。』答へて曰はく、『發心に種種有り、説法を聞いて而も發心する者有り、衆生に於て慈悲を起して而も發心する者有り、神通力大威徳を見て而も發心する者無し。然る後漸漸に而も悲心を生ず、智印經の中に説くが如し。愛に依つて而も愛を斷じ、慢に依つて而も慢を斷ずること、人の道法を聞いて足法に愛著するが如し、故に五欲を捨てて出家す。又某甲の阿羅漢道を得と聞いて、高心を生ずるや、此人は我事に勝ること無し。彼すら尚能く爾なり。我にして何んが能はざらん』と。而も大轉進を生じて阿羅漢道を得。佛道の中も亦是の如し。長者の女等及び五百の女人は、常に深く貪り、勢力自在に樂しむ。聞くならく、「往昔に人有り、神力變化して寶物具足し、人中に天の樂を受け、後に曇無竭の臺觀宮殿を見、大法座の上に在つて、坐して天人を供養す。又供養する所の物を見て、虚空の中に於て化して大臺を成じ、心即ち人に喜んで遭ひ難きの想を發す」と。皆福徳の因縁より、是事を辨すべきを知る。是故に皆佛心を發作し、聞いて發心する所の者皆次第行を行す。毘摩羅結經の中に説くが如し。愛慢等の諸の煩惱は皆是れ佛道の根本なり。是故に女人の是事を見るや、「已に愛樂の心を生じ、福徳の因縁を以て、是事を得べきを知るが故に皆發心す。是愛慢に因つて、後に清淨の好心を得るが故に、佛道の根本なり」と言ふ。譬へば蓮華の汗泥より生ずるが如し。發心して已に願を作

大智度論卷第九十八

すること曇無竭の爲す所の如く、我等も亦當に是を得べし。時に、薩陀波闍等、頭面に曇無  
 竭菩薩を禮す。華香等の供養は貴からざるが故に先にし、身を供養するは貴重なるが故に  
 後に禮拜す。禮拜し已つて、本般若を求むる因縁を説く。經の中に説くが如し、「我本般若  
 を求むる時、空中の聲を聞く、乃至我今大師に問ふ、諸佛は何の所より來り、去つて何の  
 處に至る」と。問うて曰はく、「薩陀波闍は諸の大三昧を得て、謂ゆる、破無明、觀諸  
 法性等なり、云何が空を知らず、而も佛相を取つて深く愛著を生ずる。」答へて曰はく、  
 『若し新發意の菩薩は、能く總相、諸法の空無相を知ると雖も、諸佛の所に於て深く愛著  
 するが故に、佛相の畢竟空なることを解する能はず。空を知ると雖も、而も空と合する能  
 はず。何を以ての故に。諸佛には無量無邊の實功德有ればなり。是菩薩は利根なるが故に  
 深く入り深く著す。若し佛是菩薩の爲に空を説かざれば、是菩薩は佛を愛するが爲の故に  
 能く自ら親族を滅す。何に況んや餘人をや。但空を解するを以ての故に是事無し。薩陀波  
 闍は深く諸佛に著するが故に、知る能はずして、而も今大師に問ふ、「今我爲に諸佛來去の  
 相を説きたまへ、我佛身を見て厭足無きが故に、常に諸佛を見ることを離れず」と。

大智度論釋曇無竭品第八十九 卷第九十九

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

爾時、曇無竭菩薩摩訶薩、薩陀波闍菩薩に語つて言はく、「善男子、諸佛は從つて來る所無く去つて亦至る所無し。何を以ての故に。諸法如は不動相にして、且つ諸法如は即ち是れ佛なればなり。善男子、無生の法は無來無去なり、無生の法は即ち是れ佛なり。無滅の法は無來無去なり、無滅の法は即ち是れ佛なり。實際法は無來無去なり、實際法は即ち是れ佛なり。空は無來無去なり、空は即ち是れ佛なり。善男子、無染は無來無去なり、無染は即ち是れ佛なり。寂滅は無來無去なり、寂滅は即ち是れ佛なり。虛空は無來無去なり、虛空は即ち是れ佛なり。善男子、是れ諸の法を離れて更に佛なく、諸佛如と諸法如は一如にして分別無し。善男子、是の如く常一にして二なく三無し。諸の數法を出すに所有無きが故に。譬は春の末月の日中熱する時、人育つて輪動を見て之を逐ふに、水を求め得ん」と望むが如し。汝が意に於ては云何、是水は何の池、何の山、何の泉より來つて、今何の處に去る。若は東海、若は西海、若は南海、若は北海に入るや」と。薩陀波闍言はく、「大師、船の中にすら尙水無し、云何が、當に來處、去處の有るべき」と。曇無竭菩薩、薩陀

波瀾に語つて言はく、「善男子、愚夫は無智なるを以て、熱湯の爲に迫られて燒傷を見て、水無きに水の想を生ずるや。善男子、若し人有つて諸佛を以て來有り、去有りと分別せば、當に知るべし。是人は皆是れ愚夫なりと。何を以ての故に。善男子、諸佛は色身を以ては見るべからず、諸佛の法身は無來無去なり、諸佛の來處去處も亦是の如くなるが故に。善男子、譬へば幻師の種種の若は象、若は馬、若は牛、若は羊、若は男、若は女等を幻作するが如し、是の如き等の種種の諸物、汝が意に於て云何。是幻事は何の處より來り、去つて何の處に至る」と。薩陀波闍言はく、「大師、幻事は實無し、云何が當に來去の處有るべき」と。善男子、是人の佛に來有り、去有りと分別するも亦是の如し。善男子、譬へば夢中に若は象、若は馬、若は牛、若は羊、若は男、若は女等を見るが如きは、汝が意に於て云何。夢中の見る所は來處有り、去處有りや不や」と。薩陀波闍言はく、「大師、是夢中の見る所は虛妄有り、云何が當に來去有るべき。善男子、是人の佛に來有り、去有りと分別するも亦是の如し。善男子、佛の護きたまはく、「諸法は夢の如くにして、若し衆生有つて是諸法の義を知らざれば、名字色身を以て佛に著し、是人は諸佛に來有り、去有りと分別す。諸法實際の相を知らざるが故に。皆是れ愚夫無智の數なり。是人は數數五道を往來し、般若波羅蜜を遠離し、諸の佛法を遠離す。善男子、佛説きたまはく、諸法は幻の如く夢の如し。若し衆生有つて實の如く知らば、是人は、諸法は若は來り、若は去り、若は生じ、若は滅すと分別せず。若し諸法を若は來り、若は去り、若は生じ、若は滅すと分別せずん

ば、即ち能く佛の説く所の諸法實相を知るなり。是人の般若波羅蜜を行じ、阿耨多羅三藐三菩提に近くを名けて眞の佛弟子と爲す。虚妄にして人の信施を食せず。是人は應に供養を受けて、世間の福田と爲るべし。善男子、譬へば大海の水の中の諸寶は、東方より來らず、南方西方北方四維上下より來らざるが如し。衆生の善根の因縁の故に海より此寶を生ずるも、此寶は亦因縁無くしては生ぜず。是寶は皆是れ因縁和合より生ず。是寶は若し滅するとも、亦至つて十方に去らず。諸縁合するが故に有り、諸縁離るるが故に滅す。善男子、諸佛の身も亦是の如く、本より業因縁の果報より生じ、生ずるに十方より來らず、滅する時も亦去つて十方に至らず。但諸の縁合するが故に有り、諸の縁離るるが故に滅す。善男子、譬へば篋篋の聲の出づる時來る處無く、滅する時去る處無く、衆縁和合するが故に生ずるが如し。槽有り、頭有り、皮有り、絃有り、柱有り、棍有り。人有つて手を以て之を鼓つに、衆縁和合して聲有り。是聲は亦槽より出づるに非ず、頭より出づるに非ず、皮より出づるに非ず、絃より出づるに非ず、柱より出づるに非ず、棍より出づるに非ず、亦人の手より出づるにも非ず、衆縁和合して爾も乃ち聲有り。是因縁離るる時は亦去る處無し。善男子、諸佛の身も亦是の如く、無量の功德の因縁より生ず、一因一縁一功德より生ずるに非ず、亦因縁無きにも非ず、衆縁の和合有るが故に有り。諸佛の身は獨り一事より成るに非ず、來るに所從無く、去るに所至無し。善男子、當に是の如く諸佛の來去相を知るべし。善男子、亦當に一切法に來去の相無きを知るべし。汝若し諸佛、及び諸法の無

來、無去、無生、無滅の相を知らば、必ず阿耨多羅三藐三菩提を得、亦能く般若波羅蜜及び方便力を行ぜん」と。爾時、釋提桓因、天の曼陀羅華を以て、薩陀波崙菩薩摩訶薩の與に是言を作す、「善男子、是華を以て曼無竭菩薩摩訶薩に供養せよ、我當に守護して汝に供養すべし。所以は何ん。汝は因縁力の故に、今日百千萬億の衆生を饒益して、阿耨多羅三藐三菩提を得しむればなり。善男子、是の如き善人には甚た遇ひ難しと爲し、一切衆生を饒益せんが爲の故に、曼無竭菩薩の上に散じて白して言さく、「大師、我今日より身を以て師に屬して供給し供養せん」と。是の如く三び白し已つて、手を合せて師の前に立つ。是時長者の女、及び五百の侍女、薩陀波崙菩薩に白して言さく、「我等今日より身を以て師に屬せん、我等是善根の因縁を以ての故に、當に是の如きの法を得べし。亦師の得る所の如く、師と共に世世に諸佛を供養し、世世に常に師を供養せん」と。是時薩陀波崙菩薩、長者の女及び五百の女人に語つて言はく、「若し汝等至誠心を以て我に屬せば、我當に汝を受くべし」と。諸の女言はく、「我等は誠心を以て師に屬し、當に師の教に聽ふべし」と。是時に薩陀波崙菩薩、五百の女人並に諸の莊嚴の寶物、上妙の供具及び五百乘の七寶の車を曼無竭菩薩に奉上して白して言さく、「大師、我是五百の女人を持して大師に奉給し、是五百乘の車を以て師の所用に隨はしめん」と。爾時釋提桓因、薩陀波崙菩薩を讚じて言はく、「善哉善哉、善男子、菩薩摩訶薩は一切の所有を捨つること應に是の如くなるべし。

是の如きの布施は、疾に阿耨多羅三藐三菩提を得ん。是の如く法を説く人を供養せば、必ず般若波羅蜜及び方便力を聞くを得ん、過去の諸佛、本菩薩道を行する時も亦是の如く、布施の中に住して般若波羅蜜及び方便力を聞くを得て、阿耨多羅三藐三菩提を得たまへりと。爾時、曇無竭菩薩、薩陀波崙菩薩をして善根を具足せしめんと欲するが故に、五百乗の車と、長者の女及び五百の侍女とを受け、受け已つて、薩陀波崙菩薩に與ふ。是時曇無竭菩薩法を説き、日没に至つて起つて宮中に入る、薩陀波崙菩薩摩訶薩はの念を作さく、「我法の爲の故に来る、應に坐臥すべからず。當に二事を以てすべし、若は行じ、若は立つて、以て法師の宮中より出でて法を説くを待たん」と。爾時曇無竭菩薩、七歳一心に無量阿僧祇の菩薩三昧に入り、及び般若波羅蜜方便力を行するや、薩陀波崙菩薩も亦七歳、經行し住立して、坐せず臥せず、睡眠有る無し。欲悲慟無く心味に著せずして、但曇無竭菩薩摩訶薩を念じて、何の時にか三昧より起ち、出でて法を説くべきやと。薩陀波崙菩薩、七歳を過ぎ已つて是念を作す、我當に曇無竭菩薩摩訶薩の爲に、説法の座を敷くべし、曇無竭菩薩摩訶薩は當に上に坐して法を説くべし。我當に地に灑いで清淨にし、種種の華を敷いて、是座を莊嚴すべし。曇無竭菩薩摩訶薩の當に般若波羅蜜及び、方便力を説くべき爲の故に」と。是時薩陀波崙菩薩と、長者の女、及び五百の侍女とは、曇無竭菩薩摩訶薩の爲に七寶の床を敷き、五百の女人は、各上衣を脱して以て座上に敷いて是念を作さく、「曇無竭菩薩摩訶薩、當に此座の上に坐して、般若波羅蜜及び方便力を説くべし」と。薩陀



波密菩薩、座を敷き已つて、水を求めて地に灑がんとするも而も得る能はず。所以は何ん。惡魔の隱蔽して水を現さざらしむるが故に。魔是念を作す、薩陀波密菩薩は水を求むるに得ず、阿耨多羅三藐三菩提を行ずるに、乃至一念の劣心異心を生ずれば、則ち善根も増さず智慧も照さず、一切智に於て而も稽留有り」と。爾時薩陀波密菩薩、是念を作さく、「我當に自ら其身を刺し、血を以て地に灑ぎ、塵土の束つて大師を汚す無からしむべし。我何んが此身を用ひん、此身は必ず當に破壊すべし、我無始の生死より已來數身を毀ふも、未だ曾て法の爲にせず」と。即ち利刀を以て自ら刺して血を出して地に灑ぐに、薩陀波密菩薩、及び長者の女並に五百の侍女も皆異心無ければ、惡魔亦便を得る能はず。是時に釋提桓因是念を作す、「未だ曾て有らざるところなり、薩陀波密菩薩の法を愛すること乃ち剛なり。刀を以て自ら刺し、血を出して地に灑ぐに、薩陀波密及び衆の女人の心動轉せざれば、惡魔波旬も其身體を壞する能はず、其心堅固にして大菩薩を發し、身命を惜まず、深心を以て阿耨多羅三藐三菩提を求め、一切衆生の無量生死の苦を度せんと思す」と。釋提桓因、薩陀波密菩薩を讚じて言はく、「善哉善哉、善男子、汝の精進力大に堅固にして、動じざること不可思議なり。汝は法を愛し、法を求むるを以て最も無上なりと稱す。善男子、過去の諸佛も亦其の如く、深心を以て法を愛し法を惜み法を重じ、諸の功徳を集めて阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり」と。薩陀波密菩薩是念を作さく、「我無量阿僧祇劫阿耨多羅三藐三菩提を求むるに、當に何の處に於てか、好名の華を

【一】本品は前品に續いて曇無竭菩薩が常啼に種種説法をなせるを明す、今之を釋するに、先づ常啼は諸法の空にして來去なき相を知るも佛身の尊重の爲の故に諸法一如即佛なるの義を聽くを明す。

得て此地を莊嚴すべき。若し曇無竭菩薩摩訶薩、法座の上に座して法を説く時は、亦當に華を散じて供養すべし」と。釋提桓因、薩陀波闍菩薩の心に念ふ所を知り、即ち三千石の天の曼陀羅華を以て薩陀波闍菩薩に與ふ。薩陀波闍菩薩、華を受け已つて半を以て地に散じ、半を留めて、曇無竭菩薩摩訶薩法座の上に坐して、法を説く時を待つて當に供養すべし。爾時、曇無竭菩薩摩訶薩七歳を過ぎ已つて、諸の三昧より起つて、般若波羅蜜を説かんと爲の故に、無量百千萬の衆に恭敬圍遶せられ、法座の上に往いて坐す。薩陀波闍菩薩、曇無竭菩薩を見る時、心淨く悅樂なること譬へば比丘の第三禪に入るが如し。

釋して曰はく、「薩陀波闍菩薩は、諸法の空にして來去無きの相を知ると雖も、未だ能く深く入る能はず、亦種種の法門を解する能はず、諸佛の身に於ては恭敬深重なるが故に、空を觀する能はざること、大海の水波は其力大なりと雖も、須彌山の邊に到れば、則ち退いて用無きが如し。薩陀波闍も亦是の如く、大空の智力有りと雖も、佛の所に到れば、則ち亦用ふることを無し。是故に曇無竭菩薩、今爲に説いて、「諸佛に從來する所無く、去るに亦所至無し」と。此中に、曇無竭は自ら因縁を説く、謂ゆる、諸法は如にして不動の相なり、諸法は即ち是れ佛なり」と。問うて曰はく、「何等か是れ諸法如なる。」答へて曰はく、「諸法實相、譯して佛空、無所得空等の諸の法門なり。」問うて曰はく、「摩訶般若波羅蜜は佛法、大乘、六波羅蜜の中に於て第一の法なり。若し佛無くんば、則ち般若を説く者無けん。三十二相、八十隨形好、十力、四無所畏等、色無色等の淨妙の五衆和合す、是

故に名けて佛と爲す。五指の和合するを名けて拳と爲し、無拳と言ふを得ざるが如し。名字既に異にして形亦異り、力用も亦異れども、無拳と言ふを得ず。是故に佛有るを知るや。」答へて曰はく、「然らず。佛法の中には二諦有り、一には世諦、二には第一義諦なり。世諦の故に、佛は般若波羅蜜を説くと言ひ、第一義諦の故に諸佛は空、無來、無去と説く。汝が説く所の如きは、清淨の五衆和合するが故に名けて佛と爲す。若し和合するが故に有なれば是れ即ち無と爲す。經の中に佛自ら因縁を説くが如し。五衆は佛に非ず、五衆を離るるも亦佛無し、五衆は佛の中に在るに非ず、佛は五衆の中に在るに非ず。佛は五衆の有に非ず。何を以ての故に。五衆は是れ五にして、佛は是れ一なり。一は五を作さず、五は一を作さざるが故に。又五衆には自性無きが故に虚誑不實なり。佛自ら説きたまはく、「一切の無誑法の中にて我は最も第一なり、是故に五衆は即ち是れ佛に非ず」と。復次に、若し五衆即ち是れ佛ならば、諸有の五衆は、皆應に是れ佛なるべし。」問うて曰はく、「是難を以ての故に我先に説けり、「第一清淨の五衆三十二相等を名けて佛と爲すや」と。」答へて曰はく、「三十二相等は菩薩の時も亦有り、何を以てか名けて佛と爲さざらん。」問うて曰はく、「爾時、相好有つて身を莊嚴すと雖も、而も一切種智無し。若し一切種智にして第一妙色身の中に在れば、即ち是を名けて佛と爲すや。」答へて曰はく、「一切種智は、般若の中に是れ寂滅の相にして無戲論なりと説く。若し是法を得ば則ち無所得と名け、無所得の故に名けて佛と爲す。佛は即ち是れ空なり。是の如き等の因縁の故に、五衆は即ち

是具佛なることを得ず、是五衆を離るるも亦佛無し。所以は何ん。是五衆を離れて更に餘法の多くべき無ければなり。五指を離れて更に拳法として説くべき無きが如し。問うて曰はく、何を以ての故に拳法無き。形亦異り、力用も亦異なるも、若し但是れ指は異なるべからず。五指合するに因るが故に拳法生じ、且拳法は無常生滅すと雖も、無と言ふを得ず。答へて曰はく、是拳法若し定んで有らば、五指を除いて應に更に拳として見るべきもの有つて、亦五指に因るを須ひざるべし。是の如き等の因縁もて五指を離れて更に拳有ること無し。佛も亦是の如く、五衆を離れば則ち佛有る無し。佛は五衆の中に在るに非ず、五衆は佛の中に在るに非ず。何を以ての故に。異得べからざるが故に。若し五衆、佛に異らば、佛は五衆の中に在るべし、但是事然らず、佛も亦五衆の中に在るに在らず。所以は何ん。五衆を離れて佛無く、佛を離れて亦五衆無ければなり。譬へば、比丘に三次鉢有るが故に、有と言ふを得べきが如く、但佛と五衆と相異なりとするを得ず。是故に佛に五衆有りと云ふを覺ざるなり。是の如く、五衆に佛を求むるに不可得なるが故に、當に知るべし佛無し。佛無きが故に無常無去なり。問うて曰はく、「若し佛無くんば即ち是れ邪見なり、云何が菩薩を發心して作佛を求むる。」答へて曰はく、「此中に佛無しと言ふは、佛の慧に著することを取するのみにして、無佛の慧を取るとは言はざるなり。若し有佛すら尙取らしめず、何に況んや無佛の慧見を取らんや。又佛は常に寂滅にして無戲論の相なり。若し人常に寂滅、佛を分別、戲論せば、是人も亦邪見に墮せん。是有無の二邊を離れて、中道に處する、

即ち是れ諸法實相なり。諸法實相は即ち是れ佛なり。何を以ての故に。是諸法實相を得るを名けて、佛を得ると爲せばなり。復次に、色等の法の如相即ち是れ佛なり。色等の法は性空是れ如相なり。諸佛如も亦性空なり。是を以ての故に、不來不去、不生不滅、法性實際、空無染空滅なり。虚空の性も亦如、無來無去如なり。乃至虛空性の如と、佛の如と、是知は一にして二無く、三等の別異無し。此中に自ら因縁を説く、何を以ての故に。諸の數法を出すに所有無きが故に。如等の法は是れ實にして、是中に憶想分別して、相の取るべきもの有ること無し。故に名字有り、名字の中に數有り。此中に自ら因縁を説く、空は實に非ずして所有無きが故に。一問うて曰よく、一若し是法、無所有ならば云何が見るべく、聞くべく、書有り、案有り、縛有り、既有り等と、諸の異を分別する。一答へて曰はく、一の中に、一踏ま自ら種種に分別して、譬喩を説けり、謂ゆる春の末月に焰を見、乃至是人は諸法を分別して、若は來、若は去とせざるが如し。焰等の中には、實事なしと雖も、諸人自ら自らを説はして、苦樂の事を生ずるが如し。諸法も亦是の如く、空にして無所有者と雖も、亦能く人をして苦樂憂喜の事を得しむ。悲等の法も亦是の如し。復次に、佛に二種の身有り、一には法身、二には色身是なり。法身は是れ眞佛なり、色身は世諦の爲の故に有り。佛は法身の相の上に於て、種種の因縁を以て諸法實相を説く。是諸法實相も亦無來無去なり。是故に諸佛は從來する所無く、去るも亦至る所無しと曰く。若し人、諸佛法身の相を得ば、是を阿耨多羅三藐三菩提に近くと名く。未だ一切智を得ざるが故に名

けて近くと爲す。相似するを以ての故に般若波羅蜜を諸法實相と名く。若し能く是の如く  
 行ぜば、是を般若波羅蜜を行ずると爲し、眞の佛弟子なり。眞の佛弟子とは、諸法實相を  
 得るを名けて佛と爲し、諸法實相の差別を得るが故に、須陀洹乃至辟支佛大菩薩有り。須  
 陀洹等乃至大菩薩、是を眞の佛弟子と名く。虚妄に人の信施を食せずとは、畜生に布施し  
 て百倍の果報を得と雖も、而も此福は盡くることが有り、量行つて、衆生の生死を度する能  
 はず、故に名けて虚しく食すと爲す。須陀洹等乃至佛諸の賢聖は、人の信施を受くるに、  
 此福果報は、乃至涅槃まで盡くることが無く、量ること無し。是故に「虚妄に人の信施を食  
 せず」と説く。是人は應に一切衆生の供養を受くべし。若し須陀洹にして、一切凡夫人の  
 供養を受くべくんば、斯陀含は應に凡夫人乃至須陀洹の供養を受くべく、阿那含は應に凡  
 夫及び須陀洹、斯陀含の供養を受くべく、阿羅漢は應に凡夫人、須陀洹、斯陀含、阿那含の供  
 養を受くべく、辟支佛は應に凡夫人及び須陀洹乃至阿羅漢の供養を受くべく、成佛に近き大  
 菩薩は凡夫人及び聲聞、辟支佛の供養を受くべし。世間の福田爲りとは、種を良田に植う  
 れば、成收必ず多きが如く、持功神定智慧は福田なり。衆生福を植うれば果を獲ること無  
 量なり。上に證佛は來ること無く、去ること無しと説けり。薩陀波崙、及び諸の聽く者  
 意に謝へらく、「諸佛すら尙無し、諸法も皆亦應に滅すべし、則ち斷滅に墮す」と。是故に  
 今因證法の譬喩を説く。曇無竭、薩陀波崙に示して、汝の著する處の如く意に實に有りと  
 謂ふは、衆生を度すること無きが故なり。因縁の和合するに従つて則ち儼現する有り、此

事を證明せんと欲するか故に譬喩を説く。大海の中に生ずる寶の十方より來るに非ず、滅するも亦去る所無く、亦因縁無くしては生ぜざるが如く、四天下の衆生の福德の因縁を以ての故に、海に此寶を生ず。若し劫盡き滅する時有るも亦去る處無し。譬へば、燈の滅すれば燈の至る所無きが如し。佛身も亦爾り、初發心より植うる處の善根功德は、皆是れ佛身相好の因縁なり。佛身も亦自在ならざるは、皆是れ本因縁に屬する業果報の故に。是因縁を生じて久しく性に住すと雖も、是れ有爲法の故に必ず無常に歸す、散壞すれば、則ち身無し。譬へば、射を善くする人の仰いで虚空を射るは、箭去つて遠しと雖も必ず當に地に墮つるが如し。諸佛の身も亦是の如く、相好光明福德成就し、名稱無量にして、人を度すること誤り無しと雖も、亦虜滅に歸す。問うて曰はく、「若し衆生の福德の因縁の故に、海に珍寶を生ぜば、何を以てか近く衆生の處に生ぜずして、而も乃ち大海に得の處に在る。答へて曰はく、「海中にも亦衆生有り、龍阿修羅等の是寶を用ふればなり。復次に、若し寶、入中の濁世に生ぜば、貧者は覆蔽して人をして得しめざん。若し好世の時は珍寶自ら生じて人間に惜む者有る無けん。彌勒佛の時の如きは、珍寶も瓦礫の如くなりき。懈怠懶惰なるを以て、人は身を惜み、強ひて願を作して樂を求むるが故に、寶大海に在るも得る能はず。若し大心にして身命を惜まず勤求する者は乃ち得。大海の水をば十方六道の國土に輸ふれば、諸の珍寶は即ち是れ諸佛なり。珍寶の如き、一切衆生の爲の故に生ずるも、而も懈怠懶惰なる者は得る能はざる所なり。諸佛も亦是の如く、衆生の爲

の故に世門に出づと雖も、解意小心にして身を貪り、我に著する者は度するを得ず。所以は何。諸法は皆衆緣の和合より生ずればなり。衆生は二の因縁有るが故に得度す。一には内に正見有り、二には外に善く法を説く者有るなり。諸佛は善く法を説くと雖も、衆生は内に正見を具せざるが故に盡く度する能はず、寶物は衆生の爲に出づと雖も、而も貧窮の衆生有るが如し。諸佛も亦是の如く、衆生の爲に出づと雖も、而も衆生に内に正見少きが故に、亦度するを得ず。復空聲の譬喩有つて、槽有り、頸有り、皮有り、絃有り、柱有り、棍有り、人有り、手を以て之を鼓つに、衆縁和合して而も聲有り。聲の如きは亦衆縁の中に在るに非ず、衆縁を離れては亦聲無し、因縁和合するを以ての故に聲の聞くべき有り。諸佛の身も亦是の如く、六波羅蜜及び方便力、衆の因縁和合する邊より佛身を生ず。六波羅蜜等の法の中に在るに非ず、亦六波羅蜜等の法を離るるに非ず、聲の一の因縁を以てせず、亦無因縁にも非ざるが如し。佛身も亦是の如く、無因縁に従はず、亦少因縁にも従はず、諸の善法の因縁具足するが故に、諸の佛身を生ず。鏡中の像の如きは、衆の因縁和合するが故に有り、衆縁を離るるが故に無し。諸佛も亦是の如く、諸の因縁有るが故に出現し、諸の因縁散するが故に滅す。善男子、應に是の如く諸佛去來の相を尋すべく、一切諸法の相も亦應に是の如く知るべし。曇無竭、薩陀波釁に語つて言はく、善男子、汝能く諸法の相の不來不去を知らば、必ず阿耨多羅三藐三菩提を得て退轉せず、本心不驚く般若波羅蜜及び方便力を行すべし。何を以ての故に。一切法は聲無きが故に。』



【二】次に帝釋天の常啼を讃じ天華もて之を供養すといふを論ず。

と云ふ

問うて曰はく、『釋提桓因は、何を以てか文陀羅華を化作して薩陀波崙に與ふる。』答へて曰はく、『釋提桓因は佛道を愛樂するが故に、常に諸の菩薩を供養するなり。復次に、釋提桓因は衆生を攝して佛道に入らしめん欲するが故に、天王の身を現じて華を以て薩陀波崙に與ふ。薩陀波崙は一心に佛道を求むるが故に、諸天來つて供養し、衆生の見る者も亦發心す。』提桓因は衆生を引導せんが爲の故に、薩陀波崙を供養するなり。行人言はく、『釋提桓因は深く薩陀波崙を愛慕し、上の品に來つて試み、已つて身體をして平復ならしめ、今復華を以て之に與ふ』と。釋提桓因の力は能く一切の人に華を與ふるも、衆生は福力無きを以ての故に、設ひ與ふべきも華は即ち變壞すべし。薩陀波崙は福徳を成就するが故に必ず受用せざることを得。是故に與ふ。若し一切の菩薩の師を供養する時は、盡く與へざれども供養者を守護すべし、先に已に因縁を説く、謂ゆる肉を割き、血を出して、試みて以て觀と成り、舊きが故に守護す。復次に、釋提桓因は此中に、自ら因縁を説く、謂ゆる、汝は因縁力の故に、百千等の衆生を饒益すと。薩陀波崙華を取つて其意の如く曇無竭を供養す。薩陀波崙、初は師の名のみを聞き、後には眼に見、法を聞いて疑はざるが故に身を以て供養す。長者の女等も亦薩陀波崙に效ひ、身を以て薩陀波崙に施す。問うて曰はく、『薩陀波崙は身を以て曇無竭に供養す、曇無竭は福田大なり、女は何を以てか身を以て供養せずして、而も薩陀波崙に與ふる。』答へて曰はく、『女人は智短にし

て善多きが故に、本師を捨てて他を供養することを用ひず。又女身は罪穢なるを以て、心  
 清淨なりと雖も、外に譏謗有るが爲の故に。一問うて曰はく、「長者の女は初め父母を捨  
 てて已に薩陀波崙に屬す、今何を以てか復身を以て施す。」答へて曰はく、「初に父母を捨  
 て薩陀波崙と共に曇無竭に詣る。法の爲の故に供養するも、亦自ら身を以て施さず、父母  
 も亦以て薩陀波崙に施さず。今薩陀波崙甚深の義を問ふに曇無竭は爲に解説し、釋提桓  
 因の歡喜し供養するを見る。是故に歡喜の心を發し身を以て供養す。自在の心を以ての故  
 に。又一切の女身は繫屬する處無ければ則ち惡名を受く。女人の體は幼なれば則ち父母に  
 從ひ、少しては則ち夫に從ひ、老いては則ち子に從ふ。是長者の女等は、道路を共にして  
 來ると雖も、久しく屬する所無きを得ず。是故に自ら身を以て施し、而も是願を作す、師  
 の得る所の如きは、我等も亦之を得べし」と。爾時、薩陀波崙は、此女を以て曇無竭を供  
 養せんと欲し、其嫌恨を慮るが故に問ふ。汝等實に誠心を以て我を供養すれば當に愛べ  
 し、汝誠心ならば自ら心を用ひずして、處分する所に隨つて無心の物の如くなれ」と。  
 諸の女人等の言はく、「實に誠心を以てす」と。即時に薩陀波崙は長者の女并に、諸の  
 侍女及び五百衆の車を以て曇無竭に奉上册。薩陀波崙は世の人の常に疑つて、其長者を欺  
 誑して諸女を將ゐ來ると謂ふを除かんと欲す。是故に盡く以て布施し已つて著無きを明  
 にす。復次に、薩陀波崙、空中の聲に聞く所の如く解を得て歡喜し、世人の貴ぶ所の内外  
 の物を盡く以て供養するが如きは、深く檀波羅蜜門に入らんと欲するが故なり。釋提桓

【三】次に曇無竭七歳入定の義について論釋す。

因は、薩陀波闍の貪愛等の煩惱は未だ盡きざるも、而も能く盡く内外を捨て、布地して復還縁無きを知るが故に、讀して善哉と言ふ。過去の佛を以て喻と爲して難事を行するが故に、得難き果報を得、謂ゆる阿耨多羅三藐三菩提なり。」

問うて曰はく、「若し曇無竭は薩陀波闍をして善根を具足せしめんと欲するが故に受けば、善根を具する檀波羅室を具足す。何を以ての故に還つて薩陀波闍に與ふる。」答へて曰はく、「曇無竭は大智方便なり、薩陀波闍をして大に福德を得て、而も失ふ所無からしむ。是を上受と謂ふ。薩陀波闍の至誠心の疑は、諸の貧苦を斷じて還つて福德の具足を得るを望まず。曇無竭思惟すらく、「薩陀波闍は遠くより來つて、而も五欲に於て心に染著せず」と、舊人の供養を善と爲す、是故に還つて與ふ。又聞く、諸女先づ身を以て薩陀波闍に上るも、人は財物に非ず、其本意を遂げんと欲するが故なり」と。又其諸女をして世世に薩陀波闍の弟子爲らしめんが爲に、是の如き等の因縁の故に、還つて薩陀波闍に與ふるなり。」問うて曰はく、「諸の大菩薩は法を説いて應に突破すべからず。何を以てか宮に入る。」答へて曰はく、「世人の法に隨ふが故なり。又衆香城の中の衆生は常に道を求めず、或時は厭足して五欲の樂を受く。諸天は常に五欲を受くるが故に求道を妨げず。有菩薩は所住の國に於て、常に勤めて精進して五欲を受けず。是衆香城の衆生は、本より願つて離受す。曇無竭其志願に隨つて、之を引導せんと欲するが故に、其國に生ず。是故に衆生の法を聽いて疲倦するを以て、起つて宮中に入るなり。又未だ道を得ざる者の法は微妙なりと雖も、

常に聞くが故に疲厭の心を生ず、是衆中に是人有るが故に。又曇無竭は、是中に富樂の人の法を受くるもの有るが故に、日没すれば應に息むべし。是時薩陀波崙、是念を作さく、「我法の爲に来る。何を以てか應に坐臥すべからざらん」と。問うて曰はく、「法の爲の故には、何を以てか坐臥すべからざる。答へて曰はく、「是れ定法無きも、此人は大欲大精進にして法を恭敬するが故に、自らは是念をなす、「我若し坐臥すれば、則ち是れ墮落なり。我初めて法を求めし時は、身すら尙惜まず。何に泥んや疲倦あらんぞ」と。是故に坐臥せず。何を以ての故に。大欲大精進と坐臥とは相違するが故に。又坐臥すれば則ち勤力せず。行立は則ち勤力精進す。是故に常に二威儀に住して、以て師の出づるを得つなり。」問うて曰はく、「薩陀波崙は先に師の七歳出でざるを知るや不や。」答へて曰はく、「初より來知らざりしが故に、又復曇無竭も亦常に七歳出でず、因縁を以ての故に、自ら誓つて七歳入定す。薩陀波崙自ら師未だ出でざれば終に坐臥せずと誓ふ。又大人世間の法すら尙自ら違せず。何に泥んや道法をや。又初めて法を求むる時すら尙身を惜まず、今立つこと七歳なるも、何んが難しと爲るに足らん。」問うて曰はく、「人身は軟弱なり、何んが能く七歳坐せず臥せざることを得る。」答へて曰はく、「是時の人は壽命長く、復七歳といふと雖も今の七日の如し。又好世の人身は福徳の力大なり、立つこと七歳なりと雖も、以て難しと爲さず。毘丘の如きは年六十にして始めて出家し、而も自ら結誓して其論を席に著けず、要す。無く其論の得べき所の事を得、乃至六神通の阿羅漢を得て、四阿含の優婆塞舍を作り、

今に於て大に世に行はる。此人は惡世に於てすら尙爾り、何に況んや薩陀波耨は好世に生ずるに於てをや。又身力は弱しと雖も、心強きを以ての故に其事を辨ず。復次に、一心に佛道を求むる者は、十方の諸佛、念する所の諸大菩薩、及び佛道を求むる諸天、其氣力を益して圍遶守護す。是故に、住立すること七歳なりと雖も而も疲極せず。』問うて曰はく、臺無竭は三昧に入り、何を以てか乃ち七歳に至る一答へて曰はく、先に已に答ふ、好世の人は壽長くして七歳と雖も以て久しと物さす。又臺無竭の宮殿の姪女の微妙の五欲は天と相似し、薩陀波耨等の新發意の者は、心未だ柔軟ならずして臺無竭を疑ひ、空法を説いて離欲を讚歎すと雖も、其心未だ捨つる能はざるを謂ふ。是故に七歳の三昧を以て衆の疑を餘かんと欲す。故に貴敬の心を生じ、臺無竭の七歳の三昧は心口相應して能く説き、能く行ずるを聞くや、則ち其語を信受して、度し得べきこと易し。譬へば、瘡瘡未だ熟せざれば、譬は則ち破らず、但藥を以て塗つて熟せしむ。熟すれば則ち破ること易きが如し。復次に、心に生ずる實業を受けんと欲するが故に、無量の三昧に入る。復次に、説法に二種有り、一には口説法、二には身現法なり。今は身を以て法を現せんと欲するが故に、無量の三昧に入り、衆生をして心を攝して、慧に入ること知らしめて如實智を得しむ。菩薩の三昧とは、菩薩義の中に説くが如し。般若の方便力を行すとは、方便品の中に説くが如し。薩陀波耨は七歳の中に於て、三惡の覺觀を生ぜず、味を味はず、是人未だ煩惱を破せずと雖も、而も諸の善法を集むるが故に、諸の煩惱を制して生ずるを得しめず、但一心に

曇無竭を念じ、何の時か當に出づべき、我當に従つて般若を聞くべし。七歳を過ぎ已つて  
 是念を作す。我當に曇無竭の爲に、坐處を敷いて掃灑莊嚴すべし」と。問うて曰はく、「薩  
 陀波闍は云何が七歳を過ぎ已つて、曇無竭の當に出づべきを知るを得たる。答へて曰はく、  
 『有人言はく、「先に曾て七歳展轉して聞知す」と。有人言はく、「曇無竭初めて三昧に入る時、  
 自ら説いて七歳を限と爲せり」と。釋迦文尼佛、阿難に、我一月二月、禪定に入らんと欲  
 す」と告げたまひ、阿難以て四業に告げしが如し。薩陀波闍は深く佛法を愛し、曇無竭を  
 敬重するが故に、供養して説法の處を莊嚴す。出家の菩薩は俱共心を莊嚴し、常に詣して  
 法を受け、在家の菩薩は則ち説法の處を莊嚴して華香を供養す。復次に、薩陀波闍は莊  
 嚴を作し、曇無竭をして其法を愛し、法を敬するの相を知らしめんと欲し、深く心に信樂  
 するが故に是事を現す。是故に心を生じ、五百の女等と共に力を展べて掃灑し、自ら共金  
 銀珍寶を以て座に敷く、薩陀波闍等は自ら妙好の苣草有りと雖も、愛法の情至るが爲の故  
 に、身に著くる所の上衣を以て座に敷き、水を求めて地に灑がんとするも、魔の障蔽する  
 が故に、求むるも得る能はず。此中に自ら因縁を説く、魔は是念を作す、「若し薩陀波闍、  
 水を求めて得ずんば、其心則ち劣にして、志願薄せざるが故に、又自ら其身を濡しめ、  
 我の體が故に、法を供養せんが爲の故に、水を求むるに得ずと。自ら輕んじ憂愁して、  
 心を憐ふを以ての故に、福徳増さず智慧照さず」と。不明とは、諸の憂愁煩惱の心を覆  
 ふが故に、諸の福徳智慧は益々照す能はざるなり。譬へば、目を障蔽するが故に其照す

こと明かならざるが如し。魔は其心を知るも大に沮壞すべからず、但少しく沮壞して其を  
 して稽留せしむ。爾時、薩陀波崙自ら其身を割し、血を出して地に灑ぎ、以て麁を流はん  
 と欲す。人の血肉は臭しと離れ、其至心に水を求めて得ざるを以て、意に香臭好惡を分別  
 せず。麁を流はんと欲するが爲に身命を惜まず、又薩陀波崙は深心に般若波羅蜜に愛著す  
 るが故に、身命を愛惜する所無し。有人言はく、「多くの諸天龍鬼神等有り、常に薩陀波崙  
 に隨逐して、作助し守護す。是故に出づる所の血は變じて香水と爲ること、願提伽人の割  
 截を被る時、血化して乳と爲るが如し」と。又無量の福德を成就するを以ての故に、願に  
 隨つて即ち成就するなり。「問うて曰はく、「若し爾徳已莫し、願に隨つて即ち得ば、魔は  
 應に其水を隠蔽せざるべし。」答へて曰はく、「是は美意の菩薩は能く小願を成ずるも、未  
 だ能く魔を知くる能はず。此中に薩陀波崙自ら出血の因縁を説く、「我無始生死より已來、  
 數數身を喪ふも、未だ行て法の縁にせず」と。「問うて曰はく、「薩陀波崙は法を愛して、  
 身を割して血を出す、若し其身死せば、誰か復法を聽かん。」答へて曰はく、「是事は骸骨  
 出處の中に答ふるが如し。又此中に諸天大菩薩守護するが故に、其をして死せざらしむ。  
 又復惡魔は其心を知つて、沮壞すべからざれば、水則ち還つて出でん。薩陀波崙等皆異心  
 無しとは、人の初めて惡心を得ふが如く、衆生の爲、及び般若波羅蜜の爲にせんと欲する  
 が故に身命を惜まず。既に利刀を得て身を割くに、以て痛自ら過るが故に、心に悔恨を生  
 ず、是を異と名く。是菩薩は信力大なるが故に、阿耨多羅三藐三菩提の果報を得んと欲す

るが故に、是苦を計らず、又慈悲心を以て衆生を愛念し、種種の苦惱を受くと雖も、以て  
 難と爲さず。譬へば、慈母の子を愛するに、子の爲に長く勤苦不浄を受くと雖も、以て悪  
 しと爲さざるが如し。又復諸法の實相畢竟空を見るが故に、是身は但是れ虚誑の和合なる  
 を知り、是虚誑を破するが故に、身を割截する時も、阿耨多羅三藐三菩提を妨げず。魔共  
 便を得ずとは、人にして瘡有れば、則ち毒を受くるが如く、菩薩若し貪欲憂愁の瘡有れば、  
 魔共便を得るも、血を出し、地に灑ぐを以て、心憂愁せざるが故に、魔便を得ず。薩陀波  
 崙の心、五百の女人の心の如きも、亦是の如し。薩陀波崙を敬重するが故に、其身を刺す  
 を見て應に憂愁有るべく、其願を滿するを得るを以ての故に、以て愁と爲さず。爾時に、釋  
 提桓因、是事を見已つて、未曾有なりと歎すとは、是人未だ無生忍を得ず、諸の煩惱を  
 未だ斷せざるも、法を供養せんが爲の故に、身命を惜しまざること、諸の離欲の人と異  
 る無きが如く、其身を割截すること草木を斷つが如し。初心にして既に爾り、後心は轉た  
 増さん。復次に、未曾有とは、此中に釋提桓因自ら因縁を説かく、「薩陀波崙の法を愛す  
 る乃ち爾り、刀を以て自ら刺す等なり」と。釋提桓因は是心を作し、歡喜し已つて讚し  
 て善哉と言ひ、「其法を愛し、法を樂ひ、勤心精進するを讚し、過去の佛を以て喻と爲し、但汝  
 のみ今辛苦するに非ず、過去の諸佛の般若を求むる時も亦爾り」と。薩陀波崙、釋提桓  
 因の語を聞き、其心を安慰し已つて、火の酥を得て轉た更に熾盛なるが如く、是念を作す、  
 「我既に座を敷き地に灑ぐ、當に何の處に於てか、好名華を得て、法處を莊嚴するを得べ



き一と。問うて曰はく、『水を見ざる時何を以てか是念を作さざる、當に何の處に於てか、水を得て地に灑ぐべき』と。答へて曰はく、『薩陀波衛は先に水有る處も、即時に皆無きを以て、魔の所作なるを知る。是故に自ら四大分の中に於て、水分を刺して地に灑ぐ、身中の水種多しと雖も、血は是れ命の在る所なるを以て、是故に刺して以て地に灑ぐ。華は自ら有るにあらず、曇無竭の出づる時は至らんと欲すれども、遠く求むることを容れられず。又須むる所も復多くして、當に以て遍く其地を覆ふべし。是故に、念を生じて得んと欲す。帝釋は其念を知り、即ち天華の中の妙なるものを以て、曼陀羅と名け、三千石を之に與ふるに、以て事を問うするに是れり。帝釋は以て人に華を以て與へざる所以とは、希有の心を發せしめんと欲するが故にして、薩陀波衛、華を受け已つて分つて二分と作し、好者を留めて以て法を説く時散じ、餘は地を覆ふ。其國の俗法は、華を以て地を覆ひ、其上に行ぜしむるを以て、供養と爲す。爾時に、曇無竭は其先の要の如く、七歳を滿じ已つて三昧より起ち、無量百千の衆の與に圍遶せられて直に法座に越く。般若を説かんが爲の故に、問うて曰はく、『若し諸の菩薩微妙三昧の中に入らば、誰か能く起たしめん』と答へて曰はく、『行者初めて入る時は、自ら眼鼻を作し、然して後入定の時に至り、其心自在にして三昧より起つとも、悲心の故に而も覺觀を生ず。一比丘の如きは滅受定三昧に入る時、自ら捷槌を聞く時當に起つべしと期す。既に入り已る時僧坊火を失するや、諸の比丘惶悚として捷槌を打せずして去る。爾時、十二歳を過ぎ已つて檀道更に和合し、衆僧をして僧坊

より起たしめんと欲して、方に捷徑を打つ。捷徑の聲を聞くや、起つて即ち身を散じて死す。後諸の得道者の説くこと其れ此の如し。復次に、有人言はく、「法性生身の菩薩は、諸佛の如く常に三昧に入つて散亂蠱心無く、神通力を以ての故に能く法を説き、飛行して衆生を度脱す。世俗の法なるが故に三昧の相に入ら有り、是故に微妙三昧に入ると雖も而も能く還出す。大悲心を牽くを以ての故に、譬へば、咒術して龍を出すが如し。大衆圍遶すとは、内の眷屬恭敬し、散華燒香隨從して出づるなり。般若波羅蜜を説かんが爲の故に。般若波羅蜜を説くとは、世諦の名字語言に依つて、衆生に第一義不動の相を示さんと欲するが故なり。薩陀波崙は曇無竭を見て、即ち清淨の歡喜を得、業其身に遍すること、比丘の三禪に入るが如し。所以は何ん。多欲の衆生は淨妙に非ずと雖も、猶喜樂を得。何に況んや、眞の功德を見ることを得て、身を莊嚴する者をや。薩陀波崙空中の佛に従つて、曇無竭の即ち大欲を生じ、諸の三昧を得て、十方の諸佛に見ゆるを聞けり。復十方の諸佛の先世の因縁を説くを聞くに、唯曇無竭の有つて能く汝を度するのみ」と。是を聞いて已に其心を増益し、渴仰して見んと欲す。是故に中道に身を賣つて供養せんと欲す。今衆香城に於て七歳、坐せず臥せずして曇無竭を見んと欲す。是の如く渴仰して樂欲し來ること久し。人の熱渴に逼らるる所の如く、濁暖涼水を得るも猶尚歡喜す。何に況んや、清冷の美水を得るに於てをや。既に以て渴仰の情久し、又曇無竭は功德大なり。是故に悦豫す。問うて曰はく、「業に四種有り、何を以てか但第三禪の樂を説いて、上地の定業及び解脫業

を説かざる。答へて曰はく、「欲界の衆生は三受の中に於て、多く樂受を食るを以て、涅槃樂は無所有なりと聞いて、則ち心に樂喜せず。上の四禪の中には、苦樂を斷するが故に、心亦樂まず。第三禪の中の樂は樂の極なるが故に、復有人言はく、「薩陀波耨發意は未だ細深妙定に入らざるが故に、曇無竭を見て大歡喜を發すこと、三禪の樂に似如す」と。「薩陀波耨、自ら我大に歡喜を覺ゆるが故に、即時に喜を捨てて、清淨の法性を得て、遍身安樂なり。是故に三禪の樂に以て噓と爲すなり。」

大智度論卷第九十九

# 大智度論釋曇無竭品第八十九

卷第一百

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什釋

爾時薩陀波崙菩薩摩訶薩、及び長者の女、並に五百の侍女、曇無竭菩薩摩訶薩の所に  
 至つて天の曼陀羅華を散し、頭面に禮し畢つて退いて一面に坐す。曇無竭菩薩、其坐し已  
 るを見て、薩陀波崙菩薩に告げて言はく、「善男子、諦に聽き、諦に受けよ、今當に汝  
 が爲に般若波羅蜜の相を説くべし。善男子、諸法は等きが故に當に知るべし、般若波羅蜜  
 も亦等し。諸法は離るるが故に當に知るべし、般若波羅蜜も亦離る。諸法は不動なるが故に  
 當に知るべし、般若波羅蜜も亦不動なり。諸法は無念なるが故に當に知るべし、般若波羅  
 蜜も亦無念なり。諸法は無畏なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜も亦無畏なり。諸法は  
 一味の故に當に知るべし、般若波羅蜜も亦一味なり。諸法は無邊なるが故に當に知るべし、  
 般若波羅蜜も亦無邊なり。諸法は無生なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜も亦無生なり。  
 諸法は無滅なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜も亦無滅なり。虚空は無邊なるが故に當  
 に知るべし、般若波羅蜜も亦無邊なり。大海水は無邊なるが故に當に知るべし、般若波羅  
 蜜も亦無邊なり。須彌山は無邊なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜も亦莊嚴なり。虚空

は無分別なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜も亦無分別なり。色は無邊なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜も亦無邊なり。受想行識は無邊なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜も亦無邊なり。地種は無邊なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜も亦無邊なり。水種火種風種は無邊なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜も亦無邊なり。空種は無邊なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜も亦無邊なり。金剛の如く等きが故に當に知るべし、般若波羅蜜も亦等し。諸法は無分別なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜も亦無分別なり。諸法の性は不可得なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜の性も亦不可得なり。諸法は無所有等なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜の性も亦無所有等なり。諸法は無作なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜も亦無作なり。諸法は不可思議なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜も亦不可思議なり」と是時、薩陀波闍斯菩薩摩訶薩、即ち座上に於て諸の三昧を得。謂ゆる諸法等三昧、諸法離三昧、諸法無畏三昧、諸法一味三昧、諸法無邊三昧、諸法無生三昧、諸法無滅三昧、虚空無邊三昧、大海水無邊三昧、須彌山莊嚴三昧、虚空無分別三昧、色無邊三昧、受想行識無邊三昧、地種無邊三昧、水種火種風種空種無邊三昧、如金剛等三昧、諸法無分別三昧、諸法不可思議三昧なり。是の如き等の六百萬の諸の三昧門を得。爾時、佛須菩提に告げたまはく、「我今三千大千世界の中に於て、諸の比丘僧の與に圍繞せらるるに、是相を以てし、是像貌を以てし、是名字を以てして般若波羅蜜を説くが如く、薩陀波闍斯も是六百萬の三昧門を得、東西南北四維上下に如恆河沙等の三千大千世界の中の諸佛を

見、諸の比丘の與に圍繞せらるるに是の如きの相を以てし、是像貌を以てし、是名字を以てして、是摩訶般若波羅蜜を説くこと亦是の如し。薩陀波耆菩薩は、是より已後、多聞の智慧は不可思議にして、大海水の如く、常に諸佛を離れず、有佛土の中に生じ、乃至夢中にも未だ曾て佛を見ざる時なく、一切の衆難、皆悉く已に斷じ、所在の佛土、願に隨つて往生す。須菩提、當に知るべし、是般若波羅蜜の因縁は、能く菩薩摩訶薩の一切の功德を成就し、一切種智を得、是を以ての故に須菩提、諸の菩薩摩訶薩、若し六波羅蜜を學ばんと欲し、深く諸佛の智慧に入らんと欲し、一切種智を得んと欲せば、應に是般若波羅蜜を受持し讀誦し正憶念して、廣く人の爲に説き、亦經卷を書寫し、香華乃至伎樂を以て供養し、尊重し讚歎すべし。何を以ての故に。般若波羅蜜は是れ過去未來現在の十方の諸佛の母にして、十方の諸佛に尊重せらるるが故に。

【二】前卷に續いて曇無竭品を釋する中、次いで曇無竭の重ねて般若を説くについて。

釋して曰はく、曇無竭既に由て法座の所に至つて已に勝る者無きを徧觀し、是に於て坐す。爾時、薩陀波耆菩薩、坐し已つて定まるを知り、曇無竭の所に到り、頭面に足を禮して一面に坐す。禮に三種有り、一には口禮、二には膝を屈するも頭地に至らしめず、三には頭を地に至らしむ、是を上禮と爲す。人の一身は頭を最上と爲し、足を最下と爲す。頭を以て足を禮するは、恭敬の至なり。曇無竭共坐するを見已つて、遠より來つて身命を惜みず、種種に勤苦して法を聞かんと欲するが爲なるを知る。初めて相見ると、日没するに垂んと欲するをもて、少時法を聞き、曇無竭日没を以ての故に、起つて宮中に入れり。

今法の爲の故に、七歳渴仰して異心を生ぜず。出でんと欲する時に垂んとして、血を以て  
 地に灑ぎ、其法の爲に身命を惜まず、其心退かず、決定して疑無く、教化を受くるに堪  
 ふるを知る。是故に告げて言はく、「善男子、一心に諦に聽け、上に諸佛の來去を疑ふこ  
 と已に斷じ、今は但甚深の般若波羅蜜を聞かんと欲するのみ。是故に爲に般若波羅蜜の相  
 を説く。般若波羅蜜の相とは、先に諸法平等の義の中に説けるが如し。或は有人言はく、  
 「般若波羅蜜の力の故に諸法は皆平等なりと觀ず、諸法の性は、性自ら平等なるには非  
 ず」。是故に曇無竭ははく、「諸法平等なるが故に般若波羅蜜は平等なり。所以は何ん。  
 因果相似するが故に。初めて諸法の平等を觀するは是れ因なり、心を決定して般若波羅蜜  
 を得るは、是れ果と爲す。」問うて曰はく、「諸法平等を觀するは即ち是れ般若なり、般若  
 は即ち是れ平等なり、何を以てか分別して因果と爲す。」答へて曰はく、「般若及び諸法は  
 一相にして、二無く別無しと雖も、行者の初めて觀する時は是れ因にして、觀じ竟れば名け  
 て果となす。須陀洹道に向を得るが如し。又有漏の五衆の如く、因の時を集と名け、果の  
 時を善と名く。色等の一切の法平等ならば、即ち是れ般若波羅蜜は平等なり。」問うて曰  
 はく、「應に般若波羅蜜の相を説くべし、今何を以てか平等を説く。因不平の故に平等有  
 り、因平の故に不平等有り、般若の中に於ても亦一相ならず、亦異相ならず。汝何を以て  
 故に一相を取らんと欲する。」答へて曰はく、「般若波羅蜜は甚深微妙にして、方便を以て  
 解くにあらざれば則ち解する者無し。是故に若し不平等を分別すれば、則ち諸の煩惱を生

じ三劫增長す。謂ゆる、怨を憎み親を愛し、善を愛し不善を憎む。菩薩は、是二等の中に住し、一切法を觀じて、皆平等とす。衆生等の中に住するに、怨親憎愛、皆悉く平等なり。福徳の門を開き、諸の惡趣を閉ぢて、法等のの中に住し、一切法の中に於て、憶想分別し、著心に相を取り、皆滅を除き、但諸法の空を見るに、空は即ち是れ平等なり。人有り、是諸法の平等空を得ば、直に菩薩道に越いて空に於て戲論せず。人有り、平等を得と雖も、而も戲論を生ず。若し都て空を觀すれば、是の如きの失有り。是の如きの人は、平等に於て即ち是れ不等なり、是故に此中に眞平等の爲の故に、般若波羅蜜等を説く。是れ戲論に非ずして、平等不平等の二邊を離る。是れ般若波羅蜜の相なり。一問うて曰はく、『平等なれば、般若波羅蜜に於て相已に具足す。何を以ての故に、更に離等は是れ般若波羅蜜の相なりと説く。』答へて曰く、『經の中には但諸法等しと説くが故に、般若も等し。行者は是平等の相を取つて而も著を生ず。是故に般若波羅蜜は、平等の相にして自性を離ると説く。色等の諸法は自相を離るるが故に。離の義は相無相品の中に説くが如し。此諸法平等を得るや、又平等離に於て空の中に安住す。空の中には則ち動ぜず、戲論も動ずる能はず、諸の煩惱の山も亦動ずる能はず、無常の時も亦動ずる能はず、所以は何ん。一切法に於て實相を得るが故なり。菩薩は是二空に住して、不動般若波羅蜜を得ば、是れ則ち究竟なり。若し念有らば即ち是れ相著する處有り、是故に諸法無念と説く。故に當に知るべし、般若波羅蜜も亦無念無動の相なり、是れ般若波羅蜜なり。般若波羅蜜は諸の相を



滅するが故に、若し是般若を念ぜざれば、或は迷悶して趣向する所無し。戲論有る者は、大衆の中に在りて則ち怖畏を生じ、或は涅槃の中に於て了ぜざるが故に亦怖畏を生ず。是故に怖畏の相無しと説く。是れ般若波羅蜜なり。是人は決定して諸法の相を取らずと雖も、而も深く法性に入るが故に、大衆の中に於て諸相を論難する者有り。心に畏るる所無く、諸法に於て無相を得るが故に、又無生法忍に入る時、一切法は不可得なりと知る。是中に於ても、亦畏るる所無し、所以は何ん。是菩薩は善く一切法に通達するが故なり。復次に、一切法は一相なり。謂ゆる性空なり。是故に般若波羅蜜は一切法に隨ふ。故に亦性空も一味なり。』問うて曰はく、『上に已に諸法平等と説き、今何を以てか更に一味を説く。』答へて曰はく、『空は或時は味有り、或時は味無し。若し行者の見を取りて分別し、好醜を量すれば、爾時、是諸法平等の空を得て、心大に歡喜するが故に名けて味と爲す。譬へば、人の熱湯の爲に通まられて、清冷の水を得て、以て眞味を無比と爲すが如し。時に隨つて用ふるが故に味と名く。眞實畢竟空には則ち味不味無し。復次に、一味とは、菩薩般若波羅蜜を行ずる時、緣する所、觀する所、皆一味と爲る。空の智力大なるが故に餘法皆隨ふも而も空と爲す。譬へば石蜜を煮て、熟せんと欲する時、異物相合すと雖も、皆石蜜と爲るが如し。又大海の如きは、百川之に歸して皆一味と爲る。謂ゆる畢竟空一味なり、色等の諸法も亦是の如く、凡夫の心中は各各別異なるも、般若波羅蜜の中に入れば、皆一味と爲る。邊を名けて相と爲す。若し有、若し無なり。實に色等の諸法を觀するに有に非

す、無に非ず。故に無相即ち是れ無邊なり。是を觀じ已れば、是れ無邊般若波羅蜜なり。復次に、有人言はく、「邊に二種有り、常邊と斷邊、世間邊と涅槃邊、惡邊と善邊等なり。此中には是の如き等の諸邊無きが故に、名けて無邊般若波羅蜜と爲す」と。復次に、有人言はく、「邊をば前後後際と名け、世間は無始なるが故に前後無く、無餘涅槃に入るが故に前後有り、復更に出でざるが故に後際無し」と。是の如き等と諸邊を分別し、世間に著するが故に涅槃を畏る。是の故に般若波羅蜜の中にはは一切邊無く、但諸法實相を聞いて入る無く、出づる無し。問うて曰はく、「諸法平等、諸法離は皆是れ無邊なり。何を以てか復別説する。」答へて曰はく、「人有り、諸法平等を知り、諸法離を知れば、即ち説くことを須ひず。若し人有り、相を取りて是一味に著するが故に無邊を説く。曇無竭は但薩陀波崙の爲のみに非ざるが故に説き、薩陀波崙も亦自の爲のみにあらざるが故に問ふ。但衆生に種種の心、種種の行有るが爲の故に、般若波羅蜜の相の中に於て略して無生無滅を説く。先に種種の因縁もて生滅を破する中に、虚空の無邊なるを説けるが如し。摩訶衍虚空譬喩の中に説くが如く、大海水邊、須彌莊嚴は先に未だ説かざるが故に、今當に略して説くべし。問うて曰はく、「虚空は無爲にして常法なるが故に、其邊を得る者無ければ、無邊と言ふべし。大海水は四天の中に在つて、須彌山を繞つて由旬の數量有り。人有り、能く渡る、何を以てか無邊と言ふ。」答へて曰はく、「無邊に二種有り、一には實の無邊、二には人の到る能はざるが故に無邊なり。海に亦二種有り、一には渡るべきもの、二には須彌

山を繞つて九寶山の裏に在つて廣さ八萬二千由旬なり、世間の人は邊を得る能はざるが故に、無邊と言ふ。小海は船の力もて渡るべく、大海水は船の力もて渡るべからず、但神通有るも者の能く渡るが如し。外道凡夫の如きは、能く禪定の船を生じて欲界色界の海を渡るも、無色界は大海の深廣なるが如くなるが故に則ち渡る能はず。我心を破る能はざるを以ての故に、諸の賢聖人は智慧禪定の翅力もて、諸法の邪相を破して實相を得るが故に能く度す、是故に大海の譬喩を説くなり。一問うて曰はく、「須彌山は一色なり、何を以てか莊嚴と言ふ。」答へて曰はく、「外書に須彌山は一色にして、純ら是れ黄金なりと説くも、六足阿毘曇の中には、「須彌山の四邊は各一寶を以て成り、金、銀、頗梨、瑠璃もて莊嚴せり。若し諸島所至の方に隨つて各其色を同うす。難陀、婆羅陀の龍王の兄弟身を以て圍遶すること七匝、山の頂に三十三天宮有り、其城七重なり、名けて喜見と爲す。九百九十九門あり、一一の門の邊に皆十六の青衣大力の鬼神有つて城中を守護す。高處に殿を作ら、名けて最勝と曰ふ。四邊に四大國四天王の有る在り。四邊に山有り、遊乾陀と名け、各の高さ四萬二千由旬なり、四天王其上を治む。四大海水、諸の阿修羅宮及び諸の龍王の宮殿、遊乾陀等の九寶山、日月五星二十八宿及び諸餘の星圍繞莊嚴す。是の如き等の種種の雜飾を以て莊嚴を爲し、之を觀るに厭ふ無し」と説く。般若波羅蜜も亦是の如し。六波羅蜜の果報の故に轉輪王、梵釋天王、淨居天王、大自在天と作る。是の如き等の果報は、般若波羅蜜を行ずるも、未だ具足せざる時、此果報莊嚴を受く。般若波羅蜜

を具足する時は、則ち須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道、阿毘跋致の菩薩、諸佛道果の莊嚴有り。須彌山の上下の如きは皆莊嚴有り、般若波羅蜜の莊嚴も亦爾なり。未だ具足せざる時は、諸の天王等を莊嚴し、具足しじれば諸道果を莊嚴す。須彌山の如きは、劫の初めて立つ時、四邊の大風地の精味を吹き聚めて積んで須彌山を爲す、更に風有り、吹いて堅からしめて寶を成す。般若波羅蜜も亦是の如く、一切善法の中に、第一堅實牢固和合するを以て般若と爲す。須彌山の如きは、四邊に大風吹けども、大海水の波も動かす能はざる所なり。般若波羅蜜も亦是の如く、邪見外道戲論及び諸の魔民の動かす能はざる所なり。須彌山頂の四圍の如きは、諸天の到る者は種種の樂を受く、般若も亦是の如く、行者能く般若の頂に登れば、四禪等の諸定の園の中に到つて種種の樂を受く。復次に、有人言はく、「須彌山に衆鳥到れば皆同じく一色なり、般若波羅蜜も亦是の如く、諸法中に入れば、皆同じく一相なり、謂ゆる無相なり。虚空の分別無きが如しとは、虚空には是れ内、是れ外、是れ遠、是れ近、是れ長、是れ短、是れ淨、是れ不淨等の分別無し。般若波羅蜜も亦是の如く、諸法は般若の中に入れば、亦内外善不善等の分別無きなり。五衆の無邊なるが如しとは、五衆は常に遍く世間に滿つ、般若波羅蜜も亦是の如く、五衆を遠離せず、五衆の實相は、即ち是れ般若波羅蜜なり。復次に、色等の法の如きは、分析破裂して乃至微塵に至つて則ち無方なり、無方なるが故に無邊なり。無色法無形の故に彼此無し、彼此無きが故に無邊なり。般若波羅蜜も亦是の如く、一切法に於て、色

を分別して乃ち微塵に至り、無色法を分別して乃ち一念の中に至るも、決定して常樂我淨  
 有るを見ず。是故に色無邊と説き、色無邊の故に、般若無邊と説く、乃ち虚空に至るまで  
 の六種も亦是の如し。如金剛等とは、天王の執る所の金剛の如きは、憎無く愛無く、所用  
 の處に隨つて、摧碎せざる無し。諸佛は一切智の前心に、此心中の三昧能く一切結使の煩  
 惱顛倒を斷じ、及び習をも皆滅するが故に、名けて如金剛と爲す。如金剛三昧相應の智慧  
 は、一切法を見るに皆平等なり、般若波羅蜜の諸法平等を觀するも亦是の如し。般若は先  
 づ諸法の平等を觀じ、然る後に是三昧を得るが故に。諸法無分別とは世間の凡夫は煩惱力  
 の故に種種に諸法を分別し、諸法の實相を得れば則ち皆破壞變異す。是故に聖人は般若波  
 羅蜜を得るに、情想分別の諸法に隨はずして空、無相、無作三昧の中に入る。若し諸法の  
 變異を得る時も則ち憂愁せず。先より來、分別して諸法の相を取らざるを以ての故に。  
 諸法の性不可得とは、一切の法は皆因縁和合より生ず、因縁無しといふこと有る無し。若  
 し少因縁にして起るとも、若し因縁より生ぜば即ち自性無し。自性とは本有決定の實事に  
 名く。若し性因縁和合の邊より生ぜば當に知るべし、未だ和合せざる時は則ち無し。若し  
 先に無にして、今因縁和合よりして有ならば、則ち性無きを知る。若し因縁より而も性を生  
 ぜば、性は即ち是れ作法の性にして、不相待、不相因と名く。常に應に獨り有るべし。是の  
 如く有爲法は、則ち無なり。是故に、一切諸法の性は不可得なりと言ふ。般若波羅蜜の性  
 も亦爾り。諸法は無所有等の故には、諸法の性は不可得なるが故に、衆の因縁も亦不可

得なり、衆の因縁不可得なるが故に、皆是れ無所有なり、無所有の中に入るが故に、則ち是れ平等なり。所以は何ん。有の故に分別有り、無の故に分別無く、草香と梅檀香との焼く時は分別有り、滅する時は分別無きが如し。諸法無作とは、衆生空なり、法空の故に則ち皆無作なり。衆生の所作とは、謂ゆる、十善十不善等の法なり。作とは、謂ゆる火は然え、水は流れ、風は動き、識は能く知る。是の如く、法には各各に自らの力有り。衆生無く、乃至知者見者無く、色等乃至一切種智無きは、已に先に破せり。衆生を破するが故に、作者無く、法を破するが故に、所作無きなり。但凡夫の人は顛倒して覆ふが故に、我に所作有りと云ふ。諸法不可思議とは、色等の一切法は、若し常、若く無常、若し苦、若し樂、若し實、見は空、若し我、若し無我、若し生滅、若し不生滅、若し寂滅、若し不寂滅、若し離、若し不離、若し有、若し無等有りて決定するを得ず。種種門の分別も亦是の如く思議するを得べからず、所以は何ん。是法は皆心中の憶想分別より生じて、亦決定すべからざるが故に。一切法の實性は皆心心數法を過ぎ、名字語言の道を出づること、前品に説くが如し。一切諸法の平等は一切の賢聖も行する能はず、到る能はず、是故に不可思議なり。般若波羅蜜も亦爾なり。是法を觀するが故に生ず。是時、薩陀波崙菩薩は即ち坐上に於て諸の三昧を得。

(一〇二)

問うて曰はく、『薩陀波崙は先に已に諸法の空相を知る、今種種に勤苦し住立すること七歳にして曇無竭を見て、何等の利益を得る。』答へて曰はく、『薩陀波崙は先に諸佛の

【二】常啼が曇無竭よりして得たる利益の義を明す。

諸の三昧を得、般若波羅蜜を貴重して著相を生ずるを見、今曇無竭七歳にして定より起ち、爲に般若を説いて其著相を破するなり。一切の法性は自ら空なり、般若波羅蜜あつて、其をして空ならしむるに非ず。是故に諸法等を説く。故に般若波羅蜜等は諸法の相を離るとなり。乃至諸法は不可思議の故に般若も不可思議なり。餘法を輕賤して般若を貴重せしむるにあらず。何を以ての故に。般若に因るが故に、更に垢著を生ぜしめざるが故なり。般若波羅蜜は畢竟清淨にして、能益する所多しと雖も、復相を取つて著心を生ず可からず。金を煮するが如し。好ましと雖も手に提ふるべからず。薩陀波闍は是教化を得て、般若の中の著心を斷じ、即ち諸法等の諸の三昧を得て句句解脫す。散亂心の中には但智慧のみ有り、三昧と名けず。今師より聞き已つて一心に思惟するを名けて三昧と爲す。心を攝して散ぜざれば智慧にして三昧を成す。風中の燈は能く明に照す能はざるも、靜室に在つて、門を閉づれば明乃ち遍く照すが如し。毫づ已に欲界の心散亂するが故に、智慧の力未だ成就せず、今探心の中に入り、聞く所の諸法を皆三昧と名け、能く諸の煩惱等及び魔人民を破す。水寒けれども風未だ至らざれば未だ成して氷と爲らずして則ち堅用無し、若し凍を成すれば、能く磨む所有るが如し。是の如き等の六百萬の三昧門を得て、薩陀波闍は曇無竭所説の法を聞くを得、諸法の中の大智慧明を得。謂ゆる種種の諸法實際の門は、諸法平等なり、平等は是れ智慧なり、薩陀波闍の禪定の心中に入つて經じて三昧と爲る。今三昧智慧を説かんと欲す。今世後世の果報の故に。

【三】上來所明の常啼の本生譚の如く、今佛にも諸佛にも理等しきことを結釋す。

(三) 爾時、佛須菩提に告げたまはく、我今大衆の中に在つて般若を説くに、是相を以てし、是像貌を以てし、是名字を以て、般若を説くが如く、薩陀波崙は曇無竭よりは三昧を得、三昧の中に於て、十方の佛を見、大衆の中に在つて、般若を説くも亦是の如し。須菩提、薩陀波崙は是より以後、深く法を愛樂するが故に、多く一語の經を集めて廣く誦し、多く聞くこと阿耨の佛の所説を皆亦能く持つが如し。薩陀波崙も亦是の如く、多聞の智慧不可思議にして、大海水の如く、即ち是世に於て常に佛を離れず、是の如き等を名けて今世の果報と爲す。身を捨てて常に有佛の國の中に生じ、好んで念佛三昧を修行するが故に、乃至夢中にも初めて佛を見るを離れず。地獄等の諸難皆已に永く絶し、意に隨つて諸佛の國土に往生す。其深く般若波羅蜜に入りて無量の功徳を集むるが故に業に隨つて生ぜず。薩陀波崙は一佛土に至つて諸佛を供養し、衆生を度脱し、無量の功徳を集む。譬へば、交貴の長者の如く、一會より一會に至つて、乃至今は大智度論の所に在つて淨く梵行を修す。若し般若波羅蜜を求めんと欲する有らば、當に薩陀波崙菩薩の如く、一心に堅く正して傾動す可からず。是故に當に知るべし、般若波羅蜜の因縁の故に、能く一切の功徳を成就す。一切の功徳を成就すとは、諸の菩薩等しく般若を得る者なり。貪欲瞋恚等の在家は罪垢、邪見、戲論等あり、出家は罪垢皆悉く除滅して心清淨なるを得。心清淨なるが故に、一切の功徳を成就するを得。一切種智を得とは、謂ゆる阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。六波羅蜜とは、初地より乃至七地までは無生忍法を得、八地九地十地は是



れ深く佛智慧に入り、一切種智を得て作佛を成就す。一切法に於て自在を得れば、皆應に受持し、乃至華香伎樂すべし。須菩提は、常に空を樂んで行すと雖も、佛と共に般若を説き、又無量三昧を得るが故に囑累すべからず。阿難は聞持陀羅尼を得て、又常に世尊に親近するが故に廣く囑累す。

大智度論釋囑累品第九十

爾時、佛阿難に告げたまはく、『汝が意に於て云何。佛は是れ汝が大師なりや否や、汝は是れ佛弟子なりや否や。』阿難言さく、『世尊、佛は是れ我大師にして、佛伽藍は是れ我大師なり、我は是れ佛弟子なり。』佛言はく、『是の如く是の如し。我は是れ汝の大師にして、汝は是れ我弟子なり。若し弟子として應に作すべき所の者は、汝已に作し竟る。阿難、汝身口意の意慈業を用て供養供給すべし。我亦常に我意の如くして違失有る無けん。阿難、我身は理に在り、汝愛敬し供養供給して心常に清淨なり。我滅度の後は、是一切の愛敬、供養、供給の事は、當に般若波羅蜜を愛敬し供養すべし。乃至第二第三に至つて、般若波羅蜜を以て汝に囑累せん。阿難、汝忘るる莫れ、失ふ莫れ、最後圖種の人と作る莫れ。阿難、爾所の時に般若波羅蜜に隨つて世に有り。當に知るべし、爾所の時、佛世に在つて法を説く有り。阿難、若し般若波羅蜜を書すること有つて、受持し、讀誦し、正憶念し

【四】本品は一經の流通分にして、般若を付嘱し佛子の斯法を尊重護持すべきことを説く、今之を釋するに、先づ付嘱の因縁についで。

て人の爲に廣く説き、恭敬し、尊重し、讚歎し、華香、幡蓋、寶衣、燈燭もて種種に供養せば、當に知るべし、是人は佛を見るを離れず、法を聞くを離れず、常に佛に親近す。佛般若波羅蜜を説き已りたまふに、轉勸等の諸の菩薩摩訶薩、慧命須菩提、舍利弗、大目犍連、摩訶迦葉、富樓那彌多羅那尼子、摩訶俱絺羅、摩訶迦梅延、阿難等、並に一切の大衆、及び一切世間の諸天、提闍婆、阿修羅等、佛の所説を聞いて皆大に歡喜す。

問うて曰はく、佛は是に法愛を離じ、乃ち一切種智に至り、涅槃に著せず、相を取らず、今何を以てか種種の因縁もて是法を囑累し、愛著に似たるが如くなる。答へて曰はく、『諸佛の大慈大悲心は初發意より已來、乃至涅槃門に到るまで常に捨離せず、婆羅雙樹の間に於て、金剛三昧を以て衆生の爲に身を辟きて麻米の如くす。何に況んや經法は饒益する所多くして、而も囑累せざらんや。又阿難は是れ未だ欲を離れざるの人にして、未だ盡く般若波羅蜜の力勢果報の利益する所多きを知らず。是を以て慇懃に汝に囑累す、常に好んで受持して、忘失せしむること無かるべしと。是故に佛は一切法に於て憎愛無く、常寂滅相なりと雖も、而も是般若を囑累す。』問うて曰はく、『阿難は是れ聲聞の人なり、何を以てか般若波羅蜜を以て囑累し、而も轉勸等の大菩薩に囑累せざる。』答へて曰はく、『有人言はく、『阿難は常に佛の左右に侍し、須むる所を供給し、聞持陀羅尼を得て、一たび聞いては常に失はず、既に是れ佛の徒弟なり。又多知多識にして名聞廣く普し、四衆の所依たり、是れ能く佛の轉法輪に隨ふ第三の師なり。佛は舍利弗の壽の短くして、早く滅度

するを知るが故に囑累せず。又阿難は六神通三明共に解脫し、五百の阿羅漢の師、能く是の如く利益する所多し」と。是故に囑累す。彌勒等の諸大菩薩は、佛滅度の後各各分散し、應に度すべき所の衆生の國土に隨つて至る。彌勒は兜率天上に還り、毘摩羅結、文殊師利亦度すべき所の衆生の處に至る。佛は又是諸の菩薩の深く般若波羅蜜力を知るを以て、苦んで囑累するを須めず。阿難は是れ聲聞の人にして小乘法に隨ふ、是故に佛慇懃に囑累す。『問うて曰はく、『若し爾らば法華經及び諸の餘の方等經は、何を以てか喜王、諸の菩薩等に囑累せし。』答へて曰はく、『有人言はく、『是時、佛、甚深難信の法を説くが故に聲聞の人は在らず。又佛は不可思議解脫經を説くが如き、五百の阿羅漢佛邊に在りと雖も而も聞くを得ず、或時は聞くを得れども而も用ふる能はず、是故に諸の菩薩に囑累すと。』問うて曰はく、『更に何の法か甚深にして般若に勝るもの有つて、而も般若を以て阿難に囑累し、餘の經をば菩薩に囑累せし。』答へて曰はく、『般若波羅蜜は祕密の法に非ず、而も法華等の諸經には阿羅漢の受決作佛を説き、大菩薩は能く受持し用ふ。譬へば大藥師の能く毒を以て藥と爲すが如し。復次に、先に説くが如く般若に二種有り。一には共聲聞の説、二には但十方の十地に住する大菩薩の爲に説くものにして、九住の所聞に非ず、何に況んや、新發意の者をや。復九地の所聞、乃至初地の所聞有りて各各不同なり。般若波羅蜜は總相、是れ一にして而も異有り、是故に阿難に囑累するに答無し。』問うて曰はく、『先に阿闍世品の中に囑累を見る。今復囑累すると何等の異りかある。』答へて曰

はく、菩薩道に二種有り、一には般若波羅蜜道、二には方便道なり。先の囑累とは、般若波羅蜜の體を説くことを爲して竟り、今は衆生をして、是般若の方便を得しめんことを説き竟るを以て囑累す。是を以ての故に、阿闍佛後説溫和拘捨羅品を見るに、般若波羅蜜の中に方便有りと雖も、方便の中に般若波羅蜜有りと雖も、而も多に隨つて名を受くと説く。般若と方便とは本體是れ一なり。用ふる所の少しく異なるを以ての故に別に説く。譬へば、金師の巧方便を以ての故に、金を以て種種の異なる物を作るが如し。皆是れ金なりと雖も而も各各名を異にす。菩薩は是般若波羅蜜の相を得るに、謂ゆる一切法性は空無所有にして寂滅の相なり。即ち滅度を欲するも、方便力の故に涅槃の證を取らず。是時具足を作す、「一切法性は空にして涅槃も亦空なり。我今菩薩の功德に於て、未だ具足せざれば證を取るべからず、功德具足して乃ち證を取るべし」と。是時菩薩、方便力を以て菩薩の位に入り、菩薩の位の中に住して甚深微妙の無文字法を知つて衆生を引導す。是を方便と名く。復次に、方便有り、菩薩は一切法は畢竟空にして、性は無所有なりと知つて、而も能く還つて善法を起し、六波羅蜜を行じて空に隨はず。若し能く四種の事、若し疑、若し邪見、若し入涅槃、若し作佛を生ぜば、般若に是の如くの分別有るを以て、若し能く邪疑を除くも涅槃に入らず、是を方便と爲す。有人言はく、「般若波羅蜜は饒益する所多く、大珍寶聚の中に於て最勝なり。佛の滅度の後、多くの怨賊有つて毀壞せんと欲する者を知つて、品を囑累するに猶尚咎無し。何に況んや二處に於てをや。」問うて曰はく、「若し囑累は何

を以て乃ち爾も慇懃鄭重なる。「答へて曰はく、「佛は世俗の法に隨つて衆生を引導する」と、譬へば、估客の主の遠く他國に出でんと欲するに、財寶を以て子に囑累すと雖も、大價妙寶は偏に獨り慇懃にするが如し。其子未だ妙寶の價重きを識らざるを以の故なり。餘人は估客の主の是は寶價を識る人にして、而も慇懃に囑累するを以て必ず其貴きを知る。若し其子、寶價を讀説するを聞けば則ち之を信ぜず。佛も亦是の如し。復次に、若し餘人異衆の中に於て、般若を讀説して人に囑累せば則ち佛を譏らん。自ら法を稱讚するも、疑つて信ぜざれば、自ら弟子の中に於て囑累するに則ち嫌ふこと無し。復有人は言はく、「佛は上品の中に寂滅相、無戲論と説く、是れ一切智なり。是中に決定して法として取るべきもの有る無し、則ち人の以て貴ぶべき所無しと爲す。今慇懃に囑累すれば、則ち佛は空法に著せざる事を知るなり。一切衆生の中、般若を愛念すること佛に過ぎたる者無し。佛は般若の恩深きを知るが故に、是般若を貴重して而も慇懃に囑累す」と。有人言はく、「佛は中道を現げんと欲するが故に囑累す」と。先に諸法の空を説いて、以て有邊を遮し、今は慇懃に囑累して則ち無邊を破す。是れ則ち中道なり。若し人、佛は貪心にして此法に愛著すと謂はば、佛已に種種の因縁を以て般若波羅蜜の空相を説く。若し人、佛は斷滅の中に墮すと謂はば、是故に慇懃に囑累し、是の如くにして則ち二邊を離る。」問うて曰はく、「佛は阿耨是れ弟子なるを知る。何を以ての故に、「阿難、汝は是れ我弟子なるや不や、我は是れ汝が師なるや不や」と問へる。」答へて曰はく、「佛は惡弟子有り、須那利多羅等

なり。少因縁有るが故に弟子と作り、佛の所に於て射法を取らんと欲するも、佛は爲に説きたまはず。是に於て反つて戒めて言はく、「我は佛弟子に非ずや」と。又須尸摩の如きは、法を達まんが爲の故に弟子と作る。是の如き等は是れ名字の弟子なり。又復外道等は謂はく、「阿難は已むを得ずして佛の邊に在り、阿難は曾て外道の弟子と作り、草木を著し神仙を求む。今佛は是れ親族にして尊重なるを以ての故に給侍す」と。是の如き等の事を以ての故に、大衆の中に於て阿難に問ひたまはく、「汝は是れ我弟子なるや不や、若し是れ眞の弟子なりと言はば、當に我勅に隨ふべしと。是故に阿難は、人を信せしめんと欲するが故に重ねて答ふるなり。佛、阿難に告げたまはく、弟子として應に作すべき所の法は汝盡く具足す」と。弟子の法とは謂ゆる善の身口意業を以て師に供給するに、弟子の心に身口業を好んで稱せざる有り、弟子身口業を好んで而も心に稱せざるなり。若し弟子善心を以て、深く師を愛樂し、身口稱稱して身命を惜まず、勤勞を難しとせず、自ら其心を捨て、師の教勅に隨ふなり。阿難は盡く此事を具足す。佛、阿難に告げたまはく、「汝、今現在に我を恭敬せよ、我滅度の後に於て、般若を恭敬すること亦當に是の如くすべし」と。問うて曰はく、「般若は是れ諸佛の師なり、而も阿難は何を以てか其師を恭敬せずして佛を恭敬する。」答へて曰はく、「阿難は初道を得と雖も、漏は未だ盡きざるが故に、深く法の實を知らざること佛の知る所の如し。是故に佛、阿難に告げたまはく、「汝般若を恭敬すること我を恭敬するが如くすべし」と。復次に、衆生は、佛の三十二相八十隨形好、大

光明金色身を見て多く般若波羅蜜の微妙甚深無形無色を愛敬す。智者は能く佛身の相好  
を知り、愚者は之を視て皆厭足無し。是故に佛は身を以て般若に喩ふ。佛は世に在る時能く  
自ら魔を遮す。是故に佛、阿難に告げたまはく、我滅度の後は好んで般若を守護すべし。  
と。問うて曰はく、『一び囑累すれば則ち足る。何を以てか三びに至る。』答へて曰はく、  
『佛は深く般若波羅蜜を愛するが故に、三び囑するなり。』問うて曰はく、『若し深く愛せば  
何んが三びに限らん。』答へて曰はく、諸佛の常の法語は三びに過ぎず。若し三びを過ぎ  
て從はざれば、執金剛神は則ち杵を以て之に擬す。又執金剛神の意は、若し、三びを過ぎ  
て從はざれば、則ち、是れ逆人として、便ち當に之を殺すべし。是故に、佛は問ふこと三  
びに過ぎず。復次に、若し、一び説かば猶緩なり。三びを過ぐれば、太だ急にして凡夫貪  
著の者に似如するを以ての故に。復次に、受者の心に三種有り、鈍根の者は、三びに至つ  
て乃ち善心を生ず。阿難は復利根なりと雖も、心は聲聞に向つて但一身の度を求むるのみ。  
是故に、三び告ぐるなり。囑累する所以は、法を滅せしめざらんが爲の故に、汝當に弟子  
を教化すべし。弟子、復餘人を教へて展轉して相教へん。譬へば、一燈は復餘燈を燃して  
其明轉た多きが如し。最後に、斷種の人となる莫れとは、世の人の、子有つて、若し紹繼  
せざれば、則ち斷種と名く。最も恥づべきと爲す。佛、此喩を以て阿難に告げたまはく、  
汝、汝が身の上に於て般若をして斷絶せしむること莫れと。』問うて曰はく、『先の品中に  
囑すが如く、般若波羅蜜も、亦不増不説、亦不減畢竟寂滅相と説くに、今何を以てか

斷滅せしむること莫れと言ふ。譬へば、虚空の如きは、誰か能く滅する者ぞ。答へて曰はく、「般若波羅蜜は寂滅、無生、無滅の相にして、虚空の如く戲論すべからずと雖も、而も文字語言は、般若波羅蜜の經卷を書し、他人の爲に是を説く。此中の般若は、此因の中に於て而も其果を説く。凡人は、般若波羅蜜は微妙なりと聞いて即ち著心を生じ、般若の相を取つて諸法を分別す。謂ゆる是は善、是は不善、是は世間、是は涅槃等と分別するを以ての故に、是法の中に於て著心を生ず。著心の故に鬪諍し、鬪諍するが故に諸の罪業を起す。是の如きの人を名けて般若波羅蜜を滅すと爲す。佛阿難に告げたまはく、「汝當に般若波羅蜜の相を知るべし、文字語言に著して衆生を教化する莫れ、是を不滅と名く」と。阿難は般若に隨つて世に在ること幾時なるかは、則ち爾許の時か佛の世にあることを知るなり。經の中に廣く説くが如し。佛慇懃に囑累するに、會に在る衆生は疑有り、是故に佛囑累の因縁を説く。謂ゆる般若の世に在る有るは則ち佛在るが爲なり。所以は何ん。般若波羅蜜は是れ諸佛の母にして、諸佛は法を以て師と爲せばなり。法とは、即ち是れ般若波羅蜜なり、若し師在り、母在れば、名けて失利と爲さず。所以は何ん。利は本よりあるが故に、是故に説く。若し般若にして世に在れば佛も亦世に在り。又法寶は佛寶を離れず、菩薩に三十二相八十隨形好有るも名けて佛とは爲さず、法寶を得るが故に名けて佛と爲す。法寶は即ち是れ般若波羅蜜なり。人の佛に従つて利を得、乃至解脫涅槃を得るが如く、若し人般若の中に於て能く信行せば、亦三乗の法を以て而も涅槃に入るを得るが如し。是故



に、般若世に在れば、佛の世に在つて法を説くが如くにして異なること無しと説くなり。阿難、若し人有り、般若を聽受し、及び書し、持つ等のことをなさば、是人は當に佛を見ることを離れず、法を聞いて諸佛に親近すと知るべし。問うて曰はく、「人に重罪有つて、三不善業を成就せんに、般若を聽受し書持すとも、是人云何が當に諸佛を離れず、法を聞いて、佛に親近することを得べきや不や。」答へて曰はく、「是事は先の品中に已に答へたり。謂ゆる聽法の者に二種の人有り、一には但聽いて、而も信受して行ぜず、二には聽いて、而して信受し奉行す。弟子師の語を聽かず、信受して行ぜざるが如きは、是を不聽と名く。若し一心に聽聞し、信受奉行するを以て、世を厭ひて涅槃を愛し、小乘を離れて大乘を樂ふ、是の如く聽受することを爲す、是を眞聽と名く。讀誦も亦是の如く、正しく憶念すれば、隨つて佛の意の如く、有無の二邊を離れて中道を行じ、聞く所の如く受持し、及び其義を解し、他人の爲に解説し、恭敬尊重し、華香等もて供養し讚歎し、初始の微薄より乃至正憶念まで他人の爲に説くに於ては、其心轉た厚く功德轉た多く、牢固として動ぜず。若し師の教を聞き、若し經卷を見て華香等もて供養す。若し智者にして、般若の功德を知つて供養する者は福德重く、知らざる者は供養の福德微薄なり。福德純厚の者は、身を轉ずるも佛を見ることを離れず、法を聞いて諸佛に親近す。福德微薄の者は、身を轉ずるも三輪報を得と言はず、衆罪を償ひ已つて、久しうして後は亦必ず當に佛を得べし。此中に佛總じて説きたまはく、一福德の純厚微薄も共に漸漸に皆十方の佛を見、佛の所説を

【五】次に在會大衆の歡喜を明せるについて釋す。

【六】最後に三藏の結集の際に本經の所述なかりし所以を釋す。

聞いて、漸漸に六波羅蜜を具して皆作佛を得べし」と。佛、佛眼を以て見たまふに、般若には是の如く、大に衆生を利益するもの有るが故に、慇懃に囑累するなり。」

問うて曰はく「是諸の大阿羅漢は已に實際を證して復憂喜無し、小喜すら尙無し、何に況んや大歡喜をや。」答へて曰はく、「諸の大阿羅漢は三界の欲を離ると雖も、未だ一切智慧を得ざるが故に、諸の甚深の法の中に於て、猶疑つて了ぜず。是摩訶般若波羅蜜の中に、了了に解説して其疑を斷除す、是故に大に歡喜するなり。復次に、此諸大弟子は已に實際を得。實際とは即ち是れ空、無相、無量にして分別する所無し。佛は此寂滅の法を以て種種に名字、語言、譬喩を分別して廣く説きたまふに亦法性を壞せず、又世間と相違せず。諸の大阿羅漢は是法の中に於て證るが故に大に歡喜す。佛善く是空、無相、無量、寂滅の法を説きたまふに、諸餘の大衆未だ悉く漏盡せざるも、信力深きが故に亦大に歡喜して言はく、「此法は能く我等の生死の苦を盡して佛道を得しむ」と。是の如き等の無量の因縁の故に大衆皆歡喜す。」

問うて曰はく、「若し佛、阿難に是般若波羅蜜を囑累せば、佛涅槃の後、阿難は大迦葉と共に三藏を結集するに、是中に何を以て説かざる。」答へて曰はく、「摩訶衍は甚深にして信じ難く、解し難く、行し難し。佛の世に在す時すら諸の比丘有つて摩訶衍を聞くに、信ぜず解せざるが故に坐より去る、何に況んや佛の涅槃ののち。是を以ての故に説かざるなり。復次に、三藏に正しく三十萬の偈有り、併せて九百六十萬言と爲す。摩訶衍は甚

だ多くして、量ること無く限り無し。此中、般若波羅蜜の如きは二萬二千の偈有り、大般若品には十萬の偈有り。諸の龍王、阿修羅王諸天の宮中には千億萬の偈等有り。所以は何ん。此諸天龍神は壽命長久にして識念の力強きが故に。今此世の人は壽命短促、識念の力薄小にして般若波羅蜜をすら、尚讀む能はず、何に況んや多くの者をや。餘者の大菩薩の知る所の般若波羅蜜は量ること無く限り無し。何を以ての故に。佛は但一身の所説に非ず。無量の世の中に或は變じて無數の身を化作するが故に、是故に所説無量なり。又不可思議解脫經には十萬の偈有り。諸佛本起經、寶雲經、大雲經、法雲經には各十萬の偈あり。法華經、華手經、大悲經、方便經、龍王問經、阿修羅王問經等の諸の大經は無量無邊にして大海中の寶の如し、云何が三藏の中に入るべき。小物は塵に大の中に在るべし、大物は小に入ることを得ず。若し問はんと欲せば應に言ふべし、「小乗は何を以てか摩訶衍の中に在らざる」と、摩訶衍は能く小乗の法を兼ねるが故に、是故に汝が問ふ所の如くなるべからず。復次に、有人言はく、「摩訶海草の如きは、諸の比丘を將ゐて、耆闍崛山の中に在つて三藏を集め、佛滅度の後は、文殊利、彌勒の諸大菩薩と亦阿難とを將ゐて是摩訶衍を集む。又阿難は籌量して、衆生の志業の大小を知るが故に、是故に聲聞人の中に於ては摩訶衍を説かず、唯けは則ち錯雜して感ずる所無し。佛法は皆是れ一種一味なり。謂ゆる、苦は盡く解脫味なり。此解脫味に二種有り、一には但自ら身の爲にし、二には兼て一切衆生の爲にす。俱に一解脫門を求むと雖も、而も自ら利すと人を利すととの異あり。

是故に大小乗の差別有り。是二種の人の爲の故に、佛口の説く所の文字語言を以て分つて  
 二種と爲す。三藏は是れ聲聞の法、摩訶衍は是れ大乘の法なり。復次に、佛世に在す時は、  
 三藏の名有ること無く、但修多羅を持つ比丘、毘尼を持つ比丘、摩多羅迦を持つ比丘有り。  
 修多羅とは、是れ四阿舍の中の經の名、摩訶衍の中の經の名なり。修多羅に二分有り、一  
 には四阿舍の中の修多羅、二には摩訶衍の經にして名けて大修多羅と爲す。二分に入るれ  
 ば亦は大乘亦は小乗なり、二百五十戒、是の如き等を名けて修多羅と爲す。毘尼とは比丘  
 の罪を作すに名く、佛の戒を結んで應に行すべく、是は應に行すべからず、是事を作さば  
 是罪を得と。略して説くに八十部有りて亦二分有り。一には摩倫羅國の毘尼は、阿波陀那  
 を含んで本生に八十部有り、二には罽賓國の毘尼は、本生に阿波陀那を除却し、但要を取  
 つて用て十部と作し、八十部有る毘婆沙を解釋す。是故に摩訶般若波羅蜜經等は修多羅經  
 の中に在ることを知るも、經の大事異なるを以ての故に別説す。是故に三藏を集むる中には  
 在らず。

中

論

第	論
八	律
卷	部



# 中論序

釋僧叡序

中論は五百偈有り、龍樹菩薩の造る所なり。中を以て名と爲すは、其實を照すなり。論を以て稱と爲すは、其言を盡すなり。實は名に非ざれば悟れず。故に中に寄せて以て之を宜ぶ。言は釋に非ざれば盡さず。故に論を假りて以て之を明す。其實既に宜べ、其言既に明なれば、菩薩の行道場の照に於て朗然として懸解す。夫れ滯惑は倒見より生じ、三界之を以て淪溺し、偏情は厭智より起り、耿介之を以て乖を致す。故に知んぬ。大覺は曠照に在り、小智は隘心に纏ふを。之を照すこと曠からずんば、則ち以て有無を夷げ、道俗を一にするに足らず、之を知つて盡さざれば、則ち未だ以て中途に涉り二際を混すべからず。道俗の夷ならざる、二際の混ざるは菩薩の憂なり。是を以て龍樹大士之を折うるに中道を以てし、惑趣の徒をして玄指を望んで一變せしめ、之を括るに卽化を以てし、玄悟の實をして證詢を朝徹に喪はしむ。蕩蕩焉たり。眞に夷路を冲階に叩げ、玄門を宇内に蔽ひ、惠風を陳收に扇ぎ、甘露を枯悴に流す者と謂ふべし。夫れ百擗の構興るときは則ち茅茨の仄曠なるを歸しむ。斯論の宏曠なるを視るときは則ち偏悟の鄙倍なるを知る。幸なる哉此區の赤縣、忽に靈鷲を移し、以て鏡と作すを得、險峻の邊情乃ち流光の

餘惠を蒙る。而今而後、談道の質始めて與に實を論ずべし。云はく、天竺の諸國敢て學者に預るの流、斯論を翫味して以て啖衿と爲さざるは無く、其翰を染め釋を申ぶる者甚だ亦少からず。今出す所は是れ天竺の梵志賓伽羅と名け、秦には青目と言ふの所釋なり。其人深法を信解すと雖も、而も解は雅中ならず。其中、乖闕煩重なるものは、法師皆裁つて之を裨ひ、經に於て之を通じて理盡く、文或は左右未だ善を盡さず、百論は外を治め以て邪を闡め、斯文は肉を祛いて以て滯を流す。大智釋論の淵博なる、十二門觀の精詣なる、斯四を尋ぬれば、眞に日月懷に入りて朗然として墜徹ならざる無きが若し、予之を翫し之を味ひて手を釋つ能はず。遂に復其鄙拙を忘れて悟懷を一序に託す。并に目品の義之を首に題す。豈能く釋するを期せんや。蓋し是れ自同を欣ぶの懷のみ。



中

論 卷第一

中論觀因緣品第一

龍樹菩薩造  
梵志青目釋  
姚秦三藏鳩摩羅什譯

【觀因緣品】正  
緣の不生不滅乃至  
不來不去なること  
を觀するもの、此  
正因緣これ中道な  
りといふを明す。  
【一】先づ歸敬序  
に於て八不を牒し  
て遺論の意を明す  
八不を牒するは、  
一切有所得の心を  
洗淨せんが爲なり  
【答へて等】中  
に二、先づ佛出世し  
て經を説けるを序  
す。  
【萬物は等】下  
に明す八計の中、大  
自在天の説は濕婆  
派の説、韋紐天は

(一) 不生亦不滅、不常亦不斷

一亦不異、不來亦不出

善く是因緣を説き、善く諸の戲論を滅す

我稽首し禮す、佛を諸説中第一と

問うて曰はく、「何が故に此論を造るや」答へて曰はく、「有人言はく、「萬物は自在  
天より生ず」と。有が言はく、「韋紐天より生ず」と。有が言はく、「和合より生ず」と。有  
が言はく、「時より生ず」と。有が言はく、「世性より生ず」と。有が言はく、「變より生  
ず」と。有が言はく、「自然より生ず」と。有が言はく、「微塵より生ず」と。是の如き等の  
謬有るが故に、無因、邪因、斷常等の邪見に墮し、種種に我、我所を説き正法を知らず、

韋紐派の説、和合は父母の和合して衆生を生ずるが如き説、時は時によつて萬象の生成變化ありとするもの世性とは一切は世間を本とすといふ數論派の説、變とは變化によつて萬物は形成せらるるといふもの、自然微塵も亦然り

【佛滅度の後等】次に龍樹出世して本論を造るの意を明す

【二】已上にて序を竟り本論に入る先づ第二に重なる八不を擧して廣釋す

【此二偈を等】八不を釋するに、先づ青目の釋、中初に二偈の解釋

佛は是の如き等の諸の邪見を斷じ、佛法を知らしめんと欲するが故に、先づ聲聞法の中に於て十二因縁を説き、又已に習行して大心有り深法を受くるに堪ふる者の爲に大乘法を以て因縁の相、謂ゆる一切法、不生、不滅、不一、不異等、畢竟空無所有なるを説きたまへり。般若波羅蜜の中に「佛須菩提に告げたまはく、菩薩道場に坐する時、十二因縁を觀ずること虚空の盡すべからざるが如し」と説くが如し。佛滅度の後、後五百歳の像法中には人根轉鈍にして、深く諸法に著し、十二因縁、五陰、十二入、十八界等の決定相を求め、佛意を知らずして但文字のみに著し、大乘法中畢竟空を説くを聞いて、何の因縁の故に空なるやを知らずして、即ち疑見を生じ、若し都て畢竟空ならば云何が罪福報應等有るを分別せんやと。是の如くんば則ち世諦、第一義諦無し、是空相を取りて貪著を起し、畢竟空中に於て種種の過を生ず。龍樹菩薩、是等の爲の故に此中論を造る。』

(二) 不生亦不滅、不常亦不斷、不一亦不異、不來亦不出

能く是因縁を説き、善く諸の戲論を滅す

我佛首し禮す、佛を諸說中の第一と

此二偈を以て佛を讚じ、則ち已に略して第一義を説く。

問うて曰はく、諸法は無量なり、何が故に但此八事のみを以て破する。答へて曰はく、法無量なりと雖も、略して八事を説けば則ち總じて一切法を破すること爲る。不生と

【不生とは等】第一 一偈を釋す。先づ不生不滅を明す。【因果一等】僧法人所說、因果異は衛世師所說、因中先有果は前者と、因中先無果が後者と同じき說。【問うて等】第二 次に不常不斷を釋す。

【有人等】第三次 不一不異を釋す。

【有人等】不來不去を明す。

【復次に等】第二 周に入不を釋す。

は、諸の論師種種に生相を説く。或は謂く、因果一なりと。或は曰はく、因果異なりと。或は謂く、因中先に果有りと。或は謂く、因中先に果無しと。或は謂く、自體より生ずと。或は謂く、他より生ずと。或は謂く、共より生ずと。或は謂く、有生と。或は謂く、無生と。是の如き等は、生相を説くこと皆然らず。此事後に當に廣く説くべし。生相決定して不可得なるが故に不生なり。不滅とは、若し生無くんば何んが滅有るを得ん。生無く滅無きを以ての故に餘の六事亦無し。問うて曰はく、『不生不滅は已に總じて一切法を破す。何が故に復六事を説く。』答へて曰はく、『不生不滅の義を成ぜんが爲の故なり。有人は不生不滅を受けずして不常不斷を信ず。若し深く不常不斷を求めば、即ち是れ不生不滅なり。何を以ての故に。法若し實に有ならば應に無なるべからず。先に有りて今無きを是れ即ち斷と爲す。若し先にも有性ならば是れ則ち常と爲す。是故に不常不斷を説いて即ち不生不滅の義に入らしむ。有人、四種に諸法を破するを聞くと雖も、猶四門を以て、諸法を成ぜんも是れ亦然らず。若し一ならば則ち縁無し。若し異ならば則ち相續無けん。後に當に種種に破すべし。是故に、復不一不異を説く。有人、六種に諸法を破するを聞くと雖も、猶來出を以て諸法を成ぜん。來とは諸法の自在天、世性、微塵等より來るを言ふ。出とは還り去りて本處に至るなり。復次に、萬物生無し。何を以ての故に。世間現見の故に、世間眼見に劫初殺生せず。何を以ての故に、劫初の殺を離れて今の殺得べからず。若し劫初の殺を離れて今の殺有らば則ち應に生有るべし。而も實には爾らず。是故に不生なり。問う

て曰はく、『若し不生ならば則ち應に滅なるべし。』答へて曰はく、『不滅なり。何を以ての故に。世間現見の故に。世間現見に劫初穀滅せず。若し滅せば今の穀有るべからず。而も實には穀有り。是故に不滅なり。』問うて曰はく、『若し不滅ならば則ち應に常なるべし。』答へて曰はく、『不常なり。何を以ての故に。世間現見の故に。世間現見に萬物常ならず、穀芽の時は種は則ち變壞するが如し。是故に常ならず。』問うて曰はく、『若し常ならずば則ち應に斷なるべし。』答へて曰はく、『不斷なり。何を以ての故に。世間現見の故に、世間現見に萬物斷ならず。穀より芽有るが如し。是故に斷ならず。若し斷ならば相續すべからず。』問うて曰はく、『若し斷らば萬物はれ一なるべし。』答へて曰はく、『不一なり。何を以ての故に。世間現見の故に。世間現見に萬物一ならず。穀は芽と作らず、芽は穀と作らざるが如し。若し穀は芽と作り、芽は穀と作らば、應に是れ一なるべし。而も實には斷らず。是故に一ならず。』問うて曰はく、『若し一ならずんば則ち應に異なるべし。』答へて曰はく、『不異なり。何を以ての故に。世間現見の故に。世間現見に萬物異ならず。若し異ならば、何んが穀芽と穀莖と穀葉とを分別せん。樹芽と樹莖と樹葉とを説かず。是故に異なるはず。』問うて曰はく、『若し異なるはずんば應に來有るべし。』答へて曰はく、『無來なり。何を以ての故に。世間現見の故に。世間現見に萬物來ならず、穀子の中の芽は從來する所無きが如し。若し來ならば芽は餘處より來るべし。鳥の來つて樹に栖むが如し。而も實には爾らず。是故に來ならず。』問うて曰はく、『若し來ならずんば應に出有るべし。』

【三】次に論主の自ら入不を釋す。先づ兩偈に四門を擧げて無生を釋す

答へて曰はく、『不出なり。何を以ての故に。世間現見の故に。世間現見に萬物出ならず。若し出有らば、芽の穀より出づるを見るべし。蛇の穴より出づるが如し、而も實には兩らず。是故に出ならず。』

問うて曰はく、『汝不生不滅の義を釋すと雖も、我造論者の所説を聞かんと欲す。』答へて曰はく、

諸法は自より生ぜず、亦他より生ぜず

共よりならず無因ならず、是故に無生なりと知る

自より生ぜずとは、萬物は自體より生ずる有ること無く、必ず衆因を待つ。復次に、若し自體より生ぜば、則ち一法に二體有り、一には謂く、生、二には謂く、生ずる者と云なり。若し餘因を離れて自體より生ぜば、則ち無因無縁なり。又生更に生有らば生は則ち無窮なり。自無なるが故に他も亦無なり。何を以ての故に。自有るが故に他有ればなり。若し自より生ぜず、亦他より生ぜずんば共生は則ち二過有り、自生と他生との故に、若し無因にして萬物有りといはば、是れ則ち常と爲す。是事然らず。因無くんば則ち果無し。若し因無くして果有らば、布施、持戒等も地獄に墮すべく、十惡五逆も應に當に天に生ずべし。因無きを以ての故に。復次に、

諸法の自性の如きは、縁の中に在らず  
自性無きを以ての故に、他性も亦復無し

【問うて等】二に外人の四縁を擧げて救するを明す。

諸法の自性は衆縁の中に在らず。但衆縁和合するが故に名字を得。自性は即ち是れ自體なり。衆縁中に自性無し。自性無きが故に自より生ぜず。自性無きが故に他性も亦無し。何を以ての故に、自性に因りて他性有り。他性は他に於て亦是れ自性なり。若し自性を破せば即ち他性を破するなり。是故に他性より生ずべからず。若し自性他性を破せば即ち共の義を破するなり。無因は則ち大過有り。有因すら尙破すべし、何に況んや無因をや。四句の中に於て生不可得なり。是故に不生なり。

問うて曰はく、「阿毘曇人の言はく、「諸法は四縁より生ず」と。云何が不生と言はん。何をか四縁と謂ふ。

因縁、次第縁、縁縁、増上縁の

四縁諸法を生ず、更に第五縁無し

一切有ゆる縁は皆四縁に攝在す。是四縁を以て萬物生ずるを得。因縁は一切有爲の法に名く。次第縁は過去現在の阿羅漢最後の心心數の法を除いて、餘の過去現在の心心數の法なり。縁縁、増上縁は一切法なり。」

答へて曰はく、

果は縁より生ずと爲すや、非縁より生ずと爲すや

是縁、果有りと爲すや、是縁、果無しと爲すや

若し果有りと謂はば、是果は縁より生ずと爲すや、非縁より生ずと爲すや。若し縁有り

【果は縁より等】二に因縁生を破して無生の義を明す此づ從じて因縁を破す。

と謂はば、是縁は有果と爲すや、無果と爲すや。二俱に然らず。何を以ての故に。

是法に因りて果を生ず、是法を名けて縁と爲す

若し是果未だ生ぜざるとき、何んが非縁と名けざらん

諸縁は決定無なりと。何を以ての故に。若し果未だ生ぜざれば、是時名けて縁と爲さず。但眼見に縁より果を生ずるが故に之を名けて縁と爲す。縁の成するは果に由る、果は後、縁は先なるを以ての故に、若し未だ果有らざらんば何を名けて縁と爲すを得ん。瓶の如きは水土和合するを以ての故に瓶の生ずる有り、瓶を見るが故に水土等は是れ瓶の縁なりと知るなり。若し瓶未だ生ぜざるとき、何を以てか水土等を名けて非縁と爲さざらん。是故に果は縁より生ぜず。縁よりすら尙生ぜず。何に況んや非縁よりをや。復次に、

果先に縁中に於て、有と無なること俱に不可なり

先に無ならば誰が爲の縁ならん、先に有ならば何んが縁を用ひん

縁の中に先に果有るに非ず。果無きに非ず、若し先に果有らば名けて縁と爲さず。果先に有るが故に、若し先に果無くも亦名けて縁と爲さず。餘物を生ぜざるが故に。問うて曰はく、『已に總じて等』  
四縁を各別に破す  
てははく、

若し果有にして生ずるに非ず、亦復無にして生ずるに非ず

亦有無にして生ずるに非ずんば、何んが縁有りと云ふを得ん

【次第縁は等】次に次第縁を破す。

若し縁能く果を生ずとせば應に三種有るべし、若し有、若し無、若し有無なり。先の偈の中に説くが如く、縁の中に若し先に果有らば、應に生と言ふべからず、先に有るを以ての故に。若し先に果無くも應に生と言ふべからず。先に無きを以ての故に。亦應に非縁と同じかるべきが故に。有無も亦生ぜずとは、有無を名けて半有半無と爲す。二俱に過有り。又有と無とは相違し無と有とは相違す。何んが一法にして二相有るを得ん。是の如く三種に果の生相を求むるに不可得なるが故に、云何が因縁有りと言はん。次第縁は、

果若し未だ生ぜざる時は、則ち滅有るべからず  
滅法何んが能く縁たらん。故に次第縁無し

諸の心心數法は三世の中に於て次第に生ず。現在の心心數の法滅して未來の心の爲に次第縁と作る。未來の法未だ生ぜずんば誰が爲に次第縁と作らん。若し未來の法已に有らば即ち是れ生ぜるなり。何んが次第縁を用ひん。現在の心心數法は住する時有る無し。若し住せずんば何んが能く次第縁と爲らん。若し住有らば則ち有爲法に非ず。何を以ての故に。一切の有爲法は常に滅相有るが故に。若し滅し已らば即ち能く與に次第縁と作る能はず。若し滅法猶有りと言はば即ち是れ常なり。若し常ならば即ち罪福等無けん。若し滅時に能く與に次第縁と作るといはば、滅時は半滅半未滅なり。更に第三法の名けて滅時と爲すべき無し。又佛説きたまはく、「一切の有爲法は念念に滅して一念時も住する無し」と。云何が現在の法に欲滅、未欲滅有りと言はん。汝一念の中に是欲滅、未欲滅無しと謂は



【緣縁は等】次に緣縁を破す。

【増上縁は等】次に増上縁を破す。

【復次に等】下四縁を破するを結す

ば、則ち自の法を破らん。汝の阿毘曇に説かく、「滅法有り、不滅法有り、欲滅法有り、不欲滅法有り」と。欲滅法とは現在の法將に滅せんと欲するをいふ。不欲滅法とは現在の將に滅せんと欲する法を除いて、餘の現在の法及び過去未來の無爲法、是を不欲滅法と名く。是故に次第縁無し、緣縁は、

諸佛の所説の如きは、眞實微妙の法なり

此無縁の法に於て、云何が緣縁有らん

佛大乘の諸法を説いて、「若は有色、無色、有形、無形、有漏、無漏、有爲、無爲等の諸法の相は法性に入りて一切皆空にして無相無縁なり。譬へば衆流の海に入りて同じく一味と爲るが如し」といふ。實法は信すべし、隨宜の所説は實と爲すべからず。是故に緣縁無し。増上縁は、

諸法は自性無し、故に有の相有る無し

是事有るが故に、是事有りと説くは然らず

經に十二因縁を説いて、是事有るが故に是事有りと、此れ則ち然らず。何を以ての故に。諸法は衆縁より生ずるが故に自ら定性無し。自ら定性無きが故に有の相有る無し。有の相無きが故に、何んが是事有るが故に是事有りと言ふを得ん。是故に増上縁無し。佛は凡夫の有無を分別するに隨ふが故に説きたまふのみ。

復次に、

略廣因縁の中に、果を求むるに不可得なり

因縁の中に若し無くんば、云何が縁より出でん

略とは和合因縁中に果無きなり。廣とは一一の縁中に於ても亦果無きなり。若し略廣

の因縁の中に果無くんば、云何が果が因縁より出づと言はんや。復次に、

若し縁に果無くして、而も縁の中より出づと謂はば

是果何んが、非縁の中よりも出でざる

若し因縁の中に果を求むるも不可得ならば、何が故に非縁より出でざる。泥の中に瓶無

きが如くんば、何故に乳の中よりも出でざる。復次に、

若し果縁より生ずるも、是縁自性無し

無自性より生ぜば、何んが縁より生ずるを得ん

果は縁より生ぜず、非縁よりも生ぜず

果有る無きを以ての故に、縁非縁も亦無し

果は衆縁より生ずるも是縁自性無し。若し無自性ならば則ち法無し、無法何んが能く生

ぜん。是故に果は縁より生ぜず。非縁よりも生ぜずとは、縁を破するが故に非縁を説くも、

實に非縁の法は無なり。是故に非縁よりも生ぜず。若し二より生ぜずんば、是れ則ち果無

きなり。果無きが故に縁非縁も亦無し。

中論觀去來品第一

【觀去來品】去來を過現未の三時に配してこの三時に去來無きことを證して以て生滅の不可得を悟らしめ、衆生をして實相に入り、正觀を發生して諸の煩惱を滅せしむるにあり。【一】先づ略して去來を破す。初めに法の去といふを

問うて曰はく、『世間眼見に三時に作有り、已去と未去と去時となり。作有るを以ての故に、當に知るべし、諸法有り。』答へて曰はく、

已去は去有る無し、未去にも亦去無し

已去未去を離れて、去時にも亦去無し

已去に去有る無し、已去の故に。若し去を離れて去業有らば是事然らず。未去にも亦去無し。未だ去法有らざるが故に。去時とは半去半未去に名く。已去未去を離れざるが故

に。問うて曰はく、

動のある處に則ち去有り、此中に去時有り

已去未去には非ず、是故に去時に去有り

作業有る處に隨つて、是中に去有るべし。眼見に去時の中に作業有り、已去の中には作業已に滅す。未去の中には未だ作業有らず。是故に當に知るべし、去時に去有りと。答へ

て曰はく、

云何が去時に於て、當に去法有るべき

若し去法を離るれば、去時は不可得なればなり

去時に去法有らば是事然らず。何を以ての故に。去法を離れては去時不可得なればなり。  
 若し去法を離るるも去時有らば、應に去時の中にも去有ること、器の中に果有るが如くな  
 るべし。復次に、

若し去時に去有りと言はば、是人則ち咎有り

去を離れて去時有らば、去時獨り去なるが故に

若し已去、未去の中に去無く、去時に實に去有りと謂はば、是人則ち咎有り。若し去法  
 を離れて去時有らば、則ち相因待せず。何を以ての故に。若し去時に去有りと説かば是れ  
 則ち二と爲す。而も實に爾らず。是故に去を離れて去時有りと云ふを得ず。復次に、

若し去時に去有らば、則ち二種の去有り

一には謂く去時と爲す、二には謂く去時の去なり

若し去時に去有りと謂はば、是れ則ち過有り。謂ゆる二去有ればなり。一には去に因つ  
 て去時有り、二には去時の中に去有り。問うて曰はく、『若し二去有らば何の咎有る。』答  
 へて曰はく、

若し二の去法有らば、則ち二去者有らん

去者を離るれば、去法不可得なればなり

若し二去法有らば則ち二去者有らん。何を以ての故に。去法に因りて去者有るが故に、  
 一人に二去二去者有り。此れ則ち然らず。是故に去時に亦去無し。』

【去者を離れて等】次に去人を破す。

問うて曰はく、『去者を離れて去法無きは爾るべし、今三時の中に定んで去者有らん。』  
答へて曰はく、

若し去者を離るれば、去法不可得なり

去法無きを以ての故に、何んが去者有るを得ん

若し去者を離れては則ち去法不可得なり。今云何が無去法の中に於て三時に定んで去者

有りと言はん。復次に、

去者は則ち去せず、不去者も亦去せず

去と不去者とを離るれば、第三の去者無し

去者有る無し。何を以ての故に。若し去者有らば則ち二種有り。若は去者と、若は不去

者となり。若し是二を離るれば第三の去者無し。』問うて曰はく、『若し去者去せば何の答

か有らん。』答へて曰はく、

若し去者去すと言はば、云何が此義有らん

若し去法を離るれば、去者不可得なり

若し定んで去者は去法を用ふる有りと謂はば、是事然らず。何を以ての故に、去法を離

るれば去者不可得なるが故に、若し去者を離れて定んで去法有らば、則ち去者能く去法を

用ひん。而も實には爾らず。復次に、

若し去者に去有らば、則ち二種の去有り

【復次に等】次に三時に配して初發を破す。

一には謂く去者の去、二には謂く去法の去なり  
若し去者去法を用ふと言はば、則ち二過有り。一去者中に於て而も二去有り。一には去法を以て去者を成じ、二には去者を以て去法を成す。去者成じ已りて然して後に去法を用ふといはば、是事然らず。是故に三時の中に定んで去者去法を用ふる有りと謂ふも、是事然らず。復次に、

若し去者去すと謂はば、是人則ち咎有り

去を離れて去者有り、去者に去有りと言はばなり

若し人去者能く去法を用ふと説かば、是人則ち咎有り、去法を離れて去者有ればなり。

何を以ての故に。去者、去法を用ふと説かば、是れ先に去者有りて、後に去法有りて爲す

なり。是事然らず。是故に三時の中に去者有る無し。

復次に、若し快定して去有り、去者有らば、應に初發有るべし。而して三時の中に於て

發を求むるに不可得なり。何を以ての故に。

已去中にも發無し、未去中にも發無し

去時中にも發無し、何の處にか當に發有るべき

何を以ての故に三時の中に發無き。

未だ發せずんば去事無く、亦已去も有る無し

是二に應に發有るべきなり、未去に何んが發有らん

【若し去無く等】  
四に三時に配して  
住を破す。

去無く未去無く、亦復去時も無し  
一切發有る無きに、何が故に而も分別せず  
若し人未だ發せずんば則ち去時無く、亦已去も無し。若し發有らば當に二處に在るべし。  
去時と已去との中なり。二俱に然らず、未去の時には、未だ發有らざるが故に、未去の中に  
何んが發有らん。發無きが故に去無し、去無きが故に去者無し。何んが已去と未去と去  
時と有るを得ん。

問うて曰はく、『若し去無く去者無くとも、應に住と住者と有るべし。』答へて曰はく、

去者は則ち住せず、不去者も住せず

去と不去者を離れて、何んが第三の住有らん

若し住有り住者有らば、應に去者の住、若は不去者の住なるべし。若し此二を離れて應  
に第三の住有るべきことは事然らず。去者は住せず、去未だ息まざるが故に。去と相違す  
るを名けて住と爲す。不去者も亦住せず。何を以ての故に。去法の滅するに因るが故に住  
有り、去無ければ則ち住無し。去者、不去者を離るれば更に第三の住なる者無し。若し第  
三の住なる者有らば、即ち去者、不去者の中に在り、是を以ての故に去者住すと言ふべか  
らず。復次に、

去者若し當に住すべくんば、云何が此義有らん

若し當に去を離るべくば、去者は不可得なり

【行止】 行とは生死流轉の相續をいひ、涅槃に生死の流動滅するを止といふ。

【二】 上來略破を已り、下廣く去來を破す。中に三、今年一に異門を以て去と去者とを相對せしめて破す

汝去者住すと謂はば、是事然らず。何を以ての故に。去法を離るれば去者不可得なり。若し去者は去相在らば、云何が當に住在るべき。去と住とは相違するが故に。復次に、

去未去に住無し、去時にも亦住無し

有ゆる行止の法、皆去の義に同じ

若し去者住すと謂はば、是人は既に去時、已去、未去の中に在りて住すべし。三處に皆住無し、是故に汝去者、住有りと言ふは是れ則ち然らず。去法、住法を破するが如く、行止も亦是の如し。行は穀子より相續して芽、莖、葉等に至るが如し。止は穀子滅するが故に、芽、莖、葉、滅するがごとし。相續の故に行と名け、斷の故に止と名く。又無明は諸行乃至老死に縁となる、是を行と名け、無明滅するが故に諸行等滅するを是を止と名くるが如し。

問うて曰はく、『汝種種の門にて去と去者と住と住者とを破すと雖も、而れども、眠見にては去と住と有り。』答へて曰はく、『肉眼の所見は信すべからず、若し實に去と去者と有らば、一法を以て成すと爲んや、二法を以て成すと爲んや。二俱に過有り。何を以ての故に。』

去法は去者に即せば、是事則ち然らず

去法は去者に異なるも、是事亦然らず

若し去法、去者一ならば、是れ則ち然らず。異なるも亦然らず。』



問うて曰はく、『一と異とに何の過有りや。』答へて曰はく、

若し去法に於て、即ち是れ去者爲りと謂はば

作者及び作業、是事則ち一爲るべし

若し去法に於て、去者に異なる有りと謂はば

去者を離れて去有り、去を離れて去者有らん

是の如くの二俱に過有り。何を以ての故に。若し去法即ち是れ去者ならば、是れ則ち錯

亂して因縁を破す。去に因りて去者有り、去者に因りて去有り。又去を名けて法と爲す、

去者を名けて人と爲す。人は常、法は無常なり。若し一ならば、則ち二俱に常なるべきか、

二俱に無常なるべきかなり。一の中には是の如き等の過有り。若し異ならば則ち相違す。

未だ去法有らざるに、應に去者有るべく、未だ去者有らざるに、應に去法有るべし。相因

得せずして一法滅すとも一法在るべし。異の中にも是の如き等の過有り。復次に、

去と去者との是二に、若し一か異かの法を成ぜんとするに

二門俱に成ぜず、云何が當に成ずる有るべけん

若し去者と去法と、若は一法を以て成じ、若し異法を以て成せんとする有らんに二俱に

得べからず。先に已に第三法の成ずる無きを説けり。若し成ずる有りと謂はば、應に説く

べし、因縁に去無く去者無しと。

今當に更に説くべし。

【今當に更に等】  
第二に因縁門もて  
破す。

去に因りて去者を知るに、是去を用ふる能はず

先に去法有る無し、故に去者の去無し

何の法に隨以つて去者を知るとも、是去者は是去法を用ふる能はず。何を以ての故に。

是去法の未だ有らざる時は去者有る無く、亦去時は已去、未去も無し、先に人有り城邑有りて、所起有るを得るが如し。去法と去者とは則ち然らず。去者は去法に因りて成じ、去法は去者に因りて成ずるが故に。復次に、

去に因りて去者を知るに、異の去を用ふる能はず

一の去者中に於て、二去を得ざるが故に

何の去法に隨以つて去者を知るとも、是去者は異の去法を用ふる能はず。何を以ての故に。一の去者中に二の去法を得べからざるが故に。

復次に、

決定して去者有るも、三去を用ふる能はず

不決定の去者も、亦三去を用ひず

去法定なるも、不法なるも去者二を用ひず

是故に去と去者と、所去處とは皆無なり

決定とは、本實有に名く。去法に因りて生ぜしにあらず。去法は身動に名く。三種は未去、已去、去時に名く。若し決定して去者有らば、去法を離れて去者有るべく、住するこ

【決定して去者等】  
第三に定不定門も  
て去と去者とを破  
す。

と有るべからず。是故に説く、「決定して去者有るも三去を用ふる能はず」と。若し去者不決定ならば、不決定は本實無に名く。去法に因りて去者と名くるを得るを以て、去法無きを以ての故に、三去を用ふる能はず。去法に因るが故に去者有らば、若し先に去法無くんば則ち去者無けん。云何が不決定の去者にして三去を用ふと言はんや。去者の如く去法も亦是の如し。若し先に去者を離れて決定して去法有らば、則ち去者に因りて去法有るにあらず。是故に去者は三去の法を用ふる能はず。若し決定して去法無くんば、去者何の用ふる所なる。是の如く思惟觀察すれば、去法、去者、所去處、是法皆相因得し、去法に因りて去者有り、去者に因りて去法有り、是一法に因りて則ち可去の處有り。定んで有と言ふを得ず、定んで無と言ふを得ず、是故に決定して知んぬ、三法は虚妄、空、無所有にして但假名のみ有り、幻の如く化の如し。

中論觀六情品第三

問うて曰はく、「經の中に説く、六情有り。謂ゆる、

眼耳及び鼻舌、身意等は六情なり

此眼等の六情は、色等の六塵に行す

此中に眼を内情と爲し、色を外塵と爲す。眼能く色を見る。乃至意を内情と爲し、法を

【觀六情品】本品は、上に生滅を破し今境智を泯せんとして先づ情を破し、次に塵を破し更に此二の和合より生ずる六種の識を破し、以て實相に入りこれに相應すべきことを明す【一】先づ六情を

立つ。  
 『六塵に行ず』六  
 塵を縁すと成り。  
 『二』論主の破。  
 七偈の中、前六は  
 正しく眼情を破す

外摩と爲す。意能く法を知る。」

答へて曰はく、「無なり。何を以ての故に。」

是眼は則ち、自ら其已體を見る能はず

若し自ら見る能はずんば、云何が餘物を見ん

是眼は自體を見る能はず。何を以ての故に。燈能く自ら照し亦能く他を照すが如く、眼

若し是れ見相ならば、亦應に自ら見、亦他をも見るべし。而も實には爾らず。是故に偈の

中に説く、「若し眼自ら見ずんば何んが能く餘物を見ん」と。問うて曰はく、「眼能く自ら

見ずと雖も而も能く他を見る。火は能く他を焼けども自ら焼く能はざるが如し。」答へて曰

はく、

火の喩は則ち、眼見の法を成ずる能はず

去と未去と去時とに、已に總じて是事を答ふ

汝火の喩を作すと雖も、眼見の法を成ずる能はず。是事去來品中に已に答ふ。已去の中

に去無く、未去の中に去無く、去時の中に去無きが如く、已焼、未焼、焼時に俱に焼有る

無きと如く、是の如く已見、未見、見時に俱に見相無し、復次に、

見若し未見の時、則ち名けて見と爲さず

而も見能く見ると言はば、是事則ち然らず

眼未だ色に對せずんば則ち見る能はず。爾時は名けて見と爲さず。色に對するに因つて

名けて見と爲す。是故に偈の中に説く、未見の時に見無し、云何が見を以て能く見ん。復次に二處俱に見法無し、何を以ての故に。

見に見有る能はず、非見も亦見ず

若し已に見を破せば、則ち見者を破すと爲す

見は見る能はず。先に已に過を説くが故に。非見も亦見ず。見相無きが故に。若し見相無くんば、云何が能く見ん。見法無きが故に見者も亦無し。何を以ての故に。若し見を離れて見身有らば、眼無き者も亦眼を以て見るべし。若し見を以て見ば、則ち見の中に見相有りて見相に見相無きなり。是故に偈の中に説く、若し已に見を破せば、則ち見者を破すと爲す」と。復次に、

見を破るるも見を離れざるも、見者は不可得なり

見法無きを以ての故に、何んが見と可見と有らん

若し見相も見法も亦破せず。若し見相も見法も亦破せず。見者無きが故に、云何が

見と可見と有らん。若し見者無くんば誰か能く見法を用て外色を分別せん。是故に偈の中に説く、見法無きを以ての故に、何んが見と可見と有らん」と。復次に、

見と可見と無きが故に、見法の因法無し

因法等の偈、云何が當に有るを得べき

見と可見の法無きが故に、眼、觸、受、愛等の因法皆無し。愛等無きを以ての故に、四

【復次に善】 次後一偈は五情等の法を類破す。

【觀五陰品】 本品は色受等の五陰の畢竟不可得なることを觀じて未來寂滅即涅槃と悟るを明す。【一】 先づ初七偈に五陰畢竟なることを承む。中、初六偈は色等の空なることを顯す。中第一の三偈は作因果不相離門の破

取等の十二因縁分亦無し。復次に、

耳鼻舌身意、聲及び聞者等

當に知るべし是の如き義は、皆上の説に同じ

見、可見の法、空にして衆縁に屬するが故に決定無きが如く、餘の耳等の五情、聲等の五塵も、當に知るべし、亦見、可見の法に同じ。義同じきが故に別して説かず。

中論觀五陰品第四

問うて曰はく、『經に説く、「五陰有り」と。是事如何。』答へて曰はく、

若し色因を離るれば、色則ち不可得なり

若し當に色を離るべくんば、色因不可得なるべし

色因とは布の縷に因るが如し。縷を除けば則ち布無く、布を除けば則ち縷無し。布は色の如く、縷は色因の如し。』問うて曰はく、『若し色因を離れて色有らば、何の過か有る。』

答へて曰はく、

色因を離れて色有らば、是色則ち無因なり

無因にして法有らば、是事則ち然らず

縷を離れて布有らば、布は則ち無因なるが如く、無因にして法有るは世間に有る無き所

【虚空等】虚空、時方、微塵は勝論派に、常住無因と認むるもの、神は數論、勝論兩派ともに認むる精神のこと、涅槃は兩派ともに認むる最高理の境界、即ち【因】の生因のこと、實在の根據、言説因は了因にして認識の根據なり【六種中】下六種品を指す。【現事】去來六情なり。

なり。「問うて曰はく、「佛法、外道法、世間法の中に皆無因の法有り。佛法には三無爲有り。無爲は常なるが故に無因なり。外道法中には虚空、時、方、神、微塵、涅槃等なり。世間法には虚空、時、方等なり。是三法は處として有らざること無きが故に、名けて常と爲す。常なるが故に無因なり。汝何を以てか無因の法は世間に無き所なり」と説くや。』答へて曰はく、「此無因の法は、但言説を有するのみ、思惟し分別すれば則ち皆無し。若し法因縁に従りて有らば、無因と言ふべからず。若し無因縁ならば則ち我説の如し。』問うて曰はく、「二種の因有り、一に作因、二には言説因なり。は無因の法には作因無し。但言説因のみ有りて人をして知らしむるが故に。』答へて曰はく、「言説因有り」と雖も、是事然らず。虚空は六種中に破するが如く、餘事は後に當に破すべし。復次に、現事すら尙皆破すべし。何に況んや微塵等の不可見の法をや。此故に説く無因の法は世間に無き所なり」と。』問うて曰はく、「若し色を離れて色因有らば、何の邊有りや。』答へて曰はく、

若し色を離れて因有らば、則ち是れ無果の因なり

若し無果の因を言はば、則ち此處有る無し

若し色の果を離いて但色因有らば、即ち是れ無果の因なり。』問うて曰はく、「若し無果にして因有らば何の答有りや。』答へて曰はく、「無果にして因有るは、世間に無き所なり。何を以ての故に。果を以ての故に名けて因と爲す。若し無果ならば、云何が因と名けん。復次に、若し因中に果無くんば、物何を以てか非因に依りて生ぜざる。是事破因縁品の中

【復次に等】次二偈は有因無因の破

に説くが如し。是故に無果の因有る無し。

復次に、

若し已に色有らば、則ち色の因を用ひず

若し色有る無きも、亦色の因を用ひず

二處に色因有るは、是れ則ち然らず。若し先に因中に色有らば、名けて色因と爲さず。

若し先に因中に色無きも、亦名けて色因と爲さず。』問うて曰はく、『若し二處俱に然らず、

但無因の色のみ有らば何の咎か有る。』答へて曰はく、

無因にして而も色有らば、是事終に然らず

是故に有智者は、色を分別すべからず

若し因中に果有るも因中に果無きも、此事すら尙不可得なり。何に況んや無因にして色

有るをや。是故に言ふ、「無因にして而も色有らば、是事終に然らず、是故に有智者は色を

分別すべからず」と。分別は凡夫に名く。無明愛染を以て色に貪著し、然して後都見を以

て分別論を生じ、因中有果、無果等を説く。今此中に色を求むるに不可得なり。是故に

智者は分別すべからず。

復次に、

若し果因に似るも、是事然らず

果若し因に似ざるも、是事亦然らず

【復次に等】次に一偈は相似不相似の破。



【受陰及び想陰等】  
次一偈は、受陰、想陰、行陰を合せ教す。

【二】 第三に諸法皆空を讚美す、上本諸法に有を破し空を明すを分破せんとしての歎なり

若し果と因と相似ることは是事然らず。因は細、果は麤なるが故に、因果、色力等、各異なる。布は縷に似たらば則ち布と名けず。縷は多く布は一なるが故なるが如し。因果相似と言ふを得ず。若し因果相似せざるも是れ亦然らず。麻縷は絹を成ぜず、麤縷は細布を出す無きが如し。是故に因果相似せずと言ふを得ず。二義然らず、故に色無し。色無くんば色因無し。

受陰及び想陰、行陰識陰等

其餘の一切法、皆色陰に同じ

四陰及び一切法亦是の如く思惟し破すべし。

又今道宣言、空の義を讚美せんと欲するが故に偈を説かく、

若し人問者有らんに、空を離れて答へんと欲せば

是れ問者答を成ぜず、俱に彼疑に同じ

若し人問する有らんに、空を離れて其過を説かば

是れ問明を成ぜず、俱に彼疑に同じ

若し人問する時は、各所執有り、空の義を離れて問答する者有らば、皆問答を成ぜず。俱に本疑に同じ。人の疑は是れ無常と言ふが如し。問者は言はく「何を以ての故に無

常なる」とし、答へて言はく、「無常の因より生ずるが故に」と。此を答と名けず。何を以ての故に。因縁中にも亦疑はしく、常爲るや、無常爲るやを知らざるなり。是を彼所疑に同

じと爲す。問者若し其過を説かんと欲するに、空に依らずして、諸法は無常なりと説かば、則ち問難と名けず。何を以ての故に。汝無常によりて我常を破するも、我は亦常によりて汝が無常を破す。若し實に無常ならば則ち業報無し。眼耳等の諸法念念に滅して亦分別有る無し。是の如き等の過有りて、皆問難を成せずして彼所疑に同じ。若し空に依りて常を破せば、則ち過有る無し。何を以ての故に。此人空相を取らざるが故に。是故に若し問答せんと欲するすら尙應に空法に依るべし。何に況んや離苦寂滅の相を求めんと欲する者をや。」

中論觀六種品第五

【觀六種品】六種とは地水火風空識をいふ。上來空門を明し、下無相門を明す、即ち先づ六種の相を破して一切の定在を破するなり。【一】八傷中、初七傷は相を破して無相門を明す、中六傷は虚空を破す、中亦二、初五傷は處有といふを破す。

問うて曰はく、『六種各定相有り、定相有るが故に則ち六種有り。』答へて曰はく、空相未だ有らざる時、則ち虚空の法無し。若し先に虚空有らば、即ち是れ無相と爲す。若し未だ虚空相有らずして、先に虚空法有らば、虚空は則ち無相なり。何を以ての故に。無色處を虚空相と名く。色は是れ作法にして無常なり。若し色未だ生ぜずんば、未生は則ち滅無し、爾時には虚空相無し。色に因るが故に無色處有り。無色處を虚空相と名く。問うて曰はく、『若し無相にして虚空有らば何の咎か有る。』答へて曰はく、

は無相の法は、一切處に有る無し

無相法の中に於ては、相は則ち相する所無し

若し常無常法の中に於て無相法を求むるも不可得なり。論者の言の如きは、是れ有、是れ無、云何が各相有るを知らん。故に生、住、減は是れ有爲の相なり。生、住、減無きは是れ無爲の相なり。虚空若し無相ならば則ち虚空無し。若し先に無相にして後に相來り相すと謂はば、是れ亦然らず。若し先に無相なるときは則ち法の相すべき無し。何を以ての故に。

有相無相の中、相は則ち住する所無し

有相無相を離れて、餘處にも亦住せず

峯有り、角有り、尾端に毛有り、頸下に垂鬚有る、是を牛相と名くるが如く、若し是相を離れては、則ち牛無し、若し牛無くんば、是れ諸相住する所無し。是故に無相法の中に於ては、相は則ち相する所無しと説くなり。有相の中に相亦住せず。先に相有るが故に。水相の中に火相住せざるが如し。先に自相有るが故に。復次に、若し無相の中に相住せば、則ち無因と爲す。無因を名けて無法と爲す。而るに有相、相、可相は常に相因待するが故に、有相、無相の法を離れて更に第三處の可相無し。是故に偈の中に、有相、無相を離れて餘處にも亦住せずと説く。復次に、相法有る無きが故に、可相法も亦無し

【若し有有ること  
等】第二に虚空無  
といふを破す。

可相法無きが故に、相法も亦復無し  
相住する所無きが故に、則ち可相の法無し。可相の法無きが故に、相法も亦無し。何を  
以ての故に。相に因りて可相有り、可相に因りて相有りて共に相因待するが故に。

是故に今相も無く、亦可相も有る無し  
相可相を離れ已りては、更に亦物有る無し

因縁の中に於て本末推求するに、相、可相は決定して不可得なり。是二不可得なるが故  
に、一切法は皆無なり。一切法は皆相、可相二法の中に攝在す。或は相を可相と爲し、或  
は可相を相と爲す。火は煙を以て相と爲し、煙も亦復火を以て相と爲すが如し。

問うて曰はく、『若し有有る無くんば、應當に無有るべし。』答へて曰はく、

若し有をして有る無からしめば、云何が當に無有るべき

有無既に無ならば、有無を知る者は誰ぞ

凡そ物、若は自ら壞し、若は他に壞せらるるを名けて無と爲す。無は自ら有らず、有に  
従りて有り。是故に言ふ、有をして有る無からしめば、云何が無有るべき。眼見、耳聞す

ら尙不可得なり。何に況んや無物をや。

問うて曰はく、『有有る無きを以ての故に無亦無きも、應に有無を知る者有るべし。』答

へて曰はく、『若し知者有らば應に有の中に在るべきか、應に無の中に在るべし、有無、既に  
破る、知者も亦同じく破らるべし。』

【是故に知んぬ等】  
此闕は餘の五種を  
類破す。

【二】 次に呵責門

是故に知んぬ虚空は、有にも非ず亦無にも非ず  
相にも非ず可相にも非ずと、餘の五も虚空に同じ

虚空種種に相を求むるに不可得なるが如く、餘の五種も亦是の如し。問うて曰はく、「虚空、初に在らず後に在らず、何を以て先に破する。」答へて曰はく、「地、水、火、風は衆縁和合の故に破し易し。識は苦樂の因なるを以ての故に、無常變異なるを知るが故に破し易し。虚空には是の如き相無し。但凡夫希望して有と爲す。是故に先に破す。復次に、虚空は能く四大を持し、四大の因縁にして識有り。是故に先に根本を破せば、餘は自ら破せらる。」

問うて曰はく、「世間の人は盡く諸法を是れ有なり、是れ無なりと見る。汝何を以てか獨り世間と相違して無所見と言ふ。」答へて曰はく、

淺智は諸法の、若は有若は無の相を見る  
是れ即ち見を滅せる、安穩の法を見る能はざるなり

若し人未だ得道せずんば、諸法の實相を見ず。愛と見との因縁の故に種種に戲論す。法生ずるを見る時、之を謂ひて有と爲し、相を取りて有と言ふ。法滅するを見る時、之を謂ひて無と爲し、相を取りて無と言ふ。智者は諸法の生ずるを見て、即ち無の見を滅し、諸法の滅するを見て、即ち有の見を滅す。是故に一切法に於て所見有りと雖も、皆幻の如く夢の如し。乃至無漏道の見すら尙滅す。何に況んや餘見をや。是故に若し見を滅せる安穩

【製染染品】本品は一切の煩惱及びそれに染惑さるる者の有るを破す。

【一】先づ立義。

【二】次に破、十場あり、初二場は前後門の破。

の法を見ざる者は、則ち有を見、無を見る。』

中論觀染染者品第六

問うて曰はく、『經に説く、「貪欲、瞋恚、愚癡、是れ世間の根本なり」と。貪欲に種種の名有り。初は愛と名け、次は著と名け、次は染と名け、次は姪欲と名け、次は貪欲と名く。是の如き等の名字有り。此は是れ結使にして衆生に依止す。衆生を染者と名く。貪欲を染法と名く。染法、染者有るが故に即ち貪欲有り。餘の二も亦是の如し。瞋有るときは則ち瞋者有り。癡有るときは則ち癡者有り。此三毒の因縁にて三業を起し、三業の因縁にて三界を起す。是故に一切法有り。』

答へて曰はく、『經に三毒の名字有りと説くと雖も、實を求むるに不可得なり。何を以ての故に。』

若し染法を離れて、先に自ら染者有らば

是染欲者に因りて、應に染法を生ずべし

若し染者有る無くんば、云何が當に染有るべき

若し染有る、若し染無きも、染者も亦是の如し

若し先に定んで染者有らば、則ち更に染を須ひず。染者先に已に染するが故に。若し先

【若し染法染者等】  
次に一時門の破。

【復次に等】次兩  
偈は一異門の破。

に定んで染者無くんば、亦復染を起すべからず。要ず當に先に染者有りて、然る後に染を起すべし。若し先に染者無くんば、則ち染を受くる者無し。染法も亦是の如し。若し先に人を離れて定んで染法有らば、此れ則ち無因なり、云何が起すを得ん。薪無き火の似如し。若し先に定んで染法無きときは、則ち染者有る無し。是故に偈の中に、若し染有るも若し染無きも、染者も亦是の如しと説く。

問うて曰はく、「若し染法、染者、先後相待して、生ずること是非不可得ならば、若し一時に生ぜは何の咎か有る。」答へて曰はく、

染者及び染法の、俱に成ずるは則ち然らず  
染者と染法と俱なるときは、則ち相待有る無ければなり

若し染法と染者と一時に成ぜば、則ち相待せず。染者に因らずして染法有り、染法に因らずして染者有らば、是二は應に常なるべし。已に無因にして成ずるが故に。若し常ならば則ち過多く、解脱の法有る無し。

復次に、今當に一異の法を以て染法、染者を破すべし。何を以ての故に。

染者と染法と一ならば、一法云何が合せん

染者と染法と異ならば、異法云何が合せん

染法と染者とは、若は一法を以て合するや、若は異法を以て合するや。若し一ならば則ち合無けん。何を以ての故に。一法云何が自ら合せん。指端は自ら觸るる能はざるが如し。

若し異法を以て合するも、是れ亦不可なり。何を以ての故に。異を以て成ずるが故に、若し各成じ竟れば復合すべからず。合すと雖も猶異なり。復次に一異俱に不可なり。何を以ての故に。

若し一にして合有らば、伴を離れて合有るべし

若し異にして合有らば、伴を離れても亦合すべし

若し染と染者と一なるを、強ひて名けて合と爲さば、應に餘の因縁を離れて、而も染と染者と有るべし。復次に、若し一ならば亦染と染者との二の名有るべからず。染は是れ法、染者は是れ人なり。若し人と法と一たらば是れ則ち大に亂す。若し染と染者と、各異にして而も合すと言はば、則ち餘の因縁を須ひずして而も合有るなり。若し異にして而も合せず、遠しと雖も亦應に合すべし。」

問うて曰はく、「一にして合せざるは爾るべし。眼見に異法は共に合す。答へて曰はく、

若し異にして而も合有らば、染と染者とは何の事ぞ

是二相先に異にして、然る後に合相を説くなり

若し染と染者と先に決定して異相有り、而る後合せば、是れ則ち合ならず。何を以ての故に。

是二相は先に已に異にして後に強ひて合と説くなり。復次に、

若し染及び染者、先に各異相を成せば

既に異相を成するなり、云何が合を云はん

【一にして合せざるは等】四に偏に異門について重ねて破す。

【復次に等】次に例は呵責して破す



若し染と染者と先に各別相を成ぜば、汝今何を以てか強ひて合相を説く。

復次に、

異相は成する有る無し、是故に汝合を欲す

合相竟に成する無し、而して復異相を説く

汝已に染と染者と異相成ぜざるが故に、復合相を説く。合相の中に過有り。染と染者と成ぜず。汝合相を成ぜんが爲の故に、復異相を説く。汝白ら已に定と爲すも、而も説く所不定なり。何を以ての故に。

異相成ぜざるが故に、合相則ち成ぜず

何の異相の中に於て、而も合相を説かんと欲するや

此中、染と染者との異相成ぜざるを以ての故に、合相も亦成ぜず。汝何の異相の中に於て而も合相を欲する。復次に、

是の如く染と染者と、合不成成するに非ず

諸法も亦是の如く、合不成成するに非ず

染の如く悲、癡も亦是の如し。三毒の如く一切の煩惱、一切の法も亦是の如く、先に非ず、後に非ず、合に非ず、散等に非ずして、因縁の成する所なり。

中論卷第一

【復次に等】次第六に諸法を類破す

中

論

卷第二

【觀三相品】上來無所相を明し、本品には能相即ち有爲法に生住滅の三相ありといふを破するを明す、かく能所相不可得なれば則ち有爲空、從つて無爲空、更に一切法畢竟空となすこれ諸法實相と明すにあり。

【一】先づ三相を立つ。

【二】三相を破す中初三四偈に三相ありといふを破す、中、初めに總じて三相を破す、一中に三偈あり、一に爲無爲門の破。

中論觀三相品第七

問うて曰はく、「經に説く、「有爲法に三相有り、生住滅なり。萬物は生法を以て生じ、住法を以て住し、滅法を以て滅す」と。是故に、諸法有り。」

答へて曰はく、「爾らず。何を以ての故に。三相は決定無きが故に。是三相は是れ有爲にして能く有爲の相を作すと爲んや。是れ無爲にして能く有爲の相を作すと爲んや。二俱に然らず。何を以ての故に。」

若し生是れ有爲ならば、則ち應に三相を有すべし

若し生是れ無爲ならば、何んが有爲相と名けん

若し生是れ有爲ならば、應に三相を有して生住滅すべきも是事然らず。何を以ての故に。

共に相違するが故に。相違とは、生相は應に生法なるべく、住相は應に住法なるべく、滅

龍樹菩薩造  
梵志青目釋  
姚秦三藏鳩摩羅什譯

相は應に滅法なるべく、若し法生する時は、住滅相違の法有るべからず。一時なるも則ち然らず。明暗俱ならざるが如し。是を以ての故に、生は是れ有爲法なるべからず。住滅相も亦應に是の如くなるべし。

問うて曰はく、『若し生は有爲に非ず、若し是れ無爲ならば、何の咎有りや。』答へて曰はく、『若し生は是れ無爲ならば、云何が能く有爲法の爲に相と作らん。何を以ての故に。無無法は無性なるが故に、有爲を滅するに因りて無爲と名く。是故に説く、『不生不滅を無爲の相と名く、更に自性無し』と。是故に無法は法の爲に相と作る能はず。兎角、龜毛等の法の爲に相と作る能はざるが如し。是故に生は無爲に非ず。住滅も亦是の如し。復次に、

三相若し聚散せば、所相有る能はず

云何が一處に於て、一時に三相有らん

是生住滅相、若し一一にして能く有爲法の爲に相と作るや、若し和合して能く有爲法の爲に相と作るや。二俱に然らず。何を以ての故に。若し一一と謂はば、一處の中に於て或は有相有り、或は無相有り。生の時住滅無く、住の時生滅無く、滅の時生住無し。若し和合ならば、共に相違の法なり、云何が一時に俱ならんや。若し三相更に三相有り」と謂はば、是れ亦然らず。何を以ての故に。

若し生、住、滅に、更に有爲の相有り」と謂はば  
是れ即ち無窮爲らん、無ならば即ち有爲に非ず

【若し生住滅に等】次に窮無窮門の破し。

【汝三相を説いて等】別して三相を破す。先づ生門に就て生を破す。中に三、一に展轉相生を破す。

若し生、住、滅に更に有爲の相有りと言はば、生は更に生有り、住有り、滅有り。是の如く三相復更に相有るべし。若し爾らば、則ち無窮なり。若し更に無相ならば、是三相則ち有爲法と名けず、亦能く有爲法の爲に相と作る能はず。』

問うて曰はく、『汝三相を説いて無窮と爲すは、是事然らず。生、住、滅は是れ有爲なりと雖も、而も無窮には非ず。何を以ての故に。』

生生の生する所、彼本生を生じ

本生の生する所、還生生を生ず

法生ずる時、自體を通じて七法共に生ず。一には法、二には生、三には住、四には滅、

五には生生、六には住住、七には滅滅なり。是七法の中、本生は自體を除いて能く六法を

生ず。生生は能く本生を生じ、本生は能く生生を生ず。是故に三相是れ有爲なりと雖も、

而も無窮に非ざるなり。』答へて曰はく、

若し是生生は、能く本生を生ずと言はば

生生は本生よりするに、何んが能く本生を生ぜん

若し是生生能く本生を生ぜば、是生生は則ち本生より生ずと名けず。何を以ての故に。

生生本生より生ず。云何が能く本生を生ぜん。復次に、

若し是本生は、能く生生を生ずと言はば

本生は彼より生ず。何んが能く生生を生ぜん

若し本生能く生生を生ずと謂はば、是本生は生生より生ずと名けず。何を以ての故に。  
是本生は生生より生ず。云何が能く生生を生ぜん。生生の法は應に本生を生ずべきも、而も  
今生生は本生を生ずる能はず。生生未だ自體有らざるに、何んが能く本生を生ぜん。是故  
に本生は生生を生ずる能はず。』問うて曰はく、『是生生の生ずる時は、先に非ず後に非ず  
して能く本生を生ず。但生生の生ずる時に能く本生を生ずるなり。』答へて曰はく、『然ら  
ず。何を以ての故に。』

若し生生の生ずる時、能く本生を生ぜば

生生すら尙未だ有らざるに、何んが能く本生を生ぜん

若し生生の生ずる時、能く本生を生ずること、爾るべしと謂はんに、而も實は未だ有ら  
ざるなり。是故に生生の生ずる時、本生を生ずる能はず。復次に、

若し本生の生ずる時、能く生生を生ぜば

本生すら尙未だ有らざるに、何んが能く本生を生ぜん

若し是本生の生ずる時、能く生生を生ずること爾るべしと謂はんに、而も實は未だ有ら  
ざるなり。是故に本生の生ずる時、生生を生ずる能はず。』

問うて曰はく、

燈の能く自ら照し、亦能く彼を照すが如く

生法も亦是の如く、自ら生じ亦彼を生ず

【燈の能く等】二  
に不展轉相生を破す。

燈の闇室に入りて諸物を照了し、亦能く自ら照すが如く、生も亦是の如く、能く彼を生じ、亦能く自ら生ず。」

答へて曰はく、「然らず。何を以ての故に。」

燈中に自ら闇無く、住處にも亦闇無し

闇を破するを乃ち照と名く、闇無くんば則ち照無し

燈の體には自ら闇無し。明の及ぶ所の處にも亦闇無し。明と闇と相違するが故に。闇を破するが故に照と名く。闇無くんば則ち照無し。明と闇と相違するが故に。闇を

得ん。」問うて曰はく、「是燈未だ生ぜずして照有るに非ず、亦生じ已りて照有るに非ず。

但燈生ずる時、能く自ら照し、亦彼をも照すなり。」答へて曰はく、

云何が燈生ずる時にして、能く闇を破せん

此燈初めて生ずる時は、闇に及ぶ能はず

燈生ずる時を半生半未生と名く。燈體未だ成就せざるに、云何が能く闇を破せん。又燈

は闇に及ぶ能はず。人賊を得たるを乃ち名けて破と爲すが如し。若し燈闇に到らずと雖も、

而も能く闇を破すと謂はば、是れ亦然らず。何を以ての故に。

燈若し未だ闇に及ばずして、能く闇を破せば

燈は此闇に在りて、則ち一切の闇を破せん

若し燈力有りて、闇に到らずして能く闇を破せば、此處に燈を燃さば、應に一切處の暗

を破すべし。然るに俱に及ばざるが故に。復次に、燈應に自ら照し彼を照すべからず。何を以ての故に。

若し燈能く自ら照し、亦能く彼を照さば

闇も亦應に自ら闇にして、亦能く彼を闇すべし

若し燈は闇と相違するが故に、能く自ら照し亦彼を照すとせば、闇も燈と相違するが故に。亦應に自ら蔽ひ彼を蔽ふべし。若し闇は燈と相違するも、自ら蔽ひ彼を蔽ふ能はずんば、燈も闇と相違するも、亦應に自ら照し亦彼を照すべからず。是故に燈の喩は非なり。

生の因縁を破すること未だ盡きざるが故に、今當に更に説くべし。

此生若し未だ生ぜずんば、云何が能く自ら生ぜん

若し生じ已りて自ら生ぜば、生じ已れるに何んが生を用ひん

是生自ら生ずる時、生じ已りて生ずと爲んや、未だ生ぜざるに生ずと爲んや。若し未だ生ぜざるに生ずるときは、則ち是れ法無し、法無くんば何んが能く自ら生ぜん。若し生じ已りて生ずと謂はば、已成爲り、復生するを須ひず。已に作して更に作すべからざるが如し。若は已生、若は已生、是二俱に生ぜざるが故に生無し。汝先に説く、「生は燈の如く能く自ら生じ、亦彼を生ず」と是事然らず。住滅も亦是の如し。復次に、生は生じ已りて生ずるに非ず、亦未だ生ぜざるに生ずるに非ず。生ずる時にも亦生ぜず。去來の中に已に答へぬ

【生の因縁等】三に衆師の生を計するを難破す、下九偈の中、初偈は已未生を破す。

【生は生じ已りて等】二に三時門の破。

生とは衆縁和合して生有るに名く。已生の中には作無きが故に生無し。未生の中にも作無きが故に生無し。生時にも亦然らず。生法を離れて、生時不可得なり。生時を離れて、生法亦不可得なり。云何が生時に生ぜん。是事去來の中に已に答へぬ、已生の法は生ずべからず。何を以ての故に。生じ已りて復生じ、是の如く展轉するときは則ち無窮と爲る。作し已つて復作すが如し。復次に、若し生じ已りて更に生ずとせば、何の生法を以て生ぜん。是生相未だ生ぜずして、而も生じ已りて生ずと言はば、則ち自ら所説に違ふ。何を以ての故に。生相未だ生ぜずして汝は生を謂ふ。若し未だ生ぜずして生を謂はば、法或は生じ已りて而して生ずべく、或は未だ生ぜずして而も生ずべし。汝先に生じ已りて生ずと説く、是れ則ち不定なり。復次に、燒き已りて應に復燒くべからず、去り已りて應に復去るべからざるが如く、是の如き等の因縁の故に、生じ已りて應に生ずべからず。未生の法も亦生ぜず。何を以ての故に。法若し未だ生ぜずんば、則ち應に生の縁と和合せずべからず。若し生の縁と和合せずんば、則ち法の生ずる無し。若し法未だ生の縁と和合せずして而も生ぜば、應に作法無くして而も作し、去法無くして而も去し、染法無くして而も染し、慧法無くして而も悲し、癡法無くして而も癡すべし。是の如くんば則ち皆世間法を破る。是故に未生の法は生ぜず。復次に、若し未生の法生ぜば、世間の未生の法皆應に生ずべし。一切の凡夫の未生の菩提、今應に菩提不壞法を生ずべし。阿羅漢は煩惱有る無きに、今應に煩惱を生ずべく、苧等は角無きに、今皆應に生ずべし。但是事然らず。是故に未生法も亦生



ぜず。』問うて曰はく、『未生法生ぜずんば、未だ縁有らざるを以て、作無く作者無く、時無く、方等無きが故に生ぜざるなり。若し縁有らば作有り作者有り、時有り方等有りて和合するが故に、未生の法生ず。是故に若し一切未生の法皆生ぜずと説かば、是事爾らず。』答へて曰はく、『若し法、縁有り、時有り、方等有りて和合するとき則ち生ぜば、先有なるも亦生ぜず、先無なるも亦生ぜず。有無も亦生ぜず。三種先に已に破せり。是故に生じ已るも生ぜず、未だ生ぜざるも亦生ぜず、生時にも亦生ぜず。何を以ての故に。已生の分は生ぜず、未生の分も亦生ぜず。先に答へしが如し。復次に若し生を離れて生時有らば應に生時に生ずべし。但生を離れて生時無し。是故に生時にも亦生ぜず。復次に、若し生時に生ずといはば、則ち二生の過有り。一には生を以ての故に生時と名け、二には生時中に生ずるを以てす。二皆然らず。二法有る無し。云何が二生有らん。是故に生時にも亦生ぜず。復次に、生法未だ發せざるときは則ち生時無し。生時無きが故に生は何の所依ぞ。是故に生時に生ずとも言ふを得ず。是の如く推求するに、生じ已りても生無く、未だ生ぜざるにも生無く、生時にも生無し。生無きが故に生は成ぜず。生成ぜざるが故に住滅も亦成ぜず。生住滅成ぜざるが故に有爲法は成ぜず。是故に偈の中に説く、『去未去、去時の中に已に答へぬ』と。

問うて曰はく、『我定んで生じ已りて生じ、未だ生ぜずして生じ、生時に生ずと言はず。但衆縁和合するが故に生有り。』答へて曰はく、『汝は説有りと雖も、此れ則ち然らず。何

を以ての故に。

若し生時は生すと謂はば、是事已に成ぜず

云何が衆縁合して、爾時而も生ずるを得ん

生時の生は已に種種の因縁もて破せり。汝今何を以て、更に衆縁和合の故に生有りと説

くや。若し衆縁の具足も、不具足も、皆生と同じく破す。復次に、

若し法衆縁より生せば、即ち是れ寂滅性なり

是故に生と生時と、是二俱に寂滅なり

衆縁所生の法には自性無きが故に寂滅なり。寂滅を名けて無と爲す。此無、彼無相、言語の道を斷じ、諸の戲論を滅す。衆縁の名は、縷に因りて布有り、蒲に因りて蓆有るが

如し。若し縷に自ら定相有らば、應に麻より出づべからず。若し布に自ら定相有らば、應

に縷より出づべからず。而も實に縷より布有り、麻より縷有り。是故に縷にも亦定性無し、布にも亦定性無し。燃と可燃との因縁和合して成じて自性有る無きが如く、可燃無

なるが故に燃も亦無なり。燃無なるが故に可燃も亦無なり。一切法も亦是の如し。是故に

衆縁より生ずる法には自性無し。自性無きが故に空にして、野馬の實無きが如し。是故に

偈の中に説く、生と生時と二俱に寂滅なり」と。應に生時の生を説くべからず。汝種種の

因縁もて、生相を成ぜんと欲すと雖も、皆是れ戲論にして寂滅の相に非ず。」

問うて曰はく、「定んで三世の別異有り。未來世の法は生を得。因縁有れば即ち生ず。何

に定んで三世の等

因に三世門の破。

が故に生無しと言ふや。答へて曰はく、

若し未生の法有りて、説いて生ずる者有りと言ふ

此法先に已に有らば、更に復何んが生を用ひん

若し未來世の中に未生法有りて生ぜば、是法先に已に有り、何んが更に生ずるを用ひん。

法有らば應に更に生ずべからず。』問うて曰はく、『未來に有りと雖も、現在の相の如くに

非ず。現在の相となるを以ての故に生と説く。』答へて曰はく、『現在の相は未來の中に無

し。若し無くんば云何が未來の生法の生を言はん。若し有らば未來と名けず、應に現在

と名くべし。現在は應に更に生ずべからず。二俱に生無きが故に生ぜず。

復次に、汝生時に生じ亦能く彼を生ずと謂はば、今當に更に説くべし。

若し生時生ずと言はば、是れ能く所生有るなり

何んが更に生有りて、能く是生を生ずるを得ん

若し生が生時に能く彼を生ぜば、是生誰か復能く生ぜん。

若し更に生の生ずる有りと言はば、生は則ち無窮なり

生を離れて生の生ずる有らば、法は皆能く自ら生ぜん

若し生更に生有らば、生は則ち無窮なり。若し是生更に生無くして自ら生ぜば、一切の

法は亦能く自ら生ぜん。而も實には爾らず。

復次に、

【復次に等】 六に  
有無門の破。

【復次に等】 五に  
自生生他といふを  
破す。

【復次に若し諸法の破】六に減不減門

【若し減相の等】別破の中、第二に住門に就て生を破す。四傷ある中に三時門の破

有法は生ずべからず。無も亦生ずべからず。有無も亦生ぜず。此義先に已に説きぬ。凡そ有ゆる生は、有法にして生有りと爲すや、無法にして生有りと爲すや、有無法にして生有りと爲すやなり。是れ皆然らず。是事先に已に説けり。此三事を離れて更に生有る無し、是故に生無し。

復次に、

若し諸法の滅時、是時には應に生ずべからず

法若し不滅ならば、終に是事有る無し

若し法滅相ならば、是法は生ずべからず。何を以ての故に、二相は相違するが故に。一には是れ滅相、法是れ滅なりと知る。一には是れ生相、法是れ生なりと知る。二相相違の法、一時なるは則ち然らず。是故に滅相の法は應に生ずべからず。

問うて曰はく、「若し滅相の法應に生ずべからずば、不滅相の法は應に生ずべし。」答へて曰はく、「一切有爲法は念念に滅するが故に、不滅の法無し。有爲を離れて決定して無爲法有る無し。無爲法は但名字のみ有り。是故に説く、「不滅の法は終に是事有る無し」と。問うて曰はく、「若し法生ずる無きも、應に住有るべし。」答へて曰はく、

不住法も住せず、住法も亦住せず

住時も亦住せず、無生云何が住せん

【復次に等】滅不  
滅もて住を破す。

【復次に等】次に  
自他もて破す。

不住法住せず、住相無きが故に。住法も亦住せず。何を以ての故に。已に住有るが故に、去に因るが故に住有り、若し住法先に有らば應に更に住すべからず。住時も亦住せず。住不住を離れて更に住時無し。是故に亦住せず。是の如く一切處に住を求むるに不可得なるが故に。即ち是れ生無し。若し生無くんば云何が住有らん。復次に、

若し諸法滅する時は、是れ則ち應に住すべからず  
法若し不滅ならば、終に是事有る無し

若し法滅相ならば、是法住相有るべからず。何を以ての故に。一法の中に二相の相違有るが故に。一には是れ滅相、二には是れ住相なり。一時一處に住滅相有るは、是事然らず。是故に滅相の法に住有りと云ふを得ず。問うて曰はく、『若し法不滅ならば應に住有るべし。』答へて曰はく、『不滅の法有る無し。何を以ての故に。』

有ゆる一切法、皆是れ老死の相なり

終に法有りて、老死を離れて住する有るを見ず

一切法生ずる時は無常なり。常に無常に隨逐するもの二有り。老及び死と名く。是の如く、一切法は、常に老死有るが故に住時無し。

復次に、

住は自相住ならず、亦異相住ならず

生の自生ならず。亦異相生ならざるが如し

【若し住無くとも】別破の中、第三に滅門について破す。先づ初四偈の破滅の中、一に三時門もて滅を破す。

【復次に等】二に住不住門の破。

若し住法有らば、自相住と爲んや、他相住と爲んや。二俱に然らず。若し自相住ならば則ち是れ常爲り、一切の有爲法は衆縁より生ず。若し住法自ら住せば、則ち有爲と名けず。住若し自相住ならば法も亦應に自相住なるべし。眼の自ら見る能はざるが如く、住も亦是の如くなるべし。若し異相住ならば則ち住に更に住有り。是れ則ち無窮なり。復次に、異法の異相を生ずるを見る。異法に因らずして而も異相有るを得ず。異相不定なるが故に、異相に因りて住するは是事然らず。

問うて曰はく、『若し住無くとも應に滅有るべし。』答へて曰はく、『無し。何を以ての故に。』

法已に滅せば滅せず、未だ滅せざるも亦滅せず

滅時にも亦滅せず。無生何んが滅有らん

若し法已に滅せば則ち滅せず。先に滅せしを以ての故に。未だ滅せざるも亦滅せず。滅相を離るが故に。滅時にも亦滅せず。二を離れて更に滅時無し。是の如く推求するに、滅法即ち是れ無生なり。無生ならば何んが滅有らん。復次に、

法若し住有らば、是れ則ち應に滅すべからず

法若し住せざるも、是れ亦應に滅すべからず

若し法定んで住ならば、則ち滅有る無し。何を以ての故に、住相有るに由るが故に。若し住法にして滅せば則ち二相有り。住相と滅相となり。是故に住の中に滅有りと言ふを得

し住法にして滅せば則ち二相有り。住相と滅相となり。是故に住の中に滅有りと言ふを得

【是法是時に等】  
三に一時異時門の  
破。

【一切の諸法は等】  
四に相待門の破。

【若し法是れ等】  
重ねて滅を破す。

す。生死の一時に有るを得ざるが如し。若し法不住なるも亦滅有る無し。何を以ての故に。住相を離るるが故に。若し住相を離るれば則ち法無し。法無くば云何が滅せん。復次に、

是法是時に於ては、是時に於て滅せず  
是法異時に於ては、異時に於て滅せず

若し法滅相有らば、是法は自滅相と爲んや、異相滅と爲んや。二俱に然らず。何を以ての故に。乳は乳時に於て滅せず、乳時有るに隨つて乳相定んで住するが故に。非乳時にも亦滅せず、若し非乳ならば乳の滅と言ふを得ざるが如し。復次に、

一切の諸法は、生相不可得なるが如く  
生相無きを以ての故に、即ち亦滅相も無し

先に推求せしが如く、一切法の生相不可得なり。爾る時には即ち滅相無し。生を破るが故に生無し。生無くんば云何。滅有らん。若し汝の意、猶未だ已ますんば、今當に更に滅を破するの因縁を説くべし。

若し法是れ有ならば、是れ即ち滅有る無し  
應に一法に於て、而も有無の相有るべからず

諸法有る時、滅相を推求するに不可得なり。何を以ての故に。云何が一法の中、亦是は有亦は無の相ならん。光影處を同じうせざるが如し。復次に、

若し法是れ無ならば、是れ即ち滅有る無し

譬へば第二頭無なるが故に、斷すべからざるが如し。  
 法若し無ならば、則ち滅相無し。第二頭第三手は無の故に斷すべからざるが如し。復次に、

法自相によりて滅せず、他相によりても亦滅せず

自相によりて生ぜず、他相によりても亦生ぜざるが如し

先に生相を説きしが如く生は自ら生ぜず、亦他より生ぜず。若し自體を以て生ぜば、是れ則ち然らず。一切の物皆衆縁より生ず、指端の自ら觸るる能はざるが如く、是の如く生も自ら生ずる能はず、他より生ずるも亦然らず。何を以ての故に。生は未だ有らざるが故に、應に他より生ずべからず。是生無なるが故に自體無し、自體無なるが故に他も亦無なり。是故に他より生ずるも亦然らず。滅法も亦是の如く、自相によりて滅せず、亦他相によりて滅せず。

復次に、

生住滅成せざるが故に、有爲有る無し

有爲法無なるが故に、何んが無爲有るを得ん

汝先に説く「生、住、滅の相有るが故に有爲有り、有爲有るを以ての故に有爲有り」と。今理を以て推求するに三相不可得なり。云何が有爲有るを得ん。先に説けるが如く無相の法有る無し。有爲法無なるが故に何んが無爲有るを得ん。無爲相は不生、不住、不滅に名

【復次に等】第二に法體を破して結す。



【三】 上來有の三相を破し、今一偈に無の三相を破す。

【觀作作品】 下十品は重ねて人法を破して大乘の觀行を明す。本品は衆生の作業に依るが故に三界に輪廻するを、今止觀するに作業作者畢竟不可得なりと説くにあり、又上に空無相門を説き、竟り、已下無作門を明すと知るべし。

【二】 先づ立。

く。有爲相を止むるが故に無爲相と名く。無爲は自ら別相無し。是三相に因りて無爲相有り、火の熱相爲り、地の堅相爲り、水の冷相爲るが如し。無爲は則ち然らず。

問うて曰はく、『若し是生、住、滅畢竟無ならば、云何が論の中に名字を説くを得ん。』答へて曰はく、

幻の如く亦夢の如く、乾闥婆城の如く、所説の生住滅、其相も亦是の如し。生、住、滅の相有る無きこと決定す。凡人は貪著して有決定と謂ふ。諸の賢聖は憐愍して其顛倒を止めんと欲して、還つて其所著の名字を以て説を爲す。語言は同じと雖も、其の心は則ち異なる。是の如く生、住、滅の相を説けば、應に難ずること有るべからず。幻化の所作の如く其所由を責むべからず。中に於て憂喜の想有るべからず。但應に眼見すべきのみ。夢中の所見は實を求むべからざるが如く、乾闥婆城は日出の時現じて而も實有ること無く、但假に名字を爲し、久しからずして則ち滅するが如く、生、住、滅も亦是の如し。凡夫は分別して有と爲す。智者推求すれば則ち不可得なり。

中論觀作作者品第八

問うて曰はく、『現に作有り、作者有り、所用の作法有り。三事相合するが故に果報有り。』

【二】次に破、十一偈の中、初十一偈は作者を破す。中、初に人法の見有りといふを破す。中に四、初六偈は實有無門の破。

是故に作者業有るべし。

答へて曰はく、『上來の品品の中に一切法を破して皆餘有る無し。三相を破するが如し。

三相無なるが故に有無有る無し。有爲無なるが故に無爲無し。有爲、無爲無なるが故に一切法には盡く作と作者と無し。若し是れ有爲ならば、有爲の中に已に破せり。若し是れ無爲ならば、無爲の中に已に破せり。應に復問ふべからず。汝著心深きが故に復更に問ふ。今當に復答ふべし。

決定して作者有らば、決定の業を作さず

決定して作者無くも、無定の業を作さず

若し先に定んで作者有り、定んで作業有らば、則ち作すべからず。若し先に定んで作者無くも、亦作すべからず。何を以ての故に。

決定業には作無し、是業は無作者ならん

定の作者にも作無し、作者亦無業ならん

若し先に決定して作業有らば、應に更に作者有るべからず。又作者を離れて應に作業有るべきこと、但是事然らず。若し先に決定して作者有らば、應に更に作業有るべからず。

又作業を離れて、應に作者有るべきこと、但是事然らず。是故に決定の作者、決定の作業は作有るべからず。不決定の作者、不決定の作業も亦應に作有るべからず。何を以ての故に。本來無なるが故に。作者有り作業有るすら尚作有る能はず。何に況んや作者無く作業

に。本來無なるが故に。作者有り作業有るすら尚作有る能はず。何に況んや作者無く作業

に。本來無なるが故に。作者有り作業有るすら尚作有る能はず。何に況んや作者無く作業

に。本來無なるが故に。作者有り作業有るすら尚作有る能はず。何に況んや作者無く作業

に。本來無なるが故に。作者有り作業有るすら尚作有る能はず。何に況んや作者無く作業

に。本來無なるが故に。作者有り作業有るすら尚作有る能はず。何に況んや作者無く作業

無きをや。復次に、

若し定んで作者有り、亦定んで作業有らば

作者及び作業は、即ち無因に墮せん

若し先に定んで作者有り、定んで作業有りて、汝作者に作有りと謂はば、即ち無因と爲る。作業を離れて作者有り。作者を離れて作業有らば則ち因縁より有るに非ず。問うて曰はく、『若し因縁より作者、作業有らずんば、何の答有りや。』答へて曰はく、

若し無因に墮せば、則ち因無く果無く

作無く作者無く、所用の作法無し

若し作等の法無くんば、則ち罪福有る無し

罪福等無きが故に、罪福の報も亦無し

若し罪福の報無くんば、亦涅槃有る無し

諸の所作有るべきもの、皆空にして果有る無し

若し無因に墮せば一切法は則ち因無く果無し、能生の法を名けて因と爲し、所生の法を

名けて果と爲す。是二即ち無なり。是二無なるが故に、作無く作者無し、亦所用の作法無

く、亦罪福無し。罪福無きが故に亦罪福の果散及び涅槃の道無し。是故に無因より生ずる

を得ず。問うて曰はく、『若し作者不定にして不定業を作さば、何の答有りや。』答へて曰

はく、『一事無なるすら尙作業を起す能はず。何に況んや一事都て無なるをや。譬へば、化

【若し作者無く等】  
第二に半有半無門の破。

人虚空を以て舍と爲すが如し。但言説のみ有りて作者作業無し。

問うて曰はく、『若し作者無く作業無くんば、所作有る能はず。今作者有り作業有り。應に作有るべし。』答へて曰はく、

作者の定と不定とは、二の業を作す能はず

有無相違するが故に、一處よりせば則ち二無し

作者の定不定は定不定の業を作す能はず。何を以ての故に。有無相違するが故に、一處より二有るべからず。有は是れ決定、無は是れ不決定なり。一人一事なるに云何が有無を有せん。

復次に、

有は無を作る能はず、無は有を作る能はず

若し作と作者と有らば、其過先に説けるが如し

若し作者有りて而も業無くんば、何んが能く所作有らん、若し作者無くして而も業有るも、亦所作有る能はず。何を以ての故に。先に説けるが如く、有の中に若し先に業有らば、作者復何の作す所有らん。若し先に業無くんば、云何が作すを得べき。是の如くんば則ち罪福等の因縁、果報を破る。是故に偈の中に説く、「有は無を作る能はず、無は有を作る能はず、若し作と作者と有らば其過先に説けるが如し」と。

復次に、

【復次に有は無を  
等】第三に二有一  
無門の破。

【作者は定を作等】  
第四に一三門の破  
兩偈あり。

【若作無く作者無  
し等】第二に無人  
法見を破す。

作者は定を作さず、亦不定

及び定不定の業を作さず。其過先に説けるが如し

定業已に破る。不定業も亦破る。定不定業も亦破る。今一時に總じて破せんと欲するが

故に是偈を説く。是故に作者は三種の業を作す能はず。今三種の作者も亦業を作す能はず。

何を以ての故に。

作者は定なるも不定なるも、亦定亦不定なるも

業を作す能はず、其過先に説けるが如し

作者は定なるも、不定なるも、亦定亦不定なるも、業を作す能はず。何を以ての故に。

光に三種の過の因縁の如し。此中に應に廣く説くべし。是の如く、一切處に作者作業を求

むるに、皆不可得なり。

問うて曰はく、「若し作無く作者無しと言はば、則ち復無因に墮せん。」答へて曰はく、

「是業衆縁より生ず。假名にして有と爲す。決定有る無く、汝の所説の如くならず。何を以

ての故に。

業に因りて作者有り、作者に因りて業有り

業を成ずる義是の如し。更に餘事有る無し

業は先には決定無し。人に因りて業を起し、業に因りて作者有り。作者亦決定無し、作

業有るに因りて名けて作者とす。二事相合するが故に作と作者とを成ずるを得。若し相合

【三】第二段に受  
受者を破す。

より生ずるときは則ち自性無し。自性無きが故に空なり。空ならば則ち所生無し。但凡夫の憶想分別に隨ふが故に、作業有り作者有りと説く。第一義中には作業無く作者無し。

復次に、

(三)

作と作者とを破するが如く、受と受者とも亦爾り及び一切諸法も、亦應に是の如く破すべし

作と作者と相離るるを得ず。相離るるを得ざるが故に決定せず。決定無きが故に自性無きが如く受と受者とも亦是の如し。受を五陰身と名く。受者は是れ人なり。是の如く、人を離れて五陰無く、五陰を離れて人無し。但衆縁より生ず。受と受者との如く、餘の一切法も亦應に是の如く破すべし。

中論觀本住品第九

(二) 問うて曰はく、「有人の言はく、

眼耳等の諸根、苦樂等の諸法

誰か是の如き事を有す。是を則ち本住と名く

若し本住有る無くんば、誰か眼等の法を有せん

是故を以て當に知るべし、先に已に本住有りと

【觀本住品】本住  
と我の義、これ諸  
根の前に在り。即ち  
神の本たり。即ち  
如き實、在論には斯  
を破し、本來空の有  
【一】第一にあり。本  
義を明す。衆生空の  
先づ六根の前に就  
て本住無きを檢す

眼耳鼻舌身命等の諸根を名けん眼耳等の根と爲す。苦受、樂受、不苦不樂受、想、思、憶念等の心心數法を名けて苦樂等の法と爲す。有論師の言はく、「先に未だ眼等の法有らざるるとき、應に本住有るべし。是本住に因りて眼等の諸根增長するを得。」若し本住無くんば、身及び眼等の諸根、何に因りて生じて增長するを得と爲すや。」答へて曰はく、

若し眼等の根、及び苦樂等の法を離れて

先に本住有らば、何を以てか知らるべき

若し眼耳等の根、苦、樂等の法を離れて先に本住有らば、何を以てか説くべき、何を以てか知るべき。外法たる瓶衣等の如きは、眼等の根を以て知るを得、内法は苦樂等の根を以て知るを得。經中に説くが如し、「可壞は是れ色相、能受は是れ受相、能識は是れ識相なり」と。汝眼、耳、苦、樂、等を離れて、先に本住有りと説かば、何を以てか、知りて是法有りと説くを得べき。問うて曰はく、「有論師の言はく、「出入息視、嗅、壽命、思惟、苦、樂、憎、愛、動發等は是れ神の相なり。若し神有ること無くば、云何が出入息等の相有らん」と。是故に當に知るべし、眼耳等の根、苦樂等の法を離れて、先に本住有りと。」答へて曰はく、「是神若し有らば、應に身内に在りて壁中に柱有るが如くなるべきや。若し身外に在りて人鏡を被りたるが如くなるべきや。若し身内に在らば身は則ち壞すべからず。神常に内に在るが故に。是故に神は身内に在りと言ふは、但言説のみ有りて虛妄無實なり。若し身外に在りて身を覆ふこと鏡の如くならば、身は應に見るべからざるべし、神は細密

に覆ふが故に。亦應に壞すべからざるべし。而も今實に身の壞するを見る。是故に當に知るべし、苦、樂等を離れて先に餘法無し。若し臂を斷する時は神は縮みて内に在りて斷すべからずと謂はば、頭を斷する時も亦應に縮みて内に在りて死すべからざるべし。而も實には死有り。是故に知んぬ。苦樂等を離れて先に神在りといふは、但言説のみ有りて、虚妄無實なりと。復次に、若し身大なれば則ち神大なり。身小なれば則ち神小なり、燈大なれば則ち明大に、燈小なれば則ち明小なるが如しと言はば、是の如き神は則ち身に隨ふ、應に常なるべからず。若し身に隨はば、身無なるときは則ち神も無ならん。燈滅するときは即ち明滅するが如し。若し神無常ならば則ち眼、耳、苦、樂等と同じ。是故に當に知るべし。眼、耳等を離れて先に別の神無し。復次に、風狂病人の如きは自在を得ず、作すべからずして而も作す。若し神有りて是れ神の作主ならば、云何が自在を得ずと言はん。若し風狂病は神を惱さずんば、應に神を離れて別に所作有るべし。是の如く種種に推求するに、眼、耳等の根、苦樂等の法を離れて先に本住無し、若し必ず眼、耳等の根、苦、樂等の法を離れて本住有りと謂はば、是事有る無し。何を以ての故に。

若し眼耳等を離れて、而も本住有らば

亦應に本住を離れて、而も眼耳等有るべし

若し本住は眼耳等の根、苦樂等の法を離れて先に有らば、今眼耳等の根、苦樂等の法も亦應に本住を離れて而も有るべし。問うて曰はく、三事相離るるは爾るべし。但本住を有



らしめん。』答へて曰はく、

法を以て人有るを知る。人を以て法有るを知る

法を離れて何んが人有らん。人を離れて何んが法有らん

法とは眼耳苦樂等なり。人とは是れ本住なり。汝法有るを以ての故に人有るを知り、人有るを以ての故に法有るを知ると謂はば、今眼耳等の法を離れて何んが人有らん。人を離れて何んが眼耳等の法有らん。

復次に、

一切の眼等の根、實に本住有る無し

眼耳等の諸根は、異相にして分別す

眼耳等の諸根、苦樂等の諸法は、實に本住有る無し。眼に因りて色を緣にして眼識を生ず。和合因縁を以て眼耳等の諸根有るを知る。本住を以ての故に知るに非ず。是故に偈の中に説く、「一切の眼等の根實に本住有る無く、眼耳等の諸根各自能く分別す」と。問うて曰はく、

若し眼等の諸根本、住有る無くんば

眼等の一一の根、云何が能く摩を知らん

若し一切眼等の諸根、苦樂等の諸法、本住無くんば、今一一の根云何が能く摩を知らん。眼耳等の諸根には思惟無し、知ること有るべからずして而も實には塵を知る。當に知

ん。眼耳等の諸根には思惟無し、知ること有るべからずして而も實には塵を知る。當に知

【復次に等】二に六根の内に見いて本住無きを檢す。

べし、眼耳等の諸根を離れて更に能く塵を知る者有り。『答へて曰はく、』若し爾らば一べしの根の中に各知者有りと爲んや。一の知者諸根の中に在りと爲んや。二俱に過有り。何を以ての故に。

見者即聞者にして、聞者即受者ならば

是の如き等の諸根には、則ち應に本住有るべし

若し見者即ち是れ聞者にして、聞者即ち是れ受者ならば、則ち是れ一神なるべし。是の如き眼等の諸根には、應に先に本住有るべし。色聲香等には定んで知者有る無し。或は眼を以て聲を聞くこと、人の六向に有りて意に隨つて見聞するが如くなるべし。若し聞者見者は是れ一ならば、眼等の根に於て意に隨つて見聞すべし。但是事然らず。

若し見聞各異り、受者も亦各異らば

見時にも亦聞くべし。是の是きときは則ち神は多なり

若し見者、聞者、受者各異らば、則ち見時にも亦應に聞くべし。何を以ての故に。見者を離れて聞者有るが故に。是の如く鼻舌身の中、神應に一時に行すべし。若し爾らば人は一にして神は多く、一切の根を以て一時に諸塵を知らん。而も實には爾らず、是故に見者、聞者、受者俱に用ふべからず。

復次に、

眼耳等の諸根、苦樂等の諸法

【復次に等】三に  
爲大の中に就いて  
本住無きを檢す。

【二】 第二に諸根を破して諸法空の義を明す。

【三】 第三に外人が横に人法を計すを呵責す。

【應に難有るべからず】 品初に論主を難ずるを呵責す

従つて生ずる所の諸大、彼大にも亦神無し

若し人、眼耳等の諸根、苦樂等の諸法を離れて別に本住有りと謂はば、是事已に破せり。今眼耳等の所因の四大に於て、是四大の中にも亦本住無し。

問うて曰はく、『若し眼耳等の諸根、苦樂等の諸法に本住有る無きは爾るべし。眼耳等の諸根、苦樂等の諸法は有るべし。』答へて曰はく、

若し眼耳等の根、苦樂等の諸法

本住有る無くんば、眼等も亦應に無なるべし

若し眼、耳、苦、樂等の諸法に本住有る無くんば、誰か此眼耳等を有せん。何に縁りてか有ならん。是故に眼耳等も亦無し。

復次に、

眼等の本住無し、今も後も亦復無し

三世に無なるを以ての故に、有無の分別無し

本住を思惟し推求するに、眼等に於て、先に無く、今も後も亦無し。若し三世に無ならば、即ち是れ無生寂滅にして應に難有るべからず。若し本住無くんば、云何が眼等有ら

ん。是の如く、問答戲論則ち滅す、戲論滅するが故に、諸法則ち空なり。

中論觀燃可燃品第十

【觀燃可燃品】本品は前二品の意を譬喩もて説く、燃は火、可燃は薪なり。火と薪との喩もの破す。【二】先づ外の喩一に一異門の破。

(一七) 問うて曰はく、「應に受と受者と有るべきは燃と可燃との如くなるべし。燃は是れ受者、可燃は是れ受、謂ゆる五陰なり。」答へて曰はく、「是事ならず。何を以ての故に。燃と可燃と俱に成ぜざるが故に。燃可燃、若は一法を以て成ずるや。若は二法を以て成ずるや。二俱に成ぜざるなり。問うて曰はく、「且く一異の法を置け。若し燃と可燃と無しと言はば、今云何が一異の相を以て破せん。兔角、龜毛の無なるが故に破すべからざるが如し。世間の眼見は、實に事有りて後に思惟すべし。金有りて然る後に焼くべく、鍛ふべきが如し。若し燃と可燃と無くば、一異の法を以て思惟すべからず。若し汝一異の法有りと許さば、當に知るべし、燃と可燃と有り。若し有を許さば、則ち已有爲らん。」答へて曰はく、「世俗の法に隨つて言説せば、應に過有るべからず。燃と可燃と、若は一と説き、若は異と説くも、名けて受と爲さず。若し世俗の言説を離るれば則ち所論無し。若し燃と可燃とを説かずんば、云何が能く所破有らん。若し所説無くんば則ち義明なるべからず。論者有りて、有無を破せんと欲せば、必ず斷に有無を言ふべきが如し。有無を稱するを以ての故に有無を受くるには非ず。是れ世間の言説に隨ふを以ての故に答無し。若し口に言有るときは便ち是れ受ならば、汝破を言へば即ち自破と爲る。燃と可燃とも亦是の如し。言説有りと雖

も亦復受けず、是故に一異の法を以て燃と可燃とを思惟するに、二俱に成ぜず、何を以ての故に。

若し燃是れ可燃ならば、作と作者と則ち一なり

若し燃は可燃と異ならば、可燃を離れて燃有るべし

燃は是れ火、可燃は是れ薪なり。作者は是れ人、作は是れ業なり。若し燃と可燃と一なるときは則ち作と作者とも亦應に一なるべし。若作と作者と一なるときは則ち陶師と瓶と一なり。作者は是れ陶師、作は是れ瓶なり。陶師は瓶に非ず、瓶は陶師に非ず。云何が一

爲らん。是を以て作と作者とは一ならず。故に燃と可燃とも亦一ならず。若し一は不可なりと謂はば、則ち應に異なるべし。是れ亦然らず。何を以ての故に、若し燃は可燃と異なるば、應に可燃を離れて別に燃有るべし。是れ可燃は燃と分別せば、處處に可燃を離れて應に燃有るべし。而も實には爾らず。故に異も亦不可なり。復次に

是の如くならば常に應に燃すべく、可燃に因りて生ぜざるべし

則ち燃心の功無し、亦無作の火と名く

若し燃と可燃と異なるときは、則ち燃は可燃を待たずして而も常に燃なり。若し常に燃なるときは、則ち自ら其體に住して因縁を待たず。人功則ち空し。人功とは將に火を護りて燃せしめんとするなり。是功は現に有り。是故に知る。火は可燃に異ならず。復次に、若し燃が可燃に異ならば、燃は即ち無作なり。可燃を離れて火は何所にか燃せん。若し爾ら

ば、火は則ち無作なり。無作の火は是事有る無し。問うて曰はく、『云何が火が因縁より生ぜずんば、人功亦空しき。』答へて曰はく、

燃は可燃を待たざるときは、則ち縁より生ぜず

火若し常に燃ぜば、人功則ち應に空しかるべし

燃と可燃と若し異ならば、則ち可燃を待たずして燃有らん。若し可燃を待たずして燃有らば則ち相因の法無し。是故に因縁より生ぜず。復次に若し燃が可燃に異らば、則ち應に常に燃すべし。若し常に燃せば應に可燃を離れて別に燃を見るべく、更に人功を須ひざるべし。何を以ての故に。

若し汝燃時を名けて、可燃と爲すと謂はば

爾時但薪のみ有り、何物か可燃を燃する

若し先に薪有りて燃時を可燃と名くと謂はば、是事然らず、若し燃を離れて、別に可燃有らば、云何が燃時を可燃と名くと言はん。復次に、

若し異ならば則ち至らず、至らざれば則ち焼けず

焼けざれば則ち滅せず、滅せざれば則ち常住なり

若し燃が可燃に異らば則ち燃は可燃に至るべからず。何を以ての故に、相待して成せざるが故に。若し燃が相待して成ぜずんば則ち自ら其體に住す。何んが可燃を用ひんや。是故に至らず。若し至らずんば則ち可燃を燃せず。何を以ての故に。至らずして而も能く焼

くこと有る無きが故に。若し燒けずんば則ち滅無し。應に常に自相に住せん。是事爾らず。問うて曰はく、

燃は可燃と異にして、而も能く可燃に至ること

此れ彼人に至り、彼人此人に至るが如し

燃は可燃と異にして而も能く可燃に至ること、男の女に至るが如く、女の男に至るが如

し。二答へて曰はく、

若し燃と可燃とは、二にして俱に相離ると謂はば

是の如き燃は則ち能く、彼可燃に至らん

若し燃を離つて可燃有り。若し可燃を離れて燃有りて各自ら成ぜば、是の如きは則ち

應に燃は可燃に至るべし。而も實には爾らず。何を以ての故に。燃を離れて可燃無く、可

燃を離れて燃無きが故に。今男を離れて女有り、女を離れて男有り。是故に汝の喩は非な

り。喩成せざるが故に燃は可燃に至らず。

問うて曰はく、一燃と可燃とは相待して而も有り。可燃に因りて燃有り、燃に因りて可燃

有り。一法相待して成ず。二答へて曰はく、

若し可燃に因りて燃有り、燃に因りて可燃有らば

先に定んで何の法有りて、而も燃可燃有るや

若し可燃に因りて而して燃成ぜば、亦應に燃に因りて可燃成すべし。是中、若し先に定

【燃と可燃とは等】  
二相待門の破、  
四傷の中、初二は  
成待を破す。

んで可燃有らば、則ち可燃に因りて而も燃成ぜん。若し先に定んで燃有らば、則ち燃に因りて可燃成ぜん。今若し可燃に因りて而も燃成せば、則ち先に可燃有りて、而も後に燃有らん。應に燃を待つて而も可燃有るべからず。何を以ての故に。可燃は先に在り、燃は後に在るが故に。若し燃が可燃を燃ぜずば是れ則ち可燃成ぜず。又可燃は餘處に在りて燃を離れざるが故に、若し可燃成ぜずんば燃も亦成ぜず、若し先に燃有り。後に可燃有らば、燃も亦是の如きの過有り、是故に燃と可燃との二俱に成ぜず。復次に、

若し可燃に因りて燃有らば、則ち燃は成じて復成ぜん

是れ可燃の中と爲す、則ち燃有る無しと爲す

若し可燃に因りて而も燃を成ぜんと欲せば、則ち燃は成じ已りて復成ぜん。何を以ての故に、燃は自ら燃の中に住す。若し燃自ら其體に住せずして可燃に従りて成せば、是事有る無し。是故に是燃が可燃より成する有らば、今則ち燃成じて復成ぜん。是の如きの過有り。復可燃に燃無きの過有り。何を以ての故に。可燃は燃を離れて自ら其體に住するが故に。是故に燃可燃相因待すること、是事有る無し。復次に、

若し法因待して成ぜば、是法還つて待を成す

今則ち因待無く、亦所成の法無し

若し法因待して成ぜば、是法還つて本の爲に因待と成る。是の如くんば決定して則ち二事無し。可燃に因りて而も燃を成じ、還燃に因りて而も可燃を成するが如し。是れ則ち二

【若し法等】次に  
兩傷は待の故に成  
ずといふを破す。



【是故に等】三に  
因不因門の破。

【復次に燃は等】  
四に内外門の破。

俱に無定なり。無定なるが故に不可得なり。何を以ての故に。

若し法、待有りて成ぜば、未だ成ぜざるに云何が待せん

若し成じ已りて待有らば、成じ已りて何んが待を用ひん

若し法因待して成ぜば、是法先に未だ成ぜず。未成は則ち無なり。無なるときは則ち云何が因待有らん。若し是法先に已に成ぜば、已成何んが因待を用ひん。是二俱に相因待せず。是故に汝先に燃、可燃相因待して成ずと説くは、是事有る無し。

是故に、

可燃に因りて燃無く、因らざるも亦燃無し

燃に因りて可燃無く、因らざるも可燃無し

今可燃に因待して燃成ぜず。可燃に因待せざるも燃亦成ぜず。可燃も亦是の如し。燃に因るも燃に因らざるも二俱に成ぜず。是過先に已に説けり。

復次に、

燃は餘處より來らず、燃處にも亦燃無し

可燃も亦是の如し、餘は去來に説けるが如し

燃は餘方より來りて可燃に入るに非ず。可燃の中にも亦燃無し。薪を析いて燃を求むるに不可得なるが故に。可燃も亦是の如し。餘處より來りて燃中に入るに非ず。燃の中にも亦可燃無し。燃已りては燃ぜず。未だ燃ぜざるも燃ぜず。燃時にも燃ぜず。是亦去來の中

【可燃が即ち燃等】  
内出外來及び内外  
和合して五に三時  
門の破あり、今は  
六に五求門の破。

【二】第二次に法  
説を破す。

【三】第三に既に  
法論窮れば以て外  
人を責す。

に説けるが如し。是故に、

可燃が即ち燃なるに非ず、可燃を離れても燃無し

燃は可燃を有する無く、燃の中にも可燃無し

可燃中に燃無し。可燃即ち燃なるに非ず。何を以ての故に。先に已に作と作者との一の

過を説けるが故に、可燃を離れて燃無し。常燃等の過有るが故に。燃は可燃を有する無く、

燃の中に可燃無く、可燃の中に燃無し。異の過有るを以ての故に、三皆成ぜず。

問うて曰はく、『何が故に燃可燃を説くや。』答へて曰はく、『燃は可燃に囚りて燃有る

が如く、是燃の如く受に受者有り。受は五陰に名く。受者は人に名く。燃可燃成ぜざるが

故に、受も受者も亦成ぜず。何を以ての故に。

燃と可燃との法を以て、受と受者との法を説き

及び以て瓶衣、一切等の諸法を説く

可燃は燃に非ざるが如く、是の如く受は受者に非ず。作と作者と一なるの過有るが故に。

又受を離れて受者無し。異は不可得なるが故に。異の過を以ての故に。三皆成ぜず。受と

受者との如く、外の瓶衣等の一切法皆上説に同じく、無生にして畢竟空なり。

是故に、

若し人我有り、諸法は各異相なりと説かば

當に知るべし是の如き人、佛法の味を得ず

【觀本際品】生死は始もなく終もなく本際畢竟不可得と正觀し、更に一切法皆空と教ふるを本品の要旨とす  
 【一】先づ生死有り立つ。  
 【二】次に破、中に二、第一に生死に生無しと破す  
 中間無しといふを破す。

諸法本より已來無生にして、畢竟寂滅の相なり。是故に品末に是偈を説く。若し人我相を説くこと、擯ず部衆の説くが如く、色即ち是れ我なりと言ふを得ず。色を離れて是れ我有り、我は第五不可説藏中に在りと言ふを得ず。薩婆多部衆の諸法は各各相有り、是れ聲、是れ不善、是れ無記、是れ有漏無漏、有爲無爲等の別異有りと説くが如し。是の如き等の人は諸法寂滅の相を得ず。佛語を以て種種の戲論を作すなり。

中論觀本際品第十一

問うて曰はく、「無本際經に説く、「衆生生死に往來して本際不可得なり」と。是中、衆生有り生死有りと説く。何の因縁を以ての故に而も是説を作すや。」

答へて曰はく、

大聖の所説、本際不可得なり

生死始有る無く、亦復終有る無し

聖人に三種有り。一には外道五神通、二には阿羅漢、辟支佛、三には得神通の大菩薩なり。佛は三種の中に於て最上なるが故に大聖と言ふ。佛の言説したまふ所、是れ實説ならざるは無し。生死始無し。何を以ての故に。生死の初と後とは不可得なり。是故に無始と言ふ。汝若し初後無くも應に中有るべしと謂はば、是れ亦然らず。何を以ての故に。

【是故に此中に等】  
二に無生死といふ  
を破す。

若し始終有る無くんば、中に當に云何が有らん  
是故に此中に於て、先後共も亦無し  
中と後とに因るが故に初有り、初と中とに因るが故に後有り。若し初無く、後無くんば、  
云何が中有らん。生死の中には、初と中と後と無し。是故に説く、先、後、共も不可得な  
り。何を以ての故に。

若し先に生有り。後に老死有らしめば  
不生死にして生有らん、生ぜずして老死有らん  
若し先に老死有りて、而して後に生有らば

是れ則ち無因と爲す、不生にして老死有らんや  
生死の衆生、若し先に生じ漸く老有り而る後に死有らば、則ち生には老死無し。法は應  
に生じて老死有り。老死して生有るべきなり。又老死せずして而も生ぜば、是れ亦然らず。  
又生に因らずして老死有らん。若し先に老死し後に生ぜば、老死は則ち無因なり。生は後  
に在るが故に。又不生に何んが老死有らん。若し生、老、死の先後は不可なりと謂はば、  
一時に成ずと謂ふも是れ亦過有り。何を以ての故に。

生及び老死は、一時に共なるを得ず  
生時期ち死有り、是二俱に無因ならん  
若し生、老、死一時ならば、則ち然らず。何を以ての故に。生時期ち死有るが故に。法

【三】 第二に兩偈もて例して一切法の本際無しと破す

【觀苦品出】 世俗諦より觀て外人も苦の因を識るも苦の本を窮めざれば是れ定性と轉す。今其因縁の苦に定性有ること無く畢竟不可得と明すを本品とす。

は應に生時に有り、死時に無なるべきなり。若し生時に死有らば、是事然らず。若し一時に生ぜば則ち相因ること有る無し。牛角一時に出づるときは則ち相因らざるが如し。是故に、

若し初後共、是れ皆然らざらしめば

何が故に戲論して、生老死有りと謂ふや

生、老、死を思惟するに、三皆過有るが故に。即ち無生にして畢竟空なり。汝今何が故に貪著して生老死を戲論し、決定相有りと謂ふや。

復次に、

諸の有ゆる因果、相及び可相法

受及び受者等、有ゆる一切法

但生死に於て、本際不可得なるのみに非ず

是の如き一切法は、本際皆亦無なり

一切法とは謂ゆる因果、相可相、受及び受者等にして、皆本際無し。但生死に本際無き

のみに非ず。略して開示するを以ての故に生死に本際無しと説くのみ。

中論觀苦品第十二

【一】先づ第一に苦は自作等と計する四計を總じて非す。

【二】次八偈に四計を破する中、一に七偈もて不自他を釋す。中、初偈の兩偈に法の不自他を明す。

(二) 有人説いて曰はく、

自作と及び他作と、共作と無因作と

是の如く諸苦を説くも、果に於ては則ち然らず

有人言はく、「苦惱は自作なり」と。或は言はく、「他作なり」と。或は言はく、「亦是自作、亦是他作なり」と。或は言はく、「無因作なり」と。果に於ては皆然らず。果に於ては皆然らずとは、衆生は衆縁を以て苦を致し、苦を厭うて滅を求めんと欲す。苦惱の實の因縁を知らずして、四種の謬有り。是故に果に於ては皆然らずと説く。何を以ての故に。

苦若し自作ならば、則ち縁より生ぜず

此陰有るに因りての故に、而も彼陰生する有ればなり

若し苦自作ならば、衆縁より生ぜず自とは自性より生ずるに名く。是事然らず。何を以ての故に。前の五陰に因りて、後の五陰の生有ればなり。是故に苦は自作なるを得ず。

問うて曰はく、「若し此五陰は彼五陰を作ると言はば、則ち是れ他作なり。」答へて曰はく、「是事然らず。何を以ての故に。」

若し此五陰、彼五陰に異ると謂はば

是の如きは則ち、他より苦を作すと云ふべし

若し此五陰は彼五陰と異り、彼五陰は此五陰と異ならば、應に他より作すべし。縷と布と異ならば、應に縷を離れて布有るべきが如し。若し縷を離れて布無くば、則ち布は縷に

と異ならば、應に縷を離れて布有るべきが如し。若し縷を離れて布無くば、則ち布は縷に

と異ならば、應に縷を離れて布有るべきが如し。若し縷を離れて布無くば、則ち布は縷に

と異ならば、應に縷を離れて布有るべきが如し。若し縷を離れて布無くば、則ち布は縷に

と異ならば、應に縷を離れて布有るべきが如し。若し縷を離れて布無くば、則ち布は縷に

と異ならば、應に縷を離れて布有るべきが如し。若し縷を離れて布無くば、則ち布は縷に

と異ならば、應に縷を離れて布有るべきが如し。若し縷を離れて布無くば、則ち布は縷に

と異ならば、應に縷を離れて布有るべきが如し。若し縷を離れて布無くば、則ち布は縷に

【自作なれば是人等】三例に人の不  
自他を明す。

異ならず。是の如く彼五陰、此五陰に異ならば、則ち應に此五陰を離れて彼五陰有るべく、若し此五陰と離れて彼五陰無くば、則ち此五陰は彼五陰に異ならず。是故に應に苦は他より作らると言ふべからず。

問うて曰はく、『自作ならば是人自ら苦を作し自ら苦を受けん。』答へて曰はく、

若し人自ら苦を作さば、苦を離れて何んが人有りて

而して彼人に於て、而も能く自ら苦を作すと謂はん

若し人自ら苦を作すと謂はば、五陰の苦を離れて何の處にか別に人有りて、而も能く自ら苦を作さん。應に是人を説くべくして、而も説くべからず。是故に苦は人の自ら作すに非ず。若し人自ら苦を作さず、他人苦を作して此人に與ふと謂はば、是れ亦然らず。何を以ての故に。

若し苦他人作して、而して此人に與ふれば

若し當に苦を離れたるに、何んが此人の受くること有るべき

若し他人苦を作し、此人に與ふといはば、五陰を離れて、此人の受くること有る無し。  
復次に、

苦著し彼人作りて、持して此人に與ふれば

苦を離れたるに何んが人有りて、而も能く此に授けん

若し彼人、苦を作りて此人に授與すと謂はば、五陰の苦を離れて何んが彼人、苦を作り

て、持して此人に與ふる有らん。若し有らば應に其相を説くべし。

復次に、

【復次に自作若し等】二偈に人法に自他なきを結す。

自作若し成ぜずんば、云何が彼苦を作さん

若し彼人苦を作さば、即ち亦自作と名く

種種の因縁によりて彼自作の苦成ぜず。而も他作の苦を言はんも、是れ亦然らず。何を

以ての故に、此と彼と相待するが故に。若し彼苦を作さば、彼に於て亦自作の苦と名く。

自作の苦は先に已に破せり。汝が受くる自作の苦成ぜざるが故に。他作も亦成ぜず。復次に、

に、

苦は自作と名けず、法は自作の法ならず

彼自體有る無し、何んが彼が作せし苦有らん

自作の苦然らず。何を以ての故に。刀が能く自ら割く能はざるが如く、是の如く法も自

ら法を作す能はず。是故に自作なる能はず。他作も亦然らず。何を以ての故に。苦を離れ

て彼自性無し。若し苦を離れて彼自性有らば、應に彼苦を作すと云ふべし。彼も亦即ち是

れ苦なり、云何が苦は自作の苦ならん。

問うて曰はく、『若し自作、他作然らずんば、應に共作有るべし。』答へて曰はく、

若し此彼の苦成ぜば、應に共作の苦有るべし

此彼すら尙作無し、何に混んや無因作をや

【若し自作他作等】次に共作及び無因作を破す。



【三】第三に例して諸法を破す。

【觀行品】行とは流動起作して念今品は一切行を觀ずるに畢竟不可得と知るを要とす。【一】初に外人の虚妄の人法ありと執するを破す。中に四、一に虚妄の人法ありと立つ。

自作他作すら猶尙過有り、何に況んや無因作をや。無因は過多し。破作者品の中に説けるが如し。

復次に、

但に苦を説くに、四種の義成ぜざるのみに非ず

一切外の萬物に、四種の義亦成ぜず

佛法の中には五受陰を説いて苦と爲すと雖も、外道人有りて苦受を苦と爲すと謂ふ。是故に説く、但に苦を説くに四種の義成ぜざるのみにあらず、外の萬物、地水山木等、一切の法も皆亦成ぜず。

中論觀行品第十三

問うて曰はく、

佛經の所説の如きは、虚誑は妄取の相なり

諸行は妄取の故に、是を名けて虚誑と爲す

佛經の中に説く、虚誑は即ち是れ妄取の相なり。第一實とは謂ゆる涅槃にして妄取の相に非ず。是經説を以ての故に、當に知るべし、諸行に虚誑あり、妄取の相なればなり。』答へて曰はく、

【虚誑は妄取なら  
ば等】二に論主の  
破。

虚誑は妄取ならば、是中何の取る所ぞ。

佛の是の如き事を説くは、以て空の義を示さんと欲するなり。

若し妄取の法即ち是れ虚誑ならば、是諸行の中に何の取る所とか爲す。佛の是の如く説くは、當に知るべし空の義を説くなり。問うて曰はく、『云何が一切の諸行皆是れ空なりと知るや。』答へて曰はく、『一切の諸行は虚妄の相なるが故に空なり。諸行は生滅にして住せず。自性無きが故に空なり。諸行を五陰と名く。行より生ずるが故に。五陰を行と名く。凡五陰皆虚妄にして定有る無し。何を以ての故に。嬰兒の時の色は匍匐の時の色に非ず、匍匐の時の色は行時の色に非ず、行時の色は童子の時の色に非ず、童子の時の色は壯年の時の色に非ず、壯年の時の色は老年の時の色に非ざるが如し。色の如く念念に住せざるが故に、決定性を分別するに不可得なり。嬰兒の色を即ち是れ匍匐と爲し。乃至老年の色を異と爲さば、二俱に過有り。何を以ての故に。若し嬰兒の色は即ち是れ匍匐の色乃至老年の色ならば、是の如くれば則ち是れ一色にして皆嬰兒爲り、匍匐乃至老年有る無し。又迦闍の如きは、常に是れ濕地にして終に乾と作らざるべし。何を以ての故に。色常に定まるが故に。若し嬰兒の色匍匐の色に異ならば、則ち嬰兒は匍匐と作らず。匍匐は嬰兒と作らず。何を以ての故に。二乃色は異なるが故に是の如く童子と少年と壯年と老年との色相續すべからず。親の法を失ふ有りて、父無く子無からん。若し濡らば唯嬰兒のみ有りて常に父を得べく、餘即ち匍匐乃至老年は分有るべからず。是故に二俱に過有り。

問うて曰はく、『色は不定なりと雖も、嬰兒の色滅し已りて、相續して更に乃至老年の色を生ず。上の如き過有る無かるべし。』答へて曰はく、『嬰兒の色相續して生ぜば、滅し已りて相續して生ずと爲すや。滅せずして相續して生ずと爲すや。若し嬰兒の色滅せば云何が相續有らん。無因を以ての故に。薪の可燃有りと雖も火滅するが故に相續有る無きが如し。若し嬰兒の色滅せずして而も相續せば、即ち嬰兒の色は滅せず。常に本相に住して亦相續無し。問うて曰はく、『我滅不滅の故に相續して生ずと云説かず。但不住の相、生に似るが故に、相續して生ずと説く。』答へて曰はく、『若し爾らば、則ち定色有りて而も更に生ぜん。是の如くならば應に千萬種の色有るべし。但是事然らず。是の如くんば亦相續無し。是の如く一切處に色を求むるに、定相有る無し。但世俗の言説を以ての故に有るなり。已蒸樹は實を求むるに不可得にして但皮葉のみ有るが如し。是の如く智者は色相を求むるに、念に滅して更に實の色を得べき無し。不住の色彩色相、相似に次第に生じ、分別すべきこと難し。燈炎は定色を分別するに不可得なるが如し。是定色より更に色生ずる有るも不可得なり。是故は色は無性なるが故に空なり。但世俗の言説を以ての故に有り。受も亦是の如し。智者種種に觀察するに、次第相似の故に生滅し、別知すべきこと難し。水沍の相續あるが如し。但覺を以ての故に、三受身に在りと説く。是故に應に知るべし、受は色と同じく説く。想は名相。因りて生ず。若し名相を離るるときは則ち生ぜず。是故に佛説きたまはく、『分別して名字の相を知る。故に名けて想と爲す』と。決定して先に有なるに非ず。

【諸行も亦等】今別して五陰を破する中、最後に五陰を破するは觀行品なれば廣く破せん爲の故なり。

衆緣より生じて定、性無し、定性無し、定性無きが故に影の形に隨ふが如し。形に因りて影有り、形無くれば即ち影無し。影に決定、性無し。若し定んで有ならば、形を離れて應に影有るべし。而も實には爾らず。是故に衆緣より生じて自性無きが故に不可得なり。想も亦是の如し。但外の名相に因りて、世俗の言説を以ての故に有なり。識は色聲香味觸等と眼耳鼻舌身等とに因りて生ず。眼等の諸根別異なるを以ての故に識に別異有り。是識は色に在りと爲すや、眼に在りと爲すや、中間に在りと爲すや、決定有る爲し、但生じ已りて塵を識り、此人を識り彼人を識る。此人を知るの識は即ち是れ彼人を知るの識と爲んや、異と爲んや。是二分別すべきこと難し。眼識の如く耳識も亦分別すべきこと難し。分別し難きを以ての故に或は一と言ひ、或は異と言ひ、決定の分別有る無し。但衆緣より生ずるが故に。眼等分別するが故に、空にして自性無し。伎人の一珠を含み、出し已りて復人に示せば、則ち疑を生ずるが如し。是れ本の珠と爲んや、更に異ありと爲んやと。識も亦是の如し。生じ已りて更に生ず。是れ本の識爲りや。是れ異の識爲りや。是故に當に知るべし、識住せざるが故に、自性無く、虚誑なること幻の如しと。諸行亦是の如し。諸行とは身口意なり。行に二種有り。淨と不淨となり。何等をか不淨と爲す。衆生を憍す貪著等を不淨と名く。衆生を憍さざる實語不貪著等を淨と名く。或は増或は減なり。淨行の者は人中、欲天、色天、無色天に在り、果報を受け已りて則ち減ずるも、還作すが故に増と名く。不淨行の者も亦是の如し。地獄、畜生、餓鬼、阿修羅の中に在り、果報を受け已りて則ち

減するも、還作すが故に増と名く。是故に諸行に増有り減有るが故に住せず。人病有るが如し。宜に隨ひ將に適すれば病則ち除愈す。將に適せざれば病則ち還集まる。諸行亦是の如し。増有り減有るが故に決定ならず。但世俗の言説を以ての故に有なり。世諦に因るが故に第一義諦を見るを得。謂ゆる無明は諸行を緣じ、諸行より識著有り、識著の故に名色有り、名色より六入有り、六入より觸有り、觸より受有り、受より愛有り、愛より取有り、取より有有り、有より生有り、生より老、死、憂、悲、苦、惱、恩愛別苦、怨憎會苦等有り。是の如き諸苦は皆行を以て本と爲す。佛は世諦を以ての故に説く。若し第一義諦を得、眞智慧を生ぜば、則ち無明息む。無明息むが故に諸行も亦集せず。諸行集せざるが故に見諦所斷の身見、疑、戒取等斷じ、及び思惟所斷の貪、悲、色染、無色染、調戲、無明亦斷ず。是斷を以ての故に一一の分滅す。謂ゆる無明、諸行、識、名色、六入、觸受、愛、取、有、生、老、死、憂、悲、苦、惱、恩愛別苦、怨憎會苦等皆滅す。是滅を以ての故に、五陰身は畢竟滅して更に餘有る無し。唯但空のみ有り。是故に佛は空の義を示さんと欲するが故に、諸行の虚誑を説く。復次に諸法は性無きが故に虚誑なり。虚誑なるが故に空なり。偈に説くが如し。

諸法は異有るが故に、皆是れ無性なりと知る  
 無性の法も亦無なり、一切法空なるが故に

諸法は性有る無し。何を以ての故に。諸法は生ずと雖も自性に住せず。是故に無性なり。

如し嬰兒の定んで自性に住せは、終に匍匐乃至老年を作さす。而るに嬰兒は次第に相續して異相有りて匍匐乃至老年を現す。是故に説く、諸法の異相を見るが故に無性なりと知る。問うて曰はく、『若し諸法異相にして無性ならば、即ち無性の法有り、何の咎有りや。』答へて曰はく、『若し無性ならば云何が法有らん。云何が相有らん。何を以ての故に。根本有る無きが故に。但性を破せんが爲の故に無性を説く、は無性の法若し有ならば一切法は空なりと名けず。若し一切法空ならば云何が無性の法有らん。』

問うて曰はく、

【諸法若し等】 三  
に外人の救。

【答へて曰はく等】  
西に三偈もて救を  
破す。

諸法若し無性ならば、云何が嬰兒乃至老年に於て、而も種種の異有りと説くや

諸法若し無性ならば則ち異相有る無し。而も汝異相有り、是故に諸法の性有りと説く。

若し諸法の性無くんば云何が異相有らん。』答へて曰はく、

若し諸法に性有らば、云何が異なるを得ん

若し諸法に性無くんば、云何が異なる有らん

若し諸法に決定して性有らば、云何が異性を得べき。決定有を名けて變異すべからずと

す。眞金は變すべからざるが如く、又暗性は變じて明と爲らず、明性は變じて暗と爲ら

ざるが如し。復次に、

是法に則ち異無く、異法にも亦異無し

【二】第二段に外人の有空の義に執するを破す。

壯は老と作らず、老も亦壯と作らざるが如し。

若し法に異有らば、則ち異相有るべし。即ち是法を異と爲せんや、異の法を異と爲んや。是二然らず。若し即ち是法異ならば、則ち老は應に老と作すべきに、而も老は實には老と作さず。若し異の法異ならば、老は壯と異り壯は應に老と作すべし。而も壯は實には老と作さず。二俱に過有り。

問うて曰はく、『若し法即ち異ならば、同の咎か有る。今眼見に年少にして日月歳數を經て則ち老となるが如し。』

答へて曰はく、

若し是法即ち異ならば、乳は應に即ち是れ酪なるべし

乳を離れて何の法有りて、而も能く酪を作すや

若し是法即ち異ならば、乳は應に即ち是れ酪なるべく、更に因縁を須ひざるべし。是事然らず。何を以ての故に。乳と酪とは種種の異有るが故に、乳は即ち是れ酪ならず。是故に法は即ち異ならず。若し異の法を異と爲すと謂はば、是れ亦然らず。乳を離れて更に何物か有りて酪と爲らん。是の如く思惟するに是法は異ならず。異の法も亦異ならず。是故に應に偏に所執有るべからず。

(三)

問うて曰はく、『是を破し異を破すも、猶空の在る有らん。空は即ち是れ法なり。』答へて曰はく、

第三段に空  
有非非有一切を  
皆破す。

若し不空の法有らば、即ち應に空の法有るべし  
實には不空の法無し、何んが空の法有るを得ん

若し不空の法有らば、相因の故に應に空の法有るべし。而も上來種種の因縁もて不空の

法を破せり。不空の法無きが故に則ち相待無し、相待無きが故に何んが空の法有らん。

問うて曰はく、「汝不空の法無きが故に空の法亦無しと説く。若し爾らば即ち是れ空を説

くなり。但相待無きが故に應に執有るべからず。若し對有らば應に相待有るべし。若し對

無くば則ち相待無し。相待無きが故に則ち相無し。相無きが故に則ち執無し。是の如きを

即ち空を説くと爲す。」答へて曰はく、

大聖の空の法を説くは、諸見を離せんが爲の故なり

若し復空有りと見ば、諸佛の化せざる所なり

大聖は六十二の諸見、及び無明、愛等の諸煩惱を破せんが爲の故に空を説きたまふ。若

し人空に於て復見を生ぜば、是人化すべからず。譬へば病有らば須らく藥を服せば治すべ

く、若し藥復病と爲らば則ち治すべからざるが如し。火の薪より出づれば、水を以て滅

すべきが如し。若し水より生ぜば何を用てか滅することを爲さん。空は是れ水の如く、能

く諸煩惱の火を滅す。人有り、罪重く、貪著の心深く、智慧鈍きが故に、空に於て見を生

じて、或は空有りと謂ひ、或は空無しと謂ふ。有無に因りて還煩惱を起す。若し空を以て

此人を化せば則ち我久しく是空を知ると言はん。若し是空を離れては則ち涅槃の道無し。



經に説くが如し、空、無相、無作の門を離れて解脫を得ば、但言説有るのみ」と。

中論觀合品第十四

【觀合品】 上の六情品の下に六情の不可得を觀ぜざるも義未だ盡くざるものあれば今根塵の和合について檢して其不可得なるを觀ずるを本品とす。  
【一】 先づ發起。  
【二】 次に正破、八偈の中、前二偈は異を縱して合を奪ふ。

二二二 説いて曰はく、「上に破根品の中に見、所見、見者皆成ぜずと説けり。是三事は異法の故に則ち合無し。合無きの義、今當に説くべし。問うて曰はく、「何が故に眼等の三事合無きや。」

三三三 答へて曰はく、

見可見見者、是三各異方なり

是の如く三法異にして、終に合時有る無し

見は是れ眼根、可見は是れ色塵、見者は是れ我なり。是三事各異處に在りて終に合時無し。異處とは眼は身内に在り、色は身外に在り、我は或は言ふ身内に在りと、或は言ふ一切處に遍しと。是故に合無し。復次に、若し見法有りと謂はば、合して而して見ると爲すや、合せずして而も見ると爲すや、二俱に然らず。何を以ての故に。若し合して而して見ば、塵有る處に隨つて應に根有り我有るべし。但是事然らず。是故に合せず。若し合せずして而も見ば、根と我と塵とは各異處に在るも亦應に見有るべし。而も見ず。何を以ての故に、眼根は此に在りて遠處の塵を見ざるが如し。是故に二俱に見ず。問うて曰はく、「我

【染と可染等】次  
 五偈は正しく異有  
 ること無しと破す  
 中初二は無異を標  
 す。

と意と根と塵の四事合するが故に、知生ずる有りて能く瓶衣等の萬物を知る。是故に、見、  
 可見、見者有り。』答へて曰はく、『是事は根品の中に已に破せり。今當に更に説くべし。  
 汝四事合するが故に知生ずと説くも、是知は瓶衣等の物を見已りて生ずと爲すや。未だ見  
 ずして而も生ずと爲すや。若し見已りて生ぜば、知は則ち用無けん。若し未だ見ずして而  
 も生ぜば、是れ則ち未だ合せざるなり。云何が知の生ずる行らん。若し四事一時に合して  
 而して知生ずと謂はば、是れ亦然らず。若し一時に生ぜば則ち相待無し。何を以ての故に、  
 先に瓶有りて、次に見、後に知生ず、一時ならば則ち先後無し。知無きが故に見と可見と  
 見者と亦無し。是の如く諸法は、幻の如く夢の如くにして定相有る無し。何んが含有るを  
 得んや。合無きが故に空なり。復次に、

染と可染と、染者とも亦復然り

餘の入餘の煩惱も、皆亦復是の如し

見と可見と見者との合無きが故に、染と可染と染者とも亦應に合無かるべし。見と可見  
 と見者との三法を説くが如し。則ち聞と可聞と聞者との餘の入等を説く。染と可染と染者  
 とを説くが如く、則ち瞋と可瞋と瞋者と餘の煩惱等を説く。

復次に、

異法は當に含有るべし。見等は異有る無し

異相成ぜざるが故に、見等云何が合せん

【問うて曰はく何故等】次三偈は無異を釋す。

凡そ物皆異を以ての故に合有り。而るに見等の異相は不可得なり。是故に合無し。復次に、

但に見等の法の異相、不可得なるのみに非ず

有ゆる一切の法も、皆亦異相無し

但見と可見と見者等の三事の異相の不可得なるのみに非ず、一切法も皆異相無し。

問うて曰はく、『何故に異相有る無きや。』答へて曰はく、

異は異に因りて異有り、異は異を離れて異無し

若し法因より出づれば、是法は因に異らず

汝が謂ゆる異、是異は異法に因るが故に名けて異と爲す。異法を離れては名けて異と爲

さす。何を以ての故に、若し法衆縁より生ぜば、是法は因に異らず。因壞すれば果も亦壞

するが故に。標椽等に因りて舍有り、舍は標椽に異らず、椽椽等壞すれば舍も亦壞するが

如くなるが故に。問うて曰はく、『若し定の異法有らば何の答有りや。』答へて曰はく、

若し異より離れて異有らば、應に餘の異に異有るべし

異より離れて異無し、是故に異有る無し

若し異より離れて異法有らば、則ち應に餘の異を離れて異法有るべし。而も實には異よ

り離れて異法有る無し。是故に餘の異無し。五指の異を離れて拳の異有らば、拳の異は應

に瓶等の異物に於て異有るべし。今五指の異を離れて拳の異は不可得なり。是故に拳の異

は瓶等に於て異法有る無し。問うて曰はく、「我經に説く、「異相は衆縁より生ぜず。分別と總相との故に異相有り、異相に因るが故に異法有り」と。」答へて曰はく、

異の中に異相無く、不異の中にも亦無し

異相有る無きが故に、則ち此れ彼の異無し

汝分別と總相との故に異相有り、異相に因るが故に異法有りと云ふ。若し爾らば異相衆縁より生ず。是の如くんば即ち衆縁法を説くなり。是異相は異法を離れて不可得なるが故に。異相は異法に因りて而して有り、獨り成する能はず。今異法の中に異相無し。何を以ての故に。先に異法有るが故に何んが異相を用ひんや。不異の法の中にも亦異相無し。何を以ての故に、若し異法が不異法中に在らば不異法と名けず。若し二處に俱に無ならば即ち異相無し。異相無きが故に此れ彼亦無し。復次に異法無きが故に亦合無し。

是法自ら合せず、異法も亦合せず

合者と及び合時と、合法とも亦皆無し

是法は、自體によつて合せず、一なるを以ての故に、一指は自ら合せざるが如し。異法も亦合せず、異なるを以ての故に、異事已に成せば、合を須ひざるが故に。是の如く思惟するに合法は不可得なり。是故に説く、「合者と合時と合法と皆不可得なり」と。

【復次に等】第三に異無きが故に合無しといふを破す

中

論 卷第三

龍樹菩薩造  
梵志青目釋  
姚秦三藏鳩摩羅什譯

觀有無品第十五

【觀有無品】本品には正しく有無の二故を破す。【一】論して有無を破す、中に四、一に自有を破す。

(一)問うて曰はく、『諸法各性有り。力用有るを以ての故に。瓶に瓶性有り、布に布性有るが如し。是性衆縁入する時則ち出づ。』答へて曰はく、

衆縁の中に性有らば、是事則ち然らず

性衆縁より出づれば、即ち名けて作法と爲す

若し善法性有らば、意に衆縁より出づべからず。何を以ての故に、若し衆縁より出づれば即ち是れ作法にして定性有る無し。問うて曰はく、『若し諸法の性衆縁より出づれば何の答有りや。』答へて曰はく、

性若し是れ作ならば、云何が此義有らん

性を名けて無作とす、異法を待たずして成す

性を名けて無作とす、異法を待たずして成す

【諸法若し自性無くば等】二に他性を破す。

【若し自性と他性等】三に自他外有を破す。

金を銅に雜ふれば、則ち眞金に非ざるが如く、是の如く、若し性有らば則ち衆縁を須ひず、若し衆縁より出づれば當に知るべし眞性無し。又性若し決定ならば應に他を待つて出づべからず。長、短、彼、此、定性無きが故に、他を待ちて而して有るが如し。

問うて曰はく、『諸法若し自性無くば、應に他性有るべし。』答へて曰はく、

法若し自性無くば、云何が他性有らん

自性は他性に於て、亦名けて他性と爲す。

諸法の性は衆縁作の故に、亦因待して成するが故に自性無し。若し爾らば、他性は他に於ては亦是れ自性なり。亦衆縁より生じ、相待するが故に、亦無も無きが故に。云何が諸法は他性より生ずと言はんや。他性も亦是れ自性なるが故に。

問うて曰はく、『若し自性と他性とを離れて諸法有らば何の答有りや。』答へて曰はく、

自性と他性とを離れて、何んが更に法有るを得ん

若し自他の性有らば、諸法則ち成するを得

汝自性と他性とを離れて法有りと説かば、是事然らず。若し自性と他性とを離るれば則ち法有る無し。何を以ての故に、自性と他性と有らば法則ち成す。瓶の體は是れ自性、依る物は是れ他性なるが如し。

問うて曰はく、『若し自性と他性とを以て有を破せば、今應に無有るべし。』答へて曰はく、

【問うて曰はく等】  
四に無を破す。

【二】次に合して  
有無を破す。中に  
有して之を阿す。

【復次に等】二に  
佛説を引いて有無  
を捨すべきことを  
勸む。

有若し成ぜずんば、無云何が成すべけん  
有法有るに因るが故に、有の壞するを名けて無と爲す。

若し汝已に有の成ぜざるを受くれば、亦應に無も亦無なるを受くべし。何を以ての故に、  
有の法壞敗するが故に無と名く。是無は有の壞するに因りて而して有るなり。

復次に、

若し人有と無とを見、自性と他性とを見

是の如くんば則ち、佛法の眞實義を見ず

若し人深く諸法に著せば、必ず有見を求め、若し自性を破すれば則ち他性を見、若し他  
性を破すれば則ち有を見、若し有を破すれば則ち無を見、若し無を破すれば則ち迷惑す。

若し利根にして著心薄き者は、諸見を滅せる安隱を知るが故に、更に四種の戲論を生ぜず。  
是人は則ち佛法の眞實義を見る。是故に上の偈を説く。復次に、

佛は能く有無を滅す、化迦旃延經中の

所説の如く、有を離れ亦無を離る

刪陀迦旃延經中に、佛正見の義を説いて有を離れ無を離ると爲す。若し諸法の中に少  
しにても決定して有らば、佛は應に有と無とを破すべからず。若し有を破すれば、則ち人  
謂はて無と爲さん。佛は諸法の相に通達するが故に。二俱に無なりと説きたまふ。是故に  
汝應に有無の見を捨つべし。復次に、

復次に若し法實に等三に重ねて有無と釋す。

復次に定んで有等四に有無の過を出し其所以を釋す。

若し法實に有性ならば、後に則ち應に無となるべからず  
性若し異相有らば、是事終に然らず

若し諸法が決定して有性ならば終に應に變異すべからず。何を以ての故に。若し定んで自性有らば應に異相有るべからず。上の眞金の喩の如し。今現に諸法に異相有を見るが故に、當に知るべし、定相有る無しと。復次に、

若し法實に有性ならば、云何が異となるべけん

若し法實に無性なるも、云何が異となるべけん

若し法定んで有性ならば、云何が變異すべき。若し無性ならば則ち自體無し。云何が變異すべき。復次に、

定んで有ならば則ち常に著す、定んで無ならば則ち斷に著す

是故に有智者は、應に有無に著すべからず

若し法定んで有相有らば則ち終に無相無し。是を即ち常と爲す。何を以ての故に、三世を説く者の如きは、未來の中に法相有り、是法現在に來至し、過去に轉入して本相を捨てずし。是を則ち常と爲す。又因の中に先に果有りと言くも是を亦常と爲す。若し定んで無有りと爲せば、是無は必ず先有今無なり。是を則ち斷滅と爲す。斷滅を無相續と名く。是二見に因由すれば即ち佛法を遠離す。問うて曰はく、「何が故に有に因りて常見を生じ、無に因りて見を生ずるや。」答へて曰はく、



書し法定性有らば、無に非ず則ち是れ常なり  
 先に有りて而して今無ならば、是を則ち斷滅と爲す  
 若し法定性有らば、即ち是れ有相にして無相に非ず。終に應に無となるべからず。  
 若し無ならば則ち有に非ず、即ち無と爲す。先に已に過を説くが故に。是の如きは則ち常見に墮す。若し法先に有にして敗壞して而して無ならば、是を斷滅と名く。何を以ての故に。有に應に無となるべからざるが故に。汝有無各定相有りと謂ふが故に。若し斷常見有らば則ち罪福等無く、世間の事を破す。是故に應に捨つべし。

中論觀縛解品第十六

問うて曰はく、『生死は都て根本無きに非ず。中に於て應に衆生往來し、若し諸行往來すること有るべし。汝何の因縁を以ての故に、衆生及び諸行盡く空にして、往來すること有る無しと説くや。』答へて曰はく、

諸行往來せば、常にしては應に往來すべからず  
 無常にして亦應にすべからず、衆生も亦復然り

諸行六道生死の中を往來すといはば、常相にして往來すと爲すや、無常相にして往來すと爲すや。二俱に然らず。若し常相にして往來せば、則ち生死の相續無し。決定を以ての

【縛解品】 吾人は煩惱の繫縛に依り無盡の生死界に流轉するも今此縛を斷ずることによつて涅槃に到達すといふも、若しこれに執著せば眞の涅槃を得ること能はず、即ちこれ亦縛に外ならざればなり、今縛といひ解といふ、畢竟不可得と明すを本品とす。  
 【一】 縛解の根本を破す中、先づ縛の本を破す。

故に、自性住するが故に。若し無常を以て往來せば、亦往來して、生死相續すること無し。不決定を以ての故に。自性無きが故に。若し衆生往來するも亦是の如き過有り。復次に、

若し衆生、陰と界と諸入との中を往來せば

五種に求むるに盡く無し、誰か往來する者有らん

生死と陰界入とは即ち是れ一義なり。若し衆生此陰界入の中に於て往來せば、是衆生は然可然品の中に於て五種に求るに不可得なり。誰か陰界入の中に於て往來する者有らん。復次に、

若し身より身に至りて、往來せば即ち無身なり

若し其れ身有る無くんば、則ち往來有る無し

若し衆生往來せば、有身にして往來すと爲すや、無身にして往來すと爲すや。二俱に然らず。何を以ての故に、若し有身にして往來せば、一身より一身に至る。是の如く、なるときは則ち往來する者は無身なり。又若し先に已に有身ならば、應に身より身に至るべからず。若し先に無身なるときは則ち無有なり。若し無有ならば云何が生死往來有らん。

問うて曰はく、『經に説く、涅槃有り一切の苦を滅すと。是滅は應に諸行の滅、苦なる衆生の滅なるべし。』答へて曰はく、『二俱に滅せず。何を以ての故に。』

諸行若し滅せば、是事終に然らず

衆生若し滅せば、是事亦然らず

【問うて曰はく經に等】次に解の本を破す。

【二】第二に正しく縛解を破す。中に三、總じて縛解を破す。

【復次に若し身を等】二に別して縛解を破す中先づ縛

汝若し諸行滅し、若し衆生滅すと説く。是事先に已に答へぬ。諸行は性有る無し。衆生も亦種種に推求するに、生死往來不可得なり。是故に諸行滅せず。衆生も亦滅せず。問うて曰はく、「若し爾らば則ち縛無く解無からん。根本不可得なるが故に。」答へて曰はく、

諸行に生滅の相あり、縛ならず亦解ならず

衆生も先に説くが如く、縛ならず亦解ならず

汝諸行及び衆生は縛解有りと言はば、是事然らず。諸行は念念に生滅するが故に應に

縛解有るべからず。衆生も先に五種に推求するに不可得なりと説けり。云何が縛解有らん。

復次に、

若し身を名けて縛と爲さば、身有らば則ち縛ならず

身無きも亦縛ならず、何に於てか而も縛有らん

若し五陰身を名けて縛と爲すと謂はば、若し衆生先に五陰有らば則ち應に縛すべからず。

何を以ての故に。一人に二身有るが故に。身無きも亦應に縛すべからず。何を以ての故に。

若し身無くば則ち五陰無し。五陰無くば則ち空なり。云何が縛すべけん。是の如く第三に

更に所縛無し。復次に、

若し可縛より先に縛あらば、則ち應に可縛を縛すべし

而も先には實に縛無し、餘は去來に答へしが如し

若し可縛より先に縛有りと言はば、則ち應に可縛を縛すべし。而も實には可縛を離れて先に縛無し。是故に衆生に縛有りと言ふを得ず。或は言はく、「衆生は是れ可縛にして、五陰は是れ縛なり」と、或は言はく、「五陰の中の諸煩惱は是れ縛にして、餘の五陰は是れ可縛なり」と、是事然らず。何を以ての故に。若し五陰を離れて先に衆生有らば、則ち應に五陰を以て衆生を縛すべし。而も實には五陰を離れて別の衆生無し。若し五陰を離れて別に煩惱有らば、則ち應に煩惱を以て五陰を縛すべし、而も實には五陰を離れて別の煩惱無し。復次に去來品の中に已去に去せず、未去も去せず、去時にも去せずと説きしが如く、是の如く未縛は縛ならず、縛し已るも縛ならず、縛時にも縛ならず。

【復次に亦解等】  
次に解を破す。

復次に、亦解有る無し。何を以ての故に。

縛者は解有る無く、無縛も亦解無し

縛時に解有らば、縛と解とは則ち一時ならん

縛者は解有る無し。何を以ての故に。已に縛せらるるが故に。無縛も亦解無し。何を以ての故に。縛無きが故に。若し縛時に解有りと言はば、則ち縛と解とは一時ならん。是事然らず。又縛と解とは相違するが故に。問うて曰はく、「人有りて道を修し、現に涅槃に入り、解脱を得。云何が無と言はん。」答へて曰はく、  
若し諸法を受けずんば、我當に涅槃を得べしと  
若し人は是の如くならば、還つて受に縛せらる。

【復次に生死を離れて等】三に總じて縛解無しと結す

【觀業品】本品は業を客觀的に所思業といひ思已業といひ、無表業といふも、これ實在的の見解に過ぎず其本性畢竟空と觀するにあり。  
【一】第一に正しく業體を破す、下各項に立と破とあること知るべし。  
【業とは等】一業を立つ。

若し人は念を作し、我受を離れて涅槃を得と。是人即ち受到に縛せらる。

復次に、

生死を離れて、而も別に涅槃有るにあらず

實相の義は是の如し。云何が分別有らん

諸法實相第一義の中には、生死を離れて別に涅槃有りと説かず。經に説くが如し。涅槃即生死、生死即涅槃と。是の如く諸法實相の中に、云何が是れ生死、是れ涅槃と言はんや。

中論觀業品第十七

問うて曰はく、『汝種種に諸法を破すと雖も、而も業は決定して有なり。能く一切衆生をして果報を受けしむ。經に説くが如し。一切衆生皆業に隨つて生ず。悪者は地獄に入り、福を修する者は天に生じ、道を行ずる者は涅槃を得と。是故に一切法は應に空なるべからず。謂ゆる業とは、

人能く心を降伏し、衆生を利益せば

是を名けて慈善と爲す、二世の果報の種なり

人は三毒を有し、他を憫すことを爲すが故に行を生ずるも、善者は先に自ら惡を滅す。是故に其心を降伏し他人を利益すと説く。他を利益すとは布施、持戒、忍辱等を行じ衆生

【復次に大聖は等】  
次に二業を立つ。

【佛の所説の等】  
次に三業を立つ。

【身業と及び等】  
次兩偈に七業を立つ。

を惱さず、是を他を利益すと名く、亦慈善福德と名く、亦今世後世の樂果の種子と名く。

復次に、

大聖は二業を説けり、思と思より生ずるものとなり

是業の別相の中に、種種に分別して説く

大聖略して業に、二種有りと言きたまへり、一には思、二には思より生ずるもの。是

二業は阿毘曇の中に廣く説くが如し。

佛所説の思とは、謂ゆる意業是なり

思より生ずる所のものとは、即ち是れ身口業なり

思は是れ心數法なり。諸の心數法の中に能く發起して所作有るが故に業と名く。是思

に因るが故に外の身口業を起す。餘の心數法に因りて所作有りと雖も、但思を所作の本

と爲す。故に思を説いて業と爲す。是業今當に相を説くべし。

身業と及び口業と、作と無作業と

是の如き四事の中に、亦是善亦是不善あり

用より福德を生ず、罪の生ずるも亦是の如し

及び思を七法と爲す、能く諸業の相を了す

口業とは四種の口業、身業とは三種の身業。是七種の業に二種の差別有り、作有ると無

作有るとなり、作時は作業に名くなり、作し已りて常に隨逐して生ずるを無作業と名く。

【答へて曰はく等】  
論主の破。

【二】第二に業相  
の義を破す。立  
業は相續して斷常  
を離ると明す。

是二種に善と不善と有り。不善を不止惡と名け、善を止惡と名く。復用より福徳を生ずる有り、施主が受者に施すが如き、若し受者受用すれば施主は二種の福を得、一には施より生ずるもの、二には用より生ずるものなり。人の箭を以て人を射するが如し。若し箭人を殺せば二種の罪有り、一には射より生ずるもの、二には殺より生ずるものなり。若し射すも殺さずんば射者は但射の罪を得て殺の罪無し。是故に偈の中に罪福は用より生ずると説く。是の如きを名けて六種の業と爲す。第七を思と名く。是七種即ち是れ業相を分別す。是業に今世後世の果報有り。是故に決定して業有り果報有り。故に諸法は應に空なるべからず。答へて曰はく、

業住して報を受くるに至らば、是業を即ち常と爲す

若し滅すと則ち業無し、云何が果報を生ぜん

業若し住して果報を受くるに至らば、即ち是を常と爲す。是事然らず。何を以ての故に。業は是れ生滅の相にして、一念すら尙住せず、何に況んや果報に至るをや。若し業滅すと謂はば、滅せば則ち無し。云何が能く果報を生せん。

(三)問うて曰はく、

芽等の相續して、皆種子より生じ

是よりして果を生じ、種を離れては相續無し

種より相續有り、相續より果有り

【是善業の因縁果報等】次に別して十善業を出して能く果報を得といふ

先に種後に果有りて、斷ならず亦常ならざるが如し

是の如く初心より、心法相續して生じ

是よりして果有り、心を離れて相續無し

心より相續有り、相續より果有り

先に業後に果有りて、斷ならず亦常ならず

穀より芽有り、芽より莖葉等の相續有り、是相續より果の生ずる有り、種を離れては相續し生ずる無し。是故に穀子より相續有り、相續より果有り、先に種、後に果有るが故に斷ならず、亦常ならざるが如く、穀種の喩の如く業の果も亦是の如し。初心に罪福を起すは猶し穀種の如し。是心に因りて餘の心心數法相續し生じ、乃至果報あり、先業後果の故に、斷ならず亦常ならず。若し業を離れて果報有らば、則ち斷常有り。是善業の因縁果報とは、謂ゆる、

能く福德を成ずる者は、是れ十と白業道なり

二世五欲の樂は、即ち是れ白業の報なり

白とは善淨に名く。福德の因縁を成ずとは、是十の白業道より不殺、不盜、不邪淫、不

妄語、不兩舌、不惡口、不無益語、不嫉、不恚、不邪見を生ずるなり。是を名けて善と爲す。身口意より果報を生ずとは、今世には名利を、後世には天人中の貴處に生ずるを得るなり、布施、恭敬等は種種の福德有りと雖も、略して説けば則ち十善道の中に攝在す。



【答へて等】次に論主の破。

答へて曰はく、

若し汝の如く分別せば、其過則ち甚だ多し

是故に汝が所説は、義に於て則ち然らず

若し業と果報とは相續するを以ての故に、穀子を以て喩と爲さば、其過甚だ多し。但此

中には廣く説かざるのみ、汝穀子の喩を説く如きは是喩然らず。何を以ての故に。穀子は

獨有り平有り、見るべくして相續有り、我是事を思惟するすら、尙未だ此言を受けず。況

んや心及び業は獨無く形無く、見るべからず、生滅して住せず。相續を以てせんと欲すと

も是事然らず。復次に、穀子より芽等相續有りといはば、滅し已りて相續すと爲すや、滅

せずして相續すと爲すや。若し穀子滅し已りて相續すといはば、則ち因無しと爲す。穀子

滅せずして而も相續せば、是穀子より常に諸穀を生ずべし。若し是の如くんば一穀子は則

ち一切世間の穀を生ずべし。是事然らず。是故に業と果報との相續は則ち然らず。

三問うて曰はく、

今當に復更に、業と果報とに類するの義の

諸徳と非支徳と、賢聖との稱嘆したまふ所を説くべし

謂はる

不失の法は券の如く、業は負財物の如し

此性則ち無記なり、分別して四種有り

【三】第三に不失法を破す、立の中先づ停説。

【問ゆる不失の法は等】次六變に正説す。

見諦にては斷ぜざる所、但思惟の所斷なり

是不失法を以て、諸業は果報有り

若し見諦所斷にして、而も業相似に至らば

則ち業を破する等、是の如き過咎を得べし

一切諸の行業は、相似なるも不相似なるも

一界に初身を受くるとき、爾時報獨り生ず

是の如き二種の業は、現世に果報を受く

或は曰はく報を受け已りて、而も業は猶し故のごとく在りと

若は度果し已りて滅し、若は死し已りて而して滅す

是中に於て、有漏及び無漏を分別す

【不失の法は等】  
下長行解。

不失の法は當に知るべし、分の如し。業は物を取るが如し。是不失の法は欲界繫、色界繫、無色界繫、亦は不繫なり。若し善、不善、無記を分別する中には、但是れ無記なり。は無記の義は阿毘曇の中に廣く説く。見諦にては斷ぜざる所、一果より一果に至る。中に於て思惟の所斷なり。是を以て諸業は不失の法を以ての故に果生ず。若し見諦所斷にして而も業相似に至らば、則ち業を破るの過を得、是事阿毘曇の中に廣く説く。復次に、不失法は一界に於て諸業の相似不相似の初めて身を受くるとき、果報獨り生ず。現在の身に於て業より更に業を生ず。是業に二種有り。重に隨つて報を受く。或は言ふ有り、「是業は報を受け已り

【答へて等】 論主の破。

【四】 第四に斷滅の邪見を破す。先づ問。【答へて等】 七偈の中初二偈に二諦中道を述べて業の斷常を離るるを明す。

【若し業有性ならば等】 五偈に外人が定性の業は常見に墮すと破す。中、初四偈は業門について業を破す。

ても業猶在り、念念に滅せざるを以ての故に」と。若は度果し已りて滅し、若は死し已りて而して滅すとは、須陀洹等は度果し已りて而して滅す。諸の凡夫及び阿羅漢は死し已りて而して滅す。此中に於て有漏及び無漏を分別すとは、須陀洹等の諸賢聖によりて有漏無漏等應に分別すべし。』答へて曰はく、『是義俱に斷常の過を離れず。是故に亦應に受くべからず。』

問うて曰はく、『若し爾らば則ち業と果報と無し。』答へて曰はく、空なりと雖も亦斷ならず、有なりと雖も亦常ならず

業果報の不失、是を佛の所説と名く

此論の所説の義は斷常を離る。何を以ての故に。業は畢竟空にして寂滅の相なり。自性は有を離る、何の法か大に斷すべき、何の法か失すべき。顛倒の因縁の故に生死に往來するも亦常ならず。何を以ての故に。若し法顛倒より起らば則ち是れ虚妄にして實無し。實無きが故に常に非ず。復次に、顛倒に貪著して實相を知らざるが故に、業を失せず、此は是れ佛の所説なりと言ふ。復次に、

諸業は本より生ぜず、定性無きを以ての故に

諸業は亦滅せず、其不生を以ての故に

若し業有性ならば、是れ則ち名けて常と爲す  
不作も亦業と名けん、常は則ち作すべからず

【若し諸の世間等】此一偈は煩惱を擧げて業を破す。

若し不作の業有らば、不作にして而も罪有らん  
梵行を斷ぜずして、而も不淨の過有らん  
是れ則ち一切の、世間語言の法を破る

罪を作し及び福を作すも、亦差別有る無からん  
若し業決定し、而して自ら性有りと言はば  
果報を受け已りて、而して應に更に復受くべし

若し諸の世間の業は、煩惱より生ぜば  
是煩惱は實に非ず、業は當に何んか實有るべき

第一義の中には諸業は生ぜず。何を以ての故に。性無きが故に。不生の因縁を以ての故に則ち滅せず。常を以ての故に。則ち滅せざるに非ず。若し爾らずんば業の性は應に決定して有なるべし。若し業決定して有性ならば、則ち是を常と爲す。若し常ならば則ち是れ不作の業なり。何を以ての故に。常法は作すべからざるが故に。復次に、若し不作の業有らば、則ち他の人罪を作し此人報を受け、又他の人梵行を斷じて而して此人罪有るべし。則ち世俗の法を破る。若し先に有ならば、冬には應に春事を爲すを思ふべからず。春には應に夏事を爲すを思ふべからず。是の如き等の過有り。復次に福を作すと及び罪を作すとば則ち別異有る無し。布施、持戒等の業を起すを、名けて福を作すと爲す。殺、盜等の業を起すを名けて罪を作すと爲す、若し不作にして而も業有

【五】第五に業の果報を破す。

【六】第六に起業人の義を破す。先づ立。

らば、則ち分別有る無し。復次に、是業若し決定して有性ならば、則ち一時に果報を受け已りて、復次に更に受くべし。是故に汝不失法を以ての故に業報有りと説かば、則ち是の如き等の過有り。復次に、若し業は煩惱より起らば、是煩惱は有る無きこと決定す。但憶想分別によりて有なり。若し諸の煩惱實無くんば業云何が實有らん。何を以ての故に。性無きに因るが故に業も亦性無し。

問うて曰はく、「若し諸の煩惱及び業は無性にして實ならざるも、今果報の身現に有り應に是れ實なるべし。」答へて曰はく、

諸の煩惱及び業とは、是を身の因縁と説く  
煩惱と諸業とは空なり、何に況んや諸身に於てをや

諸の賢聖の説く、「煩惱及び業とは、是れ身の因縁なり」と。是中に愛は能く生を潤し、業は能く、上、中、下、好、醜、貴賤等の果報を生ず。今諸の煩惱及び業とは、種種に推求するに有る無きこと決定す。何に況んや諸身に決定の果有らんや。因縁に隨ふが故に、

問うて曰はく、「汝種種の因縁を以て業と及び果報とを破すと雖も、而も經に業を起す者有りと説く。業を起す者有るが故に業有り果報有り。説くが如し、無明の蔽ふ所、愛結の縛する所。而も本作者に於て、即ならず亦異ならず

【答へて等】 下論  
主の破、二例の中  
初は因人の法無な  
ると、次は果人の  
法無なるを明す。

無始經の中に説く、業生無明の爲に覆はれ愛結に縛せられ、無始の生死の中に於て往來して種種の苦業を受く。今受者は先の作者に於て即是ならず亦異ならずと。若し即是ならば人罪を作して牛の形を受けん。則ち人は牛と作らず、牛は人と作らず。若し異ならば則ち業果報を失し無因に墮す。無因ならば則ち斷滅なり。是故に今受者は先に作者に於て即是ならず、亦異ならず。【答へて曰はく、

業は縁より生ぜず、非縁より生ぜず

是故に則ち、能く業を起す者有る無し

業も無く作者も無ならば、何んが業の果を生ずる有らん

若し其れ果有る無くば、何んが果を受くる者有らん

若し業も無く業を作す者無くば、何んが業より果報を生ずる有らん。若し果報無くんば

云何が果報を受くる者有らん。業に三種有り。五陰の中の假名の人には是れ作者、是業の善

惡の處に於て生ずるを名けて果報となす。若し業を起す者すら尚無くば、何に況んや業有

り、果報及び果報を受くる者有らんや。

問うて曰はく、『汝種種に業、果報、及び起業者を破すと雖も、而も今現見に乗生業を

作し果報を受く。是事云何。』答へて曰はく、

世尊の神通、所作の變化人の如き  
是の如き變化人は、復化人を變作す

【七】 第七に現所  
見の事を説す。先  
づ問。  
【答へて等】 諸の  
中、初二偈は別し  
て法喻を明す。

【諸の煩惱と等】  
次に總じて法體を

【觀法無我】本品に  
は諸法無我の義を  
明す。本論の中の  
重要な品の一た  
り。

【一】 先づ發起。

初の變化人の如き、是を名けて作者となす  
變化人の所作、是を期ち名けて業となす  
諸の煩惱と及び業と、作者と及び果報と

皆幻と夢との如く、炎の如く亦響の如し

佛の神通力所作の化人の如き、是化人復化人を化作す。化人の如きは實事有る無く、但  
眼見すべきのみ。又化人の口業の說法、身業の布施等、是業實無しと雖も而も眼見すべし。  
是の如く生死身、作者及び業も亦應に是の如く知るべし。諸の煩惱とは名けて三毒と爲  
す。分別するに、九十八使、九結、十纏、六垢等無量の諸の煩惱有り。業は名けて身口  
意業と爲す。今世後世分別するに、善、不善、無記苦報、樂報、不苦不樂報、現報業、生  
報業、後報業是の如き等の無量有り。作者を名けて能く諸煩惱業を起し、能く果報を受く  
る者と爲す。果報とは善惡業より生ずる無記の五陰に名く。是の如き等の諸業は皆空にし  
て無性、幻の如く、夢の如く、炎の如く響の如し。

中論觀法無我第十八

問うて曰はく、「若し諸法盡く畢竟空にして、無生無滅なるを、是を名けて諸法實相と  
なせば、云何が入らんや。」答へて曰はく、「我我所の著を滅するが故に一切法空を得。無

【二】次に正しく  
觀法を明す。中、  
初五偈は聲聞が稟  
教の得益を明す。

【諸佛は或は等】  
次六偈に菩薩が稟  
教の得益を明す。

我が慧を名けて入と爲す。

問うて曰はく、『云何が諸法の無我なるを知るや。』

答へて曰はく、

若し我が是れ五陰ならば、我は即ち生滅と爲す

若し我は五陰と異ならば、則ち五陰の相に非ず

若し我有る無くんば、何んが我所有るを得ん

我我所を滅するが故に、無我智を得と名く

無我智を得れば、是を則ち實觀と名く

無我智を得し者、是人を希有となす

内と外との我我所、盡く滅して有る無きが故に

諸受即ち爲に滅す、受滅すれば則ち身自滅す

業と煩惱と滅するが故に、之を名けて解脱と爲す

業と煩惱とは實に非ず、空に入りて戲論は滅す

諸佛は或は我を説き、或は無我を説く

諸法實相の中には、我無く非我無し

諸法實相とは、心行言語斷じ

無生亦無滅にして、寂滅なること涅槃の如し



【一】若し佛出世せず  
 【二】此一偈に縁覺  
 の得益を辨ず。  
 【三】長行もて解  
 釋す。先づ聲聞教  
 を釋す。中、一に二  
 無我の教を釋す。  
 初に人無我を釋  
 す。

一切は實なり非實なり、亦實亦非實なり、  
 非實非非實なり、是を證佛の法と名く  
 自ら知りて他に隨はず、寂滅にして戲論無く  
 異無く分別無し、是を則ち實相と名く  
 若し法縁より生ぜば、因に即せず異ならず  
 是故に實相と名く、不實亦不常なり  
 不一亦不異、不常不斷  
 是をば諸の世尊、教化の甘露味と名く  
 若し佛出世せず、佛法已に滅盡するも  
 諸の辟支佛の智は、遠離より生ず  
 有人説く、神は應に二種有るべしと。若し五陰即ち是れ神なり、若し五陰を離れて神有  
 り。若し五陰是れ神ならば、神は則ち生滅の相なり。偈の中に説くが如し、若し神是れ  
 五陰ならば、即ち是れ生滅の相なりと。何を以ての故に。生じりて壞敗するが故に。生  
 滅の相を以ての故に。五陰は是れ無常なり。五陰の無常なるが如く、生滅の二法も亦是れ  
 無常なり。何を以ての故に。生滅も亦生じりて壞敗するが故に、無常なり。神若し是れ  
 五陰ならば、五陰は無常なるが故に、神も亦應に無常生滅の相なるべし。但是事然らず。  
 若し五陰を離れて神有らば、神には即ち五陰の相無し。偈の中に説くが如し、若し神五陰

に異ならば則ち五陰の相に非ず」と。而して五陰を離れて、更に法有る無し。若し五陰を離れて法有らば、何の相、何の法を以て而も有るや。若し神は虚空の如く五陰を離れて而も有りと言はば、是れ亦然らず。何を以ての故に。破六種品の中に已に破せらる。虚空は法として名けて虚空と爲すもの有る無し。若し信有るを以ての故に、神有りと言はば、是事然らず。何を以ての故に、信に四種有り。一には現事信すべし、二には比知信すべしと名く。煙を見て火有りと知るが如し。三には譬喩信すべしと名く。國に鎗石無くば、之を金の如しと喩ふるが如し。四には賢聖の所説の故に信すべしと名く。地獄有り、天有り、驚單口有りと説くが如し。見し者有る無けれども、聖人の語を信するが故に知る。是神は一切の信の中に於て不可得なり。現事の中にも亦無く、比知の中にも亦無し。何を以ての故に、比知とは先に見るが故に後に比類して而して知るに名く。人先に火に煙有るを見、後に煙を見て則ち火有るを知るが如し。神の義は然らず。誰か能く先に神と五陰と合するを見、後に五陰を見て神有るを知らんや。若し謂はく、三種の比知有り、一には如本、二には如殘、三には共見、如本とは、先に火に煙有るを見、今煙を見て木の如く火有りと知るに名く。如殘とは、飯を炊くに一粒熟すれば皆熟すと知るが如きに名く。共見とは、眼見に入此より去りて彼に到り、亦其去るを見るが如く、日も亦是の如く、東方より出でて西方に到る、去るを見ずと雖も、人去相有るを以ての故に、日にも亦去有るを知る。是の如く、苦、樂、憎、愛、覺知等も亦應に所依有るべし。人民を見て必ず王に依るを知る

【我有るに因る等】  
 次に法無我を釋す  
 【八聖道分を等】  
 二に無我の教を禀  
 けし後の得益を明  
 す。

が如きに名く。是事皆然らず。何を以ての故に。共相の信は先に人と去法と合して、而して餘方に至り、後に日の餘方に辨るを見るが故に去法有るを知る。先に五陰と神と合するを見、後に五陰を見て神有るを知ることも有る無し。是故に共相此知の中にも亦神無し。聖人所説の中にも亦神無し。何を以ての故に。聖人の所説は皆先に眼見して、而して後に説くなり。又諸の聖人は、餘事の信すべきを説くが故に。當に知るべし、地獄等亦信すべきを説く。而るに神は斷らず。先に神を見て而る後に説く者有る無し。是故に四信等の諸信の中に於て、神を求むるに不可得なり。神を求むるに不可得なるが故に無なり。是故に五陰を離れて別の神無し。復次に破根品の中に見と見者と可見と破せらるるが故に神も亦同じく破せらる。又眼見の羅法すら尙不可得なり。何に況んや虚妄の憶想等にて而も神有らんや。是故に知んぬ、無我なりと。我有るに因るが故に我所有り。若し我無きときは則ち我所無し。八聖道分を修習して我我所の因縁を滅するが故に、無我無我所の決定智慧を得。

又無我無我所は、第一義の中に於ても亦不可得なり。無我無我所は能く眞に諸法を見る。凡夫人は我我所を以て慧眼を障ふるが故に實を見る能はず。今聖人は我我所無きが故に、諸の煩惱も亦滅す。諸の煩惱滅するが故に、能く諸法實相を見る。内と外との我我所滅するが故に、諸受も亦滅す。諸受滅するが故に、無量の後身も皆亦滅す。是を名けて無餘涅槃と説く。問うて曰はく、『有餘涅槃は云何。』

【諸法は一切智を以て等】第二に菩薩教を釋す。うち一に菩薩の理教を明す。

答へて曰はく、「諸の煩惱及び業と滅するが故に心解脱を得るに名く。是諸の煩惱と業とは皆憶想分別より生じて實有る無し。諸の憶想分別は皆戲論より生ず。諸法實相、畢竟空を得ば、諸の戲論則ち滅す。是を名けて有餘涅槃と説く。實相の法是の如し。

諸佛は一切智を以て衆生を觀するが故に、種種に爲に説きたまふ。亦は有我と説き、亦は無我と説く。若し心未だ熟せずんば、未だ涅槃の分有らず。罪を畏るるを知らず。是等の爲の故に有我と説く。又得道者の諸法は空にして、但假名にして我有りと知る有り。是等の爲の故に我を説くも咎無し。又布施持戒等の福德有りて、生死の苦惱を厭離し、涅槃の永滅を畏る。是故に佛は是等の爲に無我と説く。諸法は但因縁、和合して生ずる時空生じ、滅する時空滅す。是故に無我と説き、但假名にして我有りと説く。又得道者は無我を知りて斷滅に墮せざるが故に、我無しと説くも咎無し。是故に偈の中に説く、諸佛は有我を説き、亦無我を説く。若し眞實の中に於ては我非我を説かず。

問うて曰はく、「若し無我是れ實なるも、但世俗を以ての故に、我有りと説かば何の咎有りや。」答へて曰はく、「我法を破するに因りて無我有り。我は決定して不可得ならば何んが無我有らん。若し決定して無我有らば、則ち是れ斷滅にして貪著を生ず。般若の中に説くが如く、「菩薩、有我も亦行に非ず、無我も亦行に非ず」と。問うて曰はく、「若し我と非我と空と不空とを説かずんば、佛法は何の所説を爲すや。」答へて曰はく、「佛は諸法實相を説く。實相の中には語言の道無く、諸の心行を滅す。心は取相の縁を以て生じ、先世

の業と果報とを以ての故に有るのみ。諸法を實見する能はず。是故に心行滅すと説く。問  
 うて曰はく、『若し諸の凡夫の心は實を見る能はずんば、聖人の心は應に能く實を見るべ  
 し。何が故に一切の心行滅すと説くや。』答へて曰はく、『諸法實相は即ち是れ涅槃なり。  
 涅槃を滅と名く。是滅は涅槃に向ふが爲の故に、亦名けて滅と爲す。若し心是れ實ならば  
 何んが空等の解脫門を用ひん。諸の禪定の中、何が故に滅盡定を以て第一と爲すや、又  
 亦終に無餘涅槃に歸すや。是故に當に知るべし、一切の心行は皆是れ虚妄なり、虚妄なる  
 が故に應に滅すべし。諸法實相は、諸の心數法を出で、生無く滅無く、寂滅相にして涅  
 槃の如し。問うて曰はく、『經の中に、諸法は先より來寂滅相にして即ち是れ涅槃なりと  
 説く。何を以てか涅槃の如しと言ふや。』答へて曰はく、『著法の者、法を分別するに二種  
 有り、是れ世間、是れ涅槃と。涅槃を是れ寂滅と説き、世間を是れ寂滅と説かず。此論の  
 中に、一切法性は空にして寂滅相なりと説く。著法の者は解せざるが爲の故に涅槃を  
 以て喻と爲す。汝涅槃の相は空、無相、寂滅にして、戲論無しと説くが如し。一切世間の法  
 も亦是の如し。問うて曰はく、『若し例は我と非我とを説かず、諸の心行滅し言語の道斷  
 せば、云何が人をして諸法實相を知らしめんや。』答へて曰はく、『諸佛には、無量の方便  
 力有りて、諸法に決定相無きを、衆生を度せんが爲に、或は一切は實なりと説き、或は一切  
 は不實なりと説き、或は一切は實不實なりと説き、或は一切は非實非不實なりと説く。一  
 切は實なりとは、諸法の實性を推求するに皆第一義平等一相に入りて謂ゆる無實相なり。

諸流の色を異にし味を異にするも大海に入りては則ち一色一味なるが如し。一切は不實なりとは、諸法は未だ實相に入らざる時、各分別して觀するに皆實有る無し。但衆緣合するが故に有なり。一切は實不實なりとは、衆生に三品有り、上中下有り。上は諸の法相の非實非不實を觀じ、中は諸の法相の一切實一切不實を觀じ、下は智力淺きが故に諸の法相の少實少不實を觀じ、涅槃は無爲法、壞せざるが故に實なりと觀じ、生死は有爲法、虚偽なるが故に不實なりと觀ず。非實非不實なりとは、實不實を破せんが爲の故に、非實非不實なりと説くなり。問うて曰はく、『佛は餘處に於ては非有非無を離ると説く。此中何を以てか非有非無是れ佛の所説なりと言ふや。』答へて曰はく、『餘處には四種の貪著を破せんが爲の故に説く。此中、四句に於て戲論無くば、佛説を聞けば則ち道を得、是故に非實非不實と言ふ。』

【問うて曰はく佛は是四句等】二に菩薩の得益を明す。

問うて曰はく、『佛は是四句の因縁を以て説き、又諸法實相を得と知る。何の相を以てか知るべき、又實相とは云何。』答へて曰はく、『若し能く他に隨はずんば他に隨はずとは、若し外道神力を現じて、是は道、是は非道なりと説くと雖も、自ら其心を信じて、而も之に隨はず。乃至變身して佛に非ざるを知らずと雖も、善く實相を解するが故に心廻すべからず。此中、法の取るべく捨つべき無きが故に寂滅の相と名く。寂滅の相なるが故に戲論の爲に戲論せられず。戲論に二種有り、一には愛論、二には見論なり。是中此二戲論無し。二戲論無きが故に憶想分別無く、別異相無し。是を實相と名く。問うて曰はく、『若し諸法

【佛の實相を説くに等】第三に緣覺の得益を明す。

【觀時品】上一品に上來各品所説の得益を明し、本品以後重ねて迷情を破して實相を明す。先づ本品には假に過現未の三時を許して後之を破し、時畢竟空を識らしむるにあり。

盡く空ならば、將に斷滅に墮せざるや。又不生不滅ならば或は常に墮するや。『答へて曰はく、『然らず。先に實相に戲論無く、心相寂滅し、言語の道斷すと説けり。汝今取相に貪著せば實相法の中に於て斷常の過を見る。實相を得る者は、諸法は業緣より生じて、是れ因に即せず亦因に異らず、是故に斷ならず常ならずと説く。若し果因に異らば則ち是れ斷なり。若し因に異らずば則ち是れ常なり。』問うて曰はく、『若し是の如く解せば何等の利有りや。』答へて曰はく、『若し道を行する者能く是の如き義に通達せば、則ち一切法に於て不一、不異、不斷、不常なり。若し能く是の如くならば即ち諸の煩惱戲論を滅するを得常樂の涅槃を得。是故に説く、諸佛は甘露味を以て教化すと。世間に天の甘露漿を得るときは、則ち老病死無く諸の衰惱無しと言ふが如し。此實相法は是れ眞の甘露味なり。佛の實相を説くに三種有り。若し諸法實相を得、諸の煩惱を滅せば、名けて聲聞法と爲す。若し大悲を生じ、無上心を發せば、名けて大乘と爲す。若し佛出世せずして、佛法有る無き時も、辟支佛は遠離に因りて智を生ず。若し佛衆生を度し已りて、無餘涅槃に入り、遺法滅盡して、先世に若し應に道を得べき者有り、少しく厭離の因縁を觀じ、獨り山林に入り、憤聞を遠離して道を得ば、辟支佛と名く。』

中論觀時品第十九

【一】 先づ三時を立つ。

【二】 問うて曰はく、「應に時有るべし。因待を以ての故に成ず。過去時有るに因りて則ち未來現在時有り。現在時に因りて過去未來時有り。未來時に因りて過去現在時有り。上中下一異等の法も亦相因待するが故に有り。」

答へて曰はく、

【二】 次に三時を破す中、初四偈は待不待門に就いて破す。中初の三偈半には時を破す。

若し過去時に因りて、未來現在有らば  
未來及び現在に、應に過去時に在るべし

若し過去時に因りて未來現在有らば、則ち過去時中に應に未來現在時有るべし。何を以ての故に。所因の處に隨つて法の成ずる有らば、是處に二應に是法有るべし。燈に因りて明の成する有るが如く、燈有る處に隨つて應に明有るべし。是の如く過去時に因りて未來現在時を成せば、則ち過去時の中に應に未來現在時有るべし。若し過去時の中に未來現在時有らば、則ち三時を盡く過去時と名くべし。何を以ての故に。未來現在時は過去時の中に在るが故に。若し一切時盡く過去ならば、則ち未來現在時無し、盡く過去なるが故に。若し未來現在時無くば、亦應に過去時無かるべし。何を以ての故に。過去時は未來現在時に因るが故に過去時と名く、過去時に因りて未來現在時を成するが如く、是の如く亦應に未來現在時に因りて過去時を成すべし。今未來現在時無きが故に、過去時も亦應に無かるべし。是故に先に説く、「過去時に因りて未來現在時を成すことは事然らず」と。若し過去時の中に未來現在時無くして、而も過去時に因りて未來現在時を成すと謂はば、是



事然らず。何を以ての故に。

若し過去時の中に、未來現在無くんば

未來現在時、云何が過去に囚らん

若し未來現在時過去時の中に在らずんば、云何が過去時に囚りて未來現在時を成せん。

何を以ての故に。若し三時各異相ならば、應に相因待して成すべからず。瓶衣等の物各

自ら別に成じて相因待せざるが如し。而して今過去時に囚らずんば、則ち未來現在時成せ

ず、現在時に囚らずんば、則ち過去未來時成ぜず。未來時に囚らずんば、則ち過去現在時

成ぜず。汝先に過去時の中に未來現在時無しと雖も、而も過去時に囚りて未來現在時を成

ずと説くは、是事然らず。

問うて曰はく、「若し過去時に囚らずして未來現在時を成せば、何の咎有りや。」答へて

曰はく、

過去時に囚らずんば、則ち未來時無し

亦現在時無し、是故に二時無し

過去時に囚らずんば則ち未來現在時を成ぜず。何を以ての故に。若し過去時に囚らずし

て現在時有らば、何れの處に於て現在時有らん。未來も亦是の如し。何れの處に於て未來

時有らん。是故に過去時に囚らずんば、則ち未來現在時無し。是の如く相待して有なるが

故に、實に時有る無し。

【上中下一異等】此半偈に例して其法を破す。

是の如き義を以ての故に、則ち知んぬ餘の二時  
上中下一異、是等の法皆無しと

是の如き義を以ての故に當に知るべし、餘の未來現在も亦應に無かるべく、及び上中下一異等の諸法も亦應に皆無かるべし。上に因りて中下有り、上を離れては則ち中下無きが如く、若し上を離れて中下有らば則ち應に相因待すべからず。一に因るが故に異有り、異に因るが故に一有り。若し一が實有ならば應に異に因りて而して有なるべからず。若し異が實有ならば、應に一に因りて而して有なるべからず。是の如き等の諸法も、亦應に是の如く破すべし。

【問うて曰はく歳月日等】次二偈に證相門に就いて破す。

問うて曰はく、『歳、月、日、須臾等の差別有るが如きが故に、時有るを知る。』答へて曰はく、

時住するも不可得なり、時去るも亦得巨し

時若し不可得ならば、云何が時相を説かん

物に因りての故に時有らば、物を離るれば何んが時有らん

物すら尙所有無し、何に況んや當に時有るべき

時若し住せずんば應に得べからず。時住するも亦無し、若し時不可得ならば、云何が時

相を説かん。若し時相無くんば則ち時無し。物に因りて生ずるが故に則ち時と名けば、若

し物を離るれば則ち時無し。上來種種の因縁もて諸物を破せり。物無きが故に何んが時有

らんや。

中論觀因果品第二十

【觀因果品】上來品品に因果を破し竟るも、これ衆義の大宗なれば今別して立てて之を破す。

【一】第一段に別して十家の因果を破す中に五、一に有無一雙、四傷ある中、初一傷は因中有果を破す。【若し衆縁和合して等】この傷は因中無果を破す。

問うて曰はく、「衆因縁和合して、現に果の生ずる有るが故に。當に知るべし。是果は衆縁和合より有なり。」答へて曰はく、

若し衆縁和合して、而して果の生ずる有らば

和合の中に已に有り。何んが和合を須ひて生ぜん

若し衆因縁和合して果の生ずる有り、是果は則ち和合の中に已に有り、而も和合より生ずと謂はば、是事然らず。何を以ての故に。果若し先に定體有らば、則ち應に和合より生

ずべからず。問うて曰はく、「衆縁和合の中に果無しと雖も、而も果は衆縁より生ぜば何の咎有りや。」

答へて曰はく、若し衆縁和合して、是中に果無くば

云何が衆縁の、和合よりして果生ぜん

若し衆縁和合より則ち果生ぜば、是和合の中に果無くして、而も和合より生ず。是事然らず。何を以ての故に。若し物自性無くば、是物終に生ぜず。復次に、

【若し衆縁和合し等】重ねて有果を破す。

【若し衆縁等】次に重ねて無果を破す。

【問うて曰はく因は等】二に與果不與果一變を破す。先に因は果に與へて因と作るといふを破す。

若し衆縁和合し、是中に果有らば

和合の中に應に有るべくして、而も實には不可得なり

若し衆縁和合の中より果有らば、若し色ならば應に眼見すべく、若し非色ならば應に意知すべし。而も實には和合の中に果は不可得なり。是故に和合の中に果有ること、是事然らず、復次に、

若し衆縁和合し、是中に果無くば

是れ則ち衆因縁と、非因縁と同じ

若し衆縁和合の中に果無くば、則ち衆因縁は即ち非因縁と同じ。乳は是れ酪の因縁なり。若し乳の中に酪無く、水の中にも亦酪無く、若し乳の中に酪無くば則ち水と同じ、應に但乳より出づと言ふべからざるが如し。是故に衆縁和合の中に果無くば、是事然らず。

問うて曰はく、「因は果の爲に因と作り已りて滅し、而も因果有り、是の如き咎無し。」

答へて曰はく、

若し因は果に因を與へて、因と作り已りて而して滅せば

是因に二體有り、一は與へ一は則ち滅す

若し因は果に與へて因と作り已りて而して滅せば、是因に則ち二體有り。一には謂く與ふる因、二には謂く滅する因なり。是事然らず。一法に二體有るが故に。是故に因は果に與へて因と作り已りて而して滅することは事然らず。」問うて曰はく、「若し因は果に與へ

【若し因は果に等】次に因は果に異へずして因と作るといふを破す。

【問うて曰はく衆等】三に一時前後一雙を破す。先に一時を破す。

【問うて曰はく若次に前果後因を破す。】

乎して因と作り已りて而して滅し、亦果の生ずる有り」と謂はば、何の咎有りや。」答へて曰はく、

若し因は果に異へずして、因と作り已りて而して滅せば

因滅して而も果生ず、是果は則ち無因なり

若し是因は果に異へずして因と作り已りて、而して滅せば、則ち因滅し已りて而して果生ず。是果則ち無因なり。是事然らず。何を以ての故に。現見に一切の果は無因より生ずる者有る無し。是故に汝因は果に異へずして、因と作り已りて而して滅し、亦果の生ずる有り」と説かば、是事然らず。

問うて曰はく、『衆縁合する時、而も果の生ずる有らば何の咎有りや。』答へて曰はく、

若し衆縁合する時、而も果の生ずる有らば

生者と及び可生とは、則ち一時に俱なりとす

若し衆縁合する時果の生ずる有らば、則ち生者と可生とは即ち一時に俱なり。但是事然らず。何を以ての故に。父と子との一時に生ずるを得ざるが如し。是故に汝衆縁合する時に果の生ずる有りと説かば、是事然らず。

問うて曰はく、『若し先に果の生ずる有りて、而る後に衆縁合せば、何の咎有りや。』答

へて曰はく、

若し先に果を生ずる有りて、而る後に衆縁合せば

【問うて曰はく因  
四に因滅變因滅不  
變一雙を破す。先  
づ因滅變を破す。

【問うて曰く因滅  
変すと等】次に因  
不滅變を破す。

此れ即ち因縁を離る、名けて無因の果と爲す

若し業縁未だ合せずして而も先に果の生ずる有らば、是事然らず。果は因縁を離るるが故に、期ち無因の果と名く。是故に汝業縁未だ合せざる時、先に果の生ずる有りと説かば、是事則ち然らず。

問うて曰はく、『因滅し變じて果と爲らば、何の咎有りや。』答へて曰はく、

若し因變じて果と爲らば、因は即ち果に至る

是れ則ち前生の因は、生じ已りて而も復生せん

因に二種有り、一には前生、二には共生。若し因滅し變じて果と爲らば、是前生の因應

に還更に生ずべし。但是事然らず。何を以ての故に。已に物を生ぜば、應に更に生ずべか

らず。若し是因即ち變じて果と爲ると謂ふ。是れ亦然らず。何を以ての故に。若し即是な

らば名けて變と爲さず。若し變ならば即是と名けず。問うて曰はく、『因は盡く滅せし

て、但名字のみ滅して而して因の體變じて果と爲る。泥團の變じて瓶と爲るは泥團の名を

失つて、而して瓶の名生ずるが如し。』答へて曰はく、『泥團先に滅して而も瓶生ずる

有らば、名けて變と爲さず。又泥團の體は獨り瓶を生ぜず。瓦甕等皆泥中より出づ、若し

泥團に但名のみ有らば、應に變じて瓶と爲るべからず。變ずとは、乳の變じて酪と爲るが

如きに名く。是故に汝因の名滅すと雖も而も變じて果と爲ると説かば、是事然らず。問う

て曰はく、『因滅すと雖も而も能く果を生ず。是故に果有る。是の如き咎無し。』答へて

【問うて曰はく是因偏じて等】五に遍不遍の一雙を破す。

【二】第二段に總じて一切の因果を破す。中に五、一に初因偏は合不合の破。

曰はく、

云何が因滅失して、而も能く果を生ぜん  
又若し因が果に有らば、云何が因は果を生ぜん  
若し因滅失し已らば云何が能く果を生ぜん。若し因滅せずして、而も果と合せは何んが能く更に果を生ぜん。

問うて曰はく、「是因偏じて果を有し而も果生ず。」答へて曰はく、

若し因偏じて果を有せば、更に何等の果をか生ぜん

因よ果を見るも見ざるも、是二俱に生ぜず

是因若し果を見ざるすら尙應に果を生ずべからず。何に況んや見るをや。若し因自ら果を見ざれば、則ち應に果を生ずべからず。何を以ての故に。若し果を見ざれば、果よ則ち因に隨はず。又未だ果有らず。云何が果を生ぜん。若し因先に果を見れば、應に復生ずべからず、果已に有るが故に。

(二)またつぎ 復次に、

若し過去の因と言はば、而も過去の果と

未來と現在との果とに於ては、是れ則ち終に合せず

若し未來の因と言はば、而も未來の果と

現在と過去との果とに於ては、是れ則ち終に合せず

若し現在の因と言はば、而も現在の果と

未來と過去との果とに於ては、是れ則ち終に合せず

過去の果は過去、未來、現在の因と合せず。未來の果は未來、現在、過去の因と合せず。

現在の果は現在、未來、過去の因と合せず。是の如く三種の果は終に過去と、未來と現在

との因と合せず。復次に、

若し和合せずんば、因んが能く果を生ぜんや

若し和合有らば、因んが能く果を生ぜん

若し因と果と和合せずんば則ち果無し。若し果無くんば云何が因能く果を生ぜん。若し

因と果と和合する時、因能く果を生ずと謂ふも是れ亦然らず。何を以ての故に。若し果因

の中に在らば、則ち因の中に已に果有り、云何が復生ぜん。復次に、

若し因空にして果無くば、因んが能く果を生ぜん

若し因空ならずして果あらば、因んが能く果を生ぜん

若し因に果無くば、果無きを以ての故に因は空なり。云何が因果を生ぜん。人嬢姪せざ

心が如し。云何が能く子を生まん。若し因に先に果有らば、已に果有るが故に應に復生す

べからず。復次に今當に果を説くべし。

果は不空ならば生ぜず、果は不空ならば滅せず

果は不空なるを以ての故に、生ぜず亦滅せず

【復次に若し因空  
等】二に三偈もて  
空不空を破す。



【復次に今一異等】  
三に二偈もて一異  
を破す。

【若し果定んで等】  
四に二偈もて性無  
性を破す。

【若し衆縁よりし  
て等】五に二偈も  
て結合不結合を破  
す。

果は空なるが故に生ぜず、果は空なるが故に滅せず

果は是れ空なるを以ての故に、生ぜず亦滅せず

果若し不空ならば應に生ずべからず、應に滅すべからず。何を以ての故に。果若し因の

中に先に決定して有ならば、更に復生するを須ひず。生無なるが故に滅無なり。是故に果

は不空なるが故に不生不滅なり。若し果は空なるが故に生滅有りと謂ふも、是れ亦然らず。

何を以ての故に。果若し空ならば、空は無所有に名く。云何か當に生滅有るべき。是故に

果は空なるが故に不生不滅なりと説く。復次に、今一異を以て因果を破せん。

因と果とは是れ一ならば、是事終に然らず

因と果と若し異なるも、是事亦然らず

若し因と果とは是れ一ならば、生と及び所生とは一なり

若し因と果とは是れ異なるならば、因は則ち非因に同じ

若し果定んで性有らば、因は何の爲に生ずる所有らん

若し果定んで性無くんば、因は何の爲に生ずる所有らん

因が果を生ぜずば、則ち因の相有る無し

若し因の相有る無くば、誰か能く是果を有せん

若し衆因縁よりして、而も和合の生ずる有らば

和合は自らは生ぜず、云何が能く果を生ぜん

是故に果は、縁の合不合より生ぜず  
 若し果有る無くんば、何れの處にか合法有らん  
 是業縁の和合法は自體を生ずる能はず。自體無なるが故に、云何が能く果を生ぜん。是故に果は縁の合より生ぜず、亦不合より生ぜず。若し果有る無くんば、何れの處にか合法有らん。

中論 觀 成壞品第二十一

問うて曰はく、『一切世間の事現に是れ壞敗の相なり。是故に壞有り。』答へて曰はく、  
 成を離るるも及び成と共なるも、是中に壞有る無し  
 壞を離るるも及び壞と共なるも、是中に亦成無し  
 若は成有るも若は成無きも俱に壞無し。若は壞有るも若は壞無きも俱に成無し。何を以ての故に。

【成壞品】 成壞とは生滅と義似たるも特に世界觀に就いていふ。今品は此成壞の不可得を觀じ、一切法本自ら成ぜず、今亦壞無しと明すなり  
 【一】 第一に共離門の破、成壞無きを明す。初に共離二門を破す。  
 【若し成を離れて等】 次に三偈に成壞なきを釋す。

【成と壞と共にして等】 三に總結す。

若し成を離れては、云何が壞有らん  
 生を離れて死有るが如く、是事則ち然らず  
 成と壞と共にして有らば、云何が成と壞と有らん  
 世間に生と死と、一時に俱なること然らざるが如し

若し壊を離れては、云何が當に成有るべき  
無常は未だ曾て、諸法に在らざる時有る無し

若し成を離るれば壊は不可得なり。何を以ての故に。若し成を離れて壊有らば、則ち成に因りて壊有るにあらす。壊は則ち無因なり。又成法無くして而も壊すべけん。成は衆縁の合に名く。壊は衆縁の散に名く。若し成を離れて壊有らば、成無くして誰か當に壊すべき。瓶無くば瓶の壊を言ふを得ざるが如し。是故に成を離れては壊無し。若し成と共にして壊有りと謂ふも、是れ亦然らず。何を以ての故に。法先に別に成じて而して後に合有り合法は異を離れず。若し壊異を離れば壊は則ち無因なり。是故に成と共なるにも亦壊無し。若し壊を離るるも壊と共たるも成有る無くば、若し壊を離れて成有らば、成は則ち常たり、常は是れ不壊の相なり。而も實には法有りて常にして不壊の相なるを見ず。是故に壊を離れては成無し。若し壊と共にして成有りて謂ふも、是れ亦然らず。成と壊とは相違す。云何が一時に有らん。人の髮有ると髮無きと一時に俱なるを得ざるが如し。成と壊とも亦爾り。是故に壊と共にして成有ることは事然らず。何を以ての故に。若し法を分別する者は成の中に常に壊有りと説くと謂はば、是事然らず。何を以ての故に。若し成の中に常に壊有らば、則ち應に住法有るべからず、而も實には住有り。是故に若し壊を離るるも壊と共なるも應に成有るべからず。復次に、  
成と壊と共にして成する無し、離るるも亦成する有る無し

【二】第二に盡不盡門の破。

是二俱に不可なり、云何が當に成ずる有るべき

若し成と壞と共なるも成ずる無し。離るるも亦成ずる無し。若し共にして成ずるとも則ち

二法は相違す。云何が一時ならん。若し離るれば則ち無因なり。二門俱に成ぜず。云何が

當に成ずる有るべき。若し有らば應に説くべし。

問うて曰はく、『現に盡滅相の法有り。是盡滅相の法は、亦是盡と説き、亦是不盡と説

く。是の如くならば則ち應に成と壞と有るべし。』答へて曰はく、

盡ならば則ち成有る無く、不盡なるも亦成無し

盡ならば則ち壞有る無く、不盡なるも亦壞無し

諸法は日夜の中、念念に常に滅盡して過去す。水流の住せざるが如し。是を則ち盡と名

く。是事取るべからず、説くべからず。野馬に決定性の得べき無きが如く、是の如く、

盡に決定性の得べきこと無し。云何が分別して成有りと言くと説くを得べけん。是故に盡なる

も亦成ならずと言ふ。成無きが故に亦應に壞有るべからず。是故に盡なるも亦壞有る無し

と説く。又念念に生滅して常に相續不斷の故に名けて不盡と爲す。是の如き法は決定常

住にして不斷なり。云何が分別して説いて今是れ成の時なりと言ふを得べき。是故に無盡

なるも亦成無しと説く。成無きが故に壞無し。是故に不盡なるも亦壞無しと説く。是の如

く推求するに、實事不可得なるが故に成も無く壞も無し。

問うて曰はく、『且く成と壞とを置け、但法をして有らしめば何の咎有りや。』答へて曰

【三】第三に體相門の破。

はく、

若し成と壞とを離るれば、是れ亦法有る無し

若し當に法を離るべくんば、亦成と壞と有る無し

成と壞とを離るれば法無しとは、若し法に成無く壞無くんば、是法應に或は無或は常なるべし。而も世間には常法有る無し。汝成と壞とを離れて法有りと説かば、是事然らず。

問うて曰はく、『若し法を離れて但成と壞と有らば何の咎有りや。』答へて曰はく、『法を離れて成と壞と有ることは是れ亦然らず、何を以ての故に。若し法を離るれば、誰の成、誰

の壞なる。是故に法を離れて成と壞と有ることは事然らず。

復次に、

若し法の性空ならば、誰か當に成と壞と有るべき

若し性不空なるも、亦成と壞と有る無し

若し諸法の性空有らば、空に何んが成と壞と有らん。若し諸法の性不空ならば、不空は

則ち決定有なり。亦應に成と壞と有るべからず。

復次に、

成と壞と若し一ならば、是事則ち然らず

成と壞と若し異なるも、是事亦然らず

成と壞との一を推求するときは則ち不可得なり。何を以ての故に。異相なるが故に。種

【四】 第四に空不  
門の破。

【五】 第五に一異  
門の破。

【一六】第六に生滅門もて成壞を破す初偈は意を取つて破す。

【復次に等】次兩偈に無生の義を釋す。

種に分別するが故に。又成と壞と異なるも亦不可得なり。何を以ての故に。別有る無きが故に。亦無因なるが故に。

復次に、

若し現に見るを以て、而も生と滅と有りと言はば

則ち是れ癡妄にして、而も生と滅と有りと見ると爲す

若し眼見を以て生と滅と有るは、云何が言説を以て破せられんと謂はば、是事然らず。

何を以ての故に。眼見の生と滅とは則ち是れ愚癡顛倒の故に。諸法の性を見るに空にして

決定無きこと、幻の如く夢の如し。但凡夫は先世の顛倒の因縁に此眼を得。今世の憶想分

別の因縁の故に、生と滅を眼見すと言ふ。第一義の中には實に生と滅と無し。是事已に破

相品の中に於て廣く論けり。復次に、

法より法を生ぜず、亦非法を生ぜず

非法より、法及び非法を生ぜず

法より法を生ぜずとは、若は至るも、若は失ふも、二俱に然らず。法より法を生ぜば、

若は至るも、若は失ふも、是れ則ち無因なり。無因は則ち斷常に墮す。若し已に至つて法

より法を生ぜば、是法至り已りて而して名けて生と爲す。則ち是を常と爲す。又生じ已り

て更に生ぜば、又亦無因より生ず。是事然らず。若し已に失し法より法を生ぜば、是れ則

ち因を失ひ、生は無因なり。是故に失よりも亦法を生ぜず。法より非法を生ぜずとは、

【七】第七に斷常  
門もて成壞を破す  
四傷の中、初一傷  
は破

非法は所有無きに名く。法は有に名く。云何が有相より無相を生ぜん。是故に法より非法を生ぜず。非法より法を生ぜずとは、非法を名けて無と爲す。無云何が有を生ぜんや。若し無より有を生せば、是れ則ち無因なり。無因ならば則ち大過有り。是故に非法より法を生ぜず。非法より法を生ぜずとは、非法は所有無きに名く。云何が無所有より無所有を生ぜん。兎角は龜毛を生ぜざるが如し。是故に非法より非法を生ぜず。問うて曰はく、「法と非法とは種種に分別するが故に無生なり」と雖も、但法は應に法を生ずべし。答へて曰はく、

法は自より生ぜず、亦他より生ぜず  
自他より生ぜず、云何が生有らん

法未だ生ぜざる時は無所有なるが故に、又即ち自ら生ぜざるが故に、是故に法は自より生ぜず。若し法未だ生ぜずんば則ち亦他無し。他無きが故に他より生ずと言ふを得ず。又未だ生ぜずんば則ち自無し。自無くんば亦他無し。共よりも亦生ぜず。若し三種に生ぜずんば、云何が法より法の生ずる有らん。

(七もたつて)  
復次に、

若し所受の法有らば、即ち斷常に墮せん

當に知るべし所受の法は、常爲るか無常爲らん  
法を受くとは是れ常、是れ不善、常、無常等を分別するなり。是人は必ず若は常見、若は斷見に墮す。何を以ての故に。所受の法は應に二種有るべし。若は常、若は無常なり。二

【問うて曰はく等】次に外人の救。

俱に然らず。何を以ての故に。若し常ならば即ち常邊に墮し、若し無常ならば即ち斷邊に墮す。問うて曰はく、

有ゆる受法は、斷常に墮せず

因と果との相續の故に、斷ならず亦常ならず

人有り、分別して諸法を説くを信受すと雖も、而も斷常に墮せず。經に説くが如し、「五

陰は無常、苦、空、無我にして斷滅ならず」と。罪福の無量劫數に不失なるを説くと雖も

而も是れ常ならず。何を以ての故に。是法は因と果と常に生滅相續するが故に往來絶えず。

生滅の故に常ならず。相續の故に斷ならず。」答へて曰はく、

若し因と果との生滅、相續して而も斷ならずんば

滅は更に生ぜざるが故に、因は即ち斷滅と爲る

若し汝諸法は因と果との相續の故に、斷ならず常ならずと説くも、若し滅法ならば已に

滅して更に復生せず。是れ則ち因斷す。若し因斷せば云何が相續有らん、已滅は生ぜざる

が故に。復次に、

法は自性に住せば、應に有の無有るべからず

涅槃は相續を滅すれば、則ち斷滅に墮せん

法決定して有相の中に在らば、爾時無相無し。瓶に定んで瓶相有らば、爾時失壞の相無

きが如し。瓶有る時に隨つて失壞の相無く、瓶無き時も亦失壞の相無し。何を以ての故に。

【答へて曰はく等】次二偈に救を破す初は偏に斷滅に就いて、次は斷常に就いて破す。



【八】第八に三世門の偈。四偈ある中、初偈は滅不滅の破。

【若し初有の等】此偈に一時二有を破す。

若し瓶無くんば則ち所破無し。是義を以ての故に滅は不可得なり。滅を離るるが故に亦生無し。何を以ての故に。生と滅とは相因縁するが故に。又常等の過有るが故に。是故に應に一法に於て而も有無有るべからず。又汝先に因と果との生滅相續の故に、諸法を受くと雖も、斷常に墮せずと説くも、是事然らず。何を以ての故に。汝因と果との相續を説くが故に三有の相續有り。相續を滅するを涅槃と名く。若し爾らば、涅槃の時は應に斷滅に墮すべし。三有の相續を滅するを以ての故に。

（八またつぎ）復次に、

若し初有滅せば、則ち後有有る無し

初有若し滅せざるも、亦後有有る無し

初有は今世の有に名け、後有は來世の有に名く。若し初有滅して次に後有有らば、是れ即ち無因なり。是事然らず。是故に初有滅して後有有ると言ふを得ず。若し初有滅せざるも、亦應に後有有るべからず。何を以ての故に。若し初有未だ滅せずして而も後有有らば、是れ則ち一時に二有有り。是事然らず。是故に初有滅せずんば後有有る無し。問うて曰はく、『後有は初有の滅するを以て生ずるにあらず、不滅を以て生ずるにもあらず。但滅する時に生ず。』答へて曰はく、  
若し初有の滅する時に、而も後有生せば  
滅時は是れ一有にして、生時も是れ一有ならん

【若し生に於て等  
此偈に生死一有の  
破。

若し初有の滅する時に後有生ぜば、則ち二有は一時に俱なり。一有は滅時、一有は是れ生時なり。問うて曰はく、滅時生時二有俱ならば則ち然らず。但現見に初有の滅する時に後有生ず。答へて曰はく、

若し生に於て滅すと言ひ、而も一時なりと謂はば  
則ち此陰に於て死し、則ち此陰に於て生ぜん

若し生時滅時一時にして二有無く、而も初有の滅する時に後有生ずと謂はば、今應に何の陰の中に在るに隨つて死すとも、則ち此陰に於て生ずべし。應に餘の陰の中にて生ずべからず。何を以ての故に。死者は則ち是れ生者なり。是の如き死と生とは相違の法にして應に一時一處なるべからず。是故に、汝先に滅時生時一時にして二有無きも、但現見に初有の滅する時に、後有生ずと説くは、是事然らず。復次に、

【三世の中に等  
此偈に總じて破を  
結す。

三世の中に有の相續を、求むるに不可得なり  
若し三世の中に無くば、何んが有の相續有らん

三有とは欲有、色有、無色有に名く。無始の生死の中實知を得ざるが故に。常に三有、相續有り。今三世の中に於て諦かに求むるに不可得なり。若し三世の中に有る無くば、當に何れの處に於てか有の相續有るべき。當に知るべし有の相續有るは、皆愚癡顛倒に従ふが故に有にして、實の中には則ち無し。

中論卷第三

中ちゆう

論ろん 卷第四まゝしよだい

龍樹りゆうじゆ 菩薩造ぼつさつぞう

梵志ぼんし 青目釋しやうもくしやく

姚秦三藏鳩摩羅什譯やうしんさんざうくまろしやく

觀如來品第二十二くわんにまらいはんだいじふふに

【觀如來品】上來世間人法の不可得を求めて大乘の觀行を明し、下四品にこれを出世人に求む。  
【一】先づ如來の有を立つ。  
【二】次正しく之を破す。中に五、第一に是れ佛有りといふを破す。中、先づ人は佛といふを破す。中、一、佛と陰と不一に佛の破を明す。

問うて曰はく、「一切世中の尊に、唯如來正徧知のみ有りて、號して法王、一切智人と爲す。是れ則ち應に有なるべし。」

答へて曰はく、「今諦に思惟するに、若し有ならば應に取るべし。若し無くんば何の取る所ぞ。何を以ての故に。如來は、陰に非ず陰を離れず、此彼に相在せず

如來は陰を有せず、何の處にか如來有らん

若し如來實に有ならば、五陰を是れ如來と爲すや、五陰を離れて如來有りと爲すや、如來の中に五陰有りと爲すや、五陰の中に如來有りと爲すや。如來は五陰を有すと爲すや、是事皆然らず。五陰是れ如來に非ず。何を以ての故に。生滅の相なるが故に。五陰は生滅

【問うて曰はく是の如き義に等】二に佛と五陰と不他門の破を明す

の相なり。若し如來是れ五陰ならば、如來は即ち是れ生滅の相なり。若し生滅の相ならば、如來に即ち無常、斷滅等の過有らん。又受者と受法と則ち一ならん。受者は是れ如來、受法は是れ五陰なり。是事然らず。是故に如來は是れ五陰に非ず。五陰を離れても亦如來無し。若し五陰を離れて如來有らば、應に生滅の相有るべからず。若し爾らば如來に常等の過有らん。又眼等の諸根は見知する能はず。但是事然らず。是故に五陰を離れても亦如來無し。如來の中にも亦五陰無し。何を以ての故に。若し如來の中に五陰有ること、器中に果有り、水中に魚有るが如くならば、則ち異有りと爲す。若し異ならば即ち上の如き常等の過有り。是故に如來の中に五陰無し。又五陰の中にも如來無し。何を以ての故に。若し五陰の中に如來有ること、床上に人有り、器中に乳有るが如くならば、是の如きは則ち別異有り。上に過を説くが如し。是故に五陰の中にも如來無し。

如來は亦五陰を有せず。何を以ての故に。若し如來五陰を有すること、人の子を有するが如くならば、是の如くんば即ち別異有り。若し爾らば上の如き過有り。是事然らず。是故に如來は五陰を有せず。是の如く五種に求むるに不可得なり。何等か是れ如來なる。問うて曰はく、『是の如き義に如來を求むれば不可得なり。而も五陰和合して如來有り。』答へて曰はく、

陰合して如來有らば、則ち自性有る無し

若し自性有る無くんば、云何が他に因りて有らん

若し如來は五陰和合するが故に有ならば、即ち自性無し。何を以ての故に。五陰の和合に因りて有なるが故に。問うて曰はく、「如來は自性を以て有なるにあらず。但他性に因りて有なるべし。」答へて曰はく、「若し自性無くんば云何が他性に因りて有ならん。何を以ての故に。他性も亦自性無し。又相待因する無きが故に。他性不可得なり。不可得なるが故に名けて他と爲さず。」

復次に、

法若し他に因りて生ぜば、是れ即ち非我と爲す

若し法非我ならば、云何が是れ如來ならん

若し法衆縁に因りて生ぜば、即ち我有る無し。五指に因りて拳有り、是拳自體有る無きが如し。是の如く五陰に因りて我と名けば、是我は即ち自體無し。我に種種の名有り、或は衆生、人、天、如來等と名く。若し如來は五陰に因りて有らば、即ち自性無きが故に無我なり。若し無我ならば、云何が説いて如來と名けん。是故に偈の中に説く、法若し他に因りて生ぜば、是れ即ち非我と爲す。若し法非我ならば、云何が是れ如來ならん。復次に、

若し自性有る無くんば、云何が他性有らん

自性と他性とを離れて、何をか名けて如來と爲さん

若し自性無くんば他性も亦應に有るべからず。自性に因るが故に他性と名く。此れ無な

【復次に若し五陰に等】三に佛と五陰と非先非後門の破を明す。

【若し一異の中等】四に總じて破を結す。

【又所受の五陰等】次に法是れ如來といふを破す。

るが故に彼も亦無なり。是故に自性と他性と二俱に無なり。若し自性と他性とを離れては誰をか如來と爲さん。復次に、

若し五陰に囚らずして、先に如來有らば

今陰を受くるを以ての故に、則ち説いて如來と爲さん

今實に陰を受けずば、更に如來法無し

若し受けざるを以て無ならば、今當に云何が受くべき

若し其れ未だ受有らずんば、所受を受と名けず

受法無くして、而も名けて如來と爲す有る無し

若し一異の中に於ても、如來は不可得にして

五種に求むるも亦無なり、云何が受の中に有らん

又所受の五陰は、自性より有なるにあらず

若し自性より無くば、云何が他性より有らん

若し未だ五陰を受けざる先に如來有らば、是如來は今應に五陰を受け已りて如來と作る

べし。而も實には未だ五陰を受けざる時、先に如來無し。今云何が當に受くべき。又五陰

を受けずんば、五陰を名けて受と爲さず、受無くして而も名けて如來と爲すこと有る無し。

又如來は一異の中に求むるに不可得にして、五陰の中に五種に求むるも亦不可得なり。若

し兩らば、云何が五陰の中に於て如來有りと説かん。又所受の五陰は自性より有なるにあ

【復次に是の如き義等】次に人法を破するを結す。

【問うて曰はく汝受も空等】第二に空是れ佛といふを破す。中、初偈に空等の四空是れ佛といふを破す。

【寂滅相中等】此偈に常邊等の八句是れ佛といふを破す。

らず。若し他性より有なりと謂はば、自性より有ならざるに、云何が他性より有ならん。何を以ての故に。自性無きを以ての故に、又他性も亦無し。復次に、

是の如き義を以ての故に、受も空受者も空なり

云何が當に空を以て、而も空の如來を説くべけん

是義を以て思惟するに受、及び受者皆空なり。若し受にして空ならば、云何が空の受を以て而も空の如來を説かん。

問うて曰はく、「汝受も空、受者も空なりと謂はば、則ち定んで空有りや。」答へて曰はく、「然らず。何を以ての故に。」

空は則ち説くべからず、非空も説くべからず

共も不共も説き且し、但假名を以て説く

諸法の空は則ち應に説くべからず。諸法の不空も亦應に説くべからず。諸法の空にして不空なるも亦應に説くべからず、非空非不空も亦應に説くべからず。何を以ての故に。但相違を破するが故に假名を以て説く。是の如く正觀し思惟すれば、諸法實相の中應に諸難を以て難と爲すべからず。何を以ての故に。

寂滅相中には、常無常等の四無く

寂滅相中には、過無邊等の四無し

諸法實相は是の如く微妙寂滅なり。但過去世に因りて四種の邪見、世間は有常、世間は

【問うて曰はく若し等】第三に空有俱に佛に非ざる所以を料簡す。二偈の中、初には如來の現在に有無に非ざることを明す。

【是の如き性空の等】此偈に如來の滅度も亦有無に非ざることを明す。

無常、世間は常無常、世間は非常非無常を起す。寂滅の中には盡く無し。何を以ての故に。諸法實相は畢竟清淨にして取るべからず。空すら尙受けず、何に況んや四種の見有らんや。四種の見は皆受に因りて生ず。諸法實相には因る所の受無し。四種の見は皆自見を以て貴しと爲し、他見を賤しと爲す。諸法實相には此彼有る無し。是故に、寂滅中には四種の見無しと説く。過去世に因りて四種の見有るが如く、未來世に因りて四種の見有るも亦是の如し。世間は有邊、世間は無邊、世間は有邊無邊、世間は非有邊非無邊と。

問うて曰はく、『若し是の如く如來を破せば、則ち如來無きや。』答へて曰はく、

邪見深厚なる者は、則ち如來無しと説く

如來は寂滅相なるを、有と分別するも亦非なり

邪見に二種存り、一には世間の樂を破す、二には涅槃の道を破す。世間の樂を破すとは、是れ薩邪見なり。罪無く福無く如來等の賢聖無しと言ふなり。是れ邪見を起せば善を捨てて惡を爲す。則ち世間の樂を破す。涅槃の道を破すとは我に貪著して、有無を分別し、善を起して惡を滅す。善を起すが故に世間の樂を得るも、有無を分別するが故に涅槃を得ず。是故に若し如來無しと言はば、是れ深厚の邪見にして、乃ち世間の樂を失す、何に況んや涅槃をや。若し如來有りと言ふも、亦是れ邪見なり。何を以ての故に。如來は寂滅相なるに、而も種種に分別するが故に。是故に、寂滅相中如來有りと分別するも亦非と爲す。是の如き性空の中には、思惟も亦



【如來は戲論を等】  
第四に外人を呵責す。

【此如來品の中等】  
第五に佛相を略示す。

【觀顛倒品】本品は常樂我淨の四顛倒に就いて廣く解し、その空不可得なるを明す。  
【一】第一に煩惱顛倒生の義を破す。中一に煩惱顛倒を破す。中先に煩惱を破す。中一に立

如來の滅度の後、有と無とを分別すべからず。諸法實相は性空なるが故に、應に如來の滅後に於て、若は有、若は無、若は有無を思惟すべからず。如來は本より已來畢竟空なり、何に泥んや滅後をや。

如來は戲論を過ぐ、而して人は戲論を生ず。戲論は慧眼を破す、是れ皆佛を見ず。

戲論とは憶念して相を取り、此彼を分別して佛の滅、不滅等を言ふに名く。是人は戲論の爲に慧眼を覆はるるが故に、如來の法身を見る能はず。

此如來品の中、初中後に思惟するに如來の定性は不可得なり。是故に偈に説く、  
如來の有ゆる性は、即ち是れ世間の性なり。

如來は性有る無し、世間も亦性無し。此品の中にて思惟し推求するに、如來の性は即ち是れ一切世間の性なり。問うて曰はく、何等か是れ如來の性なる。答へて曰はく、如來は性有る無し。世間に性無きと同

じ。

中論觀顛倒品第二十三

問うて曰はく、

【答へて曰はく等】  
 二に五偈もて破す  
 一は無自性門の破

【我と法との等】  
 二に以人倒法の破

【誰か此煩惱を等】  
 三に無量の破。

【若し我無し等】  
 四に五求の破。

憶想分別より、貪悲癡を生ず  
 淨不淨顛倒なり。皆業緣より生ず

經に説く、「淨不淨の顛倒に因り、憶想分別して貪悲癡を生ず」と。是故に當に知るべし、

貪悲癡有り。」答へて曰はく、

若し淨不淨、顛倒に因りて三毒を生ぜば

三毒には即ち性無し、故に煩惱には實無し

若し 諸の煩惱は淨不淨顛倒に因りて、憶想分別して生ぜば、即ち自性無し。是故に諸

の煩惱には實無し。復次に、

我と法との有と以び無と、是事終に成ぜず

我無くんば 諸の煩惱の、有と無とも亦成ぜず

我は因縁有りて若し有、若し無にして成すべき無し。今我無くんば、諸の煩惱は云何

が有無を以て而も成すべけん。何を以ての故に。

誰か此煩惱を有せん、是れ即ち成ぜずと爲す

若し是を離れて而も有らば、煩惱は則ち屬する無し

煩惱を名けて能く他を惱すと爲す。他を惱すとは應に是れ衆生なるべし。是衆生は一切

處に於て推求するに不可得なり。若し衆生を離れて但煩惱有りと言はば、是煩惱は則ち所

屬無し。若し我無しと雖も、而も煩惱は心に屬すと謂ふも、是事亦然らず。何を以ての故

に。

身見五種に、之を求むるに不可得なるが如く

煩惱も及び垢心も、五に求むるに亦得ず

身見は五陰の中に五種に求むるに不可得なるが如く、諸煩惱も亦垢心の中に於て五種に

求むるも亦不可得なり。又垢心は煩惱の中に於て五種に求むるも亦不可得なり。復次に、

淨不淨顛倒は、是れ則ち自性無し

云何が此二に因りて、而も諸の煩惱を生ぜん

淨不淨顛倒とは、顛倒は虚妄に名く。若し虚妄ならば即ち自性無し。自性無くんば則ち

顛倒無し。若し顛倒無くんば云何が顛倒に因りて諸煩惱を起さん。問うて曰はく、

色聲香味觸、及び法を六種と爲す

是の如きの六種は、是れ三毒の根本なり

是六入は三毒の根本なり。此六入に因りて淨不淨顛倒を生ず。淨不淨顛倒に因りて貪悲

癡を生ずるなり。答へて曰はく、

色聲香味、觸及び法の體の六種は

皆空にして炎と夢との如く、乾闥婆女の如し

是の如き六種の中に、何んが淨不淨有らん

猶し女人の如く、亦鏡中の像の如し

【復次に淨不淨顛倒は等】五に以因泥果の破。

【問うて曰はく色聲等】三に救。

【答へて曰はく等】四に破、先づ二偈に其六塵を破す。

【復次に淨相に因らざれば等】次に二偈に淨不淨を破す

【復次に若淨有ること等】次に其三毒を破す。

【問うて曰はく經に等】次に顛倒を破す、先づ立、【答へて曰はく等】次に破、九偈ある

色、聲、香、味、觸、法の自體は、未だ心と和合せざる時は空にして所有無し。炎の如く夢の如く化人の如く、鏡中の像の如し。但心を誑惑して定相有る無し。是の如き六入の中に何んが淨不淨有らん。復次に、

淨相に因らざれば、則ち不淨有る無し  
淨に因りて不淨有り、是故に不淨無し

若し淨に因らずしては、先に不淨有る無し。何に因りてか而も不淨を説かん。是故に不淨無し。復次に、

不淨に因らざるも、則ち亦淨有る無し  
不淨に因りて淨有り、是故に淨有る無し

若し不淨に因らずしては先は淨有る無し。何に因りてか而も淨を説かん。是故に淨有る無し。復次に、

若し淨有る無くんば、何に由りてか而も貪有らん  
若し不淨有る無くんば、何に因りてか而も悲有らん  
淨不淨無きが故に、則ち貪悲を生ぜず

問うて曰はく、「經に常等の四顛倒を説く。若し無常の中に常を見れば、是を顛倒と名く。若し無常の中に無常を見れば、此は顛倒に非ず。餘の三顛倒も亦是の如し。顛倒有るが故に顛倒者も亦應に有るべし。何が故に都て無しと言ふや。」答へて曰はく、

中、初四偈は性空門に就いて倒不倒を破す。初に倒を破す。

【若し無常の等】次に不倒を破す。

【可著と著者と等】次に著を破す。

【若し著法有る無くんば等】次に破を結す。

【復次に倒有るも等】次三偈は三時門の破、中、初二偈は三時門に就いて倒生の義を破す。

無常に於て常と著するを、是れ則ち顛倒と名けは空の中には常有る無し、何の處にか常の倒有らん

若し無常の中に於て常と著するを、名けて顛倒と爲さば、諸法の性空の中には常有る無し。是中何の處にか常顛倒有らん。餘の三も亦是の如し。復次に、

若し無常の中に於て、無常と著するは倒に非すとせば空の中には無常無し、何か顛倒に非ざる有らん

若し無常に著して是を無常と言ふは、名けて顛倒と爲さすとせば、諸法性空の中には無常無し。無常無きが故に、誰をか顛倒に非すと爲さん。餘の三も亦是の如し。復次に、

可著と著者と著と、及び所用の著法と

是れ皆寂滅の相なり、云何が而も著有らん可著は物に名け、著者は作者に名け、所用の著法は所用の事に名く。是れ皆性空にして寂滅の相なり。如來品の中に説く所の如し。是故に著有る無し。復次に、

若し著法有る無くんば、邪は是れ顛倒と言ひ正は不顛倒と言ふ、誰にか是の如き事有らん

著は憶想して此彼有無等を分別するに名く。若し此著者無くんば誰をか邪顛倒と爲し、誰をか正不顛倒と爲さん。復次に、

倒有るも倒を生せず、倒無きも倒を生せず

【諸の顛倒の不生等】後一偈に倒不生の義を破す。

【若し常樂我淨等】後兩偈に實不實門もて倒不倒を破す

倒者も倒を生せず、不倒も亦生せず

若し顛倒時に於ても、亦顛倒を生せず

汝自ら觀察すべし、誰か顛倒を生ぜん

已に顛倒せば則ち更に顛倒を生せず、已に顛倒するが故に。顛倒せざる者も亦顛倒せず、

顛倒有る無きが故に。顛倒時にも亦顛倒せず、二過有るが故に。汝今憍慢心を除きて善く

自ら觀察せよ。誰をか顛倒者と爲さん。復次に、

諸の顛倒の不生、云何が此義有らん

顛倒有る無きが故に、何んが顛倒者有らん

顛倒は種種の因縁に破せらるるが故に、不生に墮在す。彼不生に貪著して、不生は是れ

顛倒の實相と謂ふ。是故に偈に説く、「云何が不生を名けて顛倒と爲さん」と。乃至無漏法

すら尚名けて不生の相と爲さず、何に況んや顛倒是れ不生の相ならん。顛倒無きが故に何

んが顛倒者有らん。顛倒に因りて顛倒者有ればなり。復次に、

若し常我樂淨にして、而も是れ實有ならば

是常我樂淨は、則ち是れ顛倒に非ず

若し常我樂淨の是四にして實に性有らば、是常我樂淨は則ち顛倒に非ず。何を以ての故

に定んで實事有るが故に。云何が顛倒と言はん。若し常我樂淨の倒の是四無しと謂はば、

無常、苦、無我、不淨の是四は應に實有にして、顛倒と名けず、顛倒と相違するが故に、

不顛倒と名くべし。是事然らず。何を以ての故に。

若し常我樂淨にして、而も實に有る無くんば

無常苦不淨、是れ則ち亦應に無かるべし

若し常我樂淨の是四、實に無くば、無なるが故に無常等の四事も亦應に有るべからず。

何を以ての故に。相因待する無きが故に。

復次に、

是の如くして顛倒滅すれば、無明も則ち亦滅す

無明滅するを以ての故に、諸行等も亦滅す

是の如くしてとは其義の如くして、諸の顛倒を滅するが故に、十二因縁の根本の無明

も亦滅す。無明滅するが故に三種の行業乃至老死等皆滅す。

復次に、

若し煩惱は性實にして、而も所屬有らば

云何が當に斷すべけん、誰か能く其性を斷せん

若し諸の煩惱は即ち是れ顛倒にして而も實に性有らば、云何が斷すべき。誰か能く其

性を斷ぜん。若し諸の煩惱は皆虚妄にして性無く、而して斷すべしと謂ふも、是れ亦然

らず。何を以ての故に。

若し煩惱は虚妄にして、性無く屬無くんば

【復次に是の如くして等】第二に破意を結す。

【二】第二段に外人の修治道もて煩惱を斷するの義を破す。中、初偈は性實の煩惱滅すべからずと破す。

【若し煩惱は等】次偈は假名の煩惱の滅する所無しと破す。

云何が當に斷すべき、誰か能く無性を斷ぜん  
 若し諸の煩惱は虛妄無性にして、則ち所屬無くば、云何が斷すべけん、誰か能く無性を斷ぜん。

中論觀四諦品第二十四

【觀四諦品】本品は苦集滅道の四諦を有と執するも、無と執するも然らず、亦畢竟不可得と論じて諸法實相の意を徹せしめんとす。

【一】第一に外人論主空を執すると過つて論ず。偈の中、一に過つて論主に四諦三寶無く出世法無しとす。

問うて曰はく、『四顛倒を破して、四諦に通達すれば四沙門果を得。』

若し一切皆空ならば、生も無く亦滅も無し  
 是の如くんば則ち、四聖諦の法有る無し  
 四諦無きを以ての故に、見苦と斷集と  
 證滅と及び修道と、是の如き事皆無し  
 是事無きを以ての故に、則ち四道果無し  
 四果有る無きが故に、得向の者も亦無し  
 若し八賢聖無くんば、則ち僧寶有る無く  
 四諦無きを以ての故に、亦法寶も有る無し  
 法僧寶無きを以て、亦佛寶も有る無し  
 是の如く空を説かば、是れ則ち三寶を破すべし



【復次に空法は等】  
二に論主の空を執して因果罪福を失すと難す。

【二】外人を破する中、三十四偈を開いて、先づ第一に十三行もて外人の空に迷ふを明す中、一に外人空に迷う横に邪難を生

もし一切世間は皆空にして所有なくんば、即ち應に生無く滅無かるべし。生無く滅無きを以ての故に、則ち四聖諦無し。何を以ての故に。集諦より苦諦を生ず。集諦は是れ因、苦諦は是れ果なり。苦集諦を滅するを名けて滅諦と爲す。能く滅諦に至るを名けて道諦と爲す。道諦は是れ因、滅諦は是れ果なり。是の如く四諦に因有り果有り。若し生無く滅無くんば則ち四諦無し。四諦無きが故に、則ち見苦、斷集、證滅、修道無し。見苦、斷集、證滅、修道無きが故に、則ち四沙門果無し。四沙門果無きが故に、則ち四向四得の者無し。若し此八賢聖無くんば、則ち僧寶無し。又四聖諦無きが故に、法寶も亦無し。若し法寶僧寶無くんば、云何が佛有らん。法を得るを名けて佛と爲す。法無くんば何んが佛有らん。汝諸法の皆空を説かば則ち三寶を壊せん。復次に、

空法は因果を壊し、亦罪福を壊す

亦復悉く、一切世俗の法を毀壞す

若し空法を受くれば、則ち罪神及び罪福の果報を破し、亦世俗法を破す。是の如き等の諸過有るが故に、諸法は應に空なるべからず。」

(三) 答へて曰はく、

汝は今實に、空と空の因縁とを知り

及び空の義とを知る能はず、是故に自ら惱を生ず

汝は云何が是れ空相、何の因縁を以て空を説くやを解せず、亦空の義を解せず。實の如

ずるを明す。初偈は外人空と空の因縁と空の義を知らざれば横に邪難を生ずるを明す。【諸佛は二諦に等】次に外人が世俗、第一義の二法を解せずと明す。

【正しく空を觀ずること等】次に有

く知る能はざるが故に、是の如き疑難を生ずるなり。復次に

諸佛は二諦に依りて、衆生の爲に法を説きたまふ

一には世俗諦を以てし、二には第一義諦なり

若し人、二諦を分別するを知る能はずんば

則ち深佛法に於て、眞實義を知らず

世諦とは、一切法性空なるも、而も世間の顛倒の故に虚妄の法を生ず、世間に於ては

是れ實なり。諸の賢聖は眞に顛倒性なりと知るが故に、一切法皆空にして生無しと知

る。聖人に於て是れ第一義諦なるを名けて實と爲す。諸佛は是二諦に依りて、而も衆生の

爲に法を説きたまふ。若し人如實に二諦を分別する能はずんば、則ち甚深の佛法に於て實

義を知らず。若し一切法の不生は是れ第一義諦なり、第二俗諦を須ひすと謂ふも、是れ亦

然らず。何を以ての故に。

若し俗諦に依らざれば、第一義を得ず。

第一義を得ずんば、則ち涅槃を得ず

第一義は皆言説に因る。言説は是れ世俗なり。是故に若し世俗に依らずんば、第一義は

則ち説くべからず。若し第一義を得ずんば、云何が涅槃に至るを得ん。是故に諸法は無生

なりと雖も而も二諦有り。復次に、

正しく空を觀ずる能はずんば、鈍根は則ち自ら害す

所得人の空を觀ずる能はざれば過をせずを明す。

【世尊は是法の等】次に有所得人は前三門に達せざれば如来の初成道を障ふと明す。

【復次に汝我空に等】二に論主は性空と悟るが故に失無きことを明す。亦爾、先づ空の義に失無しと明す。

【空の義有るを以ての故等】次に空の義の故に得有り」と明す。

咒術を善くせず、善く毒蛇を捉へざるが如し。

若し人鈍根にして善く空法を解せずんば、空に於て失有りて而して邪見を生ず。毒蛇を捉ふるに利有らんと爲るも、善く捉ふる能はずんば、反つて害せらるるが如し。又咒術もて所作有らんと欲するも、善く成ずる能はずんば、則ち還つて自ら害するが如し。鈍根の空法を觀するも亦是の如し。復次に、

世尊は是法の、甚深微妙の相にして

鈍根の及ぶ所に非ずと知る、是故に説くことを欲せず

世尊は法の甚深微妙にして鈍根の解する所に非ざるを以て、是故に説くを欲せざりき。

復次に、

汝、我空に著して、而して我過を生ずと爲すと謂ふも

汝の今説く所の過は、空に於ては則ち有る無し

汝、我空に著するが故に、我過を生ずと爲すと謂ふも、我説く所の性空は、空も亦復空にして、是の如きの過無し。復次に、

空の義有るを以ての故に、一切法は成ずるを得

若し空の義無くんば、一切は則ち成ぜず

空の義有るを以ての故に一切世間、出世間の法は皆悉く成就す。若し空の義無くんば

則ち皆成就せず。復次に、

【汝今自ら等】次三偈に有爲に執するの過を略釋す。

汝今自ら過有りて、而も以て我に廻向す  
人の馬に乗る者は、自ら所乘を忘るるが如し

汝有の法の中に於て過有るに、自ら覺る能はずして、而して空の中に於て過を見るは、人の馬に乗りて而も其所乘を忘るるが如し。何を以ての故に。

若し汝諸法は、決定して性有りて見れば  
即ち諸法は、因無く亦縁無しと見ると爲す

汝諸法は定性有りて説く。若し爾らば則ち諸法の無因無縁を見るなり。何を以ての故に。若し法決定して有性ならば、則ち應に不生不滅なるべし。是の如き法は何んが因縁を用ひん。若し諸法因縁より生ぜば、則ち性有る無し。是故に諸法は決定して性有らば、則ち因縁無し。若し諸法は決定して自性に住すと謂ふも、是れ則ち然らず。何を以ての故に。

即ち因果、作者作法を破し  
亦復一切萬物の、生滅を壊すと爲す

諸法は定性有らば、則ち因果等の諸事無し、偈に説くが如し。

衆因縁生の法は、我即ち是を無なりと説く  
亦是を假名と爲す、亦は是れ中道の義なり

未だ嘗て一法も、因縁より生ぜざるは有らず

【衆因縁生の法は】衆因縁生の法は【我即ち是を無なりと説く】次二偈に細を引いて證す。

【汝上に説く所の  
等】第二に有所得  
定性人の著を破す  
過を推して外人に  
還す中、一に無四  
諦の過を還す。今  
は總じて四諦無き  
を明す。

【苦にして縁より  
等】次に四偈もて  
別して四諦無きを  
明す。

是故に一切法は、是れ空ならざる者無し

衆因衆生の法、我即ち是を空なりと説く。何を以ての故に。衆縁具足し和合して而して物生ず。是物は衆因縁に属するが故に自性無し。自性無きが故に空なり。空も亦復空なり。但衆生を引導せんが爲の故に假名を以て説く。有と無との二邊を離るるが故に、名けて中道と爲す。是法は性無きが故に有と言ふを得ず、亦空無きが故に無と言ふを得ず。若し法に性相有らば、則ち衆縁を待たずして而も有ならん。若し衆縁を待たずんば則ち法無し。是故に空ならざる法有る無し。

汝上に説く所の空法に過有りとせば、此過は今還つて汝に在り。何を以ての故に。

若し一切にして空ならずんば、則ち生滅有る無し

是の如くんば、則ち、聖諦の法有る無し

若し一切法各各性有りて空ならずんば、則ち生滅有る無し。生滅無きが故に、則ち四聖諦の法無し。何を以ての故に。

苦にして縁より生ぜずんば、云何が當に苦有るべき

無常は是れ苦の義なり、定性ならば無常無し

苦にして縁より生ぜざるが故に、即ち苦無し。何を以ての故に。經に説く、「無常は是れ苦の義なり」と。若し若に常性有らば、云何が無常有らん。自性を捨てざるを以ての故に。復次に、

若し苦にして定性有らば、何が故に集より生ぜん

是故に集有る無し、空の義を破するを以ての故に

若し苦に定性有らば、則ち應に更に生ずべからず。先に已に有るが故に。若し爾らば

則ち集諦無し。空の義を壞するを以ての故に。復次に、

苦若し定性有らば、則ち應に滅有るべからず

汝定性に著するが故に、即ち滅諦を破す

苦若し定性有らば、則ち應に滅すべからず。何を以ての故に。性は則ち滅無きが故に。

復次に、

苦若し定性有らば、則ち道を修する有る無し

若し道修習すべくんば、即ち定性有る無し

法若し定んで有らば則ち修道有る無し。何を以ての故に。若し法にして實ならば、則ち

是れ常なり。常ならば則ち増益すべからず。若し道修すべくんば、道には則ち定性有る

無し。復次に、

若し苦諦有る無く、及び集滅諦無くんば

苦を滅すべき所の道は、竟に何の所に至ると爲んや

諸法にして若し先に定んで定性有らば、則ち苦集滅諦無し。今滅苦の道は竟に何の滅苦の

【復次に若し苦等】  
二に無三寶の過を  
還す。今は總じて  
無三寶を明す。

【若し苦諦等】次  
に四諦無きを結す

若し苦定んで性有りて、先より來見ざる所ならば

今に於て云何が見んや、其性は異らざるが故に

若し先に凡夫の時苦の性を見る能はずんば、今亦應に見るべからず。何を以ての故に。

不見性は定まれるが故に。復次に、

見苦の然らざるが如く、斷集と及び證滅と

修道と及び四果とも、是れ亦皆然らず

苦諦の性先に不見ならば、後にも亦應に見るべからざるが如く、是の如く亦應に斷集、證

滅、修道も有るべからず。何を以ての故に。是集の性は先より來斷せずば、今も亦應に

斷すべからず。性は斷すべからざるが故に。滅も先より來證ならずば、今も亦應に證す

べからず。先より來證せざるが故に。道も先より來修せずば、今も亦應に修すべから

ず。先より來修せざるが故に。是故に四聖諦と、見、斷、證、修の四種の行と皆應に有

るべからず。四種の行無きが故に、四道果も亦無し。何を以ての故に。

是四道果の性は、先より來得べからず

諸法の性若し空ならば、今云何が得べけん

諸法若し定性有りて、四沙門果は先より來未得ならば、今云何が得べき。若し得べ

くんば、性は則ち定無し。復次に、

若し因果有る無くんば、則ち得と向との者無し

【問うて曰はく等】次に別して大乘の因果無きことを明す。

八聖無きを以ての故に、則ち僧寶有る無し。四沙門果無きが故に、則ち得果と向果との者無し。八賢聖無きが故に、則ち僧寶有る無し。而も經には八賢聖を説いて名けて僧寶と爲す。復次に、

四聖諦無きが故に、亦法寶も有る無し

法寶と僧寶と無くんば、云何が佛寶有らん

四聖諦を行じて涅槃の法を得。若し四諦無くんば則ち法寶無し。若し二寶無くんば、云

何が當に佛寶有るべき。汝是の如き四縁を以て、諸法の定性を説かば、則ち三寶を壊せ

ん。問うて曰はく、「汝諸法を破すと雖も、究竟道たる阿耨多羅三藐三菩提は應に有るべし。是道に因るが故に名けて佛と爲す。」答へて曰はく、

汝の説にては則ち、菩提に因らずして而も佛有り

亦復佛に因らざるも、而も菩提有らん

汝諸法は定性有りと言かば、則ち應に菩提に因りて佛有り、佛に因りて菩提有るべからず。是二は性常に定なるが故に。復次に、

復勤めて精進して、菩提道を修行すと雖も

若し先に佛の性非ずんば、應に成佛するを得べからず

先に性無きを以ての故に、鐵に金性無くんば、復種種に鍛煉すと雖も、終に金と成らざるが如し。復次に、



【復次に若し諸法等】次に其罪福無きの過を還す。先づ無罪福の因果を明す。

【汝一切法の等】次に無世俗法を明す。

若し諸法空ならずんば、罪と福とを作す者無からん空ならずんば何の作す所か有らん、其性定まるを以ての故に

若し諸法不空ならば、終に人有りて罪と福とを作す者無し。何を以ての故に。罪福の性は先に已に定まるが故に。又作と作者と無きが故に。復次に、

汝罪福の中に於て、果報を生ぜずば

是れ則ち罪福を離れて、而も諸の果報有り

汝罪福の因縁の中に於て皆果報無くんば、則ち應に罪福の因縁を離れて而も果報有るべし。何を以ての故に。果報は因を待たずして出づるが故に。問うて曰はく、「罪福を離れて

は善惡の果報無かるべし。但罪福より善惡の果報有らん。」答へて曰はく、

若し罪福より、而も果報を生ずと謂はば

果は罪福より生ずるに、云何が不空なりと言はん

若し罪福を離れて善惡の果無くんば、云何が果を不空なりと言はん。若し爾らば作者を離るれば則ち罪福無し。汝先に諸法は不空なりと説きたるは、是事然らず。復次に、

汝一切法の、諸の因縁空の義を破せば

則ち世俗に於て、諸の餘の有ゆる法を破す

汝若し衆因縁法第一空義を破せば、則ち一切世俗法を破す。何を以ての故に。

若し空の義を破せば、即ち應に所作無かるべく

作さ無なくして而しも作さ有り、不ふ作さにして作さ者と名なくべし

若もし空くうの義ぎを破はせば、則すなはち一切いつせきの果くわは皆みな作さ無なく因いん無なく、又また不ふ作さにして而しも作さし、又また一切いつせき

の作さ者は應まさに所しよ作さ有あるべからず。又また作さ者しやを離はなれて應まさに業ごふ有あり、果くわ報ほう有あり、受じゆ者しや有あるべくば、

但た是このこと事こと皆みな然しからず。是このゆゑ故ゆゑに應まさに空くうを破はすべからず。復また次つぎに、

若もし決けつ定ていの性しやう有あらば、世せ間けん種しゆの相さうは

則すなはち不ふ生じやう不ふ滅めつの、常じやう住じゆにして而しも不ふ壞わいならん

若もし諸しよ法ぽうにして定てい性しやう有あらば、則すなはち世せ間けん種しゆの相さう、天てん、人にん、畜ちく生しやう、萬まん物ぶつは、皆みな應まさに不ふ生じやう、

不ふ滅めつにして常じやう住じゆ不ふ壞わいなるべし。何なにを以もつての故ゆゑに。實じつ性しやう有あらば變へん異いすべからざるが故ゆゑに。而しか

も現ま見けんに萬まん物ぶつは、各かく變へん異いの相さう有ありて生じやう滅めつ變へん易いす。是このゆゑ故ゆゑに應まさに定てい性しやう有あるべからず。

復また次つぎに、

若もし空くう有ある無なくんば、未み得とくは應まさに得とくなるべからず

亦また煩ぼん惱なうを斷たずる無なく、亦また苦く盡じんの事ことも無なし

若もし空くう有ある無なければ、則すなはち世せ間けん出しゆつ世せけんの有あゆる功く徳とくの未み得とく者しやは皆みな應まさに得とく有あるべからず。

亦また應まさに煩ぼん惱なうを斷たずる者もの有あるべからず。亦また苦く盡じんも無なし。何なにを以もつての故ゆゑに。性しやう定ていまるを以もつての

故ゆゑに。

是このゆゑ故ゆゑに經きやう中ちゆうに説とくく、若もし因いん緣えん法ぽうを見みれば

則すなはち能よく帥しゆいを見み、苦く集じふ滅めつ道だうを見みると爲なすと

【復次に若し空等】  
第三に總結して勸  
誡す、先づ誡めて勸  
を捨せしむ。

【是故に等】次に  
因縁を學すべきを  
勸む。

【觀涅槃行品】本品  
 は惑人の涅槃を種  
 種に横計するの非  
 を破して之を正觀  
 せしめ、其も亦畢  
 竟不可得にして世  
 間と性を一にすと  
 いふを明す。  
 【一】第一段に涅  
 槃を論ず。中に二  
 第一は所證の涅槃  
 の邪正を論ず。今  
 先づ略破。中一に  
 邪涅槃を略破す。

若し人一切法の衆縁より生ずるを見れば、是人は即ち能く佛の法身を見、智慧を増益し、能く四聖諦苦集滅道を見、四聖諦を見て四果を得、諸の苦惱を滅す。是故に應に空の義を破すべからず。若し空の義を破すれば、則ち因縁法を破す。因縁法を破すれば、則ち三寶を破す。若し三寶を破すれば則ち自破と爲す。

中論觀涅槃品第二十五

問うて曰はく、

若し一切法空にして、生無く滅無くんば

何をか斷じ何の滅する所あつて、而も稱して涅槃と爲すや

若し一切法にして空ならば、則ち生無く滅無し。生無く滅無くんば、何の斷ずる所、何の滅する所有りて而も名けて涅槃と爲すや。是故に一切法は應に空なるべからず。諸法は

空ならざるを以ての故に、諸の煩惱を斷じ、五陰を滅するを名けて涅槃と爲す。答へて

曰はく、

若し諸法不空ならば、則ち生無く滅無し

何をか斷じ何の滅する所有りて、而も稱して涅槃と爲すや

若し一切世間にして不空ならば、則ち生無く滅無し。何の斷ずる所、何の滅する所有り

【名くる所の涅槃とは等】二に正涅槃を略す。

【復次に經に説か】次に廣破。中初し備は有無是れ涅槃といふを破す。中に亦甚五偈は別して有無是れ涅槃といふを破す。

て、而も名けて涅槃と爲すや。是故に、有無の二門は則ち涅槃に至るに非ず。名くる所の涅槃とは、

無得亦無至、不離亦不常

不生亦不滅、是を説いて涅槃と名く

無得とは、行に於ても果に於ても所得無きなり。無至とは、處として至るべき無きなり。

不斷とは、五陰は先より來畢竟空なるが故に、道を得て無餘涅槃に入る時も亦斷無き

なり。不常とは若し法の分別に得べき有らば、則ち名けて常と爲す。涅槃は寂滅にして法

の分別すべき無きが故に、名けて常と爲さず。生滅も亦爾なり。是の如き相なる者を名け

て涅槃と爲す。復次に經に説く、「涅槃は有に非ず、無に非ず、有無に非ず、非有に非ず、

非無に非ず。一切法の不受にして内寂滅なるを涅槃と名く」と。何を以ての故に。

涅槃は有と名けず、有は則ち老死の相なり

終に有法の、老死の相を離るるもの有る無し

眼見は一切萬物は皆生滅するが故に、是れ老死の相なり。涅槃にして若し是れ有ならば、

則ち應に老死の相を有すべし。但是事然らず。是故に涅槃は有と名けず。又生滅老死を離

れて別に定法有りて、而も涅槃と名くるを見ず。若し涅槃にして是れ有ならば、即ち應に

生滅老死の相を有すべし。老死の相を離るるを以ての故に、名けて涅槃と爲す。復次に、

若し涅槃にして是れ有ならば、涅槃は即ち有爲なり

終に一法として、而も是れ無爲なる者有る無し  
涅槃は是れ有に非ず。何を以ての故に。一切萬物は衆縁より生じて皆是れ有爲なり。一  
法として名けて無爲と爲す者有る無し。常法を假に無爲と名くと雖も、理を以て之を推す  
に、無常の法すら尙有る無し、何に況んや常法にして見るべからず、得べからざる者をや。  
復次に、

若し涅槃にして是れ有ならば、云何が無受と名けん

受に従らずして、而か名けて有法と爲すもの有る無し

若し涅槃にして是れ有法なりと謂はば、經に則ち應に無受は是れ涅槃と説くべからず。

何を以ての故に。有法有りて不受にして而も有る無し。是故に涅槃は有に非ず。問うて曰

はく、『若し有は涅槃に非ずんば、無は應に是れ涅槃なるべきや。』答へて曰はく、

有すら尙涅槃に非ず、何に況んや無に於てをや

涅槃は有を有する無し、何の處にか當に無有るべき

若し有は涅槃に非ずんば、無は云何が是れ涅槃ならん。何を以ての故に。有に因るが故

に無有り、若し有無くんば何んが無有らん。經に説くが如し、光有今無を則ち無と名く

と、涅槃は則ち然らず。何を以ての故に。有の法の變じて無と爲るに非ざるが故に。是故

に無も亦涅槃と作らず。復次に、

若し無が是れ涅槃ならば、云何が不受と名けん

【問うて曰はく若し等】次二偈に合

未だ曾て不受にして、而も名けて無法と爲すもの有らず  
若し無が是れ涅槃なりと謂はば、經に則ち應に不受を涅槃と名くと説くべからず。何を以ての故に。不受にして而も無法と名くるもの有ること無し。是故に涅槃は無に非ずと知る。問うて曰はく、『若し涅槃は有に非ず、無に非ずんば、何等か是れ涅槃なる。』答へて曰はく、

受と諸の因縁との故に、生死の中に輪轉す

受と諸の因縁との非ざるを、是を名けて涅槃と爲す

如實に顛倒を知らざるが故に。五受陰に因りて生死に往來す。如實に顛倒を知るが故に、則ち復五受陰に因りて生死に往來せず。無性の五陰は復相續せざるが故に、説いて涅槃と名く。復次に、

佛の經中に、有を斷じ非有を斷ずと説くが如し

是故に知る涅槃は、有に非ず亦無にも非ず

有は三有に名け、非有は三有の斷滅に名く。佛は此二を斷ずるを説くが故に、當に知るべし涅槃は有に非ず、亦無にも非ずと。

問うて曰はく、『若し有も、若し無も涅槃に非ずんば、今有と無との共に合せる、是れ涅槃なり。』答へて曰はく、

若し有と無との合を、涅槃と爲すと謂はば

【問うて曰はく若し有も等】二に四偈もて亦有亦無は涅槃といふを釋す。

有無は即ち解脱たれば、是事則ち然らず

若し有と無との合を涅槃と爲すと謂はば、即ち有爲の二事の合を解脱と爲す。是事然らず。何を以ての故に。有と無との二事は相違するが故に。云何が一處に有らん。復次に、

若し有と無との合を、涅槃と爲すと謂はば

涅槃は無受に非ざるべし、是二は受より生ずればなり

若し有と無との合を涅槃と爲すと謂はば、經に應に涅槃は無受に名くと説くべからず。

何を以ての故に。有と無との二事は受より生じ、相因りて而して有なり。是故に有と無と

の二事の合を涅槃と爲すを得ず。復次に、

有と無と共に合して成ぜば、云何が涅槃と名けん

涅槃は無爲に名く、有と無とは是れ有爲なり

有と無との二事共に合するを涅槃と名くるを得ず。涅槃は無爲に名く。有と無とは是れ

有爲なり。是故に有無は是れ涅槃に非ず。復次に、

有と無との二事の共、云何が是れ涅槃ならん

是二は同處ならず、明と暗と俱ならざるが如し

有と無との二事は涅槃と名くるを得ず。何を以ての故に。有と無とは相違し、一處なる

の得べからざること、明と暗との俱ならざるが如し。是故に有の時には無無し。無の時に

は有無し。云何が有と無と共に合せるを、而も名けて涅槃と爲さん。

【若し有と無と共に等】三に二偈もて非有非無是れ涅槃といふを破す。

【復次に如來は等】第二に能證の人の邪正を論ず。

問うて曰はく、『若し有と無と共に合せるは涅槃に非ずんば、今非有非無は應に是れ涅槃なるべし。』答へて曰はく、

若し非有非無、之を名けて涅槃と爲せば

此非有非無は、何を以てか而も分別せん

若し涅槃が非有非無ならば、此非有非無は何に因りてか而も分別せん。是故に非有非無、

是れ涅槃なるは是事然らず。復次に、

非有無を分別する、是の如きを涅槃と名け

若し有と無にして成ずれば、非有非無も成ぜん

汝非有非無を分別する、是れ涅槃なりとせば、是事然らず。何を以ての故に。若し有と

無にして成ずれば、然る後、非有非無も成ず。有と相違するを無と名け、無と相違する

を有と名く、是有無は第三句の中に已に破せり。有と無とは無なるが故に、云何が非有非

無有らん。是故に涅槃は非有に非ず、非無に非ず。復次に、

如來は滅度の後、有とも無とも言はず

亦有無とも、非有及び非無とも言はず

如來は現在時にも、有とも無とも言はず

亦有無とも非有、及び非無とも言はず

若し如來の滅後、若し現在に、如來有るも亦受けず、如來無きも亦受けず、亦是如來有



【二】第二段に生死を論ず。中に二第一に世間涅槃平等を明す。

【復次に等】第二に涅槃と諸見と平等と明す。

り、亦は如來無きも亦受けず。如來有に非ず、如來無に非ざるも亦受けず。不受を以ての故に、應に涅槃の有無等を分別すべからず。如來を離れて、誰か當に涅槃を得べき。何の時、何の處に、何の法を以て涅槃を説かん。是故に一切時、一切種に涅槃の相を求むるに不可得なり。

（二）復次に、

涅槃と世間とは、少しの分別も有る無く

世間と涅槃とも、亦少しの分別も無し

五陰の相續往來の因縁の故に、説いて世間と名く。五陰の性は畢竟空にして無受寂滅なり、此義先に已に説けり。一切法は不生不滅なるを以ての故に、世間と涅槃とは、分別有る無く、涅槃と世間とも、亦分別無し。復次に、

涅槃の實際と、及び世間の際と

是の如き二際は、毫釐の差別も無し

究竟じて世間と涅槃との實際を推求するに生際無し、平等にして不可得なるを以ての故に、毫釐の差別も無し。

復次に、

滅後の有無等と、有邊等と常等との諸見は  
涅槃と未來と、過去世とに依る

如來の滅後、如來有り、如來無し、亦是如來有り亦是如來無し。如來有るに非ず如來無きに非ず、世間は邊有り、世間は邊無し、世間は亦是邊有り亦是邊無し、世間は邊有るに非ず邊無きに非ず。世間は常、世間は無常、世間は常亦是無常、世間は常有るに非ず常無きに非ず。此三種十二見、如來の滅後の有無等の四見は、涅槃に依りて起る。世間の有邊無邊等の四見は未來世に依りて起る。世間の常無常等の四見は過去世に依りて起る。如來の滅後の有無等は不可得なり。涅槃亦是の如し。世間の前際と後際との如く有邊無邊と、有常無常等も不可得なり。涅槃亦是の如し。是故に世間涅槃等は異有る無しと説く。復次に、

一切の法は空なるが故に、何の有邊無邊

亦邊亦無邊、非有非無邊ぞ

何者か一異たる、何の有常無常

亦常亦無常、非常非無常ぞ

諸法は不可得にして、一切の戲論を滅す

人も無く亦處も無く、佛も亦所説無し

一切の法は一切時、一切種に、衆縁より生ずるが故に、畢竟空なるが故に、自性無し。

是の如き法の中に、何者か是れ有邊なる、誰をか有邊と爲さん。何者か是れ無邊、亦有邊

亦無邊非有邊非無邊なる、誰をか非有邊非無邊と爲さん。何者か是れ常なる。誰をか是れ

【三】 第三段に總

常と爲さん。何者か是れ無常、常無常、非常無常なる。誰をか非常非無常と爲さん。何者の身か即ち是れ神なる。何者の身か神に異なる。是の如き等の六十二の邪見は、畢竟空の中に於て皆不可得なり。諸の有所得皆息み、戲論皆滅す。戲論滅するが故に、諸法の實相に通達し安隱道を得。因縁品より來、諸法を分別し推求するに、有も亦無く、無も亦無く、有無も亦無く、非有非無も亦無し。是を諸法實相と名け、亦如法性、實際涅槃とも名く。是故に如來は時として無く、處として人の爲に涅槃の定相を説くこと無し。是故に説く、諸の有所得皆息み、戲論皆滅すと。

中論觀十二因縁品第二十六

二〇 問うて曰はく、『汝摩訶衍を以て第一義の道を説くも、我今聲聞法の第一義の道に入るを説くを聞かんと欲す。』

答へて曰はく、

衆生は處に覆はれて、後の爲に三行を起す  
 是行を起すを以ての故に、行に從つて六處に墮す  
 諸行の因縁を以て、識は六道の身を受く  
 識著有るを以ての故に、名色を増長す

【觀十二因縁品】  
 上來二十五品に大乗の觀行を明し畢り、下二品は主として小乘人法を破して其觀行を明す本論には先にも因縁所生法我説即是空等といひて因縁法を重視するを以て、今別して十二因縁を擧げて其正觀によつて二空に入り、十二緣滅して涅槃を得と明すなり。  
 【一】小乗の觀行を問ふ。

【二】之に答へて十二因縁觀を明す中に二、第一に順觀を明す、中先づ十二縁觀に就いて

【是の如き等の諸事は等】二に總結

【無明者の造る所等】第二に逆觀を明す。

名色みやうしきせう増長するが故に、因りて而も六入を生ず

情と塵じんと識しと利合して、以て六觸ろくそくを生ず

六觸ろくそくに因るが故に、即ち三受さんじゆを生ず

三受さんじゆに因るを以ての故に、渴愛かつあいを生ず

愛あいに因りて四取ししと有り、取とに因るが故に有有り

若し取者しよと取らずんば、即ち解脱げつたつして有無し

有うよりして而も生しやう有り、生しやうより老死らうし有り

老死らうしによるが故に、憂悲うひ諸の苦惱くたう有り

是の如き等の諸事は、皆生みなしやうよりして而も有り

但是因縁いんえんを以て、而も大苦陰たいくういんを集す

是を謂ひて、生死しやうじ諸行の根本こんぽんと爲す

無明者むみやうしやの造る所、智者ちやうしの爲さざる所なり

是事滅しよじよつするを以ての故に、是事則しよじよつち生せず

但是苦陰くういん聚は、是の如くにして正しく滅す

凡夫ぼんぷは無明むみやうに盲せらるるが故に、身口意しんくういの業を以て、後身ごしんの爲に六趣ろくきょの諸行しよじやうを起す。所起しよきの行ぎやうに隨つて上中下じやうちゆうげ有り。識しは六趣ろくきょに入りて行ぎやうに隨つて身しんを受く。識著しよじやくの因縁いんえんを以ての故ゆゑに名色みやうしき集る。名色みやうしき集るが故ゆゑに六入ろくにふ有り。六入ろくにふの因縁いんえんの故ゆゑに三受さんじゆ有り。三受さんじゆの因縁いんえんの

【觀邪見品】 邪見とは大乘に於ては小乘並に一般の道を指し、小乘にては外道を指す、ここには後者に就いて論ず。

【一】 小乘の邪見について問ふ。

【二】 第二偈に邪見を立す。中、初は過去の四見、次に未來の四見を立つ。

故に渴愛を生ず。渴愛の因縁の故に四取有り。四取の取る時、身口意の業を以て罪と福とを起し、後の三有をして相續せしむ。有より而も生有り、生より而も老死有り。老死より憂、悲、苦、惱、種種の業患有り。但大苦陰集有り。是故に知んぬ凡夫は無智にして此生死流行の根本を起し、智者は起さざる所なりと。智實の見を以ての故に果も亦滅す。無明滅するが故に諸行も亦滅す。因滅するを以ての故に果も亦滅す。是の如く十二因縁の生滅を修得するの智の故に是事滅す。是事滅するが故に乃至生、老、死、憂、悲、大苦陰皆如實に正しく滅す。正しく滅すとは畢竟滅なり。是十二因縁の生滅の義は、阿毘曇修多羅の中に廣く説くが如し。

中論觀邪見品第二十七

(一) 問うて曰はく、大乘法に邪見を破するを聞けり。今聲聞法に邪見を破するを聞かんと欲す。

答へて曰はく、

我は過去世に於て、有たりしや是れ無たりしや  
世間は常なり等の見は、皆過去世に依る  
我は未來世に於て、作たりや不作たりや

【是の如き等の等】論主の破。第一に理に就いて二世八見を破す。先づ初傷の四見を廣破す。中前六偈は常有の句を破す。中初偈は總非、次五偈は別釋。

有邊なり等の諸見は、皆未來世に依る

我が過去世に於て有たりしや無たりしや、有無たしりや、非有非無たりしや。是を常等の諸見は過去世に依ると名く。我は未來世に於て作たりしや、不作たりしや、作不作たりしや、非作非不作たりしや。是を邊世邊等の諸見は未來世に依ると名く。

是の如き等の諸見は何の因縁の故に名けて邪見と爲すや。是事今當に説くべし。

過去世に我は有りきとは、是事得べからず

過去世の中の我は、今世の我と作らず

若し我は即ち是にして、而も身に異相有りとは謂はば

若し當に身を離れて、何の處にか別に我有る

身を離れて我有る無しと、是事已に成ずと爲し

若し身は即ち我なりと謂はば、若は都て我有る無し

但身のみを我と爲さず、身相は生滅するが故に

云何が當に受を以て、而も受者と作さん

若し身を離れて我有らば、是事則ち然らず

無受にして而も我有りとするも、而も實に不可得なり

今我は受を離れず、亦即ち是れ受ならず

無受に非ず無きに非ず、此れ即ち決定義なり

【我は過去世等】  
下の長行の上に擧  
げし偈を釋す、今  
總釋。

我は過去世に於て有りとは、是事然らず。何を以ての故に。先世の中の我は即ち今の我  
と作らず。常の過有るが故に。若し常ならば則ち無量の過有り。何を以ての故に。人の修  
福の因縁の故に天と作り而して後人と作るが如し。若し先世の我即ち是れ今の我ならば、  
天は即ち是れ人なるべし。又人の罪業の因縁を以ての故に。旃陀羅と作り、後婆羅門と作  
る。若し先世の我即ち是れ今の我ならば、旃陀羅は即ち是れ婆羅門なり。譬へば舍衛國の  
婆羅門提婆達と名くるもの王舍城に到るを、亦提婆達と名くるが如く。王舍城に到るを以  
ての故に異と爲らず。若し先に天と作り、後に人と作らば、則ち天は即ち是れ人なり。旃  
陀羅は即ち是れ婆羅門なり。但是事然らず。何を以ての故に。天は即ち是れ人ならず。旃  
陀羅は即ち是れ婆羅門ならず。此等の常の過有るが故に。若し先世の我は今の我と作らず  
と謂ふば、人の衣を洗ぐ時を名けて洗者と爲し、刈る時を名けて刈者と爲し、而して洗者  
と刈者と異らずと雖も、而も洗者は即ち是れ刈者にあらざるが如し。是の如く我が天の身  
を受くるを名けて天と爲し、我が人の身を受くるを名けて人と爲す。我は異ならずして而  
も身異有らば、是事然らず。何を以ての故に。若し即ち是ならば、應に天は人と作ると言  
ふべからず。今洗者と刈者に於て異と爲すや、不異と爲すや。若し不異ならば、洗者は即  
ち是れ刈者なるべし。是の如くんば先世の天は即ち是れ人、旃陀羅は即ち是れ婆羅門なら  
ず、我も亦常の過有らん。若し異ならば、洗者は即ち刈者と作らず。是の如くんば、天は  
人と作らず、我も亦無常ならん。無常ならば則ち我相無し。是故に即ち是と言ふを得ず。

【問うて曰く我は等】次五偈の釋。

問うて曰はく、『我は即ち是にして、但受に因るが故に是は天、是は人なりと分別す。受は五陰身に名く。業の因縁を以ての故に是は天、是は人、是は旃陀羅、是は婆羅門なりと分別す。而も我は實には天に非ず、人に非ず、旃陀羅に非ず、婆羅門に非ず。是故に是の如きの過無し。』答へて曰はく、『是事然らず。何を以ての故に。若し身が天と作り、人と作り、旃陀羅と作り、婆羅門と作り、是れ我に非ずんば則ち身を離れて別に我有り。今罪福、生死往來も皆是れ身にして、是れ我に非ず。罪の因縁の故に三惡道に墮し、福の因縁の故に三善道に生ず。若し苦、樂、瞋、喜、憂、怖等は皆是れ身にして我に非ずんば何をか我を用て爲ん。俗人の罪を治するに、出家の人に預けざるが如し。五陰の因縁相續し、罪福失せざるが故に解脱有り。若し皆是れ身にして我に非ずんば、何をか我を用て爲ん。問うて曰はく、『罪福等は我に依止す。我には所知有り、身には所知無し。故に知者は應に是れ我なるべし。起業の因縁たる罪福は是れ作法なり。當に知るべし、應に作者有るべし。作者は是れ我なり。身は是れ我の所用にして、亦是れ我の所住處なり。譬へば舍主の草、木、泥、譬等を以て舍を治するに、自ら身の爲にするが故に、所用に隨つて舍を治するに好惡有るが如し。我も亦是の如し、善惡等を作すに隨つて好醜の身を得。六道の生死は皆我所作なり。是故に罪福の身は皆我に屬す。譬へば舍は但舍主に屬して他人に屬せざるが如し。答へて曰はく、『是驗然らず。何を以ての故に。舍主は形有り、觸有り、力有るが故に能く舍を治す。汝の所護の我は形無く觸無きが故に作力無く、自ら作力無く、亦他をし



て作さしむる能はず。若し世間に一法として形無く觸無くして能く所作有る者有らば、則ち信受して作者有りとし知るべし。但是事然らず、若し我は是れ作者ならば、則ち應に自ら苦事を作すべからず。若し是れ念者ならば樂事を貪るべく、應に忘失すべからず。若し我にして苦を作さずして而も苦強ひて生ぜば、餘の一切も皆亦自ら生じ、我の所作に非ざらん。若し見者は我ならば、眼能く色を見て、眼は應に是れ我なるべし。若し眼見て而も我に非ずんば、則ち先に見者は我なりと言ふに違ふ。若し見者は我ならば、我は則ち應に聲を聞く等の諸塵を得べからず。何を以ての故に。眼は是れ見者ならば、聲を聞く等の塵を得る能はざるが故に。是故に我は是れ見者なりとは、是事然らず。若し刈者の鎌を用て草を刈るが如く、我も亦是の如く手等を以て能く所作有りと謂はば、是事然らず。何を以ての故に。今鎌を離れて別に刈者有るも、而も身、心、諸根を離れて別の作者無し。若し作者は眼耳等の所得に非ずと雖も、亦作有りと謂はば、則ち石女の兒能く所作有らん。是の如く一切諸根は皆應に無我なるべし。若し右眼に物を見て、而も左眼に識る、當に知るべし、別に見者有りと謂はば、是事然らず。今右手は習作するも左手は能くせず。是故に別に、作者有る無し。若し別に作者有らば、右手の習ふ所、左手も亦應に能くすべし、而も實には能くせず。是故に、更に作者無く。復次に、我有りといふ者の言はば、他の果を食するを見て口中に涎出づ。是れ我の相爲りと。是事然らず。何を以ての故に。是れ念力の故にして、是れ我の力に非ず。又亦即ち是れ我の因縁を破る。人は衆中に在りて涎の

出づるを憐づるも、而も涎は強ひて出でて自在なるを得ず。當に知るべし無我なり。復次に、又顛倒の過罪有り、先世の是父にして、今世の子と爲らば、是父と子との我は一にして但身のみ異なる有り。一舍より一舍に至るも、父なるが故に是れ父にして、異舍に入るを以ての故に、便ち異り有るに非ざるが如し。若し我有らば、是二は應に一なるべし。是の如きは則ち太過有り。若し無我なるも五陰の相續の中に亦是太過有りと謂はば、是事然らず。何を以ての故に。五陰は相續すと雖も或時は用有り、或時は用無し。蒲桃の漿は持戒の者は應に飲むべく、蒲桃の酒は應に飲むべからず、若し變じて苦酒と爲さば還復應に飲むべきが如し。五陰の相續も亦是の如く、用有り不用有り、若し始終一我ならば是の如き過有るも、五陰の相續には是の如き過無し。但五陰和合するが故にのみ假に名けて我と爲す、決定有る無し。樛椽和合して舍有り、樛椽を離れて別の舍無きが如く、是の如く五陰和合するが故に我有り、若し五陰を離るれば實には別の我無し。是故に我は但假名のみ有りて定實有る無し。汝先に受を離れて別に受者有り、受を以て受者を分別し、是れ天、是れ人なりと説きしこと、是れ皆然らず。當に知るべし但受のみ有りて別の受者無し。若し受を離れて別に我有りと謂はば、是事然らず。若し受を離れて我有らば、云何が是我相を説き得べき。若し相の謂くべき無くんば、則ち受を離れて我無し。若し身を離れて我無く、但身のみ是れ我なりと謂ふも、是れ亦然らず。何を以ての故に、身には生滅の相有り、我は則ち爾らず。復次に、云何が受を以て受ち受者と名けん。若し受を離れて受者有りと謂ふ

【是故に當に知るべし等】次四偈に斷無の句を破す。中初一は總非、次三偈は別破。

も、是れ亦然らず。若し五陰を受けずして而も受者有らば、應に五陰を離れて別に受者有るべく、眼等の根にて得べくして而も實には得べからず。是故に我は受を離れず、是受到せず、亦無受に非ず、亦復無にも非ず。此は是れ定まれる義なり。

是故に當に知るべし過去世に我有りとは是事然らず。何を以ての故に。

過去に我は作ならずとは、是事則ち然らず

過去世の中の我が、今に異なるも亦然らず

若し異有りと謂はば、彼を離れて應に今有るべく

我は過去世に住し、而も今の我自ら生せん

是の如くんば則ち斷滅にして、業の果報を失す

彼作して而も此受く、是の如き等の過有り

先に無にして而も今有らば、此中にも亦過有り

我は則ち是れ作法、亦是れ無因爲らん

過去世の中の我は今の我と作らずとは、是事然らず。何を以ての故に。過去世の中の我と今の我と異ならず。若し今の我と過去世の我と異ならば、應に彼我を離れて而も今の我有るべし。又過去世の我は、亦彼に住し、此身は自ら更に生ずべし。若し爾らば即ち斷邊に墮して諸業の果報を失す。又彼人罪を作し、此人報を受けん。是の如き等の無量の過有り。又是我應に先に無くして而も今有るも、是れ亦過有り。我は則ち是れ作法、亦是れ

【復次に過去世等】後一偈に亦常亦無常亦有亦無の二句を合破す。

【我は未來世に等】後略して後偈にいふ未來の四見を類破す。

【復次に若し天即ち等】第二に事を指して二世八見を破す。一に過去世の四見を破す。先づ部事に就いて四見を破す。

無因より生ぜん。是故に過去の我は今の我と作らざること、是事然らず。復次に、

過去世の中の、有我と無我との見

若は共と若は不共との如き、是事皆然らず

是の如く推求するに、過去世の中の邪見、有、無、亦有亦無、非有非無、是諸の邪見は先に説く因縁の過の故に、是れ皆然らず。

我は未來世に於て、作と爲し不作と爲す

是の如きの見は、皆過去世に同じ

我は未來世の中に於て作と爲し不作と爲す、是の如き四句過去世の中の過咎の如く、應に此中に在りて説くべし。

復次に、

若し天即ち是れ人ならば、則ち常邊に墮す

天は則ち無生と爲る、常法は生ぜざるが故に

若し天即ち是れ人ならば、是れ則ち常と爲す。若し天にして人中に生ぜずんば、云何が

名けて人と爲さん。常法不生の故に、常も亦然らず。復次に、

若し天にして人に異ならば、是れ即ち無常と爲す

若し天にして人に異ならば、是れ即ち相續無し

若し天と人と異ならば、則ち無常と爲す。無常は則ち四波等の過を爲す。先に過を説く

が如し。若し天と人と異ならば、則ち相續無し。若し相續有らば異と言ふを得ず。復次に、

若し半天半人ならば、則ち二邊に墮す

常と及び無常となり、是事則ち然らず

若し衆生にして半身は是れ天、半身は是れ人ならば、若し爾らば則ち常、無常有り。半天は是れ常、半人は是れ無常なり。但是事然らず。何を以ての故に。一身に二相の過有る

が故に。復次に、

若し常と及び無常と、是二俱に成ぜば

是の如くんば則ち應に、非常非無常を成ずべし

若し常と無常との二俱に成ぜば、然る後に非常と非無常とを成せん。常と無常とは相違

するが故に、今實には常と無常とは成ぜず。是故に非常と非無常とも亦成ぜず。復次に、今生死無始も是れ亦然らず。何を以ての故に。

法若し定んで來有り、及び定んで去有らば

生死は則ち無始なり、而も實には此事無し

法若し決定して從來する所有り、從去する所有らば、生死は則ち應に無始なるべし。是法を智慧を以て推求するに從來する所有り、從去する所有るを得ず。是故に生死無始なること、是事然らず。復次に、

【復次に今生死等】  
次に根本に就いて  
四見を破す。

【有邊無邊等の等】  
二に九偈もて未來  
世の四見を破す。  
初五偈は邊無邊の  
二句を破す。

今若し常有る無くんば、云何が無常  
亦常亦無常、非常非無常有らん

若し爾らば、智慧を以て推求するに、法として常を得べき者無し。誰か當に無常有るべき。常に因りて亦無有るが故に。若し二俱に無くんば云何が亦有常亦無常有らん。若し有常無常無くんば、云何が非有常非無常有らん。亦有常亦無常に因るが故に、非有常非無常有り。是故に過去世に依止する常等の四句は不可得なり。有邊無邊等の四句の未來世に依止する、是事不可得なり。今當に説くべし。何を以ての故に。

若し世間有邊ならば、云何が後世有らん  
若し世間無邊なるも、云何が後世有らん

若し世間有邊ならば、應に後世有るべからず。而も今實には後世有り。是故に世間の有邊なるは然らず。若し世間無邊なるも、亦應に後世有るべからず。而も實には後世有り。是故に世間の無邊なるも亦然らず。復次に、是二邊不可得なり。何を以ての故に。

五陰は常に相續すること、猶し燈火の炎の如し  
是を以ての故に世間は、應に邊無邊なるべからず

五陰より復五陰を生ず。是五陰は次第に相續すること、衆縁和合して燈炎有るが如し。若し衆縁盡きずんば燈は則ち滅せず。若し盡くれれば則ち滅せん。是故に世間を有邊無邊と説くを得ず。復次に、

若し先の五陰壞し、是五陰に因りて  
更に後の五陰を生ぜずんば、世間は則ち有邊なり

若し先の陰壞せず、亦是陰に因りて

後の五陰を生ぜずんば、世間は則ち無邊なり

若し先の五陰壞し、是五陰に因りて更に後の五陰を生ぜずんば、是の如くんば則ち世間は有邊なり。若し先の五陰滅し已つて、更に餘の五陰を生ぜざるを、是を名けて邊と爲す。邊は末後身に名く。若し先の五陰壞せず。是五陰に因つて而も後の五陰を生ぜずんば、世間は則ち無邊なり。是れ即ち常と爲す。而も實には然らず。是故に世間の無邊なること、是事然らず。世間に二種有り、國土世間と衆生世間となり。此は是れ衆生世間なり。復次に、四百觀中に説くが如し。

眞法及び説者、聽者得難きが故に

是の如くんば則ち生死は、有邊にも無邊にも非ず

眞法を得ざる因縁の故に生死往來は邊有る無し。或時は眞法を聞くを得て、得道するが故に、無邊と言ふを得ず。今當に更に亦有邊亦無邊を破すべし。

若し世間は半有邊、世間は半無邊ならば

是れ則ち亦有邊、亦無邊なり然らず

若し世間は半有邊半無邊ならば、則ち應に是れ亦有邊亦無邊なるべし。若し爾らに則ち

【今當に更等】次  
三偈に亦有邊亦無  
邊の一句を破す。

一法に二相有り。是事然らず。何を以ての故に。

彼五陰を受くる者、云何が一分は破し

一分は而も破せざる、是事則ち然らず

受も亦復是の如し、云何が一分は破し

一分は而も破せざる、是事亦然らず

五陰を受くる者、云何が一分は破し、一分は破せざる。一事にして亦常亦無常なるを得

ず。受も亦是の如し。云何が一分は破し、一分は破せざらん。常無常の二相の邊の故に

是故に世間の亦有邊亦無邊、是れ即ち然らず。今當に非有邊非無邊の見を破すべし。

若し亦有無邊の、是二成ずることを得ば

非有非無邊も、是れ則ち亦應に成ずべし

有邊と相違するが故に無邊有り、長と相違して短有るが如し。有無と相違すれば、則ち

亦有亦無有り。亦有亦無と相違するが故に、則ち非有非無有り。若し亦有邊亦無邊定んで

成ぜば、應に非有邊非無邊有るべし。何を以ての故に。相待に因るが故に。上に已に亦有

邊亦無邊の第三の句を破したり。今云何が當に非有邊非無邊有るべけん。相待無きを以て

の故に。是の如く推求するに、未來世に依止する有邊等の四見は皆不可得なり。

復次に、一切法空なるが故に、世間常等の見

【今當に非等】次  
一節に非邊非無邊  
を破す。

【三】本論第三大  
段に重ねて大乗の  
觀行を明す、中觀  
偈に重ねて廣く大  
乘の觀行を明す。



一

何の處何の時に於て、誰か是諸見を起さん

上に聲聞法を以て諸見を破したり。今此大乘の法の中に説かく、諸法は本より以來、畢竟空の性なり」と。是の如き空性の法の中には人無く法無し、應に邪見と正見とを生ずべからず。處とは土地に名け、時とは日月度敷に名く、誰とは名けて人と爲す。是を諸見の體と名く。若し常無常等の決定の見有らば、應當に人有つて此見を生ずべし。我を破するが故に人の是見を生ずること無し。應に處所に有る色法の現見なるすら尙破すべし、何に況んや時方をや。若し諸見有らば應に定實有るべし。若し定有らば則ち應に破すべからず。上より來、種種の因縁を以て破したり。是故に當に知るべし。見に定體無し、云何が生ずるを得ん。獨に説くが如し。「何の處何の時に於て、誰か是諸見を起さん」と。

瞿曇大聖主、憐愍して是法を説き

悉く一切の見を斷ぜしめん、我今稽首し禮す

一切の見とは斷ずれば則ち五見、廣説すれば則ち六十六見なり。是諸見を斷ぜしめんが爲の故に法を説く。大聖主瞿曇は、是れ無量無邊不可思議の智慧者なり。是故に我稽首し禮す。

中論卷第四

中

論

一八〇

百

論

第	論
八	律
卷	部



百論序

釋僧肇作

百論とは、蓋し是れ聖心に通ずるの津途、眞諦を聞くの要論なり。佛、泥日の後八百餘年、出家大士有り、厥名は提婆、玄心獨悟、俊氣高朗、道は當時に映き、神は世表に超えたり。故に能く三藏の重關を開き、十二の幽路を垣ぐ。擅に迦夷に歩ひ、法の城壘と爲る。時に外道紛然として異端競ひ起り、邪辯眞に逼り、殆ど正道を亂す。乃ち仰いで聖教の陵遲を愴き、俯して群迷の纏惑を悼み、將に遠く沈淪を拯はんとす、故に斯論を作る。正を防り邪を以て替る所以、大に宗極を明にするものなり、是を以て正化之を以て隆り、邪道之を以て替る。夫れ衆妙の領括するに非ずんば孰か能く斯の若くならん。論に百偈有り、故に百を以て名と爲す。理致淵玄、群籍の要を統べ、文旨婉約、制作の美を窮む。然も至簡にして、其門を得るもの尠し。婆藪聞士なる者有り。明慧内に融じ、妙思奇拔、遠く玄蹤に契つて、之が調釋を爲り、沈隱の義をして徹翰に彰にし風味宣流して、來葉に被らしむ。文藻煥然して、宗途曉り易し。其論爲るや、言ひて當無く、破して執無し。儼然として擴靡く、而して事眞を失はず。蕭馬として寄無く、而して理自ら玄會す。本に返るの道途に著る。天竺沙門鳩摩羅什有り。器量淵弘にして俊神超邁、鑽仰すること

累年にして、轉測るべからず。常に斯論を味詠し、以て必要と爲す。先に親しく譯すと雖も、而も方言未だ融ぜず、思尋者をして謬文に躊躇せしめ、標位者をして歸致以乖逆せしむるに至る。大秦司隸校尉安成侯姚高は風韻清舒にして冲心簡勝なり。博く内外に涉り、理思兼ね通ず。少より大道を好み、長じて彌篤し。復形は時務に韜すと雖も、而も法言輟まず。毎に茲文を撫して慨する所良に多し。弘始六年歲壽星に次るを以て、理味の沙門を集め、什と與に正本を考校し、覆疏を陶練し、務めて論旨を存す。質にして野ならず、簡にして必ず詰らしむ。宗致盡爾し、閑然する所無し。論凡て二十品、品各五偈有り。後の十品は其人以て此土に益無しと爲し、故に闕いて傳はらず。冀くは明識の君子、詳にして攬れ。

百論 卷上

提婆菩薩造 婆藪闍士譯 姚秦三藏鳩摩羅什譯

捨罪福品第一

【捨罪福品】 世俗にいふ罪福を捨して一切法無自性の方便に住すべきを明す。 【一】 一に緣起分先づ歸敬序。

【八輩の應供僧】 八輩とは四向四果應供僧とは羅漢のこと、今は僧の總稱に用ふ。 【外の日はく等】 三寶の眞體を譯ふ。 【迦毘羅】 カピラ (Kapila) 數論派の開祖。

(一) 佛の足を頂禮したてまつる、哀世尊、無量劫に於て豪貴を荷ひ煩惱已に盡き習も亦除き、梵釋龍神咸く恭敬す亦無上にして世を對すの法、能く瑕穢を淨め戲論を止むる

諸佛世尊の所説と、並びに及び八輩の應供僧とを禮したてまつる

外の日はく、「獨に世尊の所説と言ふ、何等か是れ世尊なる。」内の日はく、「汝何が故に是の如き疑を生ずるや。」

外の日はく、「種種に世尊の相を説くが故に疑を生ず。有人言はく、「韋紐天 秦には彌勝を世尊と名く」と。又言はく、「摩醯首羅天 在天と言ふを世尊と名く」と。又言はく、「迦毘羅、優樓遮、勤沙婆等の仙人を皆世尊と名く」と。汝何を以てか獨り佛を世尊と爲すと云

【優樓迦】ウルカ (Uka) 勝論派の祖、

【勤沙婆】リンヤバ (Rishaba) 耆那教の遠祖、所謂初主と尊稱せらるる人

【淨覺分】二十五論中總に八分あり中四分は喜の徳と他四分は闇の徳とす、前者は法、智慧、自在、離欲にして之を淨覺分といふ、

【衛世師經】勝論派の經典の意、

【求那諦】同、現實徳、實、同、異、和合)の中、第二の徳諦のこと、

【諸師】其他多くの善行者を指す。

【二】本論第二大段に論の大綱を具し戒律顯正す。本品には二善三空を明して始學入道の方を示し、佛の灌捨の教を申ぶるに

ふや。是故に疑を生ず。」

内の曰はく、『佛は諸法實相を知り、明了して礙無し。又能く深淨の法を説く。是故に獨り佛を稱して世尊と爲す。』

外の曰はく、『諸餘の導師も亦能く諸法の相を明了し、亦能く深淨の法を説く。迦毘羅の弟子は僧伽經を誦じ、諸の善法の總相と別相とを説いて、二十五諦の中に於て淨覺分、是を善法と名け、優樓迦の弟子は、衛世師經を誦し、六諦に於て、求那諦の中に、日に三たび洗ひ、再び火を供養する等重合して、神分に善法を生ずと言ひ、勤沙婆の弟子は、尼乾子經を誦し、五熱身を炙し、髮を抜く等の受苦の法、是を善法と名け、又諸師有り、自餓の法を行じ、澗に投じ、火に赴き、自ら高巖より墜ち、寂黙し、常に立ち、牛戒を持つ等、是を善法と名く。是の如き等皆是れ深淨の法なり、何を以てか獨り佛のみ能く説くと言ふや。』

内の曰はく、『是れ皆邪見にして、正見を覆ふが故に、能く深淨の法を説く能はず。是事後に廣く説くべし。』

外の曰はく、『佛は何等の善法の相を説くや。』

内の曰はく、修妬

惡止善行の法なり 略

佛略して善法の二種を説く、止相と行相となり。一切の惡を息むるを、是を止相と名



あり、中に三、第一に捨罪を明す。先づ依福捨罪。

【外の曰はく等】次に傳ら吉の義を破す。

け、一切の善を修するを、是を行相と名く。「何等をか悪と爲す」「身の邪行、口の邪行、意の邪行なる。身の殺、盜、姪、口の妄言、兩舌、惡口、綺語、意の貪、瞋惱、邪見、復十不善道に攝せられざる所有る。鞭杖繫閉等、及び十不善道の前後種種の罪、是を名けて悪と爲す」「何等をか止と爲す」「悪を息めて作さざるなり。若は心に生じ、若は口に語り、若は戒を受け、今日より終に復作さざる、是を名けて止と爲す」「何等をか善と爲す」「身の正行、口の正行、意の正行なり、身の迎送、合掌、禮敬等、口の實語、和合語、柔軟語、利益語、意の慈悲、正見等なり、是の如き種種の清淨法、是を善法と名く」「何等をか行と爲す」「是善法中に於て、信受し修習する、是を名けて行と爲す」

外の曰はく、

汝が經に過有り。初め吉ならざるが故に。修妬諸師の經を作るの法、初に吉を説くが故に、義味解し易く、法音流布す。若し智人讀誦念知すれば、便ち增壽感德尊重を得。經有り、婆羅呵波帝經と名くるが如き、是の如き經等、初に皆吉と言ふ。初吉なるを以ての故に中、後も亦吉なり。汝の經は初に悪を説くが故に。是れ吉ならず。是を以て汝が經に過有りと云ふ。』

内の曰はく、

然らず。邪見を斷するが故に、是經を説く。修妬是れ吉、是れ不吉、是れ邪見の氣なり。是故に過無し。

復次に、

吉無きが故に修妬

若し少しく吉有らば、經の始に應に吉と言ふべし。此れ實には吉無し。何を以ての故に。一事、此は以て吉と爲し、彼は以て不吉と爲し、或は以て非吉非不吉と爲す、不定なるが故に吉無し。汝愚人、方便無くして、強ひて樂を求めんと欲し、妄りに憶想を生じ、是事は吉、是事は不吉と言ふなり。

復次に、

自、他、共に不可得なるが故に修妬

是吉法は自ら生ぜず。何を以ての故に。一法として自己より生ずること有る無きが故に、亦二相の過の故に、一には生、二には能生、亦他よりも生ぜず、自相無きが故に、他相も亦無し、復次に無窮なるが故に、生じて更に生有るを以ての故に。亦共よりも生ぜず、二俱に過なるが故に。凡そ生法に三種有り。自と他と共となり。是三種の中に求むるに不可得なり。是故に吉事無し。

外の曰はく、

是吉自ら生ずるが故に。鹽の如し修妬

譬へば鹽の自性は鹹にして、能く餘物をして鹹ならしむるが如く、吉も亦是の如し、自性吉にして、能く餘物をして吉ならしむ。

内の曰はく、

前に已に破せしが故に。亦鹽の相は鹽中に住するが故に修妬

我先に法として自性より生ずるもの有る無しと破せり。復次に汝の意に、鹽は因縁より生ず、是故に鹽は自性成ならずと討はば、我汝を語を受けず。今當に漫汝が語を以て汝が所説を破すべし。鹽は他物と合すと雖も、物は鹽と爲らず。鹽の相は鹽の中に住するが故に。譬へば牛の相は馬の相と爲らざるが如し。

外の曰はく、

燈の如し修妬

譬へば燈の既に自ら照し、亦能く他を照すが如く、吉も亦是の如し、自ら吉にして、亦能く吉ならざる者をして吉ならしむ。

内の曰はく、

燈には、自にも他にも闇無きが故に修妬

燈には自ら闇無し。何を以ての故に。明と闇とは並ばざるが故に。燈には亦能照と不能照とも無きが故に、亦二相の過の故に、一には能照、二には受照なり、是故に燈は自ら照さず。斯照の處にも亦闇無し。是故に他を照す能はず。闇を破するを以ての故に照と名く。闇の破すべき無きが故に照に非ず。

外の曰はく、

初めて生ずる時、二俱に照すが故に修妬

我は燈は先に生じて、後に照すと云はず、初めて生ずる時に自ら照し、亦能く他を照すなり、

内の曰はく、

然らず。一法に有無の相不可得なるが故に修妬

初生の時を半生半未生と名く。生じて照す能はざること前に説けるが如し。何に況んや未照にして能く照す所有らんや。復次に一法云何が亦是は有相、亦是は無相ならん。

復次に、

闇に至らざるが故に修妬

燈は、若は已生なるも、若は未生なるも、俱に闇に到らず、性相違するが故に。燈若し闇に到らずんば、云何が能く闇を破せん。

外の曰はく、

呢星の如くなるが故に修妬

著し遂に速人を呪して能く惱さしめんに、亦星の變は天に在れど人をして不吉ならしむるが如く、燈亦是の如し。闇に到らずと雖も、而も能く闇を破す。

内の曰はく、

太実實を過ぐるが故に修妬

若し燈、力を有し闇に到らずして、而も能く闇を破せば、何んが天竺に燈を照して振旦の闇を破すること、呪星の力の能く遠きに及ぶが如くならざる。而も燈の事は爾らず。是故に汝の喩は非なり。

復次に、

初吉ならば、餘は吉ならず修妬

若し經の初に吉と云はば、餘は應に吉ならざるべし。若し餘も亦吉ならば、汝初吉と言ふは是れ妄語爲り。

外の曰はく、

初吉なるが故に、餘も亦吉なり修妬

初吉の力有るが故に、餘も亦吉なり。

内の曰はく、

不吉多きが故に、吉も不吉と爲る修妬

汝經の初に吉と言はば、則ち多は不吉なり。不吉多きを以ての故に、應に吉は不吉と爲るべし。

爲るべし。

外の曰はく、

象の手の如し修妬

譬へば象は手を有するが故に有手と名け、眼耳頭等を有するを以て、名けて有眼耳頭と

爲さざるが如く、是の如く、少しの吉の力を以ての故に、多くの不吉をして吉爲らしむ。

内の曰はく、

然らず。象無きの過の故に修妬

若し象と手と異らば頭足等とも亦異なる。是の如くんば則ち別の象無し。若し分中に有分

具せば、何んが頭の中に足有らざる。破異品中に説くが如し。若し象と手と異らざるも、

亦別の象無し。若し有分と分と異らずんば、頭は應に是れ足なるべし、二事は象と異らざる

が故に。破一品中に説くが如し。是の如く、吉事は種種の因縁に求むるに不可得なり。

云何が初吉なるが故に中後も亦吉なりと言はん。

外の曰はく、『惡止の止は妙、何んが初に在らざる。』

内の曰はく、『行者は要ず先に惡を知る。然して後に能く止む。是故に先に惡、後に止

なり。』

外の曰はく、

善行は應に初に在るべし、妙果有るが故に修妬

諸の善法は妙果有り。行者は妙果を得んと欲するが故に惡を止む。是の如くならば應

に先に善行を説き、後に惡止を説くべし。

内の曰はく、『次第法の故に、先に疊垢を除き、次に細垢を除く。若し行者にして惡を

止めずんば、善を修する能はず。是故に、先に疊垢を除き後に善法に染む。譬へば衣を洗

【外の曰はく惡止の等】次に伏流辨宗。

ふに先に垢を去り、然る後に染むべきが如し。』

外の曰はく、『已に惡止を説く、應に復善行を言ふべからず。』

内の曰はく、

布施等は善行なるが故に修妬

布施は是れ善行にして、是れ惡止に非ず。復次に大菩薩の如く、惡已に先に止みて、四

無量心を行じ、衆生を憐愍して、他命を守護す。是れ即ち善行にして止惡に非ず。

外の曰はく、『布施は是れ惡を止むるの法なり。是故に布施は應に是れ止惡なるべし。』

内の曰はく、『然らず。若し布施せざれば、便ち是れ惡ならば、諸の布施せざるは悉

く應に罪有るべし。復次に、諸海山の人は慳貪口に盡く、布施の時に何の惡をか止めん。

或は人有りて布施を行すと雖も慳心止まず。縱ひ復能く止むも、然も善行を以て本と爲す。

是故に布施は是れ善行なり。』

外の曰はく、『已に善行を説く、應に復惡止を説くべからず。何を以ての故に。惡止は

即ち是れ善行なるが故に。』

内の曰はく、『止相は息なり、行相は作なり、性相違するが故に。是故に善行を説くも、

惡止を擯せず。』

外の曰はく、『是事實に調り。我惡止と善行とは是れ一相なりと言はず。但惡止むときは

則ち是れ善法なり。是故に若し善行を言はば、應に復惡止を言ふべからず。』

内の曰はく、『應に惡止と善行とを説くべし。何を以ての故に。惡止は受戒の時、諸の惡を息むるに名く。善行は善法を修習するに名く。若し但善行の福のみを説いて、惡止を説かずんば、人有りて受戒惡止するも、若は心不善、若は心無記ならば、是時善を行ぜざるが故に、應に福有るべからず。是時惡止むが故に亦福有り。是故に應に惡止を説くべし。亦應に善行をも説くべし。』

【三】第二に捨福を明す。先づ二善を開いて三人となす。

（三）この處に善行の法、衆生の意に隨ふが故に、佛は三種に分別す、下、中、上人の施、戒、智なり。修妬路。

行者に三者有り、下智の人には布施を教へ、中智の人には持戒を教へ、上智の人には智慧を教ふ。布施は他を利益し、財を捨つる相應思、及び身口業を起すに名く。持戒は若は口に語り、若は心に生じ、若は受戒して、今日より復三種の身邪行、四種の口邪行を作さざるに名く、智慧は、諸法の相中、心定にして動ぜざるに名く。何を以て下、中、上を説くや。利益兼降するが故に。布施は少利益、是を下智と名け、持戒は中利益、是を中智と名け、智慧は上利益、是を上智と名く。復次に施の報は下、戒の報は中、智の報は上なり。是故に下、中、上の智を説く。』

【外の曰はく布施は等】次に三法以淨を明す。

外の曰はく、『布施は皆是れ下智なりや不や。』

内の曰はく、『然らず。何を以ての故に。施に二種有り。一には不淨、二には淨行なり。不淨の施は是を下智人と名く。』



報の爲に施すは是れ不淨なり。市場の如くたるが故に。修妬  
報に二種有り。現報と後報となり。現報とは、名稱、敬愛等なり。後報とは、後世の富  
貴等なり。是を不淨施と名く。所以は何ん。還つて得んと欲するが故なり。還へば賈客の  
遠く地方に到り、雜物を持し、多く饒益する所有りと雖も、然も衆生を憐愍するに非ず、  
自ら利を求むるを以ての故に、是業は不淨なるが如く、布施して報を求むるも亦復是の如  
し。

内の曰はく、

報の爲に施すは是れ不淨なり。市場の如くたるが故に。修妬

報に二種有り。現報と後報となり。現報とは、名稱、敬愛等なり。後報とは、後世の富

貴等なり。是を不淨施と名く。所以は何ん。還つて得んと欲するが故なり。還へば賈客の

遠く地方に到り、雜物を持し、多く饒益する所有りと雖も、然も衆生を憐愍するに非ず、

自ら利を求むるを以ての故に、是業は不淨なるが如く、布施して報を求むるも亦復是の如

し。

外の曰はく、「何等を淨施と名くるや。」

内の曰はく、「若し人他を敬愛利益するが故に、今世後世の報を求めずして、衆の苦

難及び衆の上人の清淨施を行するが如くなる、是を淨施と名く。」

外の曰はく、「持戒は若し是れ中智の人なりそ不也。」

内の曰はく、「然らず。何を以ての故に。持戒に二種有り。一には不淨、二には淨なり。

不淨の持戒は中智の人と名く。」

外の曰はく、「何等が不淨の持戒なる。」

内の曰はく、

持戒して衆の報を求め、姦欲の爲の故に。覆相の如し。修妬

樂の報に二種有り、一には生天、二には人中の富貴なり。若し持戒して天上に天女と娯樂せんことを求め、若し人中に五欲樂を受けんとす。所以は何ん。婬欲の爲の故なり。覆相の如しとは、内に他の色を欲し、外に執善を許るなり。是を不淨の持戒と名く。阿難が難陀に語るが如し。

羶羊相觸れ、前を將ゐて而して更に却くが如く

汝欲の爲に戒を執つこと、其事亦是の如し

身は能く戒を持つと雖も、心は欲の爲に牽かる

斷業清淨ならず、何すれぞ是戒を用て爲ん

外の曰はく、「何等を淨の持戒と名くるべし。」

内の曰はく、「行者是念を作す、一切の善法は戒を根本と爲す、持戒の人は則ち心悔いす、悔いざれば則ち歡喜す、歡喜すれば則ち心樂しむ、心樂しめば一心を得、一心ならば實智を生ず、實智生ずれば則ち厭を得、厭を得れば則ち欲を離る。欲を離るれば解脱を得、解脱すれば涅槃を得。是を淨の持戒と名く。」

外の曰はく、

若し上智なるは陀羅羅伽等を上と爲すや修妬

若し行智の人、是を上智と名けば、今陀羅羅伽、阿羅邏外道等應に上智の人と爲すべし。

内の曰はく、「然らず。何を以ての故に。智にも亦二種有り、一には不淨、二には淨な

り。

外の曰はく、「何等をか不淨智と名く。」

内の曰はく、

世界に繫縛せらるるが故に不淨なり。怨の來り止むが如し。路

世界智は能く生死を増長す。所以は何ん。此智還つて繫縛するが故に。譬へば怨家の初

詐つて親附し、久しければ則ち害を生ずるが如し。世界智も亦是の如し。

外の曰はく、「但此智のみ能く生死を増長す。捨戒も亦爾るや。」

内の曰はく、

福を取り、惡を捨つるは、是れ行法なり。

福は福報に名く。

外の曰はく、「若し福は福報に名けば、何を以て修妬路の中に但福とのみ言ふや。」

内の曰はく、「福は因に名く、福報は果に名く。或は因を説いて果と爲し、或は果を説

いて因と爲す。此中には因を説いて果と爲す。譬へば千兩の金を食すといふが如し。金は

食すべからざるも、金に因つて食を得るが故に金を食すと名く。又畫を見て是れ好手と言

ふが如し。手に因つて畫くを得るが故に好手と名く。取るとは著するに名く。福報に著す

るなり。惡は先に已に説けり。行とは人を將ゐて常に生死の中に行かしまるるに名く。

外の曰はく、「何等か是れ不行法なる。」

【外の曰はく何等か等】三に正しく捨を問す。

内の曰はく、

俱に捨するなり修妬

俱にとは福報、罪報に名く。捨すとは心著せざるに名く。心福に著せずんば、復五道

に往來せず。是を不行法と名く。

外の曰はく、

福は應に捨つべからず、果報妙なるを以ての故に。亦因縁を説かざるが故に修妬

諸の福の果報は妙なり。一切の衆生は常に妙果を求む、云何が捨つべき、又佛の言へ

るが如し、「諸比丘、福に於て畏るる莫れ」と。汝今又因縁を説かず。是故に應に福を捨つ

べからず。

内の曰はく、

福滅する時は苦なればなり修妬

福は福報に名け、滅は失壞に名く。福の報滅する時、所樂の事を離れ大憂苦を生ず。佛

の説くが如し、「樂受の生ずる時は樂、住する時は樂、滅する時は苦なり」と。是故に應に

福を捨つべし。又佛の福に於て畏るる莫れと言へるが如きは、助道、應に行ずべきが故な

り。佛の説くが如くんば、福すら尚捨つべし。何に滅んや罪をや修妬

外の曰はく、「罪と福とは相違するが故に。汝福を滅する時苦なりと言はば、罪の生じ

住する時も應に樂なるべし。」

内の曰はく、

罪の住する時苦なり修妬

罪は罪報に名く。罪報の生ずる時苦なり。何に況んや住する時をや。佛の説きたまへる

が如し、「苦受の生ずる時は苦、住する時は苦、滅する時は樂なり」と。汝罪と福とは相違

するが故に、罪の生ずる時は應に樂なるべしと言はば、今當に答ふべし、汝何ぞ福と罪と

は相違するが故に、罪の滅する時は樂生じ、住する時は苦なりと言はざる。

外の曰はく、

常の福には捨つる因縁無きが故に應に捨つべからず修妬

汝福を捨つるの因縁を説いて、滅する時は苦なりとす。今常の福報の中には滅の苦無き

が故に應に捨つべからず。經に説くが如し、「能く馬祀を作さば、是人は衰、老、死を度

る」と。福報常にして生處も常なり。是福應に捨つべからず。

内の曰はく、

福應に捨つべし。二相あるが故に修妬

是福に二相有り、能く樂を興へ、能く苦を興ふ。毒を雜へたる飯は食する時美くして、

消せんと欲する時苦なるが如く、福も亦是の如し。復次に福報有るは是れ樂の因なるも、

多く愛くれば則ち苦の因なり。醫へば火に近づいて寒を止むるときは、則ち樂なれど、轉

近きて身を燒けば則ち苦なるが如し。是故に福に二相有り。二相の故に常無し、是を以て

【馬祀】馬を犠牲とする祭祀、常天を求めて爲の故に修するもの。

應に捨つべし。又、

汝、馬祀の福報は常なりと言はば、但言説有るのみ。因縁無きが故に修妬

馬祀の福報は實に無常なり、何を以ての故に。馬祀の業の因縁は有量なるが故に。世間

の因にして若し有量ならば、果も亦有量なり。泥團小ならば瓶も亦小なるが如し。是故に

馬祀の業有量なるが故に無常なり。復次に聞く、汝が天に瞋恚有りと。共に闘ひ相憊む、

故に應に常なるべからず。又汝の馬祀等の業は因縁より生ずるが故に皆無常なり。

復次に、

有漏の淨の福すら、無常の故に尙應に捨つべし。何に況んや罪を雜ふる福をや修妬

馬祀の業の如きは中に我等の罪有るが故に。復次に僧に經に言ふが如し。祀法は不淨、

無常、駢負の相の故に」と。是を以て應に捨つべし。

外の日はく、

若し福を捨つれば應に作すべからず修妬

若し福必ず捨つべくば、木庵に作すべからず。何ぞ智人有りて空しく苦事を爲さんや。

譬へば陶家の器を作りて遺棄るが如し。

内の日はく、

染道を生ずる次第の法なり。垢衣は洗つて染むべきが如し修妬

垢衣は先に洗つて後、淨にして、乃ち染むるが如く、洗濯は虚しからず。所以は何ん。

【外の曰はく福を捨て等】第三に能捨空無相慧を明す

染法の次第の故に。垢衣は染を受けざるを以ての故に。是の如く先に罪垢を除き、次に福徳を以て心に熏じ、然る後に涅槃道の染を受くるなり。

外の曰はく、

福を捨て、何等に依るや修妬

福に依つて悪を捨つ。何に依つて福を捨てん。

内の曰はく、

無相最上なり修妬

福を取れば人は天中に生ず。罪を取れば二惡道に生ず。是故に無相の智慧は最第一なり。

無相は一切の相の憶念せざるに名く。一切の受を離れ、過去未來現在の法に心所著無し。

一切法自性無きが故に則ち所依無し。是を無相と名く。是方便を以ての故に能く福を捨つ。

何を以ての故に。三種の解脱を除いては第一利は不可得なり。佛の諸比丘に語るが如し、

「若し人有つて我空、無相、無作を用ひずして、若は智、若は見を得んと欲して、増上慢

無しと言はば、是人は空言無實なり」と。

【第一利】 涅槃。

破神品第二

【破神品】以下破神を論ず、神と實に六十二見を攝するが如く、神

外の曰はく、

は衆見の木なれば、其木を伐りて余を自ら傾かしめん爲に今品を説くなり。

【一】迦毘羅等の三師の縛じて有神と立つるを破す。

【冥初より等】冥初に至神は數論派の所謂二十五論なり。冥初は自性、覺

は前説參照、我心は我慢、五微塵とは解觸、五根は地水火風空、十一根は目耳鼻舌

五作業根と爲して、之に我を加へて廿五とす。

【實に神有り等】これ勝義派にいふ

【我の證明法なり】第二に僧法の別立義即ち神我を破す。

應に一切の法は空、無相なりと言ふべからず。神等の諸法は有なるが故に修妬。

迦毘羅、優樓迦等は言はく、「神及び諸法は有なり」と。迦毘羅は言はく、「冥初より覺を生じ、覺より我心を生じ、我心より五微塵を生じ、五微塵より五大を生じ、五大より十一根を生ず。神は主にして常たり、覺相にして、中に處して、常住不壞不敗なり。諸法を攝受す。能く此二十五諦を知れば即ち解脫を得。此を知らざる者は、生死を離れず」と。優

樓迦は言はく、「實に神有り常なり。出入息、視、聽、壽命等の相を以ての故に則ち神有るを知る。復次に欲、恚、苦、樂、智慧等の所依處なるを以ての故に則ち神有るを知る」と。

是故に神は是れ實に有り。云何が無と言はんや。若し有なるを而も無と言はば、則ち惡邪の人と爲る。惡邪の人には解脫無し。是故に應に一切の法は空、無相なりと言ふべからず。

内の曰はく、「若し神有りて、而も無と言はば、是れ惡邪爲り、若し無にして而も無と言はば、此れ何の過有りや。諦に之を觀察するに實に神有る無し。」

外の曰はく、「實に神有り。僧經中に説くが如し、「覺相は是れ神なり」と。」

内の曰はく、「神と覺と一と爲すや、異と爲すや。」

外の曰はく、「神と覺とは一なり。」

内の曰はく、  
覺者し神の相ならば、神は無常なり修妬  
若し覺是れ神の相ならば、覺無常なるが故に神は應に無常なるべし。譬へば熱は是れ火



の相、熱無常なるが故に火も亦無常なるが如し。今覺は實に無常なり。所以は何ん相各異なるが故に、因縁に屬するが故に、本無今有の故に、已有還無の故に。

外は曰はく、

不生の故に常なり 修妬

生相の法は無常なり。神は生相に非ざるが故に常なり。

内の曰はく、

若し爾らば、覺は神の相に非ず 修妬

覺は是れ無常なり。汝神は常なりと説かば、神は應に覺と異なるべし。若し神と覺と異ら

ずんば、覺は無常なるが故に神も亦應に無常なるべし。復次に、若し覺は是れ神の相なら

ば、是處有る無し。所以は何ん。

覺は一處にのみ行するが故に 修妬

若し覺にして是れ神の相ならば、汝が法中、神は一切處に遍ず。覺も亦應に一時に遍く

五道に行すべし。而も覺は一處にのみ行じて周遍する能はず。是故に覺は神の相に非ず。

復次に、

若し爾らば神と覺とは等し 修妬

汝覺を以て神の相と爲さば、神は應に覺と等しかるべし。神は則ち遍ぜず、譬へば火に

熱と不熱との相無きが如く、神亦是の如く、應に遍と不遍との相有るべからず。

復次に、

若し以て過と爲さば、則ち覺と不覺との相有り修妬

汝神をして過ならしめんと欲せば、神は則ち二相有り。覺と不覺との相なり。何を以て

の故に。覺は過せざるが故に、神若し覺の處に墮せば是れ即ち覺にして、若し不覺の處に

墮せば是れ則ち不覺なり。

外の曰はく、

力過するが故に過無し修妬

有處には覺に用無しと雖も、此中にも亦覺の力有り。是故に無覺の過無し。

内の曰はく、

然らず。力と有力と異らざるが故に修妬

若し覺の力有る處には、其中に覺は應に用有るべきに、而も用無し。是故に汝が語は非

なり。若し覺の如く覺の無用の處にも、亦覺の力有りと説かば、但是れ語有るのみ。

外の曰はく、

因縁合するが故に、覺の力は用有り修妬

神は覺の力有りと雖も、因縁の合するを得つを要するが故に、乃ち能く用有り。

内の曰はく、

生相に墮するが故に修妬

若し因縁合する時に覺に用有らば、是覺は因縁に屬するが故に、則ち生相に墮す。若し覺と神と異らずば、神も亦是れ生相なり。

外の曰はく、

燈の如し修妬

譬へば燈の能く物を照せども、物を作る能はざるが如く、因縁も亦是の如し、能く覺をして用有らしむれども、覺を生ずる能はず。

内の曰はく、一炷らず、燈にして瓶等を照さずと雖も、而も瓶等は得べく、亦用をも持すべし。若し因縁合せざる時は覺は不可得なり、神も亦苦樂を覺する能はず。是故に汝の喩は非なり。

外の曰はく、

色の如し修妬

譬へば色は先に有りと雖も、燈にして照さずんば則ち了せず。是の如く覺も先に有りと雖も、因縁未だ合せざるが故に亦了せず。

内の曰はく、

然らず。自相了せざるが故に修妬

若し未だ照有らずんば、人は了せずと雖も、色相自ら了す。汝が覺相は自ら了せず。是故に汝が喩は非なり。復次に、無相を以ての故に。色相は人の知るを以ての故に色相と爲

【三】第三に衛世師論義即ち知と我と異るとの説を出して破す。

すにはあらず。是故に若し見ざる時にも常に色有り。汝は知は是れ神相とす。應に無知の處を以て知と爲すべからず。無知の處を知と爲さば、是事然らず。汝が法中には知と覺とは一義なり。

外の曰はく、『優樓迦の弟子衛世師經を誦す。言はく、「知と神と異なる」是故に神は無常の中に墮せず。亦無知にもあらず、何を以ての故に。』

神と知と合するが故に。有牛の如し。修妬

譬へば人と牛と合するが故に、人を有牛と名くるが如く、是の如く、神と情と意と塵と合するが故に、神に知生ずること有り。神が知に合するを以ての故に、神を有知と名く。

内の曰はく、

牛の相は牛の中に住し、有牛の中に非ず。修妬

牛の相は牛の中に住し、有牛の中に在らず。是故に人と牛と合すと雖も、有牛は牛と作らず。但牛のみ牛爲り。是の如く神と知と合すと雖も、知の相は知の中に住し、神は知とならず。汝神と情と意と塵と合するが故に知生ずと言ふも、是知は能く色塵等を知る。是故に但知のみ能く知り、神知るに非ず。譬へば火は能く焼くも、有火人が焼くに非ざるが如し。

外の曰はく、

能く法を用ゆるが故に修妬

人は見相を有すと雖も、燈を用ふれば則ち見、燈を離るれば則ち見ず。神は能知を有すと雖も、知を用ふれば則ち知り、知を離るれば則ち知らず。

内の曰はく、

然らず。知は則ち能知の故に修妬

情と意と塵と合するを以ての故に知生ず。是知は能く色等の諸塵を知る。是故に知は即ち能知、是れ所用に非ず。若し知即ち能知ならば、神は復何の用ぞ。燈の喩は非なり、何を以ての故に。

燈は色等知らざるが故に修妬

燈は先に有りと雖も、色等を知る能はず。知法に非ざるが故に。是故に但知のみ能く色を知る。若し知る能はずんば、名けて知と爲さず。是故に縦ひ能知有りと、彼能く何の用ぞ。

外の曰はく、

馬身と合するが故に神を馬と爲す修妬

譬へば神は馬身と合するが故に、神を名けて馬と爲す、神は身に異ると雖も、亦神を名けて馬と爲すが如く、是の如く、神と知と合するが故に、神を名けて知と爲す。

内の曰はく、

然らず。身中の神は馬に非ず修妬

馬身めしんは即すなはち馬めなり。汝身なごしんと神しんと異ことなると謂いはば、則すなはち神しんと馬めと異ことなる。云何いんなんぞ神しんを以もつて馬めとせんや。是故こゝゆゑに此喻このたとへは非たがなり。神しんを以もつて神しんに喻たとふれば、則すなはち負處ふしよに墮だす。

外けの曰いははく、

黑疊こくたふの如ごとし修妬しゆだ

譬たとへば黑疊こくたふの黑こくは疊たふに異ことなると雖いへども、疊たふは黑こくと合あつするが故ゆゑに、名なけて黑疊こくたふと爲なすが如ごとく、

是こゝの如ごとく、知ちは神しんに異ことなると雖いへども、神しんと知ちと合あつするが故ゆゑに、神しんを名なけて知ちと爲なす。』

内うちの曰いははく、

若もし爾なんぢらば神しん無なし修妬しゆだ

若もし神しんと知ちと合あつするが故ゆゑに神しんを名なけて知ちと爲なさば、神しんは應まに神しんに非あらざるべし。何なにを以もつての故ゆゑに、我われ先に知ちは即すなはち是こゝれ能知のうちと説とけり。若もし知ちを神しんと名なけずんば、神しんも亦また能知のうちと名なけず。若もし他たと合あつするが故ゆゑに他たを以もつて名なと爲なさば、知ちと神しんと合あつするに、何いんが知ちを名なけて神しんと爲なさざる。又また先に黑疊こくたふの喻たとを説とくが如ごときは自ら汝なんぢが經きやうに違ちがふ。汝なんぢが經きやうにては黑こくは是こゝれ求ぐ那な、疊たふは是こゝれ陀羅驪たらかしなり。陀羅驪たらかしは求那ぐなと作ならず、求那ぐなは陀羅驪たらかしと作ならず。

【陀羅驪】ドラギ  
Dravida(六諦の  
中心實のこと。

外けの曰いははく、  
有杖うしやうの如ごとし修妬しゆだ

譬たとへば人ひとと杖しやうと合あつするが故ゆゑに人ひとを有杖うしやうと名なけ、但ただ杖しやうとのみ名なけず。杖しやうは人ひとと合あつすと雖いへども杖しやうを有人うじんと名なけず、亦また人ひとと名なけざるが如ごとく、是こゝの加まく神しんと知ちと合あつするが故ゆゑに、神しんを能知のうちと

【四】重ねて數論派の説を破す。但し所説多く正理學派の説と合す。

名け、但知とのみ名けず、亦是れ知と神と合するが故に知を名けて、神と爲すには非ず。

内の曰はく、

然らず。有杖は杖に非ず修妬

杖と有杖と合すと雖も、有杖を杖と爲さず。是の如く知相は知の中にして神の中に非ず。

是故に神は能知に非ず。

外の曰はく、『僧住人復言はく、「若し知と神と異ならば、上の如きの過有り。我經の中

には是の如き過無し。所以は何ん。覺は即ち神の相なるが故に、我は覺相を以て神と爲す。

是故に常に覺して覺せざる無し」と。

内の曰はく、『已に先に破したりと雖も、今當に更に説くべし。』

若し覺相ならば神は一ならず修妬

覺に種種の苦樂の覺等有り。若し覺にして是れ神相ならば神は種種なるべし。

外の曰はく、

然らず。一にして種種の相となる。頗梨の如し修妬

一頗梨珠の色に隨つて變じて、或は青、黄、赤、白等なるが如く、是の如く一覺は塵に

隨つて別異し、或は苦を覺し、或は樂を覺す等、覺に種種の相有りと雖も、實は是れ一覺

なり。

内の曰はく、

若し爾らば罪と福と一相なり修妬路

若し他を益する覺、是を福と名け、若し他を損する覺、是を罪と名け、一切の慧人心に是法を信じ、若し益他の覺、損他の覺、是れ一ならば、應に罪と福と一相なるべし。施と盜と等の如きも亦應に一なるべし。復次に、珠の先に有りて色に隨つて而して變するが如し。然るに覺は縁と共に生ず。是故に汝の喩は非なり。復次に、珠は新新に生滅するが故に、相は則ち一ならず。汝珠は一なりと言ふは、是れ亦非なり。

外の曰はく、

然らず。果は多なりと雖も、作者は一なり。陶師の如し修妬路

一の陶師の瓶瓮等を作るが如し。作者一なるが故に、果便ち一なるには非ざるなり。是の如く一覺にして能く損益等の業を作すなり。

内の曰はく、

陶師は別異無し修妬路

譬へば陶師の身は一にして異相無く、而も瓶瓮等とは異なるが如し。然るに益他の覺、損他の覺は實に異相有り。又損益等は覺とは異らず。是故に汝の喩は非なり。

(五) 外の曰はく、

實に神有り。比知相有るが故に修妬路

物有り、現知すべからずと雖も、比相を以ての故に知る。人の先に去りて、然して後に

【五】次に復衛世師重ねて救義を出すを破す、但し之亦正理派の説と合す。



彼に到るを見て、日月の東より出でて、西に没するに、去るを見ずと雖も、彼に到るを以ての故に去るを知るが如く、是の如く諸の求那の陀羅驪に依るを見、比知相を以ての故に神有るを知る。神と知と合するが故に、神を能知と名く。

内の曰はく、『是事先に已に破したり。今當に更に説くべし。』

知ならざるは神に非ず修妬路

汝が法神徧じ廣大にして而も知少し。若し神にして知たならば、有處、有時には不知なり、是れ則ち神に非ず。有處をば身の外に名く。有時をば身の内に名く。睡眠、悶等、是時には不知なり。若し神にして知相ならば、有處、有時、不知なるは是れ則ち神に非ざるなり。何を以ての故に。知相無きが故に。汝相知を以て神有りとせば、空にして實無きなり。

外の曰はく、

行無きが故に知無し、煙の如し修妬路

煙は是れ火の相なれど、炭の時には煙無し、是時煙無しと雖も而も火は有るが如く、是の如く知は神の相なりと雖も、若は知有り、若は知無きも、神は應に常に有るべし。

内の曰はく、

然らず。神は能知の故に修妬路

若し不知に時も神をして有らしめんと欲せば、神則ち能知ならず、亦相知無し。所以は

何ん。汝の神は知無き時にも亦神有るが故に。復次に若し燐無き時にも現に火を見て火有るを知る、神若は知有るも若は知無きも、能見者無し。是故に汝の喩は非なり。

復次に、汝共相を見て比知するが故に神有りと言くも、此れ亦非なり。所以は何ん。

去者去法の彼に到るを見るが故に修妬

若し去者を離れては去法無く、去法を離れては去者の彼に到る無し。是の如く去者を見て彼に到ると曰はば、必ず去法有るを知る。若し神を離れて知無くば是事然らず。是故に應に知を以ての故に神有りと知るべからず。龜を見るも而も毛の想有るべからず。石女を見るも而も兒の想有るべからず。是の如く應に知を見るも便ち神の想有るべからず。

外の曰はく、

手の取るが如し路修妬

譬へば手の時有りて取り、時有りて取らざるも、取らざる時を以て、名けて手と爲さずとすべからず。手は常に手と名くるが如く、神も亦是の如し。時有りて知り、時有りて知らず。知らざる時を以て名けて神となさずとすべからず。神は常に神と名く。

内の曰はく、

取は手の相に非ず路修妬

取は是れ手の業にして、手の相には非ず。何を以ての故に。取を以ての故に知りて手と爲さず。汝は知を以て即ち神の相とす。此喩は非なり。

【六】六に一切外道の有りと立つる者の論議を出して破す。中に六、一に苦樂を擧げて有神を證するを破す

(六) 外の曰はく、

定んで神有り。苦樂を覺するが故に修妬

若し覺無くんば、則ち身觸を覺する無く、苦樂を覺する能はず。何を以ての故に。死人

は身行るも、苦樂を覺する能はず。是の如く知にして身に有らば、能の苦樂を覺す。此れ

則ち神と爲す。是故に定んで神有り。

内の曰はく、

若し憫めば亦斷ぜん修妬

刀の身を害するが如し。是時憫を生ず。若し刀神を害し、神亦憫有らば、神も亦憫に斷

すべし。

外の曰はく、

然らず。觸無きが故に。空の如し修妬

神は觸無きが故に斷すべからず。舍を焼くる時、内空にして觸無きが故に燒くべからず。

但熱のみ有るが如く、是の如く、身を斷する時も内の神は觸無きが故に斷すべからず、但

憫のみ有り。

内の曰はく、

若し斷らば亦無し修妬

若し神無くんば、身は應に法處に到るべからず。何を以ての故に。去法は思惟より生

じ身の動より生ず。身に思惟無し、覺法に非ざるが故に。神に動力無し、身法に非ざるが故に。是の如くんば身は應に餘處に到るべからず。

外の曰はく、

盲と跛との如し修妬

譬へば盲と跛と相假て能く去るが如く、是の如く、神には思惟有り。身には動力有り、和合して而して去る。

内の曰はく、

異相なるが故に路修妬

盲と跛との如きは、二觸二思惟の故に法は應に能く去るべきも、身と神とは、二事無きが故に應に去るべからず。是故に去法無し。若し爾らずんば、上の如き斷の過有り。復次に汝空の熱するを謂ひしも、此事然らず。何を以ての故に。空は觸無きが故に、熱の空に遍する微くも、身觸は熱を覺す、空の熱するには非ざるなり。但假に空熱すと謂ふのみ。

外の曰はく、

舍主の憐むが如し路修妬

舍を燒く時、舍主憐むも而も燒けざるが如く、是の如く、身斷する時、神は但憐むのみにして而も斷ぜず。

【外の日はく心ず  
神等】二に色陰を  
舉げて有神を證す  
るを破す。

内の日はく、  
然らず。無常の故に焼く修妬

舍の焼くる時、草木等は無常なるが故に亦焼け亦熱す。空は常なるが故に焼けず熱せず。  
是の如く、身は無常なるが故に、亦惱み亦斷ず。神は常なるが故に惱まず斷ぜず。復次に  
舍主は火に遠ざかるが故に應に焼くべからず。汝が經に神は遍滿すと言ふが故に、亦應に  
斷壞すべし。

外の日はく、

必ず神有り。色等を取るが故に修妬  
五情は五塵を知る能はず、知法に非ざるが故に。是故に知る神は能知なるを。神は眼等  
を用て、色等の諸塵を知る。人の録を以て五穀を收刈するが如し。

内の日はく、

何んが耳を用て見ざる修妬

若し神にして見るに力有らば、何んが耳を用ひて色を見ざる。火の能く焼くは、處處に  
焼くが如く、又人の或時には録無くも、手にて亦能く斷ずるが如し。又舍に六向有り、人  
其内に居して所在に能く見るが如く、神も亦是の如し、處處に應に見るべし。

外の日はく、

然らず。所用定まるが故に。陶師の如し修妬

神は見る力を有すと雖も、然れども眼等の伺ふ所同じからずして、塵に於て各定まるが故に、耳を用て色を見る能はず。陶師の能く瓶を作ると雖も、泥を離れては作す能はずが如く、是く如く神は見る力を有すと雖も、眼に非ずんば見る能はず。

内の曰はく、

若し爾らば盲なり修妬

若し神は眼を用て見ば、則ち神と眼と異なる。神と眼と異らば、則ち神は眼無し。神は眼無くして云何が見ん。汝の陶師の喩も、是れ亦然らず。所以は何ん。泥を離れて更に瓶有る無く、泥即ち瓶たり。而も眼と色と異なるが故に。

外の曰はく、

神有り。異情動くが故に修妬

若し神無くんば、何が故に他の果を食するを見て、口中に涎を生ずるや。是の如く、應に眼を以て味を知るべからず。眼を有する者能く知るなり。

復次に、

一物を眼と身とが知るが故に修妬

人は眼にて先に眼等を識り、暗中眼を用ひずと雖も、身觸にて亦知るが如し。是故に神有るを知る。

内の曰はく、『盲の如し。』

【外の曰はく、神有り等】三に思議を擧げて神を證するを破す。

修妬路の中に已に破せり。復次に若し眼他の果を食するを見て、而して口に涎を生ぜば、餘情何を以てか動かざる。身も亦是の如し。

外の曰はく、

人の燒くが如し修妬

譬へば人の能く燒くと雖も、火を離れては燒くこと能はざるが如く、神も亦是の如し。眼を用て能く見るも、眼を離れては見る能はず。

内の曰はく、

火燒くなり修妬

人燒くと言はば、是れ則ち妄語なり。何を以ての故に。人に燒相無く、火自ら能く燒くなり。風の本を動かし、相楛に火を生じ、山澤を焚燒するが如きは、作者有る無し。是故に火自ら能く燒く、人の燒くに非ざるなり。

外の曰はく、

意の如し修妬

死人は眼有りとは雖も、意無きが故に。神は則ち見ず、若し意有らば神は則ち見るが如く、是の如く、神は眼を用て見、眼を離れては見ず。

内は曰はく、若し意有れば能く知り、意無くんば知る能はずんば、但意のみ眼等の門の中行うて便ち知る。神は復何の用ぞ。』

外の曰はく、「意は自ら知らず。若し意と意と相知らば、此れ則ち無窮なり。我神は一なるが故に、神を以て意を知る、無窮に非ざるなり。」

内の曰はく、

神は亦神なり修妬路

若し神が意を知らば、誰か復神を知らん。若し神が神を知らば、是れ亦無窮なり。我法は現在の意を以て過去の意を知る、意法無常なるが故に咎無し。

外の曰はく、

云何が神を除かん修妬路

若し神を除かば、云何が但意のみにて諸聖を知らんや。

内の曰はく、

火の熱相の如し修妬路

譬へば火の熱は作者を有する無きも、火の性自ら熱にして、熱ならざるの火有る無きが如く、是の如く、意は是れ相知にして復神を離ると雖も、性は知なるが故に能く知る。

神は知と異なるが故に、神は應に知るべからず。

外の曰はく、

應に神有るべし。宿習の念相續するが故に。生れたる時憂と喜との行あり修妬路

小兒の生れて、便ち憂、喜等の事を行ずるを知るが如き、教ふる者有る無きも、先世の

【外の曰はく應に等】四に行陰を擧げて神を證するを破す。



宿習の憶念相續するを以ての故に。今世に還種種の業を爲すなり。是故に知んぬ。神有り亦常相なりと。

内の曰はく、

遍ならば云何が念ぜん修妬

神は常にして諸塵に遍じて念ぜざる時無し、念は何に従つてか生ぜん。復次に若し念にして一切處に生ぜば、念も亦應に一切處に遍すべし。是の如くんば一切處に應に一時に念すべし。若し念にして分分の處に生ぜば、神は則ち分有り。分有るが故に無常なり。復次に、若し神知る無きも、若し知るも、神に非ず。此事先に已に破せり。

外の曰はく、

合の故に念生ず修路

若し神と意を合せば、發發するを以ての故に念生ず。何を以ての故に。神と意と合すと雖も、發發せずんば、則ち念は生ぜず。

内の曰はく、先に已に破したりと雖も、今當に重ねて説くべし。神若し相知ならば、應に念を生ずべからず。若し相知に非ざるも、亦應に念を生ずべからず。

復次に、

若し念ならば知なり修妬

若し念生ぜば是時知り、若し念生ぜずば是時知らず。應に念は即ち是れ知なるべし。神

【外の曰はく應に神等】五に識陰を擧げて神を證するを破す。

は復何の用ぞ。

外の曰はく、

應に神有るべし。左見右識の故に修妬

人の先に左眼に見て、後に右眼にて識るが如し。應に彼見て此識るべからざるに、内に

神有るを以ての故に、左に見て右に識るなり。

内の曰はく、

共に二眼に合す路修妬

分知を知と名けず、復次に若し爾らば知無し。復次に遍ならば云何が念ぜん。復次に若

し念ならば知なり。復次に何んが耳を用て見ざる。復次に若し爾らば盲なり。復次に左眼

に見る如きは、應に右眼に識るべからず。神も亦應に此には分見し、彼には分識すべから

ず。是故に應に左眼に見て右眼に識るを以ての故に、便ち神有りとすべからず。

外の曰はく、

念は神に屬するが故に神は知る路修妬

念の神法に名く。是念は神の中に生ず。是故に神は念を用て知る。

内の曰はく、

然らず。分知は知と名けず路修妬

若し神の一分の處に知生ぜば、神則ち分知するなり。若し神分知せば、神を知と名け

【外の曰はく念は等】六に念を神に屬するを擧げて神有りと證するを破す。

す。

外の曰はく、『神の知は分知に非ず。何を以ての故に。』

神は分知すと雖も、神は知と名く。身業の如し修妬

譬へば身分の手に所作有るを、名けて身作と爲すが如く、是の如く神は分知すと雖も、

神を知と名く。

内の曰はく、

若し爾らば知無し修妬

汝が法神は遍にして意は少なり。神と意と合するが故に神に知生ず。是知と意と等しく

少なり。若し少の所を以て神を知と名けば、汝何ぞ多の不知を以ての故に神を不知と名く

と言はざる。又汝の身業の譬は此事然らず。何を以ての故に。分と有分との一異は不可得

なるが故に。

外の曰はく、

衣の分焼けたるが如し修妬

譬へば衣の一分焼けたるを、名けて焼衣と爲すが如く、是の如く、神の一分のみ知なり

と雖も、名けて神知と爲す。

内の曰はく、

焼も亦是の如し修妬

若し衣ころもの一分いちぶ焼やけたるは名なけて焼やと爲なさず。應まさに分ぶん焼やと名なくべし。汝なんぢ一分いちぶの焼やを以もつての故ゆゑに衣ころもを焼やと名なけば、今いま多く焼やけざるは應まさに不ふ焼やと名なくべし。何なにを以もつての故ゆゑに。是こゝろ衣ころもは多く焼やけずして、實じつに用もち有あるが故ゆゑに。是これを以もつて語ご言げんに著ちやくする莫なれ。

破は一いち品ほん第だい三さん

外げの曰いははく、

應まさに神しん有あるべし。有あと一いちと瓶びやう等とうとは神しんの所しよ有あるが故ゆゑに路ろ修しゆ妬だ

若もし神しん有あらば則すなはち神しんの所しよ有あり。若もし神しん無なくんば則すなはち神しんの所しよ有ある無し。有あと一いちと瓶びやう等とうとは

是これ神しんの所しよ有あるが故ゆゑに神しん有あり。

内ないの曰いははく、然しからず。何なにを以もつての故ゆゑに。神しん已すでに不ふ可か得とくなるが故ゆゑに、今いま有あと一いちと瓶びやう等とうとを

思し惟しするに、若もし一いちを以もつて有あるも、若もし異いを以もつて有あるも、二に俱ともに過とが有あり。」

外げの曰いははく、有あと一いちと瓶びやう等とうとは、若もし一いちを以もつて有あらば何なにの過とが有ありや。」

内ないの曰いははく、

若もし有あと一いちと瓶びやうと一いちならば、一いちの如ごとく一切いっさいは成なるか、若もし成なせざるか、若もし顛てん倒たうかな

修しゆ妬だ

若もし有あと一いちと瓶びやうと一いちならば、因いん陀だ羅ら、釋しやく迦かと橋きやう戸こ逸いつと、其その因いん陀だ羅ら有ある處ところには則すなはち釋しやく迦かと

【破一品】前品に衆生空を明し竟に本品已下には法空を明す。中に今は諸法一なりと執する説を破するにあり。諸法一なりとは數論の所説とす【一】先づ總じて諸法一と立つるを破す。

【二】次に別立別破、中に三、第一に自宗の三法一體を破す。

【有處の處】有性  
之有、有之、有  
事、事之、有  
物、物之、有  
知、知、有、有  
知、知、有、有

橋戸迦と有るが如く、是の如く、有の處に隨つて則ち一と瓶と有り。一の處に隨つて則ち  
有と瓶と有り。瓶の處に隨つて則ち有と一と有り。若し爾らば、衣等の諸物も亦應に是れ  
瓶なるべし。有と一と瓶とは一なるが故に。是の如くんば、其れ一物有らば皆應に是れ瓶  
なるべし。今瓶衣等の物は、悉く應に是れ一なるべし。復次に有は常なるが故に、一と  
瓶とも亦應に常なるべし。復次に若し有を説かば、則ち一と瓶とを説くなり。復次に一は  
是れ數なり、有と瓶とも亦應に是れ數なるべし。復次に若し瓶五身ならば、有と一とも亦  
應に五身なるべし。若し瓶有形有對ならば、有と一とも亦應に有形有對なるべし。若し瓶  
無常ならば、有と一とも亦應に無常なるべし。是を一の如く一切は成ずと名く。若し處處  
の有是中に瓶無くば、今處處の瓶是れ亦瓶無し。有と異ならざるが故に。復次に事事の有  
是れ瓶ならずば、今の瓶は則ち瓶に非ず、有と異ならざるが故に。復次に若し有を説いて  
一と瓶とを攝せずば、今一と瓶とを説くも亦應に一と瓶とを攝すべからず、有と異ならざ  
るが故に。復次に若し有は瓶に非ずんば、瓶も亦瓶に非ず、有と異らざるが故に。是を一  
の如く一切は成せずと名く。若し瓶を説かんと欲せば、應に有を説くべし。有を説かんと  
欲せば、應に瓶を説くべし。復次に汝瓶成ずるが故に。有と一とも亦成ず。若し有と一  
と成ずるか故に、瓶も亦應に成ずべし。一なるを以ての故に、是を一の如くば一は顛倒  
すと名く。此中四瓶は名字を攝す。すくし傳無し。  
外の曰く、

物に有と一とあるが故に、過無し修妬

物は是れ有、亦是れ一なり。是故に若し瓶有る處には必ず有と一と有り。有と一との處は皆是れ瓶なるには非ず。復次に若し瓶を説かば、當に知るべし、已に有と一とを攝す。有と一とを説かば必ず瓶を攝するには非ず。

内の曰はく、

瓶に二有り、何が故に二に瓶無きや修妬

若し有と一と瓶と一ならば、何が故に有と一との處に瓶無きや。復次に云何が有と一とは瓶を攝せずと説くや。

外の曰はく、

瓶中に瓶の有は定なるが故に修妬

瓶中に瓶は瓶の有と瓶とは異らず、而も衣物等には異なる、是故に在在處の瓶には是中に瓶の有有り。亦在在處の瓶の有にも是中に瓶有り、在在の有の處に瓶有るには非ず。

内の曰はく、

然らず。瓶と有とは異らざるが故に修妬

有は是れ總相なり。何を以ての故に。若し有を説かば則ち瓶等の諸物を信じ、若し瓶を説かば衣等の諸物を信じず。是故に瓶は是れ別相、有は是れ總相なり、云何が一と爲らん。

外の曰はく、

父子の如し路修妬

譬へば一人にして亦是子、亦是父なるが如く、是の如く總相も亦是れ別相、別相も亦是

れ總相なり。

内の曰はく、

然らず。子の故に父なり路修妬

若し未だ子を生ぜずんば、名けて父と爲さず。子生じて然して後に父たり。復次に是喻

は我に同じて、汝には則ち非なり。

外の曰はく、

應に瓶有るべし、皆信するが故に路修妬

世人眼見に瓶の用有るを信す。是故に應に瓶有るべし。

内の曰はく、

有と異らざるが故に一切は無なり路修妬

若し瓶と有と異らずんば、瓶は應に是れ總相にして別相に非ざるべし。別相無きが故に、

總相も亦無し。別相有るに因るが故に總相有り。若し別相無くんば則ち總相無し。是二無

なるが故に一切は皆無なり。

外の曰はく、

【外の曰はく應に瓶等】第二に外人の仙證を引いて立するを破す。

足分等を身と名くるが如し修妬路

頭足分等も身と異らずと雖も、但足のみを身と爲すに非ざるが如く、是の如く瓶と有とは異らずと雖も、而も瓶のみ總相には非ず。

内の曰はく、

若し足と身と異らずんば、何が故に足を頭と爲さざる修妬路

若し頭足分等は身と異らずんば足は應に是れ頭なるべし。是二は身と異らざるが故に。因陀羅と釋迦とは異らざるが故に、因陀羅即ち釋迦といふが如し。

外の曰はく、

諸分は異なるが故に過無し修妬路

分と有分とは異らざるも、分と分とは異らざるに非ず。是故に頭と足とは一ならず。

内の曰はく、

若し瓶らば身無し修妬路

若し足と頭と異らば、頭と足分等とは異なる。是の如くんば但諸分のみ有りて、更に有分の之を名けて身と爲すもの無し。

外の曰はく、

然らず。多の因にして一の果現するが故に。色等足れ瓶なるが如し。

色分等のもの因の一の瓶の果を現じ、此中、但色のみ瓶爲るに非ず、亦色を離れて瓶爲



るに非ず、是故に色分等は一爲らざるが如く、足分等と身とも亦是の如し。

内の曰はく、

色等の如く瓶も亦一ならず 修妬

若し瓶と色馨香味觸の五分と異らずんば、應に一の瓶と言ふべからず。若し一の瓶と言

はば、色分等も亦應に一なるべし。色等と瓶と異らざるが故に。」

外の曰はく、

軍と林との如し 修妬

若し象馬車歩の多衆合するが故に名けて軍と爲す。又松柏等の多樹合するが故に名けて

林とす。獨松を林と爲すにも非ず。亦松を離れて林と爲すにもあらず、軍も亦亂り。是の

如く一の色を名けて瓶と爲すにもあらず、亦色を離れて瓶と爲すにもあらず。

内の曰はく、

衆も亦瓶の如し 修妬

若し松柏等は林と異らずんば、應に一の林と言ふべからず。若し一の林と言はば、松柏

等も亦應に一なるべし、林と異らざるが故に。松樹の根、莖、枝、節、華、葉の如きも、

亦應に是の如く破すべし。軍等の如き一切の物、盡く應に是の如く破すべし。

外の曰はく、

多瓶を受くるが故に 修妬

汝色分等の多を説かば、瓶も亦應に多なるべし。是故に一の瓶を破して而も多の瓶を受  
けんと欲す。

内の曰はく、

色等多なるが故に、瓶多なるには非ず修妬

我は汝が過を説くなり、多の瓶を受くるには非ず。汝自ら色分等の多を言ふ。別に瓶  
法の色等の果と爲るもの無し。

外の曰はく、

果有り。因を破せざるを以て、因有るが故に果成ず修妬

汝は瓶の果を破して、色等の瓶の因を破せず。若し因有らば必ず果有り、果無き因無し。  
復次に色等の瓶の因は是れ微塵の果なり。汝色等を受くるが故に因と果と俱に成ず。

内の曰はく、

果の無なるが如く因も亦無なり修妬

若し瓶と色等の多分とは異らざるが故に、瓶は應に一なるべからざるが如く、今色等の  
多分と瓶とは異らざるが故に。色等は應に多なるべからず。又汝の言の如く、果無き因無  
し。今果破るが故に、因も亦自ら破る、汝が法は因と果と一なるが故に。

復次に、

三位は一と爲る修妬

【外の曰はく果有  
り等】第三に外の  
因を擧げて果を證  
するを破す。

泥團どいだんの時は現在げんざい、靦あはの時は未來みらい、土どの時は過去かこなり。若し因いんと果くわと一いちならば、泥團どいだんの中ちゆうに應おこに靦あはと土どと有あるべし。是故こゝに三世さんぜの時は一いちと爲なる。已作いさ、今作こんさ、當作たうた、是かくの如ごとき語ごは壞なせん。

外の曰いははく、

然しからず。因いんと果くわとは相待たうたして成なるが故ゆゑに。長短ちやうたんの如ごとし路修妬

長ちやうに因いんつて短たんを見み、短たんに因いんつて長ちやうを見みるが如ごとく、是こゝの如ごとく、泥團どいだんより靦あはを靦あはれば則すなはち是こゝれ因いん、土どを靦あはれば則すなはち是こゝれ果くわなり。

内の曰いははく、

他たに因いんると、相違さうゐと、共きゆうとの過あやの故ゆゑに、長中ちやうちゆう長相ちやうさうに非あらず、亦短中またたんちゆうにも及び共中きゆうちゆうにも非あらず

修妬

若もし實じつに長相ちやうさう有あらば、若もし長中ちやうちゆうに有あるか、若もし短中たんちゆうに有あるか、若もし共中きゆうちゆうに有あるかなり。

是こゝれ不可得ふかどくなり。何なにを以もつての故ゆゑに。長中ちやうちゆうに長相ちやうさう無なし、他たに因いんるを以もつての故ゆゑに。短たんに因いんるが故ゆゑに長ちやうと爲なす。中ちゆうにも亦長またちやう性せい無なし、相違さうゐするが故ゆゑに。若もし短中たんちゆうに長有ちやうあらば、名なけて短たんと爲なさず。長短ちやうたんの共きゆうの中ちゆうにも亦長またちやう無なし、二俱にともに過あやるが故ゆゑに。若もし長中ちやうちゆうに有あるも、若もし短中たんちゆうに有あるも、先まづに過あやるを説とけり。短相たんさうも亦是またの如ごとし。若もし長短ちやうたん無なくんば、云何いかなんが相待たうたせん。

百論卷上

百論 卷下

破異品第四

提婆菩薩造  
婆薮開士釋  
姚秦三藏鳩摩羅什譯

【破異品】今品は諸法異體と立つるを破す。これ衛世師の所立とす。【一】第一に外の總別異體の義を破す。

外の曰はく、『汝先に有と一と瓶との異も、是れ亦過有りと言へり。何等の過か有る。』

内の曰はく、若し有等にして一と異らば一は無し修妬

若し有と一と瓶と異らば各各無し。瓶は有と一と異らば、此瓶は有に非ず、一に非ず。

有は一と瓶と異ならば、瓶に非ず、一に非ず。一は有と瓶と異ならば、瓶に非ず、有に非

ず。是の如く各各失す。復次に、若し瓶失するも有と一とは應に失すべからず。有失する

も一と瓶とは應に失すべからず。一失するも有と瓶とは應に失すべからず。異を以ての故

に。譬へば此人滅すとも彼人應に滅すべからざるが如し。

外の曰はく、

然らず。有と一と合するが故に、有と一と瓶と成ず修妬

有と一と瓶とは異なると雖も、瓶は有と合するが故に瓶を有と名く。瓶は一と合するが故に瓶を二と名く。汝瓶失するも有と一とは應に失すべからずと言ふは、是語非なり。

何を以ての故に。異合するが故に。異に三種有り、一には合異、二には別異、三には變異なり。合異とは陀羅驪と求那との如し。別異とは此人と彼人との如し、變異とは牛糞團の變じて灰團と爲るが如し。異合を以ての故に瓶失せば一も亦失し、二失すれば瓶も亦失す。

有は常の故に失せず。  
内の曰はく、

若し爾らば多瓶なり修妬

瓶は有と合するが故に有瓶なり。瓶は一と合するが故に一瓶なり。又瓶は亦瓶なり。是故に、多瓶なり。汝陀羅驪と求那とは合異の故に、瓶失すれば一も亦失し、一失すれば瓶も亦失すと言はば、我汝の異を破せんと欲するに、云何が異を以て異を證せんや。應に更に因を説くべし。

外の曰はく、

總相の故に、求那の故に、有と一とは瓶に非ず修妬

有は是れ總相の故に瓶に非ず。一は是れ求那の故に瓶に非ず。瓶は是れ陀羅驪なり。内の曰はく、

若し爾らば瓶無し路修妬

若し有は是れ總相なるが故に瓶に非ず、一は是れ求那なるが故に瓶に非ずば、瓶は是れ陀羅驪なるが故に有に非ず一に非ず、是れ則ち瓶無し。

外の曰はく、

多瓶を受けん路修妬

汝先に多瓶を説けり。一瓶を破せんと欲して更に多瓶を受く。

内の曰はく、

一無なるが故に、多も亦無なり路修妬

汝は瓶は有と合するが故に有瓶、瓶は一と合するが故に一瓶、又瓶は亦瓶なりといふ。

若し爾らば世界は一瓶を言ふに、而も汝は以て多瓶と爲す。是故に一瓶を多瓶と爲し、一を多と爲すが故に、則ち一瓶無し、一瓶無きが故に多も亦無し。先に一、後に多なるが故に。

復次に、

初數無きが故に路修妬

數法は有は一なり。若し一と瓶と異ならば、則ち瓶は一と爲らず。一無きが故に多も亦

無し。

外の曰はく、

瓶の有は有との合の故に修妬

瓶と有と合するが故に、瓶を有と名く、盡く有なるには非ず。是の如く瓶と一と合するが故に、瓶を一と名く、盡く一なるには非ず。

内の曰はく、「但是れ語有るのみ。此事先に已に破せり。若し有は瓶に非ずんば則ち瓶無し。今當に更に説くべし。

瓶は應に瓶に非ざるべし修妬

若し瓶と有と合するが故に瓶有ならば、是有は非瓶なり。若し瓶と非瓶と合せば、瓶は何を以てか非瓶と作らざる。

外の曰はく、

無には合無きが故に、非瓶に非ず修妬

非瓶を無瓶と名く、無ならば則ち合無し。是故に瓶は非瓶と作らず。今有なり、有の故に應に合有るべし。合有るが故に瓶有り。

内の曰はく、

今有は瓶と合するが故に修妬

若し非瓶ならば則ち有無し、有無くば則ち合無し。今有は瓶に合するが故に有は應に瓶と爲るべし。若し汝瓶は未だ有と合せざるが故に無なり、無の故に合無きなりと謂はば、先に説くが如く、無法の故に合無きなり。是の如く未だ有と合せざる時は、瓶は則ち

無法なり。無法の故に應に有と合すべからず。

外の曰はく、

然らず。有は瓶等を了するが故に。燈の如し修妬

有は但瓶等の諸物の因たるのみに非ず、亦能く瓶等の諸物をも了す。譬へば燈の能く諸物を照すが如し。是の如く有は能く瓶を了するが故に、即ち瓶有るを知る。

内の曰はく、

若し有法にして能く了すること燈の如くんば、瓶は應に先に有るべし修妬

今先に諸物有り、然して後に燈を以て照了す。有にして若し是の如くならば、有の未だ

合せざる時、瓶等の諸物は應に先に有るべし。若し先に有らば後の有は何の用ぞ。若し有

の未だ合せざる時、瓶等の諸物無く、有合するが故に有らば、有は是れ作因にして了因に

非ず。

復次に、

若し相を以て可相成せば、何が故に一は二と作らざる路修妬

若し汝有を以て瓶の相と爲すが故に瓶有るを知らば、若し相を離るれば可相の物は則ち

成せず、是故に有は亦應に更に相有るべし。若し更に相無くして法有るを知りて有と爲さ

ば、瓶等も亦應に有るべし。燈の喩は先に已に破せり。復次に燈は自ら照して、外照を假

らざるが如く、瓶も亦自ら有りて、外有を待たず。



【二】第二に内の  
總別異體の義を破  
す。内外空の義を明

【三】上來内外總  
別の果を破し、竟り  
下内外總別の因を  
破す。

（二）

外の曰はく、

身相の如し略修妬

足分を以て有分を知りて身と爲し、足は更に相を求めざるが如く、是の如く有を以て瓶

の相と爲すが故に瓶有るを知りて、有は更に相を求めず。

内の曰はく、

若し分中に有分具せば、何が故に頭中に足無き略修妬

若し身法の足分等の中に有るは、具有爲りや、分有爲りや。若し具有ならば頭中に應に

足有るべし、身法は一なるが故に。若し分有なるも、亦然らず。何を以ての故に。

有分は分の如し略修妬

若し足の中に足分は足分と等しく餘分の中にも亦爾らば、則ち有分と分とは一と爲

る。是故に有分の名けて身と爲すもの有る無し。是の如くんば足等の自ら有分有るも、亦

同じく破せらる。有分無きが故に諸分も亦無し。

外の曰はく、

然らず。微塵在るが故に略修妬

諸分無きにあらず。何を以ての故に。微塵に分無く、分中に在らざるも、微塵集まるが

故に、能く瓶等の果を生ず。是故に應に有分有るべし。

内の曰はく、

若し集りて瓶を爲せば、一切は瓶なり修妬路  
 汝微塵に分無しと言ふ、但是れ語有るのみ。後に當に破すべし。今當に略説すべし。微塵集りて瓶を爲す時、若し都て集りて瓶を爲せば、一切の微塵は盡く應に瓶を爲すべし。若し都て集つて瓶を爲さずば、一切は瓶に非ず。

外の曰はく、

縷滴の集る力の如し。微塵も亦爾修妬路

一一の縷は象を制する能はず、一一の水滴は瓶を満たす能はざるも、多く集らば則ち能くするが如く、是の如く微塵は集まるが故に、力能く瓶を爲る。

内の曰はく、

然らず。不定なるが故に修妬路

譬へば一一の石女は子を有する能はず、一一の盲人は色を見る能はず、一一の沙は油を出す能はず、多く集まるも亦能はざるが如く、是の如く微塵も一一能くせず、多も亦能くせず。

外の曰はく、

分分は力有り、故に不定に非ず修妬路

縷滴の分分に力有りて能く象を制し、瓶を満たす。石女、盲、沙は、分分に力無きが故に、多も亦力無し。是故に不定に非ず。應に石女、盲、沙を以て喩と爲すべからず。

【四】第四に外人横計を破す。

【汝は身に非ず】これ有見無にして次文是を離れて乃至身と爲すは無見有なり。

内の曰はく、分と有分とは一異の過あるが故に修妬

分と有分とは若は一なるも、若は異なるも、是過先に已に破せり。復次に有分無きが故に分も亦無し。若し有分未だ有らざる時は、分は不可得ならば、云何が作力有らん。若し有分已に有らば分力は何の用ぞ。

外の曰はく、

汝は是れ破法の人なり修妬

世人は盡く瓶等の諸物を見るに、汝は種種の因縁を破す。是故に汝は破法の人爲り。内の曰はく、『然らず。汝は有と瓶と異ると言ひ、我は若し有と瓶と異ならば、是れ則ち瓶無しと説く。』

復次に、

無を有と見、有を無と見る等なり修妬

汝こそ破法の人と同じ。乃ち復過甚し。何を以ての故に。頭足分等重合して是身を現するに、汝は身に非ず、是を離れて已に別に有分有りて身と爲すと言ふ。復次に輪、軸等重合して現に車を爲すに、汝は言ふ是を離れて已に別に事有り。是故に汝は妄語の人と爲る。

【破情品】六根無きにこれありと計するの謬見を破す。

【一】第一に眠情を破す。先づ眼の知を生ぜしむといふを破す。これ果を破すなり。

破情品第五

(二) 外の曰はく、  
定んで我所有り、法有り、現前有の故に修妬情と塵と意と合するが故に知生ず。此知は是れ現前知なり。是知は實有なるが故に、情と塵と意と有り。

内の曰はく、

色を見已りて、知生ぜば、何の用ぞ修妬路

若し眼先に色を見、然して後に知生ぜば、知は復何の用ぞ。若し先に知生じ、然して後に眼、色を見るも、是れ亦然らず。何を以ての故に。

若し色を見ずんば、因縁無きが故に、生も亦無し修妬路

若し眼先に色を見ずんば、則ち因縁合せず、合せざるが故に知は應に生ずべからず。汝情と塵と意と合するが故に知生ずと言ふ。人若し合せざる時知生ぜば、是れ則ち然らず。

外の曰はく、「若し一時に生ぜば何の過有りや。」

内の曰はく、

若し一時生ならば、是事爲らず。生も無生も共も一時生たらず。有の故に、無の故に、

【内の曰はく若し一時生等】次に正しく破す。

先に已に破せしが故に修妬

若し見と知と先に有にして相待して一時に生ずと見るも、若し先に無なるも、若し半有半無なるも、此三の中に於ても一時に生ずとは是れ則ち事然らず。何を以ての故に。若し先に見と知と有らば、應に更に生ずべからず、有を以ての故に。若し先に無なるも、亦應に生ずべからず、無を以ての故に。若し無ならば、則ち相待無く、亦生ずる無し。若し半有半無ならば前の二の修妬路に各已に破せしが故に。復次に一法云何が亦は有、亦是無ならん。復次に若し一時生ならば、知は見を待たず、見は知を待たず。復次に、眼は色に到りて見ると爲すや。色に到らずして見ると爲すや。

若し眼去らば遠きは遅く見るべし修妬路

若し眼去りて色つ致つて乃ち見れば、遠き色は應に遅く見るべく、近き色は應に速く見るべし。何を以ての故に。去法は爾るが故に。而も今近き瓶、遠き月一時に見る。是故に知んぬ、眼は去らずと。若し去らずば則ち和合無し。復次に、若し眼力色に到らずして而も色を見れば、何が故に近きを見て遠きを見ざる。遠近は應に一時に見るべし。

復次に、眼設し去らば、見已りて去ると爲すや、見ずして去ると爲すや。

若し見已りて去らば、復何の用ぞ修妬路

若し眼先に色を見て、事已に辨せば、去ること復何の用ぞ。

若し見ずして去らば、意の取る所の如くならざるべし修妬路

若し眼先に色を見ずして而も去らば、意の取る所の如き、則ち取る能はず。眼は無知の故に東に赴くに則ち西すべし。

復次に、

眼無き處亦取らず路修妬

若し眼去つて色に到りて而も色を取らば、身には則ち眼無し。身に眼無きが故に。此れ則ち取る無し。若し眼去らずして而も色を取らば、色には則ち眼無し。色に眼無きが故に彼も亦取る無し。復次に、若し眼去らずして而も色を取らば、應に天上の色及び障外の色をも見るべし。然るに見ず。是故に此事非なり。

外の曰はく、

眼の相は見なるが故に路修妬

見は是れ眼の相なり。縁中に於て力有りて能く取る、性自ら然るが故に。

内の曰はく、

若し眼は眼を相とせば應に自ら眼を見るべし路修妬

若し眼は眼を相とすること、火の熱を相として、自ら熱し、能く他をして熱せしむるが如く、是の如く眼若し眼を相せば、應に自ら眼を見るべし。然るに見ず。是故に眼は眼を相とするに非ず。

外の曰はく、

指しの如ごとし路修しゆ妬にや

眼がんを見けんを相さうとすと雖いへども、自みづから眼けんを見けんさること、指したん端たんの自みづから觸ふる能あたはさる如ごとし。是かくの如ごとく眼がんを見けんを相さうとすと雖いへども、自みづから見けんる能あたはず。

内ないの曰いははく、

然しからず。觸さくは指しの業ごふなるが故ゆゑに路修しゆ妬にや

觸さくは是かくれ指しの業ごふにして指しの相さうには非あらず。汝なんぢ、見けんは是かくれ眼けんの相さうと言いはば、何なんぞ自みづから眼けんを見けんさる。是かく故ゆゑに指しの喩ゆは非あなり。

外がいの曰いははく、

光くわうと意いと去さるが故ゆゑに色しきを見けんるなり路修しゆ妬にや

眼がんの光くわうと及および意いと去さるが故ゆゑに、彼かれに到いたつて能よく色しきを取とるなり。

内ないの曰いははく、

若しし意い去さりて色しきに到いたらば、此これは無む覺かくなり路修しゆ妬にや

意い若しし色しきに到いたらば、意いは則すなはち彼かれに在あり、意い若し彼かれに在あらば、身みには則すなはち意い無なし、猶なほし死し人にんの知ちし。然しかるに意いは實じつには去さらず。遠えん近こん一時いちじに取とるが故ゆゑに、過くわ去こと未み來らとを念ねんずと雖いへども念ねんは過くわ去こと未み來らとに在あらず。念ねんの時ときに去さらざるが故ゆゑに。

外がいの曰いははく、

意いは身しんに在あり路修しゆ妬にや

意は身に在りと雖も、而も能く遠く知る。

内の曰はく、

若し爾らば合せず路修妬

若し意は身に在り、而も色は彼に在らば、色彼に在るが故に則ち和合無し。若し和合無くんば、色を取る能はず。

外の曰はく、

然らず。意と光と色と合するが故に見る路修妬

眼と意とは身に在りて和合し、意力を以ての故に眼光をして色と合せしめ、是の如くして色を見る。是故に和合を失せず。

内の曰はく、

若し和合の故に見生ぜば見者無し修妬

汝は和合の故に色を見ると謂ふ。若し但眼のみ色を見、但意のみ色を取ると言はば、是事然らず。

外の曰はく、

和合を受くるが故に、色を取るは成ず。

汝和合を受くれば則ち和合有り、若し和合有らば應に色を取ること有るべし。内の曰はく、



【二】第二に耳鼻等を例して破す。

【破塵品】情の内に對して塵は其境界、即ち本品には六塵有りとの過誤を破するにあり。【一】第一に塵法を破す。中先づ外道の六塵を計する所を破す。中一に所造の塵果を破す。先づ色塵を破す。

意は見に非ず、眼は知に非ず、色は見と知とに非ず。云何が見ん修妬  
意は眼と異なるが故に、意は見相に非ず。見相に非ざるが故に見る能はず。眼は四大造の  
故に、知相に非ず。知相に非ざるが故に、知る能はず。色も亦見相にも非ず、亦知相にも  
非ず。是の如くんば復和合すと雖も、云何が色を取らん。  
耳、鼻、舌、身も亦是の如く破す。

破塵品第六

(二) 外の曰はく、

應に情有るべし。瓶等は取るべきが故に修妬

今現に瓶等の諸物は取るべきが故に。若し諸情にして諸塵を取る能はずんば、當に何等を用てか取るべき。是故に知んぬ、情有りて能く瓶等の諸物を取ると。

内の曰はく、

獨り色のみ是れ瓶なるに非ず、是故に瓶は現見に非ず修妬

瓶中の色は現に可見なるも、香等は可見ならず。獨り色のみ瓶を爲すにあらすして、香等も合して瓶を爲す。瓶若し現に可見ならば、香等も亦塵に現に可見なるべし、而も可見ならず。是故に瓶は現見に非ず。

外の曰はく、  
 分を取るが故に、一切取なり、信の故に修妬  
 瓶の一分は可見なるが故に、瓶を現見と名く。何を以ての故に、人は瓶を見已りて我是  
 瓶を見ると信知す。

内の曰はく、

若し分を取らば、一切取ならず修妬

瓶の一分の色は可見なるも、香分等は可見ならず。今分は有分と作らず。若し分にして  
 有分と作らば、香等の諸分も亦應に可見なるべし。是故に瓶は盡く可見なるに非ず。是  
 事破一破異中に説きしが如し。

外の曰はく、

有瓶は可見なり。色の現見を受くるが故に修妬

汝色の現見を受くるが故に、瓶も亦應に現見なるへし。

内の曰はく、

若し此分は現見なるも、彼分は現見ならず修妬

汝色は現見なりと謂ふは、是事然らず。色は形有るが故に、彼分と中の分とは現見なら  
 ず。此分を以て障ふるが故に。彼分も亦是の如し。復次に、前に若し分を取らば一切取な  
 らざるが如く、彼應に此に答ふべし。

外の曰はく、

微塵は分無きが故に、盡破ならず修妬

微塵は分無きが故に、一切現見なり、何の過有りや。

内の曰はく、

微塵は現見に非ず修妬

汝が經に曰はく、「微塵現見に非ず」と。是故に現見の法と成る能はず。若し微塵も亦現

見ならば、色と同じく破す。

外の曰はく、

瓶は惑に現見なるべし。世人信するが故に修妬

世人は盡く瓶は是れ現見にして用有りと信するが故に。

内の曰はく、

現見に無なるも、瓶無なるには非ず修妬

汝若し瓶を現見せずば、是時瓶無しと謂はば、是事然らず。瓶は現見ならずと雖も、瓶

は無なるには非ず。是故に瓶は現見に非ず。

外の曰はく、

眼合するが故に過無し修妬

瓶は現見の相なるも、眼未だ合せざる時は、人は自ら見すと雖も、是瓶は現見の相なら

ざるに非ず。

内の曰はく、

現見の生無きが如く、有も亦實に非ず修妬

若し瓶未だ眼と合せざる時、未だ異相有らず。後に見る時少しく異相の生ずる有らば、當に知るべし、此瓶に現見の相生す。今實に異相の生ずること無し。是故に現見の相生せず。現見の相生すること無きが如く、瓶の有も亦無し。

外の曰はく、

五身の一分は破するも餘分は有り修妬

五身は是れ瓶、汝一色を破して香等を破せず。今香等は破せられざるが故に應に塵有るべし。

内の曰はく、

若し一切觸ならずんば、云何が色等と合せん修妬

汝五身瓶爲りと言ふは、是語然らず。何を以ての故に。色等の一分は是れ觸、餘分は觸に非ず、云何が觸と不觸と合せん。是故に五身が瓶爲るには非ず。

外の曰はく、

瓶と合するが故に修妬

色分等は各各合せざるも、而も色分等と瓶とは合す。

【外の曰はく五身の等】次に餘の四塵を破す。

【外の曰く色は應に等】二に能造の四大を破す。

内の曰はく、

異なるも除なるも、云何が瓶と觸と合せん修妬

若し瓶と觸と異ならば、瓶は則ち觸に非ず。觸に非ずんば、云何が觸と合せん。若し色

等を除いては、更に瓶法無し。若し瓶法無くんば、云何が觸と瓶と合せん。

外の曰はく、

色は應に現見なるべし、經を信するが故に修妬

汝が經に言はく、「色は四大及び四大造に名く」造色分の中、色入に攝せらるるものは是

れ現見なり。汝云何が現見の色無しと言ふや。

内の曰はく、

四大は眼見に非ず、云何が現見を生ぜん修妬

地は堅相、水は濕相、火は熱相、風は動相、是四大にして眼見に非ずば、此所造の色も

應に現見に非ざるべし。

外の曰はく、

身根の取なるが故に四大は有り修妬

今身根は四大を取るが故に四大は有り。是故に火等の諸物、四大所造なるのも、亦應に

有るべし。

内の曰はく、

【二】第二に時無しと破す。

火中にては一切は熱なるが故に修妬

四大の中但火のみ是れ熱相にして、餘は熱相に非ず。今火の中の四大都て是れ熱相なり。是故に火は四身と爲らず。若し餘は熱せずんば、名けて火と爲さず。是故に火は四身と爲らず。地の堅相、水の濕相、風の動相も亦是の如し。

外の曰はく、

色は應に可見なるべし、現在時は有なるが故に修妬

眼情等は現在時に塵を取るを以ての故に。是を現在時と名く。若し眼情等が色塵等を取る能はずんば、則ち現在時無し。今實には現在時有り、是故に色は可見なるべし。

内の曰はく、

若し法にして後に故ならば初も亦故なり修妬

若し法にして後に故相現せば、是相は故時に生ずるに非ず、初生の時已に随つて行るも微なるが故に知らざるのみ。故相轉現じ、是時知るべし、人の履を着くるに初已に微なるが故に、之に随つて覺えず知らず、久しければ則ち相現するが如し。若し初無なるが故に後も亦無ならば、是れ應に常に新なるべし。若し然らば、故相は應に生ずべからず。是を以て、初故にして之に隨ひ、後に則ち相現す。今諸法は住せざるが故に則ち住時無し、若し住時無くんば塵を取る處無し。

外の曰はく、

【三】第三に得益を別す。

新と故とを受くるが故に、現在時有り修妬

汝新相と故相とを受く、生を觀する時名け、新と爲し、異を觀する時名けて故と爲す。

是二相は過去時に取るべきにも非ず、亦未來時に取るべきにも非ず。現在時を以ての故に

新と故との相は取るべし。

内の曰はく、

然らず。生の故に新、異の故に故なり修妬

若し法久しければ新相を生じ已りて是新相を過ぐ。新に異らば則ち故と名く。若し故相

生ずれば故は則ち新と爲る。是新、是故、但言説のみ有り。第一義中には新も無く、中も

無く、故も無し。

外の曰はく、「若し然らば何の利をか得ん。」

内の曰はく、

永離を得修妬

若し新は中と作らず、中は故と作らずば、種子、芽、莖、節にして壞せば華實は各合

せざるが如く、各合せざるが故に、諸法は住せず。住せざるが故に遠離す。遠離するが

故に取るを得べからず。

【破因中有果品】  
因中有果とは數論  
派の所説、因果無  
別の義、今之を破  
す。

【二】第一に外人  
の有は失せずと執  
するの義を破す。

破因中有果品第七

外の曰はく、

諸法は住せざるに非ず、有は失せざるが故に、無は生ぜざるが故に修妬

有相の諸法は泥團の如し。團より底、底より腹、腹より咽、咽より口、前後因果を爲す、  
種種の果生ずる時種種の因失せず。若し因中に果無くば果は則ち生ぜず。但因果變じてのみ  
果と爲るなり。是故に諸法有り。

内の曰はく、

若し果生ずるが故に有失せずんば、因失するが故に有は失せん修妬

汝瓶の果生ずる時泥團失せずと言はば、瓶は即ち是れ泥團ならん。若し瓶果生ぜば、  
是時泥團の因を失するが故に、是れ則ち無因なり。若し泥團失せずんば、應に泥團と瓶と  
異有りと分別すべからず。今實には、形、時、力、知、名等、異有るを見るが故に、有も  
應に失すべし。

外の曰はく、

指の屈申するが如し修妬

指の屈申して形異ると雖も、實には是れ一指なり。是の如く、泥團の形と瓶の形と異なる



と雖も、而も泥たるは異らず。

内の曰はく、

然らず。業と能と異なるが故に修妬

屈申は是れ指の業、指は是れ能なり。若し業則ち是れ能ならば、屈する時は應に指を失すべし。復次に屈と申とは應に是れ一なるべし。汝の經の如き、泥團は即ち是れ瓶なるが故に、指の喩は非なり。

外の曰はく、

少と壯と老との如し修妬

一人の身にして亦是少、亦是壯、亦是老なるが如く、因と果とも亦是の如し。

内の曰はく、

一ならざるが故に修妬

少は壯と作らず、壯は老と作らず。是故に汝が喩は非なり。

復次に、

若し有失せずんば失無し修妬

若し有失せずんば、泥團は應に變じて瓶と爲るべからず。是れ則ち瓶無し。若し有失せずんば、無も無きが故に亦應に失すべからず。然らば則ち都て失無し。外の曰はく、

失無きは何の咎有りや修妬

若し常なるが故に失無くんば、泥團は應に變じて瓶と爲らず、無常無きは何の過有り

や。

内の曰はく、

若し無常無くんば、罪福等無し修妬

若し無常無くんば罪福等悉く亦當に無かるべし。何を以ての故に。罪人は常に罪人と

爲つて、應に福人と爲るべからず、福人は常に福人と爲つて、應に罪人と爲るべからず。

罪福等とは布施と竊盜、持戒と犯戒等なり。是の如きは皆無し。

外の曰はく、

因中に先にも果有り、因有るが故に修妬

若し泥中に先に瓶無くんば、泥は應に瓶の因と爲るべからず。

内の曰はく、

若し因に先に果有るが故に果有らば、果無きが故に因に果無し修妬

若し泥團は瓶と作るも、泥は失はれざるが故に因中に果有らば、是瓶若し破せば、應に

因中に果無かるべし。

外の曰はく、

因と果とは一なるが故に修妬

【二】第二に正しく因中に果有るといふを破す。

土は因、泥は果、泥は因、瓶は果の如く、因變じて果と爲りて、更に異法無し。是故に應に因中に果無かるべからず。

内の曰はく、

若し因果一ならば未來無なり修妬

泥團は現在にして、瓶は未來爲るが如く、若し因果一ならば則ち未來無し。未來無きが故に亦現在も無し。現在無きが故に亦過去も無し。是の如くば三世は亂す。

外の曰はく、

名等失はれて名等生ずるが故に修妬

更に新法無し、而して故法は失せず。但名のみ時に随つて異なる。一泥團の瓶と爲り、瓶破して甕と爲り、甕破して還泥と爲るが如く、是の如く都て去來無し。瓶甕は安在し、但時に隨うて名を得るのみ。其實は異無し。

内の曰はく、

若し瓶らば因に果無し修妬

若し名失し、名生ぜば、此名は先に無くして後に有るが故に、因中に果無し。若し名先より有らば、泥は即ち是れ甕なり。是故に知んぬ、先に果有るに非ずと。

外の曰はく、

定まらざるが故に修妬

泥團中よりは定んで一器のみを出さず。是故に泥中に定んで名有らさず。  
内の曰はく、

『若し泥にして不定ならば、果も亦不定なり。修妬

若し泥團中にて瓶は不定ならば、汝の因中に先に果有りと云ふも亦不定なり。』

外の曰はく、

微形有るが故に修妬

泥團中にては瓶の形は微なるが故に知り難し。陶師の力の故に、是時明了す。泥中の瓶は不可知なりと雖も、當に知るべし、泥中には必ず微形有り。二種の不可知有り、或は無の故に知れず、或は有れども因縁を以ての故に知れず。因縁に八有り、何等か八なる。遠きが故に知れず、遠き國土の如し。近きが故に知れず、眼睫の如し。根壞するが故に知れず、聾盲の如し。心住せざるが故に知れず、人の意の亂するが如し、細なるが故に知れず。微塵の如し。障の故に知れず、壁外の事の如し。勝の故に知れず、大水の少鹽の如し。相似の故に知れず、一粒の米を大聚の米の中に投ずるが如し。是の如く泥團中の瓶は眼見すと雖も、要す滿より出でず。是故に微なる瓶は定んで泥中に在り。

内の曰はく、

若し先に微形有らば、因に果無し。修妬

若し瓶の未だ生ぜざる時、泥中に微形有り、後時時に知るべくんば、是れ則ち因中に果無

【三】 第三に外人  
各因中に果有りと  
の證を作るを破す

し。  
きなり。何を以ての故に、本は漏相無くして後に乃ち生ずるが故に。是を以て因中に果無

外の日はく、

因中に應に果有るべし。各因を取るが故に。修妬

因中に應に先に果有るべし。何を以ての故に。瓶を奪るには泥を取りて蒲を取らず。若し  
因中に果無くんば、亦蒲をも取るべし。而も人は定んで泥能く瓶を生じ、埴を挺して器を  
成じ、埴を受くるに堪ふるを知るが故に、是を以て因中に果有り。

内の日はく、

若し當に有るべくんば有なり、若し當に無かるべくんば無なり。修妬

汝言ふ、「泥中より當に瓶を出すべきが故に、因中に先に果有り」と。今瓶破するが故に  
應當に果無かるべし。是を以て因中に果無し。

外の日はく、

生住壞次第有るが故に過無し。修妬

瓶の中に破相有りと雖も、必ず先に生じ、次に住し、後に破す。何を以ての故に。未生  
には破無きが故に。

内の日はく、

若し先に生じて後に非ずんば果無きと同じ。修妬

【四】第四に外人の横計を破す。

若し泥中に瓶の生住壞有らば、何が故に要す先に生じ後に壞して、先に壞し後に生ぜざる汝未生の故に破無しと言ふも、是の如くんば瓶の未生の時住も無く壞も無し。此二、先に無くして後に有るが故に、因中に果無し。

外の曰はく、

汝有果を破するが故に、斷の過有り修妬

若し因中有果を非と爲さば、應に因中無果なるべし。若し因中無果ならば則ち斷滅に墮す。

内の曰はく、

續の故に斷ならず。壞の故に常ならず修妬

汝知らずや、穀子より芽等相續するが故に斷ならず。穀子等の因壞するが故に常ならず。是の如く諸佛は十二分因縁生法を説いて、因中有果無果を離るるが故に斷常に著せず。中道を行じて涅槃に入る。

破因中無果品第八

(二)

外の曰はく、

生有るが故に、一は當に成すべし修妬

【破因中無果品】  
因中無果とは衛世師の所説とせられ因果別異を主張するを破すなり。  
【一】第一に能生に可生因果の義有りて外人が證するを破す。

汝言ふ、「因縁の故に諸法生ず」と。是生若は因中に先に有りや、若は因中に先に無きや。此生有るが故に必ず當に一有るべし。

内外の曰はく、

生も無生も不生なり 修妬

若し生有らば因中に先に有るか、因中に先に無きかたり。是の如く思惟するに不可得なり。何に況んや無生をや。汝若し瓶の生ずること有らば、瓶の初、瓶の時に有りとなすや。泥團の後、瓶に非ざる時に有りと爲すや。若し瓶は初、瓶の時に瓶の生ずる有らば、是事然らず。何を以ての故に。瓶は已に有るが故に、是初中後は共に相因待す。若し中後無くんば初無し、若し瓶の初有らば、必ず中後有り。是故に瓶已に先に有らば、生は復何の用ぞ。若し泥團の後瓶に非ざる時に瓶生ずるも、是れ亦然らず。何を以ての故に。未だ有らざるが故に。若し瓶に初中後無くんば、是れ則ち瓶無し。若し瓶無くんば、云何が瓶の生ずる有らん。復次に、若し瓶の生ずる有らば、若し泥團の後瓶の時應に有るべきか、若は瓶の初、泥團の時應に有るべし。泥團の後、瓶の時には瓶の生ずる無し。何を以ての故に。已に有るが故に。亦瓶の初、泥團の時にも瓶の生ずる有るに非ず。何を以ての故に。未だ有らざるが故に。

外の曰はく、

生時に生ずるが故に咎無し 修妬

我は若は已生、若は未生に瓶の生ずる有るを言はず。第二の法生ずる時に是れ生ず。

内の曰はく、

生時も亦是の如し路修妬

生時は先に説くが如し、若し生ならば是れ則ち生じ已りしか、若は未生かなり。云何が

生有らん。生時は、半生半未生に名く。二俱に過あり。亦前に破するが如し。是故に無生

なり。

外の曰はく、

生と成とは一義なるが故に路修妬

我は瓶の生じ已りて生有りとも言はず、亦未生にして生有りとも言はず。今瓶は現に成

ず、是れ即ち瓶の生ずるなり。

内の曰はく、

若し爾らば生は後なり路修妬

成をば生じ已るに名く。若し生無くば、初無く中無し。若し初無く亦中無くば成無し。

是故に應に成を以て生と爲すべからず。生に後は在るが故に。

外の曰はく、

初中後次第生の故に咎無し路修妬

泥團次第に生じて、底、腹、咽、口等、初中後の次第生ず。泥團の次に瓶の成すること



有るに非ず。是故に瓶の生ずること有るに非ず。亦瓶の時にも瓶の生ずる有るに非ず。亦無にして瓶の生ずるにも非ず。

内の曰はく、

初中後は次第生に非ず 修妬

初は無前有後に名け、中は有前有無後に名け、後は有前無後に名く。是の如く初中後は共に相因待す。若し離るれば云何が有らん。是故に初中後は應に次第生なるべからず。

一時生も亦然らず 修妬

若し一時生ならば、應に是れ初、是れ中、是れ後と言ふべからず。亦相因待せず。是故に然らず。

外の曰はく、

生住壞の如し 修妬

有爲相の如きは生住壞次第に有り、初中後も亦是の如し。

内の曰はく、

生住壞も亦是の如し 修妬

若は次第に有るも、若は一時に有るも、是二は然らず。何を以ての故に。住無くば則ち生無し。若し住無くして生有らば、亦應に生無くして住有るべし。壞も亦是の如し。若し一時ならば、應に是れ生、是れ住、是れ壞を分別すべからず。

復次に、

一切處に一切有らん修妬

一切處とは三の有爲相に名く。若し生、住、壞にして亦有爲相ならば、今、生の中應に

三相有るべし。是れ有爲法なるが故に。一一の中に復三相有り。然らば、則ち無窮なり。

住、壞も亦是の如し。今、生、住、壞の中に更に三相無くば今の生、住、壞を有爲相と名

けず。若し汝、生と生と共に生ずること父子の如しと謂はば、是事然らず。是の如き生

生、若は因中に先に有りて相待するも、若は因中の先に無くして相待するも、若は因中に

先に少有少無にして相待するも、是三種は破情中に已に説けり。復次に、父先に有り、然

る後に子を生ずるが如く、是父更に父有り。是故に此喩は非なり。

(二)

外の曰はく、

定んで生有り、可生の法有るが故に修妬

若し生有らば可生有り、若し生無くんば則ち可生無し。今瓶等は可生の法にして現に有

るが故に必ず生有り。

内の曰はく、

若し生有らば可生無し修妬

若し瓶生ずる有らば、瓶は已生にして可生と名けず。何を以ての故に。若し瓶無くん

ば、亦瓶の生ずることも無し。是故に若し生有らば、則ち可生無し。何に況んや無生を

【二】第二に外人の可生に能生有り」と證するを破す。

【三】第三に生可有りと義を證するを破す。

云々

復次に、

自じと他たと共ともも亦是また是こゝの如ごとし路修しゆ妬た

若もし生しやうと可か生しやうとの是こゝに、若もし自じ生しやうなるも、若もし他た生しやうなるも、若もし共とも生しやうなるも、破やぶ言ごん中ちゆうに

已よに説とけり。

外がいの曰いはく、

定さだんで有あり、生しやうと可か生しやうとは共ともに成なずるが故ゆゑに路修しゆ妬た

先まに生しやう有ありて後のちに可か生しやう有あるに非あらず。一いつ時じに共ともに成なずるなり。

内ないの曰いはく、

生しやうと可か生しやうとは生しやうずる能あたはず路修しゆ妬た

若もし可か生しやうにして能よく生しやうを成なせば、則すなはち生しやうは是こゝれ可か生しやうにして、能よく生しやうと名なけず、若もし生しやう無なく

んば何なにぞ可か生しやう有あらん。是こゝに二に事じ皆みな無なし。

復また次に、  
有あと無なと相あ待たいすることは然しからず路修しゆ妬た

今いま可か生しやう未いまだ有あらざるが故ゆゑに無ななり。生しやうは則すなはち是こゝれ有あり。有あと無なと何なにぞ相あ待たいするを得えん、  
是こゝに皆みな無ななり。

外がいの曰いはく、

生しやうと可生かじやうと相待あひたいするが故ゆゑに諸法しよほふは成ずじやう路ろ修妬  
 但生たにしやうと可生かじやうとのみ相待あひたいして成ずじやうるに非あらず。是この二相待あひたいするが故ゆゑに、瓶等びやうとうの諸物しよもつは成ずじやうるな  
 り。

内の曰いははく、

若もし二により生しやうぜば、何なにを以もつてか三無さんなからん路ろ修妬

汝言にぢいふ、「生しやうと可生かじやうと相待あひたいするが故ゆゑに諸法しよほふは成ずじやう」と。若もし二により果くわを生しやうぜば、何なにが第三だいさん法ほふの有あらざること、父母ふぼの子こを生しやうずるが如ごとくなる。今生いましやうと可生かじやうとを離はなれて、更さらに瓶等びやうとうの第だい三法さんほふ有ある無し。是故このゆゑに然しからず。

(四) 外の曰いははく、

【四】 第四に滅の義を擧げて有生と證するを破す。

應まさに生有しやうあるべし、因壞いんえするが故ゆゑに路ろ修妬

若もし果生くわじやうぜずんば、因いんは應まさに壞えすべからず。今瓶いまびやうの因壞いんえするを見るが故ゆゑに、應まさに生有しやうあるべし。

内の曰いははく、

因壞いんえするが故ゆゑに生も亦滅まためつす路ろ修妬

若もし果生くわじやうぜば、是果このくわは因壞いんえする時とき有ありと爲なすや、壞えして後のちに有ありと爲なすや。若もし因壞いんえする時とき有あらば、壞えと異ことらざるが故ゆゑに生も亦滅まためつす。若もし壞えして後のちに有あらば、因已いんすでに壞えするが故ゆゑに因無いんなく、因無いんなきが故ゆゑに、果も應まさに生しやうすべからず。

復次に、

因中は果は定まるが故に路修妬

若し因中に先に果有るも、先に果無くも、二俱に生無し。何を以ての故に。若し因中に

果無くば、何を以てか但泥中にのみ瓶有り、縷中にのみ布有らん。若し其れ俱に無くば、

泥に應に布有るべく、縷に應に瓶有るべし。若し因中に先に果有らば、是因中には果生ず

ること、是事然らず。何を以ての故に。是因は即ち是果なり。汝の法因果異らざるが故に。

是故に因中に若は先に果有るも、若は先に果無さも、是れ皆生ぜず。

復次に、  
因と果と多の故に路修妬

若し因中先に果有らば、則ち乳の中に酪、酥等有り。又酥の中に酪、乳等有らん。若し

乳の中に酪、酥等有らば、則ち一因の中多果なり。若し酥中に酪、乳等有らば、則ち一果

中多因なり。是の如く、先後因果一時に俱に過有り。若し因中果無くも、亦是の如き過あ

り。是故に因中に果有るも果無きも是れ皆生無し。

外の曰はく、

因果は破せられざるが故に、生と可生と成ず路修妬

汝因中多果、果中多因は、過と爲すと云ふも、因果無しと言はず。是故に生と可生と成

【五】第五に因果を引いて生可生の義有りといふを破す。

内の曰はく、

物と物と非物と互に生ぜず修妬

物は物を生ぜず、非物は非物を生ぜず。物は非物を生ぜず、非物は物を生ぜず。若し物は物を生ずること母の子を生ずるが如くならば、是れ則ち然らず。何を以ての故に。母は實には子を生ぜず。子先に有りて母より出づるが故に。若し母の血分より生ずる、以て物は物を生ずと爲すと謂ふも、是れ亦然らず。何を以ての故に。血分等を離れて母は不可得なるが故に。若し發生の如き、以て物は物を生ずと爲すと謂ふも、是も亦然らず。何を以ての故に。壯は即ち變じて老と爲るも、壯は老を生ずるに非ざるが故に。若し鏡中の像の如き、以て物は物を生ずと爲すと謂ふも、是も亦然らず。何を以ての故に。鏡中の像は從來する所無きが故に。復次に鏡中の像の面と相似するが如く、餘の果も亦應に因と相似すべきに、而も然らず。是故に物は物を生ぜず。非物は非物を生ぜずとは、兎角の兎角を生ぜざるが如し。物は非物を生ぜずとは、石女の子を生ぜざるが如し。非物は物を生ぜずとは、龜毛の滿を生ぜざるが如し。是故に生法有る無し。復次に、若し物は物を生ぜば、是れ應に二種に法生ずべし。若し因中有果、若し因中無果なり。是れ則ち然らず。何を以ての故に。若し因中に先に果無くば、因は應に果を生ずべからず、因の邊に異果は得べからざるが故に。若し因中に先に果有らば、云何が生滅せん。

異らざるが故に修妬

破常品第九

若し瓶と泥團と異らずんば、瓶の生ずる時泥團は應に滅すべからず。泥團も亦應に瓶の因と爲るべからず。若し泥團と瓶と異らずんば、瓶は應に生ずべからず。瓶も亦應に泥團の果と爲るべからず。是故に若し因中有果なるも、若し因中無果なるも、物は物を生ぜず。

【破常品】本論に外道の七常の義を破する中、本品には時方虚空微塵涅槃の五義の常を破す。總じて常を

外の曰はく、

應に諸法有るべし。無因の常法は破せざるが故に修妬

汝有因の法を破すと雖も、無因の常法を破せず。虚空、時、方、微塵、涅槃の如き、是無因の法は破せざるが故に應に諸法有るべし。

内の曰はく、

若し強ひて以て常と爲せば、無常も同じ修妬

汝有因の故に常と説くや、無因の故に常と説くや、若し常法にして有因ならば、有因は則ち無常なり。若し無因を常と説かば、亦無常とも説くべし。

外の曰はく、

了因の故に過無し修妬

二種の因有り、一には作因、二には了因なり、若し作因を以てせば、是れ即ち無常なり。

我わが虚空等こくうとうの常法じやうほふは、了因りやういんを以ての故ゆゑに常じやうと説く、無因むいんの故ゆゑに常じやうと説くに非ず、亦有因またういんの故ゆゑに無常むじやうと説くに非ず。是故このゆゑに強ひて常じやうと爲すには非ず。

内の曰はく、

是因このゆゑ然しからず路修妬

汝常法有因なれぢやうほふにと説くと雖も、是因このゆゑは然しからず。神かみは先に已オホに破はせり。餘のちの常法じやうほふは後に當まさに

破はすべし。

外の曰はく、

應まさに常法じやうほふ有あるべし。作法さくほふは無常むじやうなるが故ゆゑに、不ふ作法さくほふは是これ常じやうなり路修妬

眼見げんけんに觀等くわんとうの諸物しよぶつは無常むじやうなり。若もし是法このほふに異ことらば、應まさに是これ常じやうなるべし。

内の曰はく、

無むなり。亦また共に有あり路修妬

汝なれ作法さくほふと相違あひかするを以ての故ゆゑに不ふ作法さくほふと名なく。今作法中いまさくほふちゆうに有ある相あひを見るが故ゆゑに。應まさに不ふ作法さくほふ無なかるべし。復次またつぎに、汝なれ作法さくほふと相違あひかするを以ての故ゆゑに、不ふ作法さくほふを常じやうと爲なさば、今作法いまさくほふ

と不相違あひかの故ゆゑに、是これ應まさに無常むじやうなるべし。何を以つて故ゆゑに。不ふ作法さくほふと作法さくほふとは、同じく觸そく

無なきが故ゆゑに。不ふ作法さくほふは應まさに無常むじやうなるべし。是この如ごとく遍常へんじやうと不遍常ふへんじやうと、悉ことごとく已オホに總すべじて破は

したり。今當いまあたに別べつして破はすべし。

(三) 外の曰はく、

【二】 第二に別して五常を破す。一に虚空の常を破す。



定んで虚空法有り、常にして亦遍、亦無分なり、一切處、一切時に有りと信ずるが故に修妬

世人は一切處に虚空の有るを信ず。是故に遍なり。過去未來現在一切時に虚空の有るを信ず。是故に常なり。

内の曰はく、

分の中の分と合するが故に、分と異らず修妬

若し瓶中に向中の虚空あらば、是中に虚空都て有りと爲すや、分に有りと爲すや。若し都て有ならば即ち遍ならず。若し是を遍と爲さば、瓶も亦應に遍なるべし。若し分有ならば虚空は但是れ分のみにして有る無し。有分ありて名けて虚空と爲す。是故に虚空は遍に非ず、亦常にも非ず。

外の曰はく、

定んで虚空有り、遍相にして亦常なり。作有るが故に修妬

若し虚空無くば、則ち擧無く、下無く、去來等無し。所以は何ん。容受の處無きが故に。今實に所作有り、是を以て虚空有り。亦遍、亦常なり。

内の曰はく、

然らず。虚空は虚空に處す修妬

若し虚空法有らば應に住處有るべし。若し住處無くんば是れ即ち法無し。若し虚空は孔

穴中に住せば、是れ則ち虚空は虚空に住するなり。容受の處有るが故に。而も然らず。是を以て虚空は孔穴中に住せず、亦實の中にも住せず。何を以ての故に。

實には空無きが故に 修妬路

是實を空と名けず。若し空無くんば即ち住處無し。容受の處無きを以ての故に。復次に汝作處是れ虚空と言はば、實の中には作處無きが故に即ち虚空無し。是故に虚空は亦遍にも非ず、亦常にも非ず。復次に、無相の故に虚空無し。諸法は各各相有り。相有るを以ての故に諸法有るを知る。地の堅相、水の濕相、火の熱相、風の動相、識の知相の如し。而して虚空に相無し。是故に無し。

外の曰はく、『虚空に相有り、汝知らざるが故に無きなり。無色は是れ虚空の相なり。』内の曰はく、『然らず、無色とは破色に名く、更に法有るに非ず。猶樹を斷すれば更に法有る無きが如し。是故に虚空の相有る無し。』

復次に、虚空に相無し。何を以ての故に。汝無色は是れ虚空の相と説かば、若し色未だ生ぜずんば、是時虚空の相無からん。

復次に、色は是れ無常法、虚空は是れ有常法ならば、若し色未だ有らざる時、應に先に虚空法有るべし。若し未だ色有らずば滅する所無く、虚空は即ち無相なり。若し無相ならば即ち法無し。是れ故に無色は是れ虚空の相に非ず、但名のみ有りて而も實無し。諸の遍常のものも亦是の如く總じて破す。』

外の曰はく、

時法有り、常相有るが故に修妬路

法有り、現見すべからずと雖も、共相を以て比知するが故に、有を信ず。是の如く時は微細にして不可見なりと雖も、節氣、花實等を以ての故に時有りとしる。此れ則ち果を見て因を知るなり。復次に一時、不一時、久、近等の相を以ての故に時有らざる無し。是故に常なり。

内の曰はく、

過去は未來中に無し。是故に未來無し修妬路

泥博の時、現在、土の時は過去、瓶の時は未來なるが如き、此れ則ち時の相なり。常なるが故に、過去の時は未來の時と作らず。汝が經に言ふ「時是れ一法なり」と。是故に過去の時は終に未來の時と作らず、亦現在の時とも作らず。若し過去にして未來と作らば、即ち雜の過有り。又過去の中に未來の時無し。是故に未來無し、現在も亦是の如く破す。

外の曰はく、

過去を受くるが故に時有り修妬路

汝過去時を受くるが故に必ず未來時有り。是故に實に時法有り。

内の曰はく、

未來の相は過去に非ず修妬路

汝聞かずや、我先に過去の土は未來の瓶と作らずと説きたり。若し未來相の中に墮せば是を未來相と爲す。云何が過去と名けん。是故に過去無し。

外の曰はく、

應に時有るべし。自相別なるが故に修妬

若は現在には現在の相有り、若は過去には過去の相有り、若は未來には未來の相有り。

是故に時有り。

内の曰はく、

若し爾らば一切は現在なり修妬

若し三時に自相有らば、今盡く應に現在なるべし。若し未來ならば是を無と爲す。若し有ならば未來と名けず、應に已來と名くべし。是故に此義然らず。

外の曰はく、

過去未來は自相を行するが故に咎無し修妬

過去時と未來時とは、現在相を行ぜず、過去時は過去相を行じ、未來時は未來相を行す。是各各自相を行するが故に過無し。

内の曰はく、

過去は過去に非ず修妬

若し過去せば、名けて過去と爲さず。何を以ての故に。自相を離るるが故に。火の熱を

【外の日はく實に方有り等】三に方常を破す。

捨つれば名けて火と爲さざるが如し、自相を離るるが故に。若し過去は過去せずんば、今應に過去時は過去相を行ずと説くべからず。未來も亦是の如く破す。是故に時法は實無し但言説のみ有り。

外の日はく、

實に方有り。常相有るが故に修妬

日の合する處是れ方相なり、我經に説くが如し。若は過去、若は未來、若は現在に、口初めて合する處、是を東方と名く。是の如く餘の方は日に隨つて名と爲す。

内の日はく、

然らず。東方初無きが故に修妬

日は四天下を行き須彌山を繞る。鬱單越の日中は弗于逮の日出にして、弗于逮の人は以て東方と爲す。弗于逮の日中は、閻浮提の日出にして、閻浮提の人は以て東方と爲す。閻浮提の日中は、拘耶尼の日出にして、拘耶尼の人は以て東方と爲す。拘耶尼の日中は鬱單越の日出にして、鬱單越の人は以て東方と爲す。是の如く悉く是れ東方南方西方北方なり。復次に、日合せざる處、是中には方無し、無相を以ての故に。復次に、不定の故に、此にては以て東方と爲し、彼にては以て西方と爲す。是故に實の方無し。

外の日はく、

然らず。是方相は一の天の下の説なるが故に修妬

是方相は一の天の下の説に因る。都て説くが爲には非ず。是故に東方は初無きの過に非らず。

内の曰はく、

若し爾らば邊有り修妬

若し日の先に合する處、是を東方と名くれば、即ち諸方は邊有り、邊有るが故に分有り、

分有るが故に無常なり。是故に言説には方有るも、實には方無しと爲す。』

外の曰はく、

遍にして常なること無しと雖も、不遍にして常なる微塵有り。是果相有るが故に路修妬

世人或は果を見て因有りと知り、或は因を見て果有りと知る。芽等を見て種子有りと知

るが如し。世界の法、諸の物を生ずるを見るに、先に細にして後に麁なるが故に。知る

べし、二微塵を初果と爲し、一微塵を以て因とす。是故に微塵有り、圓にして常なり、無

因なるを以ての故に。

内の曰はく、

二の微塵は一切身合に非ず。果は圓ならざるが故に路修妬

諸微塵の果生ずる時、一切身の合に非ず。何を以ての故に。二の微塵等の果は眼見に圓

ならざるが故に。若し微塵の身の一切にて合せば、二微塵等の果も亦應に圓なるべし。

復次に、

【外の曰はく遍にして等】四に微塵の常を破す。

若し身の一切の合ならば、二も亦同じく壞す修妬  
若し微塵重なりて合せば則ち果は高し。若し多く合せば則ち果は大なり。一分を以て合  
するが故に微塵には分有り、分有るが故に無常なり。

復次に、

微塵は無常なり。虚空を以て別つが故に修妬

若し微塵有らば應當に虚空の與に別たるべし。是故に微塵には分有り、分有るが故に無

常なり。

復次に、

色味等を以て別つが故に修妬

若し微塵是れ右ならば、應に色味等の分有るべし。是故に微塵には分有り、分有るが故

に無常なり。

復次に、

有形の法は相有るが故に修妬

若し微塵にして有形ならば、應に長、短、方、圓等有るべし。是故に微塵には分有るが

故に無常なり。無常なるが故に微塵無し。

外の曰はく、

涅槃法有り、常なり。煩惱無きと涅槃とは不異なるが故に修妬

【外の曰はく涅槃法有り等】五に涅槃常を破す。初に涅槃常を破す。

愛等の諸煩惱永く盡く、是を涅槃と名く。煩惱有らば則ち生死有り、煩惱無きが故に、永く復生死せず。是故に涅槃を常と爲す。

内の曰はく、

然らず。涅槃は作の法なるが故に修妬

道を修するに因るが故に、諸の煩惱無し。若し煩惱無き是れ則ち涅槃ならば、涅槃は則ち是れ作の法なり。作の法なるが故に無常なり。復次に、若し煩惱無くば是を無所有と名く。若し涅槃と無煩惱と不異ならば則ち涅槃無し。

外の曰はく、

作因なるが故に修妬

涅槃は無煩惱の作因爲り。』

内の曰はく、

然らず、能破は破に非ず修妬

若し涅槃能く解脱を爲さば、則ち解脱に非ず。復次に、未だ煩惱を盡さざる時は應に涅槃無かるべし。所以は何ん、果無きが故に因無し。

外の曰はく、

無煩惱は果なり修妬

此涅槃は是れ無煩惱に非ず。亦無煩惱の因も是れ無煩惱の果に非ず。是故に涅槃無きに



非ず。

内の曰はく、

縛と可縛と方便、此と異らば用無し修妬

縛は煩惱及び業に名け、可縛は衆生に名け、方便は八聖道に名く。道を以て縛を説くが

故に、衆生は解脫を得。若し涅槃有りて是三法に異らば則ち所用無し。復次に、煩惱無き

是を無所有と名く、無所有は應に因と爲るべからず。

外の曰はく、

涅槃有り、是れ無の若し修妬

若し縛と可縛と方便との三事無き處、是を涅槃と名く。

内の曰はく、

畏處に云何が染すべけん修妬

無常の過患を以ての故に、智者は有爲法に於て棄捐して欲を離る。若し涅槃は無にして

諸情及び所欲の事有らば、則ち涅槃は有爲法に於て甚大の畏處なり。汝何が故に心染する

や。涅槃は一切の苦を離れ、一切の憶想を滅し、非有非無、非物非非物に名く。譬へば燈

の滅するが如く、論説すべからず。

外の曰はく、

誰か涅槃を得ん修妬

【外の曰はく誰か  
等】次に能得の人  
を破す。

是涅槃何人可得ん。

内の曰はく、

涅槃を得るもの無し修妬

我先に燈滅して、東に去るとも、南西北方四維上下に去るとも言ふべからざるが如く、涅槃も亦是の如し、一切の語滅し、論説すべき無しと説けり。是れ無所有、誰か當に得べき者ぞ、設ひ涅槃有るとも、亦得る者無し。若し神にして涅槃を得とするも、神は是れ常是れ遍なるが故に應に涅槃を得べからず。五陰も亦涅槃を得ず。何を以ての故に。五陰は無常の故に、五陰は生滅するが故に。是の如く涅槃は當に誰にか屬すべき。若し涅槃を得と言はば、是れ世界中の説なり。

破空品第十

外の曰はく、

應に諸法有るべし。破有るが故に。若し破無くば餘法有るが故に修妬

汝一切の法相を破す。是破若し有らば應に一切法は空なりと言ふべからず、破有るを以ての故に。是破有るが故に一切法を破すと名けず。若し破無くば一切法は有なり。

【破空品】 上來各品に諸法を破して盡して空に歸したるも更に其空も亦空なることを今明す【一】 先ず外道斷滅の空を破す。第一に能破ありと執するを破する中、執一に外人が論主の空を用て有を破せりと謂へる謬を破す。

破は可破の如し路多妬

汝は破に著するが故に、有無の法を以て是破を破せんと欲す。汝知らずや、破成するが故に一切の法は空にして所有無しと。是破若し有らば已に可破の中に墮して空にして無所有なり。是破若し無ならば、汝何の破する所ぞ。第二の頭無しと説くが如き、破を以ての故に便ち有るにはあらず。人の無と言ふが如き、無と言ふを以ての故に有るにはあらず。破と可破とも亦是の如し。

【外の曰はく應に諸法等】二に論主

有を以て有を破せりと謂へる謬見を破す。

外の曰はく、

應に諸法有るべし。此れ彼を執するが故に路修妬

汝異法を執するが故に一法の過を説き、一法を執するが故に異法の過を説く。是二執は成するが故に一切の法は有なり。

内の曰はく、

一は所執に非ず、異も亦爾り路修妬

一異の不可得なること、先に已に破せり。先に已に破するが故に所執無し。復次に、若し人有りて汝に所執無くして、我一異の法を執すと言ひ、若し是問有らば、應に是の如く破すべし。

外の曰はく、

他の法を破するが故に、汝は是れ破法の人なり路修妬

汝は他の法を破するを好み、強ひて過を生じて、自ら所執無しと爲す。是故に汝は是れ破人なり。

内の曰はく、

汝是れ破人なり路修妬

空と説く人には所執無し。所執無きが故に破人に非ず。汝は自の法を執して他の執を破するが故に、汝是れ破人なり。

外の曰はく、

他の法を破するが故に自の法は成ず路修妬

汝他の法を破する時、自の法即ち成ず。何を以ての故に、他の法若し負くるならば自の法は勝つが故に。是を以て我は破人に非ず。

内の曰はく、

然らず。成と破と一ならざるが故に路修妬

成は均徳を稱歎するに名け、破は其過罪を出すに名く。歎徳と出罪とは名けて一と爲さず。

復次に、

成は名けて畏有りとす路修妬

畏は無力に名く。若し人自ら法に於て畏るるが故に成ずる能はざるもの、他の法に於て

【外の曰はく他の法を等】上に能破ありと謂へるを破し下第二に論主を破法の人と目するを破す。

は畏れざるが故に好んで破す。是故に成と破とは一ならず。若し他の法を破せば、是れ即ち自ら法を成ずとは、汝何が故に先に言ふや。空を説く人は但他の法を破するのみにして自ら所執無し。

外の曰はく、

他の執の過を説けば、自の執成ず路修妬

汝何を以てか自ら執法して法を成ぜずして、但他の法を破するのみなるや。他の法を破するが故に即ち是れ自ら法を成ず。

内の曰はく、

他の法を破して自の法成ずるが故に、一切は成ぜず路修妬

他の法を破するが故に、自の法成ぜば、自の法成ずるが故に一切は成ぜず。一切は成ぜざるが故に我所成無し。

外の曰はく、

然らず。世間と相違するか故に路修妬

若し諸法は空にして無相ならば、世間の人は盡く信受せず。

内の曰はく、

是法は世間信ず路修妬

是因縁の法は世間は信受す。所以は何ん。因縁生の法は是れ即ち無相なり。汝乳の中に

醜、醜等有り、童女已に諸子を妬み、食の中に已に糞有り、又、梁、椽等を除いて別に更に屋有り、縷を除いて別に布有りと謂ひ、或は因中に果有ると言ひ、或は因中に果無しと言ひ、或は因縁を離れて諸法生ずと言ふも、其實は空にして應に世事を説くと言ふべからず。是人の所執、誰か當に信受すべき。我法は爾らず、世人と同じきが故に、一切は信受す。

外の曰はく、

汝所執無くも、是法成ず修妬

汝無執と言ふは是れ則ち執なり。又我法は世人と同じと言ふは是れ則ち自ら執するなり。

内の曰はく、

無執を執と名けず、無の如し修妬

我先に因縁生の諸法は、是れ即ち無相なりと説けり。是故に我所執無し。所執無ければ、名けて執と爲さず。譬へば無と言ふが如し。是れ實に無なり、無を言ふを以ての故に、便ち無有るにはあらず。無執も亦是の如し。

外の曰はく、

汝は無相の法を説くが故に、是れ滅法の人なり修妬

若し諸法は空にして無相ならば、此執も亦無し。是れ則ち一切法無し。一切法無きが故

に是を滅法の人と名く。

内の曰はく、

法を破滅するの人、是を滅法の人と名く修妬路

我自ら法無ければ則ち所破無し。汝は我を滅法を謂ひて、而して破せんと欲せば、是れ則ち滅法の人なり。

外の曰はく、

應に法有るべし。相待有るが故に修妬路

若し長有らば必ず短有り。高有らば必ず下有り、空有らば必ず實有り。

内の曰はく、

何ぞ相待有らん、一破せらるるが故に修妬路

若し一無くんば、則ち相待無し。若し少しにても不空有らば、應に相待有るべし。若し不空無くんば則ち空無し。云何が相待せん。

外の曰はく、

汝が無の成は是れ成なり修妬路

室空にして馬無しと言はば、則ち馬無きこと有るが如く、是の如く汝は、諸法は空にして無相なりと言ふと雖も、而も能く種種の心を生ずるが故に、應に無有るべし。是れ則ち無の成は是れ成するなり。

【外】の曰はく應に  
【法等】第三に外人  
が論主に所有法有  
りと謂へるを破す

内の曰はく、

然らず。有無と一切無なるが故に路修妬

我實相中の種種の法門は有爲皆空なりと説く。何を以ての故に。若し有無ければ亦無も

無し。是故に有と無と一切無なり。

外の曰はく、

破は然らず。自ら空なるが故に路修妬

諸法は自性空にして作有る無くんば、作無きを以ての故に、應に破有るべからず。愚癡

の人の虚空を破せんと欲して、徒らに自ら疲労するが如し。

内の曰はく、

『自性空なりと雖も、相を取るが故に縛あり路修妬

一切法は自性空なりと雖も、但邪想分別の爲の故に縛あり、是顛倒を破せんが爲の故に、

破を言ふは、實には所破無し。譬へば愚人の熱時の焰を見て、妄に水想を生じて之を追う

て疲労するに、智者告げて、此れ水に非ざるなりと言ふは、彼想を斷せんが爲にして、水

を破せんが爲ならざるが如く、是の如く、諸法の性は空なるに、衆生は相を取るが故に著

すれば、是顛倒を破せんが爲の故に破を言ふも、實には所破無し。

外の曰はく、

無説の法は大經に無きが故に路修妬



汝有を破し、無を破し、有無を破して、今非有非無に墮す。是非有非無は不可説なり。何を以ての故に。有無の相不可得なるが故に、是を無説の法と名く。は無説の法は衛世師經にも、僧伽經にも、尼乾法等の大經中にも皆無きが故に信すべからず。

内の曰はく、  
第四有り 修妬

汝が大經中にも亦無説の法有り、衛世師經にては、聲を大と名けず、小と名けず、僧伽經にては混團は瓶に非ず、非瓶に非ず、尼乾法にては光は明に非ず、闇に非ざるが如く、是の如く諸經に第四の無説の法有り、汝何ぞ無と言ふや。

【二】大段第二に眞俗二諦の中道を明し結會旨歸す。

外の曰はく、

若し空ならば應に説有るべからず 修妬  
若し都て空にして無説の法を以て是と爲さば、今何を以て善惡の法を説いて教化するや。

内の曰はく、  
俗に隨ふが故に過無し 修妬

諸佛の説法は、常に俗諦と第一義諦とに依る。是二は皆實にして、妄語に非ざるなり。佛は諸法の無相を知ると雖も、然れども阿難に告げて、舍衛城に入りて乞食せよと。若し土木等を除いては城は得べからざるも、而も俗に隨うて語るが故に、妄語に墮せざるが如く、我も亦佛に隨つて學するが故に過無し。

外の曰はく、

俗諦は無にして不實なるが故に修妬路

俗諦若し實ならば則ち第一義諦に入る。若し不實ならば何を以てか諦と言はん。

内の曰はく、

然らず。相待の故に。大小の如し修妬路

俗諦は世人に於ては實爲るも、聖人に於ては不實爲り。譬へば一禁の棗に於ては大爲る

も、瓜に於ては小爲り、此二は皆實にして、若し棗に於て小と言ひ、瓜に於て大と言はば、

是れ則ち妄語なるが如く、是の如く俗に随つて語るが故に過無し。

外の曰はく、

『是過を知るは何等の利を得るや修妬路

切に捨罪福乃至破空の如く、是の如く諸法皆過有るを見れば、何等の利を得るや。

内の曰はく、

是の如く我を捨つるを解脱を得と名く修妬路

是の如く三種に諸法を破す。初は捨罪福、中は破神、後は破一切法、是を無我無我所と

名く、又諸法に於て不受不著にして、有と聞いて喜ばず、無と聞いて憂へず。是を解脱と

名く、

外の曰はく、『何を以てか解脱を得と名くと言うて、實には解脱を得ざるや。』

【三】 本論第三分  
邪を正に入らしめ  
づ得益を明す。先

【外の曰はく何を  
以てか等】次に益  
相を辨ず。

内の曰はく、  
畢竟ひつじやうしやうじやう清淨せいじやうなるが故ゆゑに修妬しゆだ  
神しんを破はするが故ゆゑに、人ひとの涅槃ねはんを破はする無なし。  
故ゆゑに解脫げだつ無なし。云何いかんが人ひとの解脫げだつを得うと言いは  
ん。俗諦ぞくたいに於おての故ゆゑに、説といて解脫げだつと名なく。

百論ひやくろん卷下ま

百

論

一〇四

十二門論

第	論
八	律
卷	部



十二門論品目

觀因緣門第一

萬法の因る所各性有るに似たり。推して之を會するに實に自ら性無し。通達無滯なるが故に之を門と謂ふ。

觀有果無果門第二

重ねて無性の法を推す。先有にして而も生ずと爲んや。先無にして而も生ずと爲んや。有無に生無し。之を以て門と爲す。

觀緣門第三

上は因を推し、此は緣を推す。四緣は廣略に行果有る無し。故に以て門と爲す。

觀相門第四

上の三門は因緣無生を推し、此は三相を推す、三相既に無なり。之を以て門と爲す。

觀有相無相門第五

此は三相の實を推すに、有相にして而して相と爲んや、無相にして而して相と爲んや。有無に相無きが故に以て門と爲す。

觀一異門第六

即ち有相無相を推すに、一法に在りと爲んや、異法に在りと爲んや。一ならず異ならず。之を以て門と爲す。

觀有無門第七

上に三相の相に非ざるを推し、此は四相も亦非なるを明す。生住を有と爲んや、變異を無と爲んや。同處に有ならず、異處にも亦無なり。故に以て門と爲す。

觀性門第八

既に有無を知る。又其性を推すに、緣易無常、緣よりして有なり。則ち性に非ざるなり。故に以て門と爲す。

觀因果門第九

無性の法は既に因果無し、變異の處に推求するに則ち理を得る無し、故に以て門と爲す。觀作門第十

因無く果無くば、則ち無作と爲す。四處に既に無し。之を以て門と爲す。

觀三時門第十一

既に無作を推すには、必ず其因を盡すが故に、三時を尋ねるに無作なり。以て門と爲す。觀生門第十二

作は造有りと爲んや、生は起有りと爲んや。時の中に既に無し、誰をか生者と爲さん。即ち以て門と爲す。



十二門論序

十二門論とは蓋し是れ實相の折中、道場の要軌なり。十二は衆徒を摠ぶるの大數なり。門とは開通無滯の稱なり。之を論ずるは、以て其源を窮め其理を盡さんと欲するなり。若し一理の盡きざるときは、即ち衆徒紛然として惑越の乖有り。一源の窮めざるときは、則ち衆徒扶味して殊致の跡有り。殊致の衷ならざる、乖越の深きざるは、大士の要なり。是を以て、龍樹菩薩、出者の由路を聞き、十二門を作つて以て之を正す。之を正すに十二を以てするときは、則ち有無兼ね轉べ事として盡きざる無し、事を有無に盡すときは、則ち功を造化に忘じ、理を虛位に轉むるときは、則ち我を二塵に喪ふ。然れば則ち、我を喪ふは、筈を落すに在り。筈を忘ずるは寄を遺るに存す。筈我兼ね忘じて初めて以て實に盡かる可し。實に覺ければ則ち虛實兩ながら冥して得失際無し。冥して際無きときは、則ち能く造次を兩玄に忘れ、顛沛を一致に混ず。盡く轉を道場に歸し、畢に心を歸地に越かしむ。恢恢道たり。眞に謂ふ可し、虛實を無曲に達じ、有無を空門に盡し、清眞を玄津に清む、有無を域外に出すと。過なる萬、後の學者、凌駭説に堪に、幽途既に開け、眞に和鸞を北冥に獲ひ、白牛を以て南海に馳せ、大覺を寶璣に傾り、百化に即して以て安歸す。夫れ是の如くなる者、斯んぞ復歸樂の方に處にして、玄陸の未だ曠かならざるを知らんや。

叡鄙倍を淺識を以て猶敢て虚闕を明誠し、宗極を希懷し、日用の宜行らんことを庶ひ、  
幾計の能く殖せむことを冀ふ。況んや才の美なる者をや。景仰の至りに勝へず、敢て鈍  
辭短思を以て序して之を申ぶ。竝に目品の義、之を首に題す。豈能く益することを期せん  
や。庶くは此心を以て疾に進むの路を聞かんのみ。

十二門論

龍樹菩薩造  
姚秦三藏鳩摩羅什譯

觀因緣門第一

【觀因緣門】外道の諸法有性と執するを破し、諸法無性を説く。  
【二】大段第一に總じて造論の意を序す。

説いて曰はく、「今當に略して摩訶衍の義を解すべし。」問うて曰はく、「摩訶衍を解せば、何の義利か有る。」答へて曰はく、「摩訶衍は是れ十方三世諸佛の甚深の法藏にして、大功德の利根の者の爲に説く。末世の衆生は薄福鈍根にして、經文を尋ねと雖も通達する能はず。我此等を愍み開悟せしめんと欲し、又如來の無上大法を光闡せんと欲す。是故に略して摩訶衍の義を解す。」問うて曰はく、「摩訶衍は無量無邊にして稱數すべからず、直に是れ佛語すら尙盡すべからず、況んや復其義を解釋演說するをや。」答へて曰はく、「是義を以ての故に、我初に略解と言へり。」問うて曰はく、「何が故に名けて摩訶衍と爲す。」答へて曰はく、「摩訶衍とは、一乘よりも上爲るが故に大乘と名く。諸佛は、最大にして是乘に能く至るが故に名けて大とす。諸佛大人の是乘に乗ずるが故に名けて大と爲す。又能く衆生の大苦を滅除し、大利益事を興ふるが故に名けて大と爲す。又觀世音、得大勢、

文殊師利、彌勒菩薩等、是諸の居士の所乘なるが故に名けて大と爲す。又此乘を以て、能く一切諸法の邊底を盡すが故に名けて大と爲す。又般若經中に佛自ら説きたまふが如し、摩訶衍の義は無量無邊なり一と。是因縁を以ての故に名けて大と爲す。大分の深義は謂ゆる空なり。若し能く是義を通達すれば即ち大乘に通達し、六波羅蜜を具足して障礙する所無し。是故に、我今但空を解釋す。空を解釋するには、當に十二門を以て、空の義に入るべし。

初は是れ因縁門、謂ゆる、

衆緣所生の法、是れ即ち自性無し

若し自性無くんば、云何が是法有らん

【二】 大段第二に別して十二門を明して空義に入らしむ。一論の體なり先づ長行もて發起す。

【衆緣所生の等】 第二に正しく論ず

【衆緣等】 以下偈文の解釋、中に五一に總じて内外縁の果を列す。

【是の如く内外等】 二に略して内外二法を破す。

衆緣所生の法に二種有り。一には内、二には外なり。衆緣にも亦二種有り。一には内、二には外なり。外の因縁とは、泥團、轉輪、陶師等和合作するが故に瓶の生ずる有るが如く、又、縷、繩、機、杼、織師等和合作するが故に疊の生ずる有るが如く、又治地、築基、梁、椽、泥、草、人功等和合作するが故に舍の生ずる有るが如く、又乳、酪、器、鑽搖、人功等和合作するが故に酥の生ずる有るが如く、又種子、地、水、火、風、虚空、時節、人功等和合作するが故に芽の生ずる有るが如く、當に知るべし、下縁等の法も皆亦是の如し。内の因縁とは謂ゆる、無明、行、識、名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、老死にして、各先是因にして後に生ず、是の如く内外の諸法は、皆衆緣より生ず。衆緣より生ずるが故に、

【若し法に等】三  
に廣く外縁の生法  
を破す。

【内の因縁の等】  
四に廣く内法の無  
生を破す。

是れ無性に非ずや。若し法に自性無くんば他性も亦無く、自他も亦無し。何を以ての故に。他性に因るが故に自性無し。若し他性を以ての故に有りと言はば、則ち牛は馬性を以て有り、馬は牛性を以て有り、梨は奈の性を以て有り、奈は梨の性を以て有り。餘も皆應に爾るべし。而も實には然らず。若し他性を以ての故に有らず。但他に因るが故に有りといふも、是れ亦然らず。何を以ての故に。若し蒲を以ての故に席有らば、則ち蒲と席とは一體にして、名けて他と爲すべからず。若し蒲は席に於て他と爲すと謂はば、蒲を以ての故に席有りと言ふを得ず。又蒲も亦自性無し。何を以ての故に。蒲も亦衆縁より出づるが故に自性無し。自性無きが故に蒲の性を以ての故に席有りと言ふを得ず。是故に席は應に蒲を以て體と爲すべからず。餘の迦旃等の外の因縁の生法も、皆亦是の如く不可得なり。内縁の生法も皆亦是の如く不可得なり。七十論中に説くが如し。

緣法は實に生ずる無し、若し生有りと爲すと謂はば  
一心の中に在りと爲すや、多心の中に在りと爲すや

是十二因縁の法は實に自ら生ずる無し。若し生ずる有りと謂はば、一心の中に在りと爲すや、衆心の中に在りと爲すや。若し一心の中に在らば、因と果とは即ち一時にして共に生ず。又因と果と一時に在らば、是事然らず。何を以ての故に。凡そ物は因を先にし果を後にするが故に。若し又衆心の中に在らば、十二因縁の法は則ち各各別異にして先分は心と共に滅し已る、後分は誰をか因縁と爲さん。滅法は所有無し、何んが因と爲るを得ん。

【是故に業縁等】  
五に總結。

【是故に有爲等】  
第三に總結。

【觀有果無果門】  
因中有果といひ、因  
中無果といふ、二  
の所立を破す。  
【一】第一に長行  
にて發起す。

十二因縁の法、若し先に有らば、應に若は一心、若は多心なるべし。二つ俱に然らず。是故に業縁は皆空なり。縁空なるが故に縁より生ずる法も亦空なり。是故に當に知るべし、一切の有爲法は皆空なり。有爲法すら尚空なり、何に況んや我をや。五陰、十二入、十八界等の有爲法に因るが故に我有りと説く、可然に因るが故に然有りと説くが如し。若し、陰、入、界空ならば、更に法として説いて我と爲す可きもの有る無し。可然無くんば然を説くべからざるが如し。經に説くが如し、「佛諸の比丘に告げたまはく、我に因るが故に我所有り、若し我無きときは則ち我所無し」と、是の如く、有爲法は空なるが故に、當に知るべし、無爲涅槃の法も亦空なり。何を以ての故に。此五陰滅して更に餘の五陰を生ぜざる、是を涅槃と名く。五陰本來自ら空なり、何んが所滅の故に説いて涅槃と名けん。又我も亦空なり。誰か涅槃を得ん。復次に、無生の法を涅槃と名けば、若し生法成せば無生の法も亦應に成すべし、生法の成せざること、先に已に因縁を説きたり、後復當に説くべし。是故に、生法は成ぜず。生法に因るが故に無生と名く。若し生法成せずんば無生の法云何が成せん。是故に、有爲無爲及び我は皆空なり。

觀有果無果門第二

(一) 復次に、諸法は不生なり。何を以ての故に。

【先に有るも等】次に尙もて正しく破す。

【二】第三に長句釋の中先づ前三句中有果の不生なるを破す。中に七、一に俱生破。

【若し生じ已れば等】二に俱不生破【復次に等】三に以同暗異破。

【復次に若し未だ等】四に提異並同破。

【復次に有と無とは等】五に無異破

【復次に有已に等】六に無用破。

先に有るも生ぜず、先に無きも亦生ぜず。有無も亦不生、誰か當に生ずる者有るべき

(三)も 若し果にして因中に先有らば則ち應に生ずべからず。先に無くも亦應に生ずべからず。先に有無なるも亦應に生ずべからず。何を以ての故に。若し果にして因中に先に有りて而も生ぜば、是れ則ち無窮なり。果にして先に未だ生ぜずして而も生ぜば、今生じ已りて復應に更に生ずべし。何を以ての故に。因中に常に有るが故に。是有の邊從り復應に更に生ぜば、是れ則ち無窮なり。若し生じ已れば更に生ぜず、未だ生ぜずして而も生ずと謂はば、是中に生の理有る無し。是故に先に有りて而も生ずること、是事然らず。復次に若し因中に先に果有つて、而も未だ生ぜずして而も生じ、生じ已れば生ぜずと謂はば、是も亦二俱に有にして、而も一は生じ一は生ぜず。是處有る無し。復次に、若し未だ生ぜずして定んで有ならば、生じ已るも則ち應に無なるべし。何を以ての故に。生と未生とは共に相違するが故に。生と未生とは相違するが故に。是二の作相も亦相違す。復次に、有と無とは相違し、無と有とは相違す。若し生じ已つても有、未だ生ぜざる時も亦有ならば、則ち生と未生とは應に異有るべからず。何を以ての故に。若し生じ已つても亦有、未だ生ぜざるも亦有ならば、是の如き生と未生とは何の差別か有る。生と未生と差別無きこと、是事然らず。是故に有は生ぜず。復次に、有已に先に成ぜば、何んが更に生ずることを用ひん。作し已れば應に作すべからず、成じ已れば應に成すべからざるが如し。是故に、有法は應に生ずべからず。復次

【復次に若し有等】  
七に頌用破。

に、若し有ならば因中に未だ生ぜざる時も、果は應に見るべくして而も實には見る可からず。泥中の瓶、蒲中の席は應に見る可くして而も實には見る可からざるが如し。是故に有は生ぜず。問うて曰はく、「果先に有り」と雖も、未だ變ぜざるが故に見えざるなり。答へて曰はく、「若し瓶未だ生ぜざる時は、瓶の體未だ變ぜざるが故に見えずんば、何の相を以てか知らん。泥中に先に瓶有りと言はば、瓶相を以ての故に瓶有りと爲すや。若し泥中に瓶相無くんば、亦牛相も馬相も無からん。是れ豈無と名けざらんや。是故に汝因中に先に果有りて而も生ずと説くこと、是事然らず。」復次に、變法即ち是れ果ならば、即ち應に因中に先に有るべし。何を以ての故に。汝が法に、因中に先に果有るが故に。若し瓶等先に有らば、瓶も亦先に有つて、應當に見る可し。而も實には然らず。是故に汝未だ變ぜざるが故に見えずとは是事然らず。若し未だ變ぜざるを名けて果と爲さずと謂はば、則ち果は畢竟不可得なり。何を以ての故に。是瓶は先に無くして後にも亦應に無かるべし。故に瓶等の果は畢竟不可得なり。若し變じ已つて是を果なりと謂はば、則ち因中に先に無きなり。是の如くんば則ち不定なり。或は因中に先に果有り、或は先に果無し。問うて曰はく、「先に有るも、但見るを得可からざるのみ。凡そ自ら有り、有るも而も不可得なるは、物或は近くして而も知る可からざる有り、或は遠くして而も知る可からざる有り、或は根境するが故に知る可からず、或は心住せざるが故に知る可からず、障有るが故に知る可からず、同じきが故に知る可からず、勝るが故に知る可からず、微細なるが故に知る



可からざるが如し。近くして而も知る可からずとは、眼中の藥の如し。遠くして而も知る可からずとは、鳥の虚空を飛び高く翔り、遠く逝くが如し。根壞するが故に知る可からずとは、盲の色を見ず、蜂の聲を聞かず、鼻塞つて香を聞かず、口爽うて味を知らず、身頑にして觸を知らず、心狂して實を知らざるが如し。心住せざるが故に知る可からずとは、心色等に在るときは則ち聲を知らざるが如し。障有るが故に知る可からずとは、地の大水を障り壁の外物を障るが如し。同じきが故に知を可からずとは、黒上の黒點の如し。勝るが故に知る可からずとは、鐘鼓の音有らば拍拂の聲を聞かざるが如し。微細の故に知る可からずとは、微塵等の現はれざるが如し。是の如く諸法は有なりと雖も八の因縁を以ての故に知る可からず。汝因中の變法不可得にして、瓶等も不可得なりと説くは是事然らず。何を以ての故に。是事有りと雖も、八の因縁を以ての故に不可得なるなり。一答へて曰はく、「變法及び瓶等の果は、八の因縁の不可得とは同じからず。何を以ての故に。若し變法及び瓶等の果にして、極めて近くして不可得ならば、少しく遠ければ應に得可く、極めて遠くして不可得ならば、少しく近ければ應に得可く、若し根壞して不可得ならば、根の淨ならば應に得可く、若し心住せずして不可得ならば、心住せば應に得可く、若し障有りて不可得ならば、變法及び瓶法は、障無くば應に得可く、若し同じくして不可得ならば、異時ならば應に得可く、若し勝つて不可得ならば、勝止めば應に得可く、若し細微にして不可得ならば、而も瓶等の果は塵なれば應に得可く、若し瓶等なるが故に不可得ならば、

生じ已るも亦應に不可得なるべし。何を以ての故に。生じ已るも、未だ生ぜざるも細相一なるが故に。生じ已るも未だ生ぜざるも俱に定んで有なるが故に。』問うて曰はく、『未生の時は細にして、生じ已つて轉變なり。是故に生じ已らば得可く、未生は得可からず。』答へて曰はく、『若し爾らば因中に則ち果無からん。何を以ての故に。因中には蠶無きが故に。又因中に先に蠶無し。若し因中に先に蠶有らば、則ち細なるが故に不可得なりと言ふべからず。今の果は是れ蠶なるに、汝細なるが故に不可得といはば、是蠶を名けて果と爲さず。今の果は畢竟應に可得ならざるべし、而も果は實に可得なり。是故に細なるを以ての故に不可得なるにあらず。是の如く、法有り、因中に先に果有り、八の因縁を以ての故に不可得なり。先に因中に果有りとは是事然らず。』復次に、若し因中に先に果有りて生ぜば、是れ則ち因と因と相壊し、果と果と相壊す。何を以ての故に。蠶の繭に在るが如く、果の器に在るが如き、但是れ佳處のみにして名けて因と爲さず。何を以ての故に。繭と器とは蠶と果との因に非ざるが故に。若し因壊せば果も亦壊す。是故に繭等は蠶等の因に非ず、因無きが故に果も亦無し。何を以ての故に。因に因るが故に果の成する有り。因成せずんば果云何が成せん。復次に、若し作られずんば果と名けずば、繭等の因は蠶等の果を作る能はず。何を以ての故に。繭等の如きは蠶等の住するを以ての故に、能く蠶等の果を作るにあらず。是の如くんば則ち因無く果無し。若し因果俱に無くんば、則ち應に因中に若は先に果有り、若は先に果無しと求むべからず。復次に、若し因中に果有るも而も得可か

らざるも、應に相有つて現すべし。香を聞いて華有るを知り、聲を聞いて鳥有るを知り、笑を聞いて人有るを知り、烟を見て火有るを知り、鶴を見て池有るを知るが如し。是の如く、因中に若し先に果有らば應に相有つて現すべし。今果の體も亦不可得にして、相も亦不可得なり。是の如くんば當に知るべし、因中に先に果無し。復次に、若し因中に先に果有つて生ぜば、則ち應に縷に因つて鼻有り、蒲に因つて席有りと云ふ可からず。若し因作らずんば他も亦作らず。鼻の如きは縷の所作に非ず、蒲従り作る可きや。若し縷作らずんば、蒲も亦作らず。所従作無しと言ひ得可きや。若し所従作無くんば、則ち名けて果と爲さず。若し果無くんば因も亦無きこと先に説けるが如し。是故に因中先に果有る従り生ずること、是れ則ち然らず。復次に、若し果所従作無くんば、則ち是れ常と爲す。涅槃の性の如し。若し果是れ常ならば、諸の有爲法は則ち皆是れ常なり。何を以ての故に、一切の有爲法は皆是れ果なるが故に。若し一切法皆常ならば、則ち無常無し。若し無常無くんば亦常有る無し。何を以ての故に。常に因つて無常有り、無常に因つて常有り。是故に常と無常との二俱に無くんば、是事然らず。是故に因中に先に果有つて生ずと言ふを得ず。復次に、若し因中に先に果有つて生ぜば、則ち果は更に異果の爲に因と作る。鼻は普の與に因と爲り、席は障の與に因と爲り、車は載の與に因と與るが如し。而も實には異果の與に因と作らず。是故に因中に先に果有つて生ずと言ふを得ず。若し地に先に香有るも、水を以て灑がざれば香は則ち發せざるが如く、果も亦是の如く、若し未だ緣會せざれば、則

ち囚となる能はずと謂はば、是事然らず。何を以ての故に。汝の所説の如くんば、可了の時を果と名く。瓶等の物は果に非ず。何を以ての故に。可了は是れ作なるに、瓶等は先有つて作に非ず。是れ則ち作を以て果と爲す。是故に囚中に先に果有つて生ずること、是事然らず。復次に、了囚は但能く照發するのみ。物を生ずる能はず。暗中の瓶を照さんが爲の故に、燈を燃せば亦能く餘の臥具等の物を照すが如し。瓶を作らんが爲の故に衆縁を和合するも、餘の臥具等の物を生ずる能はず。是故に當に知るべし。先に囚中に果有りて生ずるには非ず。復次に、若し囚中に先に果有りて生ぜば、則ち應に今作と當作との差別有るべからず。而も汝は今作と當作とを受く。是故に先に囚中に果有つて生ずるには非ず。

【三】囚中無果の生を破す。

若し囚中に先に果無くして而も果生ずと謂はば、是れ亦然らず。何を以ての故に。若し無にして而も生ぜば應に第二頭第三手の生ずること有るべし。何を以ての故に。無にして而も生ずるが故に。問うて曰はく、『瓶等の物は因縁有り、第二頭第三手は因縁無し、云何が生ずるを得ん。是故に汝の説は然らず。』答へて曰はく、『第二頭第三手及び瓶等の果は囚中に俱に無し。泥團の中に瓶無く、石の中にも亦瓶無きが如し。何の故に泥團を名けて瓶の囚と爲し、石を名けて瓶の囚と爲さざる。何の故に乳を名けて酪の囚と爲し、縷を疊の囚と爲し、蒲を名けて囚を爲さざる。復次に、若し囚中に先に果無くして而も果生ぜば、則ち一一の物は應に一切の物を生ずべし。指端の應に車馬飲食等を生ずべきが如く、是の

如く縁に應に但麩のみを出すべからず、亦麩に車馬飲食等の物をも出すべし。何を以ての  
 故に。若し無にして而も能く生ぜば、何の故に縁は但麩のみを生じて、而も車馬飲食  
 等の物を生ぜざる。俱に無きを以ての故に、若し因中に先に果無くして而も果生ぜば、則ち  
 諸因は應に各各力有つて能く果を生ずべからず。油を漬ふる者は要す直より取つて沙を竿  
 らざるが如し。若し俱に無ならば、何が故に麻の中に求めて而も沙を竿らざるといはば、  
 麻の油を出すと見、沙より出るを見ず、是故に麻の中に求めて而も沙を竿らざるといはば、  
 是事然らず。何を以ての故に。若し生相成ぜば、應に兼時に麻の油を出すを見、沙の出  
 すを見ず、是故に麻の中に於て求めて沙を取らずと言ふべからず、而も一切の法の生相成  
 ぜざるが故に、餘事の麻の油を出すを見るが故に、麻の中に求めて沙に於て取らずと言ふ  
 を得ず。復次に、我今但一事のみを被せず、皆總じて一切の因果を被す。若し因中に先に  
 果有つて生ずるも、果無くして生ずるも、先に有果無果にして生ずるも、此三の生は皆成  
 ぜず。是故に汝餘事に麻の油を出すと見ると言はば、則ち同縁因に墮す。復次に、若し先  
 に因中に果無くして而も果生ぜば、諸因の相は則ち成ぜず。何を以ての故に。諸因若し無  
 くんば、汝何んが能く作し。何んが能く成ぜん。若し作無く成無くんば、云何が名けて因  
 と爲さん。是の如くんば、作者は所作有るを得ず、作者をして亦所作有るを得ざらしむ。  
 若し因中に先に果有りと謂はば、則ち應に作と作者と作法との別異有るべからず。何を以  
 ての故に。若し先に果有らば、何んが復作るを須ひん。是故に汝作と作者と作法とを説く

も諸因皆不可得なり。因中に先に果無きも是れ亦然らず。何を以ての故に。若し人作と作者との分別を受け因果有りとせば應に是難を作すべし。我は作と作者と及び因果との皆空を説く。若し汝作と作者と及び因果とを破せば則ち我法を成す。名けて難と爲さず。是故に、因中に先に果無くして而も果生ずること、是事然らず。復次に、若し人因中に先に果有るを受けば、應に是難を作すべし。我は因中に先に果有りと説かざるが故に、此難を受けず。亦因中に先に果無きをも受けず。

【若し因中に等】  
次に亦有亦無の生を破す。

【是故に先に等】  
次に第四句を釋す

【有爲空なるが故等】  
總結。

【觀緣門】  
因緣、殊に緣中に果を求むるも生無きを明す。

若し因中に先に亦有亦無果にして而も果生ずと謂ふも、是れ亦然らず。何を以ての故に。有と無との性は相違するが故に。性相違せば云何が一處ならん。明闇、苦樂、去住、縛解の同處なるを得ざるが如し。是故に因中に先に果有ると先に果無きと、二俱に生ぜず。復次に、因中に先に有果先に無果も、上の有無の中に已に破しぬ。是故に先に因中に果有るも亦生ぜず、果無きも亦生ぜず。有無も亦生ぜず。理此に極まる。一切處に推求するに不可得なり。是故に果は畢竟生ぜず。果畢、竟生ぜざるが故に、則ち一切の有爲法は皆空なり。何を以ての故に。一切の有爲法は皆是れ因、是れ果なればなり。有爲空なるが故に無爲も亦空なり。有爲無爲すら尙空なり。何に況んや我をや。

觀緣門 第三

【一】 先づ發起。

【廣略衆緣の等】 次に正し、明す。

【二】 次に縁中無果の長行釋、先づ略釋。

【問うて曰はく等】 次に廣釋。

【復次に等】 上來縁中無果を説き竟り、次に非縁を擧げて之を決す。

復次に、諸法の縁は成ぜず。何を以ての故に。

廣略衆緣の法、是中に果有る無し

縁中に若し果無くんば、云何が縁従り生ぜん

瓶等の果は一一の縁の中に無し。和合の中にも亦無し。若し二門の中に無くんば何んが縁より生ずと言はん。問うて曰はく、云何が名けて諸法と爲す。答へて曰はく、

四縁諸法を生ず、更に第五縁無し

因縁と次第縁と、縁縁と増上縁となり

四縁とは因縁と次第縁と縁縁と増上縁となり。因縁とは、所從に隨つて法を生ずるなり。

若し已に從つて生じ、今從つて生じ、當に從つて生ずべき、是法を因縁と名く。次第縁とは、前法已に滅して次第に生ず、是を次第縁と名く。縁縁とは、所念の法に隨つて、若し

身業を起し、若し口業を起し、若し心心數法を起す。是を縁縁と名く。増上縁とは、此法

有るを以ての故に彼法生ずるを得、此法は彼法に於て増上縁と爲る。是の如き四縁は、皆

因中に果無し。若し因中に果有らば、應に諸縁を離れて而も果有るべし。而も實には因を

離れて果無し。若し縁の中に果有らば、應に因を離れて而も果有るべし。而も實には因を

離れて果無し。若し縁及び因に於て果有らば應に可得なるべし。理を以て推求するに不可

得なり。是故に二法に俱に無し。是の如く一一の中に無ければ和合の中にも亦無し。云何

が果は縁従り生ずと言ふを得ん。復次に、

若し果は縁中に無くして、而も縁中より出では

是果何んが、非縁の中より而も出でざる

若し果は縁中に無くして、而も縁従り生ずと謂はば、何が故に非縁従りも生ぜざる。二

俱に無きが故に、是故に因縁の能く果を生ずるもの有る無し。果生ぜざるが故に縁も亦生

ぜず。何を以ての故に。縁を先にし果を後にするが故に。縁と果と無なるが故に一切の有

爲法は空なり。有爲法空なるが故に無爲法も亦空なり。有爲無爲空なるが故に云何が我有

らん。

【縁と果と無等】  
第三に結。

【觀相門】 生住滅  
の三相畢竟空を明  
す。

【一】 先づ發起。

【有爲及び無爲等】  
正しく破する中、  
第一に總じて相を  
破す。中、初偈は  
總じて爲無爲の二  
法の體俱に無相な  
るを明す。

觀相門第四

復次に、一切法は空なり。何を以ての故に。

有爲及び無爲の二法は、俱に無相なり

有相無きを以ての故に、二法は則ち皆空なり

有爲法は相を以て成ぜず。問うて曰はく、「何等か是れ有爲の相なる。」答へて曰はく、

「萬物各 有爲の相有り。牛は角、峯、垂頰、尾端に毛有り、是を牛の相と爲すが如く、

瓶は底平かに、腹大に、頸細く、唇、鬚なるを以て是を瓶の相と爲すが如く、車は輪、軸、

輻、輓を以て是を車の相と爲すが如く、人は頭、目、腹、背、肩、臂、手、足を以て是を



【若し生是れ等】  
此偈には別して有爲法の無相なるを明す。

【二】 第二に別して三相を破す。中に二、一に展轉家の義を破す。

人の相と爲すが如く、是の如く、生、住、滅にして、若し是れ有爲法の相ならば、是を有爲と爲すや、是を無爲と爲すや。問うて曰はく、「若し是れ有爲ならば何の過有りや。」答へて曰はく、

若し生是れ有爲ならば、復應に三相有るべし

若し生是れ無爲ならば、何んが有爲相と名けん

若し生是れ有爲ならば、即ち應に三相有るべし。是三相は復應に三相を有すべし。是の如く展轉して則ち無窮と爲る。住滅も亦然り。若し生是れ無爲ならば、云何が無爲にして有爲の與に相と作らん。生住滅を離れて、誰か能く是生を知らん。復次に、生住滅を分別するが故に生有り、無爲は分別すべからず。是故に生無し。住滅も亦爾り。生住滅空なるが故に有爲法は空なり。有爲法空なるが故に無爲法も亦空なり。有爲に因るが故に無爲有り。有爲と無爲との法空なるが故に一切法皆空なり。問うて曰はく、「汝三相は復三相を有す。是故に無窮なり。生は應に是れ有爲なるべからずと説かば、今當に説くべし。

生生の生ずる所、彼本生を生じ

本生の生ずる所、還生生を生ず

法生する時、自體を通じて七法共に生ず。一には法、二には生、三には住、四には滅、

五には生生、六には住住、七には滅滅なり。是七法の中、本生は自體を除いて、能く六法

をしやう生ず。生しやうは能く本ほん生しやうを生しやうじ、本ほん生しやうは過また生しやう生しやうを生しやうず。是この故ゆゑに三さん相じやう是じつれ有う爲ゐなりと雖いも而し

も無な窮きゆうに非あざるなり、住ちゆう滅めつも亦また是このの如ごとし。』答こたへて曰いはく、

若もし是この生しやうは、還ま能よく本ほん生しやうを生しやうずと謂いはば

生しやう生しやうは本ほん生しやう従しゆりするに、何いかんが能よく本ほん生しやうを生しやうぜん

若もし生しやう生しやう能よく本ほん生しやうを生しやうずと謂いはば、本ほん生しやうは生しやう生しやうを生しやうぜず。生しやう生しやう何いかんが能よく本ほん生しやうを生しやうぜん。

若もし是この本ほん生しやう、能よく彼かの生しやう生しやうを生しやうずと謂いはば

本ほん生しやうは彼かれより生しやうず、何いかんが能よく生しやう生しやうを生しやうぜん

若もし本ほん生しやう能よく生しやう生しやうを生しやうずと謂いはば、生しやう生しやうは生しやうじ已まつて還また本ほん生しやうを生しやうずること、是この事じ然しからず。

何なにを以もつての故ゆゑに、生しやう生しやうの法ぽうは應まに本ほん生しやうを生しやうずべし、是この故ゆゑに生しやう生しやうと名なく。而しかも本ほん生しやうは實じつには

自みづから未いまだ生しやうぜず、云い何いかんが能よく生しやう生しやうを生しやうぜん。若もし生しやう生しやうの生しやうずる時とき能よく本ほん生しやうを生しやうずと謂いふも、

是この事じ亦また然しからず。何なにを以もつての故ゆゑに。

是この生しやう生しやうの生しやうずる時とき、或あるは能よく本ほん生しやうを生しやうぜば

生しやう生しやうすら尙なほ未いまだ生しやうぜざるに、何いかんが能よく本ほん生しやうを生しやうぜん

是この生しやう生しやうの生しやうずる時とき、或あるは能よく本ほん生しやうを生しやうぜん。而しかも是この生しやう生しやうの自みづから未いまだ生しやうぜざれば、本ほん生しやうを

生しやうずる能よはず。若もし是この生しやう生しやうの生しやうずる時とき、能よく自みづから生しやうじ亦また彼かれをも生しやうずること、燈とうの燃もゆる時とき

能よく自みづから照ありし、亦また彼かれをも照ありしが如ごとしと謂いはば、是この事じ然しからず。何なにを以もつての故ゆゑに。

【若もし是この生しやう生しやう等とう】  
二に不ふ展てん轉てん相じやう生しやうを  
破やぶす。

燈中に自ら闇無く、住處にも亦闇無し

闇を破するを乃ち照と名く、燈は何を所照と爲さん

燈の體には自ら闇無し、明の所住の處にも亦闇無し。若し燈中に闇無く住處にも亦闇無

くんば、云何が燈自ら照し亦能く彼を照すし口はん。闇を破するが故に名けて照と爲す。

燈は自ら闇を破せず、亦彼闇をも破せず。是故に燈は自ら照さず、亦彼をも照さず。是故

に汝先に燈自ら照し亦彼をも照す。生も亦是の如し。自ら生じ亦彼をも生ずと説くは、是

事然らず。問うて曰はく、「若し燈燃ゆる時能く闇を破す。是故に燈中に闇無く、住處に

も亦闇無し。」答へて曰はく、

云何が燈燃ゆる時、而も能く闇を破せん

此燈初めて燃ゆる時、闇に及ぶ能はず

若し燈燃ゆる時闇に到る能はず、若し闇に到らずば應に闇を破すと言ふべからず。復次に

に、

燈若し闇に及ばずして、而も能く闇を破せば

燈は此闇に在つて、則ち一切の闇を破せん

若し燈は闇に到らずと雖も、而も力能く闇を破すといはば、此處に燈を燃せば應に一切

世間の闇を破すべし。俱に及ばざるが故に。而も實には此闇に燈を燃すも、一切世間の闇

を破する能はず。是故に法燈、闇に及ばずと雖も、而も力能く闇を破すと説くは、是事然

らず。復次に、

若し燈能く自ら照し、亦能く彼をも照さば

闇も亦應に是の如く、自ら蔽ひ亦彼をも蔽べし

若し燈は能く自ら照し亦彼をも照すと謂はば、闇は燈と相違するも亦應に自ら蔽ひ亦彼

をも蔽ふべし。若し闇は燈と相違して自ら蔽ふ能はず、亦彼をも蔽はず、而も燈は能く自

ら照し、亦彼をも照すと謂はば、是事然らず。是故に汝の喩は非なり。生の能く自ら生じ

亦彼をも生ずる如きは、今當に更に説くべし。

此生若し未だ生ぜずんば、云何が能く自ら生ぜん

若し生じ已つて自ら生ぜば、已に生ぜしもの何んが生ずるを用ひん

此生にして未だ生ぜざる時、應に若し生じ已つて生じ、若し未だ生ぜずして而も生ずべ

し。若し未だ生ぜずして而も生ずるならば、未生は未有に名く、云何が能く自ら生ぜん。

若し生じ已つて而も生ずると謂はば、生じ已れば、即ち是れ生なり、何んが更に生ずるを須

ひん。生じ已れば更に生ずる無く、作し已れば更に作す無し。是故に生は自ら生ぜず。若

し生にして自ら生ぜずんば、云何が彼を生ぜん。汝自ら生じ亦彼をも生ずと説くは、是

事然らず。住滅も亦是の如し。是故に生住滅の是れ有爲相なること、是事然らず。生住滅

の有爲相成ぜざるが故に有爲法は空なり。

有爲法空なるが故に無爲法も亦空なり。何を以ての故に。有爲を滅するを無爲涅槃と名

【三】別して無爲法の無相なることを明す。

【是故に有爲法は等】第三に論ず

【觀有相無相門】

先門には爲無爲、二相の無相を明し、今門には一切法の體相の有無を破す【一】先づ發起。

く。是故に涅槃も亦空なり。復次に、生無く住無く滅無きを無爲の相と名く。生住滅無くんば則ち法無し。法無くんば、應に相を作すべからず。若し無相は是れ涅槃の相なりと謂はば、是事然らず。若の無相は是れ涅槃の相ならば、何の相を以ては無相を知るや。若し有相を以ては無相を知らば、云何が無相と名けん。若し無相を以ては無相を知らば、無相は是れ無なり、無ならば則ち知るべからず。若し衆衣皆相有つて唯一衣相無くんば、正に無相を以て相と爲すが故に、人は無相の衣を取ると言ふが如く、是の如く無相の衣の取る可きを知る可く、是の如く生住滅是れ有爲にして、生住滅無き處、當に知るべし、是れ無爲なり、是故に無相は是れ涅槃なりと謂はば、是事然らず。何を以ての故に、生住滅の種種の因縁皆空にして、有爲相有るを得ず。云何が此に因つて無爲を知らん。汝何の有爲の決定の相を得て無相の處は是れ無爲なるを知らんや。是故に汝衆相衣の中の無相の衣を涅槃の相に喩ふと説くは、是事然らず。又衣の喩は後の第五門の中に廣く説く。是故に有爲法は皆空なり。有爲法空なるが故に無爲法も亦空なり。有爲と無爲と空なるが故に我も亦空なり。三事空なるが故に一切法は皆空なり。

觀有相無相門第五

復次に一切法空なり。何を以ての故に。

【有相の相等】正しく門の體を明す

【二】右偈の長行釋。先づ偈上半の釋。

有相の相は相せず、無相も亦相せず  
 彼相と不相とを離れて、相何の所にか相爲らん

有相事の中に相は相せず。何を以ての故に。若し法先に有相ならば、更に何んが相を用て爲ん。復次に、若し有相事の中の相にして相するを得ば、則ち二相の過有り。一には先の有相、二には相來りし相なり。是故に有相事の中の相は相する所無し。無相の中の相も亦相する所無し。何の法をか無相にして而も有相を以て相すと名けん。象は象牙有り、一鼻を垂れ頭に三蹄有り、耳は箕の如く、背彎弓の如く、腹大にして而して垂れ、尾端に毛有り、四脚圓なり、是を象の相と爲す。若し是相を離るれば、更に象有つて相を以て相す可き無きが如く、馬は耳を豎て、鬣を垂れ、四蹄同蹄にして、尾に通じて毛有り、若し是相を離るれば、更に馬有りて相を以て相す可き無きが如く、是の如く有相の中の相は相する所無く、無相の中の相も亦相する所無し。有相無相を離れて更に第三の法の相を以て相す可き無し。

【是の如く有相等】偈の下半を釋す。

【三】 總結。

是故に相は相する所無し、相に所相無きが故に可相の法も亦成ぜず。何を以ての故に。相を以ての故に是事を可相と名くを知る。是因縁を以ての故に相と可相と俱に空なり。相と可相と空なるが故に萬物も亦空なり。何を以ての故に。相と可相とを離れて更に物有る無し。物無きが故に非物も亦無し。物滅するを以ての故に無物と名く。若し物無くんば何の滅する所なる。故に名けて無物と爲す。物と無物と空なるが故に一切の有爲法は皆空な

り。有爲法空なるが故に無爲法も亦空なり。有爲と無爲と空なるが故に我も亦空なり。

### 觀一異門第六

【觀一異門】ここには相と可相との一異を破して諸法に例す。

【一】先づ發起。

【相と及び等】正しく門體を明すの傷

【二】次に長行釋第一に偈本を釋す。

【問って曰はく等】相と可相とは常に成すと救す。

(一) 復次に、一切法空なり。何を以ての故に。

相と及び可相とは、一異相不可得なり

若し一異有る無くんば、是二云何が成ぜん

(二) 是相と可相と、若し一ならも不可得、異ならも亦不可得なり。若し一異にして不可得たらば、是二則ち成ぜず。是故に相と可相と皆空なり。相と可相と空なるが故に、一切法皆空なり。問うて曰はく、「相と可相と常に成ず。何が故に成せざる。汝相と可相とは一異不可得と説かば、今當に説くべし。凡そ物或は相は即ち是れ可相なり。或は相は可相と異り、或は少分は是れ相にして餘は是れ可相なり。識の相は是れ識にして、所用の識を離れて更に識無きが如く、受の相は無れ受にして、所用の受を離れて更に受無きが如く、是の如き等は相は即ち是れ可相なり。佛の受を滅するを涅槃と名くと説きたまふが如き、愛は是れ有爲有漏の法にして、滅は是れ無爲無漏の法なり。信には三有有り。善人に觀近せんことを樂ひ、法を聽かんことを樂みし、布施を行せんことを樂ぶが如し。此三事は身口の業なるが故に色陰の所攝なり。信は是れ心數法なるが故に行陰の所攝なるが如き、是を相と

【答へて曰はく等】  
次に相と可相との  
一異相不可得を破す。

可相と異ると名く。正見は是れ道の相にして、道に於て是れ少分なり。又生、住、滅は是れ有爲の相にして、有爲の法に於て是れ少分なるが如き、是の如きは可相中に於て少分を相と名くるなり。是故に或は相は即ち可相なり、或は相は可相と異り、或は可相の少分を相と爲す。汝一異にして成ぜざるが故に相と可相と成せずと言ふは、是事然らず。一答へて曰はく、汝或は相は是れ可相、識等の如しと説くは、是事然らず。何を以ての故に。相を以ての故に知る可きを可相と名け、所用の者を相と名く。凡そ物は自ら知る能はず。指の自ら觸るる能はざるが如く、眼の自ら見る能はざるが如し。是故に汝識は即ち是れ相にして可相なりと説くは、是事然らず。復次に、若し相即ち是れ可相ならば、應に是相と是可相とを分別すべからず。若し是相と是可相とを分別せば、應に相即ち是れ可相なりと言ふべからず。復次に、若し相即ち是れ可相ならば、因に果とは則ち一ならん。何を以ての故に。相は是れ因にして、可相は是れ果なり。是二則ち一ならん。而も實には一ならず。是故に相即ち是れ可相なりとは、是事然らず。汝相は可相と異なり、説くも、是れ亦然らず。汝愛を滅するを是れ涅槃の相なりと説き、愛は是れ涅槃の相なりと説かず。若し愛は是れ涅槃の相なりと説かば、應に相と可相と異なりと言ふべし。若し愛を滅するを是れ涅槃の相なりと言はば、則ち相と可相と異なりと言ふを得ず。又汝信には三相有りて、俱に信に異ならずと説く。信若し信無くんば則ち此三事無し。是故に相と可相と異なりと言ふを得ず。又相と可相と異ならば、相は更に復應に相有るべし、則ち無窮と爲る。是事然ら



【三】 總結。

【觀有無門】 ここには四相に約して有無を破す。

【一】 先づ發起。

【有無は等】 次に偈もて門の體を明す。

【二】 次に長行釋の中、一に偈本を釋す。

す。是故に相と可相と異なりと言ふを得ず。』問うて曰はく、『燈能く自ら照し亦能く彼を照すが如く、是の如く、相は能く自ら相し亦能く彼をも相す。』答へて曰はく、『汝燈の喩を説くも、三の有爲相の中に已に破せり。又自ら先説に違ふ。汝上には相と可相と異なりと言ひ、而も今は相は自ら能く相し亦能く彼をも相すと言ふ。是事然らず。又汝可相中の少分是れ相なりと説くは、是事然らず。何を以ての故に。此義或は一の中に在り、或は異の中に在り。一異の義は先に已に破せり。故に當に知るべし、少分の相も亦破せらる。是の如く種種の因縁に相と可相との一なるも不可得、異なるも不可得なり。更に第三の法の相と可相とを成ずるもの無し。』

是故に相と可相と俱に空なり。是二空なるが故に一切法皆空なり。

觀有無門第七

復次に、一切法は空なり。何を以ての故に。有無の一時なるも不可得なり。一時に非ざるも亦不可得なり。説くが如し。

有無は一時には無し、無を離れては有も亦無し

無を離れて有有るにあらずんば、有は則ち應に常に無なるべし

有無の性は相違し、一法の中に應に共に有るべからず。生の時に死無く、死の時に生無し

【中論の中】 觀相  
品、觀本際品、觀  
成壞品に有無一時  
の義を破せりと。  
【阿毘曇】 婆沙論

【問うて曰はく等】  
生住等皆時を待つ  
て發すと救す。

【答へて曰はく等】  
次に有無一異畢竟  
不可得を問す。

きが如し。是事中論の中に已に説けり。若し無を離れて有有らば過無しと謂はば、是事然らず。何を以ての故に。無を離れて云何が有有らん。先に法生ずる時、自體を通じて七法共に生ずと説きたるが如く、阿毘曇の中に有は無常と共に生ずと説くが如し。無常は之れ滅相なるが故に、無と名く。是故に無を離れては、有は則ち常に無ならず。若し無常を離れて有の生ずること有らずんば、有は則ち常に無なり。若し有が常に無ならず、初に住有る無し。常に是れ壞なるが故に。而も實には住有り。是故に有は常に無ならず。若し無常を離れて有の生ずる有らば、是れ亦然らず。何を以ての故に。無常を離れては有は實に生ぜず。問うて曰はく、『有の生ずる時已に無常有つて、而も未だ發せず。滅の時乃ち發して是有を壞す。是の如く生住滅老得、皆時を待つて而して發す。有の起る時には生は用を爲して、有をして生ぜしむ。生滅の中間には住は用を爲して是有を持す。滅の時には無常は用を爲して是有を滅す。老は生を變じて住に至り、住を變じて滅に至り、無常を則ち壞せしむ。得は常に四事を成就せしむ。是故に法は無常と共に生ずると雖も、有は常に無なるには非ず。』答へて曰はく、『汝無常は是れ滅相にして有と共に生ずと説かば、生の時に有は應に壞すべく、壞の時に有は應に生ずべし。復次に、生滅俱に無し。何を以ての故に。滅時には、應に生有べからず、生時にも應に滅有るべからず。生と滅とは相違するが故に。復次に、汝が法は無常にして住と共に生ぜば、壞有る時には應に住無かるべし。若し住せば則ち壞無し。何を以ての故に。住と壞とは相違するが故に。老の時には住無く、住の時には

老無し。是故に汝生、住、滅、老、無常、得、本來共に生ずと説かば、是れ則ち錯亂なり。何を以ての故に。是有若し無常と共に生ぜば、無常は是れ壞相にして、凡そ物の生の時には壞相無し、住の時には亦壞相無し。而時に此れ無常の相無きに非ずや。能識の故に識と名け、能識ならざるときは則ち識相無く、能受の故に受と名け、能受ならざるときは則ち受相無く、能念の故に念と名け、能念ならざるときは則ち念相無く、起は是れ生相にして、起ならざるときは則ち生相に非ず、攝持は是れ住相にして、攝持ならざるときは則ち住相に非ず、轉變は是れ老相にして、轉變ならざるときは則ち老相に非ず、壽命滅するは是れ死相にして、壽命滅せざるときは則ち死相に非ざるが如く、是の如く壞は是れ無常の相にして、壞を離るれば無常の相に非ず。若し生住の時に無常有りて雖も有を壞する能はずして、後に能く有を壞せば、何んが共生を用て爲ん。是の如く應に壞有る時に隨つて乃ち無常有るべし、是故に無常は共に生ずと雖も、後に乃ち有を壞せば、是事然らず。是の如く、有無は共なるも成せず。不共なるも亦成せず。

是の如く、有無は共なるも成せず。不共なるも亦成せず。

是故に有無は空なり。有無空なるが故に一切の有爲は空なり、一切の有爲は空なるが故に無爲も亦空なり。有爲と無爲と空なるが故に衆生亦空なり。

【三】 總結

【觀性門】茲には諸法無性を觀じて一切法空の義を明す。

觀性門 第八

【一】 先づ發起。

【變異の相等】 次に偈もて門の體を明す。

【二】 次に長行釋一に偈本を釋す。

【問うて曰はく等】 外人正解を過つて破す。

【答へて曰はく等】 外人を破して正論を立つ。先づ自ら過を免る。

復次に、一切法は空なり。何を以ての故に。諸法は無性なるが故に。説くが如し、

變異の相有るを見れば、諸法は性有る無し  
無性の法も亦無し、諸法は皆空なるが故に

諸法若し性有らば、則ち應に變異すべからず。而も一切法は皆變異するを見る。是故に當に知るべし、諸法は無性なり。復次に若し諸法は定性有らば、則ち應に衆緣従り生ずべからず。若し性にして衆緣従り生ぜば、性は則ち是れ作法なり。作法ならず他に因待せざるを名けて性と爲す。是故に一切法は空なり。問うて曰はく、「若し一切法空ならば、則ち生無く滅無し、若し生滅無くんば、則ち苦諦無し。若し苦諦無くんば、則ち集諦無し。若し苦集諦無くんば、則ち滅諦無し。若し苦滅無くんば、則ち苦滅に至る道無し。若し諸法空にして無性ならば、則ち四聖諦無し。四聖諦無きが故に、亦四沙門果無し。四沙門果無きが故に、則ち賢聖無し。是事無きが故に、佛法僧も亦無し。世間法も皆亦無し。是事然らず。是故に諸法は應に盡く空なるべからず。」答へて曰はく、「二諦有り、一には世諦、二には第一義諦なり。世諦に因つて第一義諦を説くを得。若し世諦に因らずんば、則ち第一義諦を説くを得ず。若し第一義諦を得ずんば、則ち涅槃を得ず。若し人二諦を知らずんば、則ち自利、他利、共利を知らず。是の如く若し世諦を知らば、即ち第一義諦を知り、第一義諦を知らば、則ち世諦を知る。汝今世諦を説くを聞いて、是を第一義諦と謂ふ。是故に失處に墮在す。諸例は因縁の法を名けて甚深第一義と爲す。是因縁の法は自性無き

【若し諸法等】次に過を推して外人

が故に我是を空無しと説く。若し諸法衆縁従り生ぜずんば、則ち應に各定性有るべく、五陰は應に生滅の相有るべからず。五陰にして生ぜず滅ぜずんば、即ち無常無し。若し無常無くんば、即ち苦聖諦無し。若し苦聖諦無くんば、則ち因縁生法の集聖諦無し。諸法若し定性有らば、則ち苦滅聖諦無し。何を以ての故に。性は變異無きが故に。若し苦滅聖諦無くんば、則ち苦滅に至る道無し。是故に若し入空を受けずんば、則ち四聖諦無し。若し四聖諦無くんば、則ち四聖諦を得る無し。若し四聖諦を得る無くんば、則ち苦を知り、集を斷じ、滅を證し、道を修する無し。是事無きが故に、則ち四沙門果無し。四沙門果無きが故に、則ち得向の者無し。若し得向の者無くんば、則ち佛無し。因縁法を破するが故に、則ち法無し。果無きを以ての故に、則ち僧無し。若し佛法僧無くんば、則ち三寶無し。若し三寶無くんば、則ち世俗法を壞す。此れ則ち然らず。是故に一切法は空なり。復次に、若し諸法に定性有らば、則ち生無く滅無く、罪福無く、罪福の果報無し。世間常にして是れ一相ならん。是故に當に知るべし、諸法は無性なり。若し諸法に自性無く他性に從つて有りと謂ふも、是も亦然らず。何を以ての故に。若し自性無くんば、何んが他性に從つて有らん。自性に因つて他性有るが故に。又他性は即ち亦是れ自性なり。何を以ての故に。他性は即ち是れ他の自性なるが故に、若し自性成ぜずんば他性も亦成ぜず。若し自性と他性と成ぜずんば、自性と他性とを離れて何の處にか更に法有らん。若し有成ぜずんば無も亦成ぜず。

【三】 總論。

(三)のゆゑに、是故に今推求するに、自性無く亦他性無し。有無く無無きが故に、一切の有爲法は空なり。有爲法は空なるが故に無爲法も亦空なり。有爲と無爲とすら尙空なり。何に況んや我をや。』

觀因果門第九

【觀因果門】 今門には因より果を生ずといひ、無因有果といふを破す。文義知り易し。

復次に一切法は空なり。何を以ての故に。諸法は自ら無性にして、亦餘處よりも來らず。説くが如し、

果は業縁の中に於て、畢竟不可得なり

亦餘處よりも來らず、云何が而も果有らん

衆縁の若は一一の中にも、若は和合の中にも俱に果無きこと、先に説くが如し。又是果は餘處よりも來らず。若し餘處より來らば、則ち因縁從り生ぜず、亦衆縁和合の功も無し。若し果は業縁中に無く、又餘處より來らずんば、是を即ち空と爲す。果空なるが故に一切の有爲法は空なり。有爲法空なるが故に無爲法も亦空なり。有爲と無爲とすら尙空なり。何に況んや我をや。

觀作者門第十

【觀作者門】今門には自作等の四作の不可得なるを觀ず。

【一】先づ發起。

【自作及び等】次に偈もて門體を明す。

【二】長行釋。第一に偈本を釋して苦の自作等に非ず即ち空なるを明す。

復次に、一切法は空なり。何を以ての故に。自作、他作、共作、無因作は不可得なるが故に。説くが如し、

自作及び他作、共作無因作

是の如きは不可得なり、是れ則ち苦有る無し

苦の自作なるは然らず。何を以ての故に。若し自作ならば即ち自ら其體を作るなり。是事を以て即ち是事を作すを得ず。識自ら識る能はず、指自ら觸るる能はざるが如し。是故に自作と言ふを得ず。他作も亦然らず。他は何んが能く苦を作らん。問うて曰はく、「衆縁を名けて他と爲す。衆縁苦を作るが故に名けて他作と爲す。云何が他従り作られずと言はん。」答へて曰はく、「若し衆縁を名けて他と爲さば、苦は則ち是れ衆縁の作なり。是苦衆縁従り生ぜば、則ち是れ衆縁の性なり。若し即ち是れ衆縁の性ならば、云何が名けて他と爲さん。泥と瓶との如し、泥を名けて他と爲さず。又金と釧との如し、金を名けて他と爲さず。苦も亦是の如し。衆縁従り生ずるが故に衆縁を名けて他と爲すを得ず。復次に、是衆縁も亦自性有ならざるが故に自在を得ず。是故に衆縁従り果を生ずと言ふを得ず。申論の中に説くが如し。

果は衆緣従り生ずるも、是緣は自在ならず

若し緣自在ならずんば、云何が緣は果を生ぜん

是の如く苦は他従り作るを得ず。自作他作も亦然らず。二過有るが故に。若し自ら苦を

作り他も苦を作ると説かば、則ち自作他作の過有り。是故に共作の苦も亦然らず。若し苦

は無因より生ずるも亦然らず。無量の過有るが故に。經に説くが如し。裸形迦葉、佛に問

はく、「苦は自作なりや」と。佛默然として答へたまはず。「世尊、若し苦は自作ならずん

ば、是れ他作なりや」と。佛亦答へたまはず。「世尊、若し爾らば苦は自作他作なりや」

と。佛亦答へたまはず。「世尊、若し然らば苦は無因無緣作なりや」と。佛亦答へたまは

ず。是の如きの四問、佛皆答へたまはざるは、當に知るべし、苦は則ち是れ空なり。

問うて曰はく、「佛、是經を説くも、苦は是れ空なりと説かず。度す可き衆生に隨ふが

故に是説を作す。是裸形迦葉は人は是れ苦の因なりと謂ひ、有我者の説の好醜は皆神の所

作、神は常に清淨にして苦惱有る無く、所知所解悉く皆是れ神にして、神は好醜苦樂を

作りて、還種種の身を愛くとの、是邪見を以ての故に、佛に苦は自作なりやと問ふ。是故

に佛は答へたまはず。苦は實に是れ我の作に非ず。若し我にして是れ苦の因ならば、我に

因つて苦を生ず、我は即ち無常なり。何を以ての故に。若し法にして是れ因、及び因従り

生ずる法ならば皆亦無常なり。若し我にして無常ならば、罪福果報皆悉く斷滅し、梵行

を修する福報も是れ亦應に空なるべし。若し我にして是れ苦の因ならば則ち解脱無し。何

【三】 第二に外人論主と苦に就いて諍ふ。一に苦の自作を破す。



【他作の苦も等】  
二に苦の他作を破す。

を以ての故に。我若し苦を作らば、苦を離れて我無し。能く苦を作る者は身無きを以ての故に。若し身無くして能く苦を作らば、解脱を得る者も亦應に是れ苦なるべし。是の如くなれば則ち解脱無し、而も實には解脱有り。是故に苦の自作は然らず。他作の苦も亦然らず。苦を離れて、何んが人有つて而も苦を作つて他に與へんや。復次に、若し他の苦を作る者は、則ち是を自在天と爲す。此の如き邪見を作して問ふが故に、佛亦答へたまはず。而も實には自在天従り作られず。何を以ての故に。性相違するが故に。牛の子は還是れ牛なるが如く、若し萬物自在天従り生ぜば皆應に自在天に似るべし。是れ其子なるが故に。復次に若し自在天衆生を作らば、應に苦を以て子に與ふべからず。是故に應に自在天、苦を作ると言ふべからず。問うて曰はく、「衆生は自在天より生じ、苦樂は亦自在の所生なり。樂の因を識らざるを以ての故に共に苦を與ふるなり。」答へて曰はく、「若し衆生是れ自在天の子ならば、唯應に樂のみを以て苦を遮すべく、應に苦を與ふべからず。亦應に自在天のみを供養せば、則ち苦を滅し樂を得べし。而も實には然らず。但自ら苦樂の因縁を行じて而も自ら報を受くるのみ。自在天の作に非ず。復次に、彼若し自在ならば、應に須ふる所行るべからず。須ふる所有りて自ら作らば、自在と名けず。若し須ふる所無くんば、何んが變化を用ひ萬物を作ること、小兒の戲の如くならん。復次に、若し自在、衆生を作らば、誰か復是自在を作らん。若し自在自ら作らば則ち然らず。物は自ら作る能はざるが如し。若し更に作者有らば則ち自在と名けず。復次に若し自在是れ作者ならば、則ち作の

中に於て障礙有る無く、念ずれば即ち能く作らん。自在經に説くが如し、自在萬物を作らんと欲し、諸の苦行を行じて即ち諸の腹行虫を生じ、復苦行を行じて諸の飛鳥を生じ、復苦行を行じて諸の人天を生ず一と。若し苦行を行じて初に毒蟲を生じ、次に飛鳥を生じ、後に人天を生ずとせば、當に知るべし、衆生は業の因縁従り生じ、苦行従り有るに非ず。復次に、若し自在萬物を作らば、何の處に住して、而して萬物を作るや。是住處は是れ自在の作と爲すや、是れ他の作と爲すや。若し自在の作ならば、何の處に住して作ると爲すや。若し餘處に住して作らば、餘處は復誰の作なりや。是の如の則ち無窮なり。若し他の作ならば、則ち二の自在有らん。是事然らず。是故に世間の萬物は自在の所作に非ず。復次に、若し自在の作ならば、何が故に、苦行して他を供養し、歡喜せしめて從つて所願を求めんと欲するや。若し苦行して他に求めば、當に知るべし、自在ならず。復次に、若し自在萬物を作らば、初作は便ち定んで應に變行るべからず。馬は則ち常に馬、人は則ち常に人ならん。而も今業に隨つて變有り。當に知るべし、自在の所作に非ず。復次に、若し自在の所作ならば即ち罪福無からん。善惡好醜皆自在従り作らるるが故に。而も實には罪福有り。是故に自在の所作に非ず。復次に、若し衆生自在従り生ぜば、皆應に敬愛すること、子の父を愛するが如くなるべし。而も實には敬つず。憎有り愛有り。是故に、當に知るべし、自在の所作に非ず。復次に、若し自在の作ならば、何が故に盡く衆人を作り、盡く苦人を作らざる。而も實には苦者有り、樂者有り。當に知るべし、憎愛従り

【共作も亦然らず  
等】三に苦の共作  
無因作を破す。

【四】第三に論主  
佛經所明の苦は空  
なることを結す。

【五】總論。

生ずるが故に自在ならず。自在ならざるが故に自在の所作に非ず。復次に、若し自在の作  
ならば、衆生は皆應に所作有るべからず。而も衆生は方便して各所作有り。是故に、當  
に知るべし、自在の所作に非ず。復次に、若し自在の作ならば、善悪苦樂の事作らずして  
而も自ら來らん。是の如くんば世間の法を壞し、戒を持し梵行を修するも皆所益無から  
ん。而も實には爾らず。是故に當に知るべし、自在の所作に非ず。復次に、若し福業の因  
縁の故に衆生の中に於て大ならば、餘の衆生の福業を行する者も亦復應に大なるべし。何  
んが以て自在を貴ばん。若し因縁無くして而も自在ならば、一切衆生亦應に自在なるべし。  
而も實には爾らず。當に知るべし、自在の所作に非ず。若し自在他に従つて得ば、則ち他  
は復他に從らん。是の如くんば則ち無窮ならん。無窮ならば則ち因無し。是の如き等の種  
種の因縁により、當に知るべし、萬物は自在の生に非ず、亦自在有る無し。是の如き邪見  
もて他作を問ふが故に、佛亦答へたまはず。共作も亦然らず。二邊有るが故に、業因縁和  
合して生ずるが故に、無因より生ぜず。佛亦答へたまはざるなり。

是故に此經は但四種の邪見のみを破し、苦を説いて空と爲さず。』答へて曰はく、一佛は  
是の如く業因縁より苦を生ずと説き、四種の邪見を破すと雖も、即ち是れ空を説くなり。  
苦は業因縁より生ずと説くは、即ち是れ空の義を説くなり。何を以ての故に。若し業因縁  
より生ぜば則ち自性無し。自性無くんば即ち是れ空なり。

苦の空なるが如く、當に知るべし、有爲と無爲と及び衆生と一切は皆空なり。

觀三時門第十一

【觀三時門】上來十門に入法を破し、竟り今門に時を破し、又先に所破を破し已れば今は能破を破す。凡そ因果に前因後果、因果一時、前果後因の三義ある中今破するところは其第三なり。

【一】先づ後起。【若し法先と等】次に傷もて門體を明す。

【二】長行釋の中一に三時因果を破して傷を釋す。

【問うて曰はく等】二に外人の過解を擧ぐ。

【答へて曰はく等】三に論主の破。

復次に、一切法は空なり。何を以ての故に。因と有因の法と、前時、後時、一時の生不可得なるが故に。説くが如し。

若し法先と後と共にと、是れ皆我ぜずんば

是法の因より生ずること、云何が當に成すべき

先に因、後に有因なること、是事然らず。何を以ての故に。若し先に因、後に因より生ぜば、先に因の時には則ち有因無し。誰が與に因爲らん。若し先に有因、後に因ならば、因無き時に有因已に成す。何んが因を用ふることを爲さん。若し因と有因と一時なるも、是れ亦無因なり。牛角一時に生じて左右相因せざるが如く、是の如く因は是れ果の因に非ず、果は因の果に非ず。一時に生ずるが故に。是故に三時に、因果は皆不可得なり。問うて曰はく、『汝因、果の法を破して三時中に亦成ぜずとす。若し先に破有りて彼に可破有らば、則ちまた可破有らざるに、是破は誰をか破せん。若し先に可破有りて而して後に破有らば、可破は已に成す。何んが破を用ふることを爲さん。若し破と可破と一時ならば、是れ亦無因なり。牛角一時に生じて左右相因せざるが如く、是の如く破は可破に因らず、可破は破に因らざるべし。』答へて曰はく、『汝の破と可破との中にも亦是邊有り。若し諸法

【問うて曰はく等】  
四に外の重ねて別  
解を立つ。

【答へて曰はく等】  
五に重ねて論主之  
を破す。

【是の如く等】 總  
結。

【觀生門】 今門に  
は已生、未生、生  
時の三時に生の不  
可得なるを明す。

【一】 先づ發起。  
【果を生じたる時  
きは等】次に例も  
て門體を明す。

空ならば、破も無く可破も無し。我今空を説かば、則ち我所説を破す。若し我破と可破と定んで有りと説かば、應に是難を作すべし。我は破と可破と定んで有りと説かざるが故に、應に是難を作すべからず。問うて曰はく、「眼見に先時に因有り。陶師の瓶を作るが如し。亦後時に因有り。弟子に因つて師有るが如し。弟子を教化し已つて後の時、是れ弟子たるを識知するが如し。亦一時の因有り。燈と明との如し。若し前時の因、後時の因、一時の因不可得なりと説かば、是事然らず。」答へて曰はく、「陶師の瓶を作るが如きは、是唯然らず。何を以ての故に。若し未だ瓶有らずんば、陶師は誰が與に因と作らん。陶師の如く一切の前因は皆不可得なり。後時の因も亦是の如く不可得なり。若し未だ弟子有らずんば、誰か是れ師爲らん。是故に後時の因も亦不可得なり。若し一時の因は燈と明との如しと説かば、是れ亦同疑因なり。燈明一時に生ぜば、云何が明因せん。是の如く因縁空なるが故に、當に知るべし、一切の有爲法、無爲法、衆生、皆空なり。

### 觀生門 第十二

復次に、一切法は空なり。何を以ての故に。生と不生と生時と不可得なるが故に。今生じざるも生ぜず。不生も亦生ぜず。生時も亦生ぜず。説くが如し。

果を生じたる時は則ち生ぜず、不生も亦生ぜず

【二】長行釋の中一に總じて三時生を明す。

【是中果を等】二に別して三時生を破す。先づ已生を破す。

【不生法も亦生ぜず等】次に不生生を破す。

是生と不生とを離れて、生時も亦生ぜず

(二) 生は果の起出に名く。未生は未起、未出、未有に名く。生時は起を始めて未だ成せざるに名く。是中、果を生ぜば生せずとは、是生は生じ已つて生ぜざるなり。何を以ての故に、

無窮の過有るが故に、作し已つて更に作すが故に。若し生は生じ已つて第二生を生ぜば、第二生は生じ已つて第三生を生じ、第三生は生じ已つて第四生を生ず。初生の生じ已つて第二生有るが如く、是の如く生は則ち無窮なり。是事然らず。是故に生ぜば生ぜず。復次に、若し生は生じ已つて所用の生を生じ、是生は不生にして而も生ずと謂はば、是事然らず。何を以ての故に。初生は不生にして而も生ぜば、是れ則ち二種の生なり。生じ已

つて而も生じ、不生にして而も生ずるが故に。汝先には定んで説き、而して今は定らず。作し已れば應に作すべからず、燒き已れば應に燒くべからず、證し已れば應に證すべからざるが如く、是の如く、生じ已れば應に更に生ずべからず。是故に生法は生ぜず。不生法も亦生ぜず。何を以ての故に。生と合せざるが故に、又一切の不生に生行るの過有るが故

に。若し不生法生ぜば、則ち生を離れて生有るなり。是れ則ち生ぜず。若し生を離れて生有らば、作を離れて作有り、去を離れて去有り、食を離れて食有り、是の如くんば則ち世俗の法を壞す。是事然らず。是故に不生法は生ぜず。復次に、若し不生法生ぜば、一切の不生法は皆應に生ずべし。一切の凡夫、未だ阿耨多羅三藐三菩提を生ぜざるもの、皆應に生ずべし。不壞法の阿羅漢に、煩惱は不生にして而も生じ、鬼馬等に角は不生にして而も

【生時も亦生ぜず等】次に生時生を破す。

【是の如く等】總結。

【三】大段第三論意を結して、無生畢竟空これ諸佛の行處なるを明す。

生ずべし。是事然らず。是故に應に不生にして而も生ずと説くべからず。問うて曰はく、『不生にして生ずとは、因縁の和合、時、方、作者、方便具足する有るが如き、是れ則ち不生にして生ずるなり。一切不生にして生ずるには非ず。是故に、應に一切不生にして生ずといふを以て難と爲すべからず。』答へて曰はく、『若し法生ずる時、方、作者、方便、衆縁和合して生ぜば、是中、先に定んで有るも生ぜず。先に無きも亦生ぜず。又有無も亦生ぜず。是三種に生を求むるに不可得なること、先に説くが如し。是故に不生法は生ぜず。生時も亦生ぜず。何を以ての故に。生生の過、不生にして而も生ずるの過有るが故に。又生時の法の生分の生ぜざること先に説くが如く、未生分も亦生ぜざること前に説くが如し。復次に、若し生を離れて生時有らば、則ち應に生時生ずべし。而も實には生を離れて生時無し。是故に生時も亦生ぜず。復次に、若し人生時生ずと説かば、則ち二の生有り。一には生時を以て生と爲し、二には生時を以て生ず。二法有る無ければ、云何が二の生有るを言はん。是故に生時も亦生ぜず。復次に、未だ生有らずんば生時無し、生何の處に於てか行はるる。若し行處無くんば則ち生時の生無し。是故に生時も亦生ぜず。是の如く生と不生と生時と皆成ぜず。生法成ぜざるが故に、生住滅無きことも亦是の如し。生住滅成ぜざるが故に、則ち有爲法も亦成ぜず。有爲法成ぜざるが故に、無爲法も亦成ぜず。有爲と無爲との法成ぜざるが故に、衆生も亦成ぜず。』

是故に當に知るべし、一切法は無生なり。畢竟空寂なるが故に。

十二門論  
じふにもんろん



昭和七年三月五日印刷  
昭和七年三月十日發行

不許複製

發行所

編纂者

昭和國譯大藏經編輯部  
代表者 三井品史

發行者

東京市神田區一ツ橋通町二番地  
會社名 東方書院  
代表者 十藏寺宗雄

印刷者

東京市神田區表神保町十番地  
同 興 舍  
代表者 井波康三郎

東京市神田區一ツ橋通町二番地

會社名

東方書院

電話九段三八四二  
振替東京六八六一一

昭和國譯大藏經論第八卷









EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03023 3951